

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第183集

巢
本
遺
跡
Ⅱ

門真市

巢 本 遺 跡 Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇八年十二月

財団法人
大阪府文化財センター

2008年12月

財団法人 大阪府文化財センター



調査地全体の合成写真

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第183集

門真市

巢本遺跡Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

序 文

現在、大阪府の北河内地域を北東から南西に縦断する第二京阪道路の建設が、国土交通省並びに西日本高速道路株式会社によって進められております。道路建設予定地には多くの埋蔵文化財が存在したことから、財団法人大阪府文化財センターでは、その事前の埋蔵文化財調査の委託を受け、これまで数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果を遺跡説明会や報告書などで公表してまいりました。

本書で報告する巢本遺跡もこの第二京阪道路事業の一環として調査を行ったもので、3次にわたる調査のうちの03-1調査の成果については、既に『巢本遺跡Ⅰ』として報告したところです。本書では残る03-2・06-1調査の成果について収録しています。

巢本遺跡は「河内蓮根」の産地として有名な大阪府門真市に所在しており、周辺にはかつてはその蓮根栽培のための広大な湿地が広がっておりました。遺跡の存在についてはこれまで全く知られていませんでしたが、平成13・14年度に実施された事前の確認調査によって、はじめてその存在が明らかとなり、以後周知されることとなりました。平成16年度からは国土交通省の委託を受けた当センターが本格的な調査を実施し、古代末から中世に至るムラの跡であることを確認いたしました。

今回の調査では、湿地を改良し、生活の場を確保するために築かれた溝や土坑、また堤など大規模な土木工事・水管理の跡が検出され、南側に広がる湿地と、背後に流れる寝屋川からの氾濫に悩まされながらも水と闘っていた巢本のムラの様子が明らかとなりました。また、遺跡からは一般的な村落では見ることの少ない貴重な輸入磁器や多くの瓦、また「僧」と墨書された土器など、近隣に中世寺院の存在を推測させる発見もあり、北河内地域の古代末から中世という時代の、特に低湿地の開発・利用、また遺跡の広がり等を考える上で欠くことのできない数多くの成果を上げることができました。これらの成果を収めた本書並びに前書が、多くの方々に活用され、地域の歴史解明に少しでも役立てていただければ幸いです。

最後に、本調査にあたってご指導とご協力を賜った国土交通省・西日本高速道路株式会社・大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに地元自治会等関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきましてのより一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2008年12月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正好

例 言

1. 本書は、大阪府門真市北巢本町・宮前町地先に所在する巢本遺跡の発掘調査報告書である。巢本遺跡は、平成13年度から14年度にかけて実施した門真西地区他確認調査および讃良郡条里遺跡西地区確認調査によって新規発見された遺跡で、本格的な調査は巢本遺跡03-1・03-2、および06-1に分割して行った。本書ではこのうちの巢本遺跡03-2・06-1の調査について収録している。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受け、西日本高速道路株式会社 関西支社 枚方工事事務所の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人 大阪府文化財センターが実施した。

巢本遺跡03-2の現地調査期間は平成16年4月1日から平成18年5月31日まで、整理期間は平成18年6月1日から平成20年3月31日までと、平成20年6月1日から平成20年12月26日までである。巢本遺跡06-1の現地調査期間は平成18年11月13日から平成19年7月25日までで、調査終了後引き続き平成20年3月31日まで整理作業を行なった。それぞれの受託契約名、受託契約期間は下記のとおりである。

《平成16年度》受託契約名：第二京阪道路（大阪北道路）巢本遺跡発掘調査（その2）

受託契約期間：平成16年4月1日～平成17年3月31日

《平成17年度》受託契約名：第二京阪道路（大阪北道路）巢本遺跡発掘調査（その2の2）受託

契約期間：平成17年4月1日～平成18年3月31日

《平成18年度》受託契約名：第二京阪道路（大阪北道路）巢本遺跡発掘調査（その1の3）受託

契約期間：平成18年4月1日～平成19年3月31日

《平成19年度》受託契約名：第二京阪道路（大阪北道路）巢本遺跡遺物整理

受託契約期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日

《平成20年度》受託契約名：第二京阪道路（大阪北道路）巢本遺跡遺物整理（その2）

受託契約期間：平成20年6月1日～平成20年12月26日

3. 調査は以下の体制で実施した。

《平成16年度》調査部長 玉井 功、調整課長 赤木克視、京阪調査事務所長 渡邊昌宏

主査 上野貞子〔写真〕、調査第三係長 岡戸哲紀、技師 小倉徹也・伊藤 武、専門調査員 小西絵美

《平成17年度》調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰

主査 上野貞子〔写真〕、調査第三係長 岡戸哲紀、技師 李 陽浩・伊藤 武、専門調査員 木村寛之

《平成18年度》調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰

主査 上野貞子〔写真〕、調査第二係長 金光正裕、副主査 横田 明〔06-1〕

技師 伊藤 武〔03-2〕、専門調査員 木村寛之（～5月）、井上宗嗣（～7月）・市田英介（7月～）

《平成19年度》調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰

主査 上野貞子〔写真〕、調査第五係長 金光正裕、副主査 横田 明〔06-1〕

技師 伊藤 武〔03-2〕、専門調査員 市田英介・六辻彩香（7・8月）

《平成 20 年度》調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰

主査 上野貞子〔写真〕、調査第二係長 秋山浩三、副主査 伊藤 武、専門調査員 市田英介

4. 発掘調査および報告書の作成にあたって、大阪府教育委員会文化財保護課・門真市都市整備部・門真市教育委員会をはじめ、北巢本自治会・宮前自治会・青山自治会等地元の方々にご指導・ご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。
5. 調査では、放射性炭素年代測定と珪藻分析を実施した。放射性炭素年代測定は株式会社 パレオ・ラボに、珪藻分析は株式会社 古環境研究所に委託し、その結果は第 5 章に掲載した。
6. 巻頭カラーに用いた遺跡全体の垂直写真は、株式会社 アコードが撮影・合成した 03 - 1・03 - 2 調査の全体写真に、株式会社 航空撮影センターが撮影した 06 - 1 調査の調査区を合成したものである。写真図版の扉に用いた調査地上空からの斜め写真は、株式会社 アコードが平成 17 年 6 月に撮影したものである。
7. 本書の作成にあたっては、巢本遺跡 03 - 2 の成果のうちの遺構を伊藤が執筆した。遺物については一覧表も含めて市田が執筆したが、7 区の 943 溝出土土師器皿の分類については伊藤が加筆した。第 6 章まとめの土器変遷図および対応する「出土土器各種」の文章についても市田が作成・執筆した。巢本遺跡 06 - 1 の成果については図面作成も含め横田が担当した。第 2 章の「遺跡の位置と環境」については、巢本遺跡 03 - 1 の調査と変わるものではないため、既刊の『巢本遺跡 I』から引用し、一部伊藤が加筆・修正した。全体の編集は伊藤が行ったが、担当者ごとにみられる細かい表現の違いまでは統一していない。
8. 本調査に関わる遺物・写真・実測図等は財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。単位は全て m である。
2. 発掘調査での使用測地系は世界測地系（測地成果 2000）である。遺構図に記載した座標値の単位は全て m である。
3. 本書で用いた北はいずれも国土座標軸第 VI 系の座標北を示す。ちなみに当遺跡では座標北は磁北より東へ約 $6^{\circ} 58'$ 、真北より西へ約 $0^{\circ} 13'$ 振っている。
4. 現地調査および整理作業は、平成 15 年度に改訂された財団法人 大阪府文化財センター 2003『遺跡調査基本マニュアル』【暫定版】に準拠して行った。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2001 年版、同 2003 年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、調査回数ごとに遺構の種類や調査区にかかわらず 1 から通しで付し、複数の遺構の集合体である掘立柱建物などについては、それとは別に遺構番号を付した。
例：「1 溝」・「2 土坑」、「掘立柱建物 1」
本書中の遺構番号は、基本的に現地調査段階での遺構番号をそのまま使用している。
7. 挿図中の遺構名のうち、ピットについてはスペースの都合上「p」と略した。
例：「904 ピット」→「904 p」
8. 遺物実測図の縮尺は、土器 $1/3$ （03 - 2）・ $1/4$ （06 - 1）、瓦・木製品・土製品 $1/4$ 、石製品 $1/3$ 、銭貨 $2/3$ 、その他金属製品 $1/2$ 、を基本としたが、大型のものなど適宜遺物に即して異なる縮尺としており、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、スケールに明示しているのでそちらを参照されたい。
9. 土器・漆器の実測図のうち、土師器・漆器は断面を白抜きとし、それ以外の須恵器や瓦器、陶磁器類等は黒塗りで表現した。木製品の実測図に示した断面の年輪は、木取り位置が分かるように模式的に表現したものであり、実際の年輪とは異なる。
10. 挿図中の遺物番号は写真図版中の遺物番号と対応する。
11. 遺構図における断面位置は、図面上に「└」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールを参照されたい。
12. 遺物写真のうち、俯瞰撮影を行ったものなど縮尺率が判明するもののみ図版中に縮尺率を記した。
13. 引用文献、参考文献等は各節の末尾に記した。

巢本遺跡Ⅱ

目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

第1章 調査に至る経緯と方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	3
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 巢本遺跡03－2の調査成果	11
第1節 基本層序と各層出土遺物	11
第2節 1区の遺構と遺物	40
第3節 4区の遺構と遺物	49
第4節 7区の遺構と遺物	64
第5節 2区の遺構と遺物	115
第6節 5区の遺構と遺物	134
第7節 8区の遺構と遺物	153
第8節 3区の遺構と遺物	160
第4章 巢本遺跡06－1の調査成果	189
第1節 調査区の設定	189
第2節 基本層序	189
第3節 遺構と遺物	192
第4節 小結	220
第5章 自然科学分析	222
第1節 分析の目的とその位置	222
第2節 放射性炭素年代測定	223
第3節 巢本遺跡03－2における珪藻分析	226
第6章 まとめ	233

巻頭図版目次

巻頭図版 調査地全体の合成写真

表 目 次

表 1	基本層序一覧表……………	15 ~ 17	表 10	軒丸瓦計測表 ……………	187
表 2	各調査区基本層序の対応関係一覧表……	18	表 11	軒平瓦計測表 ……………	187
表 3	土器計測表……………	169 ~ 184	表 12	丸瓦・平瓦・道具瓦計測表 ……………	188
表 4	木製品計測表……………	185・186	表 13	測定試料及び処理 ……………	223
表 5	石製品計測表……………	186	表 14	放射性炭素年代測定及び 暦年校正の結果 ……………	224
表 6	土製品計測表……………	186	表 15	巢本遺跡 03 - 2 における 珪藻分析結果 ……………	229・230
表 7	金属製品計測表……………	186			
表 8	刀子計測表……………	186			
表 9	銭貨計測表……………	187			

写 真 目 次

写真 1	現地公開資料……………	3	写真 4	2・3・4・7区下層の地層断面……	14
写真 2	巢本遺跡周辺の空中写真……………	8	写真 5	試料を採取した地層……………	222
写真 3	宝蔵寺の石造物……………	9	写真 6	巢本遺跡 03 - 2 の珪藻 ……………	232

挿 図 目 次

図 1	巢本遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 ……………	1
図 2	巢本遺跡 03 - 1・03 - 2・06 - 1 調査位置図 ……………	2
図 3	調査区内の地区割り方法 ……………	4
図 4	調査区名と地区割り ……………	5
図 5	1・4・7区地層断面柱状模式図 ……………	12
図 6	2・3・5・8区地層断面柱状模式図 ……………	13
図 7	1区遺物包含層出土遺物実測図 ……………	20
図 8	1区 3 a 層出土遺物実測図 ……………	21
図 9	1区遺物包含層出土遺物実測図 ……………	23
図 10	4区遺物包含層及び耕作溝出土遺物実測図 ……………	24

図 11	7区遺物包含層出土遺物実測図	26
図 12	7区3a-2層出土遺物実測図	27
図 13	7区3b層出土土器と各遺物包含層出土瓦実測図	28
図 14	2区遺物包含層出土遺物実測図	30
図 15	2区遺物包含層出土瓦・木製品・石製品実測図	31
図 16	5区北端部・中央部遺物包含層出土遺物実測図	33
図 17	5区南半部遺物包含層出土遺物実測図	34
図 18	5区遺物包含層出土銭貨拓影	35
図 19	8区遺物包含層出土遺物実測図	36
図 20	3区遺物包含層出土遺物実測図	38
図 21	3区遺物包含層出土銭貨・金属製品・木製品実測図	39
図 22	1区2b i層上面検出遺構全体平面図	40
図 23	掘立柱建物1平面・断面図	41
図 24	1区2b ii層上面検出遺構全体平面図	42
図 25	18溝・20土坑出土瓦実測図	43
図 26	18・27溝・22・35土坑断面図	43
図 27	1区北壁断面図	44
図 28	土坑・溝出土遺物実測図	45
図 29	35土坑出土遺物実測図	46
図 30	35土坑出土遺物実測図	47
図 31	4区中央部3a層上面検出遺構全体平面図	48
図 32	掘立柱建物2平面・断面図	49
図 33	ピット出土遺物実測図	50
図 34	402・404・406・407井戸・403土坑平面・断面図	52
図 35	井戸出土遺物実測図	53
図 36	404井戸出土木簡実測図	54
図 37	404・407井戸出土木製品実測図	55
図 38	413井戸平面・断面図及び曲物実測図	56
図 39	400土坑断面図	56
図 40	413井戸出土遺物実測図	57
図 41	400土坑出土遺物実測図	58
図 42	3層(3a層)上面検出土坑平面・断面図	60
図 43	土坑・溝出土遺物実測図	61
図 44	4区4a層上面検出耕作溝全体平面図	62
図 45	4区下層調査トレンチ位置図	63
図 46	782溝及び畦畔平面・断面図	65
図 47	782溝上層出土遺物実測図	66
図 48	782溝上層出土遺物実測図	67

図 49	782 溝下層出土遺物実測図	68
図 50	782 溝上層出土瓦実測図	69
図 51	782 溝下層出土瓦実測図	70
図 52	782 溝下層出土瓦実測図	71
図 53	掘立柱建物 3 周辺検出遺構全体平面図	72
図 54	掘立柱建物 3 及び周辺検出ピット平面・断面図	73
図 55	掘立柱建物 4 平面・断面図	74
図 56	掘立柱建物 5 平面・断面図	75
図 57	掘立柱建物 4・5 周辺検出遺構全体平面図	75
図 58	掘立柱建物 6・7 周辺検出遺構全体平面図	76
図 59	掘立柱建物 6・7 平面・断面図	77
図 60	ピット出土遺物実測図	78
図 61	787・920 井戸平面・断面図	79
図 62	787 井戸出土遺物実測図	80
図 63	789 井戸平面・断面図	81
図 64	789・920 井戸出土遺物実測図	82
図 65	787・789 井戸出土木製品実測図	82
図 66	761・763～765 土坑平面・断面図及び出土遺物実測図	83
図 67	762・777・785・786 土坑平面・断面図	84
図 68	762・777・785・786 土坑出土遺物実測図	86
図 69	790 土坑出土箸計測値分布図	87
図 70	790 土坑出土遺物実測図	87
図 71	784・788・790・791・842 土坑平面・断面図	88
図 72	854 土坑平面・断面図	89
図 73	854 土坑出土遺物実測図	90
図 74	854 土坑出土遺物実測図	91
図 75	854 土坑出土瓦実測図	92
図 76	923・934 土坑出土遺物実測図	92
図 77	918・923・934・936 土坑・922 溝平面・断面図	93
図 78	917・924・933・935・944 土坑平面・断面図	94
図 79	924 土坑出土遺物実測図	96
図 80	917・933・935 土坑出土遺物実測図	97
図 81	939 土坑出土遺物実測図	98
図 82	939・1025・1039・1089 土坑平面・断面図及び 1039 土坑出土遺物実測図	99
図 83	938・940 土坑・1018 溝断面図及び 938 土坑内杭列立面図	100
図 84	938 土坑出土遺物実測図	101
図 85	938 土坑出土遺物実測図	102
図 86	938 土坑出土瓦・石製品・木製品実測図	103

図 87	782 溝・938 土坑出土漆器実測図	104
図 88	940 土坑出土遺物実測図	105
図 89	940 土坑出土瓦実測図	106
図 90	1009 土坑・1018 溝出土遺物実測図	107
図 91	776・919・925 溝平面・断面図	108
図 92	919 溝出土遺物実測図	109
図 93	925・937 溝出土遺物実測図	109
図 94	943 溝・945 土坑平面・断面図及び 945 土坑出土遺物実測図	110
図 95	943 溝出土遺物実測図	112
図 96	943 溝出土銭貨・瓦・石製品実測図	113
図 97	7 区 4 層上面検出遺構平面・断面図及び 846・850 土坑出土遺物実測図	114
図 98	2 区 3 層上面検出遺構全体平面図	116
図 99	掘立柱建物 8・9 及び周辺検出ピット平面・断面図	117
図 100	ピット出土遺物実測図	118
図 101	51・41 井戸平面・断面図	119
図 102	井戸出土遺物実測図	120
図 103	100・164 井戸平面・断面図	122
図 104	3 層上面検出土坑平面・断面図	123
図 105	土坑出土遺物実測図	125
図 106	44・55・56・71 溝断面図	126
図 107	44 溝出土遺物実測図	128
図 108	溝出土遺物実測図	129
図 109	溝出土遺物実測図	130
図 110	各遺構出土瓦・土製品実測図	131
図 111	各遺構出土木製品実測図	132
図 112	3 層上面検出遺構変遷略図	133
図 113	2 区 4 層上面検出遺構全体平面図	133
図 114	5 区北端部 2 a・2 b 層及び中央部 3 a 層上面検出遺構全体平面図	135
図 115	ピット・畦畔出土遺物実測図	136
図 116	北端部 2 a・2 b 層上面検出遺構平面・断面図	138
図 117	落ち込み出土遺物実測図	139
図 118	北端部 2 a・2 b 層上面検出遺構平面・断面図	140
図 119	北端部 2 a・2 b 層上面検出遺構平面・断面図	141
図 120	633・634 土坑出土遺物実測図	142
図 121	土坑出土遺物実測図	143
図 122	溝出土遺物実測図	144
図 123	5 区北端部 3 層上面検出溝平面・断面図	145
図 124	5 区南半部 3 a 層上面検出遺構全体平面図	146

図 125	南半部 3 a 層上面検出遺構平面・断面図	148
図 126	469 井戸出土遺物実測図	149
図 127	南半部 3 a 層上面検出土坑平面・断面図	151
図 128	南半部検出土坑・溝出土遺物実測図	152
図 129	5 区中央部 2 層・南半部 2 a 層及び 8 区南半部 1 層上面検出遺構全体平面図	153
図 130	8 区北半部 2 層上面検出遺構全体平面図	154
図 131	887・898 土坑平面・断面図	155
図 132	北半部 2 層及び南半部 3 層上面検出土坑平面・断面図	156
図 133	883・903 溝平面・断面図	157
図 134	ピット・土坑・溝出土遺物実測図	158
図 135	1020 ピット出土竈実測図	159
図 136	8 区北半部 3 層上面検出溝全体平面図	160
図 137	2 層上面検出遺構平面・断面図	161
図 138	中央高まり断面図	162
図 139	337 溝平面・断面図及び出土遺物実測図	163
図 140	4 層下面検出遺構平面・断面図	164
図 141	1・4・7 区検出遺構全体平面図	165・166
図 142	2・3・5・8 区検出遺構全体平面図	167・168
図 143	調査区配置図及び土層柱状図	191
図 144	74 土坑平面・断面図	192
図 145	1・2 区遺構平面図	193
図 146	70 溝・132・137・161・251 土坑断面図	194
図 147	74・76・252・604 土坑・70 溝出土遺物実測図	194
図 148	掘立柱建物 10 平面・断面図	195
図 149	111・140 ピット出土遺物実測図	195
図 150	111 ピット平面・断面図	195
図 151	630 畦畔下部検出遺構平面図	196
図 152	340 土坑平面・断面図	196
図 153	275 土坑断面図	197
図 154	340・275 土坑・630 畦畔出土遺物実測図	198
図 155	4・5 区遺構平面図	199
図 156	6 区遺構平面図	200
図 157	7 区遺構平面図	201
図 158	400・504・580・586・571 溝出土遺物実測図	202
図 159	349・551・527・572 土坑出土遺物実測図	202
図 160	551・552 土坑平面・断面図	203
図 161	350・415・521・427・581 ピット出土遺物実測図	204
図 162	掘立柱建物 6 平面・断面図	204

図 163	掘立柱建物 7 平面・断面図	205
図 164	掘立柱建物 11 平面・断面図	206
図 165	掘立柱建物 12 平面・断面図	206
図 166	591 土坑断面図	207
図 167	610・768 土坑出土遺物実測図	207
図 168	627・614・767 井戸出土遺物実測図	208
図 169	627 井戸平面・断面図	208
図 170	627 井戸出土羽釜実測図	209
図 171	802 ピット出土遺物実測図	210
図 172	802 ピット平面・断面図	210
図 173	1 流路断面図	211
図 174	703・705 溝断面図	211
図 175	8 区遺構平面図	212
図 176	9 区遺構平面図	213
図 177	8・9 区出土遺物実測図	214
図 178	748・756 土坑平面・断面図	214
図 179	掘立柱建物 13・14 平面・断面図	215
図 180	掘立柱建物 15 平面・断面図	216
図 181	10 区遺構平面図	217
図 182	10 区出土遺物実測図	217
図 183	出土瓦実測図 (1)	218
図 184	出土瓦実測図 (2)	219
図 185	暦年較正結果	225
図 186	巢本遺跡 03 - 2 における主要珪藻ダイアグラム	231
図 187	遺構変遷略図	235
図 188	巢本遺跡出土土器変遷図	239・240

写真図版目次

【03－2調査】

写真図版1 1区遺構

1. 1区調査区全景（南西から）
2. 20・24土坑（北から）

写真図版2 1区遺構

1. 23・36土坑（北東から）
2. 1091堤・27溝
3. 18溝
4. 2b i層上面検出遺構
5. 4a i層上面検出足跡

写真図版3 2区遺構

1. 2区調査区全景（北西から）
2. 3層上面検出遺構（北から）

写真図版4 2区遺構

1. 44・55溝（南から）
2. 56溝
3. 54溝
4. 3層上面検出遺構（南半部）
5. 52土坑

写真図版5 2区遺構

1. 41井戸（西から）
2. 41井戸の井戸枠構造
3. 165土坑
4. 100井戸

写真図版6 2区遺構

1. 51井戸（西から）
2. 51井戸の井戸枠構造
3. 164井戸
4. 164井戸残存の籬

写真図版7 2区遺構

1. 73ピット
2. 87ピット
3. 106ピット
4. 218ピット
5. 221ピット

6. 251ピット

7. 227ピット

8. 278ピット

写真図版8 2区遺構

1. 4層上面検出溝（北西から）
2. 6層上面検出足跡
3. 6層上面検出鋤跡
4. 2区地層断面

写真図版9 3区遺構

1. 3区調査区全景（東から）
2. 西端部検出土坑群
3. 337溝
4. 南高まり部地層断面
5. 340土坑

写真図版10 3区遺構

1. 331井戸
2. 334土坑
3. 335土坑
4. 336土坑
5. 338ピット
6. 5層下面出土曲物
7. 南高まり2層下面検出鋤跡
8. 7層下面検出足跡

写真図版11 4区遺構

1. 4区調査区全景（南西から）
2. 南端部検出遺構
3. 376溝
4. 359土坑
5. 360土坑

写真図版12 4区遺構

1. 4区中央部検出遺構（西から）
2. 400土坑全景（南から）

写真図版13 4区遺構

1. 400土坑
2. 404井戸

3. 407 井戸土器出土状況
4. 403土坑・402・404・406・407井戸(南から)

写真図版 14 4区遺構

1. 413 井戸 (南から)
2. 413 井戸下部
3. 409 土坑
4. 411 土坑
5. 459 土坑

写真図版 15 4区遺構

1. 368 ピット
2. 373 ピット
3. 427 ピット
4. 430 ピット
5. 436 ピット
6. 437 ピット
7. 443 ピット
8. 445 ピット

写真図版 16 4区遺構

1. 4 a 層上面検出耕作溝 (西から)
2. 4 a 層上面検出鋤跡
3. 北端部検出耕作溝
4. 中央部下層調査トレンチ
5. 南端部下層調査トレンチ

写真図版 17 5区遺構

1. 5区南半部全景 (東から)
2. 5区南半部全景 (北西から)

写真図版 18 5区遺構

1. 南半部 2 a 層上面検出耕作溝
2. 470 溝・471・476 土坑
3. 468 溝・658 畦畔
4. 468 溝
5. 659 溝・489 畦畔
6. 469 井戸
7. 471 土坑
8. 486 土坑

写真図版 19

1. 465 土坑
2. 474 土坑

3. 477 土坑
4. 480 土坑
5. 5区北半部全景 (南西から)

写真図版 20 5区遺構

1. 5区北端部検出遺構 (北東から)
2. 662 畦畔
3. 634 土坑
4. 703 土坑
5. 715 土坑

写真図版 21 5区遺構

1. 560 ピット
2. 574 ピット
3. 631 ピット
4. 647 ピット
5. 499・633 土坑・638 落ち込み・640 溝
6. 701 溝
7. 714 溝
8. 716・717・718 溝

写真図版 22 7区遺構

1. 7区北半部全景 (北東から)
2. 7区中央部検出遺構 (西から)

写真図版 23 7区遺構

1. 北端部 2 層上面検出耕作溝
2. 782 溝 (調査区中央部)
3. 782 溝・掘立柱建物 6・7
4. 掘立柱建物 3 周辺検出遺構
5. 777・785・786 土坑
6. 945 土坑
7. 943 溝

写真図版 24 7区遺構

1. 787 井戸 (南西から)
2. 920 井戸
3. 918・923 土坑
4. 924 土坑
5. 917・924・933・935・944 土坑

写真図版 25 7区遺構

1. 7区中央部検出遺構 (北西から)
2. 7区南半部検出遺構 (北から)

写真図版 26 7区遺構

1. 789 井戸 (南から)
2. 789 井戸検出状況
3. 919 溝
4. 854 土坑検出状況
5. 854 土坑完掘状況

写真図版 27 7区遺構

1. 938・940・1009 土坑 (西から)
2. 掘立柱建物 4・5
3. 938 土坑内杭列
4. 4層上面検出鋤跡
5. 4層上面検出土坑群

写真図版 28 7区遺構

1. 786 土坑
2. 788 土坑
3. 790 土坑
4. 842 土坑
5. 794 ピット
6. 799 ピット
7. 828 ピット
8. 845 ピット

写真図版 29 7区遺構

1. 809 ピット
2. 810 ピット
3. 1026 ピット
4. 1027 ピット
5. 1055 ピット
6. 1060 ピット
7. 1066 ピット
8. 1068 ピット

写真図版 30 8区遺構

1. 8区調査区全景 (北東から)
2. 8区北半部検出遺構 (北西から)

写真図版 31 8区遺構

1. 883 溝
2. 902・903 溝
3. 880 土坑
4. 890 土坑

5. 887 土坑

6. 898 土坑

7. 北半部3層上面検出溝

8. 5層下面出土下駄

写真図版 32 1区遺物

写真図版 33 1区遺物

写真図版 34 2区遺物

写真図版 35 2区遺物

写真図版 36 2区遺物

写真図版 37 2・3区遺物

写真図版 38 4区遺物

写真図版 39 4区遺物

写真図版 40 4区遺物

写真図版 41 5区遺物

写真図版 42 5区遺物

写真図版 43 5区遺物

写真図版 44 5区遺物

写真図版 45 5区遺物

写真図版 46 7区遺物

写真図版 47 7区遺物

写真図版 48 7区遺物

写真図版 49 7区遺物

写真図版 50 7区遺物

写真図版 51 7区遺物

写真図版 52 7区遺物

写真図版 53 7区遺物

写真図版 54 7区遺物

写真図版 55 7区遺物

写真図版 56 7区遺物

写真図版 57 7区遺物

写真図版 58 7区遺物

写真図版 59 7区遺物

写真図版 60 8区遺物

写真図版 61 8区遺物

写真図版 62 出土瓦

写真図版 63 出土瓦

写真図版 64 出土瓦

写真図版 65 出土木製品

写真図版 66 出土木製品

写真図版 67 出土木製品

写真図版 68 出土木製品

写真図版 69 出土土製品・石製品

写真図版 70 出土銭貨・金属製品

【06－1 調査】

写真図版 71 1区遺構

1. 1区航空写真

2. 1区北部全景（東から）

写真図版 72 1区遺構

1. 1区北部（北から）

2. 1区南部（南から）

3. 1区 630 畦畔

4. 1区 111 ピット遺物出土状況

5. 1区東部（西から）

写真図版 73 6区遺構

1. 6区航空写真

2. 6区南部（南から）

3. 6区ピット群（北から）

4. 6区ピット群（南から）

5. 6区北部（北から）

写真図版 74 6区遺構

1. 6区東部航空写真

2. 6区南部航空写真

写真図版 75 7区遺構

1. 7区南部航空写真

2. 7区北部航空写真

写真図版 76 8区遺構

1. 8区北部航空写真

2. 8区南部航空写真

写真図版 77 8・9区遺構

1. 8区東部航空写真

2. 9区東部航空写真

写真図版 78 8・10区遺構

1. 8区 703・705 土坑

2. 8区 703 土坑断面

3. 8区 748・756 土坑完掘状況

4. 8区 748・756 土坑

5. 10区南部（南から）

6. 10区 1060 堤

7. 10区南部西壁

8. 10区北部

写真図版 79 出土土器

写真図版 80 出土土器

写真図版 81 出土土器・瓦

第1章 調査に至る経緯と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

巢本遺跡は大阪府門真市北巢本町から宮前町にかけて所在する。枚方丘陵の南西側、寝屋川の右岸に広がる沖積低地に立地し、遺跡の北東側には、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての集落跡や、古代の絵馬・人面墨書土器などが見つかった讃良郡条里遺跡、河内の馬飼いと関連が注目される古墳時代中期から後期の遺物が多数発見された蔀屋北遺跡、西側には弥生時代の方形周溝墓群で知られる古川遺跡や、銅鐸の出土で有名な大和田遺跡など、周辺には数多くの遺跡が分布している（図1）。

この地に第二京阪道路および一般国道1号バイパス（大阪北道路）の建設が計画されたため、当センターは、平成13年度に門真西地区他確認調査¹⁾、平成14年度に讃良郡条里遺跡西地区確認調査²⁾として、道路建設予定地内の確認調査を実施した。その結果、設定した調査区の多くから溝や土坑、柱穴等の遺構が発見され、遺物包含層や遺構からは瓦器や土師器など中世の土器が多数出土することが確認された。これによって道路建設予定地内が遺跡であると判明したため、文化財保護法に基づく遺跡発見通知が提出され、平成15年6月より「巢本遺跡」として周知されることとなった。

以上の成果にもとづき、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受けた当センターが、西日本高速道路株式会社（旧 日本道路公団）関西支社 枚方工事事務所の協力、大阪府教育委員会 文化財保護課の指導のもと、平成16年4月1日から平成18年5月31日までの間、本格的な埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。現地調査にあたっては、道路建設予定地ということもあり調査範囲が



図1 巢本遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

広範囲におよんだため、調査地内を南北に二分割し、北側を巢本遺跡 03 - 1、南側を巢本遺跡 03 - 2 として調査を実施した。ただし小学校・幼稚園等の通学・通園路、あるいは生活道路として調査の段階でも使用されていた道路部分、また一時使用許可地として使用許可が出されていた箇所などについては、上記期間内では調査が行えなかったため、その後、浪速国道事務所と大阪府教育委員会文化財保護課でそれらの箇所の取扱いについて協議が行われ、未調査箇所のうち、道路工事によって遺跡に影響が及ぶ部分については発掘調査が必要と判断された。この判断にもとづき、あらためて巢本遺跡 06 - 1 として、平成 18 年 11 月から平成 19 年 7 月までの間、道路建設工事と並行して現地調査を実施することとなった。調査面積は、巢本遺跡 03 - 1 が 7,026 m²、03 - 2 調査が 11,850 m²、06 - 1 調査が約 3,800 m²である。本報告はこれらのうちの巢本遺跡 03 - 2 と 06 - 1 に関するものである。巢本遺跡 03 - 1 の報告については、既に平成 19 年 2 月に『巢本遺跡 I』として報告書が刊行されている³⁾。

なお、調査期間中の平成 17 年 11 月 5 日には、遺跡を公開し地元の方々への説明会を開催した⁴⁾。158 名の見学者があり、地元で見つかった中世のムラの跡や、出土した遺物を熱心に見学されていた。また引き続き 11 月 7・8 日には門真市都市整備部・教育委員会の協力のもと、市内の小学生を対象とした遺跡の説明会を実施した⁵⁾。参加校は東小学校（6 年生）、四宮小学校（6 年生）、北巢本小学校（5・6

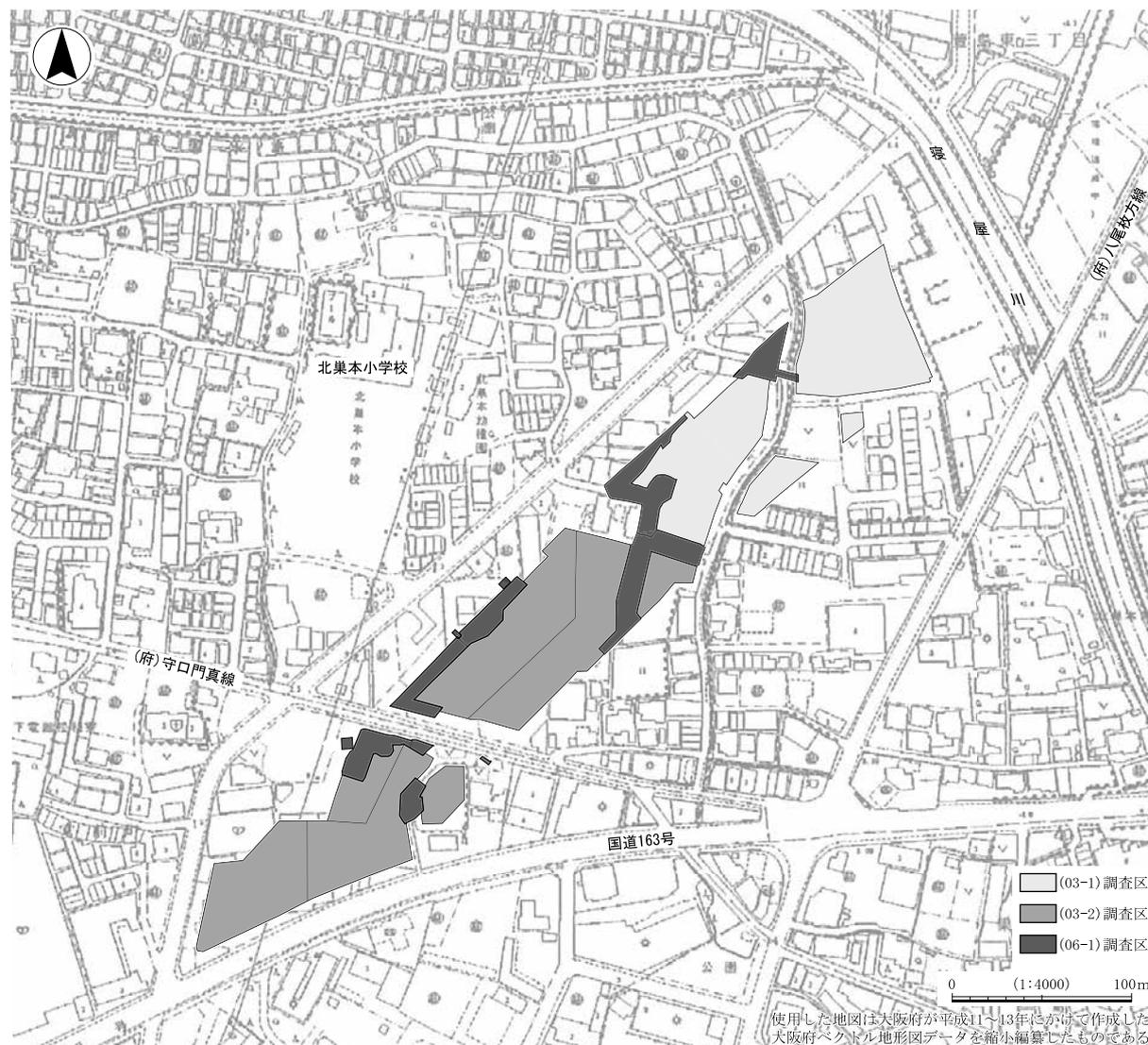


図2 巢本遺跡 03 - 1・03 - 2・06 - 1 調査位置図

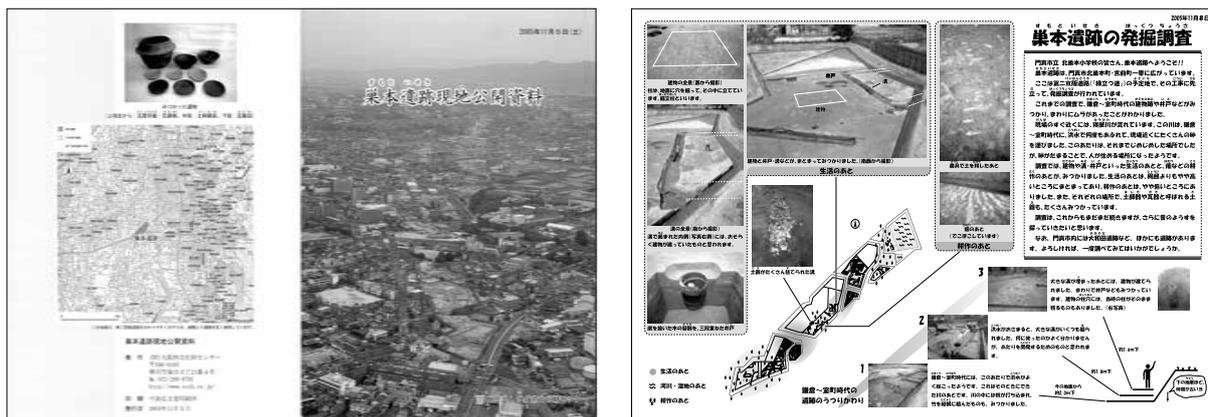


写真1 現地公開資料(右:公開資料の表紙、左:北巣本小学校の児童へ配布した資料)

年生)、古川橋小学校(5年生)、上野口小学校(6年生)、脇田小学校(6年生)の全6校で、参加児童数は567名であった。出土した遺物に実際に触れていただくなど、地元の歴史に親しんでいただいた。これらの状況については、『巣本遺跡Ⅰ』に写真を掲載し詳しく報告しているので参照されたい。

また、平成17年11月19日から23日までの5日間にわたって、寝屋川市立市民会館において「北河内発掘! 緑立つ道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査展と講演会」と題した遺物の展示会も行っており、平成18年3月11日には、大阪歴史博物館で開催された第52回大阪府埋蔵文化財研究会において、「巣本遺跡の調査成果—中世の遺構を中心に—」と題した調査報告も行っている⁷⁾。

第2節 調査の方法

1. 発掘調査

調査地一帯はもともと低湿地であったため、近年の宅地や工場用地の造成にあたって、旧地表面上に厚い箇所でも2m以上におよぶ盛土を施している。また地表面には工場等のコンクリート基礎などが残っており、発掘調査前にこれらの障害物を撤去することから始めた。その後表土層あるいは近・現代の耕土層を重機にて掘削し、つづいて人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査によって遺構を検出した。

遺物の取り上げ、遺構図面の作成、写真撮影等の作業は、当センターが2003年に作成した『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に準拠して行なった。

03-2調査の調査区については、調査工程・工法、また道路建設工事の工程等を考慮し、1区から8区までの8地区に分割して設定した。調査区名は、予想される工程順に事前に付した。このため実際には調査を行っていない6区についても名称は残ったままである。現地調査や整理作業の段階でも、7区を6区へ、8区を7区へと調査区名を繰り上げることはしなかったため、本書でも現地調査の際に呼称した調査区名のまま報告する。調査区の配置は図4に示したとおりである。06-1調査の調査区名・設定方法等については、第4章にて解説しているのをご参照されたい。

地区割りについては、国土座標軸(第Ⅵ座標系)を基準とし、Ⅰ～Ⅵの大小6段階の区画を設定した。これは大阪府内全域に共通する地区割りである(図3)。第Ⅰ区画は大阪府の南西端 $X = -192,000 \text{ m}$ ・ $Y = -88,000 \text{ m}$ を起点に、府域を南北15(A～O)、東西9(0～8)区画に分割したもので、一区画は南北6km、東西8kmとなる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を東西、南北各4分割の、計16区画(1～16)に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20(1～20)分割、

南北15(A～O)分割する一辺100mの区画である。第IV区画は第III区画をさらに東西、南北ともに10(東西1～10、南北a～j)分割した一辺10mの区画である。第V区画は第IV区画をさらに「田」の字状に4(I～IV)分割したもので、一辺5mの区画である。VI区画は遺構・遺物が密に確認された場合に使用するが、今回の調査では使用しなかったため割愛する。

上記の方法で区画した場合、巢本遺跡03-2・06-1の第I・II区画はI6(第I区画)-11・15(第II区画)となる(図4)。遺物の取り上げ作業は、この地区割りをを用い、基本的に第IV区画の10m区画ごとに行った。遺物取上げ用ラベルへの記入は、煩雑となるため第I・II区画は省略し、第III区画以降を記入した。

方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海水位(T.P.)を用いた。

遺構全体の平面測量は、ヘリコプターおよびクレーンによる写真測量を行い、50分の1の平面図とそれを縮小編集した100分の1の遺構全体図を作成した。その他、遺物出土状況等各遺構の詳細図面、土の堆積状況を示す断面図等については、必要に応じ、随時20分の1・10分の1の図面を作成した。

遺構番号は遺構の種類、調査区等にかかわらず、1から通しで付した。「1溝」、「2土坑」、「3ピット」という具合である。ただし、複数の遺構の集合体である掘立柱建物などについては、「掘立柱建物1」のように報告書執筆段階で別途遺構番号を付した。

2. 遺物整理

整理事業の対象となった遺物は、古代末から中世にかけての土師器皿・羽釜・甕、瓦器碗・羽釜・足釜・甕、瓦質播鉢・火鉢、須恵質播鉢・甕、陶器甕・播鉢、青磁・白磁の碗・皿、瓦、木簡・曲物・下駄・箸・漆器等の木製品、硯・石鍋・砥石等の石製品、土錘等の土製品、銭貨・鏡・小刀等の金属製品などで、

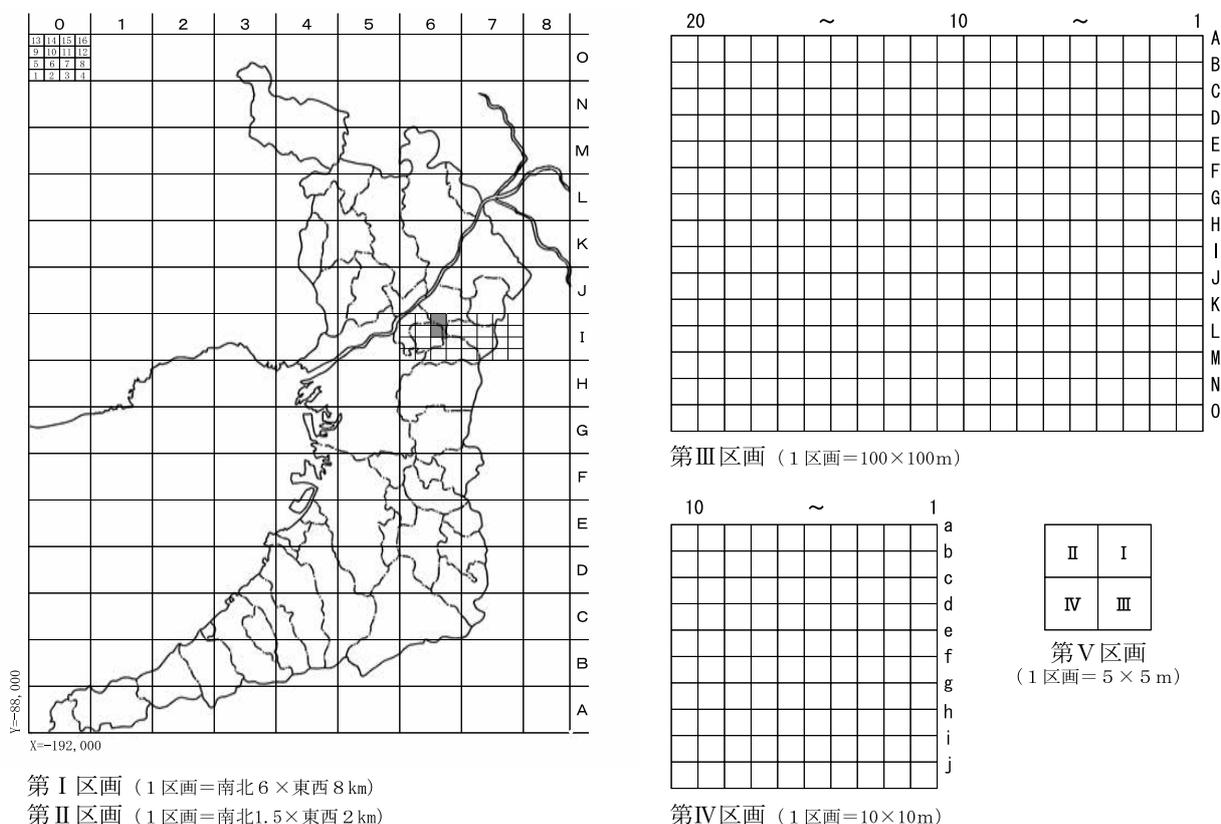


図3 調査区内の地区割り方法

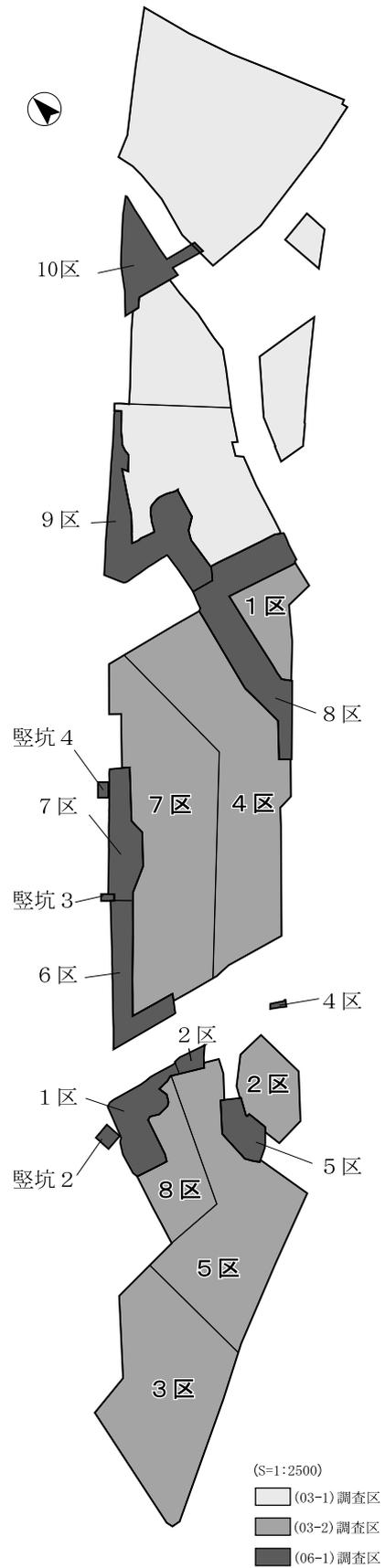
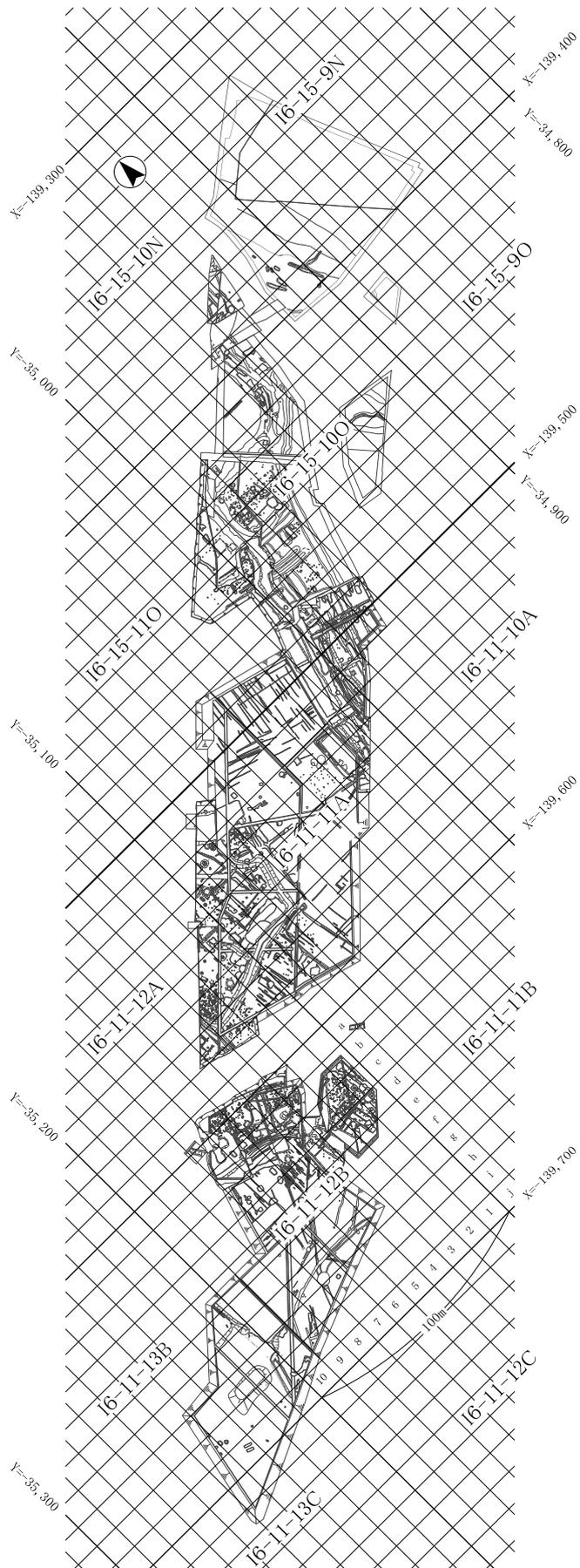


図4 調査区名と地区割り

55 × 35 × 15 cmの収納コンテナに、03- 2 調査で約 200 箱、06 - 1 調査で約 50 箱である。これらの整理・登録作業も、『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に準拠して行なった。

遺物は洗浄し、遺物登録台帳と照合できるよう一つ一つに注記作業を行なった。遺物への注記は、03 - 2 調査については「スモト 03 - 2 - △ - □」、06 - 1 調査については「スモト 06 - 1 - △ - □」（△は調査区番号、□は遺物登録番号）とし、登録番号毎に台帳に登録した。

注記完了後は、取り上げ単位毎に広げ、接合作業を行ない、必要に応じて石膏を用いた遺物復元作業を行なった。同時に実測可能な遺物をピックアップし、ピックアップしたものは順次実測作業を行なった。遺物実測数は瓦や木製品等も含め 03 - 2 調査が約 1,160 点、06 - 1 調査が約 220 点となった。

遺物整理作業と並行して、現地にて作成した遺構図面や撮影した遺構写真の整理も行ない、これらも台帳登録した。

報告書掲載の図版類は、03 - 2 調査においては、遺構図・遺物実測図ともに基本的にデジタルデータによって作成した。遺構断面図・遺物実測図はスキャナーにて原図を取り込み、描画ソフトを用いてトレースし、必要に応じて写真や拓本などのデータを貼り込んだ。遺構図のうちの平面図については、航空測量によって全体図が既にデジタル化されていたため、必要な箇所を拡大・加工し図版を作成した。

註

- 1) 財団法人 大阪府文化財センター 2003.2『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 93 集
- 2) 財団法人 大阪府文化財センター 2003.9『讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書 第 101 集
- 3) 財団法人 大阪府文化財センター 2008.2『巢本遺跡 I』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 167 集
- 4) 財団法人 大阪府文化財センター 2005.11.5『巢本遺跡現地公開資料』
- 5) 写真 1 に示したように、4) の現地公開資料を小学生向けに文章を改め、また小学校毎に学校名も書き替えた資料を作成した。
- 6) 財団法人 大阪府文化財センター 2005.11『北河内発掘！ 緑立つ道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査記録』
- 7) 辻 裕司 2006.3.11「巢本遺跡の調査成果—中世の遺構を中心に—」『大阪府埋蔵文化財研究会（第 52 回）資料』財団法人 大阪府文化財センター
- 8) 財団法人 大阪府文化財センター 2003 『遺跡調査基本マニュアル』【暫定版】
- 9) 4 区北方の調査成果を検討した結果、大阪府教育委員会文化財保護課から調査不要との指示を受けた。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

巢本遺跡が所在する門真市は大阪平野の北東部に位置し、市域の北側から東側に接する寝屋川市や四條畷市を挟んで東方には生駒山地および枚方丘陵が連なる。また、市域に北接する守口市を挟んで北西には淀川が北東から南西方向に流れ、丘陵との間には沖積地が広がる。丘陵北半部の河川は北西流して淀川に合流、南半部の河川は西あるいは南西流しつつ丘陵を開析し、丘陵裾に扇状地形を形成して、そこから南方へ流れる。扇状地の縁辺部は概ね旧河内湾、旧河内潟の汀線に重なる。この河内湾及び潟も淀川などの河川の氾濫等により多量の土砂が堆積していった。この沖積作用により淀川左岸地域に自然堤防や後背湿地などが形成され、水域が狭められて河内湖となる。中世には周囲に大きな湿地帯を残すが、湖としての規模は失われ、深野池や新開地など池程度の姿に縮小化が進む。池を含む湿地帯はさらに近世には大和川付替えもあり、干拓による新田開発が進むこととなった。門真の南西部域は、現在は宅地や工場用地としての開発が進んだが、昭和30年代頃までは土田と呼ばれる水田や蓮田が広がり、網目状に小河川や水路が巡り、小規模ながら池が点在する湿地帯的な姿をとどめていた。このような門真南部域に広がる低湿地の景観は、河内湾・潟の名残とみることができる。

淀川左岸地域である門真市域には、現在、市域北東縁に接して寝屋川が北西から南東方向に流れ、中央西側には北東から南西方向に古川が流れており、地形でも両河川岸に沿って高まりがみられる。門真市域北西部の淀川や古川などの自然堤防上には、現在、京阪電鉄本線が北東－南西方向にはしるが、当該路線は概ね自然堤防上に敷設されていることから、市域北西部の遺跡は京阪沿線に分布する。

巢本遺跡が立地する地域は、北西から南東方向に大きく蛇行する寝屋川右岸に相当し、右岸一帯には自然堤防状の高まりが現在の地形からも断続的に確認でき、遺跡が立地する環境条件を読み取ることができる。

第2節 歴史的環境

巢本遺跡が所在する門真市内における遺跡の分布は、淀川や古川の自然堤防などの微高地に立地する市域北部一帯に広がる遺跡と、市域南端部に立地する遺跡の2つのグループに大別され、市域東部や中央部には周知の遺跡は登録されていない。しかし、文献史料などからは当該地において古代末期から中世にかけて数多くの庄園が点在したことが知られ、活発な土地開発や土地利用が想定でき、多くの遺跡が眠っていることが予測される（図1）。

以下、門真市域の遺跡の概要について記す。

1. 縄文時代

淀川左岸域のこの地域には、縄文時代の遺跡はほとんど知られておらず、淀川など河川の氾濫による不安定な地理的環境にあったことが想定される。西三荘遺跡・八雲東遺跡は守口市と門真市にまたがる地域に所在する。この遺跡は淀川の氾濫原に堆積した微高地に位置する。工事中に発見されたため、検出層位は不明であるが、縄文時代後期に属する深鉢・浅鉢が出土している。再堆積でないなら、当該地



写真2 巢本遺跡周辺の空中写真

が生活を営むことのできる環境となっていたことを示す。

2. 弥生時代

弥生時代になると遺跡の分布は広範に広がりを見せる。大和田遺跡では弥生時代中期の小型銅鐸（門真野口銅鐸）が3個体出土している。古川遺跡では門真市域で初となる弥生時代前期から中期の方形周溝墓群が検出された。また普賢寺遺跡では弥生時代前期の遺構・遺物が出土している。西三荘遺跡では弥生時代の土器などが出土した。これら遺構・遺物を背景とした集落遺跡が周辺に存在することをうかがわせる。門真市南部の水郷地帯に位置する三ツ島遺跡では弥生時代に属するとされる刳舟が出土した。

3. 古墳時代

古墳時代の当該地の状況を示す史料に『古事記』、『日本書紀』がある。仁徳天皇の時代に淀川左岸に「茨田堤」を築き、「茨田屯倉」を設置したことが記される。当該地域の治水・農地開発との関係で注目される。門真市北西部には現在も式内社堤根神社が所在するが、この神社は「茨田堤」に直接かかわる神社とされ、神社境内などには堤の盛土とされる高まりが遺存している。堤は「伝茨田堤」として大阪

府の史跡に指定されている。

野口遺跡では5世紀以降の遺物が出土した。普賢寺遺跡では門真市域で初の古墳が発見された。6世紀初頭の円墳、円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪のほか、形象埴輪や盾持人形埴輪が出土するなどの成果があった。宮野遺跡は堤根神社近くに所在する。茨田堤推定地隣接での調査で古墳中期から後期の遺物包含層が検出された。古川遺跡では古墳時代中期（5世紀末）の遺構が調査されている。なお、守口市に所在する大庭北遺跡では、幅5mの溝が検出された。門真市域の遺跡とあわせ、5世紀末にはこの地域の開発が進んだことを示す考古資料として注目される。

4. 古代

門真市域は古代には河内国茨田郡に含まれる。当該地には平安時代後期以降、中世にかけて河内十七箇所などの荘園が成立する。久安元（1145）年の近衛天皇の綸旨には、小松寺修二会勤行の奉仕・寄進すべき諸郷として嶋頭・馬伏などがみえるが、現在でも当該地周辺に地名として残る。

橋波口遺跡は門真市北西部から守口市にまたがる遺跡で、淀川の自然堤防上に立地する。奈良時代の須恵器大甕を使用した甕棺墓、井戸、溝などが検出され、集落の存在が想定されている。普賢寺遺跡は普賢寺庄に比定される地域に所在する寺院跡とされる遺跡である。調査では、寺域を画する溝などの遺構とともに、祭祀関係遺構とされる灰が詰まった土坑、銅製仏具、焼けた壁土（焼失寺院）など平安時代後期から室町時代の遺構・遺物が多く出土した。

5. 中世

鎌倉時代以降も古代に引き続き、史料には馬伏庄・東馬伏庄・島頭庄・岸和田庄・大和田庄など当該地周辺に残る地名が登場する。

宮野遺跡では式内社堤根神社に西接する茨田堤推定地隣接で調査が実施され、現存する堤とされる高まりの南に沿う位置で室町時代前半の木組みが検出された。木組みは杭と横材・枝葉で構成される遺構で、「茨田堤」との関連で注目される遺構である。常称寺遺跡では中世の遺物包含層が検出され、土師器・瓦器など14世紀の遺物が出土している。普賢寺遺跡は古代の項でも述べたように寺院跡とされる遺跡であるが、その後の調査でも中世の溝などが検出され、寺域の南を画する溝などとともに、柿経、絵馬、木球、箸、漆器、人面土器などの遺物が出土した。本町遺跡は橋波口遺跡に東接する遺跡で、鎌倉時代の遺物が出土している。西三荘遺跡では、中世のヤス、鉄鎌、鉄小刀、卒塔婆、柿経などが出土し、集落遺跡や墓地遺跡として周知されている。

なお、巢本遺跡に近接するものとして、宝蔵寺の石造層塔を特記しておく。宝蔵寺はもともと遺跡の西約400メートルの地点に鎮座する産土神社の神宮寺で、今も神社のすぐ東側に接して建っている。層塔は鎌倉時代の製作と考えられており、一部のみが残存であるが、江戸期の宝篋印塔と並んで寺の前庭に重ねられている（写真3）。この宝蔵寺には本尊として平安時代後期製作の阿弥陀如来立像も祀られており、両者ともに巢本遺跡の時代と重なる重要な文化財として注意しておきたい。



写真3 宝蔵寺の石造物

参考文献

- ・ 門真市史編纂委員会 1988・1992 『門真市史』 第1・2巻
- ・ 大阪府史編纂委員会 1980・1981 『大阪府史』 第3・4巻
- ・ 門真市教育委員会 1982 『宮野遺跡発掘調査概要』
- ・ 大阪府教育委員会 2001 『宮野遺跡』
- ・ 瀬川芳則 「茨田屯倉の大溝と古墳—大阪府守口市大庭北遺跡—」 1987.6 『考古学と地域文化』 同志社大学考古学シリーズⅢ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- ・ 社団法人土木学会 1936 『明治以前 日本土木史』
- ・ 網野善彦 石井進 稲垣泰彦 永原慶二編 1995 『講座 日本荘園史 7 近畿地方の荘園Ⅱ』 吉川弘文館
- ・ 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1997.3 『三ツ島遺跡』
- ・ 財団法人 大阪府文化財センター 2003.2 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』
(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第93集
- ・ 同 2003.9 『讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』
(財) 大阪府文化財センター 調査報告書 第101集
- ・ 同 2004.3 『讃良郡条里遺跡(その3)』(財) 大阪府文化財センター報告書 第114集
- ・ 同 2006.2 『讃良郡条里遺跡Ⅳ』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第138集
- ・ 同 2007.3 『讃良郡条里遺跡Ⅴ』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第160集
(財) 大阪府文化財センター
- ・ 門真市教育委員会 2006 『門真市文化財ガイドブック』

第3章 巢本遺跡 03 - 2 の調査成果

第1節 基本層序と各層出土遺物

巢本遺跡は大阪平野の標高約 2.5 m の地点に位置する。かつては河内湾と呼ばれる海の中であり、古墳時代頃によりやく陸地化した地域である。河内湾は上町台地北方の湾口が塞がって以降、河内潟と呼ばれる時代を経て、次第に淡水湖である河内湖へと姿を変えていった。その後も河内湖は河川から運ばれる堆積物によって少しずつ規模を縮小し、最終段階には深野池・新開池と呼ばれる大きな池となった。これらの池は開発に伴い埋め立てられたが、周辺地域には湿地が広がっていたため、近世以降蓮根の栽培が盛んとなった。巢本遺跡はこの深野池が広がっていた場所の北側にあたり、長い間湿地の状態がつづいた。古代末期になりようやく人々の開発の手が加えられるようになったが、寝屋川に近接していたため、人々が住み着いて以降も頻繁に洪水が襲っており、その際の砂礫が遺構面上に厚く堆積している。

古代末の遺構面以下の地層からは遺物がまったく出土せず、地層の年代が明らかでなかったため、加速器質量分析（AMS）による放射性炭素年代測定によって地層の年代を求めた。これによって、東方の寝屋川市域に広がる讃良郡条里遺跡からの地層のつながりがある程度明らかとなった。以下、それらの年代に触れながら調査区ごとに層序を説明する。

前章で記したとおり、調査は連続した箇所を続けて行なったわけではなく、1区の次に2区、2区の次に3区といった具合に、100 m 以上隔てた箇所を行なった。よって当初は地層のつながりが明らかでなく、それぞれの調査区ごとに上から順に1層、2層と層名を振っている。4区の調査段階から地層のつながりがようやく明らかになり始めたため、それ以降はできる限り同じ地層に同じ層名を付すように努めた。しかし現地での誤認などから、微妙なズレを生じたりもした。したがって同じ地層でも、一方は3 a 層、一方は3 b 層という具合に層名が異なる場合もある。それらを整理し、地層の対応関係を示したものが表2である。

なお当センターの報告書では、耕作土など人の手が加わった堆積層を a 層と呼び、その母材となる氾濫堆積層などを b 層とすることがよくあるが、本報告ではそのような使い方はしていない。一つの地層内を細かく分層した際に、上から順番に a・b・c と振っただけであり（例：3 a 層・3 b 層）、a・b・c の代わりに 1・2・3 や i・ii・iii、あるいは上部・下部などと呼んでいる調査区もある（例：7-1 層・7-2 層、4 層上部・4 層下部）。また本書では、整理され対応関係が明らかとなった地層に、新たに統一の層名を付すことはしていない。調査段階での層名のまま記載している。狭い範囲にのみ堆積する地層や、一つの地層が細分されたものなど、現地で層名を付していなかったものについては、解説する都合上、全体の層序に影響のないよう本書執筆の段階で新たに仮層名を付した。

なお通常ならば1区につづき2区、2区につづき3区という順で報告するのであろうが、2区は府道門真守口線よりも南側に位置しており、1区とは 130 m 程隔てている。また3区はさらに離れ調査地南端部となる。調査区番号順に報告した場合、それぞれの層序が関連せず、そのつながりも理解し難い。したがって1区の次にそのすぐ西側に接する4区、4区の次に7区という具合に、北方から順に報告することとする。

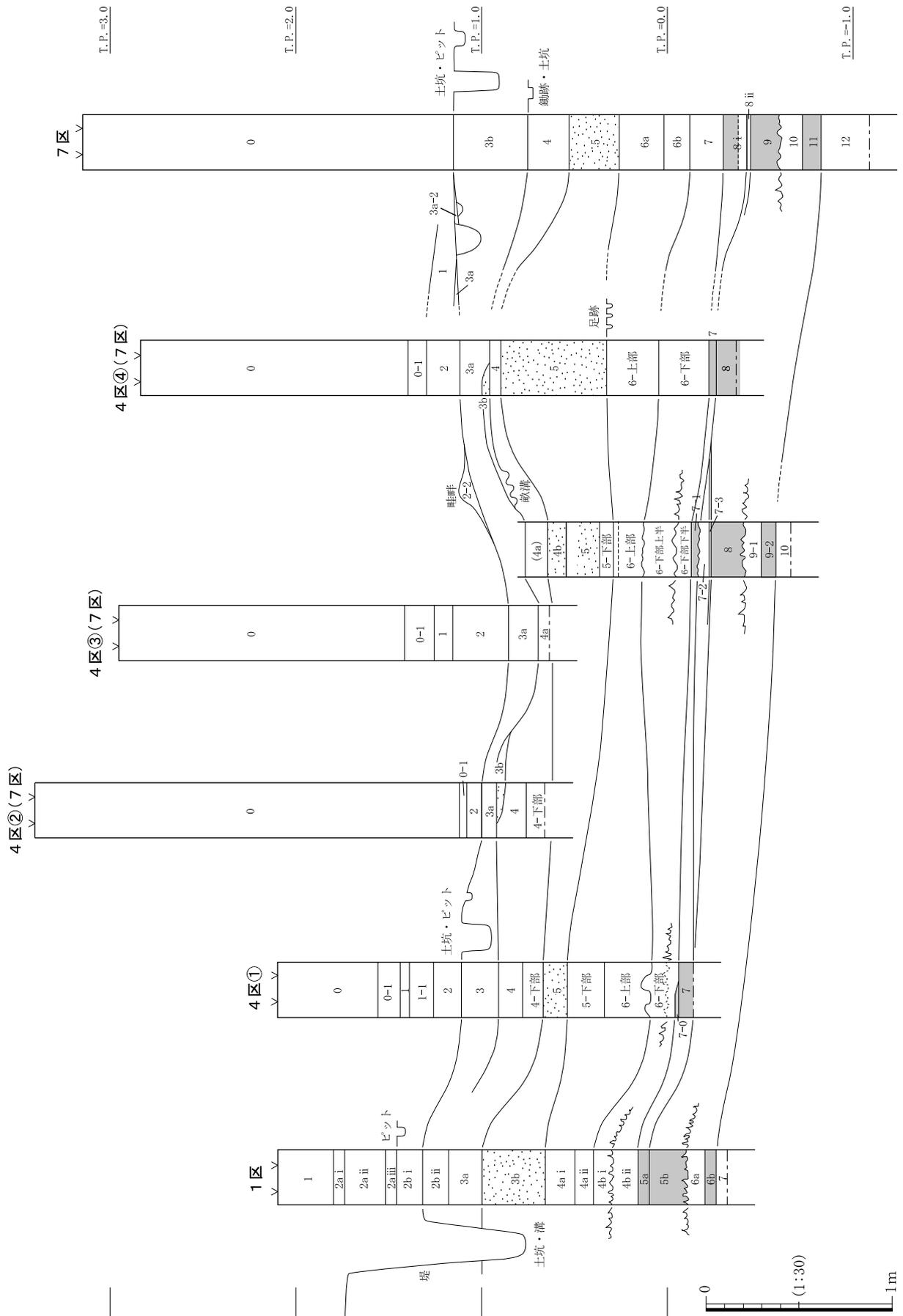


図5 1・4・7区地層断面柱状模式図

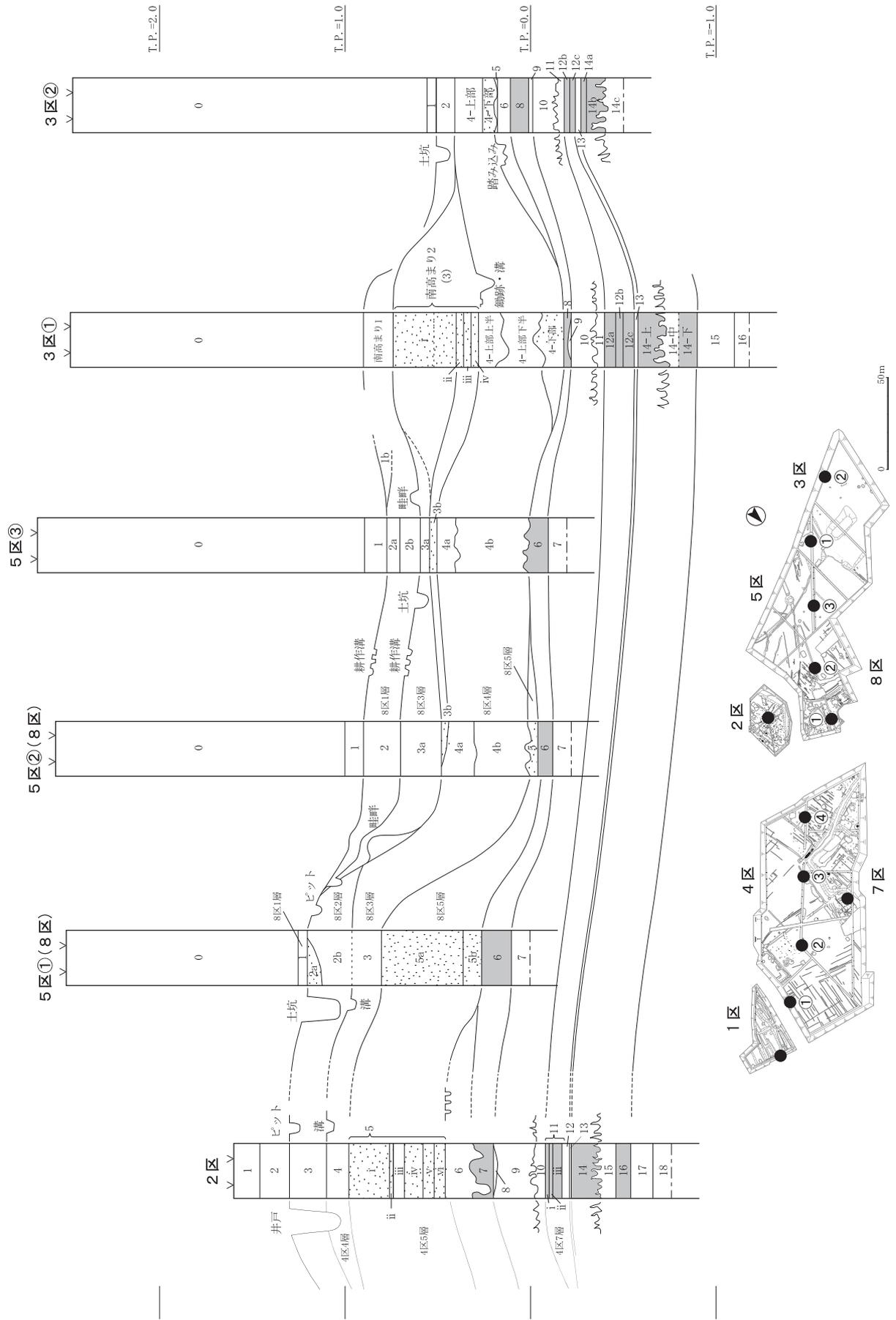
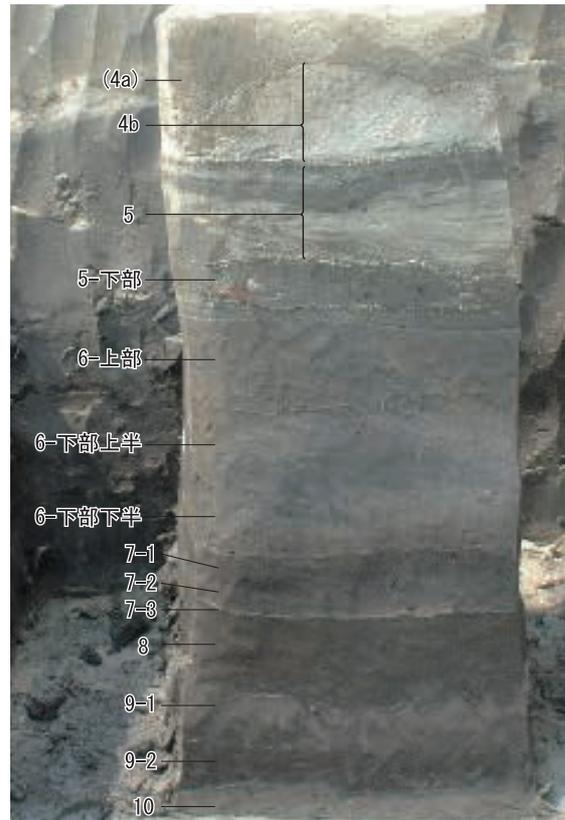


図6 2・3・5・8区地層断面柱状模式図

7区



4区③



2区



3区①

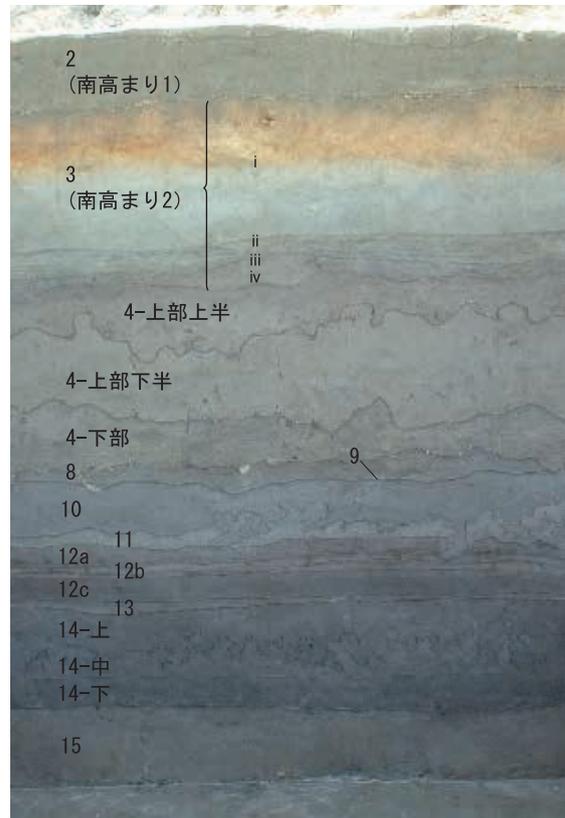


写真4 2・3・4・7区下層の地層断面

表1 基本層序一覧表

【1区】

1	現代耕土		
2 a i	暗黄灰	2. 5Y5/2	シルト混じり細粒砂～中粒砂 (極粗粒砂～砂礫を含む)
2 a ii	オリブ褐	2. 5Y4/3	シルト混じり中粒砂～細粒砂 (粗粒砂～細礫と炭化物を含む)
2 a iii	黄褐	2. 5Y5/3	細粒砂 (中粒砂～細礫と炭を含む)
2 b i	黄灰～暗灰黄	2. 5Y5/1～5/2	シルト混じり中粒砂～粗粒砂 (細礫～極粗粒砂と炭化物を含む。Mn層)
2 b ii	オリブ黒	10Y3/1	シルト混じり中粒砂～細粒砂 (上半ほど粗粒でFeが沈着する)
3 a	灰	7. 5Y4/1	シルト混じり細粒砂～シルト質細粒砂 (炭化物を含む)
3 b	灰	5Y5/1	細礫～極細粒砂 (材、植物遺体を含む。上半はラミナ発達。正級化構造が見られる)
4 a i	オリブ黒	5Y3/2	粘土質シルト～極細砂質シルト (上半で二回の逆級化構造が見られる)
4 a ii	オリブ黒	5Y3/2～3/1	シルト～極細粒砂 (上半ではやや腐食質の植物遺体を含み、全体にボソボソする。極細砂でラミナが見られ、植物遺体のラミナがある。下半ではシルトで偽礫状にブロック化する部分がある)
4 b i	灰	7. 5Y4/1	粘土質シルト～シルト質粘土
4 b ii	灰	5Y4/1	粘土～シルト質粘土 (植物遺体のラミナあり、上面が変形構造)
5 a	黒褐～黒	10YR3/1～10YR2/1	粘土～シルト質粘土 (植物遺体混じる)
5 b	黒褐	7. 5Y3/1	粘土～シルト質粘土
6 a	黄灰	2. 5Y4/1	粘土 (上面が変形構造)
6 b	黒	5Y4/1	粘土
7	灰	5Y4/1	粘土

【4区①】

0	盛土		
0-1	オリブ黒	5Y3/2	炭・細粒砂混じりシルト
1	暗オリブ	7. 5Y4/3	シルト混じり細～極細粒砂
1-1	灰オリブ	5Y4/2	細～極細粒砂含むシルト (Mnが沈着)
2	オリブ褐	2. 5Y4/3	極細粒砂含むシルト (Mnが沈着)
3	暗オリブ	5Y4/3	少量の極細粒砂含むシルト (上部Feが沈着)
4	灰オリブ	7. 5Y4/2	シルト
4-下部	灰	7. 5Y4/1	細～極細粒砂質シルト (大きく混ぜられたもの。一部ラミナ見える)
5 (3層に分かれる)	(上)灰オリブ	7. 5Y5/2	粗粒砂
	(中)オリブ黒	7. 5Y3/2	シルトと細～極細粒砂の互層
	(最下)灰	7. 5Y4/1	植物遺体多く含む極細粒砂質シルトのラミナ層
5-下部	オリブ黒	5Y3/1	炭・植物遺体混じりシルト (少量の極細粒砂を含む)
6-上部	オリブ黒	5Y2/2	偽礫・炭・植物遺体混じりシルト
6-下部	黒	5Y2/1	炭混じりシルト (下部は黄白色で変形構造)
7-0	黒褐	2. 5Y3/1	炭・植物遺体混じりシルト
7	黒	2. 5Y2/1	シルト (細かい植物遺体ラミナが多く見える。6層下部と7層との間に 黒褐2. 5Y3/1 炭・植物遺体混じりシルト。植物遺体層)

【4区② (7区)】

0	盛土		
0-1	灰オリブ	5Y5/3	中粒砂含む細～極細粒砂
2	灰オリブ	5Y5/2	シルト混じり極細粒砂 (Mnが沈着)
3 a	灰オリブ	5Y5/2	シルト質極細粒砂
3 b	灰	5Y6/1	極細粒砂 (ラミナ見える水成層)
4	オリブ黒	7. 5Y3/2	極細粒砂混じりシルト (最上部に水成ラミナ見える)
4-下部	灰	5Y4/1	中～細粒砂質シルト～粗粒砂 (水成ラミナ見える。大きく混ぜ返されたもの)

【4区③ (7区)】

0	盛土		
0-1	オリブ黒	7. 5Y3/2	中粒砂含むシルト
1	灰オリブ	5Y4/2	シルト混じり中～細粒砂
2	にぶい黄褐	10YR4/3	中粒砂含むシルト混じり細粒砂
2-2	オリブ褐	2. 5Y4/3	炭混じり細粒砂混じりシルト (Mn斑多し)
3 a (2層に分かれる)	(上)灰オリブ	5Y5/2	シルト混じり粗～中粒砂
	(下)灰	5Y4/1	中～細粒砂混じりシルト (全面にFeが沈着)
4 a	灰	5Y4/1	細粒砂混じりシルト (4a) は 灰オリブ 5Y4/2 極細粒砂混じりシルト
4 b	灰白	5Y7/1	粗粒砂
5	灰	5Y7/1	極粗粒砂 (シルトと極細粒砂の互層)
5-下部	黒褐	2. 5Y3/1	炭混じり極細粒砂質シルト (粗粒砂偽礫混じる)
6-上部	黒褐	2. 5Y3/1	炭・偽礫・植物遺体混じりシルト
6-下部上半	オリブ黒	5Y3/1	炭・植物遺体混じりシルト (白色偽礫混じり)
6-下部下半	黒褐	2. 5Y3/1	炭・植物遺体多く含む粘土質シルト (上面が変形構造)
7-1	黒	10YR1. 7/1	植物遺体多く含む粘土質シルト
7-2	黒	5Y2/1	植物遺体多・炭・白色シルト偽礫混じりシルト
7-3	灰	7. 5Y4/1	シルト質粘土
8	オリブ黒	5Y3/1	植物遺体混じりシルト
9-1	オリブ黒	7. 5Y3/1	シルト (上面が変形構造)
9-2	黒	2. 5Y2/1	シルト
10	灰	7. 5Y4/1	シルト

【4区④(7区)】

0	盛土		
0-1	オリーブ黒	5Y3/2	細粒砂混じりシルト
2	オリーブ褐	2.5Y4/3	細粒砂混じりシルト
3a	暗オリーブ	5Y4/3	細粒砂混じりシルト
3b	灰オリーブ	5Y4/2	シルト質細～極細粒砂
4	オリーブ黒	7.5Y3/2	少量の粗粒砂含むシルト
5	灰白	7.5Y7/1	極粗～粗粒砂(砂からシルトへの構造が3～4回見える。水成層)
6-上部	オリーブ黒	7.5Y2/2	炭混じり極細粒砂含むシルト(植物遺体多く含む。途中に極細粒砂質シルトの薄層(ラミナ多く入る。最下層に白色シルト入る))
6-下部	黒	7.5Y2/1	炭混じりシルト
7	黒	5Y2/1	炭・植物遺体多く混じるシルト～粘土(植物遺体はラミナを形成)
8	黒	5Y2/1	植物遺体含むシルト

【7区】

0	盛土		
3b	灰オリーブ	7.5Y4/2	シルト含む細～極細粒砂
4	オリーブ黒	5Y3/1	細粒砂含むシルト
5	灰	5Y4/1	粗～細粒砂
6a	オリーブ黒	5Y3/1	植物遺体・炭・シルト小偽礫多く含むシルト(上部に極細粒砂～シルトのラミナ)
6b	黒褐	2.5Y3/1	植物遺体・炭・シルト小偽礫多く含むシルト
7	黒	2.5Y2/1	植物遺体・炭を含むシルト～粘土
8 i	黒	10YR1.7/1	極少量の極細粒砂を含むシルト～粘土(上半は植物遺体多く含む)
8 ii	灰	5Y4/1	シルト～粘土
9	黒	2.5Y2/1	植物遺体・炭を含むシルト～粘土
10	オリーブ黒	5Y2/2	シルト～粘土(上面が変形構造)
11	黒	5Y2/1	シルト～粘土
12	オリーブ黒	7.5Y3/2	シルト～粘土

【2区】

1	水田耕土		
2	灰	7.5Y5/1	中粒砂～細礫まじり砂質シルト
3	褐灰	10YR5/1	極細～中粒砂含むやや粘土質シルト(Fe沈着し、全体ににぶい黄褐10YR5/4に変色)
4	灰オリーブ	5Y/2	極細～中粒砂を多く含むシルト
5 i			中～極粗粒砂
5 ii	青灰	10BG6/1	細～中粒砂(植物遺体含む)
5 iii	黒褐	2.5Y3/1	粘土質シルト
5 iv			中粒砂～細礫
5 v	黒褐	2.5Y3/1	シルト混じり中～極粗粒砂(植物遺体含む)
5 vi			中粒砂～細礫
6	黒褐～黄灰	2.5Y3/1～4/1	シルト～シルト質極細粒砂(上方粗粒化する。下部は構造が不明瞭であるが上部はラミナ有)
7	黒	5Y2/1	粘土質シルト～シルト(植物遺体を多く含む)
8	黄灰	2.5Y4/1	粘土質シルト～シルト(レンズ状)
9	黒褐	2.5Y3/1～10YR3/1	粘土質シルト～シルト質粘土(植物遺体を含み、最上部は極細粒砂混じる)
10(2層に分かれる)	(上)黒～黒褐	10YR2/1～2/2	粘土質シルト～シルト(植物遺体・ラミナが顕著にみられる。上面が変形構造)
	(下)黒褐	7.5YR3/1	粘土質シルト(～シルト質粘土)(植物遺体・ラミナ含む)
11-i	黒～黒褐	10YR2/1～2/2	シルト～粘土質シルト(上層との層理面は不明瞭)
11-ii	黒	10YR2/2	シルト～粘土質シルト(植物遺体を多く含む)
11-iii	黒～黒褐	10YR2/1～2/2	シルト～粘土質シルト(下層との層理面は不明瞭)
12(2層に分かれる)	(上)黒褐	2.5Y3/1～10YR3/1	(ラミナ有、植物遺体を含む)
	(下)黒褐～褐灰	10YR3/1～4/1	粘土質シルト～シルト質粘土(ラミナ有。植物遺体を含む)
13	灰	5Y5/1	粘土質シルト～シルト質粘土
14	黒褐～黒	10YR3/1～2/1	粘土質シルト(植物遺体及び未分解の植物繊維を多く含む)
15	黄灰～褐灰	2.5Y4/1～10YR4/1	シルト質粘土(上面が変形構造)
16	黒	2.5Y2/1	シルト質粘土～粘土(上位層に比べ硬質。上下の層理面は不明瞭)
17	灰	5Y4/1	シルト質粘土～粘土(上位層と同様に硬質)
18	褐灰～黒褐	10YR4/1～3/1	粘土質シルト～シルト(植物遺体(葎)を多く含む)

【5区①(8区)】

0	盛土		
1	オリーブ褐	2.5Y4/23	シルト含む細粒砂(Fe・Mn沈着する)
2a	暗灰黄	2.5Y4/2	偽礫混じりシルト質極細粒砂(Mnが沈着)
2b	灰オリーブ	5Y4/2	極細粒砂含むシルト～極細粒砂質シルト(極細粒砂ラミナあり)
3	灰	7.5Y4/1	シルト～極細粒砂質シルト(極細粒砂ラミナよく見える)
5a	灰	7.5Y6/1	極粗～粗粒砂
5b	オリーブ黒	7.5Y3/2	シルト質極細粒砂(水成ラミナが細かく、多い)
6	オリーブ黒	7.5Y2/2	炭・植物遺体多く混じるシルト(白色シルト偽礫混じり、少量の極細粒砂含む)
7	オリーブ黒	7.5Y3/1	植物遺体多く含むシルト(～粘土)

【5区②(8区)】

0	盛土		
1	オリブ黒	5Y3/2	偽礫混じり細粒砂含むシルト
2	灰オリブ	5Y4/2	偽礫混じり細粒砂混じりシルト
3a	暗オリブ	5Y4/3	シルト混じり細～極細粒砂 (Fe沈着する)
3b	灰オリブ	5Y4/2	シルト混じり細粒砂 (一部粗粒砂)
4a	オリブ黒	7.5Y3/2	シルト (一部極細粒砂ラミナ含む)
4b	オリブ黒	7.5Y3/1	極少量の極細粒砂を含むシルト
5	オリブ黒	5Y3/2	シルト～極細粒砂 (植物遺体・炭混じり)
6	黒	2.5Y2/1	白色シルト混じるシルト (植物遺体多く含む)
7	オリブ黒	5Y3/1	植物遺体含むシルト～粘土

【5区③】

0	盛土		
1	暗オリブ	5Y4/3	炭・小偽礫含む細～極細粒を含むシルト
2a	暗オリブ	5Y4/3	極細粒砂含むシルト
2b	暗オリブ	5Y4/3	細～極細粒砂含むシルト (Mnが沈着)
3a	暗オリブ	5Y4/3	細粒砂混じりシルト (Mn・Fe沈着)
3b	暗オリブ	5Y4/4	細～極細粒砂質シルト (水成層)
4a	灰オリブ	5Y4/2	極細粒砂質偽礫混じりシルト～極細粒砂含むシルト
4b	オリブ黒	5Y3/2	シルト (炭含む)
6	オリブ黒	7.5Y2/2	細粒砂含むシルト～シルト (炭混じり偽礫多く含む)
7	黒	5Y2/1	(少量の)炭・偽礫混じりシルト

【3区①】

0	盛土		
南高まり1	暗灰黄	2.5Y4/2	シルト質細～中粒砂 (下部ほど砂質、上部ほどシルト質)
3 i	黄褐	2.5Y5/4	極粗～粗粒砂 斜交ラミナ顕著 (下部は逆グレーディング)
3 ii	灰	7.5Y4/1	極細粒砂 (中部に植物遺体のラミナあり)
3 iii	灰	7.5Y4/1	細粒砂 (逆グレーディング)
3 iv	オリブ黒	5Y3/1	極細粒砂～シルト
4-上部上半	黒褐	2.5Y3/1	極細粒砂質シルト (植物遺体混じる。上半と下半との層界面は大方明瞭だが変形を受け凹凸あり)
4-上部下半	オリブ黒	5Y3/1	極細粒砂混じり粘土質シルト (ピビアナイトあり)
4-下部	オリブ黒	5Y3/1	上半はシルト質極細～細粒砂 (細砂のラミナやレンズ状細粒砂が挟在する) 下部は中～粗粒砂とシルト質細粒砂の互層
8	黒	5Y2/1	粘土質シルト (植物遺体のラミナを多く含む。灰色粘土質シルトが混じる)
9	オリブ黒～灰	5Y3/1～4/1	粘土質シルト
10	黒	2.5Y2/1	粘土質シルト (植物遺体 (葦) のラミナを多く含む)
11	オリブ黒	5Y3/1	シルト質粘土 (植物遺体を含みそのラミナあり。上面が変形構造、下半部ほど変形が弱くなる)
12a	黒	10YR2/1	極細粒砂混じり粘土質シルト (植物遺体のラミナあり。下方ほど多く含み未分解)
12b (3層に分かれる)	(上)黒褐	2.5Y3/1	シルト質粘土～粘土質シルト (植物遺体、ラミナを含む)
	(中)黒	10YR2/1	粘土質シルト (植物遺体含む)
	(下)黒褐	2.5Y3/1	粘土質シルト (植物遺体含む)
12c	黒	10YR2/1	粘土質シルト～シルト質粘土 (12aとは逆で下方ほど植物遺体少ない)
13 (3層に分かれる)	(上)黒褐	2.5Y3/1	シルト質粘土～粘土質シルト
	(中)黒	10YR2/1	粘土質シルト (植物遺体を含む)
	(下)灰	5Y4/1	シルト質粘土～粘土質シルト
14-上	黒	2.5Y2/1	極細粒砂混じり粘土質シルト (植物遺体のラミナあり。下方に比べてやや砂質)
14-中	黒	5Y2/1	粘土質シルト～シルト質粘土 (上面が変形構造。泡・団子状となり入り混じる)
14-下	黒	2.5Y2/1	シルト質粘土
15	黒～黒褐	2.5Y2/1～3/1	シルト質粘土 (上部が斑のようになる)
16	黒褐	2.5Y3/1	シルト質粘土

【3区②】

0	盛土		
1	灰	7.5Y4/1	極細粒砂混じりシルト (暗灰シルト偽礫混じる)
2	灰 オリブ	7.5Y4/2	灰オリブ 中～細粒砂質シルト
4-上部	灰	5Y4/1	中～細粒砂質シルト～細～極細粒砂質シルト (正級化構造 (上方細粒化) を呈す)
4-下部	灰	5Y4/1	極粗～粗粒砂 (粗～中粒砂混じる)
5	灰	10Y4/1	シルト混じり極細～細粒砂
6	オリブ黒	5Y3/1	シルト
8	オリブ黒	5Y3/1	粘土質シルトと粘土質シルト～シルトの互層 (変形が顕著。植物遺体多く含む)
9	黒褐	2.5Y3/1	粘土質シルト (灰白シルトを挟在する。植物遺体含む)
10	黒	2.5Y2/1	粘土質シルト 下半部に植物遺体が多くなる
11	黒	2.5Y2/1	粘土質シルト (植物遺体・灰白シルトを挟む。上面が変形構造)
12b	黒	10YR2/1	粘土質シルト (植物遺体多く含む)
12c	黒	10YR2/1	粘土質シルト (植物遺体多く含む)
13	黒褐	10YR3/1	粘土質シルト～シルト質粘土 (上・下層に灰白シルト)
14a	黒	10YR2/1	粘土質シルト～シルト
14b	黒	2.5Y2/1～10YR1.7/1	シルト質粘土
14c	黒～黒褐	2.5Y2/1～3/1	シルト質粘土

表2 各調査区基本層序の対応関係一覧表

調査区	1区	4区①	4区② (7区)	4区③ (7区)	4区④ (7区)	7区	2区	5区①(8区)		5区②(8区)		5区③	3区①	3区②
								5区	8区	5区	8区			
		0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0
	1	0-1	0-1	0-1	0-1		1							1
	2ai ~iii	1 1-1		1		1	2	1	1	1		1	南高まり 1	2
	2bi	2	2	2-2		3a								
	2b ii	3	3a	3a	3a	3a-2	3	2a		2	1	2a 2b	3i (南高まり2)	3ii~iv
			3b		3b	3b		2b	2	3a	3	3a		
	3a	4 4-下部	4 4-下部	4a (4a)	4	4	4	3	3	4a・b	4	4a・b	4-上部 ~下部	4-上部 ・下部
	3b	5		4b 5 5-下部	5	5	5	5a・b	5	5	5			
	4ai	5-下部			6-上部	6a	6							5 6
	4a ii	6-上部			6-上部	6b	7 8	6		6		6	8	8 9
	4bi	6-下部 上半		6-下部 上半	6-下部	7	9	7		7		7	10	10
	4b ii	6-下部 下半		6-下部 下半			10						11	11
	5a	7-0 7		7-1 7-2	7	8i上半 8i下半	11 12						12a~c	12b・c
				7-3		8 ii	13						13	13
	5b			8	8	9	14						14-上	14a・b
	6a			9-1		10	15						14-中	14c
	6b			9-2		11	16						14-下	
	7			10		12	17						15	
							18						16	

1. 1区

細い道路を隔てて03-1調査地の南に隣接する調査区である。東端の一部は宅地造成の盛土がなされているが、大部分は近年までの耕作地のままの状態であった。

その現代耕作土層を除去した2 a i層上面から、直ちに井戸などの遺構が検出できるが、それらは近世以降の遺構であり、中世以前の遺構の検出は2 b i層上面からとなる。2 a i層は暗黄灰色のシルト混じり細粒~中粒砂で、2 a ii層はオリブ褐色のシルト混じり中粒~細粒砂、2 a iii層は黄褐色の細粒砂で、2 a i層から2 a iii層までは合わせて約35cmの厚みがある。2 b i層(遺物取り上げ名称は2 b層)は黄灰~暗灰黄色のシルト混じり中粒~粗粒砂で、Mnを多く含む。この上面で僅かではあるが柱穴や溝などの遺構が検出できる。大型の土坑群は次の2 b ii層上面からの検出となるが、この2 b

i・ii層ともにFeやMnが多く沈着しており、実際には遺構の検出や切り合い関係の確認が非常に難しかった。断面の観察でも同様に非常に不明瞭であった。2b ii層はオリーブ黒色のシルト混じり中粒～細粒砂で、上半ほど粗粒でFeが多く沈着する。その下には灰色のシルト混じり細粒砂～シルト質細粒砂の3a層があり、さらにその下に洪水砂層である3b層が堆積する。3b層は植物遺体を含む細礫～極細粒砂で、上半部はラミナが発達し正級化構造が見られる。厚い箇所では約35cmの厚みをもつ。瓦器碗片が出土することから、この層までは確実に中世の段階の堆積層であることがわかる。

掘削作業はこの3b層の下面で終了したため、それ以下の地層は土坑などの遺構の壁面によって観察した。なお3b層掘削後の4a i層上面で、一面に広がる足跡を検出している。

4a i層はオリーブ黒色の粘土質シルト～極細砂質シルトで、上半で二回の逆級化構造が見られる。4a ii層はオリーブ黒色のシルト～極細粒砂で、上半部はやや腐食質の植物遺体を含み、全体にほそぼそする。極細砂や植物遺体のラミナがみられ、下半部はシルト質で、偽礫状にブロック化する部分がある。この4a iii層は4区の6層下部に対応する。つづく4b i層は灰色の粘土質シルト～シルト質粘土、4b ii層は灰色の粘土～シルト質粘土で、植物遺体やラミナが認められる。4b ii層の上面には火焰状の変形構造が認められることから、この段階で地震があった可能性が考えられる。5a層は植物遺体が混じる黒褐色～黒色の粘土～シルト質粘土で、約6cmの厚みがある。4区の7層に相当する地層である。5b層は黒褐色の粘土～シルト質粘土で、4区の8層に対応する。約20cmの厚みがある。

4区ではこの5a層と5b層に対応する地層の間に、7-2・7-3層という暗色化していない地層が認められる。同様の地層は南方の2区や3区でも認められるが、この1区までは及んでいないようである。6a層は黄灰色粘土で、4b ii層と同じく上面に変形構造が認められる。これも地震によるものか。6b層は黒色粘土で6～8cmの厚みがある。4区の9-2層、7区の11層に対応する。7層は灰色粘土である。

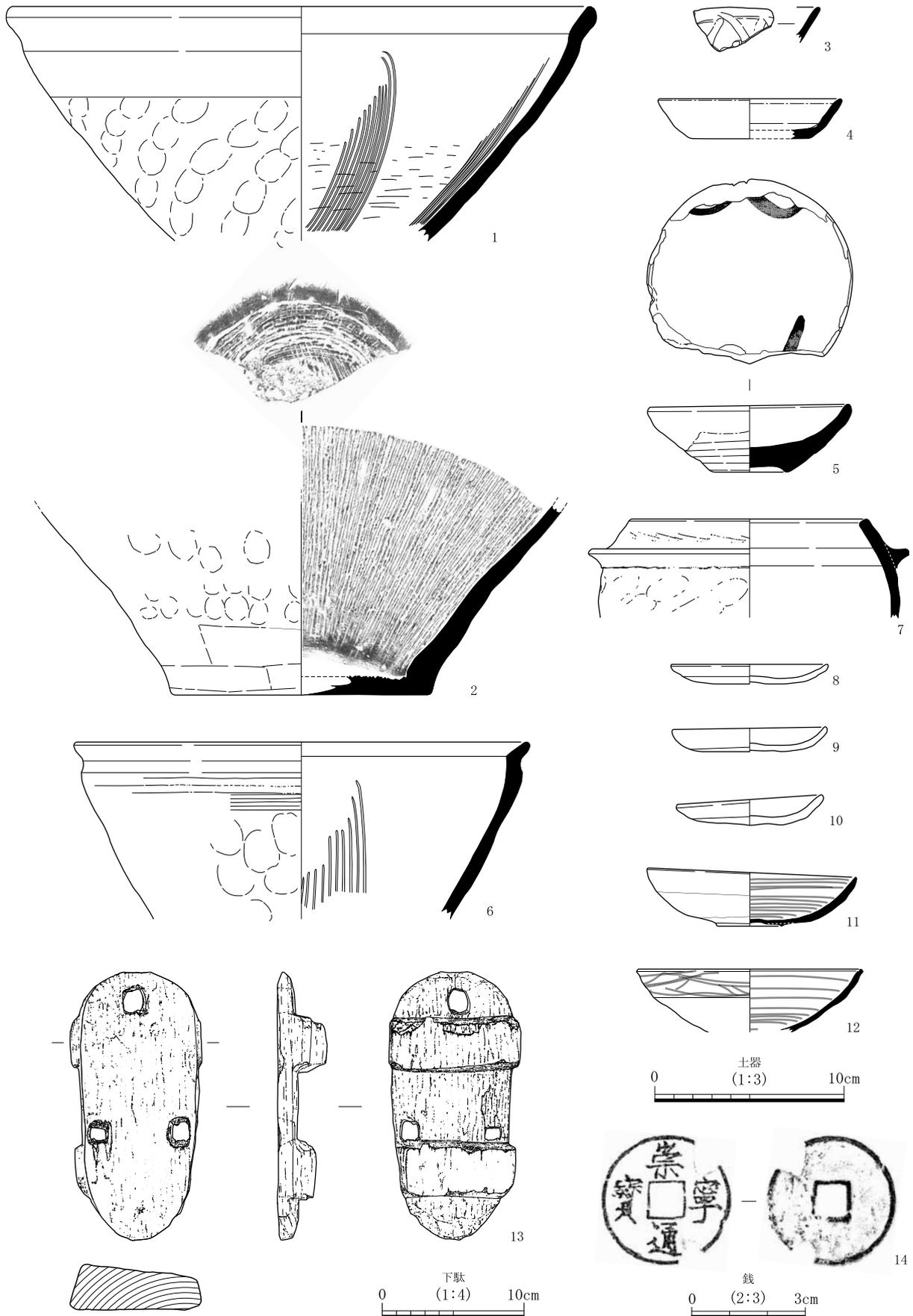
【遺物(図7～9)】2a ii層からは土師器、瓦器等の他に近世の陶磁器や炮烙の小片が出土した。1は16世紀末の瓦質の播鉢である。口縁部外面には強いナデを施すが、体部外面には右上がりの指頭圧痕が明瞭に残る。また内面下半には使用痕跡が認められる。

2a iii層からは土師器、瓦器、青磁、白磁、銭貨などのほか、近世の陶磁器類が出土した。2は丹波焼と思われる播鉢で、底部内面にも播目を刻む。4は口縁部釉剥ぎのいわゆる口禿の白磁皿である。5は16世紀末の肥前焼の皿である。また崇寧通寶(14)が出土している。

2b i層からは土師器、瓦器、青磁、白磁などが出土した。瓦器碗は13世紀中葉以降のものが大半である。6は瓦質の播鉢である。口縁部外面直下に強いナデを施し、短く外反する口縁をもつ。16世紀後半に属しており、2b i層の下限が求められる。

2b ii層からは土師器、瓦器、須恵器などが出土した。10の土師器皿は短く立ち上がる口縁をもつ。13世紀後半に位置する。遺物量が少なく細片であり、時期の特定は難しい。

3a層からは土師器、瓦器、須恵器、青磁、白磁、陶器、瓦、砥石などが出土した。15世紀代の遺物も若干含まれるが、中心は13～14世紀である。15は白磁皿で、口縁部は釉剥ぎとする。瓦質の火鉢には浅鉢(24)と深鉢(23・26)がある。24は平面円形を呈し、碗状の体部に獣脚をもつ。口縁部外面にはやや幅のある横方向のミガキを施す。23は外面に2条の突帯がめぐり、その間に唐草文を押捺する。26は口縁部に向かってやや開く体部をもち、口縁部は直立する。内面に指頭圧痕が残る。25は備前焼の播鉢で、口縁部に上下の拡張がみられる。15世紀代に属する。21は小型の砥石である。孔



1. 2a ii層、2~5·14. 2a iii層、6~9·11. 2b(i)層、10. 2b ii層、12·13. 3b層

图7 1区遺物包含層出土遺物実測図

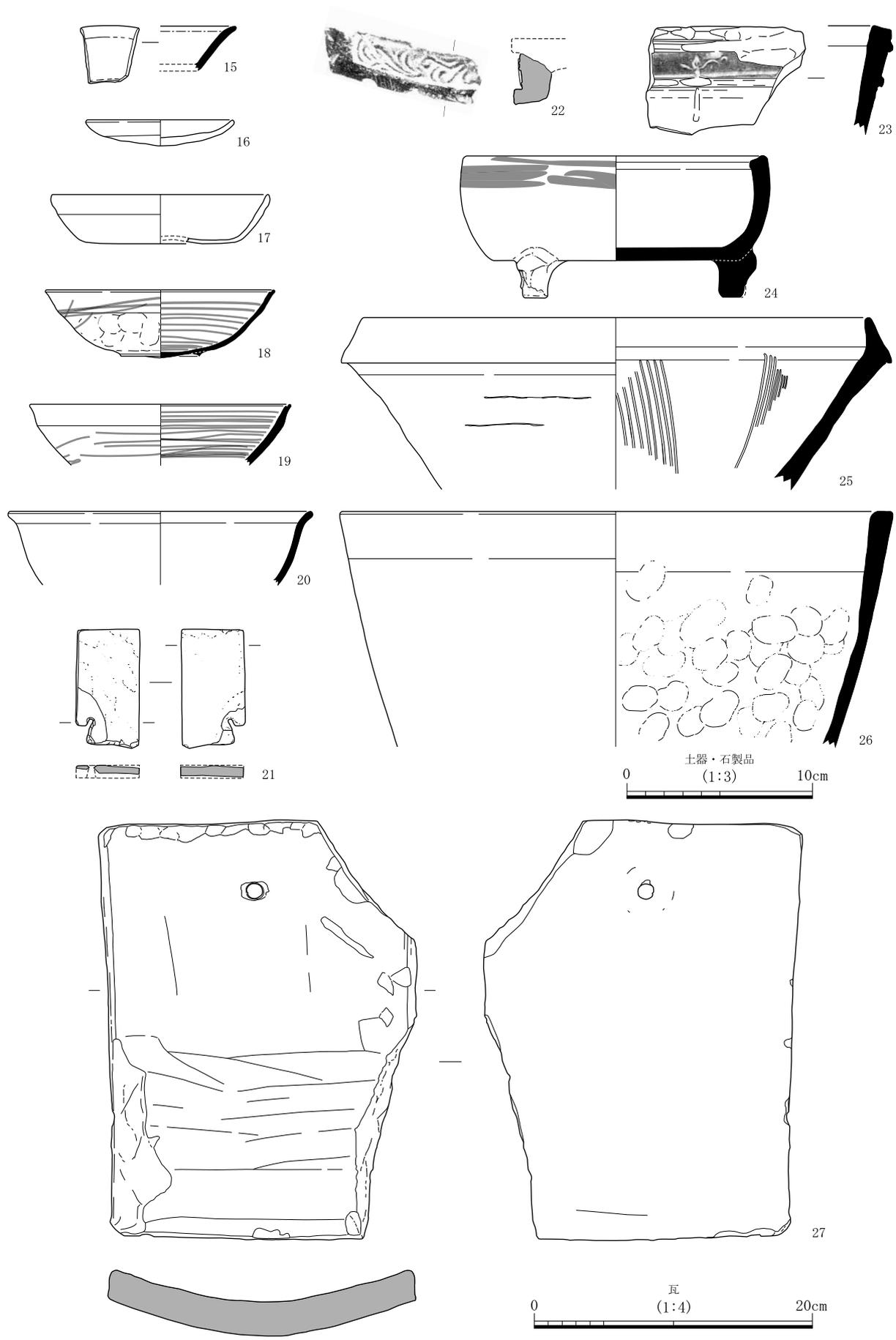


图8 1区3a層出土遺物実測図

があいていることから、携帯用と考えられる。22は唐草紋軒平瓦である。27は平瓦で凹面には横位のナデを施す。広端部側に釘穴がある。

3b層からは瓦器椀、木製品が出土したが、遺物量は非常に少ない。12は内面のミガキが簡略化された13世紀後半のものである。13は台歯を一木から作った連歯下駄である。平面形は楕円形を呈し、方形の緒穴をあける。前歯・後歯はともに裏面左側の摩滅が著しい。

註

- 1) 本文中では、椀や皿などを「瓦器」、播鉢や火鉢などを「瓦質土器」と呼んでいるが、最初に大雑把に出土遺物の内容を紹介する場合には「瓦質土器」も含めて「瓦器」と一括りにした。計測表も同様である。

2.4区

用水路を隔てて1区の西側に隣接する調査区で、南端を府道門真守口線までとする。全体に宅地や工場用地造成のための盛土が施されており、その厚さは厚い箇所では2m以上にも及ぶ。

盛土の下には旧表土と思われるオリブ黒色のシルト(0-1層)があり、近世以降の堆積層である1層、2層とつづく。中世の遺構を検出するにはこれらを除去した後の3a層(1区寄りでは3層)上面となる。3a層(3層)は1区の2bii層に対応すると考えられる地層で、場所により微妙に異なるが、細粒砂混じりの灰オリブ～暗オリブ色シルトである。地層の厚さは約8～20cmである。この3a層(3層)上面はFeの沈着が著しく、遺構の判別が非常に難しかった。特に次節で報告する400土坑などは、遺物の多くが地表面に現れているものの、3a層上面では遺構の輪郭が不明瞭で検出が難しかった。したがって3a層は掘削し、その下層の4層の上面であらためて3a層上面からの遺構として遺構検出することとした。

なお、調査区南東側の一部や400土坑の西側付近には、3a層と4層との間に極細粒砂の3b層が広がっている。ラミナが観察できる水成層であり、厚い箇所では10cmほど堆積している。調査区の東壁際では、この3b層に覆われた耕作溝を検出している。

また南半部の一部には、3a層の上に2-2層としたオリブ褐色の細粒砂混じりシルトが薄く認められる。その一部が部分的に高まっており、耕作地境の畦畔を形成している。

全体の調査は3a層掘削後の面で終了したが、道路の橋脚等地下深くまで工事が及ぶ箇所については一部深掘りを行い、下層の遺構および地層の調査を実施した。4層は灰～オリブ黒色の細粒砂混じりシルトで、北方ではその下に灰色の中～極細粒砂質シルト(4層下部)が認められる。この地層には大きく混ぜ返されたような状況が観察できる。北方では4層と4層下部を合わせて20cm以上の厚みがあるが、南方では薄く10cm前後となる。5層は粗粒の洪水砂層である。1区の3b層に対応する砂層で、南方の厚い箇所では50cm以上の厚みがある。単純な砂層ではなく、シルトとの互層になっている。6層は上部と下部とに分層でき、上部については1区寄りでは5層下部と6層上部という名称でさらに細分している。6層上部は炭や偽礫、植物遺体を多く含む黒褐～オリブ黒色のシルトで、南半部ではこの層の下面に2区の8層に相当する白色シルトブロックが確認できる。下部は上半と下半とに分層できる。上半はオリブ黒色のシルト、下半は黒褐色の粘土質シルトで、両者ともに炭や植物遺体を多く含んでいる。1区の4bi層・4bii層に対応する地層で、下半層の上面には1区4bii層上面と同様の变形構造が認められる。6層の上部と下部を合わせた厚さは50cm前後である。その下には7層がつづ

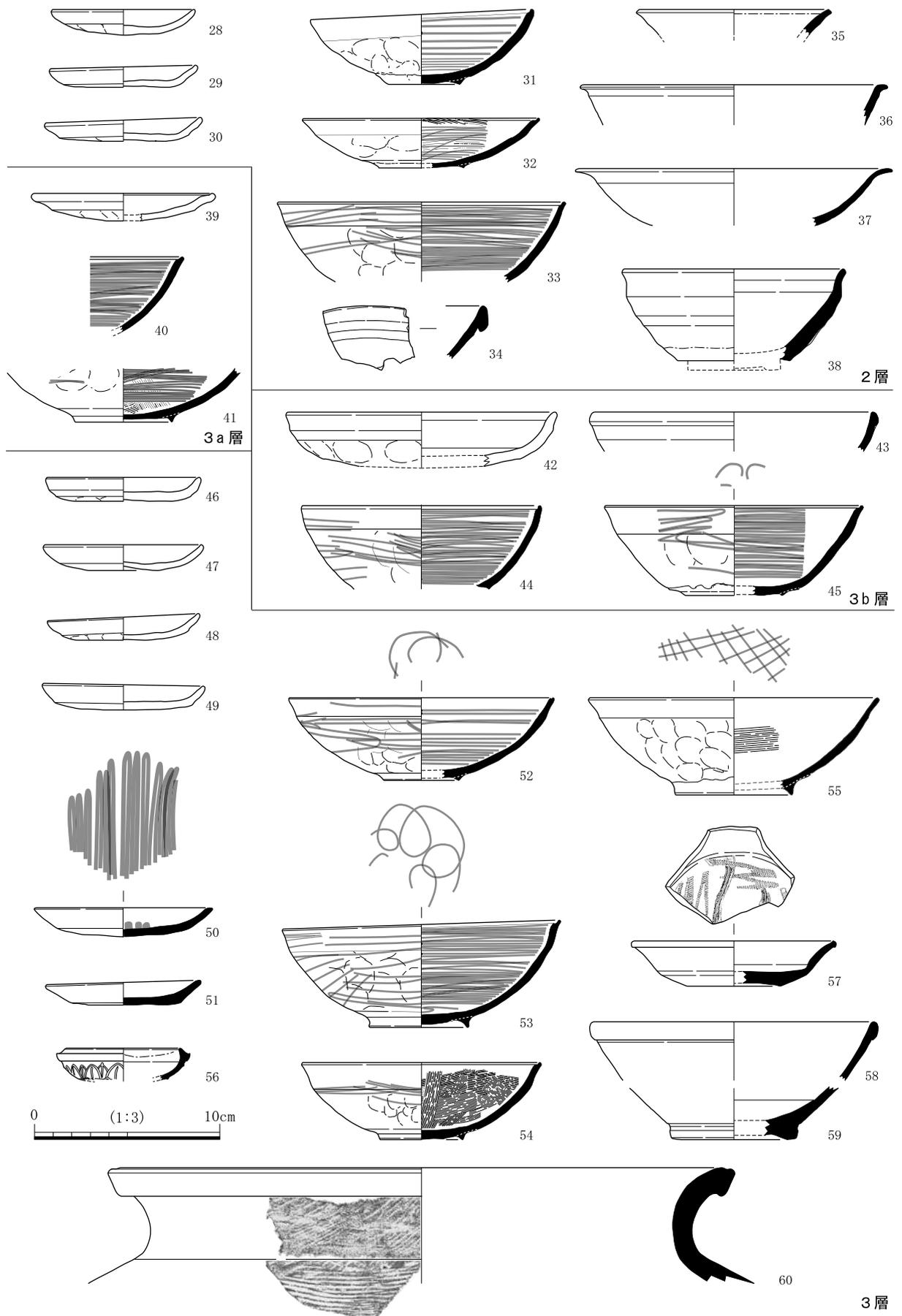


图9 1区遺物包含層出土遺物実測図

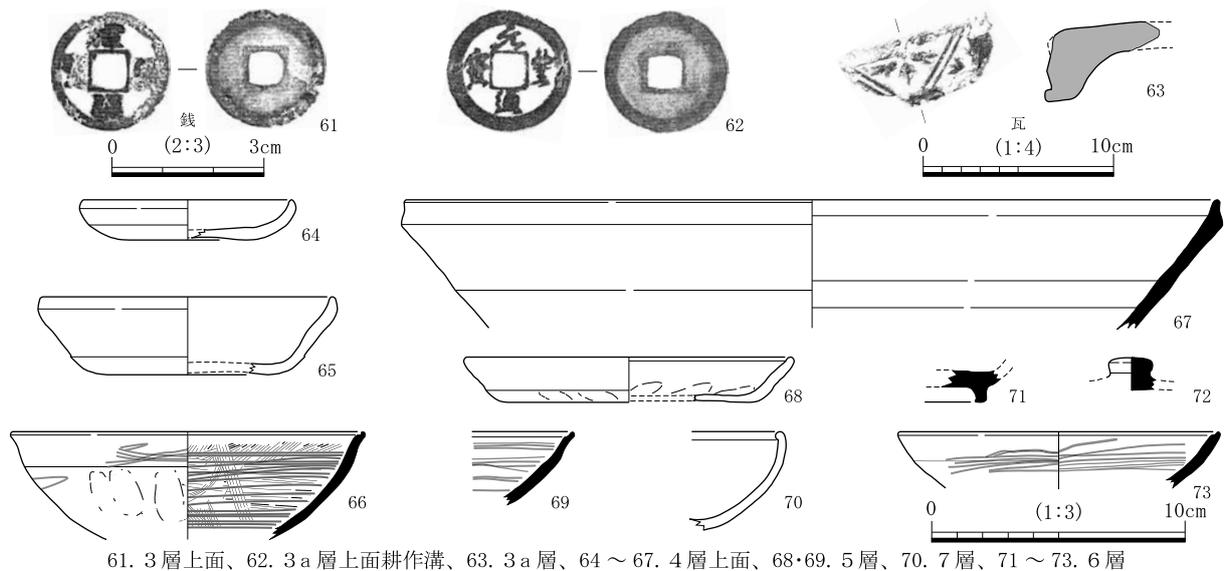


図 10 4区遺物包含層及び耕作溝出土遺物実測図

くが、南半部では7-1層と7-2層に分層できる。7-1層は植物遺体を多く含む黒色の粘土質シルトで、7-2層は黒色シルトである。ただし7-2層は白色シルトを多く含んでおり、7-1層に比べればだいぶ明るく見える。2区の11・12層へつながる地層で、厚さは両者合わせても10cmに満たない。なお7-1層についてはAMSによる放射性炭素年代測定によって地層の年代を求めている。これによって弥生時代中期（詳細については第5章参照）の地層という結果が得られた。7-2層の下には7-3層とした灰色シルト質粘土の薄層が認められる。3区までつづいており、地層のつながりを理解するうえで有効となる。それ以下は8層・9-1層・9-2層・10層とつづくが、それぞれは1区の5b層・6a層・6b層・7層、2区の14～17層に対応する。8層は植物遺体混じりのオリーブ黒色シルトで約17cm、9-1層もオリーブ黒色シルトで約10cmの厚みがある。ただし9-1層については、土色帳と照らし合わせるとオリーブ黒色となるが、見た目はそれよりも明るく灰色に近い。9-2層は8層とよく似た黒色シルト層で約8cmの厚みがある。これ以下は灰色シルトの10層となる。なお、8層と9-2層についても7-1層同様に放射性炭素年代測定を実施した。結果、8層については縄文時代晩期、9-2層については縄文時代後期の地層であるという結果が得られた。

【遺物（図9・10）】2層からは土師器、瓦器、白磁などが出土した。白磁（35・37）には時期差がみられる。35は口禿の皿で、13～14世紀代のものである。37は碗で口縁が著しく外反する。16世紀に位置する。38は瀬戸美濃産の天目茶碗である。

3a・3層からは、土師器、瓦器、青磁、白磁、瓦、銭貨などが出土した。これらはほぼ12～13世紀におさまる時期のものである。39の土師器皿は口縁が強く外反する、いわゆるての字状口縁をもつものである。11世紀後半に属す。63は半裁花菱紋を配す軒平瓦である。瓦当部を折り曲げて作り出し、顎裏面には縦方向のケズリを施す。54の瓦器碗は、ミガキを施さず内面全体に不定方向のハケ調整を施す。57は同安窯の青磁皿で、12世紀後半頃のものである。55は和泉型の瓦器碗である。内面は摩滅が著しいが、ハケ目の痕跡がかすかに確認できる。見込みには格子状の暗文を施す。外面には明瞭な指頭圧痕が残る。60は瓦質の甕である。頸部は右上がりのタタキ、体部外面は横位のタタキを施す。13世紀後半に属すもので、3層の下限がもとめられる。61は元符通宝である。特筆すべきものとして、56の青白磁合子の身がある。体部は強く内湾し、短く立ち上がる口縁をもつ。口縁部内面は露胎とする。

また3層上面で検出した鋤溝から、元豊通寶（62）が出土している。

3 b層からは土師器、瓦器、白磁などが出土した。時期はいずれも12世紀前半におさまる。42は土師器皿である。体部上半に2段のナデを施し、口縁端部は外反する。

4層の上面からは土師器、瓦器、須恵器などが少量出土した。67は須恵器の捏鉢である。口縁は直線的にのび、端部に浅い窪みをもつ。12世紀後半に位置する。

5層からは土師器、瓦器などの小片が数点出土した。13世紀後半のものである。

6・7層からは13世紀代の瓦器椀等に混じって、古代の土師器杯（70）や須恵器の杯（71）・蓋（72）等の小片が数点出土している。いずれも混入品と考えられる。

3.7区

4区の西側に接する調査区で、4区と同じく南端を府道門真守口線までとする。層序は基本的に4区と同じである。

北方の層序は図5の4区②と同様で、2層の下に3 b層（4区でいう3 a層）とした灰オリーブ色のシルト含む細～極細粒砂が約10cmあり、その下にオリーブ黒色の細粒砂含むシルト（4層）が約20cm、その下に灰色の粗～細粒砂（5層）とつづく。3 b層は北側に向かうにつれてシルト質へと変化する。この3 b層上面で4区北端部と同様の耕作溝を検出した。

中央部以南でも基本的に3 b層—4層—5層という堆積状況は変わらないが、南半部の西寄りには3 b層の上に土器片を多く含む黄褐色砂質シルト（3 a—2層）が薄く認められる。これは4区ではみられない地層である。次節で報告する大溝（782溝）はこの3 a—2層上面で検出している。また4区寄りの一部には、3 a—2層の上に3 a層が認められ、さらにその上に4区の2層に相当すると考えられる1層（北半部での名称は2層）が認められる。建物跡や井戸・土坑など多くの遺構は、3 a—2層を除去した3 b層（4区でいう3 a層）上面での検出となる。なお遺構面が西に向かって徐々に高くなっているため、上記の1層・3 a層・3 a—2層は西壁際では認められない。現代盛土層除去後の面が直ちに3 b層となっている。3 b層は中央部西壁付近がもっとも厚く、50 cm程の厚みをもつが、南に向かって徐々に薄くなっており、南端部では10 cm程度となる。府道を挟んで南側に位置する8区の2層に対応すると考えられる。3 b層掘削後の4層上面では農具の痕跡や浅い溝状の遺構などを検出した。

調査は4層上面で終了したため、それ以下の地層については、結果的に深掘りを行うこととなった789井戸の壁面で観察した。4層の下には洪水砂層である5層が約28 cmの厚さであり、その下にオリーブ黒色のシルト（6 a層）とつづく。厚さは約24 cmで、植物遺体や炭、シルトの小偽礫を多く含んでいる。また上部には極細粒砂～シルトのラミナが認められる。その下には同じく植物遺体や炭、シルトの小偽礫を多く含む黒褐色シルト（6 b層）が約16 cm堆積する。この6 a層と6 b層が4区の6層上部に対応する。この下には植物遺体・炭を含む黒色のシルト～粘土（7層）がある。厚さは約18 cmである。おそらく4区の6層下部に相当する地層であり、変形構造によって上半と下半とに分層できると考えられるが、そこまで詳細な観察はできていない。つづく8 i層は極少量の極細粒砂を含む黒色のシルト～粘土である。上半は植物遺体を多く含んでおり、上下に分層できる。それぞれ4区中央部で確認された7—1層と7—2層に対応すると考えられる。8 ii層は灰色のシルト～粘土の薄層で、4区の7—3層、2区の13層に対応する。

9層から12層は、それぞれ4区中央部（図5の4区③）の8層・9—1層・9—2層・10層に、2

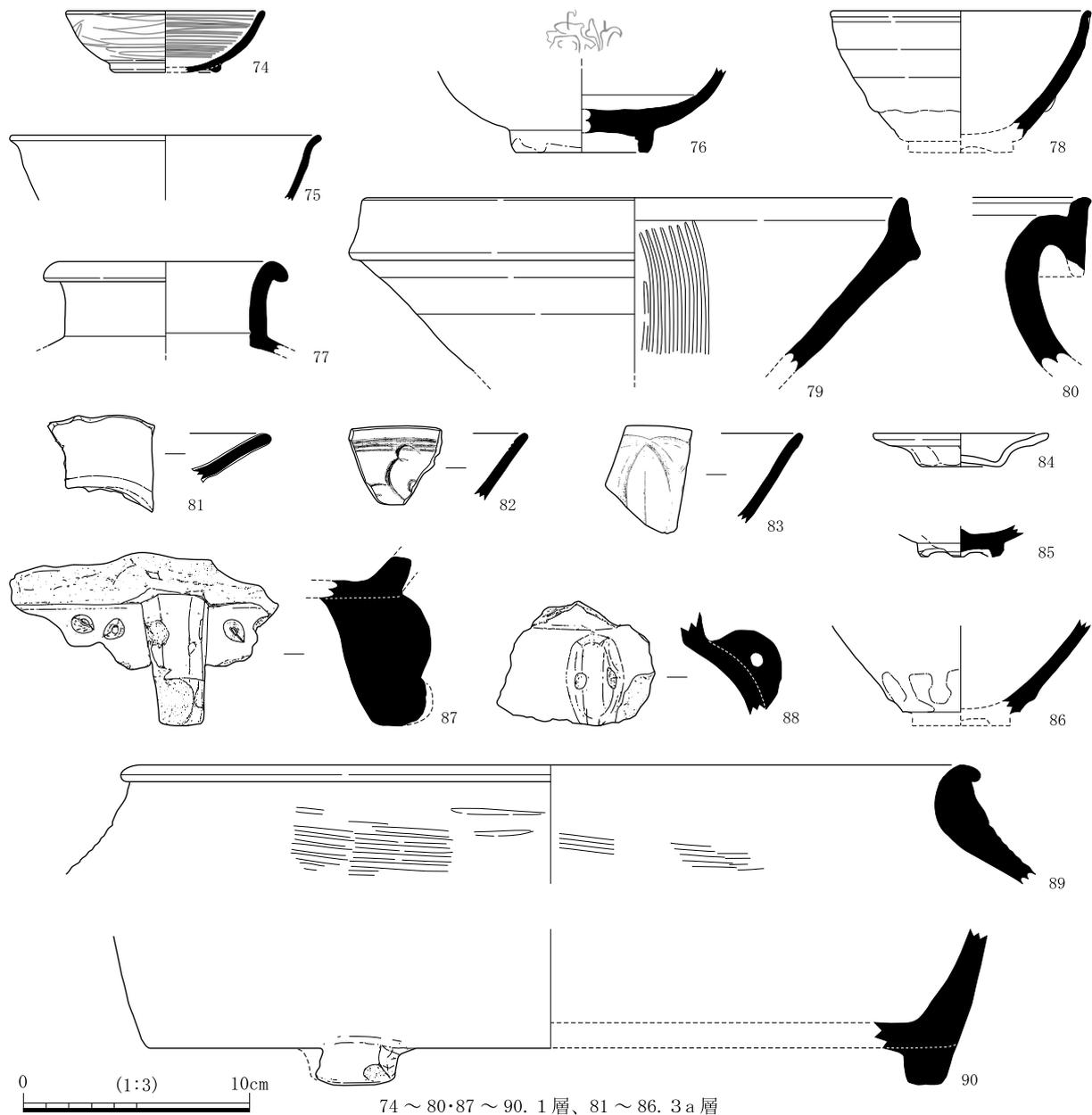


図 11 7区遺物包含層出土遺物実測図

区の14～17層に対応する。9層は黒色のシルト～粘土で、植物遺体・炭を含んでいる。厚さは約16cmである。10層はオリーブ黒色のシルト～粘土で、約12cmの厚みがある。上面は水平でなく、変形構造が認められる。11層は黒色のシルト～粘土で約10cm堆積する。12層はオリーブ黒色のシルト～粘土である。

【遺物（図11～13）】1・2層からは土師器や瓦器のほか、青磁、白磁、瓦や中・近世の陶磁器類など多種の遺物が出土した。74はやや小型の瓦器碗である。内面には丁寧なナデとミガキを施す。78は瀬戸美濃産の天目茶碗である。89は瓦質の甕で、体部外面に横位のタタキを施す。15世紀末～16世紀初頭に属す。124は連珠紋軒平瓦で圈線をもつ。125は単弁八葉蓮華紋軒丸瓦で雌弁帯を有する。その他に12～13世紀頃の白磁四耳壺（77）や、瓦質の茶釜（88）なども出土している。

3a層からは土師器、青磁、白磁などがわずかに出土した。81は青磁皿である。緩やかな波状の口縁をもち、釉を厚くかける。16世紀前半に属す。84は土師器皿である。体部下半に指頭圧痕が残り、

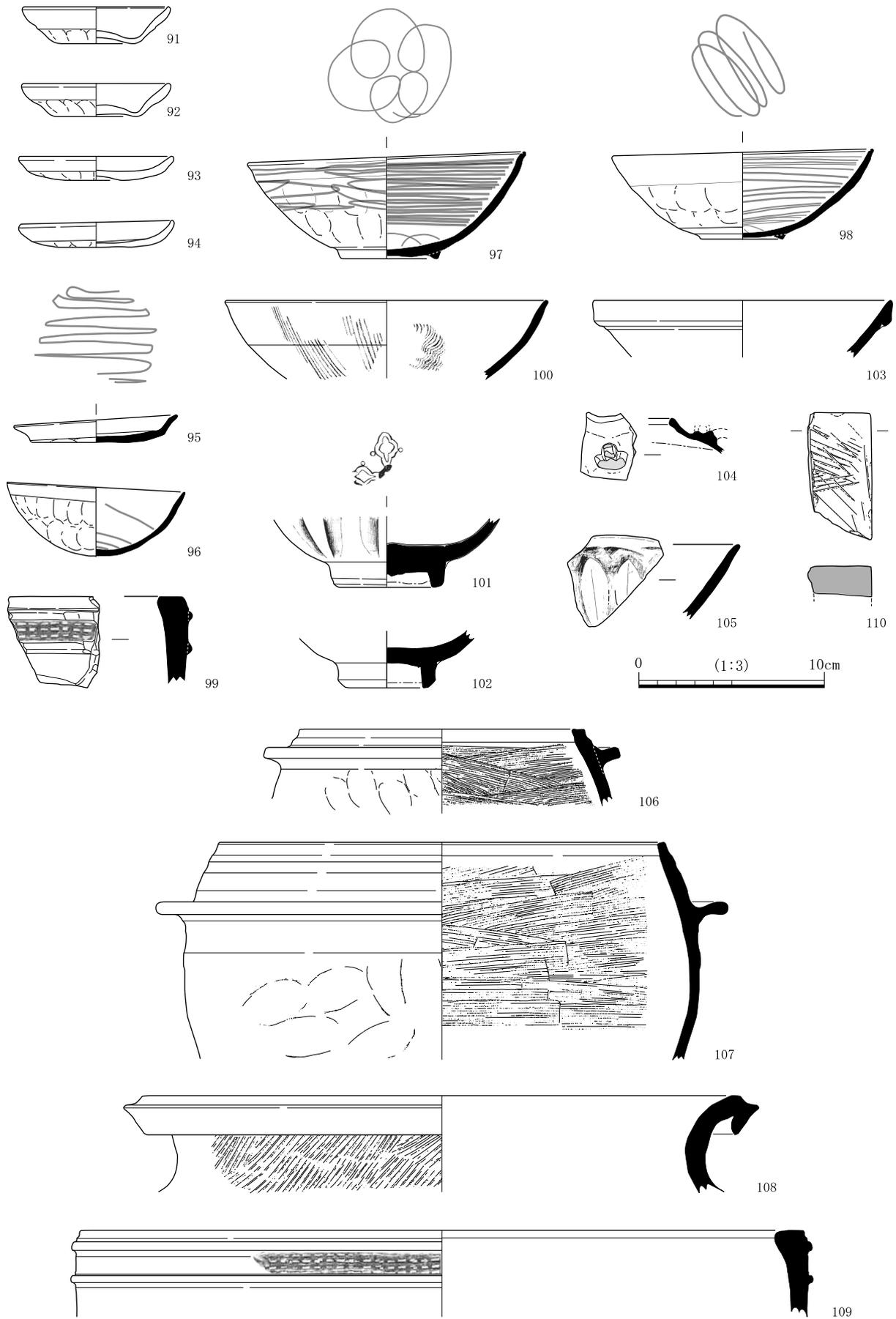
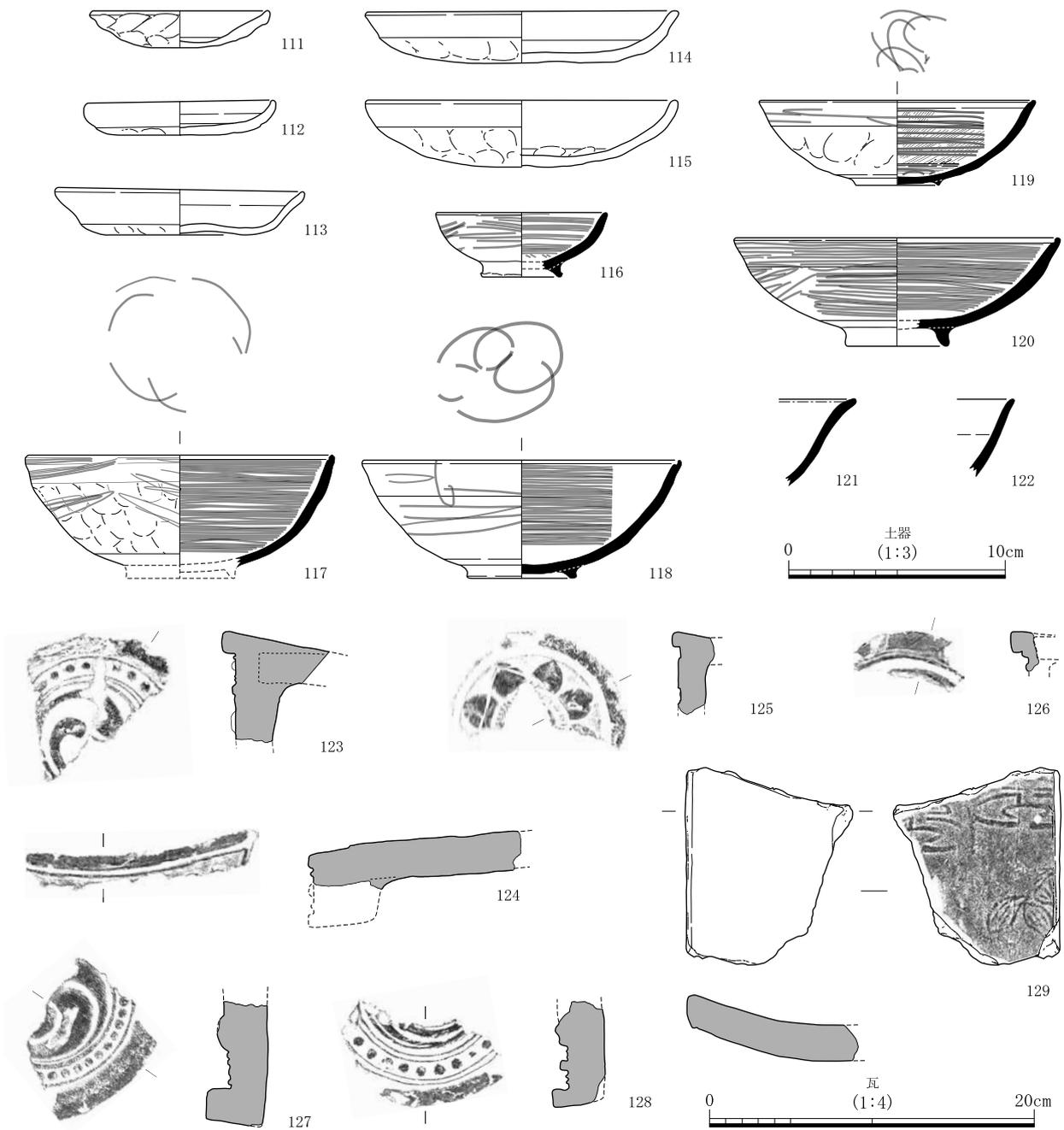


图 12 7区3a-2层出土遗物实测图



111～122. 3b層、123・124. 1層、125・126. 2層、127～129. 3a-2層

図13 7区3b層出土土器と各遺物包含層出土瓦実測図

口縁部は外反する。14世紀後半のものである。85は割高台の白磁皿で、見込みに重ね焼きの痕跡がみられる。86は瀬戸美濃産の天目茶碗である。

3a-2層からは土師器、瓦器、須恵器、青磁、白磁、砥石、瓦などの遺物が多量に出土した。これらの時期は、12世紀中頃～14世紀前半におさまる。91は14世紀前半の土師器皿である。口縁端部には点々と煤が付着する。107は瓦質の羽釜である。頸部は内傾し外面は段を有する。体部内面には横位ハケ調整を施す。14世紀中葉頃のものである。108は須恵器の甕である。口縁部は強く外湾し、頸部外面に右上がりのタタキを施す。13世紀中葉に属す。129は平瓦である。凸面には曲線を組み合わせた幾何学的な図柄と3枚の複葉のような紋様のタタキを施す。特筆すべきものに104の白磁水注がある。器壁は薄く緩やかに内傾する口縁をもつ。頸部外面に装飾を施した痕跡が残り、内面は露胎とする。

3 b層からは土師器、瓦器、青磁などが出土した。土師器皿、瓦器椀は、ほぼ12～13世紀におさまる。114・115は大型の土師器皿である。114は外傾する口縁をもち端部は外反する。12世紀初頭に位置する。117・118の瓦器椀は、内面にやや密なミガキを施す。12世紀前半のものである。121は白磁碗で、口縁部は釉剥ぎとする。その他に116のミニチュア瓦器椀が出土している。

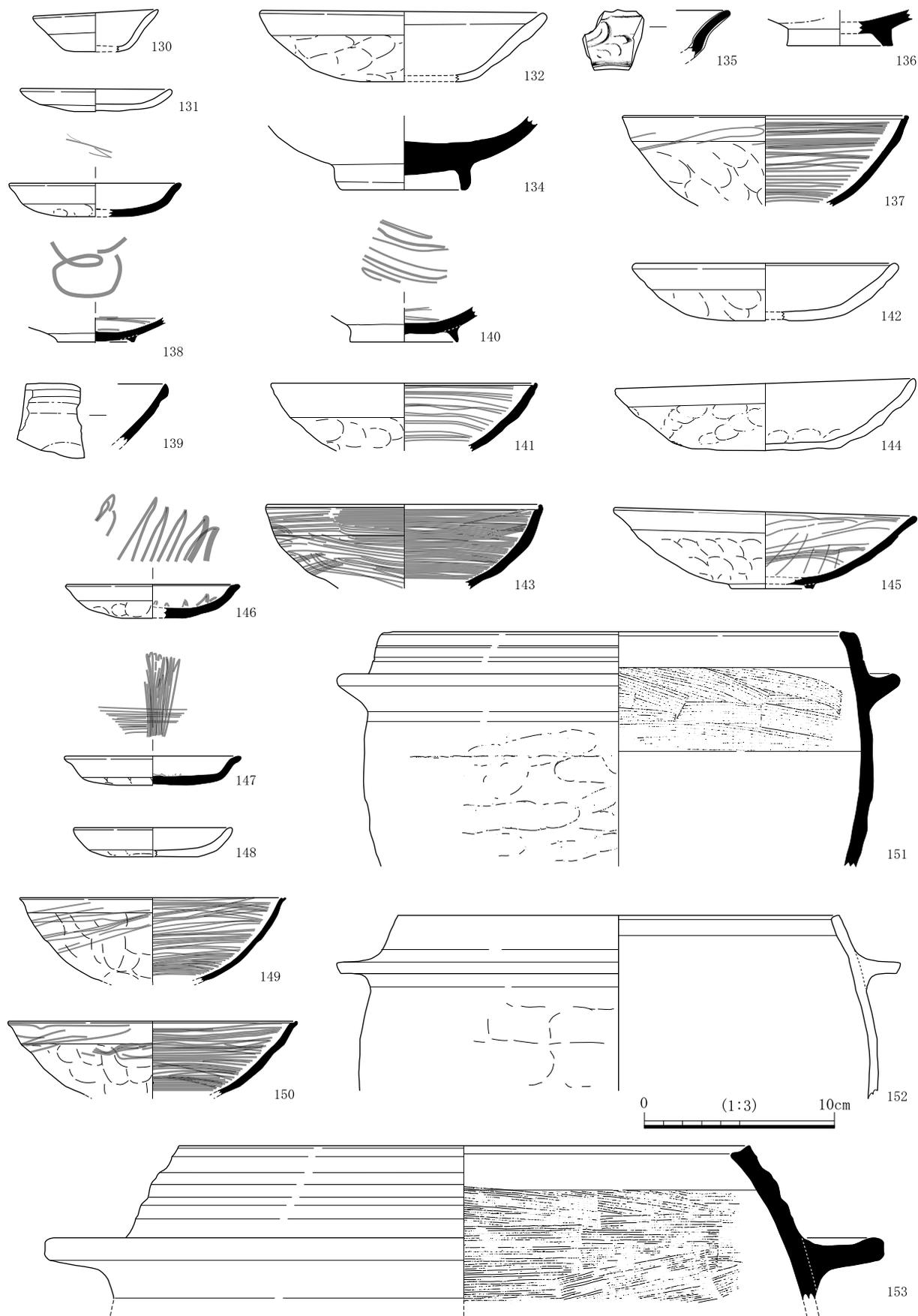
4. 2区

府道門真守口線を挟んで4区の南側に位置する調査区である。水路によって他の調査区とは分断されており、1区同様に調査に入るまではかつての水田の状態をとどめていた。

最上層は現代の水田耕土層（1層）であり、これを除去すると2層の中粒砂～細礫混じり灰色砂質シルトとなる。約16cmの厚みがあり、これを除去した3層上面で溝やピット等多くの遺構を検出した。3層は極細～中粒砂を含む褐灰色の粘土質シルトであるが、Feが沈着しているため、全体がにぶい黄褐色に変色している。約20cmの厚みがある。道路を挟んでいるため検証はできていないが、おそらく4区の3 a層（3層）に相当する地層と考えられる。なお調査では遺構の見落としがないかを確認するため、3層を2回に分けて掘削し、その下半を3-2層とした。この3-2層掘削後の面で下層の溝を数条検出している。つづく4層は極細～中粒砂を多く含む灰オリーブ色シルトで、その下には4区5層に対応する中粒砂～細礫砂層が厚く堆積する。50cm強の厚みがあり、4区での状況と同じくシルトや植物遺体との互層になっている。それを2区では5 i層から5 vi層まで細分した。なお、この5層下面では人の足跡を検出している。

全体の調査は5層掘削後の面で終了したが、地層のつながりを明らかにするため、一部深掘りを行い、18層までを確認した。6層は黒褐～黄灰色のシルト～シルト質極細粒砂で、上方は粗粒化する。7層は黒色の粘土質シルト～シルトで、植物遺体を多く含んでいる。上面は水平でなくやや変形する。6層と7層合わせて約26cmの厚みがある。つづいて9層の植物遺体を含む黒褐色粘土質シルト～シルト質粘土となるが、この間には黄灰色粘土質シルト～シルトの薄層（8層）が認められる。これは4区の6層上部下面で確認された白色シルトにつづく地層である。9層は4区の6層下部上半、3区の10層に対応する地層で、20cm強の厚みがある。10層は上下に分層できる。上方は黒～黒褐色の粘土質シルト～シルトで、植物遺体やラミナが顕著である。また上面に変形構造が観察できる。下方は黒褐色の粘土質シルトで、上方と同じく植物遺体やラミナを含んでいる。4区の6層下部下半、3区11層に対応する。11層は黒～黒褐色のシルト～粘土質シルトで、厚さは約10cmである。3層に分層でき、中間層には植物遺体が多く含まれている。12層はラミナや植物遺体を含む粘土質シルト～シルト質粘土で、厚さは4cm程度であるが、黒褐色の上部と黒褐～褐灰色の下部とに分層できる。13層は4区から3区までつづく灰色の薄層である。14層は植物遺体や未分解の植物繊維を多く含む黒褐～黒色粘土質シルトである。約15cmの厚みがある。縄文時代晩期という測定結果が出た4区8層に対応する。15層は黄灰～褐灰色のシルト質粘土で、上面が激しく変形する。地震の影響であろう。1区6 a層、4区の9-1層に対応する。16層は黒色のシルト質粘土～粘土で、約8cmの厚みがある。縄文時代後期という測定結果が得られた4区の9-2層に対応する。17層は灰色シルト質粘土～粘土である。4区ではこの層までしか確認していないが、2区ではこの下に褐灰～黒褐色の粘土質シルト～シルト（18層）がつづくことを確認した。18層には葦と思われる植物遺体が多く含まれている。

【遺物（図14・15）】2層からは近世の陶磁器類とともに、12～15世紀代の土師器、瓦器、青磁、白磁



130 ~ 137·152·153. 2層、138·139. 3層、140 ~ 142. 3-2層、143. 4層、144. 5層中層
 145 ~ 147. 5層上層(55溝直下)、148 ~ 150. 5層下層(44溝最下層)、151. 4層最下層

图 14 2区遺物包含層出土遺物実測図

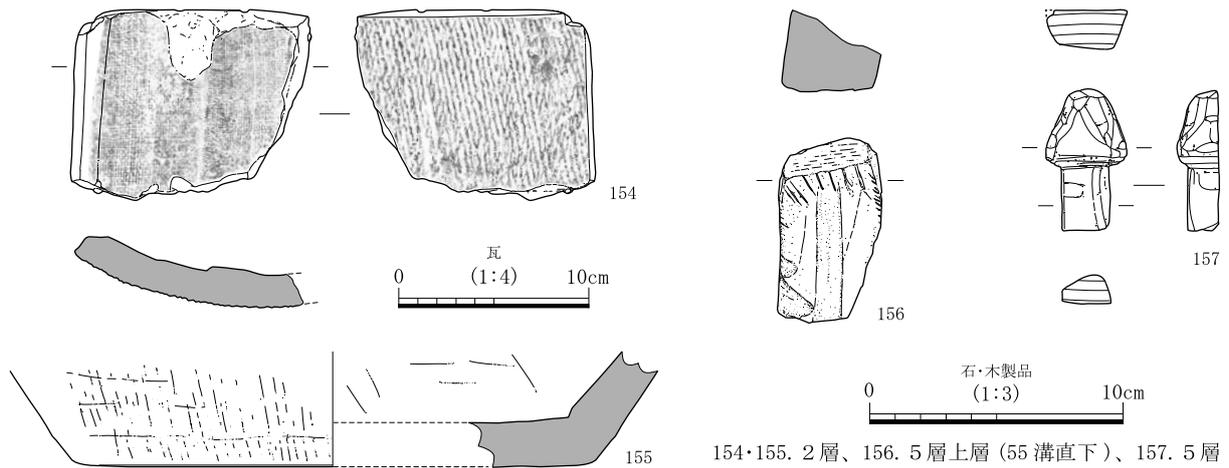


図 15 2区遺物包含層出土瓦・木製品・石製品実測図

や石製品、瓦などが出土した。135は同安窯の青磁皿である。12世紀後半に位置する。155は石鍋である。内面には不定方向の、外面には横位のケズリを施す。154の平瓦は凹面に枳板の痕跡が残る。

3・3-2層からは13～15世紀にかけての土師器皿や瓦器椀、11世紀頃の白磁碗などが少量出土した。いずれも細片である。

4層からは土師器の細片、瓦器などが出土した。151は瓦質の羽釜である。緩やかに内湾する体部をもち頸部は短く内傾する。内面にはハケ調整を施す。15世紀代に位置付けられるもので、4層の下限が求められる。

5層からは土師器、瓦器、木製品、砥石などが出土した。ただし44溝や55溝の底面付近からの出土が多く、遺構の遺物が混入している可能性もある。遺物は15世紀代のものを若干含むが、中心は12世紀中頃～13世紀である。144は土師器皿である。体部外面に右上がりの指頭圧痕が残る。145は和泉型の瓦器椀である。内面に粗いミガキを施す。157は一端を扁平な三角形にケズり出す有頭の木製品である。用途は不明である。

5.5区

用水路を挟んで2区の西側に位置する調査区で、南端を国道163号線までとする。現地表面は水平に造成されているが、約1.5mの盛土を掘削した面は、北端部が最も高く、南側に向かって緩やかに下がっている。また柱穴や土坑などの遺構も北端部には密集するが、中央部や南半部では稀薄になるなどその様相に違いがみられ、層序も異なる。

遺構が集中する北端部(図6の5区①)では、盛土の下がFe・Mnが沈着するオリーブ褐色のシルトを含む細粒砂(1層)となる。厚い箇所では20cm弱の厚みがある。遺物が多く含まれていたため、そのうちの下部を1b層として遺物取り上げを行なった。2a層は暗灰黄色のシルト質極細粒砂で、北側の7区寄りにもみ広がる。厚さは厚いところで約6cmである。2b層は灰オリーブ色の極細粒砂を含むシルト～極細粒砂質シルトで、厚さは約20cmである。この2a・2b層は2区の3層、7区の3b層に対応すると考えられる地層で、この上面で柱穴や土坑等多くの遺構を検出した。つづく3層は灰色のシルト～極細粒砂質シルトで、極細粒砂のラミナが顕著である。この層の上面で溝を数条検出した。2区や7区の4層対応層であり、本来は4層とすべきであったが、2層のつづきで3層と呼んだ。この下は各調査区でみられた厚い洪水砂層となる。他の調査区ではこの層を5層と呼んでいたため、当調査

区でも4層をとばして5層とした。極粗～粗粒砂であるが、上部と下部(5b層)はシルト質の極細粒砂となる。約70cmの厚みがある。6層は2区7層に対応するオリーブ黒色のシルトである。厚さは約15cmで、炭・植物遺体・白色シルトブロック等が多く混じる。7層はオリーブ黒色のシルト(～粘土)で、植物遺体を多く含む。

上記北端部の遺構は、調査区を東西に横断する畦畔を境にしてその南側で突然稀薄となる。また上層の地層もガラリと変わる。調査区中央部周辺(図6の5区②)では、北端部の2a・2b層に替わって3a層(遺物取り上げ名称は3層)が現れる。暗オリーブ色のシルト混じり細～極細粒砂で、Feが多く沈着する。南に向かって徐々に厚くなり、中央部付近で20cm強の厚みとなる。この上面で耕作溝を検出した。北端部の2a・2b層上面で検出した遺構に対応すると考えられる。またこの上には偽礫混じりの灰オリーブ色細粒砂混じりシルト(2層)が約20cmの厚さで堆積する。この2層上面でも耕作溝を検出している。なお上記の調査区を横断する畦畔については、上面が橙色に変色していたために2層や3a層の上面からでも確認できたが、断面の観察によって、つづく4層の上にオリーブ黒色の極細粒砂含むシルトを盛って築いたものであることが判明した。その4層はオリーブ黒色のシルトであるが、極細粒砂の混じり具合によってa・bの2層に分層できる。厚い箇所では約50cmの厚みがある。なお図6の5区②としたあたりから、3a層と4層との間に植物遺体や炭が混じる灰オリーブ色シルト混じり細粒砂(3b層)が堆積し始める。4層の下は洪水砂層である5層となるが、これまでに比べ厚さ20cm程度とだいぶ薄くなる。6層・7層は北端部からつづく地層である。6層は植物遺体を多く含む白色シルト偽礫混じりの黒色シルトで、7層は植物遺体を含むオリーブ黒色のシルト～粘土である。

調査区南半部の層序(図6の5区③)は、基本的に中央部の層序と同じであるが、2層の暗オリーブ色シルトは、砂粒やMnの混じり具合によってa・bの2層に分層した。また2層の上は細～極細粒を含む暗オリーブ色シルト(1層)となるが、南半部南壁際の一部には、2層の上に細～極細粒砂を含む暗オリーブ色シルト(1b層)が広がっている。2層以下は中央部と同様に、暗オリーブ色の細粒砂混じりシルト(3a層)、暗オリーブ色の細～極細粒砂質シルト(3b層)、灰オリーブ色の極細粒砂質偽礫混じりシルト～極細粒砂含むシルト(4a層)、オリーブ黒色シルト(4b層)、炭混じりの偽礫を多く含むオリーブ黒色細粒砂混じりシルト～シルト(6層)、炭・偽礫混じりの黒色シルト(7層)とつづくが、これまで確認されていた洪水砂層である5層は、この南半部には及んでいない。土坑や溝等の遺構は3a層上面で検出される。

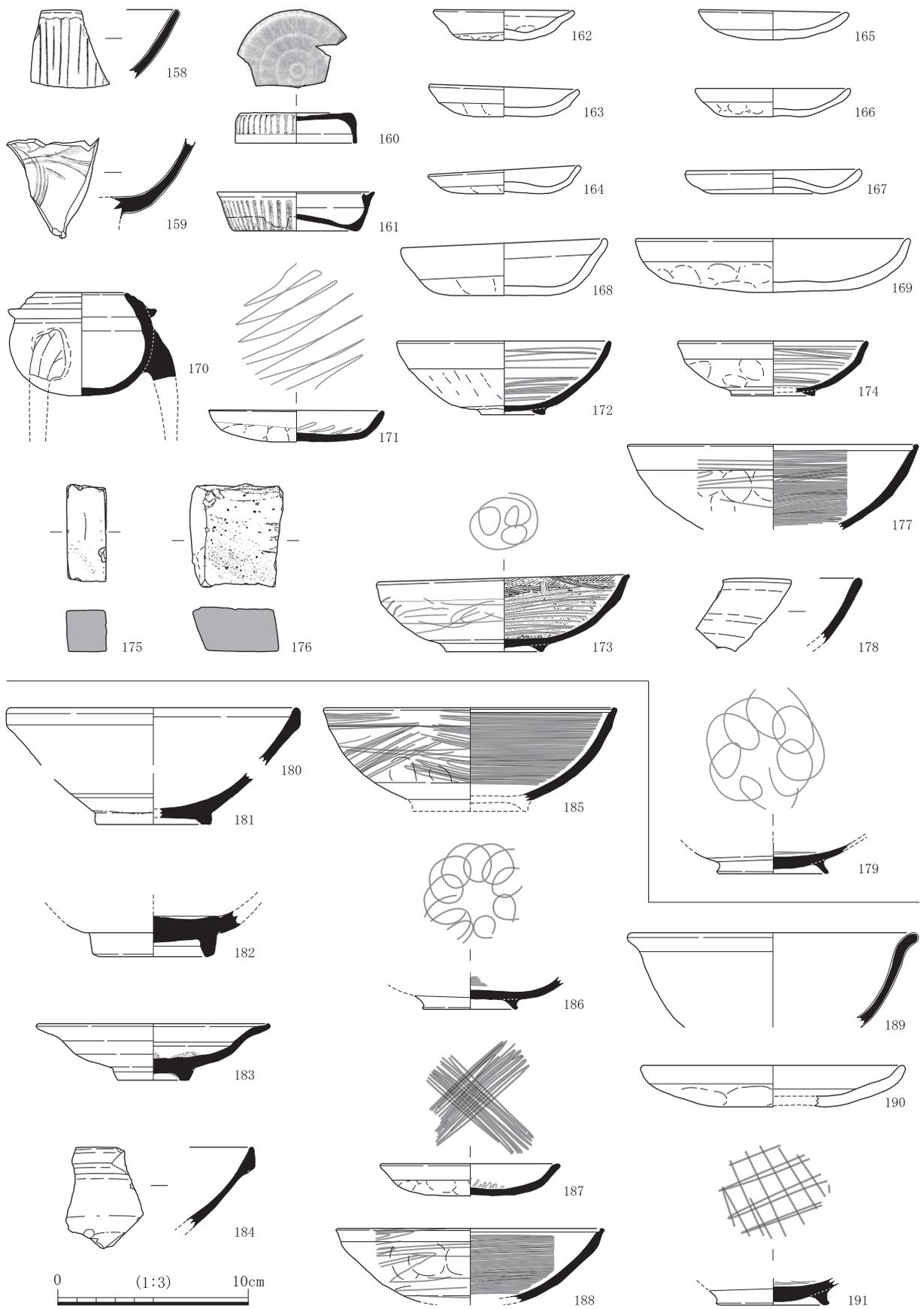
【遺物(図16～18)】北端部1・1b層、南端部と中央部の1層は、近世以降の遺物を包含する。

北端部1・1b層からは土師器、瓦器、青磁、白磁、砥石、銭貨などが出土した。158は青磁碗で、外面に細線蓮弁紋を施す。16世紀頃のものである。173の瓦器碗は、内面のミガキの下に不定方向のハケ目が明瞭に残る。210は元符通寶である。特筆すべきものに合子の身と蓋がある。160は青白磁合子の蓋である。口縁内面は露胎とする。161は白磁合子の身である。底部外面が大きく内面に窪む。口縁部内面と体部外面下半は露胎とする。170は口径4.8cmのミニチュアの足釜である。

北端部2層からは瓦器や青磁などが出土した。178は青磁碗である。口縁端部がわずかに外反する。14世紀後半に位置する。

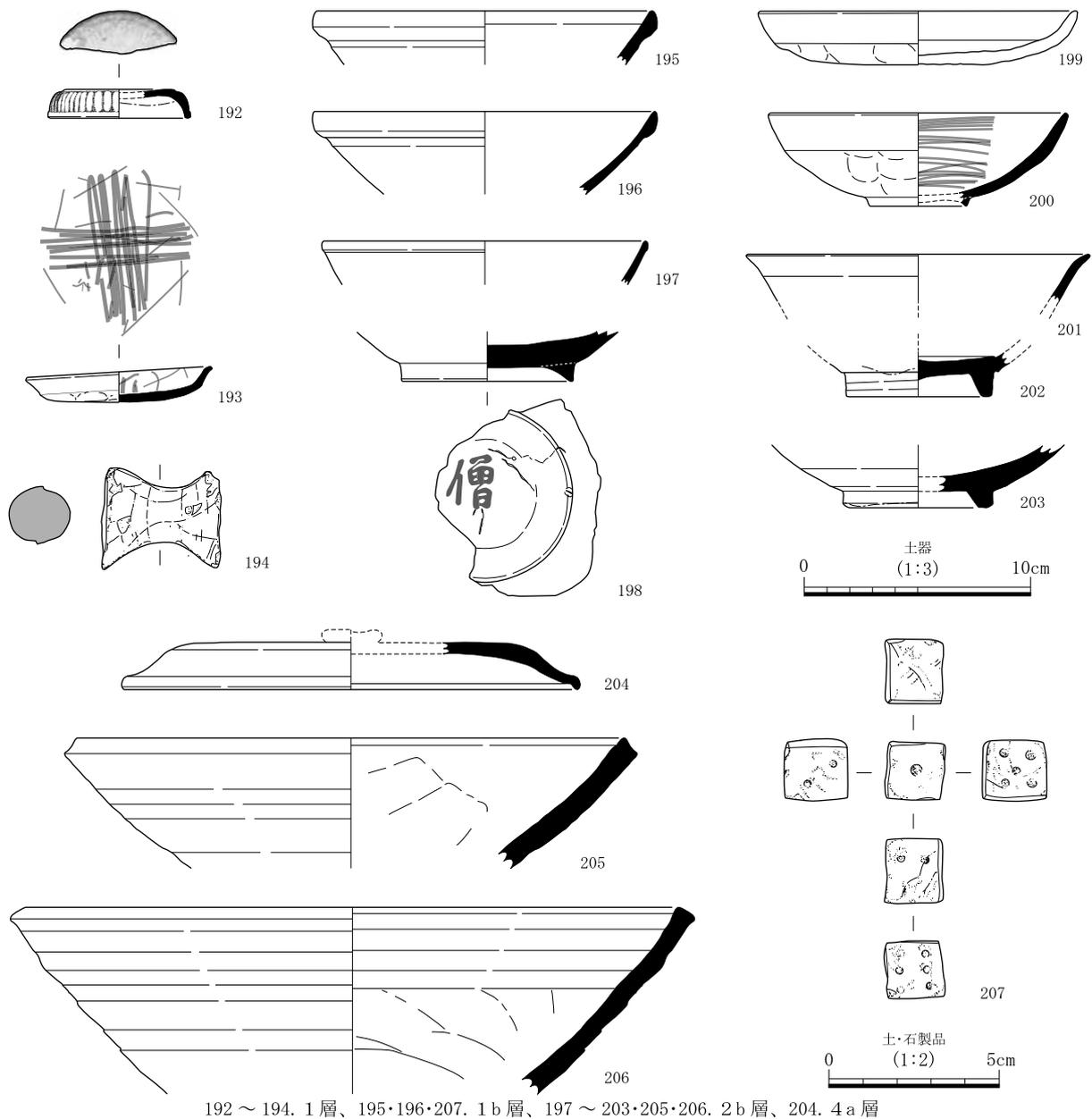
北端部3層からは土師器の細片と瓦器が出土した。179の瓦器碗は、明瞭な連結輪状の暗文を施す。12世紀前半に位置するものと考えられる。

中央部1層からは土師器、瓦器のほか、陶器や白磁、銭貨などが出土した。183は肥前焼の皿で、見



上半：北端部 (158～160. 1層、161～176. 1b層、177・178. 2層、179. 3層)
 下半：中央部 (180～183. 1層、184・185. 2層、186. 2層下部、187～189. 3(a)層、190・191. 4a層)

图 16 5区北端部・中央部遺物包含層出土遺物実測図



192～194. 1層、195・196・207. 1b層、197～203・205・206. 2b層、204. 4a層

図17 5区南半部遺物包含層出土遺物実測図

込みに砂目痕が残る。209は元符通寶である。

中央部2層からは瓦器、白磁、銭貨などが出土した。185と186は11世紀末～12世紀前半に位置する瓦器碗である。185は内面に密なミガキを施し、186は明瞭な連結輪状の暗文を施す。213は天聖元寶である。

中央部3層からは瓦器、青磁などが数点出土した。188の瓦器碗は、内面に密なミガキを施す。12世紀前半に位置する。189は青磁碗である。口縁端部は外反し、全体に厚く釉をかける。14世紀末～15世紀初頭に位置する。

中央部4a層からは土師器、瓦器の小片が出土した。いずれも12世紀代に位置するものである。190の土師器皿は緩やかに立ち上がる体部をもつ。191の瓦器碗は見込みに格子状の暗文を施す。

南端部1層からは瓦器、青白磁、銭貨などが出土した。192は青白磁合子の蓋である。口縁部内面は釉剥ぎとする。194は鼓形を呈す瓦質のトチンである。整形方法は型づくりで、側面には同じ形状の型

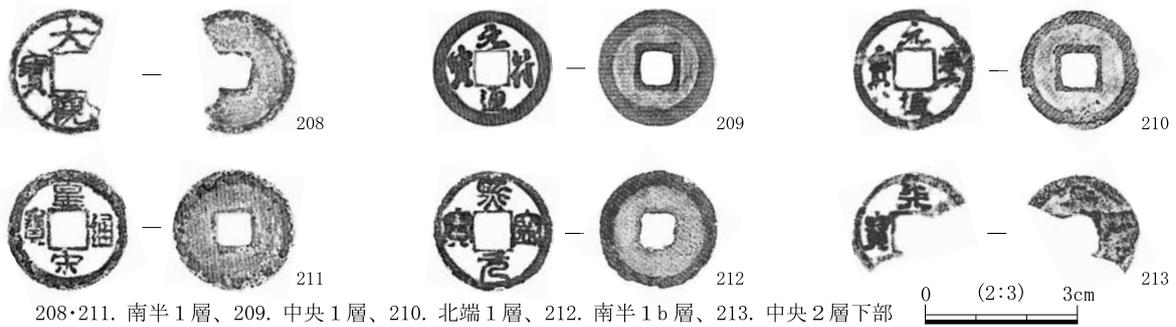


図 18 5区遺物包含層出土銭貨拓影

を両側から合わせた痕跡が稜線状に残る。瓦を焼成する際に使用したものである。その他に大観通寶 (208) と皇宋通寶 (211) が出土している。

南端部 1 b 層からは白磁、石製品、銭貨などが出土した。また 12 世紀代の摩滅した土師器、瓦器の細片も認められた。195・196 は白磁 IV 類の碗である。11 世紀後半～12 世紀前半に位置する。207 は石製のサイコロである。目は丸く窪まし墨を塗布して現されている。212 は熙寧元寶である。

南端部 2 b 層からは土師器、瓦器、白磁、須恵器などが出土した。時期はほぼ 11 世紀後半～12 世紀におさまる。203 は白磁碗で、高台外面まで釉がかかる。特筆すべきものに 198 の山茶碗がある。高台を糸切後に貼り付ける。胎土の砂粒は少なく、底部外面に「僧」の字を墨書する。12 世紀中葉のものである。

南端部 4 a 層からは古代の須恵器蓋 (204) が 1 点出土した。

6. 8 区

5 区北半部の西側に接する調査区である。調査区を東西に横断する畦畔を境にして、北と南ではやや層序が異なる。

北半部の層序は、5 区北端部 (図 6 の 5 区①) と全く同じで、1 層から 3 層、4 層をとばして 5 層の洪水砂層となる。ピットや土坑等の遺構は 2 層上面で検出した。

南半部の層序も 5 区の中央部 (図 6 の 5 区②) と全く同じであるが、調査段階で付した層名が 5 区とは異なる。5 区で 2 層としたものを 8 区では 1 層とし、次の 3 a 層を 8 区では 3 層、4 a・4 b 層は合わせて 4 層とした。

【遺物 (図 19)】北半と南半の 1 層は、近世以降の遺物包含層である。

北半 1 層からは陶磁器類と 13 世紀中葉の土師器皿 (214)、瓦器碗 (215) などが出土した。

北半 2 層からは土師器、瓦器、白磁などが少量出土した。219 の瓦器碗は内面にやや簡略化したミガキの下にハケ目が残る。12 世紀末～13 世紀初頭に位置するものである。220 は白磁皿である。体部下半を釉剥ぎとする。

5 層からは土師器、瓦器、木製品、石製品などが出土した。12～15 世紀前半のものを含むが、中心は 13～14 世紀である。226 は和泉型の瓦器碗である。高台が消失しミガキが簡略化した 13 世紀末～14 世紀初頭に位置するものである。228 は連歯下駄である。平面形は楕円形を呈し、円形の緒穴をあける。緒穴の前には指の圧痕が 2 つあり、右側が縦長の楕円形を呈することから右足用と考えられる。その他に 224 の石鍋の小片がある。

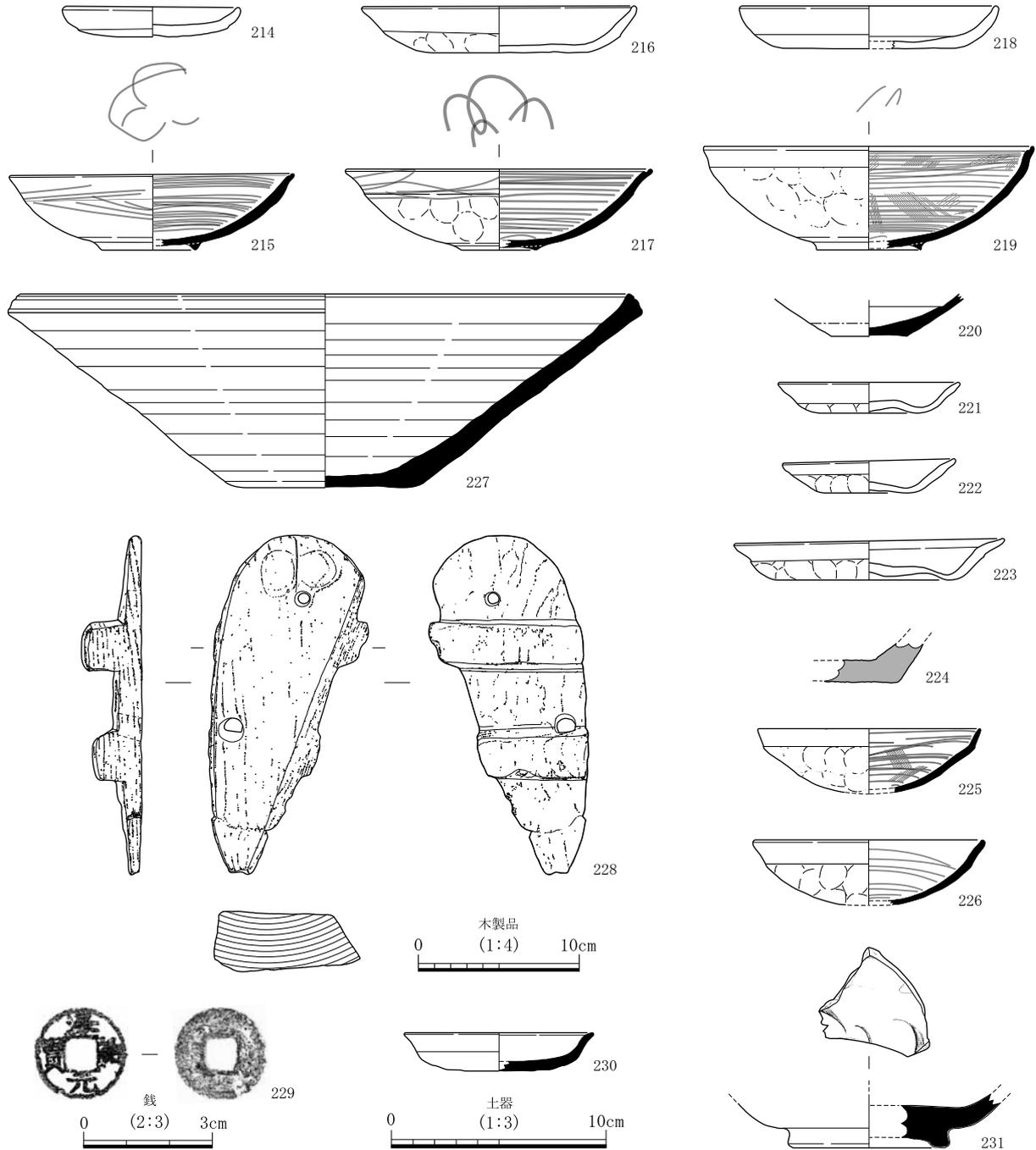
南半 1 層からは淳化元寶 (229) が出土した。

南半3-1層からは瓦器、青磁などが出土した。231は12世紀後半頃の青磁碗である。畳付けや高台内面まで厚く釉がかかる。見込みに劃花紋の紋様を刻む。

7.3区

5区南半部の西側に接する調査区で、03-2調査地の中ではもっとも南側に位置する。

調査区の北方、中央部、および南東隅部には若干高まりが残っており、上層の層序には若干の違いがみられる。特に南東隅部(図6の3区①)には、これまでの調査区ではみられなかった厚い砂が堆積するなど、他の地点とはやや様相を異にする。ここでは盛土を除去すると南高まり1層とした暗灰黄色の



214～228：北半(214・215. 1層、216・218. 2層上面、217・219・220. 2層、221～228. 5層) 229～231：南半(229. 1層、230・231. 3層)

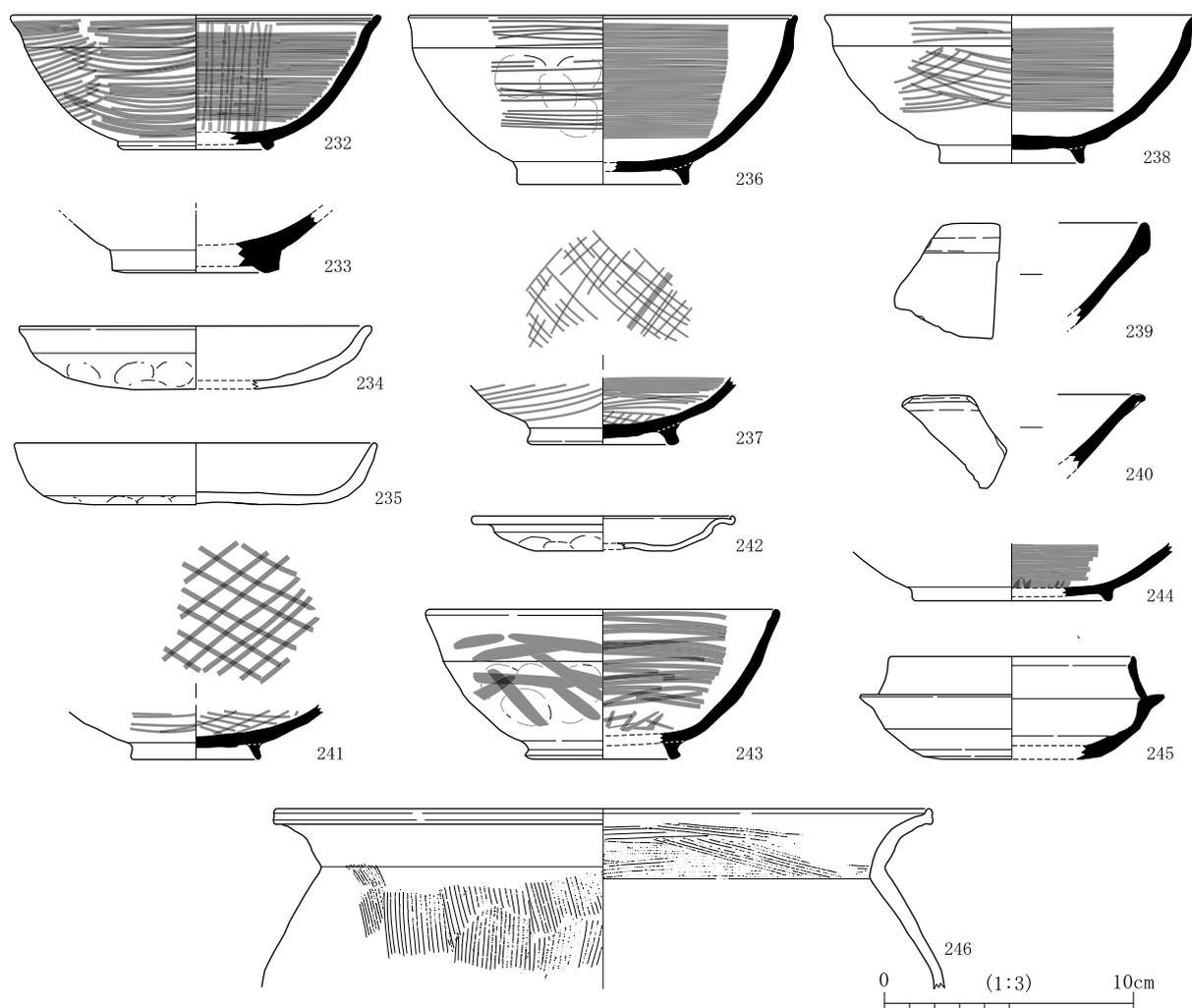
図19 8区遺物包含層出土遺物実測図

シルト質細～中粒砂がみられる。厚さは約 16 cm で、下部は砂質、上部ほどシルト質となる。この下が上記の厚い砂層となる。南高まり 2 層としたもので、約 45 cm の厚みをもつ。そのうちの上部約 5 分の 4 を i 層とし、下部の 5 分の 1 を ii から iv の 3 層に分層した。i 層は黄褐色の極粗～粗粒砂で、斜交ラミナ顕著である。また下部には逆グレーディングがみられる。ii～iv 層も基本的に砂層であるが、植物遺体やシルトの混じり具合などにより細分した。ii～iv 層は 5 区の 3 b 層につながる地層と考えている。この南高まり 2 層は、高まりの周辺で急激に薄くなり確認できなくなる。高まりから外れた箇所 4 層上面で僅かに確認できた砂層を 3 層とした。なお南高まり 2 層掘削後の面では農具の痕跡や溝を検出している。つづく 4 層は 5 区の 4 a・4 b 層に対応すると考えられる地層で、約 45 cm の厚みがある。調査区全体で確認できる。上部と下部とに分かれ、それぞれさらに上半と下半とに分層できる。上部上半は黒褐色の極細粒砂質シルトで、植物遺体が混じる。上半と下半との層界面は大方明瞭だが変形を受け凹凸がみられる。上部下半は極細粒砂混じりのオリーブ黒色粘土質シルトで、ところどころに青いビビアナイトがみられる。下部上半はオリーブ黒色のシルト質極細～細粒砂で、細砂のラミナやレンズ状細粒砂が挟在する。下部下半は中～粗粒砂とシルト質細粒砂の互層である。

南高まり部周辺では 5 層から 7 層は確認できない。4 層の下が直ちに 8 層となる。8 層は黒色粘土質シルトで、植物遺体のラミナを多く含んでいる。灰色粘土質シルトも混じる。5 区の 6 層に対応する地層で、厚い箇所約 12 cm の厚みがある。9 層は 2 区の 8 層からつづく灰白色粘土質シルトの薄層である。土色帳と照らし合わせると、オリーブ黒～灰色、あるいは黒褐色となるが、見た目は明るく灰白色に近い。10 層は黒色粘土質シルトで、2 区の 9 層、5 区の 7 層に対応する。葦と思われる植物遺体のラミナを多く含む。11 層は 2 区 10 層に対応する地層である。植物遺体を含むオリーブ黒色のシルト質粘土で、上面に変形構造がみられる。10・11 層合わせて約 17 cm の厚みがある。つづく 12 層は植物遺体を含む黒～黒褐色の粘土質シルトであるが、植物遺体の混じり具合によって a～c の 3 層に分層でき、b 層はさらに細かく分層できる。a～c 層合わせて 12 cm 程の厚みがある。13 層は 4 区からつづく灰白色の薄層である。約 2 cm 程度の厚みしかないが、細かく見ると、灰白色のシルトによって黒褐色粘土質シルトが挟まれているような地層であることが観察できる。なおこの 13 層の標高を対応する 2 区の 12 層と比較すると、3 区側が 37 cm ほど低い。

これ以下は 14 - 上層・14 - 中層・14 - 下層・15 層・16 層とつづく。それぞれは 2 区の 14 層以下に対応する。14 - 上層は植物遺体を含む極細粒砂混じりの黒色粘土質シルトである。14 - 中層は黒色の粘土質シルト～シルト質粘土で、上面に激しい変形構造がみられる。14 - 下層は黒色シルト質粘土、15 層は黒～黒褐色のシルト質粘土、16 層は黒褐色シルト質粘土である。なお 14 - 下層は縄文時代後期の地層という分析結果が出た 4 区 9 - 2 層に対応すると考えられたため、放射性炭素年代測定を実施してその連続性を検証した。結果、3 区 14 - 下層も縄文時代後期の地層であるということが確認された。

以上は南高まり付近の層序であるが、調査区西方では高まり 2 層とした砂層がないため、若干層序が異なる。盛土とともに極細粒砂混じりシルト（1 層）を除去すると、灰オリーブ色の中～細粒砂質シルト（2 層）が現れる。この上面で土坑等の遺構が検出できる。上記のとおり高まり 2 層に相当する砂層（3 層）は広く分布しないため、2 層の下は 4 層となる。4 層は前述のとおり上部と下部とに分層できる。上部は正級化構造を呈する灰色の砂質シルトで、下部は極粗～粗粒砂である。つづく 5 層は薄いシルト混じりの極細～細粒砂層である。これらの砂層を除去した 6 層上面では、不整形な土坑状の窪みが多数検出できる。これは 4 層下面の凹凸が下層部にまで食い込んだためにできたものである。6 層はオリー



232・233. 2層、234～238. 南高まり2層、239. 中央高まり2層、240. 北高まり3層、241. 3層、242・243. 4層、244. 8層上面、245・246. 8層

図20 3区遺物包含層出土遺物実測図

ブ黒色シルトで、厚さは約5cmである。つづく7層は8層の上に薄く広がる極粗粒～中粒砂層であるが、北方の一部のみにみられる地層で、全体に広がるものではない。8層以下の地層については、微妙な違いはみられるが基本的には南高まり部と同じである。

北方のやや高まった箇所でも、他とはやや異なった層序を示している。そこでは4層の上に約20～40cmの厚さで黒褐色のシルト～粘土質シルト（北高まり3層）があり、その上にオリーブ黒色の砂質シルト（北高まり2層）、暗オリーブ灰色の砂質シルト（北高まり1層）がのる。調査区中央部にも同様の高まりがみられるが、これについては次節で報告する。

【遺物（図20・21）】1層からは近世以降の陶磁器類のほか銭貨が出土した。247は元符通寶である。

2層からは黒色土器、白磁が出土した。232は黒色土器の椀である。両面黒色を呈するいわゆるB類で11世紀代のものである。内面に横位の密なミガキを施す。233は白磁IV類の底部である。

3層からは瓦器のほか黒色土器の細片などが出土した。241の瓦器椀は内面に明瞭な格子状暗文を施す。11世紀末～12世紀前半頃のものである。

4層からは土師器、瓦器が出土した。242はての字状口縁の土師器皿である。11世紀前半に位置する。243は和泉型の瓦器椀で、内外面に幅の太いミガキを施しハの字状の高台をもつ。11世紀後半に位置する。

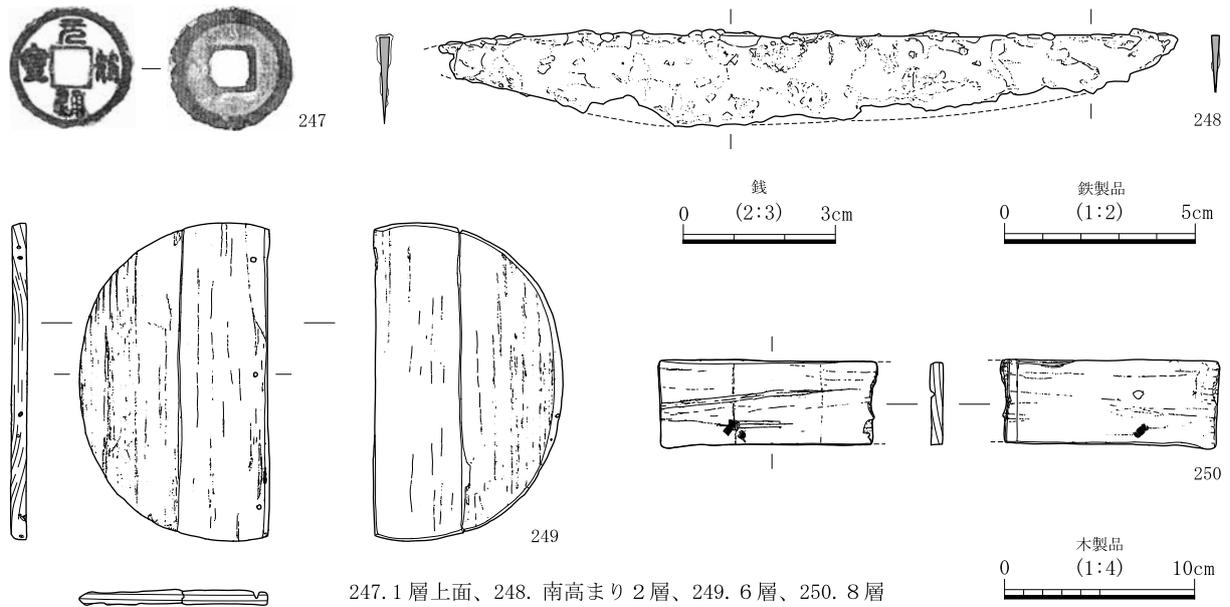


図 21 3区遺物包含層出土銭貨・金属製品・木製品実測図

6層からは土師器、須恵器の細片や木製品などが出土した。249は曲物の底板である。表面には三箇所補修痕と思われる貫通していない穴が認められる。

8層からはA類の黒色土器椀(244)や土師器甕(246)、古墳時代の須恵器杯身(245)などと共に折敷の側板(250)が出土した。

南高まり2層からは土師器、瓦器、金属製品などが出土した。土師器皿(234・235)、瓦器椀(236～238)はほぼ11世紀後半におさまる。234は大型の土師器皿である。緩やかに立ち上がる体部をもち口縁端部は外反する。236と238の瓦器椀は、内面に隙間なく密なミガキを施す。237の瓦器椀は見込みに密な格子状の暗文を施す。特筆すべきものに248の刀子がある。身部長は16.3cmで、緩やかに湾曲する刃部をもつ。棟区はなく茎部まで一直線にのびる。

北高まり3層からは12世紀代の土師器、瓦器の細片と白磁などがわずかに出土した。239の白磁碗は、白磁Ⅳ類で玉縁状の口縁をもつ。11世紀後半～12世紀前半に位置するものである。

中央高まり2層からは陶器、瓦の細片や白磁などが出土した。240の白磁碗は、口縁部が短く外反し、同部外面に沈線を施す。11世紀後半～12世紀前半に位置する。また15世紀代と考えられる備前焼の鉢の細片も混じる。

なお、北端部では5層の細礫～粗粒砂除去後の面で、直径約35cm、高さ約7cmの曲物が1点出土した(写真図版10-6)。

第2節 1区の遺構と遺物

1.2 b i 層上面検出遺構 (図22・23・26)

掘立柱建物1棟のほか、堤、土坑、溝などを検出した。

掘立柱建物1 調査区の北半に位置する。建物の南半部は近世以降に構築された井戸や土坑等によって削られていたため、全ての柱穴を確認することができなかったが、北側の柱列から5.1 m隔てて南側に33ピットを検出していることから、東西3間、南北3間の建物になると復原した。東西方向にやや長い建物で、柱間は東西が2.0 m、南北が1.7 m等間となる。建物の軸は座標北から東に16度振れる。柱穴の多くは直径20 cm程度の円形で、北西隅の32ピットのように腐食した柱が残っているものもある。

なおこの建物の南側にもピットがまとまっている箇所があり、このあたりにもさらに1棟の掘立柱建物が建っていた可能性がある。

1091 堤 調査区の北東隅で検出した堤状に高まった遺構である。03 - 1 調査地の663・45堤からつづく遺構であり、さらに南の調査区外へとびる。本調査区内ではそのうちの約9 m分を検出した。堤は調査区東端の3 b 層上に堆積する灰色極細粒砂～シルトや灰色シルト～細粒砂の上に、シルト混じり細粒～極細粒砂を盛って築いたもので、後述する2 b ii 層上面から計測すると約0.4 mの盛り上がりとな

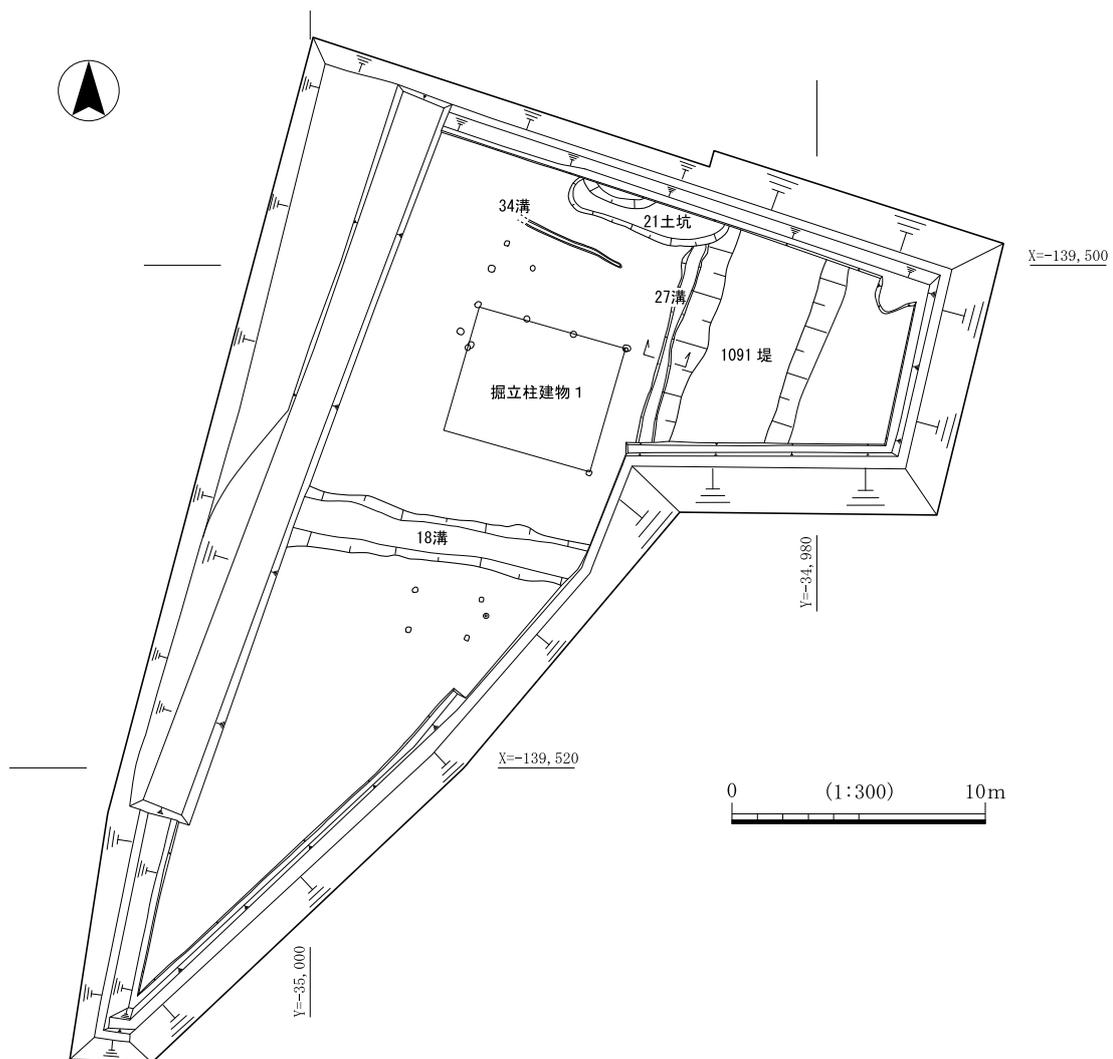


図22 1区2 b i 層上面検出遺構全体平面図

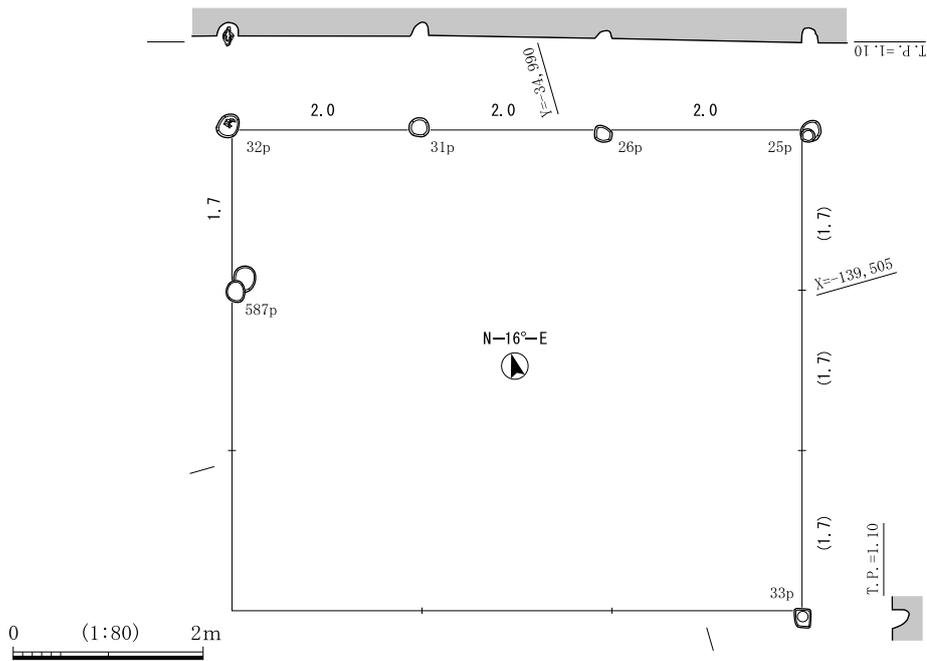


図 23 掘立柱建物 1 平面・断面図

る。03 - 1 調査地の 663 堤でみられたような木組みなどの構造物はない¹⁾。幅は約 5 m で、座標北から東に若干振れる。2 b ii 層上面で検出した土坑群に伴う遺構であるが、2 b i 層上面の段階でも 0.2 m 程度の高まりとして検出できることから、2 b i 層上面でも機能していたと考えている。なおこの堤の東側の堆積は、西側とは様相が異なり、シルトを含む暗灰黄～暗オリーブ灰色の極細～細粒砂となる。ラミナがみられる偽礫が混じっており、水中の土を放り込んだ、あるいは盛ったような状況がうかがえる。調査区のすぐ東側には現在の用水路が道路を挟んで存在している。その前身となる水路あるいは流路の堤防として構築された遺構であった可能性が考えられる。

21 土坑 北壁際に位置する。調査区内での平面形は東西に長い楕円形であるが、調査区外へも広がっており、全体規模や形状は不明である。調査区内での東西最大幅は約 6.5 m で、北壁で計測した深さは約 0.5 m である。1091 堤に一部かかっていることから、堤よりも一時期新しい遺構であると判断できる。

土坑からは 13 世紀代の土師器、瓦器の細片と漆器椀 (264) が 1 点出土した。漆器椀は内外面ともに塗色は黒色で、見込みには赤色で渦巻き状の紋様が描かれている。

18 溝 調査区中央部に位置する。1091 堤にほぼ直交する東西溝である。2 b i 層上面では幅約 2～2.5 m の溝として検出したが、つづく 2 b ii 層上面の調査および断面の観察によって、実際には幅約 3 m となることが確認された。深さは約 0.8 m で、埋土は黄灰色や黒褐色の砂質シルト、あるいはシルト混じり細粒砂などで、灰白色シルトの偽礫が多く混じる。

溝からは土師器、瓦器、瓦などが出土した (261～263・251～253)。262 は瓦質の火鉢、あるいは風炉の獣脚である。両側に付く張り出しには円形の掘り込みを施す。263 は土師器羽釜である。頸部は短く直立し、鏝下半にはナデによる段をもつ。14 世紀頃と考えられる。251～253 は雁振瓦である。

27 溝 1091 堤の西裾に位置する。幅約 0.5～0.7 m、深さ約 0.1 m の溝で、1091 堤と同様に座標北から東に若干振れる。埋土は灰～オリーブ黒色のシルト混じり細粒～極細粒砂である。

34 溝 21 土坑のすぐ南側に位置する。27 溝に直交する向きの溝で、幅は約 0.2 m である。西端は近世以降の井戸により削平されている。

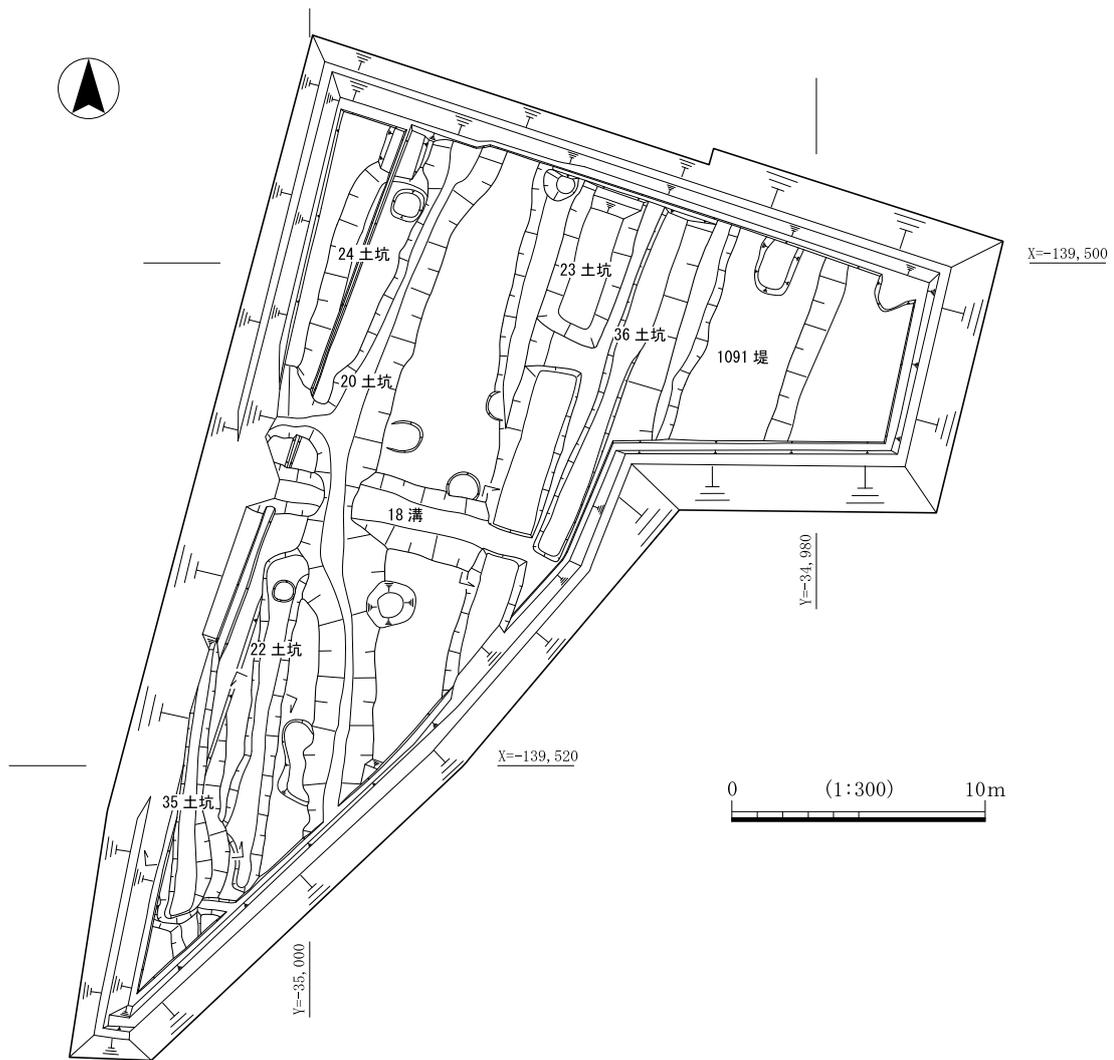


図24 1区2b ii層上面検出遺構全体平面図

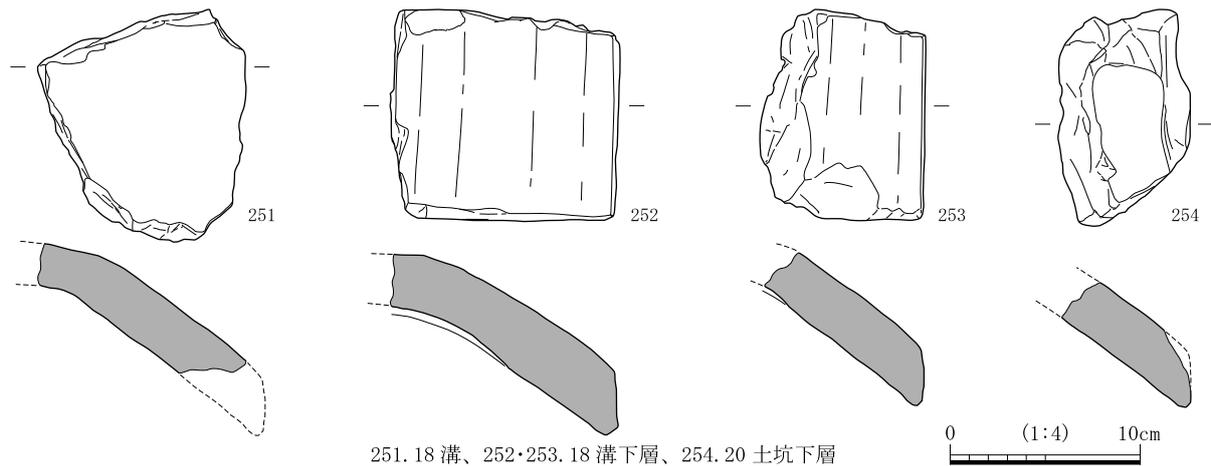
2. 2 b ii 層上面検出遺構 (図24・26・27)

溝状にのびる土坑を多数検出した。西部部ではそれぞれが複雑に重なり合う。

20 土坑 調査区西寄りに位置する。南北方向にのびる土坑で、やや西側に湾曲する。調査区内では約29 m分を検出したが、さらに調査区外へとつづく。幅は約2～3 mで、北壁際では約4.5 mとなる。深さは深い箇所では約1.4 mを測る。一旦遺構の底に降りると、上るのに一苦労するほどの深さであった。なお北壁断面の観察から一度掘り直しが行なわれていたことを確認した。埋土は灰～オリーブ黒色、あるいは黒色のシルト混じり粗粒～細粒砂で、下部には粘質シルトやシルト質粘土の偽礫が多く含まれている。他の土坑とは異なり断面形がV字の溝状を呈するが、流水の痕跡は認められない。ただし底部付近の埋土には中粒砂のラミナや偽礫に変形構造が認められることから、埋戻される段階には滞水していたと考えられる。遺構名称を土坑としたが、本来は濠のような役割を果たしていた遺構であった可能性がある。18溝のすぐ北側で西側へと伸びる土坑と交わる。

土坑からは瓦器、須恵器、青磁、瓦などが出土した(255～260・254)。これらは13～14世紀前半におさまるものである。257は瓦質の火鉢である。直線的な体部と強く外側に折り返す口縁をもつ。258は257と同一固体と考えられるもので、脚部上方にハケ目が残る。254は雁振瓦である。

22 土坑 調査区南半部の20土坑西側に位置する。ほぼ南北にのびる土坑で、長さは約13.5 mを測る。

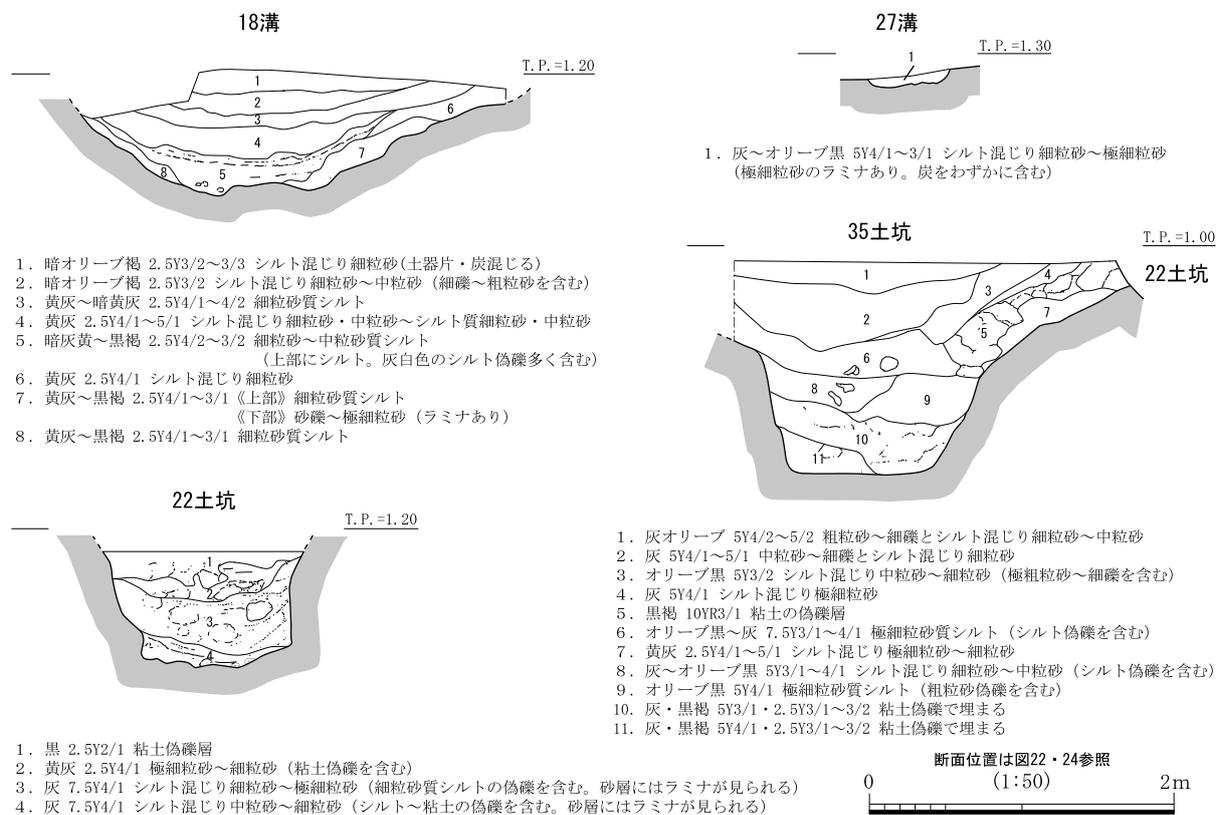


251. 18 溝、252・253. 18 溝下層、254. 20 土坑下層

図 25 18 溝・20 土坑出土瓦実測図

20 土坑のように調査区外へもつづく壕のような遺構ではなく、調査区内で収まる長方形の土坑である。幅は約 1.5 m、深さ約 0.8 m で、ほぼ方形の断面形状を呈する。土坑の底が 4 層以下のシルト層や粘土層にまで達していることから、調査当初は粘土採掘坑、あるいは堤構築のための土取り穴などであろうと考えたが、巢本遺跡全体の調査成果も合わせると、それほど単純な遺構ではなく、湿地の環境を改善するため、つまり周辺地域の乾燥化のために掘削された土坑であった可能性なども考えられる。埋土はシルト混じりの細粒砂などで、多くの偽礫が混じっている。掘削後に直ちに埋め戻されたような状況が読み取れる。

出土遺物は土師器皿、瓦器碗などで(265～268)、いずれも 13 世紀代のものである。265 の土師器皿は、底部中央に焼成前に 2 箇所穿孔を施す。孔の 1 つは 2、3 の孔が重なって出来たものである。268 は 35



1. 暗オリーブ褐 2.5Y3/2～3/3 シルト混じり細粒砂(土器片・炭混じる)
2. 暗オリーブ褐 2.5Y3/2 シルト混じり細粒砂～中粒砂(細礫～粗粒砂を含む)
3. 黄灰～暗黄灰 2.5Y4/1～4/2 細粒砂質シルト
4. 黄灰 2.5Y4/1～5/1 シルト混じり細粒砂・中粒砂～シルト質細粒砂・中粒砂
5. 暗黄灰～黒褐 2.5Y4/2～3/2 細粒砂～中粒砂質シルト
(上部にシルト。灰白色のシルト偽礫多く含む)
6. 黄灰 2.5Y4/1 シルト混じり細粒砂
7. 黄灰～黒褐 2.5Y4/1～3/1 《上部》細粒砂質シルト
《下部》砂礫～極細粒砂(ラミナあり)
8. 黄灰～黒褐 2.5Y4/1～3/1 細粒砂質シルト

1. 黒 2.5Y2/1 粘土偽礫層
2. 黄灰 2.5Y4/1 極細粒砂～細粒砂(粘土偽礫を含む)
3. 灰 7.5Y4/1 シルト混じり細粒砂～極細粒砂(細粒砂質シルトの偽礫を含む。砂層にはラミナが見られる)
4. 灰 7.5Y4/1 シルト混じり中粒砂～細粒砂(シルト～粘土の偽礫を含む。砂層にはラミナが見られる)

1. 灰～オリーブ黒 5Y4/1～3/1 シルト混じり細粒砂～極細粒砂(極細粒砂のラミナあり。炭をわずかに含む)

1. 灰オリーブ 5Y4/2～5/2 粗粒砂～細礫とシルト混じり細粒砂～中粒砂
2. 灰 5Y4/1～5/1 中粒砂～細礫とシルト混じり細粒砂
3. オリーブ黒 5Y3/2 シルト混じり中粒砂～細粒砂(極粗粒砂～細礫を含む)
4. 灰 5Y4/1 シルト混じり極細粒砂
5. 黒褐 10YR3/1 粘土の偽礫層
6. オリーブ黒～灰 7.5Y3/1～4/1 極細粒砂質シルト(シルト偽礫を含む)
7. 黄灰 2.5Y4/1～5/1 シルト混じり極細粒砂～細粒砂
8. 灰～オリーブ黒 5Y3/1～4/1 シルト混じり細粒砂～中粒砂(シルト偽礫を含む)
9. オリーブ黒 5Y4/1 極細粒砂質シルト(粗粒砂偽礫を含む)
10. 灰・黒褐 5Y3/1・2.5Y3/1～3/2 粘土偽礫で埋まる
11. 灰・黒褐 5Y4/1・2.5Y3/1～3/2 粘土偽礫で埋まる

断面位置は図22・24参照

(1:50) 0 2m

図 26 18・27 溝・22・35 土坑断面図

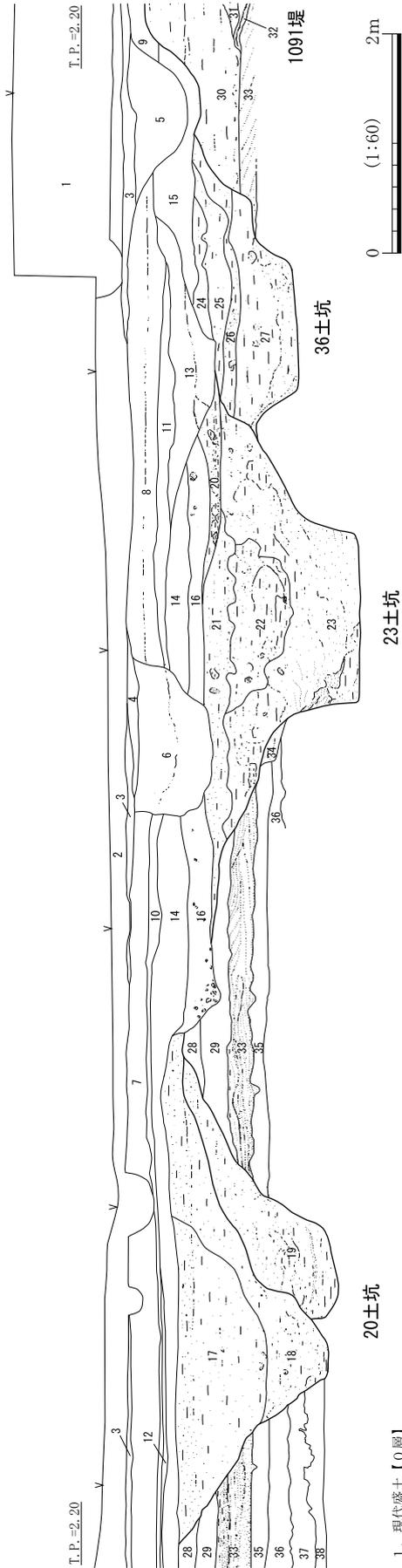
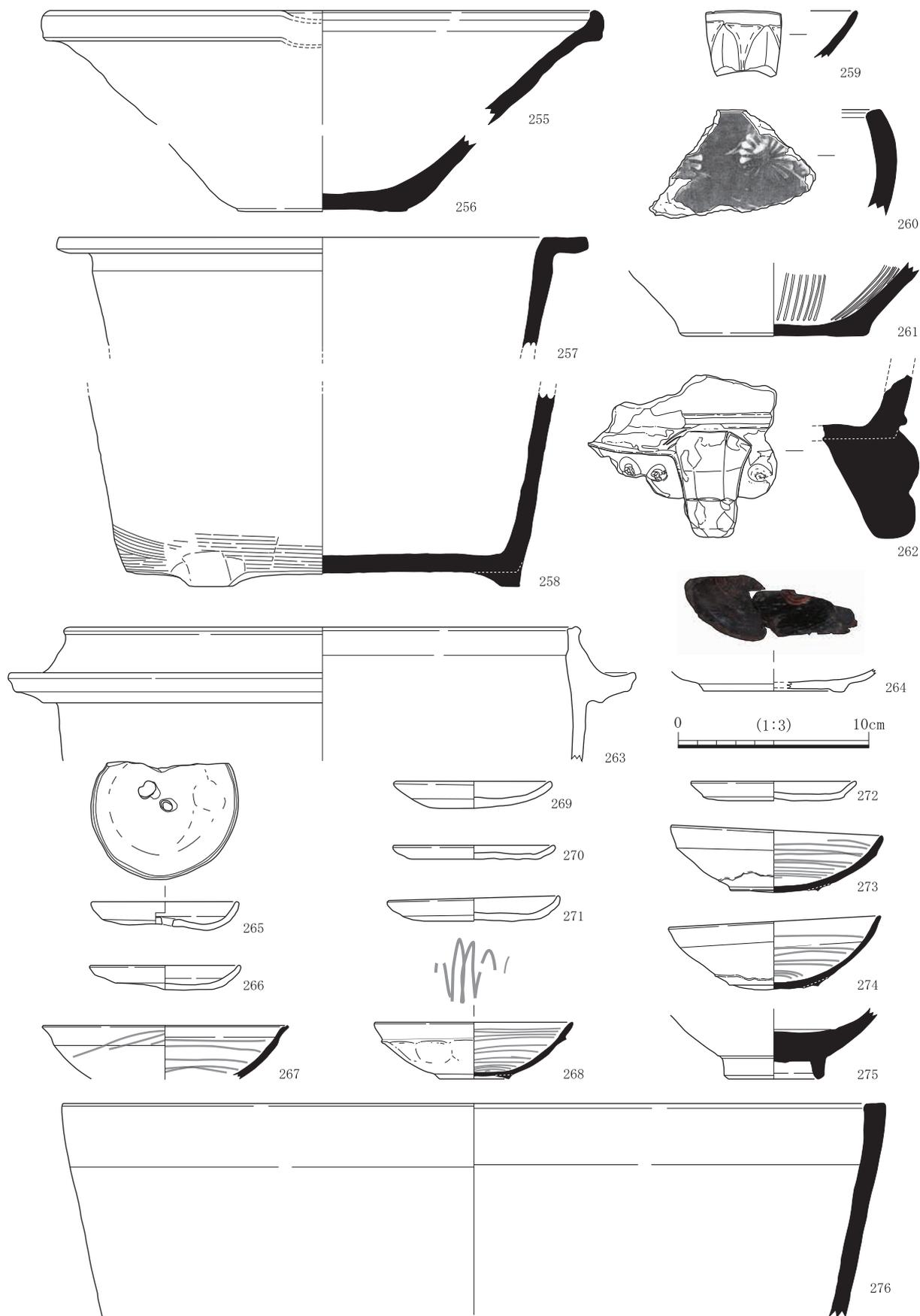


図27 1区北壁断面図

1. 現代盛土【0層】
2. 現代耕土【1層】
3. 暗黄灰 2.5Y5/2 シルト混じり細粒砂～中粒砂（極粗粒砂～砂礫を含む）【2a i 層】
4. におい黄 2.5Y6/3 シルト混じり中粒砂～細粒砂（細礫～粗粒砂と炭化物を含む）
5. 灰 5Y4/1 シルト混じり細粒砂（細礫～粗粒砂と暗色常礫を含む）
6. 灰 7.5Y5/1 シルト混じり粗粒砂～中粒砂（細礫～極粗粒砂を含む）
7. オリープ黒 2.5Y4/3 シルト混じり中粒砂～細粒砂（粗粒砂と炭化物を含む）【2a ii 層】
8. 《上半》オリープ黒 10Y3/1 シルト混じり中粒砂～細粒砂（極粗粒砂～砂礫と炭化物を含む。Mn目立つ）《下半》オリープ黒 10Y3/1 シルト混じり中粒砂～粗粒砂（極粗粒砂～細礫と炭化物を含む。Mn目立つ）【2a ii 層】
9. 黄褐 2.5Y5/2 シルト混じり中粒砂～粗粒砂（極粗粒砂～細礫を含む）
10. 黄褐 2.5Y5/3 細粒砂（中粒砂～細礫と炭を含む）【2a iii 層】
11. 灰 2.5Y4/1 シルト混じり中粒砂～細粒砂（粗粒砂～細礫を含む）
12. におい黄 2.5Y6/3 シルト混じり中粒砂～細粒砂（細礫～極粗粒砂と炭化物を含む）《下半》緑灰色シルト混じり中粒砂～細粒砂（Fe目立つ）
13. 灰オリープ 5Y5/2 《上半》シルト混じり中粒砂～細粒砂（細礫～極粗粒砂と炭化物を含む。Mn層）【2b i 層】
14. 黄灰～暗灰黄 2.5Y5/1～5/2 シルト混じり中粒砂～粗粒砂（細礫～極粗粒砂と炭化物を含む）《下半》シルト混じり粗粒砂～細礫（上半に細粒砂～中粒砂を多く含む）
15. 灰 5Y4/1 《上半》シルト混じり中粒砂～細粒砂（粗粒砂～細礫を含む）
16. 黄褐 2.5Y5/3 シルト混じり中粒砂～細粒砂（細礫～粗粒砂と暗色帯粘土礫を含む）
17. 《上半》灰 7.5Y5/1 シルト混じり中粒砂～細粒砂（細礫～粗粒砂を含む。Fe沈着）
18. 《上半》灰 7.5Y5/1 シルト混じり中粒砂～細粒砂（細礫～粗粒砂を含む。Fe沈着）
19. 《上半》暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混じり粗粒砂～中粒砂（細礫～極粗粒砂、細粒砂礫、炭化物等を多く含む）
20. 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混じり粗粒砂～細粒砂（Fe沈着）
21. 灰 5Y4/1 シルト混じり粗粒砂～中粒砂（シルト混じり粗粒砂、細粒砂礫を含む。ラミナ見られる）
22. オリープ黒 5Y3/1 シルト混じり中粒砂～粗粒砂
23. オリープ黒 10Y3/1 シルト混じり粗粒砂～細粒砂（極粗粒砂～粗粒砂礫とシルト礫混じり粗粒砂を含む）
24. 暗緑灰 7.5GY4/1 細粒砂質シルト
25. 暗オリープ灰 2.5GY4/1 シルト混じり細粒砂（炭化物を含む）
26. 灰オリープ 5Y6/2 シルト混じり細粒砂（シルト混じり細粒砂を含む）
27. オリープ黒 10Y3/1 《上半》細粒砂～中粒砂質シルト（黄白細粒砂を含む）
28. オリープ黒 10Y3/1 シルト混じり 中粒砂～細粒砂（上半ほど粗粒でFeが沈着する。Fe層）【2b ii 層】
29. 灰 7.5Y4/1 シルト混じり粗粒砂～シルト質砂粒砂（炭化物を含む）【3a層】
30. 《上半》灰 5Y5/1 《下半》灰オリープ 5Y5/2 シルト混じり細粒砂～極粗粒砂（1091堤）
31. 灰 7.5Y4/1 極細粒砂～シルト（下部に植物遺体のラミナ見られる）
32. 灰 5Y5/1 細粒砂～細粒砂（下部に植物遺体のラミナ見られる）
33. 灰 5Y5/1 細礫～極粗粒砂（材、植物遺体を含む。上半はラミナ発達 正酸化構造が見られる）【3b層】
34. 灰 7.5Y4/1 シルト混じり粗粒砂～シルト質砂粒砂（炭化物を含む）
35. オリープ黒 5Y3/2 粘土質シルト～極細砂質シルト（上半で二回の逆酸化構造が見られる）【4a i 層】
36. オリープ黒 5Y3/2～3/1 シルト～極細粒砂（上半ではやや腐食層の植物遺体を含み、全体にぼぼをぼぼとする。極細砂で植物遺体のラミナが見られる。下半ではシルトで礫状にブロック化する部分がある）【4a ii 層】
37. オリープ黒 5Y2/1 シルト質粘土（シルト礫と植物遺体を含む。ラミナの変形が見られる）【4b i 層】
38. オリープ黒 5Y2/1 シルト質粘土（植物遺体と炭を含み、植物遺体のラミナを受ける。上層の変形を受ける）【4b ii 層】



255 ~ 260. 20 土坑 (255・258. 下層、257・259. 上層)、261 ~ 263. 18 溝 (261・262. 下層)、264. 21 土坑
 265 ~ 267. 22 土坑、268. 22 土坑と 35 土坑接合、269 ~ 274. 23 土坑 (269 ~ 273. 上層)、275・276. 24 土坑

图 28 土坑・溝出土遺物実測図

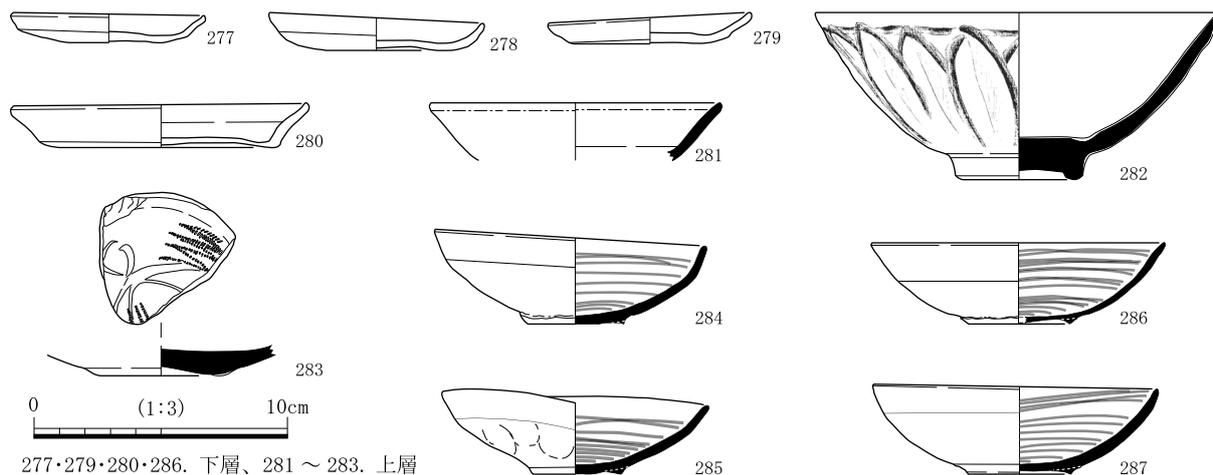


図 29 35 土坑出土遺物実測図

土坑出土のものと接合した 13 世紀後半の瓦器碗である。外面のナデ下端部が下方からの指オサエによって稜状に盛り上がる。

23 土坑 1091 堤の西側に位置する。幅約 5 m、深さ約 1.4 m を測る。二段掘りによって構築されており、断面形は上半が漏斗状を、下半が逆台形あるいは長方形を呈する。この二段掘りは、上段側の土坑の底面にさらに長さ約 7 m、幅約 2～2.5 m、深さ約 0.5 m の平面長方形の土坑を、縦断方向にいくつも連続させるように掘り込んだものであり、土坑と土坑の間には掘り残し部分が畦状に残っている。その幅は約 1 m で、中世城郭の堀に稀にみられる「障子堀」を連想させるものである。

22 土坑のような機能をもった遺構とも考えられるが、1091 堤と並行して築かれている点やその構造から、上記のとおり濠のような役割を果たしていた可能性も考えておきたい。

出土遺物には土師器皿、瓦器碗などがある (269～274)。269～272 の土師器皿と、273・274 の瓦器碗は、13 世紀後半に位置するものである。瓦器碗は内面のミガキが粗く簡略化が顕著である。

24 土坑 調査区北半部の 20 土坑西側に位置する。東端部が 20 土坑に切られる。20 土坑よりも一時期古い段階の遺構である。残存する幅は約 3 m で、長さは約 10 m を測る。深さは約 1 m である。

土坑からは瓦器、白磁が出土した (275・276)。275 は白磁 V 類の碗底部である。276 は瓦質の火鉢である。直線的にやや開く体部をもつ。15～16 世紀に位置すると考えられる。

35 土坑 調査区南半部の 22 土坑西側に位置する長方形の土坑である。南端部は調査区内で確認できるが、北端部は調査区外となる。また西肩部も調査区外となるため、全体の規模は明らかでない。東肩の一部は 22 土坑と重複し 22 土坑に切られる。深さは約 1.5 m を測る。断面形は上半が漏斗状で、下半は急傾斜に掘り込まれた逆台形を呈する。底面は平らである。埋土の多くは灰～黒褐色の粘土偽礫で、掘削後直ちに埋め戻されたような状況が読み取れる。22 土坑と同様の機能をもった遺構と考えられる。

出土遺物には土師器、瓦器、須恵器、陶器、青磁、白磁などがある (277～293)。遺物の時期は 12 世紀頃のもの若干含むが、中心は 13 世紀後半である。281 は白磁皿である。口縁端部を釉剥ぎする。282・283 は青磁である。282 は 13 世紀前半の龍泉窯の碗で、高台外面まで釉をかける。283 は同安窯の皿で 13 世紀中葉頃のものである。284～287 の瓦器碗は、内面のミガキが簡略化した 13 世紀後半に位置するものである。289 は瓦質の羽釜である。頸部は僅かに内湾し、外面には指頭圧痕が残る。291 は瓦質の播鉢で、体部外面に粗い指頭圧痕とハケ目が残る。292 は須恵器の捏鉢で、底部から口縁部に向けて直線的に伸びる体部をもつ。底部には焼成後に両面から穿孔を施す。12 世紀末～13 世紀初頭に

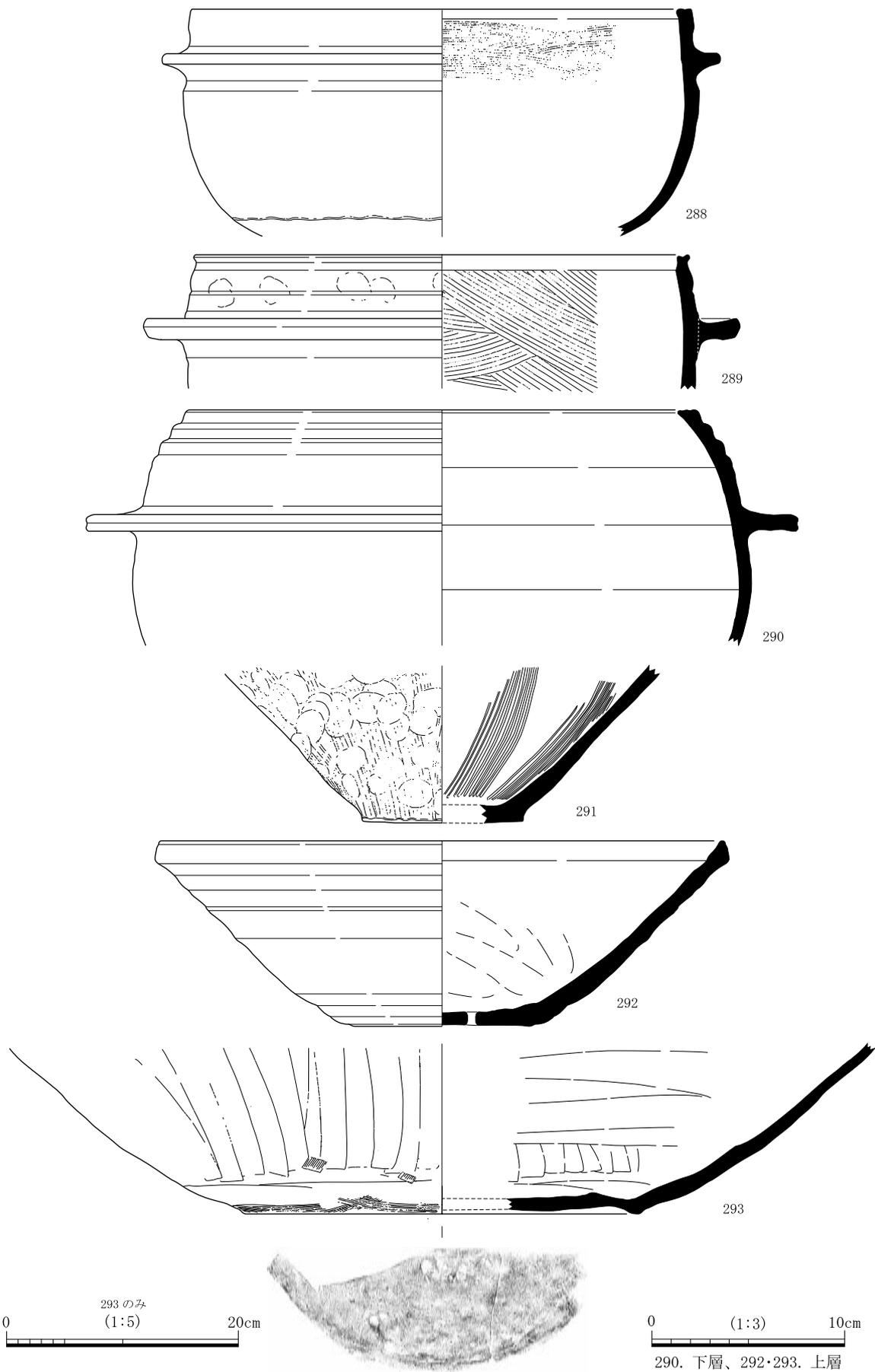


図 30 35 土坑出土遺物実測図

位置する。293は須恵器の甕で底部外面に指頭圧痕とハケ目が明瞭に残る。

36土坑 23土坑の東側、1091堤の西裾部に位置する。当初は23土坑と同時に構築された土坑と考えていたが、断面観察によって、36土坑が埋まった後に23土坑が掘られていることが判明した。36土坑の西肩部が23土坑によって完全に削られている状態である。したがって本来の幅は確認できないが、復原すると幅3.8mくらいになる。深さは約0.9mで、二段掘りで構築されている。断面形は逆台形が2つ重なったような形状である。なお下段の掘り込みは南側で四角く収まる部分があることから、土坑の端から端までつづくものではなく、23土坑のように長方形のものをいくつも連続させていたと考えられる。

3.4 a i 層上面 (写真図版2-5)

調査区のほぼ全域で足跡を検出した。ヒトおよび偶蹄類の足跡である。畦畔等を検出していないため、水田跡であったのかは不明である。検出面の高さはT.P. + 0.6 ~ 0.7mであった。

註

- 1) 財団法人 大阪府文化財センター 2008.2『巢本遺跡 I』(財)大阪府文化財センター調査報告書第167集、
辻 裕司 2008.2「中世初期の低地築堤例」『季刊考古学』第102号 雄山閣

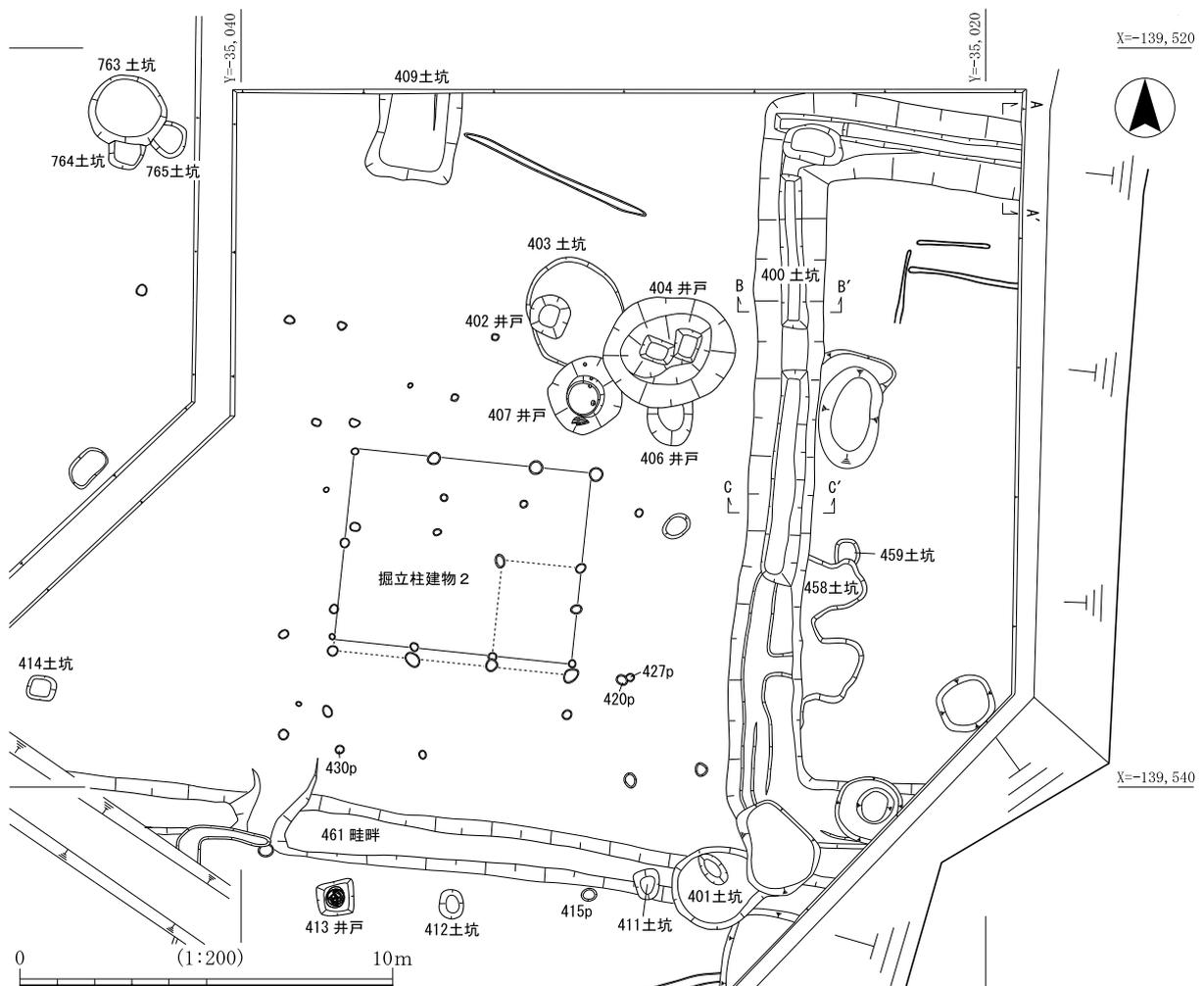


図 31 4区中央部3 a層上面検出遺構全体平面図

第3節 4区の遺構と遺物

本来ならば1区につづき2区の遺構を報告すべきであるが、第1節でも述べたように、1区と2区とは130 m程離れているため遺構のつながりがない。各遺構のつながりを理解するためにも、1区に隣接する4区を先に報告することとする。

1. 3層（3 a層）上面検出遺構（図31・32・34・38・39・42）

掘立柱建物1棟のほか、井戸、土坑、溝などを検出した。これらの遺構は調査区の中央部と南端部の2箇所にとままりがみられる。

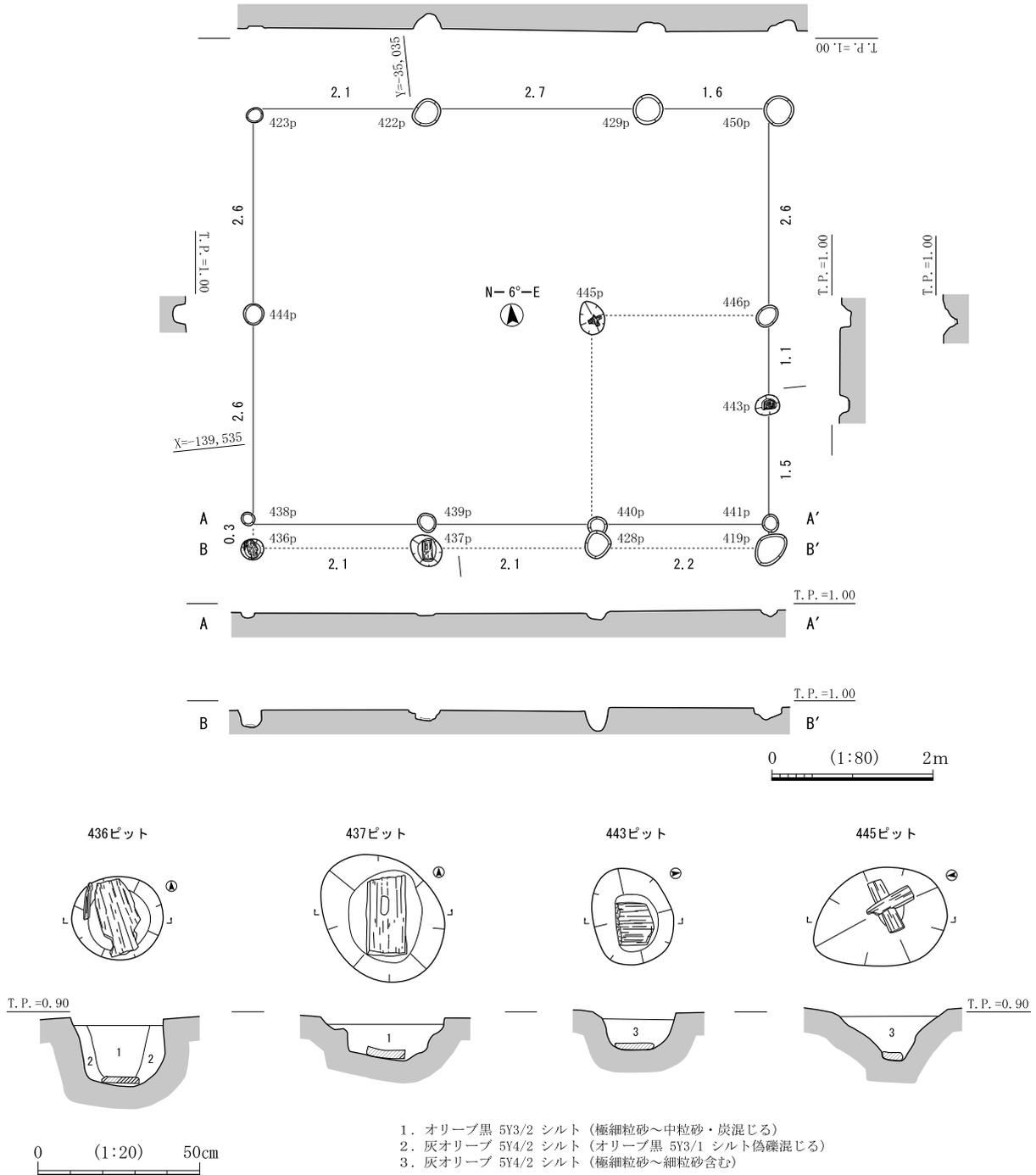
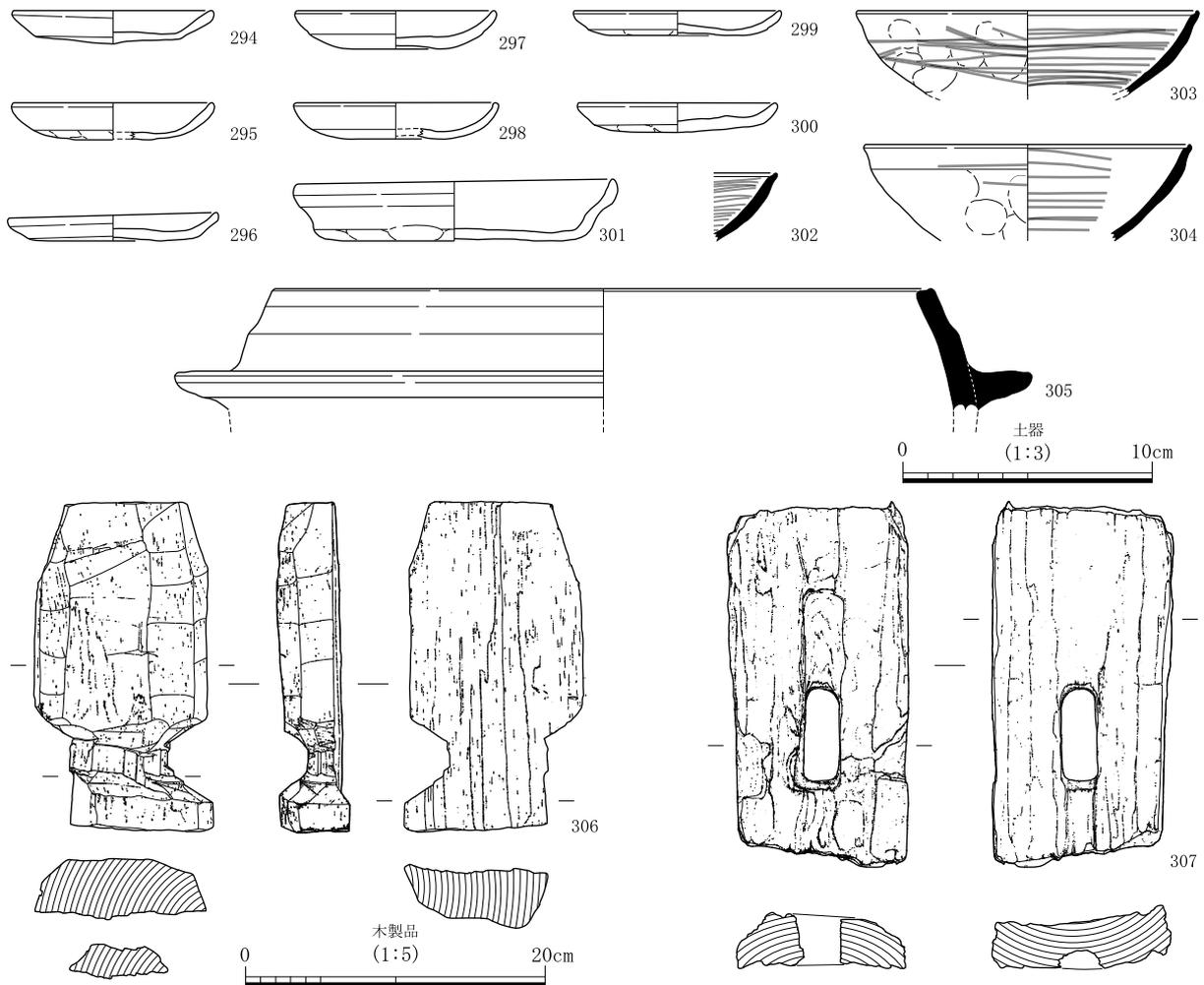


図32 掘立柱建物2平面・断面図



294・295・380 ピット、296・305・429 ピット、297・298・302・422 ピット、299・306・436 ピット
 300・444 ピット、301・415 ピット、303・420 ピット、304・427 ピット、307・437 ピット

図 33 ピット出土遺物実測図

掘立柱建物 2 調査区のほぼ中央部に位置する。桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟で、建物の軸は座標北から東に 6 度振れる。桁行の柱間寸法は南側・北側とも揃っておらず、南側柱筋は東から 2.2 m・2.1 m・2.1 m、北側柱筋は東から 1.6 m・2.7 m・2.1 m となる。梁間の柱間寸法は東西ともに 2.6 m 等間であるが、東の妻側には妻柱から南に 1.1 m 隔てて 1 基の柱穴 (443 ピット) がみられる。出入り口となるのであろうか。また棟通りでは、東から 1 間目のところのみ柱穴がみられる。なお南側柱筋の外側には、約 0.3 m 隔てて平行に柱穴が並んでいる。柱間寸法は南側柱筋とまったく同じで、東から 2 つ目の柱穴には切り合い関係が認められる。断面観察によって外側の柱穴が新しいことを確認した。建物の南面のみを建て替えた可能性が考えられる。柱穴は直径約 25～35 cm の円形で、深さは約 15～20 cm である。埋土はオリーブ黒色や灰オリーブ色のシルトで、南側の柱穴の多くには礎板が設けられている。

なお掘立柱建物 2 の周辺からは、建物跡としてはまとまらないピットを多数 (427・430 ピットほか) 検出している。

掘立柱建物 2 の 422・429・436・437・444 ピットからは土師器、瓦器などが出土した (296～300・302・305～307)。土師器皿 (296～300)、瓦器碗 (302) はどれも 13 世紀代におさまるが、429 ピット出土の 305 の瓦質の羽釜のみ 14 世紀後半に位置する。頸部はやや内湾し鏝は断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。306・307 は礎板である。306 は一端に抉りを施し、くびれを作り出す。307 は平面

長方形を呈し、柄穴を穿つ。いずれも建築部材などを礎板として転用したのものと考えられる。

その他、掘立柱建物2周辺の415・420・427ピットや南方の380ピットからも13世紀代の土師器皿(294・295・301)や13世紀前半の瓦器椀(303・304)が出土している。

461 畦畔 掘立柱建物2の南側に位置する。座標西から北に僅かに振る東西畦畔で、掘立柱建物2とは約5m隔てる。近年の盛土造成が行なわれる直前まで機能していた畦畔で、古地図や航空写真でも確認できる。中世の地割りが現代の水田畦畔まで踏襲されていたことを示している。幅は1.5mほどで、高さはもっとも残りがよい場所で約0.2mを測る。

この畦畔の南側には、近接して後述する412土坑や413井戸が認められるが、それ以外の遺構は基本的に築かれていない。おそらくこの畦畔が、居住域と生産域とを区画する役割を果たしていたと推測される。

掘立柱建物2の北側で、重複した井戸(402・404・406・407井戸)や土坑(403土坑)を検出した。
404 井戸 406・407井戸・403土坑と一部重複する大型の井戸である。重複する全ての遺構の埋土を切っており、一群の中で最後に築かれた遺構であることがわかる。上端部の平面形は長径約3.5m、短径約3mの東西にやや長い楕円形であるが、下部は長辺約0.9m、短辺約0.6mの平面長方形となる。下部が極端に細いため、断面形はまさに漏斗状となる。この平面長方形の下部は接するように2つあいており、両者からは湧水がみられた。掘り直しによるものかどうかは、断面の設定位置が悪く検証できなかった。湧水のため底まで確認できなかったが、深さはいずれも1.8m以上ある。埋土は極細粒～細粒砂、あるいはシルトなどであるが、途中にラミナがみられる部分があり、一度に埋まったものではなく、ある程度の時間をかけて埋まった様子が読み取れる。

井戸からは土師器、瓦器、須恵器、瓦、木製品などのほか、木簡が2点出土した(310～318・333～335・341)。土師器皿(310～313)、瓦器椀(315～318)は13世紀代に属す。315と316は内面に簡略化したミガキを施す13世紀後半に位置するものである。特筆すべきものに334・335の木簡がある。両者共に埋土の中層から出土していることから、井戸が廃棄した後、埋め戻しの途中で投棄されたものと判断できる。334は一端を宝珠形に削り出す呪符木簡で、表面には「昔蘇民将来□□□□」の文字が記されている。「将来」の文字の下には僅かに墨が残っており、「之住宅也」とつづいていたことが推測できる。裏面の文字は完全に墨が薄れ文字部分が盛り上がった状態となっているが、その盛り上がりから辛うじて「南無五大力井」と判読することができた。なお当センターが発掘調査した松原市の観音寺遺跡でも、ほぼ同様の文言を記した呪符木簡が出土している¹⁾。335は一端の両側面に切り込みを入れ圭頭にしたもので、表面には「一日大般若経轉□」と記されている。下部が折れ「轉」以下を欠損するが、これに続く文字が「讀」で「一日大般若経轉讀」と続いていたであろうことは容易に推測できる。頭部のくびれ部には紐状のものが巻かれていた痕跡が残っており、裏側ではそれがへの字状に曲がっている。これによって、この札が文字の書かれている側を表にして、何かに吊り下げられていたことが復原できる。その他に箸(341)が1点出土している。

406 井戸 404井戸の南側に位置し、404井戸に切られる。平面形は長径1.4m以上、短径約1.2mの楕円形で、深さは約1.3mを測る。断面形は404井戸のような上部が開く漏斗状ではなく、底部までほぼ直線的なコップ状を呈するが、細かく見ると壁面には小さな段々が観察できる。埋土は大きく上下2層に分かれる。下層は黒褐～オリーブ黒色のシルト偽礫を多く含む細粒～粗粒砂で、上層はオリーブ黒～灰オリーブ色のシルト偽礫が混じり合った層である。人為的に埋め戻されたのものと考えられる。

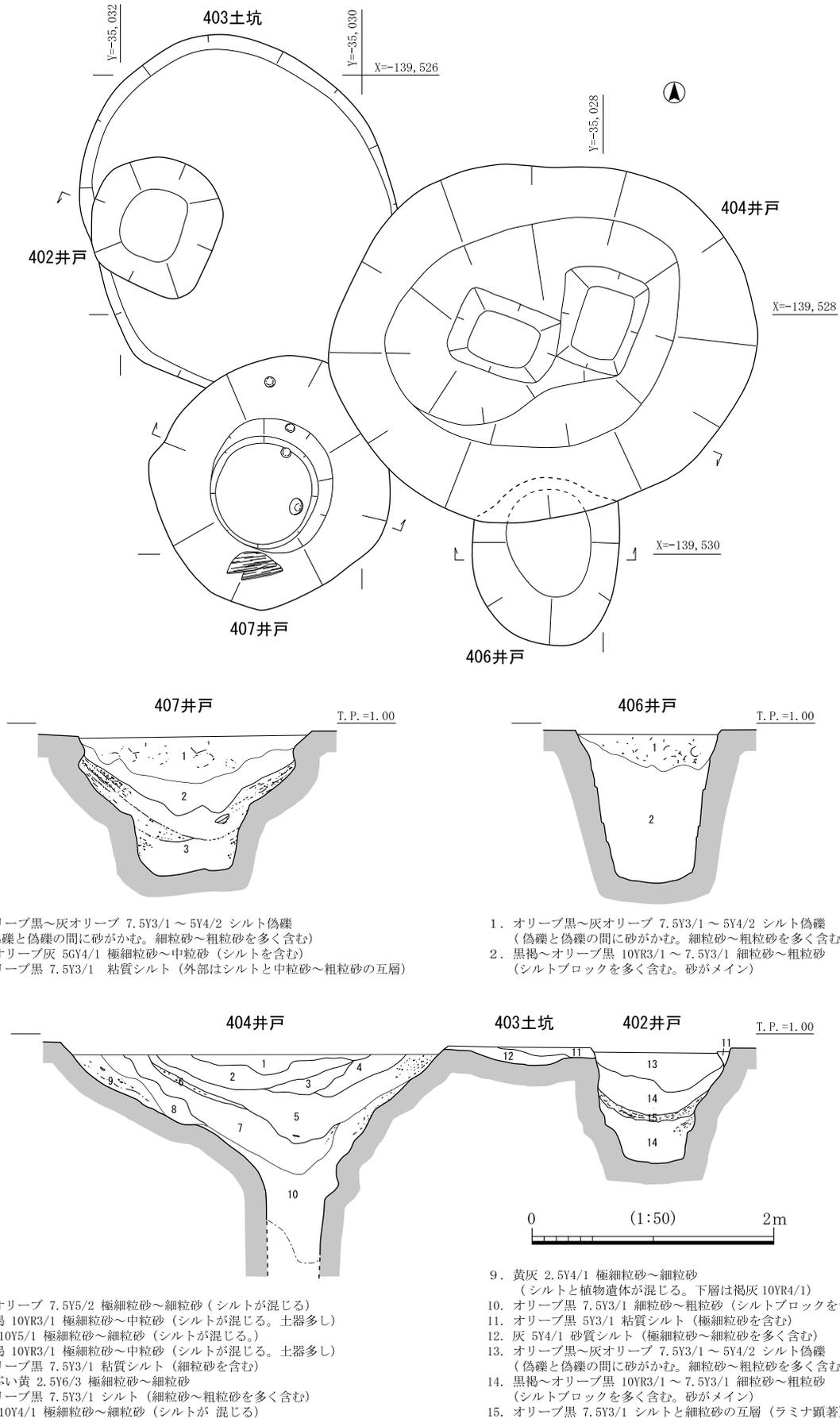
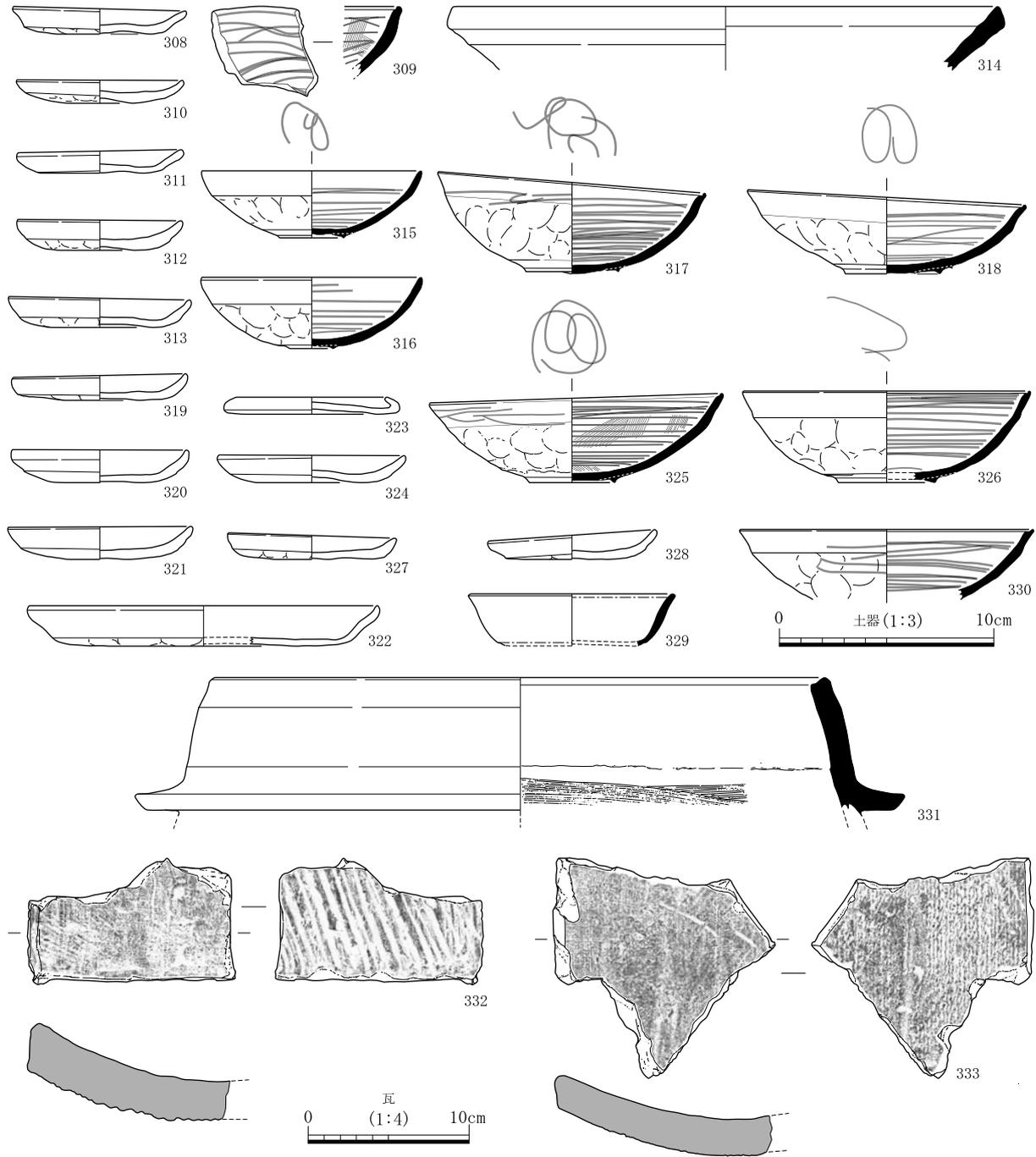


図34 402・404・406・407井戸・403土坑平面・断面図

出土遺物には土師器、瓦器、白磁などがある(327～331)。いずれも13世紀前半におさまると考えられる。329は口禿の白磁皿である。331は瓦質の羽釜で、鏝はやや下方に伸び端部は面をもつ。内面は粘土の接合痕とハケ目が残る。

407井戸 404井戸の西側に位置する。406井戸と同じく404井戸に切られるが、北側の403土坑を切って築かれている。検出面での平面形は一辺約1.9mの隅丸方形であるが、底部は直径約0.8mの円形となる。深さは約1.2mである。埋土は下部がオリブ黒色の粘質シルトで、一部中粒～粗粒砂との互層となっている。上部は406土坑の上部と同じ偽礫が混じり合った層である。下部にラミナがみられることから、ある程度自然に埋まったあとに、人為的に埋め戻されたものと考えられる。



308・309・332. 402井戸(332. 上層)、310～318・333. 404井戸、319～326. 407井戸、327～331. 406井戸

図35 井戸出土遺物実測図

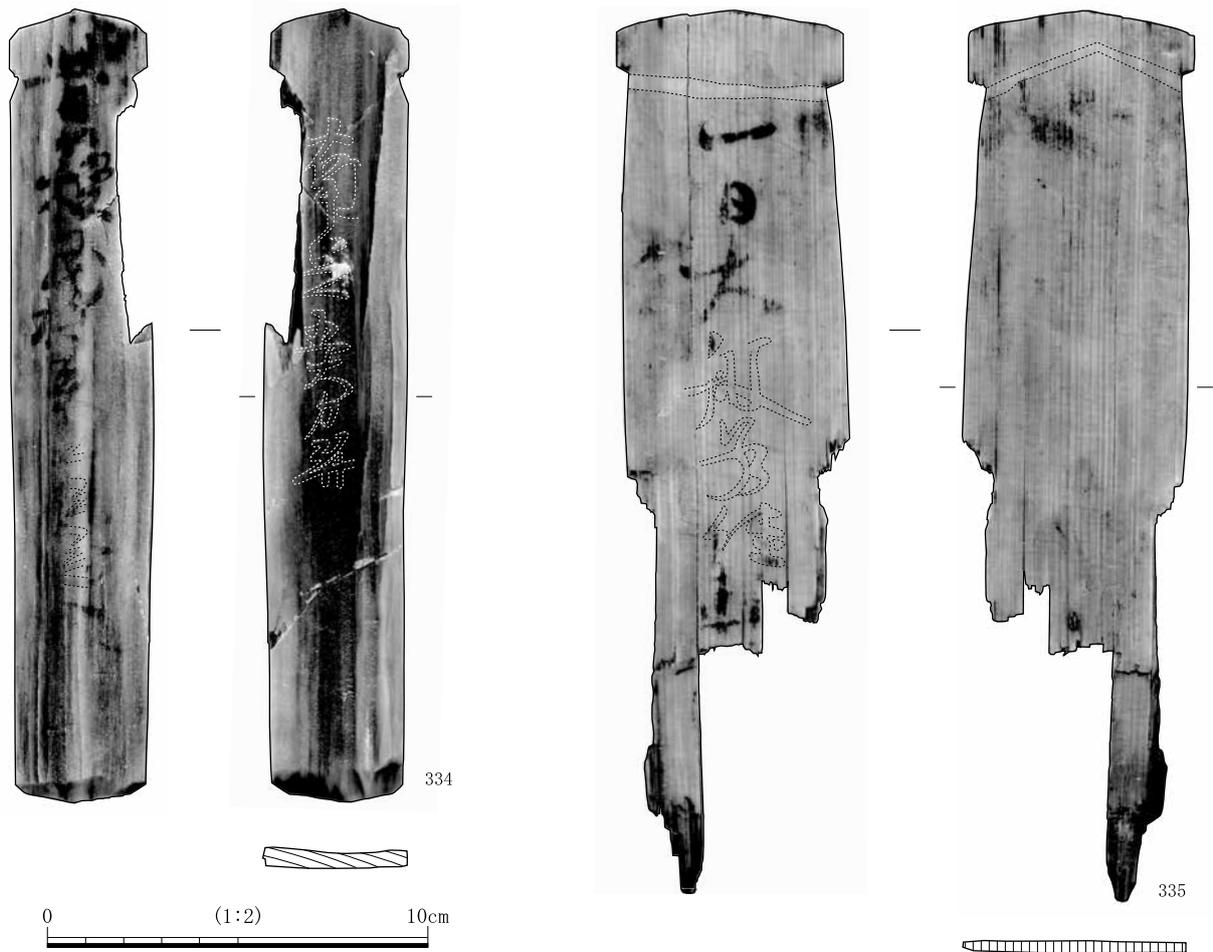


図 36 404 井戸出土木簡実測図

出土遺物には土師器、瓦器、木製品などがある（319～326・336～340）。遺物の時期はほぼ13世紀前半におさまる。323は13世紀前半の土師器皿で、口縁端部を内側に折り曲げる。336～339は曲物の底板である。直径が13.7cmから43.1cmのものまで様々である。337の側板を留める穴には一部椶皮が残る。338の側面には釘穴が2孔1対で等間隔に並び、木釘が残るものもある。上面中央部がやや薄くなる。また箸（340）が1点出土している。

403 土坑 404井戸の西側に位置する。402・404・407井戸と一部重複し、その全ての井戸に切られる。一群の遺構の中で最初に築かれた遺構である。平面形は長径3m以上、短径約2.5mの楕円形であるが、深さは約0.16mと非常に浅い。井戸の掘削途中でやめたものであろうか。

402 井戸 403土坑上に築かれた井戸である。平面形は一辺約1.1mの隅丸方形で、深さは約0.95mを測る。埋土は406井戸とよく似る。中間層にラミナが顕著な堆積がみられることから、一気に埋め戻されたものではなく、埋め戻し途中で中断があったことがうかがえる。

井戸からは土師器、瓦器、瓦などが僅かに出土している（308・309・332）。308の土師器皿は口縁部が短く、緩やかに外反する。309の瓦器椀は内面に粗いミガキと下にハケ調整を施す。いずれも13世紀前半のものと考えられる。

413 井戸 掘立柱建物2の南方、461畦畔のすぐ南側に位置する。曲物を井戸枠に転用した井戸である。掘方の平面形は一辺0.9～1.0mの隅丸方形で、深さは約0.8mを測る。その中央部に下から小さい順に3段の曲物を重ねる。ただし下段（345）と中段（342～344）の曲物はやや高さがあるため、外側に

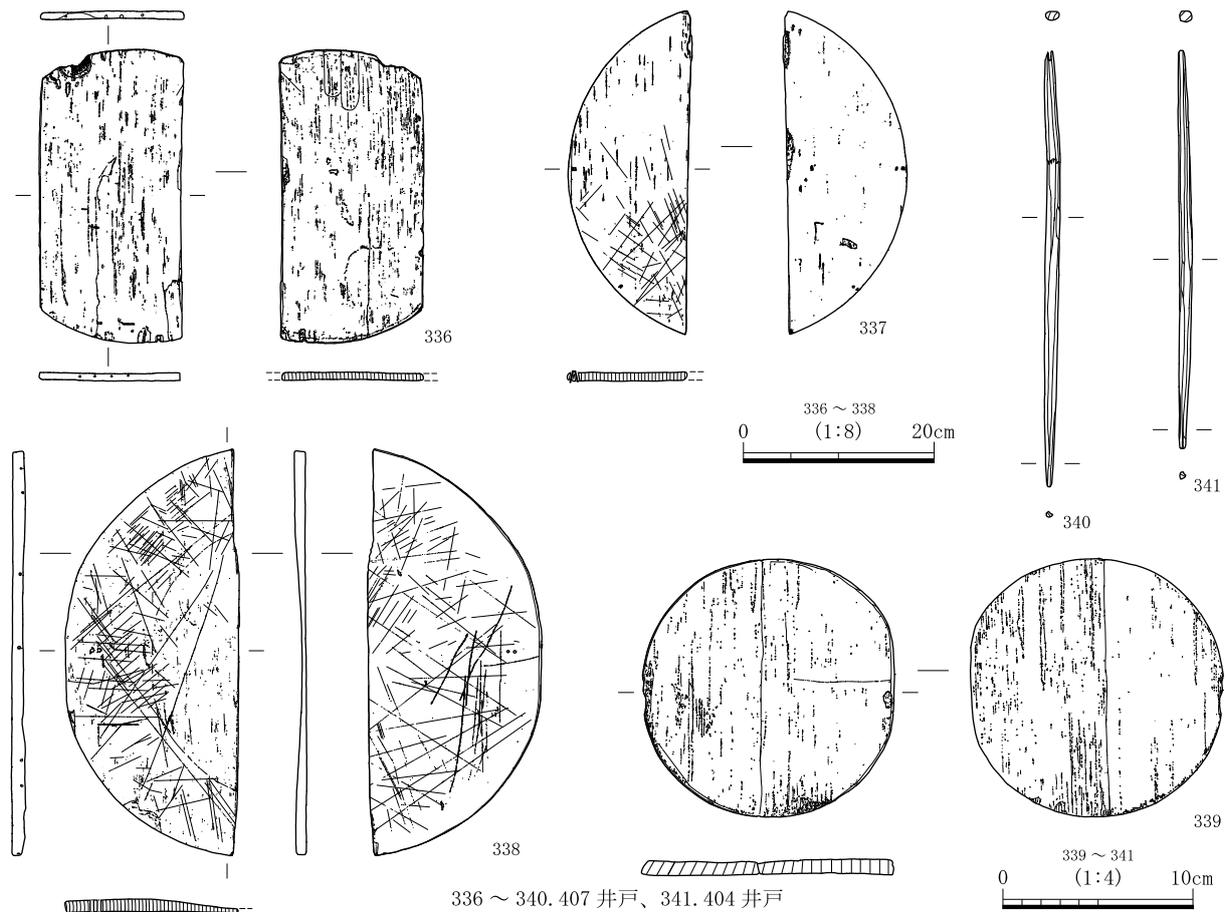
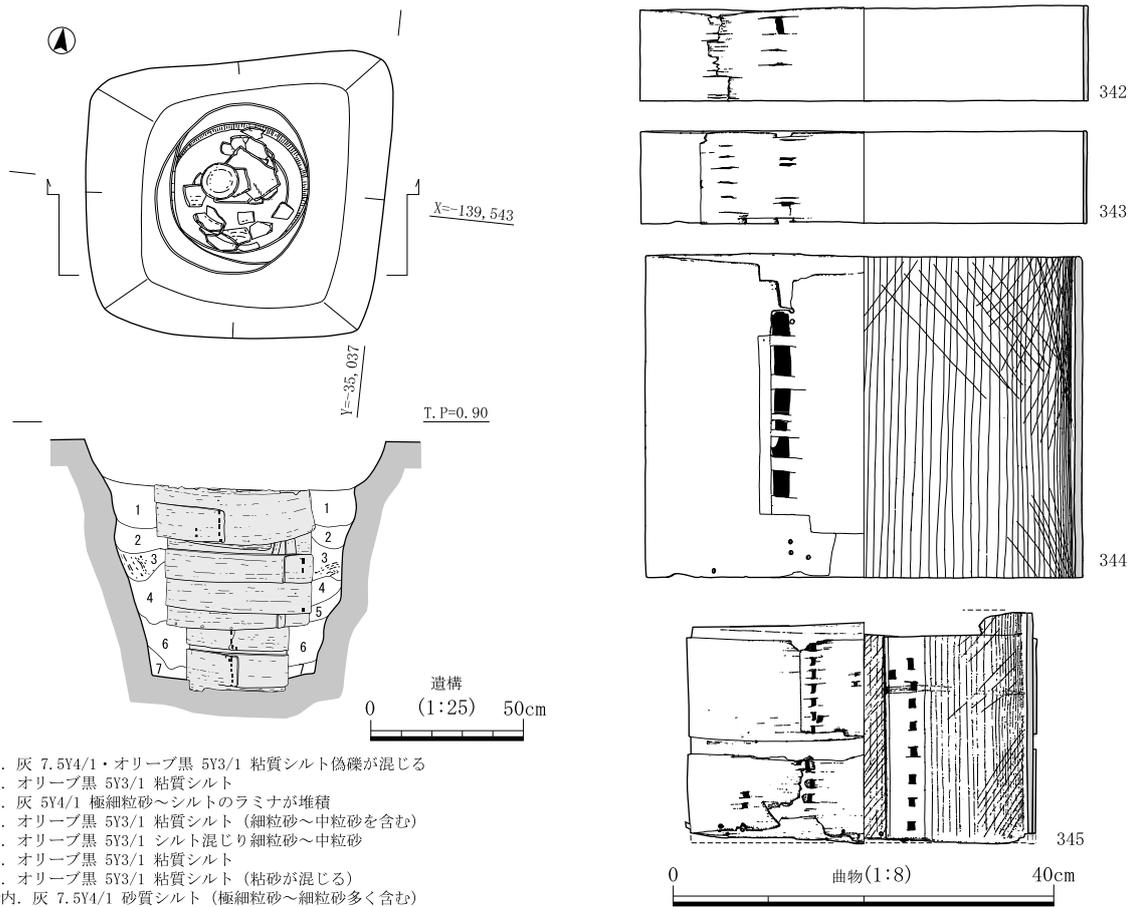


図 37 404・407 井戸出土木製品実測図

高さ 10 cm 程度の曲物（籬）を 2 つずつ被せて補強した二重構造となっている。図示した 342・343 の曲物は中段の籬である。曲物の直径は歪みがあるため正確ではないが、下段が約 38 cm、中段が約 47 cm、上段が約 52 cm で、上段の曲物は高さ約 17 cm を測る。曲物内の埋土は極細粒～細粒砂を多く含む灰色砂質シルトである。

枠内からは土師器、瓦器、木製品などが出土した(342～355)。遺物の時期は 13 世紀後半を中心とする。352 は瓦質の羽釜である。寸胴な胴部に内傾する長い口縁部をもつ。内面は指オサエののち横位のハケ調整を施す。353～355 は毬杖の毬、あるいはその未成品であると考えられる。約 2.5cm 大のものと約 4 cm 大のものがある。上下の木口は削り、丸味をもたせるが、側面は樹皮を剥いだままの状態である。このほか枠の底から直径約 5 cm、長さ約 8 cm の竹筒が 1 点出土している。

400 土坑 掘立柱建物 2 のすぐ東側の調査区東壁際に位置する。コの字状に屈曲する土坑で、座標北から僅かに東に振れる。当調査区内では西辺の全体と北・南辺の一部を検出した。本調査の段階では東辺部が調査区外であったため、全体の形状が不明であったが、06 - 1 調査でこの土坑のつづきが検出され、ほぼ方形にめぐる土坑であることが確認された。その一辺の長さは、南北・東西ともに土坑の心々間で約 18 m を測る。土坑の幅は南辺と西辺が約 1.8 m、北辺が約 2.1 m で、深さは約 0.85～1.0 m である。この土坑も 1 区検出の 23 土坑のように二段掘りとなっており、0.4～0.6 m 掘削した上段側の土坑底面に、さらに幅約 0.6～0.8 m、深さ約 0.4 m の平面長方形の土坑を、縦断方向に連続させて掘削している。下段の土坑と土坑の間には掘り残し部分が畦状に残っており、中世城郭にみられる障子堀のような形状となっている。1 区の 23 土坑とよく似た構築方法であり、同時期に掘られたものであることをうか



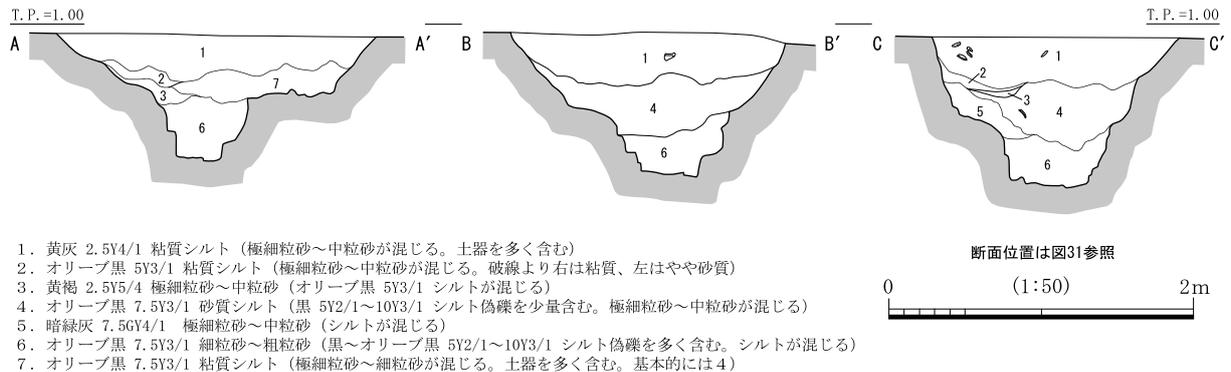
1. 灰 7.5Y4/1・オリブ黒 5Y3/1 粘質シルト偽礫が混じる
 2. オリブ黒 5Y3/1 粘質シルト
 3. 灰 5Y4/1 極細粒砂～シルトのラミナが堆積
 4. オリブ黒 5Y3/1 粘質シルト (細粒砂～中粒砂を含む)
 5. オリブ黒 5Y3/1 シルト混じり細粒砂～中粒砂
 6. オリブ黒 5Y3/1 粘質シルト
 7. オリブ黒 5Y3/1 粘質シルト (粘砂が混じる)
- 枠内、灰 7.5Y4/1 砂質シルト (極細粒砂～細粒砂多く含む)

図 38 413 井戸平面・断面図及び曲物実測図

がわかる。埋土は大きく3層に分層できる。下層は黒～オリブ黒色のシルト偽礫を多く含むオリブ黒色の細粒～粗粒砂で、下段の土坑埋土にあたる。中層は黒色シルト偽礫や砂粒を含むオリブ黒色砂質シルト、上層は土器を多く含む黄灰色粘質シルトで、両者は上段の土坑埋土にあたる。いずれも自然堆積ではなく、人為的に埋め戻されたものである。

このような方形にめぐる土坑や溝は、中世の集落や館・屋敷地、あるいは墓地などで散見されるものであるが、この400土坑で囲まれた内側からは、458・459土坑以外顕著な遺構は検出できなかった。土坑よりも内側が本来は高く盛り上がっていたために、その上に築かれていた遺構が後世の開発によって削平されたという可能性も考えておきたい。

出土遺物には土師器、瓦器、須恵器、青磁、木製品、砥石などがある (356～375・398～400)。遺



1. 黄灰 2.5Y4/1 粘質シルト (極細粒砂～中粒砂が混じる。土器を多く含む)
2. オリブ黒 5Y3/1 粘質シルト (極細粒砂～中粒砂が混じる。破線より右は粘質、左はやや砂質)
3. 黄褐 2.5Y5/4 極細粒砂～中粒砂 (オリブ黒 5Y3/1 シルトが混じる)
4. オリブ黒 7.5Y3/1 砂質シルト (黒 5Y2/1～10Y3/1 シルト偽礫を少量含む。極細粒砂～中粒砂が混じる)
5. 暗緑灰 7.5GY4/1 極細粒砂～中粒砂 (シルトが混じる)
6. オリブ黒 7.5Y3/1 細粒砂～粗粒砂 (黒～オリブ黒 5Y2/1～10Y3/1 シルト偽礫を多く含む。シルトが混じる)
7. オリブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト (極細粒砂～細粒砂が混じる。土器を多く含む。基本的には4)

図 39 400 土坑断面図

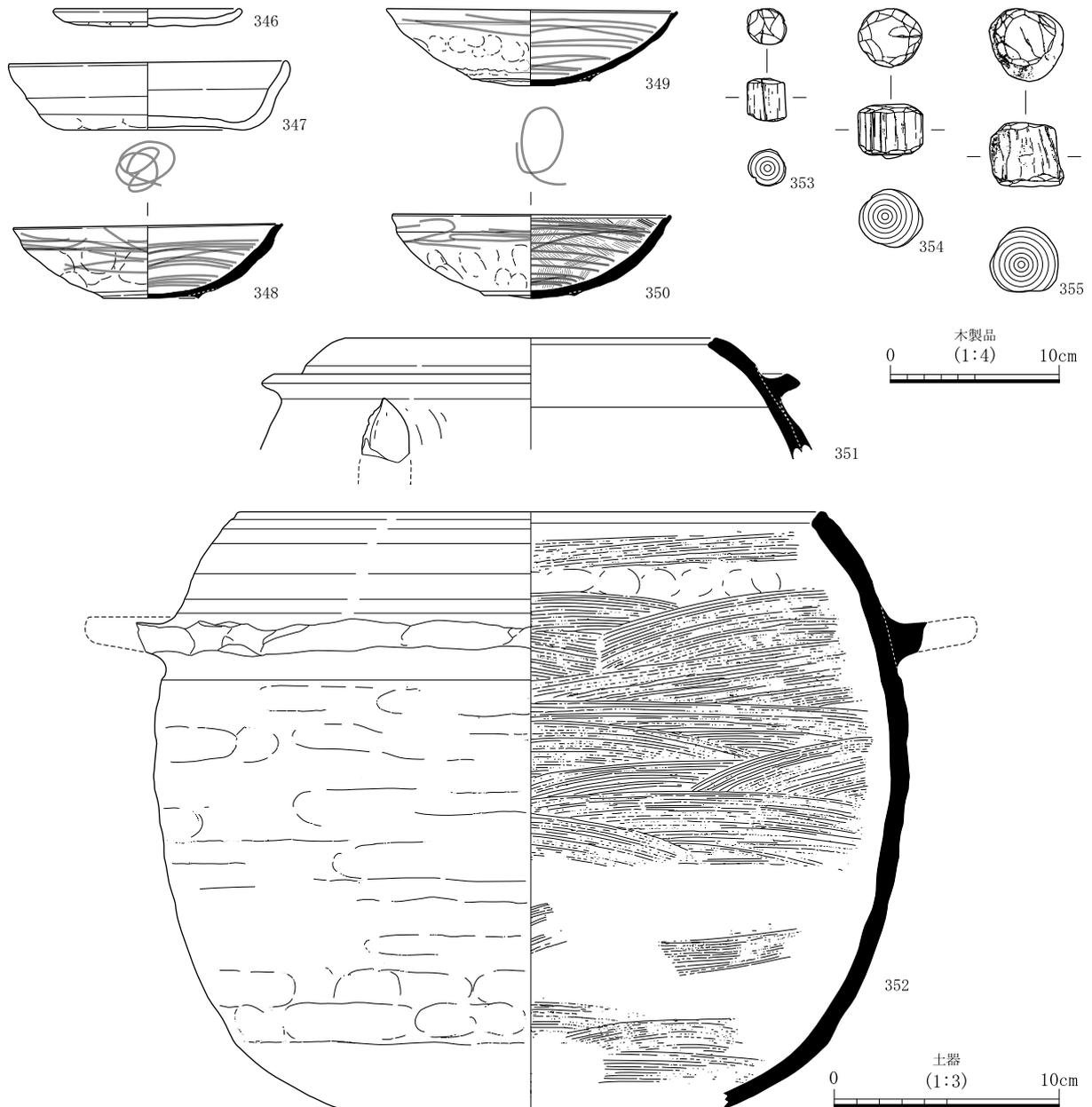


図 40 413 井戸出土遺物実測図

物の時期は 13 世紀後半が中心であるが、瓦質の甕、鍋、羽釜などは若干の時期差が考えられる。360～364 の瓦器碗は 13 世紀後半におさまる。372 は瓦質の甕である。体部に横位のタタキを施す。14 世紀前半のものである。374 は 13 世紀代の瓦質の鍋である。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は浅く窪む。その他に 366 の同安窯の青磁皿や 357 の灯明皿が出土している。なお仏具や石造物など墓地と結びつくような遺物はまったく出土していない。

401 土坑 400 土坑の南西隅外側に位置する。461 畦畔の新しい段階の盛土を除去すると検出できる遺構である。平面形は直径約 2.2 m のほぼ円形であるが、東側の一部は攪乱に向かって若干広がっている。深さは北側の一部が一段深くなっており、そこでは 0.55 m を測る。埋土は砂粒を含むシルト、あるいは極細粒～中粒砂などである。

土坑からは土師器、瓦器が出土した (391～396)。遺物の時期は 13 世紀前半を中心とする。391・396 の瓦器碗は、内面のハケ目の上にやや簡略化したミガキを施す。393～395 の土師器皿は、短く立

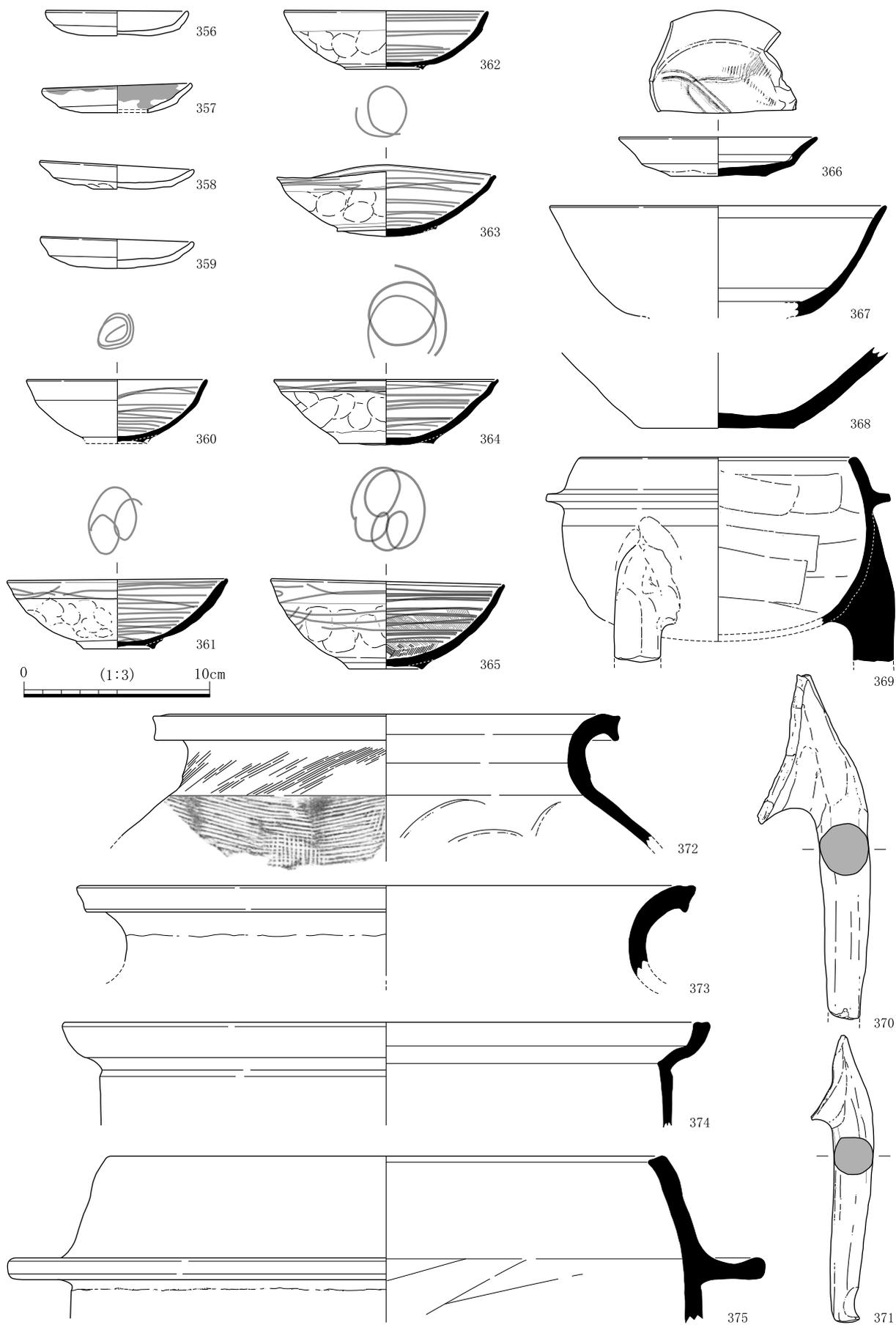


图 41 400 土坑出土遺物実測図

ち上がる口縁をもつ。395は灯明皿で、口縁部に煤が付着する。

409 土坑 403土坑の北西に位置し、北端部が調査区の側溝と重なる。平面形は東西2.2m、南北2.3m以上の長方形を呈する。深さは約0.6mであるが、東壁際は溝状に一段深くなる。埋土はシルト偽礫を多く含む極細粒～中粒砂などで、最上層は406井戸の上層と同様の偽礫層である。

土坑からは土師器皿と瓦器椀が出土した(384・385)。ともに13世紀中葉に位置する。385の瓦器椀は器高が低く、内面にやや簡略化したミガキを施す。

411 土坑 401土坑のすぐ西側に位置する。平面形はやや形の崩れた隅丸長方形で、長辺は0.79m、短辺は0.64mを測る。深さは0.36mで、埋土はシルト混じりのオリーブ黒色極細粒～中粒砂である。

土坑の底から土師器の皿が5点出土した(386～390)。386～389の土師器皿は12世紀代のものである。390の大型の土師器皿は、口縁部が外傾し外面に二段ナデを施す。

412 土坑 411土坑の西側に位置する。平面形は長径0.8m、短径0.54mの楕円形で、深さは0.26mを測る。埋土はシルトを含む灰色の極細粒～中粒砂である。

414 土坑 掘立柱建物2の西方にやや離れて位置する。平面形は長辺0.75m、短辺0.65mの東西にやや長い隅丸長方形で、深さは0.42mを測る。埋土は下層がシルトの偽礫を多く含む極細粒～細粒砂で、上層がシルト混じりの極細粒～細粒砂である。

458 土坑 コの字状に屈曲する400土坑の内側で検出した土坑で、400土坑の西辺に接する。平面形は不整形で、400土坑に向かって緩やかに落ち込む。深さは0.1m程度と浅い。埋土は砂粒を多く含むオリーブ黒色シルトである。

459 土坑 458土坑と同じく400土坑の内側で検出した。458土坑の北側に位置し、458土坑に切られる。平面形は隅丸方形に近い円形で、直径は約0.7mを測る。深さは0.4mで、底に長さ約30cmの細木が2本横たわっていた。埋土は粘質シルト偽礫や砂粒を多く含む灰色シルトである。

土坑からは土師器皿と木製品が出土した(381・401)。381の土師器皿は口縁が短く立ち上がる13世紀後半のものである。401は断面長方形を呈す棒状の木製品で、一端の両側面を削りくびれを作り出す。用途は不明である。

359 土坑 調査区の南端部で検出した。平面形は一辺0.6m強の円形に近い隅丸方形で、深さは0.44mを測る。埋土は上下2層に分かれる。下層は中粒～粗粒砂を多く含む暗青灰色のシルトで、上層は灰黄褐色の中粒～細粒砂混じりシルトである。

土坑からは土師器や瓦器の細片が出土した(379・380・397)。遺物の時期は13世紀を中心とする。397は土師器羽釜で、球状の体部に短く内傾する口縁をもつ。体部外面上半には縦方向の、下半には右上がりのハケ調整を施す。

360 土坑 359土坑の北側に位置する。平面形は一辺0.82～0.88mのやや形の崩れた隅丸方形で、深さは0.34mを測る。埋土は上下2層に分かれる。下層はシルト偽礫を多く含む極細粒～細粒砂で、上層は灰黄褐色砂質シルトである。

土坑の底から土師器の皿が2点出土した(382・383)。緩やかに外反する口縁をもち端部は丸くおさめる。14世紀前半頃のものである。

365 土坑 359土坑の西側に位置する。平面形は直径0.7m強の円形で、深さは0.35mを測る。埋土は上下2層に分かれる。下層は黒褐色のシルトブロックを多く含む細粒～粗粒砂で、上層はシルト混じりの細粒～粗粒砂である。

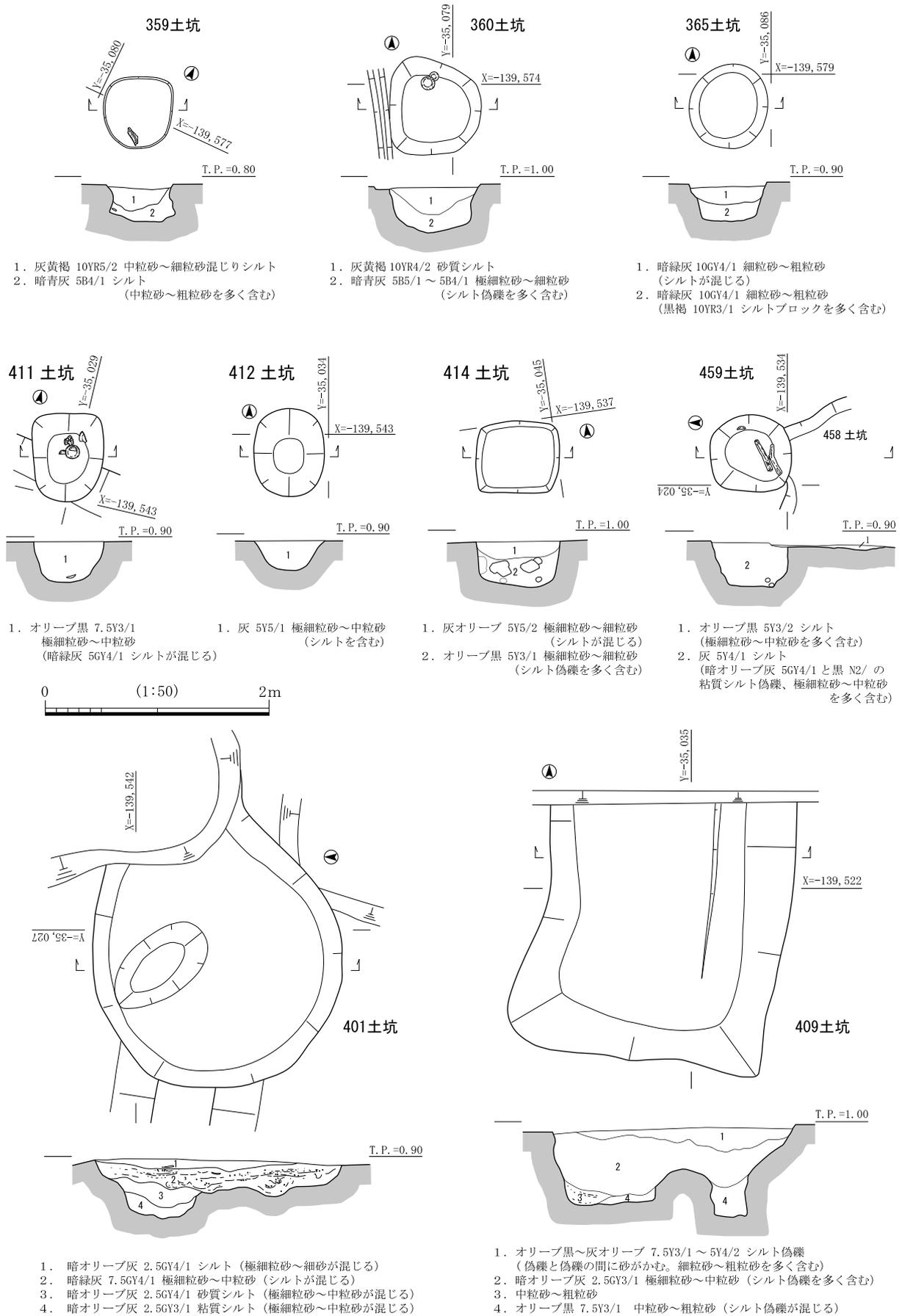
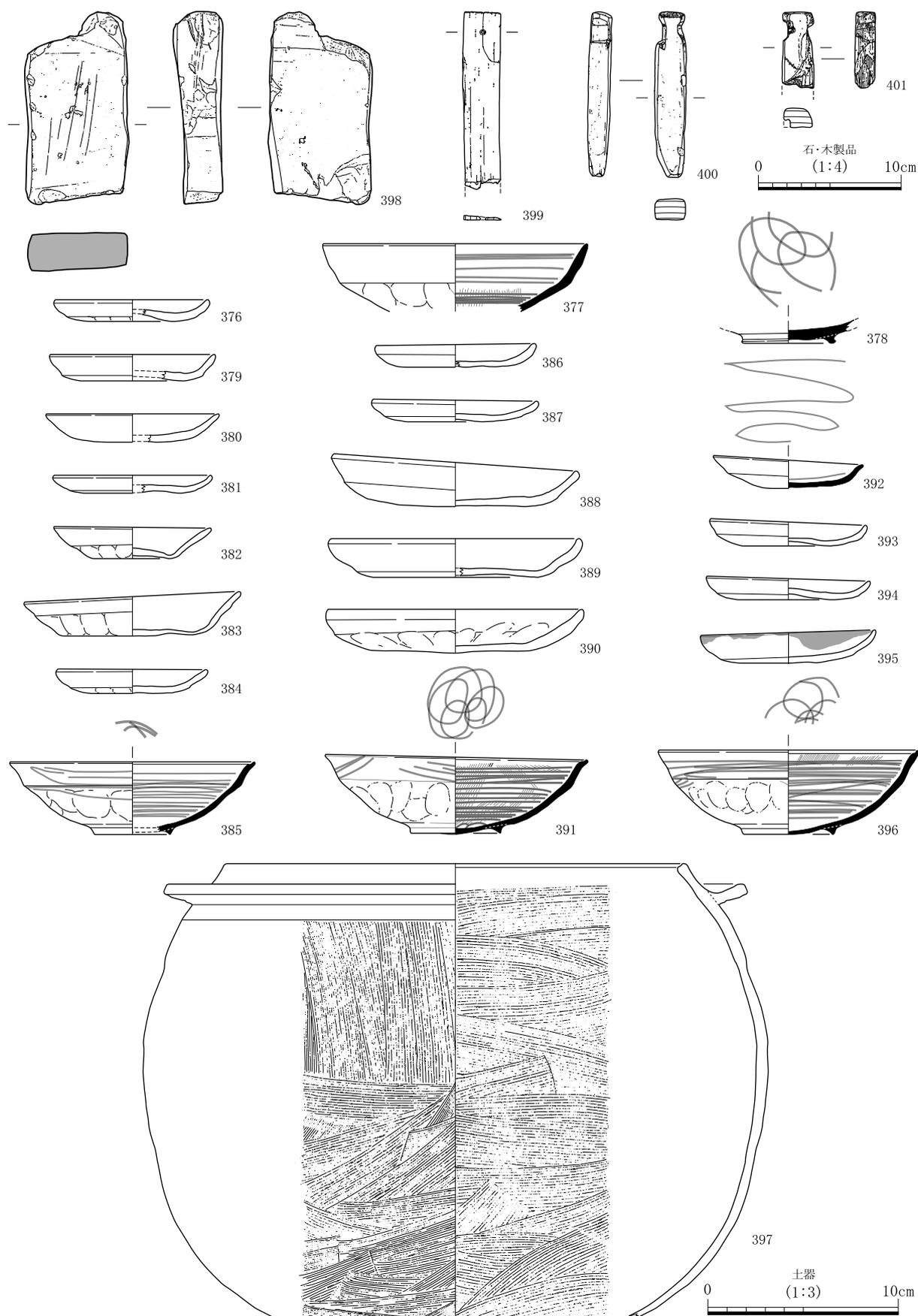


図 42 3層(3a層) 上面検出土坑平面・断面図



376 ~ 378. 376 溝、379・380・397. 359 土坑、381・401. 459 土坑、382・383. 360 土坑
384・385. 409 土坑、386 ~ 390. 411 土坑、391 ~ 396. 401 土坑、398 ~ 400. 400 土坑

图 43 土坑・溝出土遺物実測図

なお上記3基の土坑の周辺からは、建物跡としてはまとまらないピットを多数(368・373・380ピットほか)検出している。

376溝 359・360・365土坑などの東側に位置する。座標北から西に約11度振る南北溝で、幅は約0.4～0.6m、深さは約0.2mを測る。埋土は細粒～中粒砂混じりシルトである。この溝より東側にピットや土坑等の遺構が広がらないことから、居住域と生産域とを画する溝であったと考えられる。

溝からは土師器皿、瓦器椀が出土した(376～378)。いずれも13世紀前半に位置する。376の土師器皿は、短く開く口縁をもち底部外面を押し窪める。377の瓦器椀は内面に簡略化したミガキを施す。

690畦畔 359土坑と365土坑との間に位置する。座標北から西に約6度振る南北畦畔で、北の7区へと続く。幅は約1.1～1.3mで、高さは約0.1mを測る。

なお南端部西壁際において、土器が大量に廃棄された**943溝**を検出しているが、これについては7区までつづく遺構であるため、次節で報告することとする。

以上の遺構は、調査区の中央部と南端部の2箇所にとままっている。その間は、耕作に伴う細溝が幾筋か検出できるが、ピットや土坑等顕著な遺構は全く確認できない。また400土坑の北側も同じ状況である。東西・南北方向の耕作溝は幾筋も検出できるが、ピットや土坑等顕著な遺構は全く築かれていない(写真図版16-3)。おそらく集落に伴う耕作域であったと考えている。

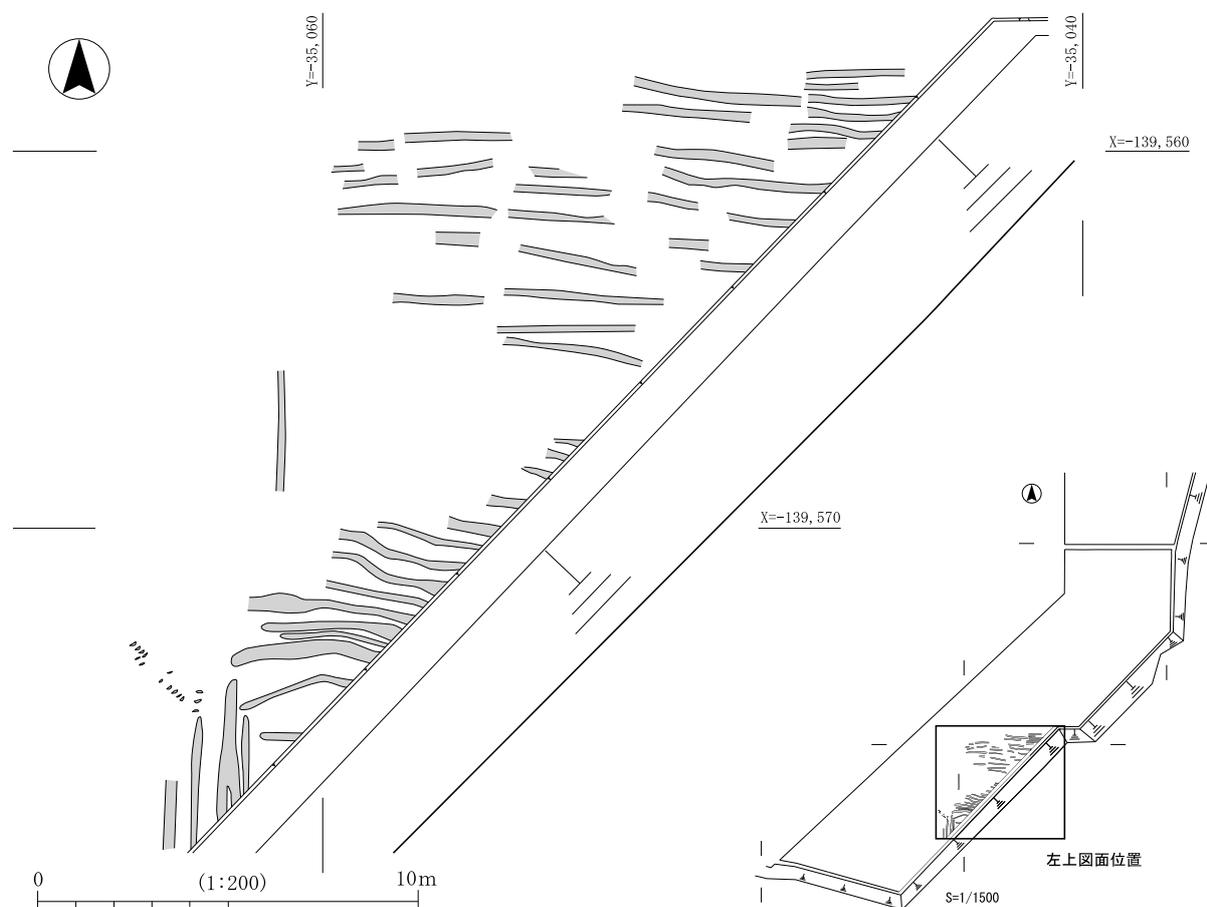


図44 4区4a層上面検出耕作溝全体平面図

2. 4 a層上面検出遺構 (図44)

南半部の東壁際で耕作溝を検出した。ほぼ現在の国土座標にのる向きの溝で、 $Y = -35,060$ mあたりを境に、東側が東西方向、西側が南北方向となる。場所によっては溝が数条並行し、溝と溝との間が畝状に5 cmほど盛り上がっている箇所もある(写真図版16-1)。そのあたりでは、溝1条の幅は約0.15~0.3 mで、畝の幅は約0.3~0.5 mとなっている。これらの耕作溝は3 b層の砂層に覆われているため、溝内には砂が堆積する。

耕作溝の周辺からは、ヒトや偶蹄類の足跡のほか、鋤の痕跡などを検出している(写真図版16-2)。

なお、3層上面で検出した調査区中央部の461畦畔は、この面では南側が一段低い段となっている。

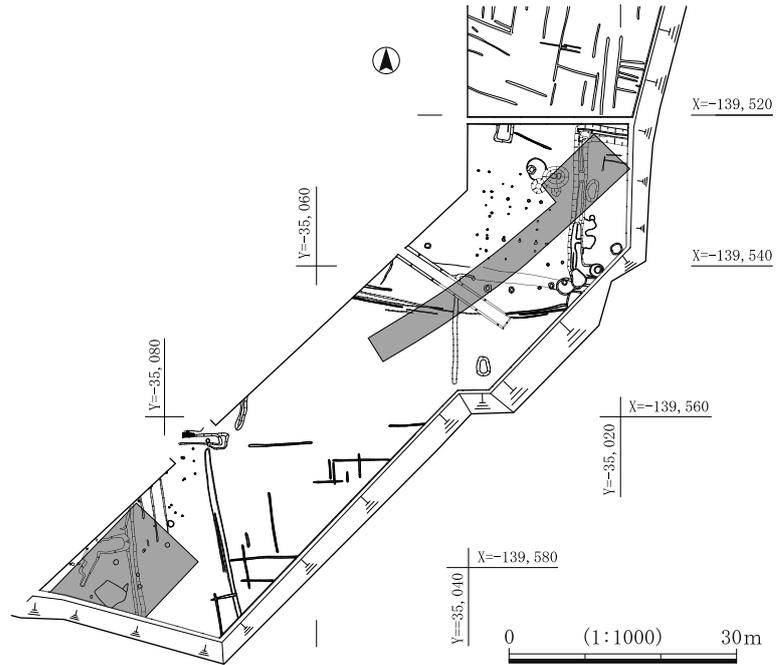


図45 4区下層調査トレンチ位置図

3. 6層上面検出遺構

調査区全体は4 a層上面までで調査を終了したが、道路の橋脚等地下深くまで工事が及ぶ箇所については一部深掘りを行い、下層遺構の調査を実施した(図45、写真図版16-4・5)。

その下層調査は、調査区中央部と南端部の2箇所で行ない、南の調査区では洪水砂層である5層を掘削した6層上面で、ヒトの足跡を検出した。4 a層上面で検出した足跡のように無数に広がるというのではなく、歩いた方向や歩幅などが確認できる程度の少人数の足跡である。

註

- 1) 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1998.3『観音寺遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第34集

第4節 7区の遺構と遺物

4区の西側に隣接する7区から先に報告する。

1.3 a - 2層上面検出遺構 (図46)

大溝を1条検出した。

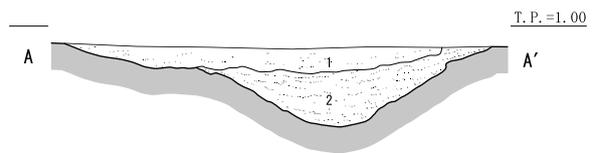
782溝 調査区の南半部に位置する。調査区内を蛇行する大溝で、その流路は調査区の南西隅から一旦東へ向かい、4区際で大きく北に向きを変えて、再び中央部付近から西の調査区外へと伸びる。その屈曲箇所は、どれも以下に報告する畦畔の手前であり、明らかにそれらの畦畔に規制されて流路が設定されていたことがうかがえる。大溝は土坑などの遺構を切って築かれており、その切り合い関係からもっとも新しい時期の遺構であることが確認された。

調査区内での総延長は約95mで、幅は狭い箇所で2.5m、広い箇所で5.1mを測る。平均的な幅は3.5～3.7mくらいで、深さは約0.5～0.6mである。底面のレベルは、南半部はほぼ水平であるが、北半部は南半部に比べて15cmほど低い。埋土は大きく上下2層に分かれる。下層は偽礫が混じるオリーブ黒色の細粒砂混じりシルト、あるいはシルト混じり細粒砂で、上層がシルトや炭が混じる中粒～細粒砂である。

溝の上層からは土師器、瓦器、青磁、白磁、陶器、木製品、石製品、瓦など(402～427・442～453)が、下層からは瓦器、漆器、陶器、石製品、金属製品、瓦など(428～441・454～474・671)が出土した。上層、下層ともに瓦質の火鉢や瓦が多いことが特徴である。土師器皿や瓦器碗も僅かながら出土しているが、その量は極めて少ない。おそらくこれらは溝開削時に破壊された土坑などからの混入品であったと考えられる。遺物の時期は12世紀後半～17世紀にかけての広い幅をもつが、中心は14～15世紀と考えられる。407・408・410の青磁碗は、高台内面まで施釉する。14世紀末～15世紀初頭に位置する。411は瀬戸美濃産の天目茶碗である。428は備前焼の壺で、外反する口縁をもち体部に波状紋を施す。437は16世紀代の瀬戸美濃産の折縁皿で、底部外面には糸切り痕が残る。415～417は瓦質の播鉢である。415は片口をもち、体部は緩やかに内湾し立ち上がる。口縁端部は強く外反する。416・417は口縁端部が僅かに外反し、体部外面にはハケ目が残る。15世紀末から16世紀前半に位置する。瓦質の火鉢(412・413・419～422・429～439)は口縁部の形状によって4種に大別できる。直立し端部に面をもつもの(412・420・429～431)、端部を丸くおさめるもの(419・432)、強く内湾するもの(421・422・433)、内側に張り出すもの(413)である。外面は無紋のものもあるが、唐草紋、桜花紋、菊花紋、四菱紋が施されるものが多い。また413は口縁の上端面に、貫通しない穴を穿つ。433は透かし穴をもつ風炉である。その他木製品として漆器蓋(671)や用途不明の木製品(423)が出土している。671は内外面ともに赤色で塗色する。423は一端を槌状に削り出し断面形はほぼ正円を呈す。石製品は小型の硯(424)や茶臼(427)がある。427は上臼で、側面には挽木孔を設け、その周りには方形の台座紋様が施されている。瓦は軒丸瓦(442～444・454～457)、軒平瓦(458～460)、丸瓦(445～447・461～463)、平瓦(448～451・464～472)、雁振瓦(452・453・473・474)がある。442～444・454～456は巴紋軒丸瓦である。457は複弁蓮華紋軒丸瓦である。446・452・462・474の連結面には円形のスタンプ紋を施す。469には釘穴があり、下方に×の線刻が施されている。特筆すべきものに和鏡(441)がある。直径7.3cmで、鏡背には菊花散双鶴の紋様を施す。紐は亀形を呈し、左右対称に菊を散りばめ紐の上方には2羽の鶴を描く。



1. オリーブ黒 7.5Y3/2 中粒砂～細粒砂 (シルトを含む。炭が混じる)
2. オリーブ黒 7.5Y3/2 細粒砂混じりシルトとシルト混じり細粒砂
3. オリーブ黒 7.5Y3/2 中粒砂～細粒砂 (シルトを含む。炭が混じる)
4. 灰 5Y4/1 シルト (極細粒砂を含む)
5. オリーブ黒 7.5Y3/2 細粒砂混じりシルト (偽礫が混じる。ラミナの痕跡残る)



6. 灰 10Y4/1 砂質シルト (粗粒砂～極粗粒砂を含む)
7. 灰 10Y5/1 粗粒砂～極粗粒砂 (シルトを含む)
8. 灰 7.5Y4/1 粗粒砂～極粗粒砂 (シルト偽礫を多く含む)
9. 灰 10Y5/1 粗粒砂～極細粒砂 (シルトを含む)
10. 灰 7.5Y4/1 粗粒砂～極粗粒砂
11. オリーブ黒 5Y3/1 粗粒砂～極粗粒砂 (シルト偽礫を多く含む)
12. 灰 10Y4/1 中粒砂～粗粒砂

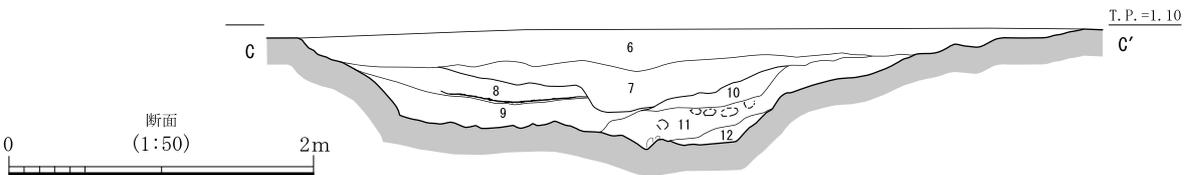
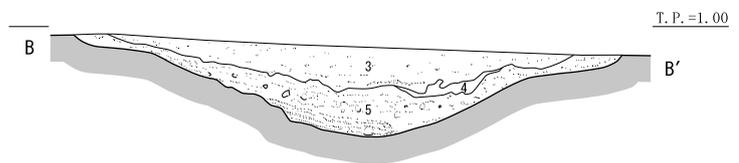


図 46 782 溝及び畦畔平面・断面図

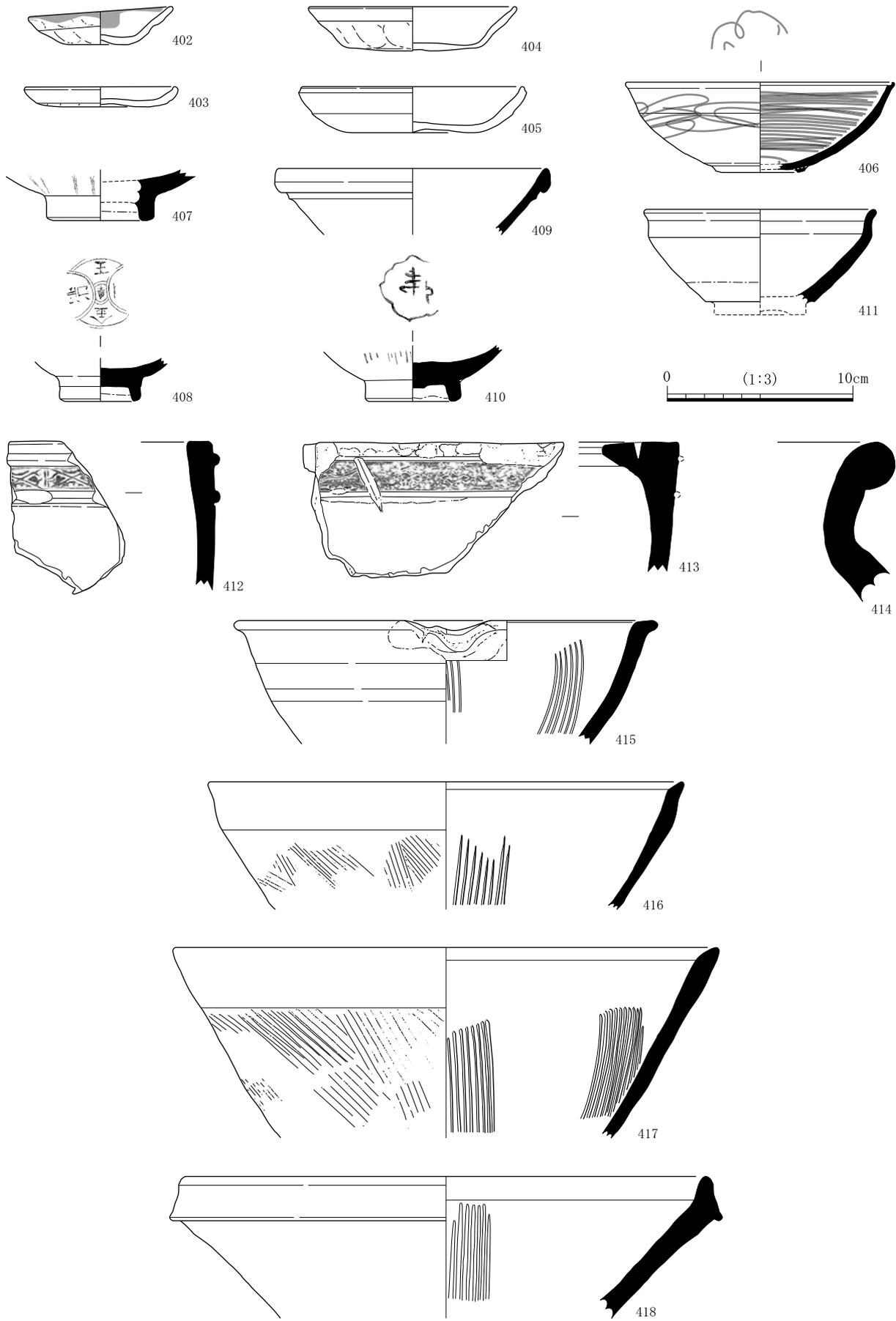


图 47 782 溝上層出土遺物実測図

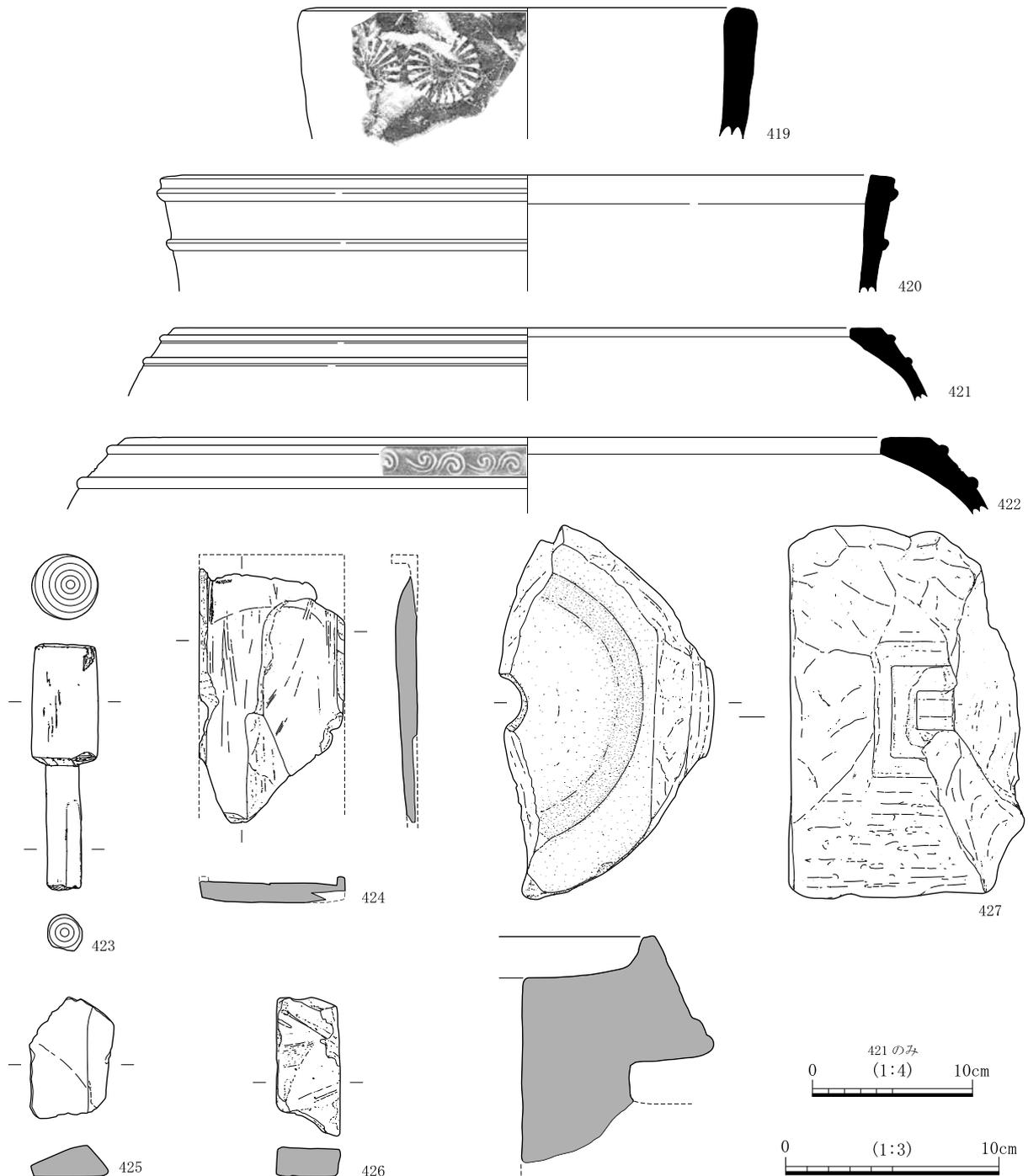


図 48 782 溝上層出土遺物実測図

なお、上記の畦畔（461・683・481・932・690 畦畔）については、遺構付近まで 3 a - 2 層が広がっていなかったため、実際には 3 b 層上面で検出しており、厳密に言えば次項で報告すべき遺構であるが、上記の状況から、明らかに 782 溝が掘削された 3 a - 2 層上面の時期まで機能していたと考えられることから、次項には含めずこの項で報告する。

461 畦畔は 4 区の 400 土坑南側で検出した東西畦畔のつづきである。4 区からそのまますぐに 7 区に向けてのびる。7 区のほぼ中央部まで達し、そこで南北畦畔（683・481 畦畔）と交わる。それよりも西側については盛り上がり認められず、つづいていたのかどうかは確認できない。

683 畦畔は 461 畦畔から直角に北に折れる畦畔である。東半部が現代の攪乱によって削られているた

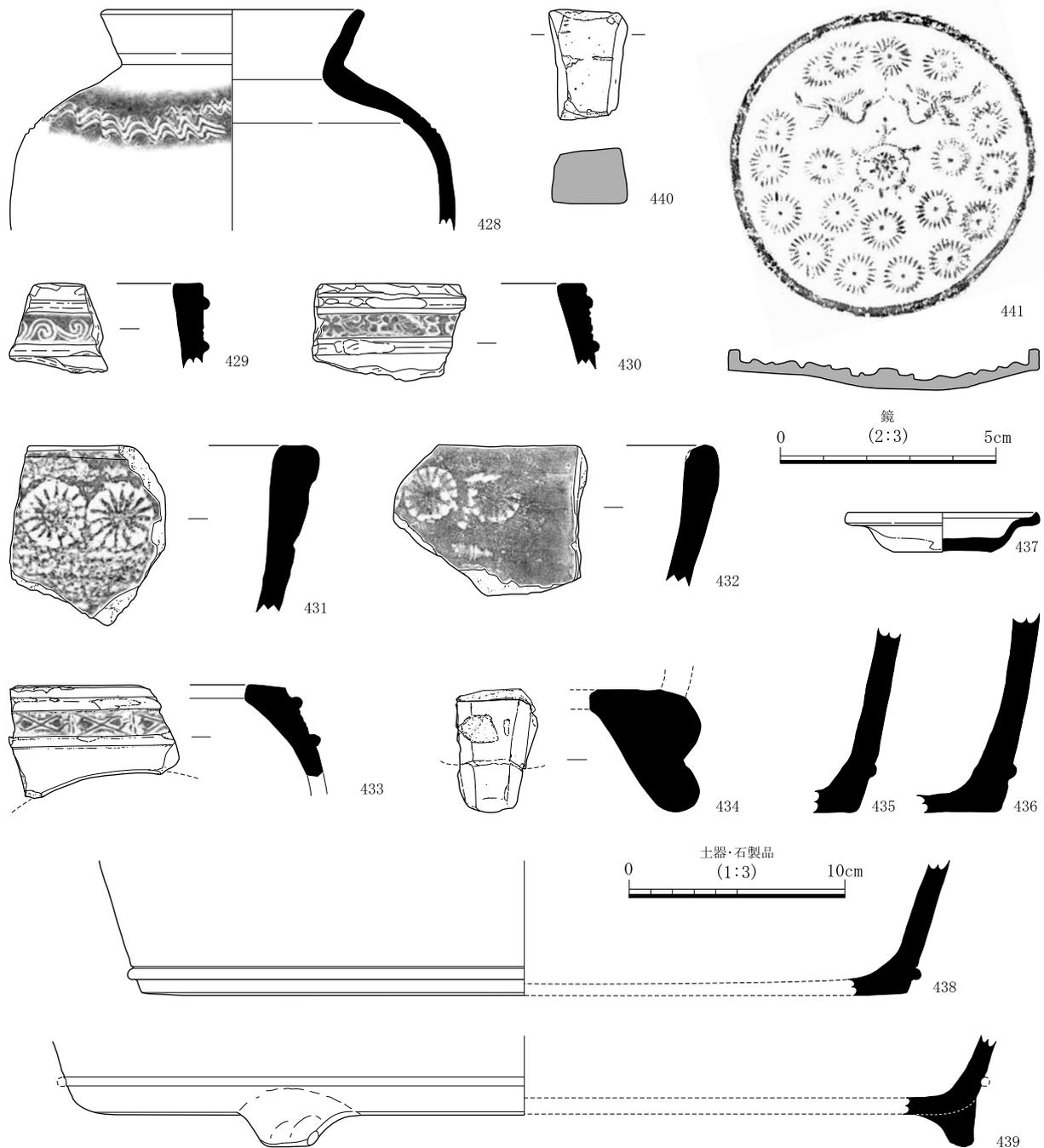


図 49 782 溝下層出土遺物実測図

め、幅は不明。高さは約 0.1 m を測る。西裾には幅約 1.1 m の浅い溝 (767 溝) を伴う。

481 畦畔は 461 畦畔から直角に南に折れる畦畔で、南端部は 4 区まで達する。総延長は約 25 m である。この畦畔も東半部が現代の攪乱によって削られているが、南端部では幅約 0.8 m、高さ約 0.2 m を測る。次項で報告する掘立柱建物や井戸・土坑等の遺構は、この 481 畦畔より西側の微高地部にのみ分布している。畦畔より東側はやや低くなっており、その一面では耕作に伴う細溝以外、顕著な遺構は広がっていない。この畦畔が居住域と生産域とを区画する役割を果たしていたと考えられる。

932 畦畔は 461 畦畔の南側に約 26 m 隔てる東西畦畔である。481 畦畔の南端部から西に向かってのびるが、481 畦畔とは交わず、僅かな間隔をあける。また 481 畦畔との角度も直角ではなく、やや開き気味の約 105 度となる。幅は約 1.0 ~ 1.4 m、高さは約 0.1 m で、481 畦畔から 12 m 西側で後述する 690

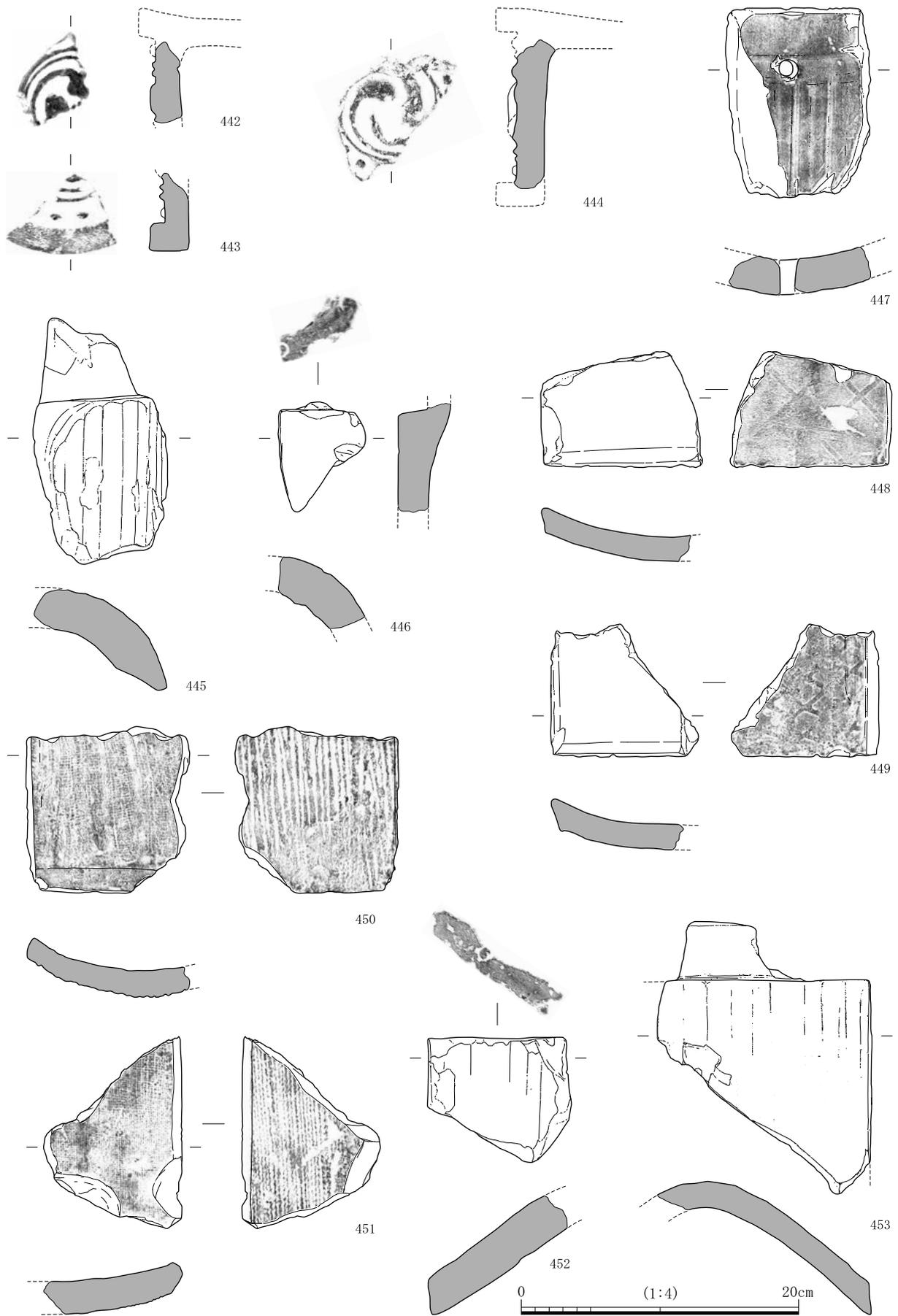


图 50 782 溝上層出土瓦実測図

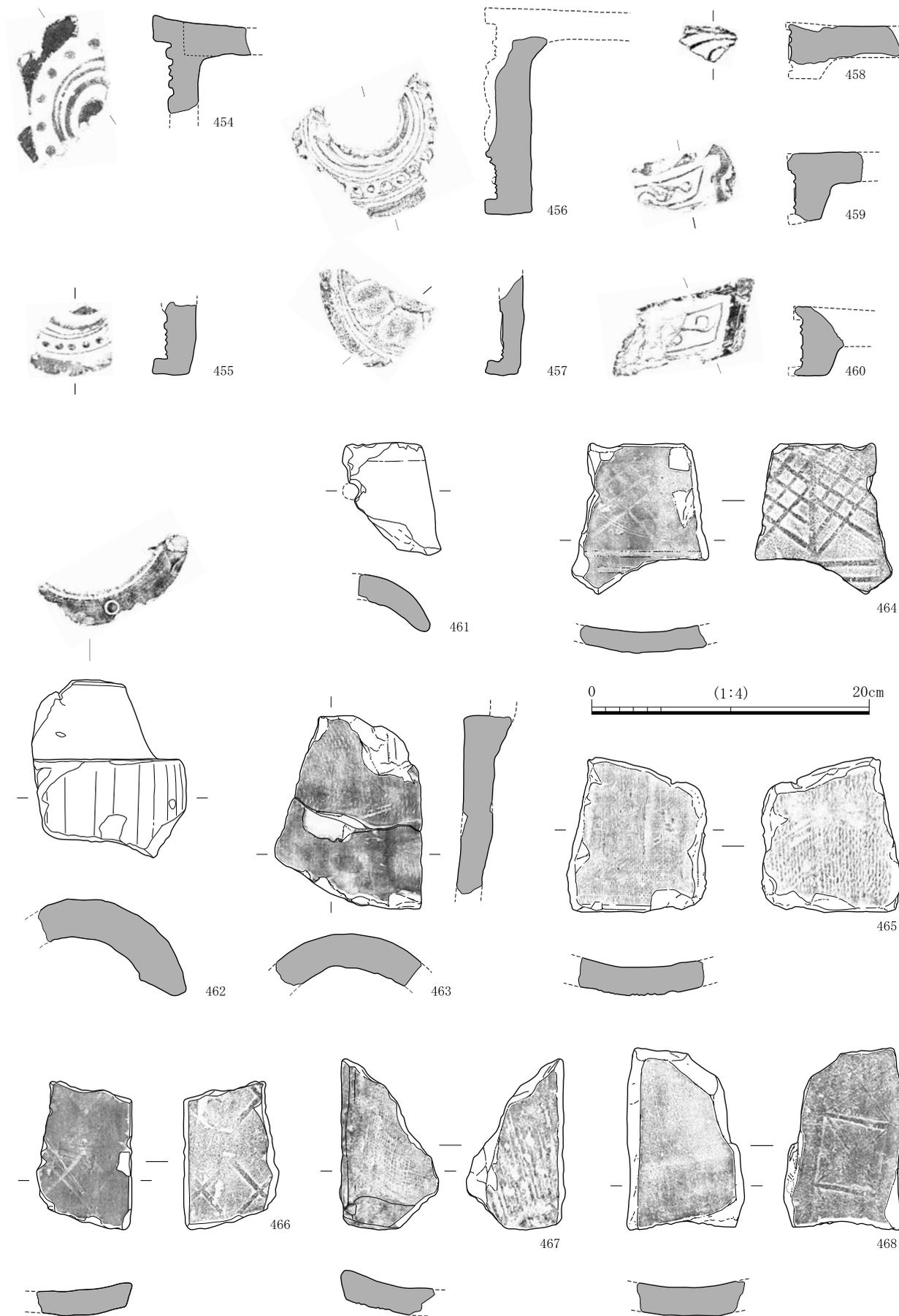


图 51 782 溝下層出土瓦実測図



图 52 782 溝下層出土瓦実測図

畦畔と交わる。それよりも西側については、明瞭な盛り上がりは認められない。この畦畔の北裾部で土器が大量に廃棄された 943 溝を検出している。

690 畦畔は 4 区の南端部で検出した南北畦畔のつづきである。4 区からそのまますぐに 7 区に向けてのび、782 溝の手前で、上記 932 畦畔と直角に交わる。規模については 4 区の項で報告したとおりである。

2.3 b 層上面検出遺構 (図 53 ~ 59・61・63・66・67・71・72・77・78・82・83・91・94)

調査区の南側約 3 分の 2 の範囲で、掘立柱建物 5 棟のほか、井戸や土坑、溝などを多数検出した。北側の約 3 分の 1 の範囲は遺構が稀薄で、特に北端部では 4 区の北側と同じく耕作溝のみとなる。

掘立柱建物 3 調査区中央の西壁寄りに位置する。桁行 3 間、梁間 2 間の東西棟で、建物の軸は座標北から東に 19 度振れる。柱間寸法は桁行が 1.8 m 等間、梁間が 2.1 m 等間である。柱穴は直径約 20 ~ 45 cm のほぼ円形で、深さは約 15 ~ 25 cm である。埋土は極細粒砂質シルトやシルト混じりの極細粒砂などで、810・845 ピットのようには柱根が残っているものもある。791 土坑を覆うような建物であったと考えている。

なおこの建物の周辺では、多数のピットを検出しており、その中には 794・799・809・828 ピット (写真図版 28・29) などのように、柱根が残るものや根石を入れるものが認められた。掘立柱建物の柱穴であったことがうかがえるが、建物跡としてまとめることができなかった。

また 792・811・821 ピットからは土師器や瓦器などの遺物も認められた (475・476・481)。475・476 の土師器皿は 14 世紀初頭に、481 の瓦器碗は 12 世紀中葉に位置する。

掘立柱建物 4 調査区中央やや南寄りの西壁寄りに位置する。東西 4 間、南北 4 間の総柱立ちの建物で、

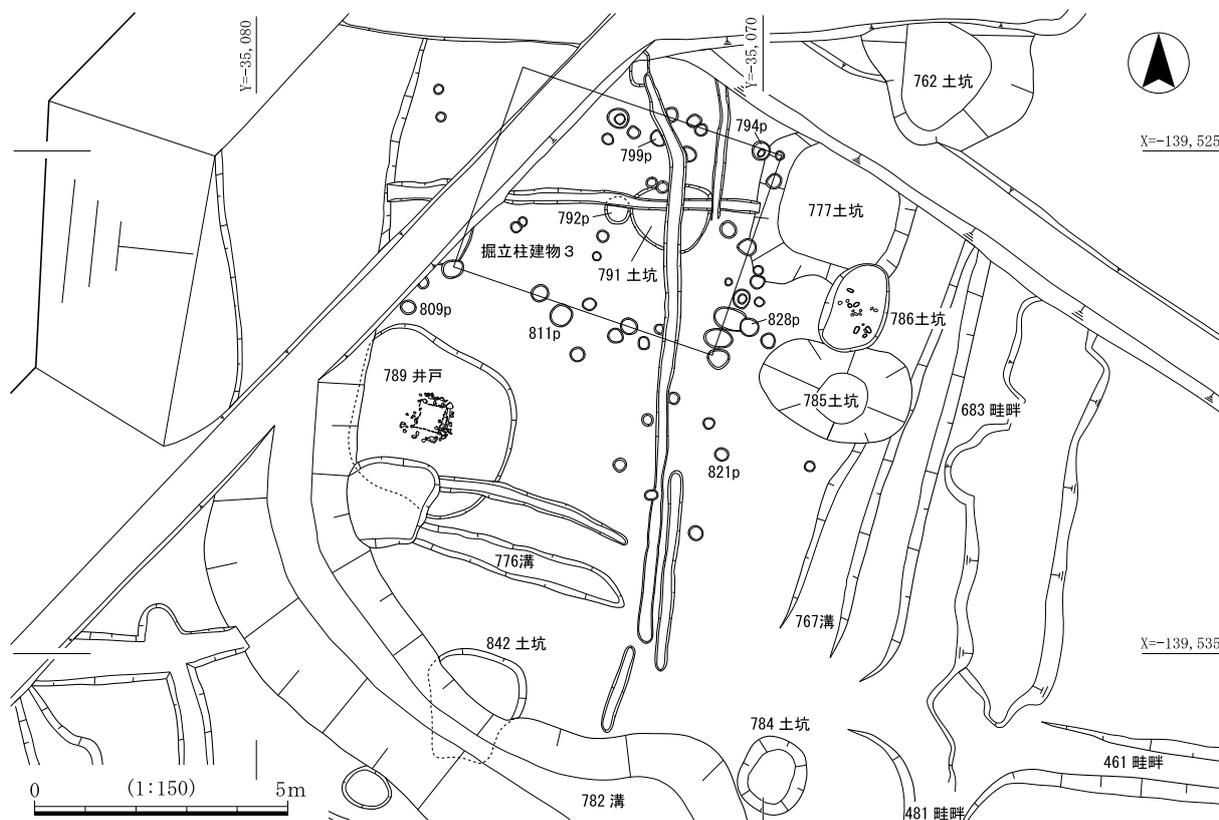


図 53 掘立柱建物 3 周辺検出遺構全体平面図

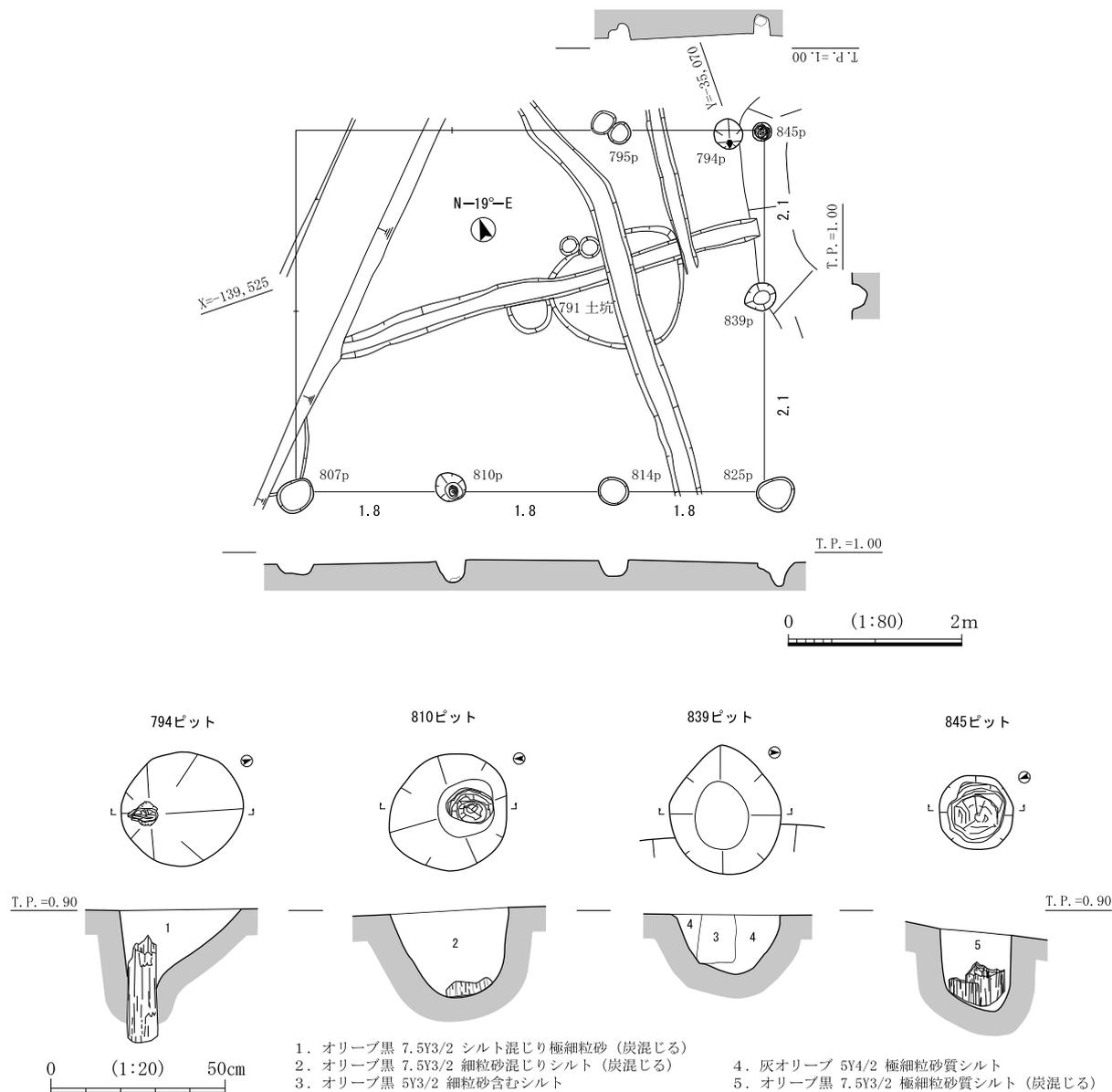


図 54 掘立柱建物 3 及び周辺検出ピット平面・断面図

建物の軸は座標北から西に3度振れる。柱間寸法は揃っておらず、東西方向の柱間は東から2.4 m、2.2 m、2.0 m、2.5 m、南北方向の柱間は南から1.2 m、2.3 m、2.5 m、2.1 mとなっている。この建物周辺の3 b層は純粋な砂層であり、柱穴の埋土も中粒～粗粒砂であったため、柱穴の検出が非常に困難であった。1065・1100・1101ピットなどは砂の色がほんやりと円形に変色していたことから、辛うじて3 b層上面で検出できたが、他の柱穴は3 b層上面では輪郭が極めて不明瞭であったため検出しきれず、3 b層を除去した4層上面での検出となった。ただし3 b層の厚みが0.5 m程度あったため、4層まで達していない柱穴については、3 b層を掘削した段階で消滅した可能性もある。北側の柱穴が未検出であるのはそのためであろう。柱穴の平面形は4層上面では直径約15～40 cmの円形、あるいは楕円形であるが、3 b層上面では直径60 cm強の円形であった。柱穴の中には1055・1060ピットのように礎板を敷くものも認められた。1055ピットに据えられていた礎板(482)は、両側面に切り込みが入れられている。

なお、この建物に近接する1068ピットからは、瓦器椀(479)と下駄(483)が出土している。479は12世紀代のもので、見込みに格子状の暗文を施す。483は連歯下駄で、平面形は楕円形を呈す。後

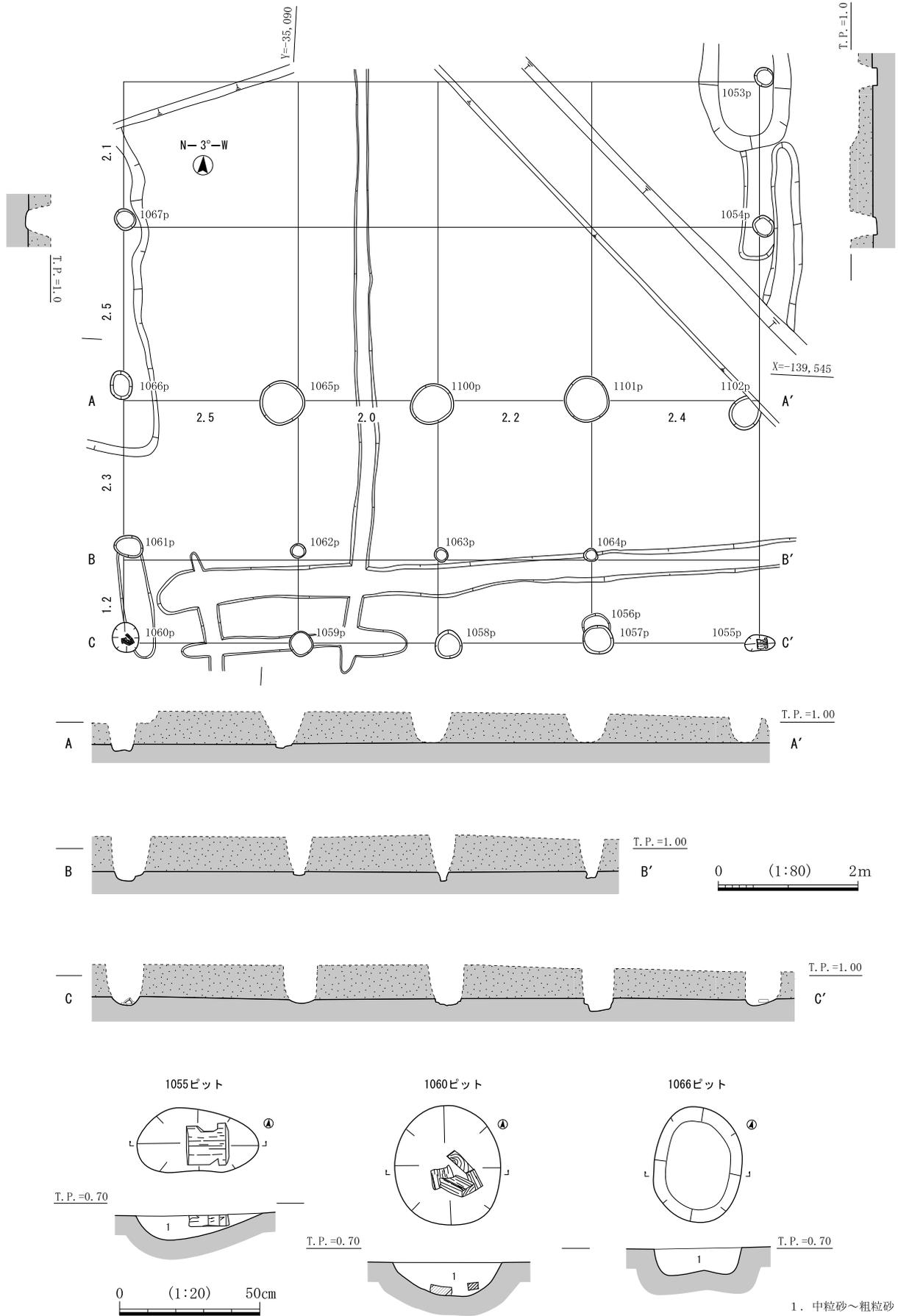


図 55 掘立柱建物 4 平面・断面図

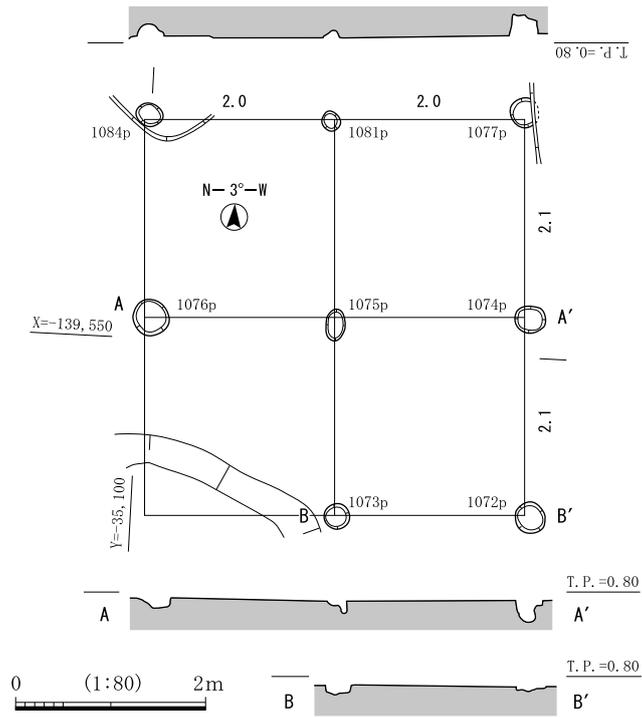


图 56 掘立柱建物 5 平面・断面图

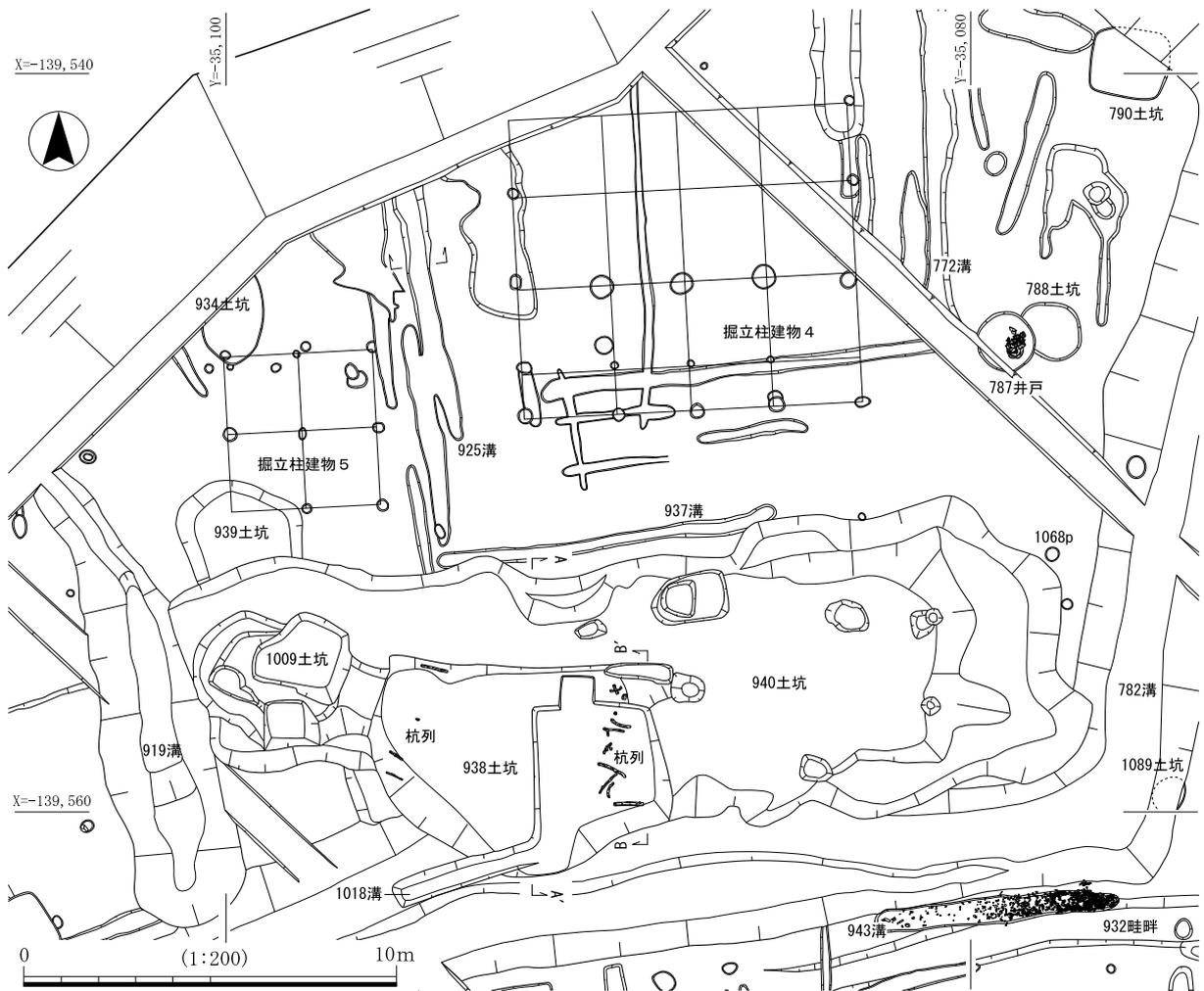


图 57 掘立柱建物 4・5 周边検出遺構全体平面图

歯が著しく摩滅している。

掘立柱建物 5 掘立柱建物 4 の西側に 4 m 隔てて位置する。東西・南北とも 2 間の南北にやや長い総柱立ちの建物である。建物の軸は掘立柱建物 4 と同じく座標北から西に 3 度振れる。柱間寸法は東西が 2.0 m 等間、南北が 2.1 m 等間である。この建物の柱穴も埋土が掘立柱建物 4 と同じく中粒～粗粒砂であったため、3 b 層上面での検出が困難であり、4 層上面での検出となった。その 4 層上面での柱穴は、直径約 20～35 cm のほぼ円形で、深さは約 5～25 cm であった。掘立柱建物 4 と同時存在と考えられる。

掘立柱建物 6・7 両者共に調査区の南壁際に位置する。03 - 1 調査の段階では、柱穴の並びから建物になることがおおよそ推定できたが、南側の柱筋が調査区外であったため、その規模等については明らかにできなかった。ひきつづき実施された 06 - 1 調査によって、南側柱筋の調査が行われ、全体規模等が判明したため、以下に 06 - 1 調査の成果も合わせて報告する。

掘立柱建物 6 は桁行 5 間、梁間 2 間の東西棟で、建物の軸は座標北から西に 7 度振れる。柱間寸法は桁行については揃っておらず、東から 2.3 m、2.5 m、2.3 m、2.0 m、2.0 m となる。梁間の柱間寸法は 1.8 m 等間である。

掘立柱建物 7 は掘立柱建物 6 の西側にややずれて位置する。両者は大きく重複しており、明らかに時期差が認められるが、お互いの柱穴に切り合い関係がなく、先後関係は明らかでない。こちらと同じ桁

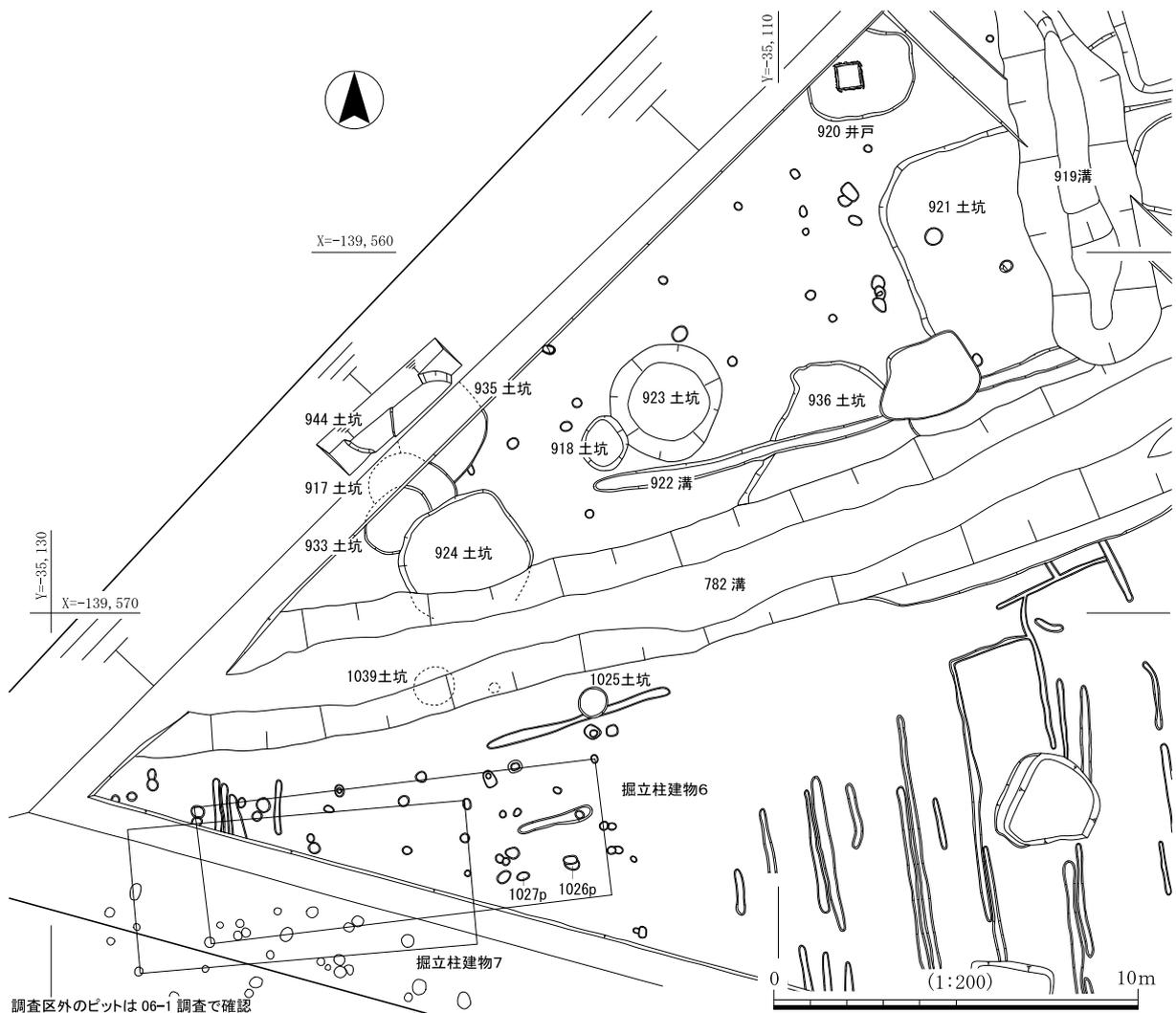
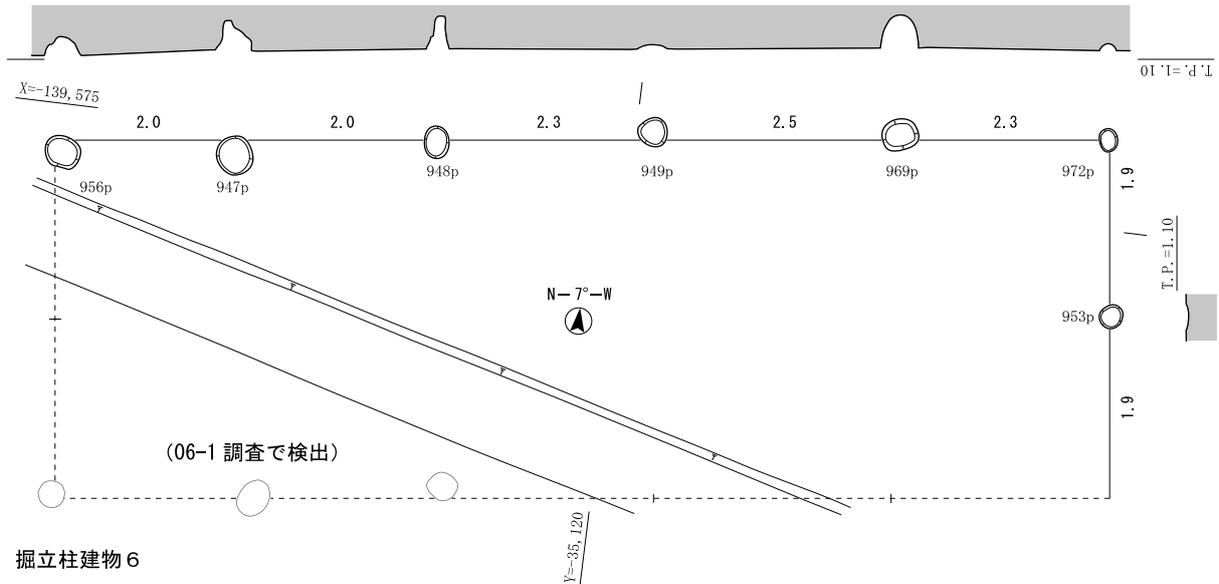
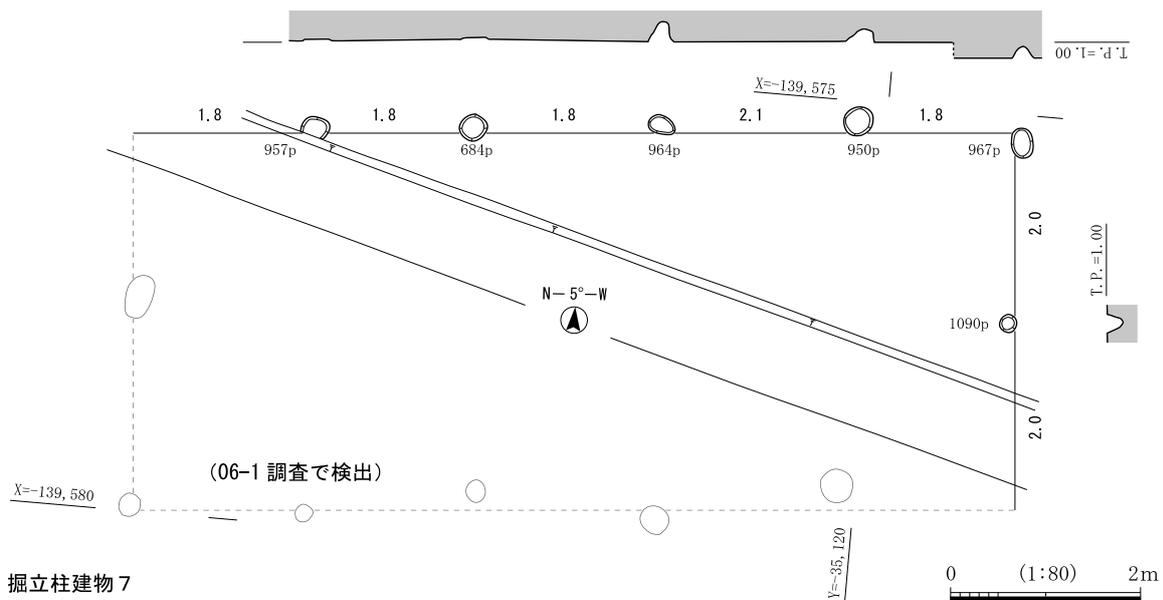


図 58 掘立柱建物 6・7 周辺検出遺構全体平面図



掘立柱建物 6



掘立柱建物 7

図 59 掘立柱建物 6・7 平面・断面図

行 5 間、梁間 2 間の東西棟であるが、建物の振れは若干異なり、座標北から西に 5 度の振れとなる。柱間寸法は桁行については東から 2 間目が 2.1 m で、ほかは 1.8 m 等間である。梁間の柱間寸法は 2.0 m 等間である。

両建物とも柱穴は直径約 20 ～ 40 cm の円形ないしは楕円形で、深さは約 5 ～ 35 cm であった。埋土は中粒～細粒砂を多く含む砂質シルト、あるいは中粒砂などである。

なおこの建物の周辺では、多数のピットを検出しており、その中には 1026・1027 ピット（写真図版 29）などのように、根石を入れるものが認められた。掘立柱建物の柱穴であったことがうかがえるが、建物跡としてはまとめることができなかった。

掘立柱建物 6 の 947 ピットからは瓦器碗（478）が、948 ピットからは瓦器皿（480）が出土している。

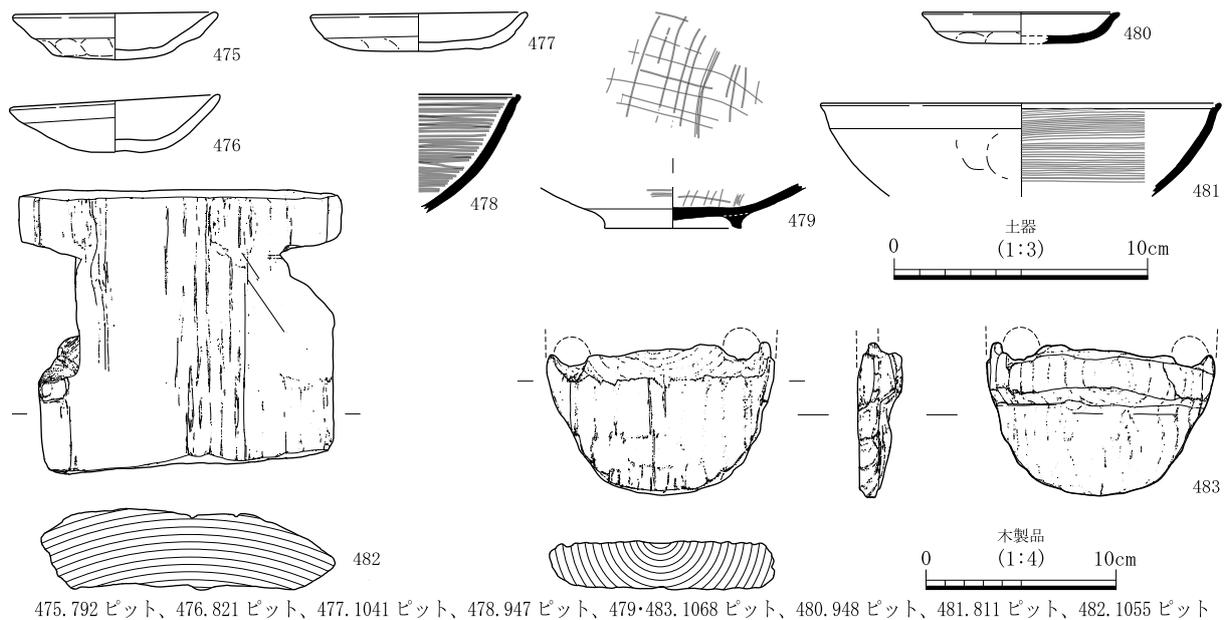


図 60 ピット出土遺物実測図

ともに 12 世紀前半のもので、478 は内面に密なミガキを施す。このほか調査区南東部検出の 1041 ピットからは 13 世紀後半の土師器皿（477）が出土している。

787 井戸 掘立柱建物 4 のすぐ東側に位置する。底を抜いた羽釜を積み重ねて井戸枠とした土器組みの井戸である。掘方の平面形は直径 1.55 m の整った円形で、深さは約 2.1 m を測る。井戸枠はその南東壁際に寄って設けられている。調査の段階では、羽釜は 8 段積み重ねられていたが、最上部の抜き取り穴からは、さらに羽釜 4 個体分の破片が見つかっており、本来は羽釜 12 段以上の井戸枠であったことが復元できる。なお、最下段の羽釜の下には底を抜いた曲物がさらに 1 段据えられている。曲物は直径約 29 cm、高さ 17 cm で、外側に高さ約 8～9 cm の曲物（籬）を 2 つ被せた二重構造となっている。掘方の埋土は下位層の粘土偽礫を多量に含むシルト混じりの細粒～極細粒砂と極細粒砂を含むオリブ黒色シルトの互層で、曲物より下は掘方が直径 25 cm 程度となり、埋土も細粒～極細粒砂となる。なお羽釜の周囲には下位層の粘土を貼り付けて固定している。抜き取り穴の埋土は偽礫を多く含む暗オリブ灰色の細粒砂混じりシルトである。

井戸からは土師器、瓦器、瓦、木製品などが出土した（484～501・512・513）。484～495 は井筒に転用した羽釜である。時期は 13 世紀後半～14 世紀初頭に位置する。多くが瓦質で、いずれも長く内湾する頸部をもつ河内型の羽釜である。外面は明瞭な段をもつものと、ほとんどもないものがある。490 は頸部外面に、連続する指頭圧痕が残る。体部内面には横位のハケ調整を施す。492 は頸部下方に粘土の接合痕が残り、体部外面はナデと一部にケズリを施す。493 は鏝を打ち欠く。土師器のもの（484・487・488）は、口縁端部をやや外側に折れ曲げるタイプで、瓦質のものよりもやや古く 14 世紀前葉に位置すると考えられる。488 は球状の体部をもち、口縁部は内湾する頸部から短く立ち上がる。体部外面にはケズリを施す。いずれの羽釜にも体部の外面または内外面に、煤の付着が顕著にみられる。掘方からは、500 の 13 世紀後半の瓦器椀が出土している。また井戸の下層から出土した 498・499 のミニチュア瓦器椀は、ともに高台をもたず内外面に丁寧なナデを施す。口縁端部は外反する。その他に 6 段目羽釜内より、501 の唐草紋軒平瓦が出土した。512 は井戸最下部に設けられた曲物で、側板と籬はともに 1 列の楼皮で綴る。最下部の釘穴には木釘が残る。513 は毬杖の毬、あるいはその未成品と考えられる。

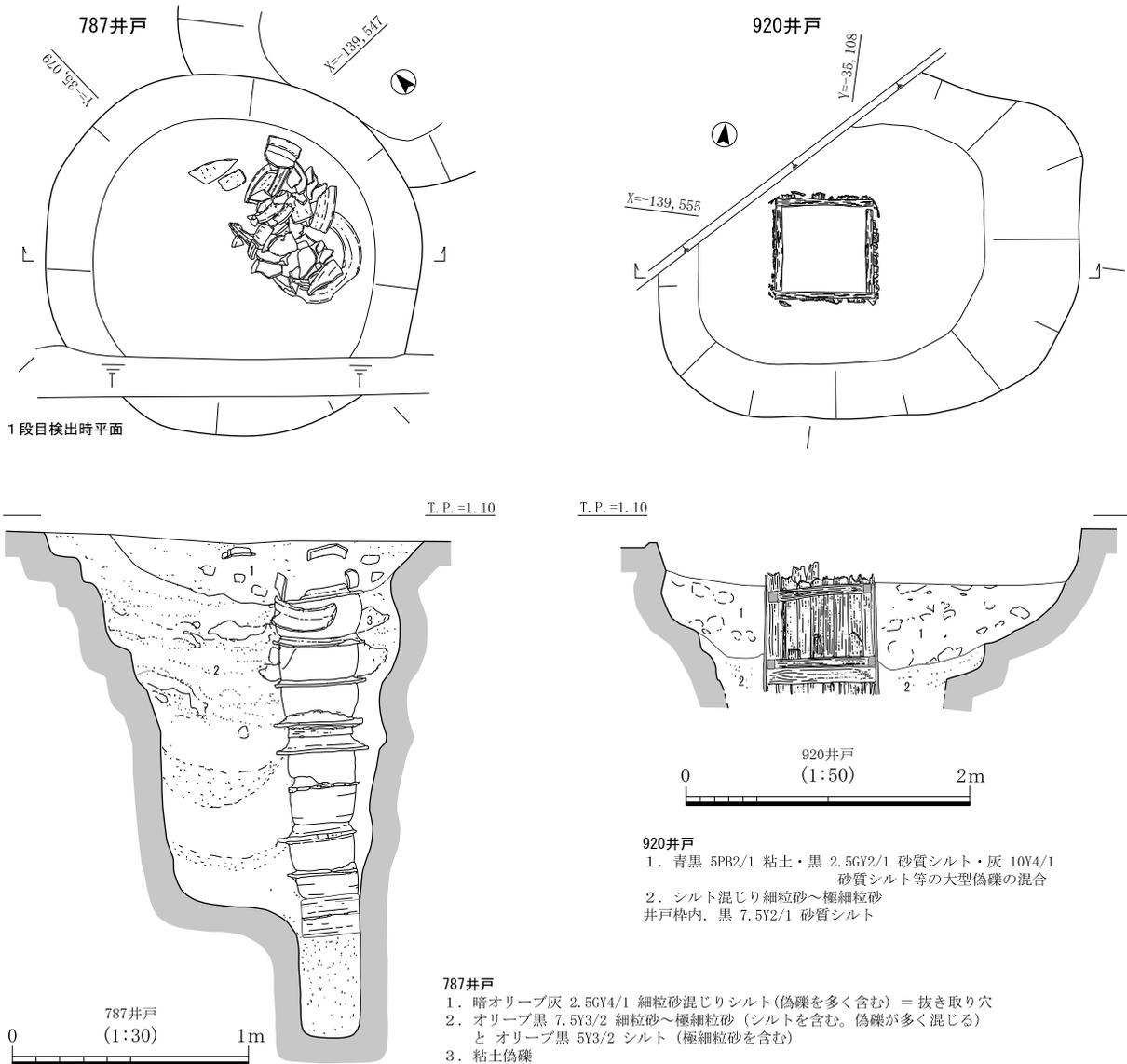


図 61 787・920 井戸平面・断面図

上下の木口と側面の一部を削り球状にするが、側面には樹皮を剥いだままの部分が多く残る。

789 井戸 掘立柱建物 3 の南側に位置する。木組みの井戸枠をもつ井戸である。掘方の平面形は南北約 3 m、東西約 3.2 m の歪んだ隅丸方形で、その中央に一辺約 0.6 m の平面方形の井戸枠を埋設する。井戸枠の構造は 3 重で、まずは四隅に一辺 0.45 m 程度になるように、長さ 1.6 m ほどの柱を立て、その外側に方形の枠を上中下三段に組んで、骨格となる木枠をつくる。つづいてその周囲に幅約 25～35 cm、長さ約 1.6 m、厚さ約 3～4 cm の板材を 1 面に 2 枚ずつ縦羽目としておおよその形をつくり、最後にその上端部外側周囲に幅約 7～8 cm、長さ 40～45 cm の短冊状の薄板を縦に貼るというものである。この薄板は、板材の上に 20 cm ほど突き出ているため、井戸枠自体の深さは約 1.8 m となるが、掘方の底は確認できていない。掘方の埋土は、上端部にシルトを含む偽礫混じりの細粒～極細粒砂が認められるが、大半は大型の偽礫が多く混じるシルトを含む粗粒～細粒砂である。なお井戸枠の外側には 787 井戸と同様に、6 層や 7 層と思われる黒色ないしはオリーブ黒色のシルト～粘土の大型偽礫を貼り付けて枠を固定している。枠内の埋土は下層から、オリーブ黒色のシルトを含む粗粒～細粒砂、炭・粗粒～細粒砂混じりのシルト、粗粒砂や木質・人頭大の石を含むシルト、拳大の石・極細粒砂を含む炭混じりシルト、

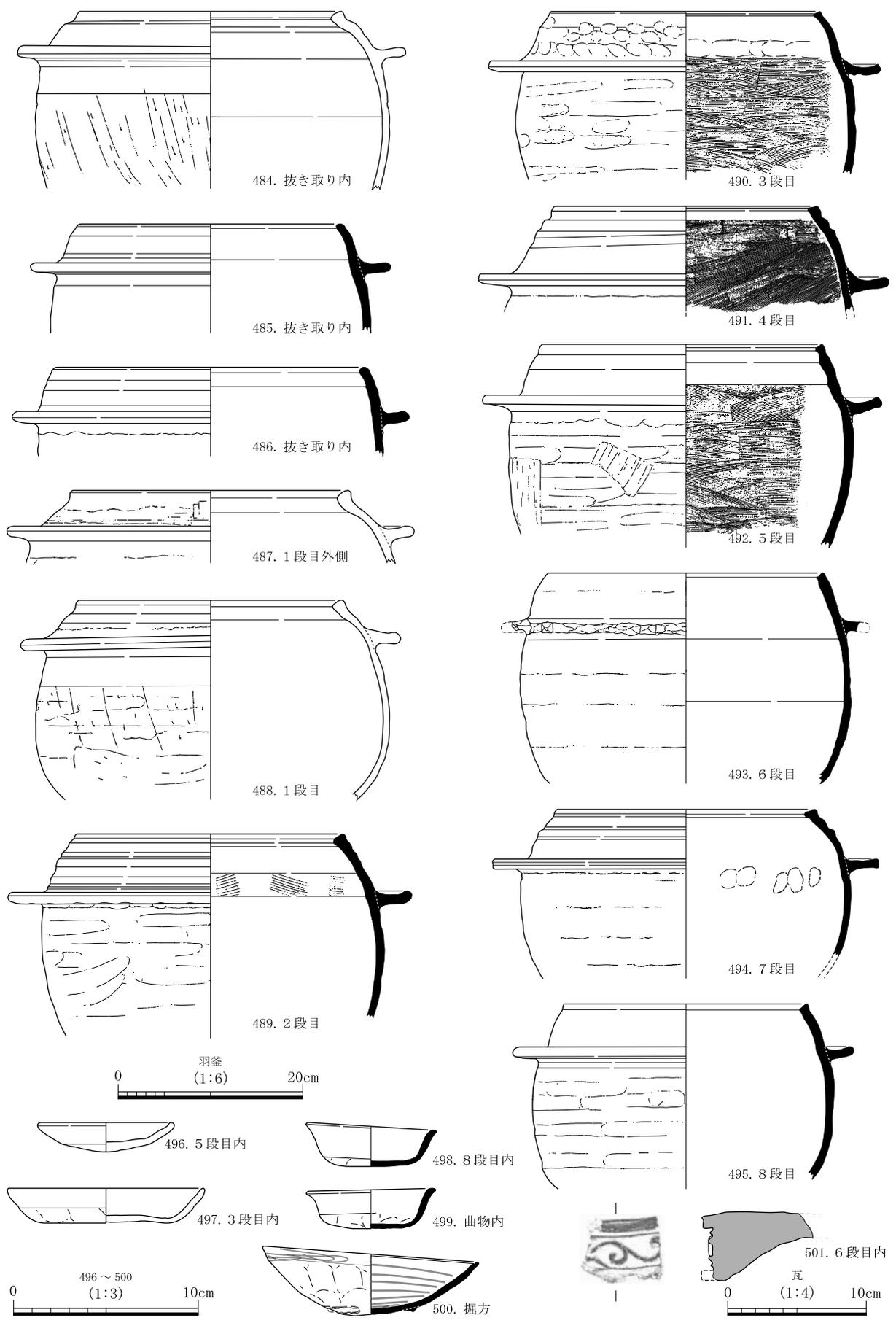
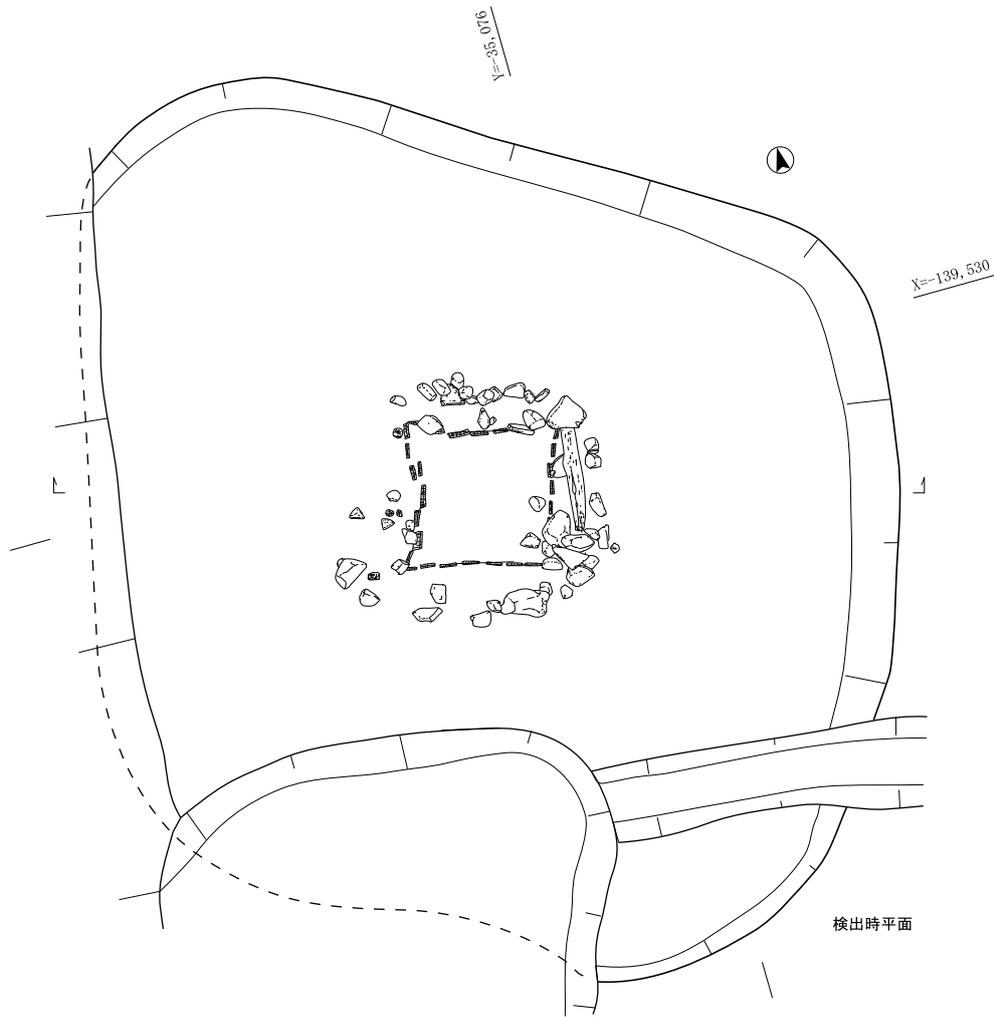


图 62 787 井戸出土遺物実測図



1. オリーブ黒 5Y3/2 シルト (粗粒砂を含む。細粒砂～極細粒砂偽礫が混じる)
2. オリーブ黒 7.5Y2/2 シルト (極細粒砂を含む。炭が混じる)
3. オリーブ黒 7.5Y2/2 シルト (粗粒砂と木質を含む)
4. オリーブ黒 7.5Y2/2 粗粒砂～細粒砂混じりシルト (炭が混じる)
5. オリーブ黒 7.5Y3/2 粗粒砂～細粒砂 (シルトを含む)
6. オリーブ黒 7.5Y3/2 細粒砂～極細粒砂 (シルトを含む。偽礫が混じる)
7. オリーブ黒 7.5Y3/2 粗粒砂～細粒砂 (シルトを含む。偽礫が多く混じる)
- BL1. 黒 5Y2/1 シルト～粘土
- BL2. オリーブ黒 5Y3/2 シルト～粘土

図 63 789 井戸平面・断面図

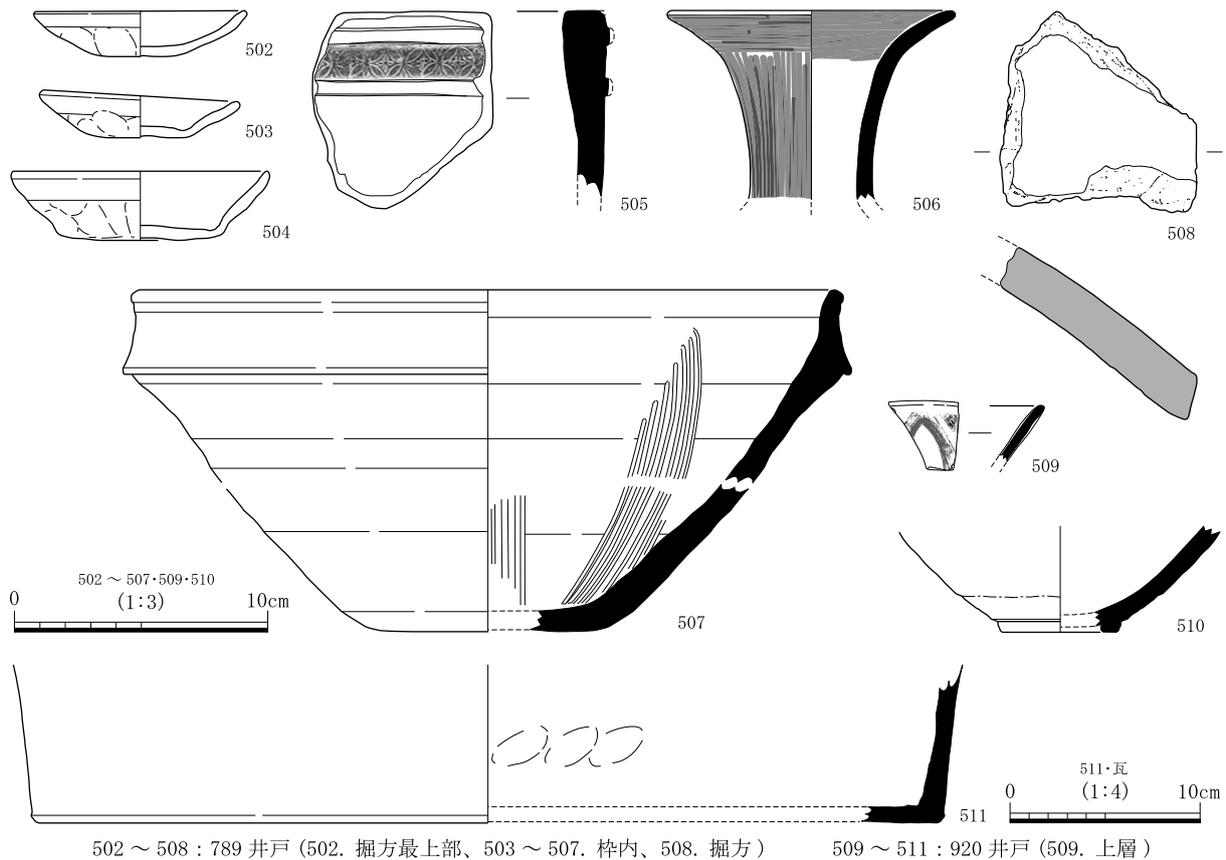


図 64 789・920 井戸出土遺物実測図

粗粒砂を含む細粒～極細粒砂偽礫混じりのシルトで、井戸枠の上端部には、井戸枠内からも見つかったような拳大の石が多数散乱していた。木組み部よりも上部が石組みとなっていた可能性も考えられる。

井戸枠内からは土師器、瓦器、陶器、瓦、木製品などが出土した (502 ~ 508・514)。遺物の時期は 14 ~ 15 世紀の幅をもつ。土師器皿 (503・504) は 14 世紀前半に位置するものである。備前焼の挿鉢 (507) はやや内湾する体部をもち、口縁は上下に強く拡張する 15 世紀代のものである。特筆すべきものに 506 の瓦質の仏花瓶がある。口縁部は強く外反し端部は丸くおさめ、内外面に隙間なく密なミガキを施す。514 は曲物の底板である。掘方の埋土からは土師器皿 (502) や雁振瓦 (508) が出土している。

920 井戸 掘立柱建物 5 西側の調査区西壁際に位置する。789 井戸と同じく木組みの井戸枠をもつ井戸

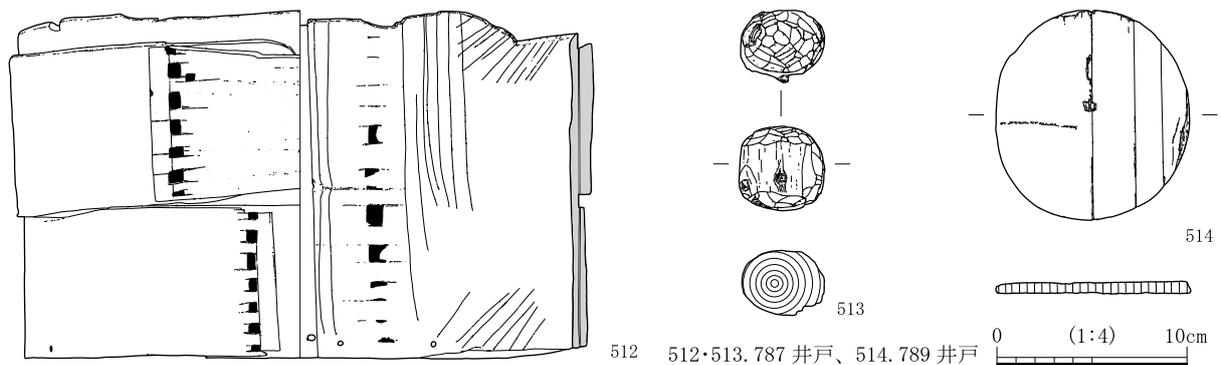


図 65 787・789 井戸出土木製品実測図

である。掘方の平面形は南北 2.5 m、東西 3.0 m の隅丸長方形で、その中央やや西寄りに一辺約 0.7 m の井戸枠を埋設する。井戸枠の構造は 789 井戸とは若干異なり、四隅の柱を横木によって繋いで木枠をつくり、その外側に幅約 10 cm の短冊状の薄板を縦方向に張り付けたものである。調査区の壁際であったため、安全管理上、遺構検出面から 1.2 m までしか調査することができず、底までは確認できていない。掘方の埋土は下層がシルト混じりの細粒～極細粒砂で、上層が青黒色粘土・黒色砂質シルト・灰色砂質シルト等の大型偽礫の混合層である。井戸枠内は黒色砂質シルトである。

出土遺物には瓦器、青磁、白磁などがある (509～511)。509 は龍泉窯の青磁碗で、13 世紀前半頃のものである。510 は白磁碗である。黄灰白色の釉薬がかかる。511 は瓦質の深鉢である。平底で直線的に伸びる体部をもつ。内面には指頭圧痕が残る。

761 土坑 調査区北方の西壁寄りに位置する。平面形は長辺 2.15 m、短辺 1.75 m の南北にやや長い整った長方形を呈する。深さは 0.3 m で、埋土は黒褐色のシルト偽礫を含む灰色シルト混じりの細粒～極細粒砂である。

なお、この土坑より北側には、ピットや土坑等の遺構が全く築かれておらず、4 区の北方と同じく耕作溝のみが広がっている。耕作溝は 761 土坑の北側約 10 m 付近くらいまでは東西方向が主であるが、それよりも北側では南北方向が主となる。

763・764・765 土坑 調査区北方の 4 区寄りに位置する。763 土坑は 764・765 土坑と一部重複し、両者を切る。

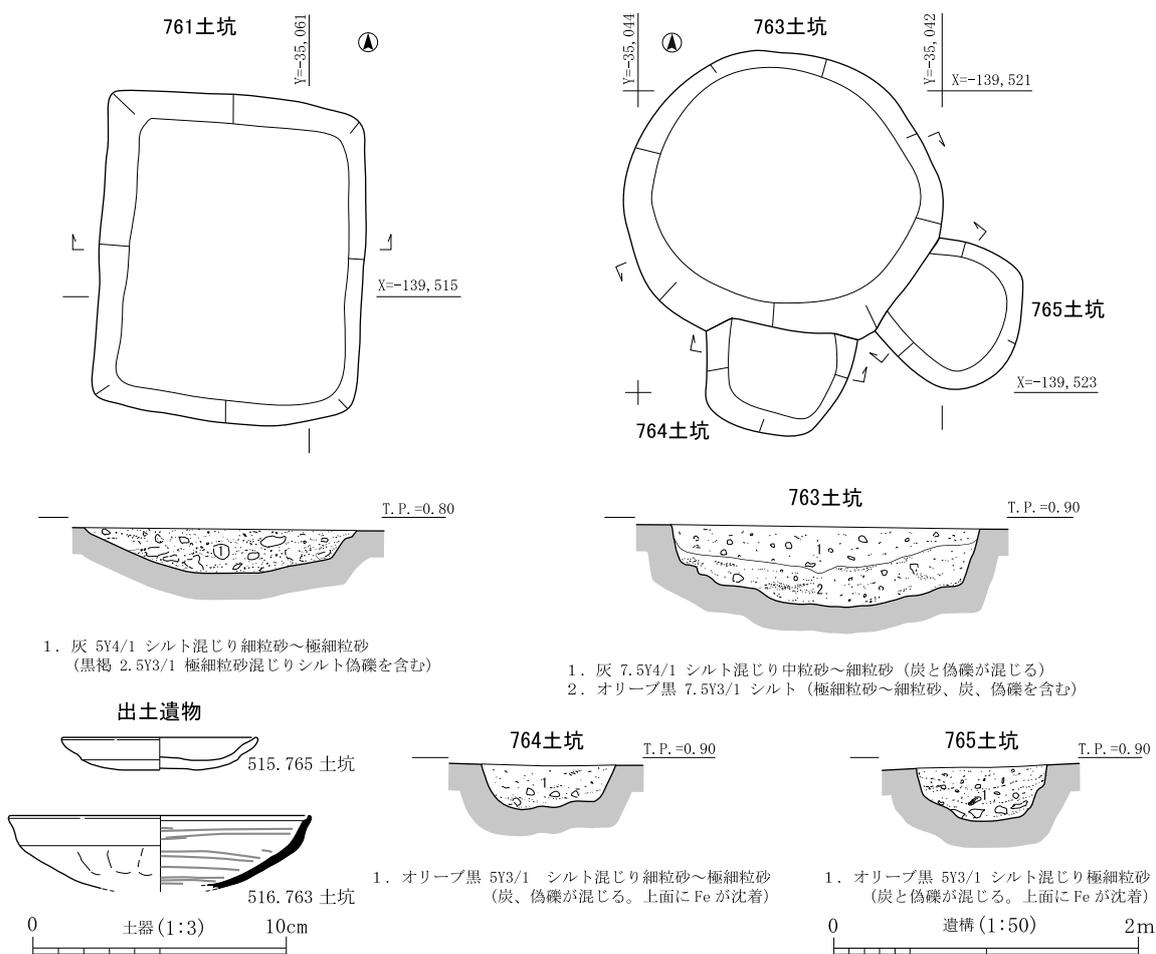


図 66 761・763～765 土坑平面・断面図及び出土遺物実測図

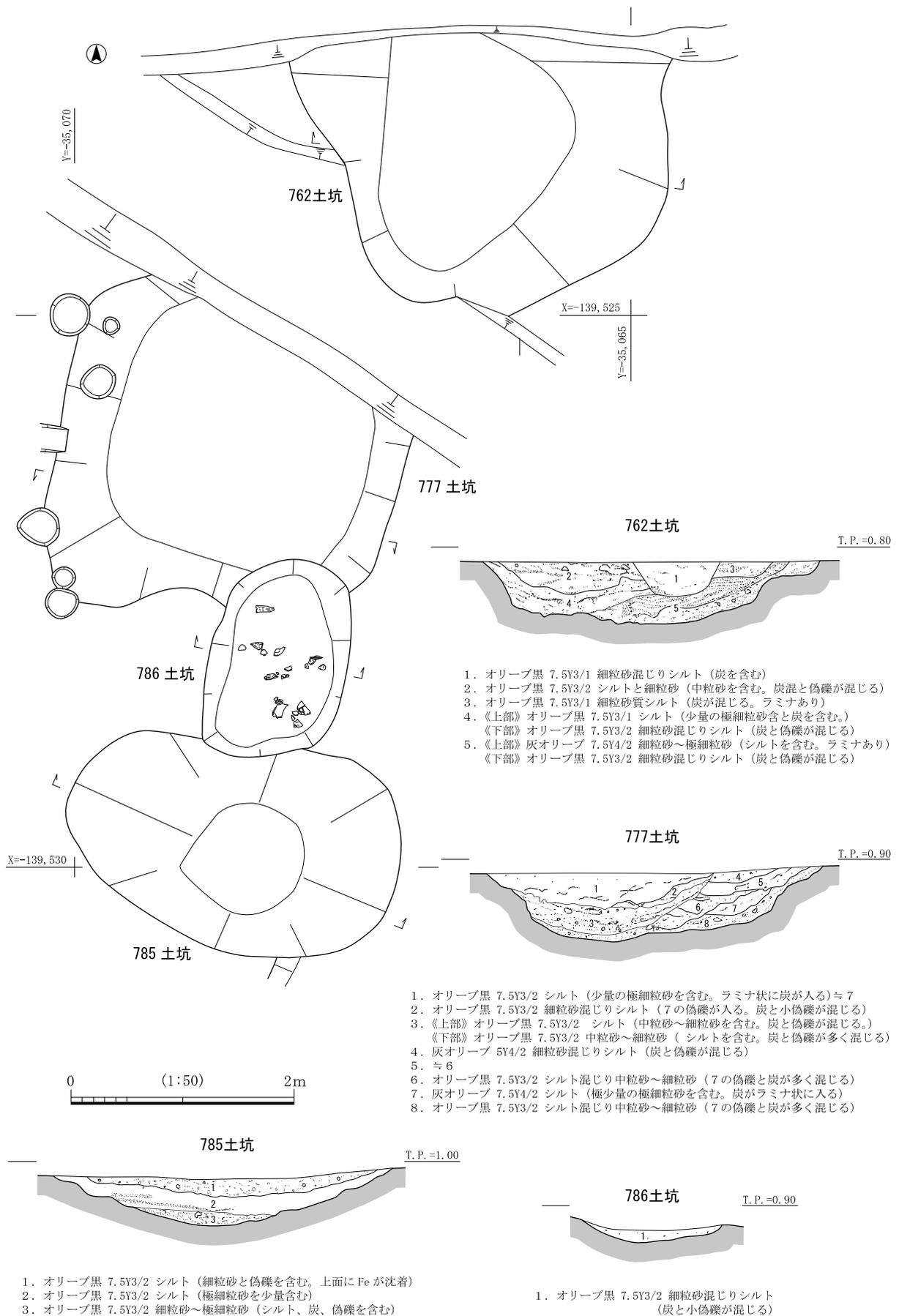


図 67 762・777・785・786 土坑平面・断面図

763 土坑は直径約 2.0 m の平面円形を呈し、深さは 0.55 m を測る。埋土は下層が極細粒～細粒砂や炭・偽礫を含むオリーブ黒色シルトで、上層が炭や偽礫が混じる灰色のシルト混じり中粒～細粒砂である。

764 土坑は東西約 0.9 m の平面隅丸方形を呈し、深さは 0.3 m を測る。埋土は炭や偽礫が混じるオリーブ黒色のシルト混じり細粒～極細粒砂である。

765 土坑は直径 0.85 m の平面円形を呈し、深さは 0.38 m を測る。埋土は炭や偽礫が混じるオリーブ黒色のシルト混じり極細粒砂である。

763 土坑からは瓦器椀 (516) が、765 土坑からは土師器皿 (515) が出土した。ともに 13 世紀中葉～後葉に位置するものである。

762 土坑 761 土坑の南側に位置する。遺構の北側が溜池状の大きな攪乱によって削られているが、平面形は一辺 3 m 前後の隅丸方形に復原できる。深さは 0.57 m で、埋土は炭や偽礫が混じるオリーブ黒色のシルトや細粒砂混じりのシルトなどである。断面観察によって、遺構の掘り直しが行なわれていることが判明した。

土坑からは土師器、瓦器が出土した (517・518・527)。土師器皿 (517・518) は 14 世紀後半に位置する。527 は 15 世紀代の瓦質の羽釜である。やや尻すぼみの胴部にほぼ直立する口縁をもち、体部外面上半には粘土の接合痕と指頭圧痕が残り、下半には横位のケズリを施す。このほか雁振瓦片も出土している。

777 土坑 762 土坑のすぐ南側に位置する。南側は 786 土坑と一部重複し、786 土坑に切られる。また北側の一部は確認調査時のトレンチによって削られている。762 土坑によく似た土坑で、平面形は一辺約 3.1 m の隅丸方形に復原できる。深さは 0.7 m で、埋土は偽礫と炭が多く混じるオリーブ黒色のシルト混じり中粒～細粒砂、あるいは細粒砂混じりシルトなどである。断面観察によって、この土坑にも掘り直しによる規模の縮小が認められた。

土坑からは土師器、瓦器、青磁、石製品、金属器などが出土した (523～526・529・530)。遺物の時期は 15 世紀代を中心とする。523 は灯明皿で、内面底部に煤が付着する。15 世紀末に位置する。525 は龍泉窯の青磁碗である。14～15 世紀前半に位置する。526 は瓦質の播鉢である。体部外面はケズリを施し、内面の播目には使用の痕跡がみられる。15 世紀初頭頃のものである。529 は鉄の角釘で、胴部下半が大きく折れ曲がる。一寸半を意図して作られたと考えられる。このほか 530 の小型の硯が出土している。

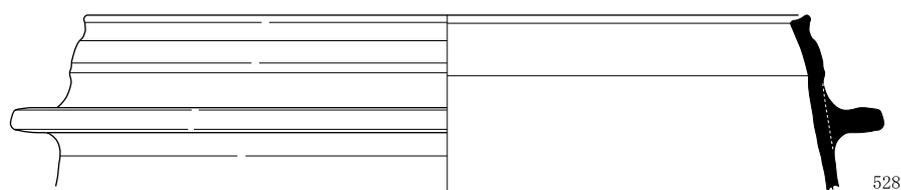
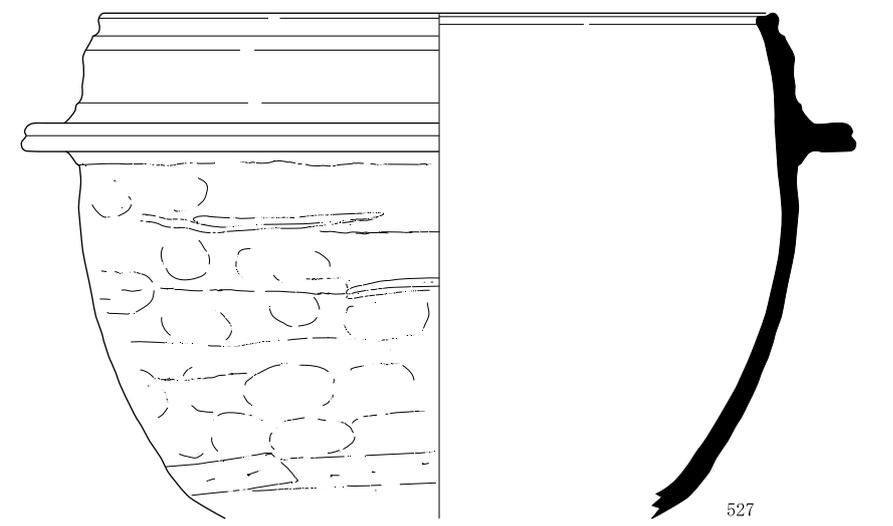
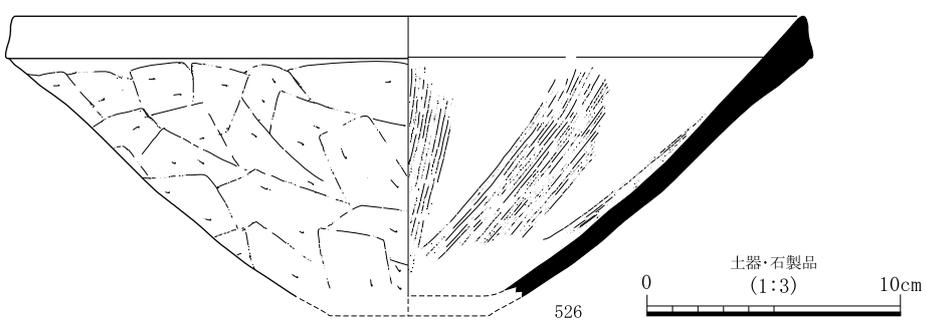
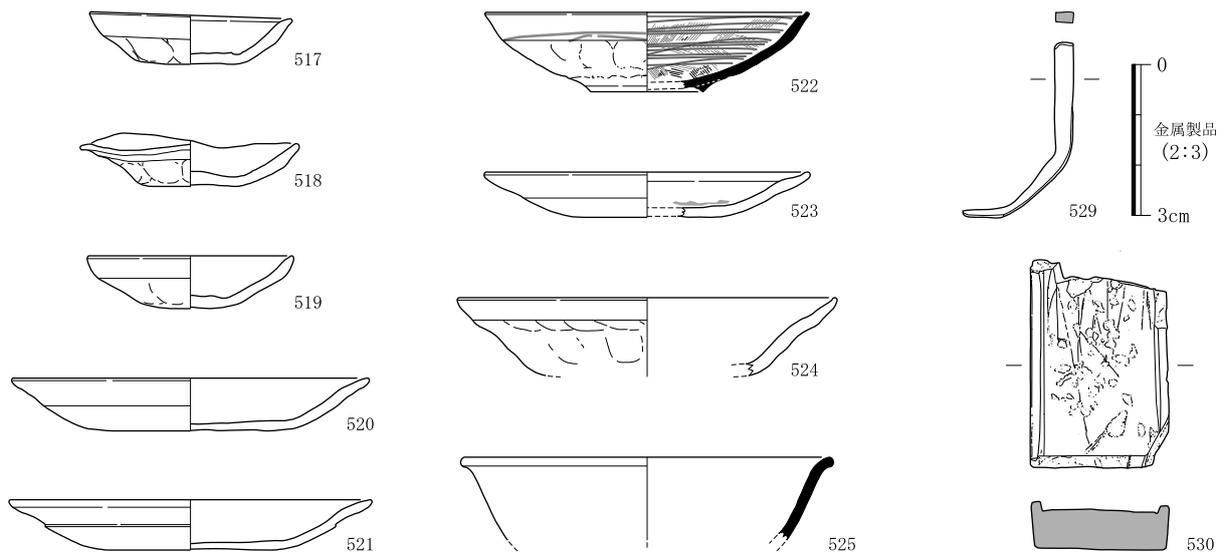
786 土坑 777 土坑の南側に接する。777・785 土坑と一部重複し、その両者を切る。平面形は長径 1.8 m、短径 1.25 m の南北に長い楕円形を呈する。深さは約 0.2 m で、底には土器が散乱していた。埋土は炭と小偽礫が混じるオリーブ黒色の細粒砂混じりシルトである。

土坑からは土師器、瓦器などが出土した (519～521・528)。土師器皿 (520・521) は 15 世紀末に位置するものである。528 は 15 世紀代の瓦質の羽釜である。頸部はほぼ直立し、鏝は短く端部に面をもつ。

785 土坑 786 土坑の南側に接し、786 土坑に切られる。平面形は長径約 3.0 m、短径約 2.0 m の東西に長い楕円形を呈する。深さは約 0.5 m で、埋土は炭や偽礫を含むオリーブ黒色のシルトや細粒～極細粒砂である。

土坑からは瓦器椀 (522) が出土した。内面の粗いミガキの下にはハケ目が残る。13 世紀中葉頃のものである。

791 土坑 掘立柱建物 3 の内側、やや東寄りに位置する。平面形は東西 1.54 m、南北 1.33 m の楕円形で、深さは 0.34 m を測る。埋土は偽礫を含むオリーブ黒色のシルト、あるいは細粒砂混じりのシルトなどで、



517・518・527. 762 土坑、519～521・528. 786 土坑、522. 785 土坑、523～526・529・530. 777 土坑

図 68 762・777・785・786 土坑出土遺物実測図

炭や焼土が多く混入することを特徴とする。建物内で焼成行為が行なわれたことがうかがえる。

784 土坑 785 土坑の南方に位置する。平面形は長径 1.5 m、短径 1.3 m の隅丸方形に近い楕円形を呈する。深さは 0.35 m で、埋土は偽礫とシルトが混じる細粒砂である。

788 土坑 787 井戸の東側に接し、787 井戸に切られる土坑である。遺構検出面での平面形は直径約 1.6 ～ 1.8 m の隅丸方形に近い円形であるが、0.25 m ほど掘り下げると、平面形は一辺 0.9 ～ 0.95 m 程度の方形となり、底部ではそれが一辺 0.4 m 程度となる。断面形は上端部では漏斗状を呈するが、平面形が方形になるあたりから壁面は急傾斜となり、底面も水平となる。深さは 1.6 m で、埋土は上端部が炭を含む中粒～細粒砂や極細粒砂を含むシルト偽礫、下部が偽礫を含むシルト混じりの粗粒～細粒砂である。

790 土坑 788 土坑の北側に位置し、北側の一部が 782 溝によって削られている。平面形は南北 1.85 m、東西 2.15 m の整った隅丸長方形を呈する。遺構検出面から 2.1 m の深さまで掘削したが、底を確認することはできなかった。壁面は急傾斜で、小さな階段状の段々が 4 方ともに認められる(写真図版 28 - 3)。これは 5 区で検出した 703 土坑にも認められる特徴である。埋土は下層と中層が 6 層の大型黒色偽礫を多く含む中粒～細粒砂で、上層が偽礫を多く含むシルト混じりの細粒～極細粒砂である。以下に報告するとおり、大量の細木(箸)が出土したことから、便所遺構である可能性も考えられたが、埋土中からは僅かに数点のウリと思われる種が出土した以外、それを示すような積極的な資料は得られなかった。

土坑からは土師器、瓦器とともに木製の箸が多数出土した(531～544)。土師器皿(531～535)や

瓦器椀(536・537)はいずれも 13 世紀中葉に位置する。箸(538～544)は遺存状態が良好なものだけでも 112 本を数える。断面はほぼ円形を呈し、両端部を細く削る。長さは短いもので 19.1cm、長いもので 23.3cm までみられるが、20.6～21.6cm におさまるものが大半である。(図 69)

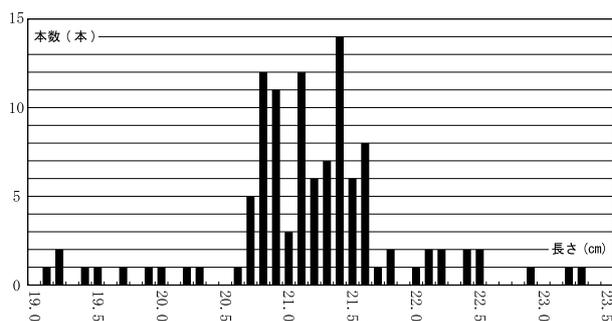


図 69 790 土坑出土箸計測値分布図

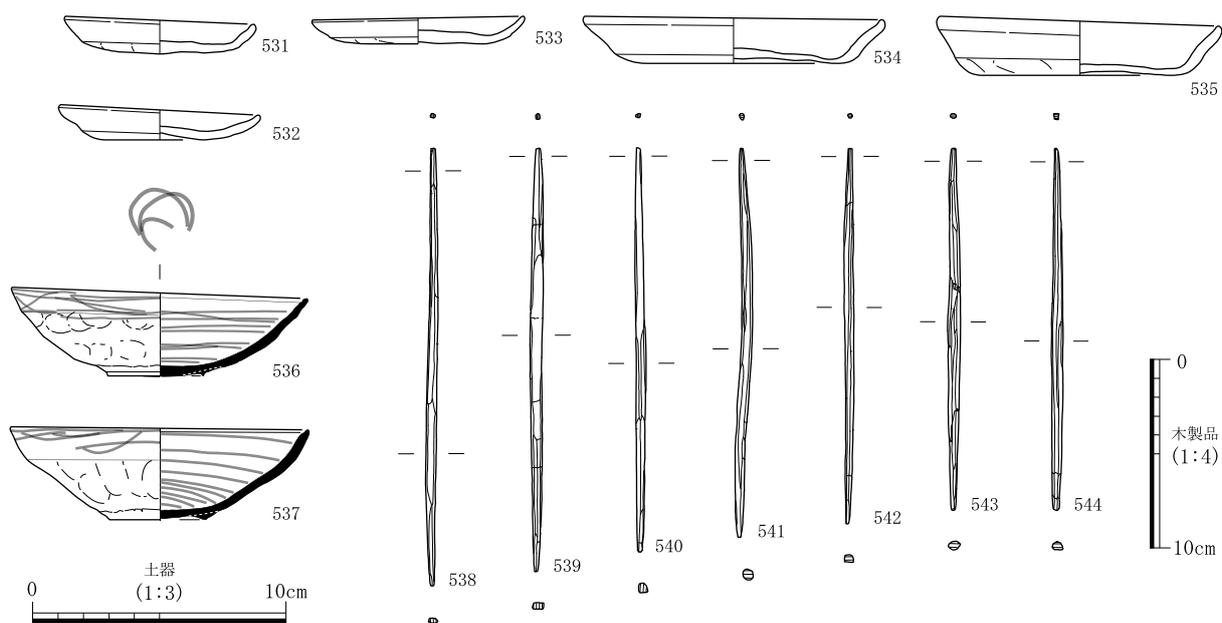


図 70 790 土坑出土遺物実測図

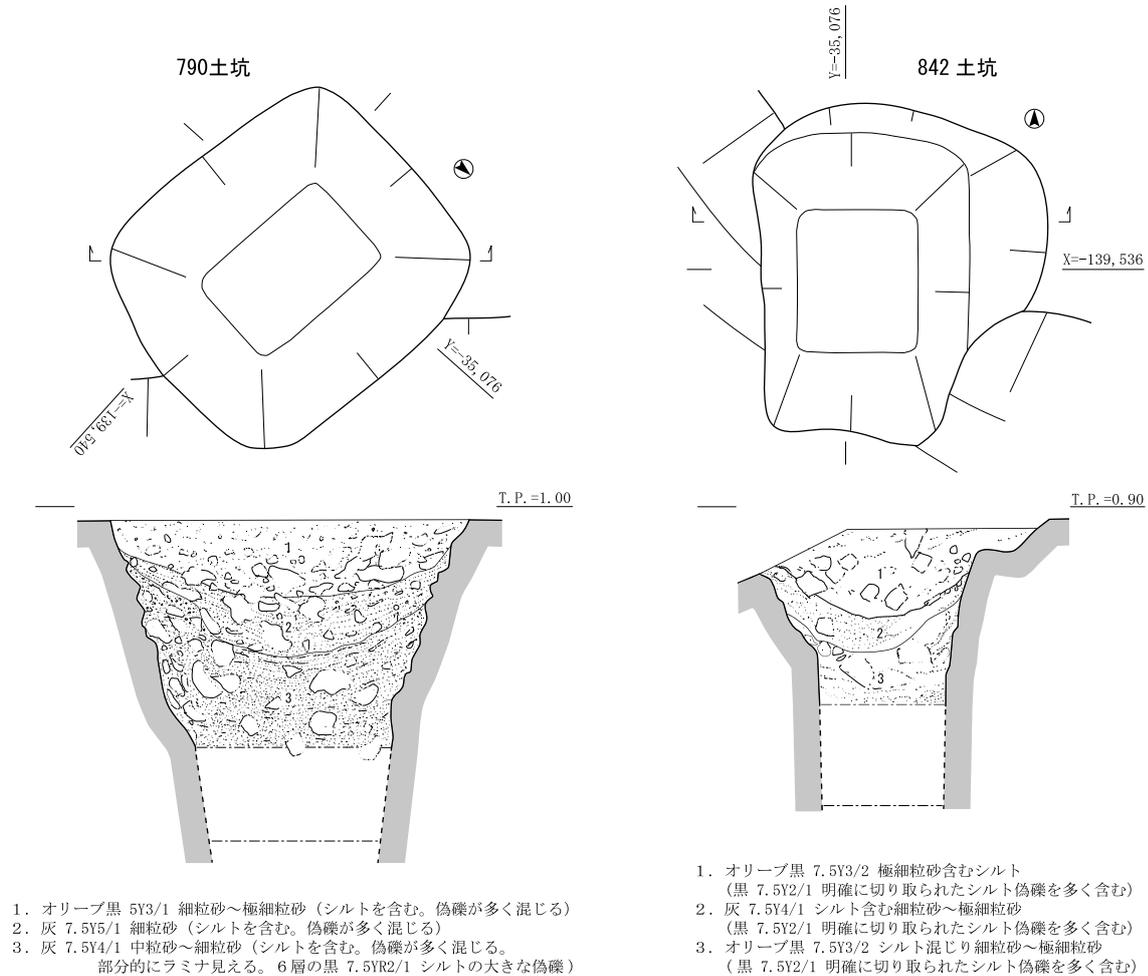
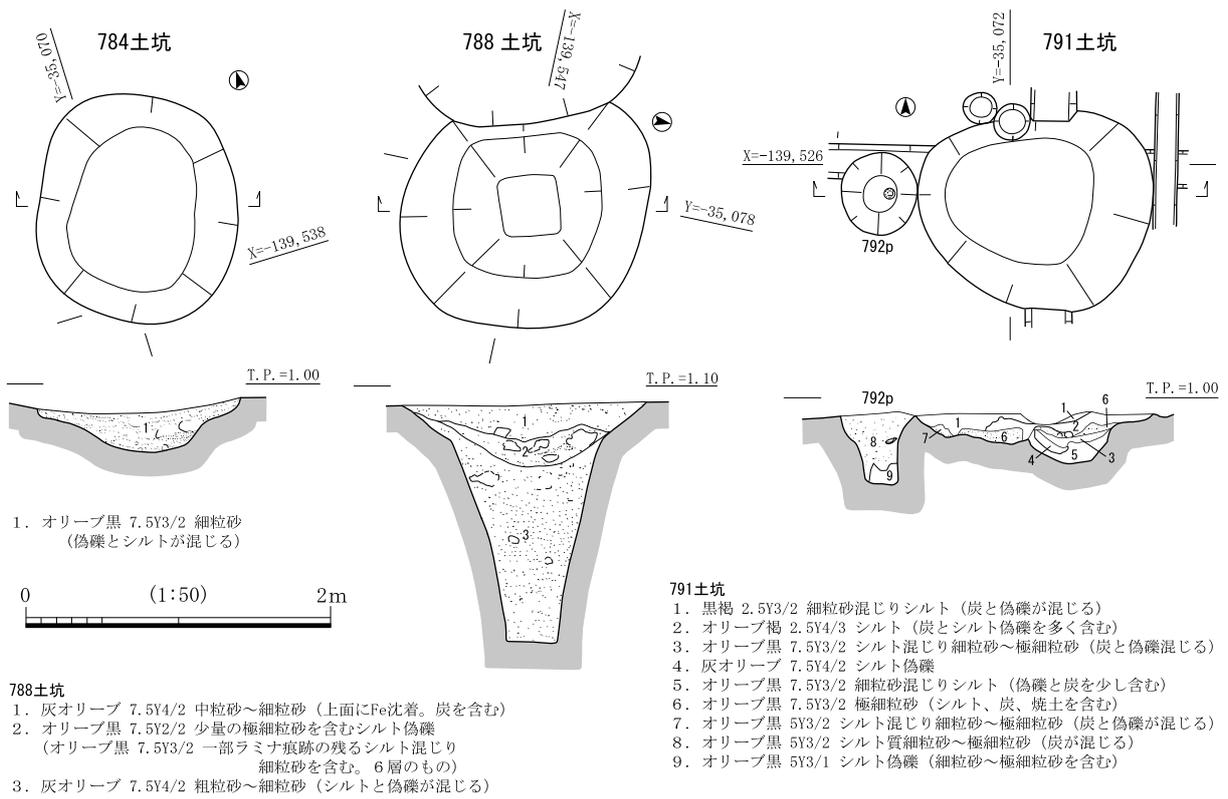


図 71 784・788・790・791・842 土坑平面・断面図

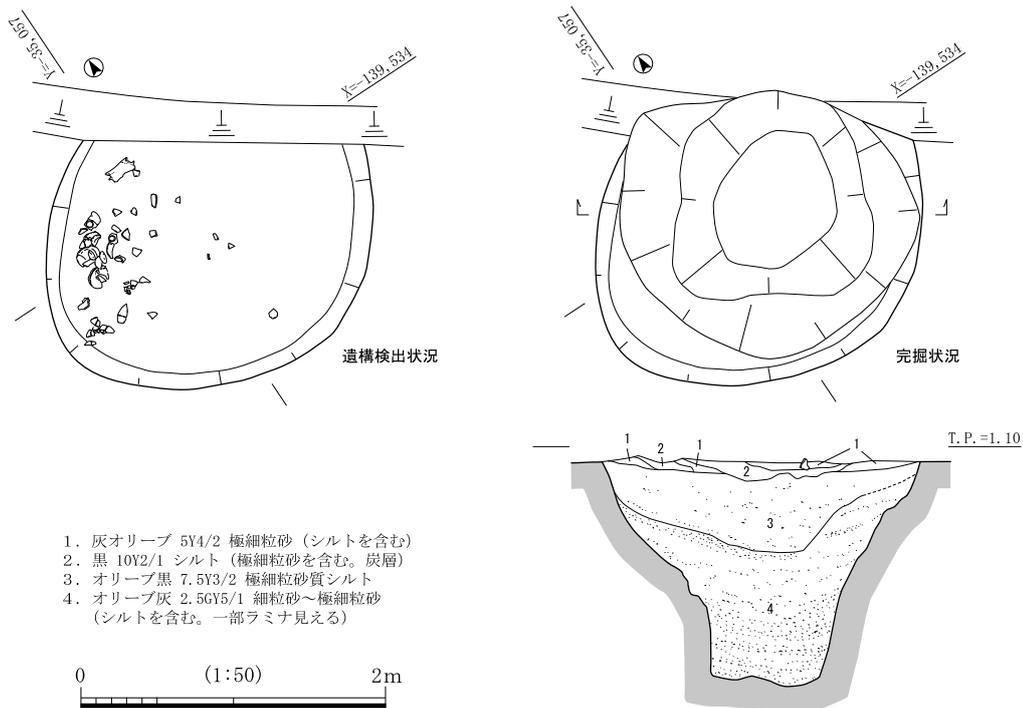


図 72 854 土坑平面・断面図

842 土坑 782 溝を挟んで 790 土坑の北側に位置する。790 土坑とよく似た土坑であるが、782 溝によって上部が大きく削られている。平面形は上端部が漏斗状に若干広がっているが、下部は南北約 2.0 m、東西 1.35 m の南北に長い長方形を呈している。壁面はほぼ垂直に近い角度で掘り込まれており、部分的に 790 土坑に見られるような段々が認められた。この土坑も底が深く、遺構検出面から 1.9 m まで掘削したが、底を確認することができなかった。埋土は下層がシルト混じり細粒～極細粒砂、中層がシルト含む細粒～極細粒砂、上層が極細粒砂含むオリーブ黒色シルトで、どの層にも切り取られたような黒色のシルト偽礫が多く含まれている。

854 土坑 785 土坑の東方にやや隔てて位置する。3 b 層上面では遺構埋土の上面に多くの瓦器や土師器などが現れており、炭の広がりも認められたが、一部はみ出している箇所などもあり、遺構の輪郭は不明瞭であった。若干掘り下げることにより、本来の輪郭を検出することができた。遺構の北東部が確認調査時のトレンチによって一部削られているが、平面形は直径 1.7～1.95 m の隅丸長方形に近い楕円形に復原できる。上半部の断面形は漏斗状を呈するが、下半の壁面はほぼ垂直で、底面もほぼ水平であった。深さは約 1.5 m を測る。下半の埋土はシルトを含むオリーブ灰色の細粒～極細粒砂で、一部にラミナが見られる。おそらく自然堆積であったと考えられる。上半の埋土はオリーブ黒色の極細粒砂質シルトである。

土坑からは土師器、瓦器、須恵器、白磁、瓦などが出土した (545～568)。遺物の時期は 11 世紀後半～13 世紀前半にかけてであるが、中心は 12 世紀と考えられる。土師器皿 (545～553) は 11 世紀末～12 世紀前半に位置すると考えられる。瓦器碗 (561～564) は内面にやや密なミガキを施す 12 世紀前半に位置するものである。またこの土坑内からは土師器の煮炊具がまとまって出土している。556・557 は鍋である。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外反する。内面全体にハケ調整を施し、外面には指頭圧痕が残る。また同面上半に顕著な煤の付着がみられる。565・566 は羽釜である。565 は大和型の羽釜で球形の体部をもつ。口縁部は外反し端部は内側に巻き込む。頸部には接合痕が明瞭に残る。

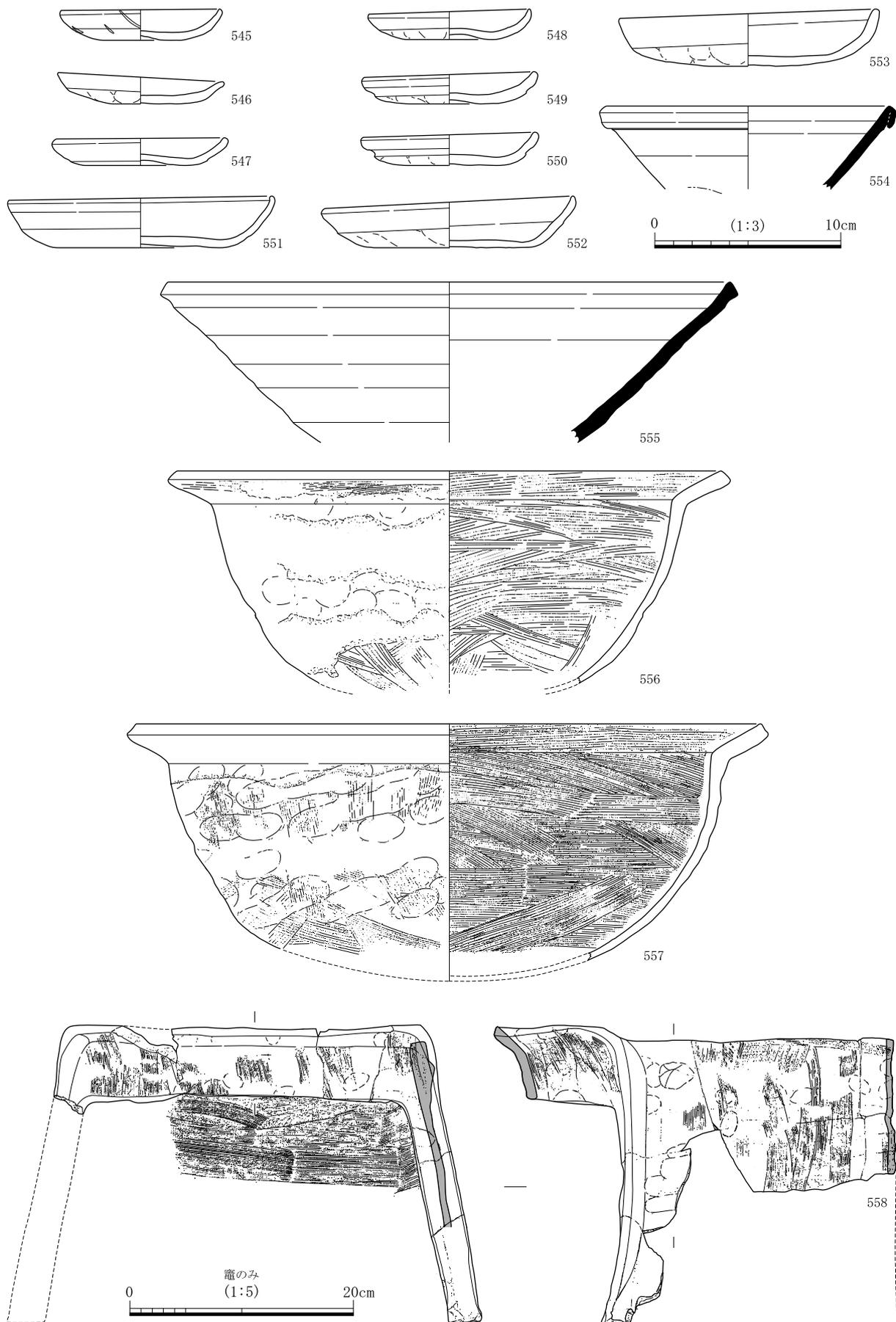


図 73 854 土坑出土遺物実測図

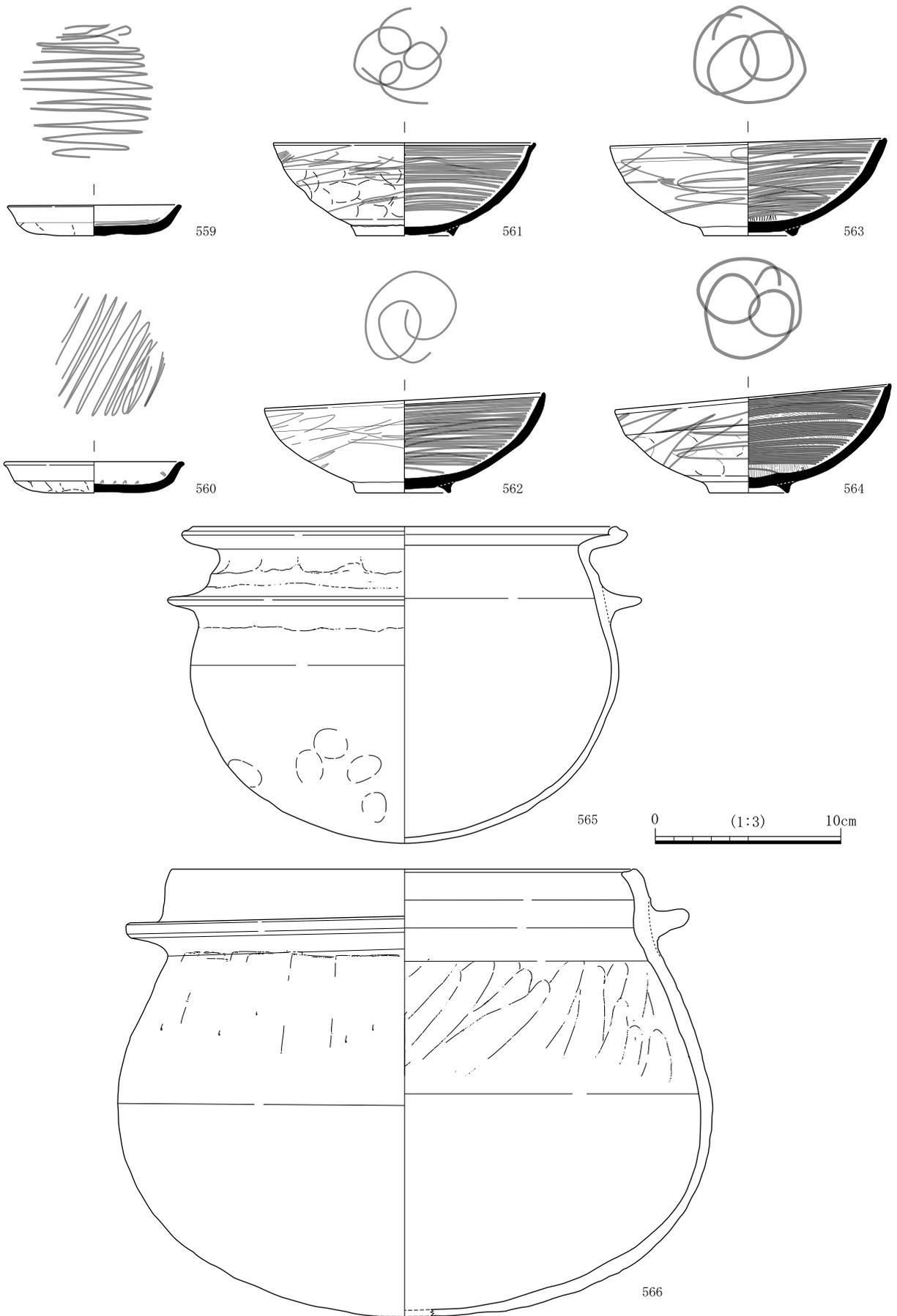


图 74 854 土坑出土遺物実測図

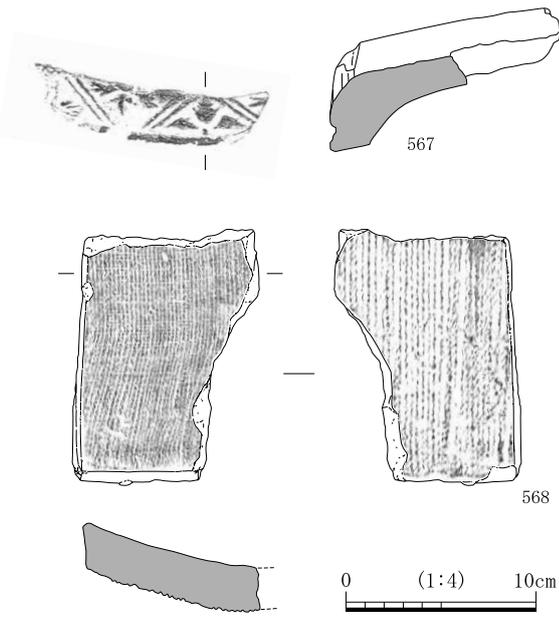


図 75 854 土坑出土瓦実測図

12 世紀後半～13 世紀前半に位置する。566 の体部は下半に最大径をもつ下膨れの形を呈し、短く内湾する口縁をもつ。体部外面にはケズリを施し、内面には縦方向のナデを施す。567 は半裁花菱紋軒丸瓦である。その他に 558 の付け底系の竈が出土している。底は焚き口に沿って貼り付け、底高は掛口高と同じである。側面上方に形骸化した把手が付く、体部内外面はハケ調整を施し外面には指頭圧痕が残る。

918・923 土坑 調査区南半部西寄りに位置する。両者は一部重複しており、918 土坑が切る。

918 土坑は 923 土坑の南西側に位置する。平面形は南北 1.5 m、東西 1.3 m の楕円形で、深さは 0.54 m を測る。埋土は中粒～粗粒砂を多く含むオリーブ黒色の砂質シルト偽礫である。

923 土坑は、遺構検出面では直径約 3 m の平面円形であるが、0.9 m ほど掘り下げると、平面形は一辺 1 m ほどの方形となる。断面形は上端部では緩やかな漏斗状を呈するが、平面形が方形になるあたりから壁面はほぼ垂直となる。湧水があったため、底まで確認することはできなかったが、深さは 1.75 m 以上ある。埋土は下層がシルトの偽礫を多く含む中粒～粗粒砂で、上層が中粒～粗粒砂を多く含むオリーブ黒色の粘質シルトや灰色粘質シルトなどである。なお井戸杵を抜き取ったような痕跡は認められなかった。

923 土坑からは土師器、瓦器などが出土した (569～574)。土師器皿 (569～571)、瓦器椀 (572・573) は 13 世紀前半に位置する。572・573 の瓦器椀は内面に簡略化したミガキを施す。

934 土坑 調査区中央やや南寄りの西壁際に位置する。北側が調査区の側溝に切られているため、全体規模は不明であるが、東西 1.7 m、南北 2.3 m 以上の平面楕円形に復原できる。深さは 0.48 m で、埋土は上下 2 層に分層できる。下層はシルト偽礫を含む中粒～粗粒砂で、上層がシルトを含む中粒～粗粒砂である。

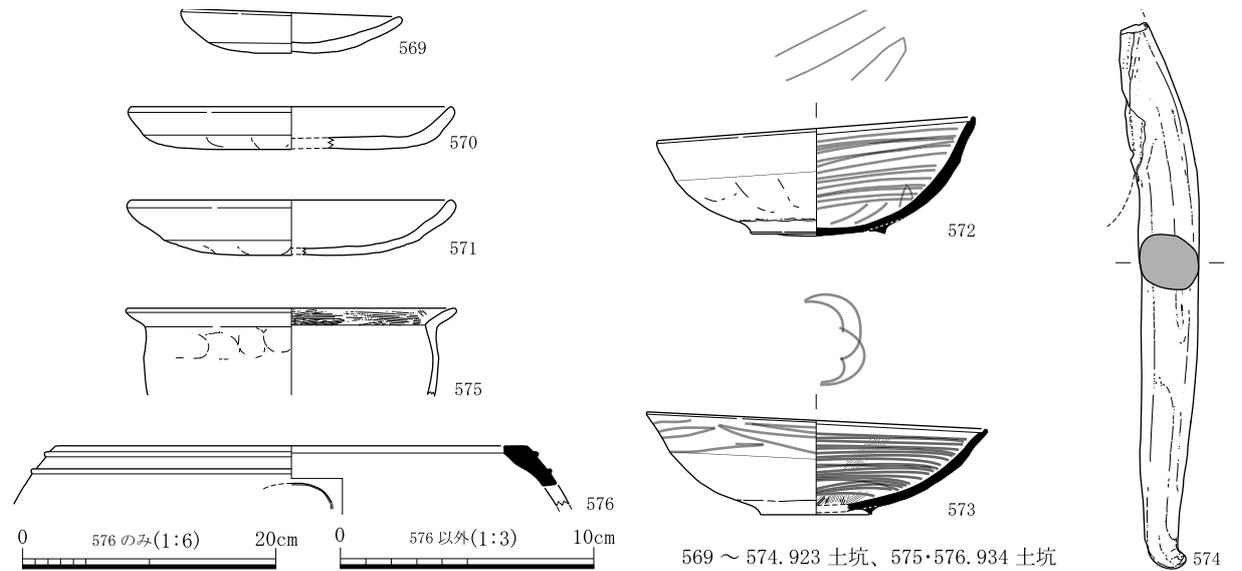
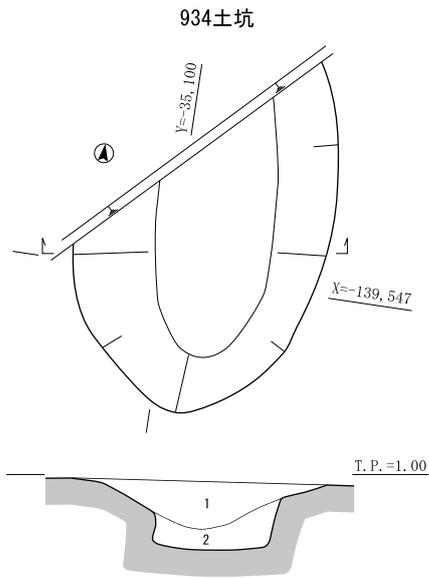
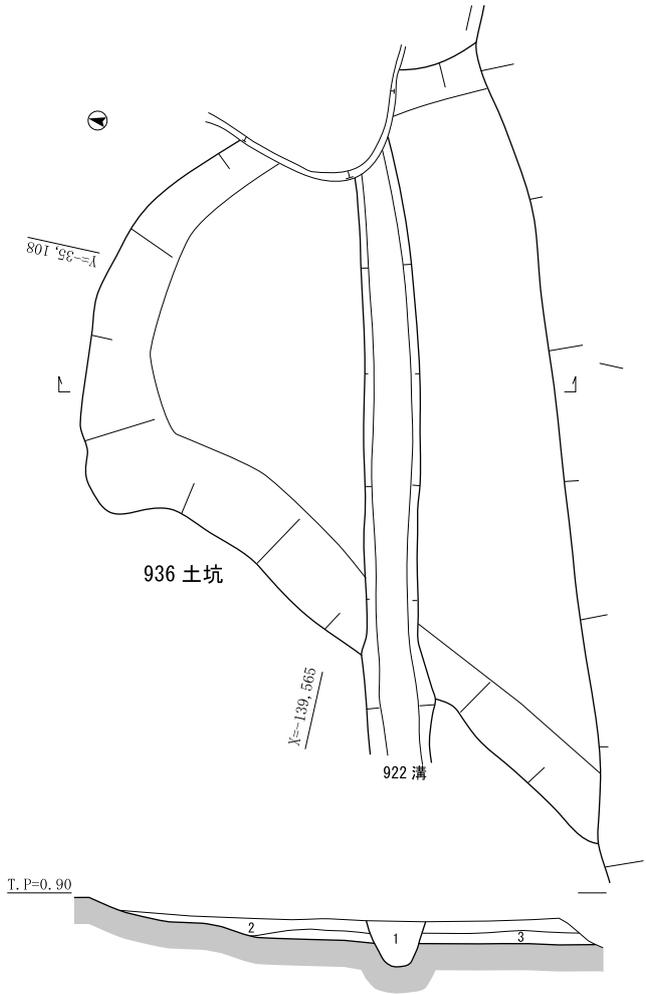


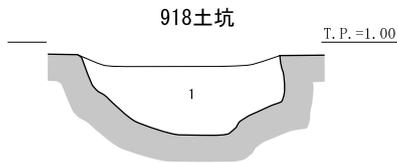
図 76 923・934 土坑出土遺物実測図



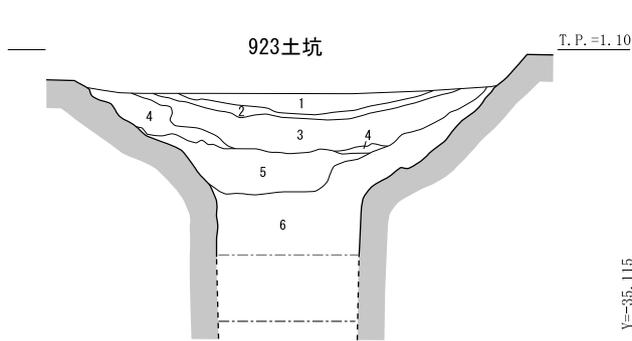
1. 灰 10Y4/1 中粒砂～粗粒砂(シルトを含む)
2. 灰 2.5Y4/1 中粒砂～粗粒砂(シルト偽礫を含む)



1. 灰 10Y4/1 砂質シルト (粗粒砂を多く含む)
2. 灰 10Y4/1 砂質シルト
3. 灰 7.5Y4/1 粘質シルト



1. オリーブ黒 7.5Y3/1 砂質シルト偽礫 (中粒砂～粗粒砂を多く含む)



1. 灰 5Y4/1 粘質シルト
2. 灰 5Y5/1 細粒砂～中粒砂
3. オリーブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト (中粒砂～粗粒砂を多く含む)
4. オリーブ黒 7.5Y5/1 シルト混じり中粒砂～粗粒砂
5. オリーブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト (中粒砂～粗粒砂を多く含む)
6. 灰 7.5Y4/1 中粒砂～粗粒砂(シルト偽礫を多く含む)

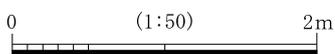
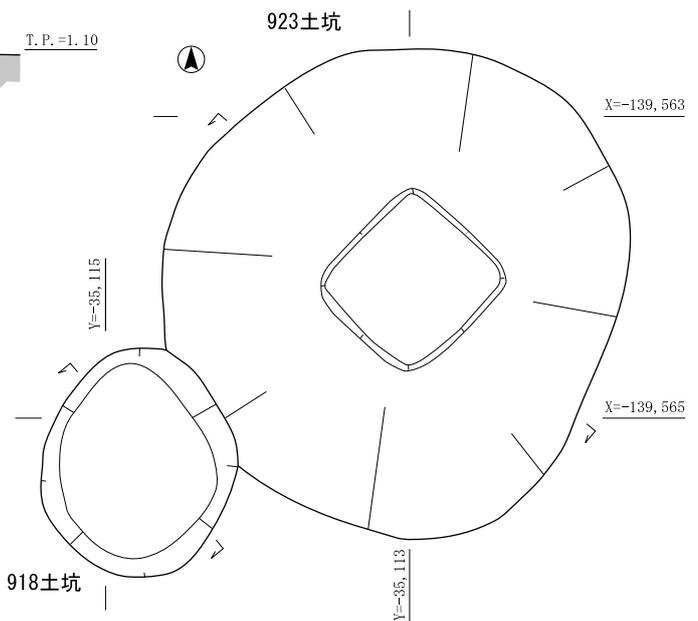
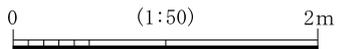
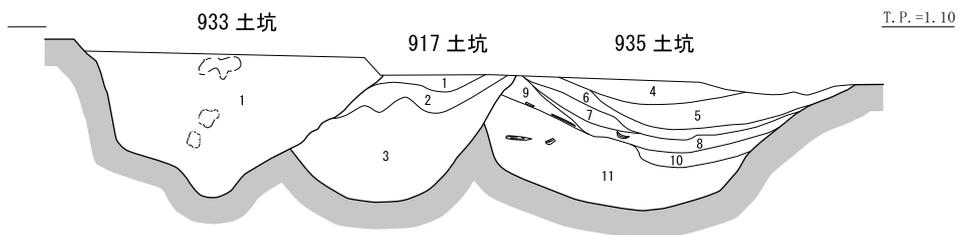
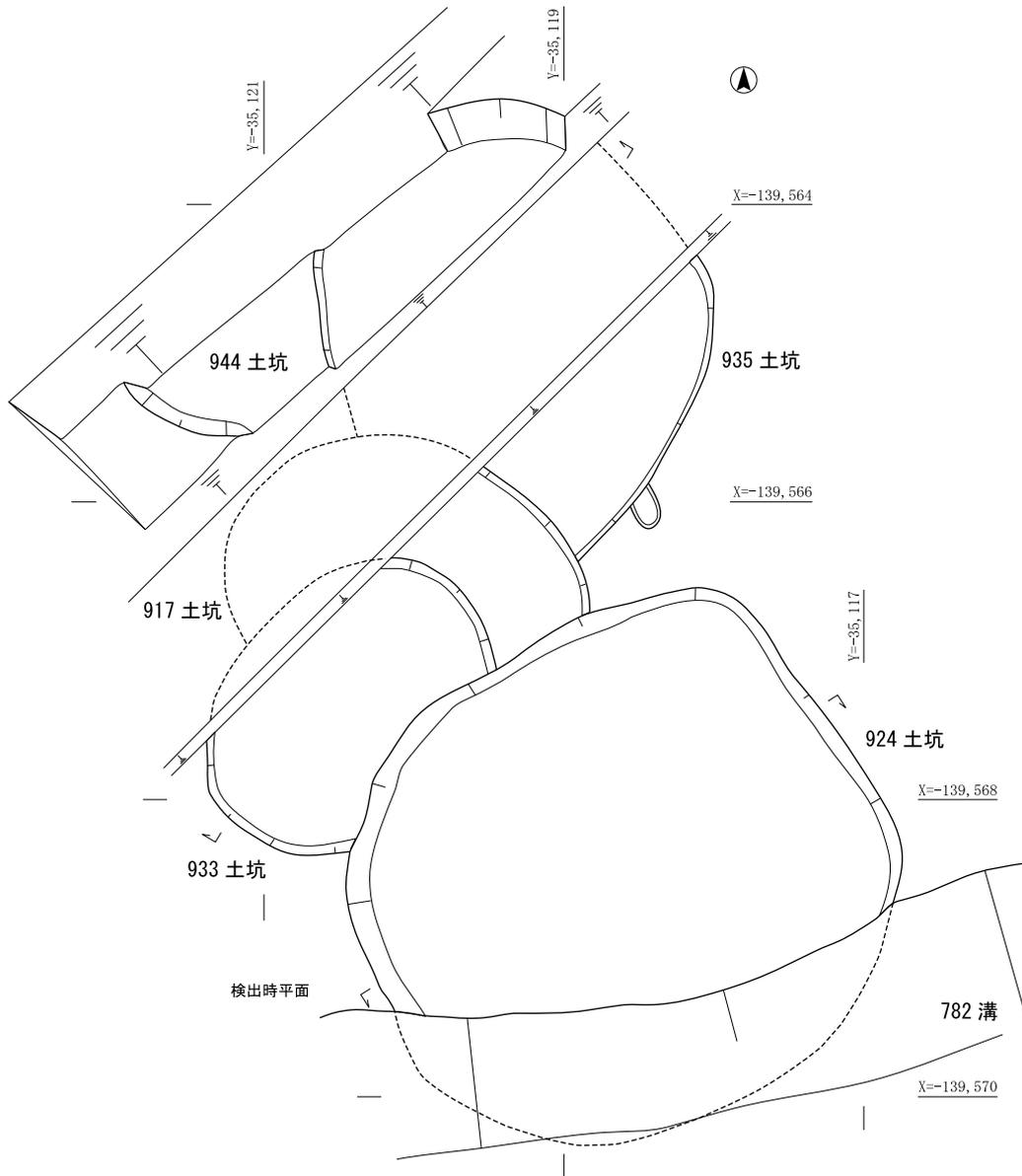


図 77 918・923・934・936土坑・922溝平面・断面図



1. オリーブ黒 7.5Y3/1 砂質シルト
(粗粒砂を多く含む。紫黒 5P2/1 偽礫が混じる)
2. 灰 10Y5/1 中粒砂～粗粒砂 (シルト偽礫が混じる)
3. 灰 10Y4/1 シルト質粗粒砂 (シルト偽礫が混じる)
4. オリーブ黒 7.5Y3/1 砂質シルト
5. オリーブ黒 7.5Y3/2 砂質シルト (木質を含む)
6. 黒 5Y2/1 植物質 腐食土
7. オリーブ黒 5Y3/1 砂質シルト (植物遺体を多く含む)
8. 灰 7.5Y4/1 粘質シルト (粗粒砂が混じる)
9. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混じり粗粒砂 (シルトと木片が混じる)
10. オリーブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト (粗粒砂が混じる)
11. 灰 5Y4/1 シルト混じり粗粒砂 (木片が混じる)
12. 灰 10Y4/1 砂質シルト
(黒 7.5Y2/1 粘質シルト小偽礫と中粒砂～極細粒砂を多く含む)

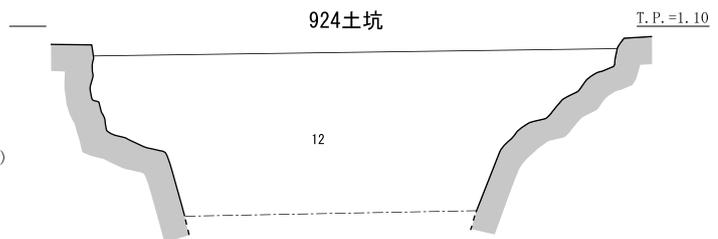


図 78 917・924・933・935・944 土坑平面・断面図

出土遺物には土師器、瓦器がある(575・576)。575は小型の土師器鍋である。くの字状に外反する口縁をもち、内面にはハケ調整を施す。576は瓦質の風炉である。口縁部に2条の突帯を貼り付け、体部には透かし穴が残る。この他に13世紀代の瓦器碗の細片が出土している。

921・936 土坑・922 溝 920 井戸の南側に位置する。921・936 土坑は土坑というよりは落ち込みとすべき浅い遺構である。921 土坑は919 溝によって東側を、936 土坑は782 溝によって南側を削られているため、全体規模や形状は明らかでない。両者共に深さは0.1～0.15 cm程度で、埋土は上層が灰色砂質シルト、下層が灰色粘質シルトである。

922 溝は921・936 土坑を切る東西溝で、座標西から南に18度振れる。幅は0.3～0.6 mで、埋土は粗粒砂を多く含む灰色砂質シルトである。

917・924・933・935・944 土坑 調査区南端の西壁際に位置する。もっとも南側の924 土坑は782 溝によって一部削られている。重複して築かれており、古い順に944—935—917—933—924 土坑となる。

もっとも新しい924 土坑がもっとも大型で、平面形は南北3.3 m、東西約3.5 mの隅丸方形に近い円形を呈する。湧水があったため、底まで確認することはできなかったが、深さは1.2 m以上ある。埋土は黒色粘質シルトの小偽礫と中粒～極細粒砂を多く含む灰色砂質シルトの単層であり、一気に埋め戻されたことがうかがえる。東壁際からは瓦質の羽釜が重なって出土した。井戸枠として転用されていたものと思われるが、既に原位置からは動いていた。おそらく抜き取られた後に廃棄されたものと考えられるが、この924 土坑には井戸枠の抜き取り痕跡はなく、この土坑に伴うものかどうかは明らかでない。

土坑からは土師器、瓦器、陶器、青磁、砥石、金属製品などが出土した(577～590)。遺物の時期は13世紀中葉が中心である。587～589は瓦質の羽釜である。587・588の体部外面はケズリを施す。589の体部下半に煤の付着が顕著にみられ、内面はハケ調整を施す。特筆すべきものに577の刀子がある。身部長が6.8 cmと他に比べ短く、棟は緩やかに湾曲し細く尖る。使用頻度が高く、棟も研磨し利用していたと考えられる。

933 土坑は924 土坑の北側に位置し、924 土坑に切られる。調査区の側溝と重なっていたため、当初は遺構の輪郭を検出しきれず、917 土坑までの範囲が1つの土坑になると考えていたが、断面の観察によって2つの土坑(933 土坑と917 土坑)が切り合っていることが判明した。平面形は長径2.15 mの楕円形で、短径については924 土坑と切り合っているため明らかでないが、2 m前後に復原できる。深さは断面観察位置では1.05 mであるが、断面位置からやや南にずれた位置に788・923 土坑のような一辺約0.8×0.9 mの方形の掘り込みが認められた。ただし調査区際であったため底部まで掘削することはできなかった。埋土は粗粒砂を多く含む紫黒色の偽礫混じりオリーブ黒色砂質シルトで、井戸枠の抜き取り痕跡などは認められなかった。

この土坑からは土師器、瓦器が出土している(594～596)。595は瓦器皿である。底部内面には細かいジグザグ状の暗文を施す。596は13世紀末頃の瓦器碗である。内面に簡略化したミガキを施し、高台が形骸化しつつある。

917 土坑は924 土坑の北側に位置し、924 土坑と933 土坑に切られる。上記のとおり断面観察によって確認された遺構で、断面形状は播鉢状を呈する。深さは1.08 mで、平面形は約2.5×1.9 mの楕円形に復原できる。埋土は下層がシルト偽礫の混じる灰色のシルト質粗粒砂で、上層がシルト偽礫の混じる中粒～粗粒砂と粗粒砂を多く含む紫黒色の偽礫混じりオリーブ黒色砂質シルトである。調査区の壁際であったため、完掘はせず断面観察にとどめた。

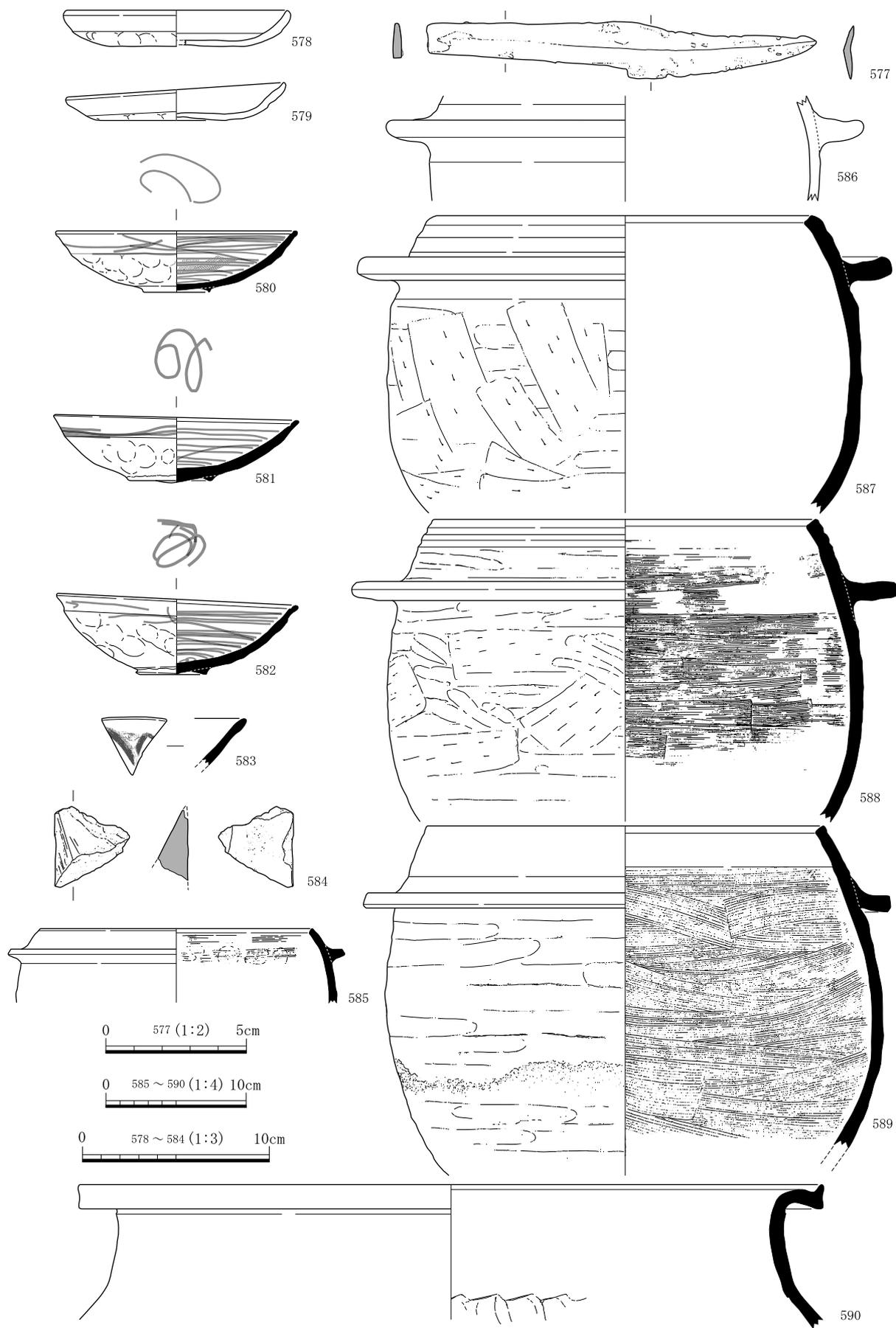
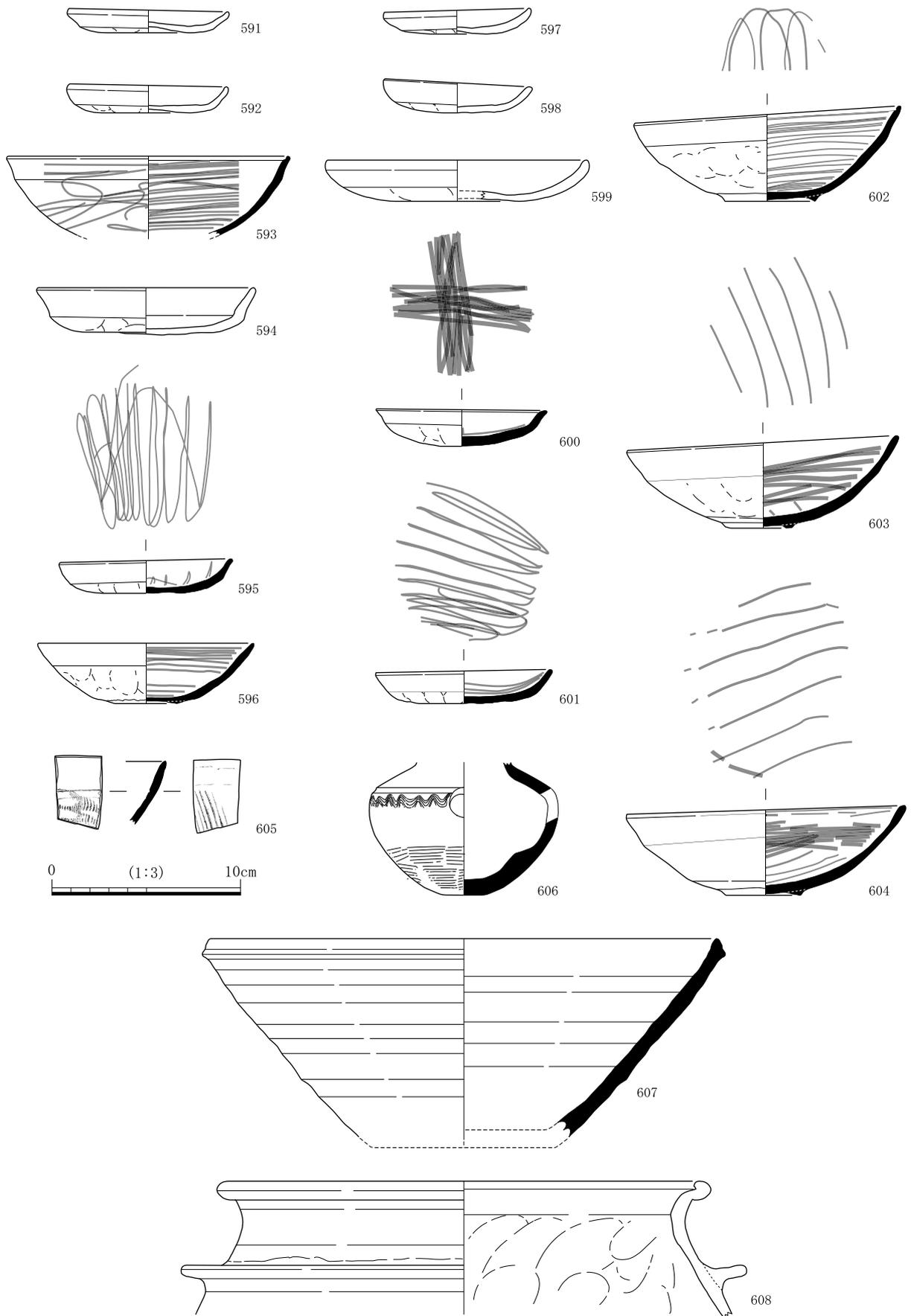


图 79 924 土坑出土遺物実測図



591 ~ 593·608. 917 土坑、594 ~ 596. 933 土坑、597 ~ 607. 935 土坑

图 80 917·933·935 土坑出土遗物实测图

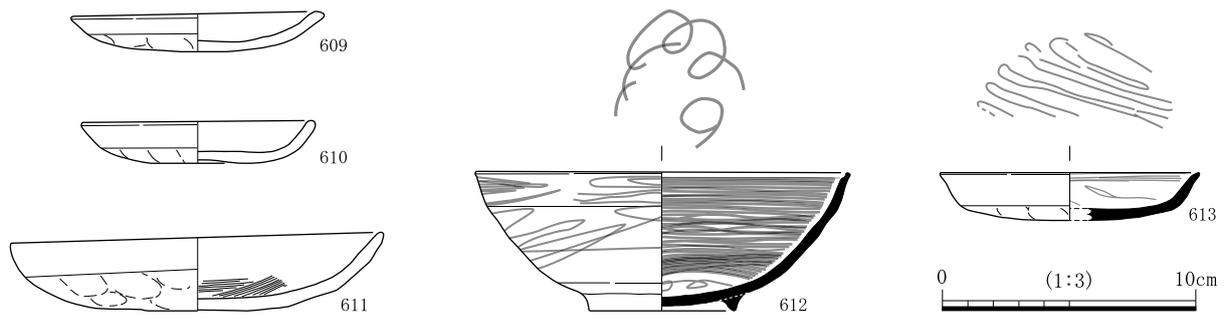


図 81 939 土坑出土遺物実測図

出土遺物には土師器、瓦器などがある（591～593・608）。遺物の時期は12世紀後半～13世紀前半におさまる。土師器皿（591・592）は短く立ち上がる口縁をもつ。13世紀前半に位置する。608は大和型の土師器羽釜で、口縁部は外反し端部は内側に巻き込む。内面全体に指頭圧痕が残る。12世紀後半頃のものである。

935土坑は917土坑の北側に位置し、917土坑に切られる土坑である。この土坑も調査区の壁際であったため、完掘はせず断面観察にとどめた。平面形は直径約2.5～3.0mの歪んだ円形を呈する。深さは1.3mで、埋土は下層が木片の混じるシルト混じり粗粒砂、上層がオリーブ黒色の砂質シルトや粘質シルト、あるいは植物の腐食土などである。

土坑からは土師器、瓦器、須恵器などが出土した（597～607）。遺物の時期は12世紀末～13世紀初頭を中心とする。600・601は瓦器皿で、内面に600は十字、601はジグザグ状の暗文を施す。603・604は和泉型の瓦器椀で、内面にやや太いミガキと平行線状の暗文を施す。607は須恵器の捏鉢である。口縁端部が上下にやや拡張する。このほか古墳時代の甕が混入する。

944土坑は935土坑の西側で、935土坑に切られる土坑である。調査区壁際で一部分を平面検出した。詳細な調査ができなかったため、全体の形状や規模などは明らかでない。

939土坑 934土坑の南側に位置する。後述する940土坑の埋土上面から検出できることから、それよりは新しい遺構であることがわかる。また掘立柱建物5の南西隅の柱穴と重複し、柱穴を完全に削平する。大型の土坑で、平面形は南北4.6m、東西2.5～3.3mの北側が一部張り出した隅丸方形を呈する。深さは平面規模に対しては浅く、約0.4m前後である。埋土は下層が粗粒砂や腐食土が混じる灰色の粘質シルト、上層が粗粒～極細粒砂や腐食土が混じる灰色砂質シルトで、最下層には薄く腐食土が認められる。

土坑からは土師器、瓦器が出土した（609～613）。遺物の時期は、ほぼ11世紀末～12世紀初頭におさまる。611の大型の土師器皿は緩やかに内湾しつつ立ち上がる体部をもつ。内面はハケ調整を施し、外面下半には指頭圧痕が残る。613は瓦器皿で、口縁は短く立ち上がり端部は外反する。内面に横位のミガキとジグザグ状の暗文を施す。

1025土坑 掘立柱建物6の北東隅に近接する。平面形は直径0.85～0.9mの整った円形で、深さは0.2mを測る。埋土はシルト混じりの中粒砂である。

1039土坑 掘立柱建物6・7北側の、782溝の肩部に位置する。782溝によって大半が削られているが、遺物が集中していたことから、辛うじて検出することができた。平面形は直径1.0m以上の円形に復原できる。深さは0.87m以上で、埋土は上層が中粒～粗粒砂を多く含むオリーブ黒色の砂質シルト、下層が上層のシルトが混じる中粒～粗粒砂である。

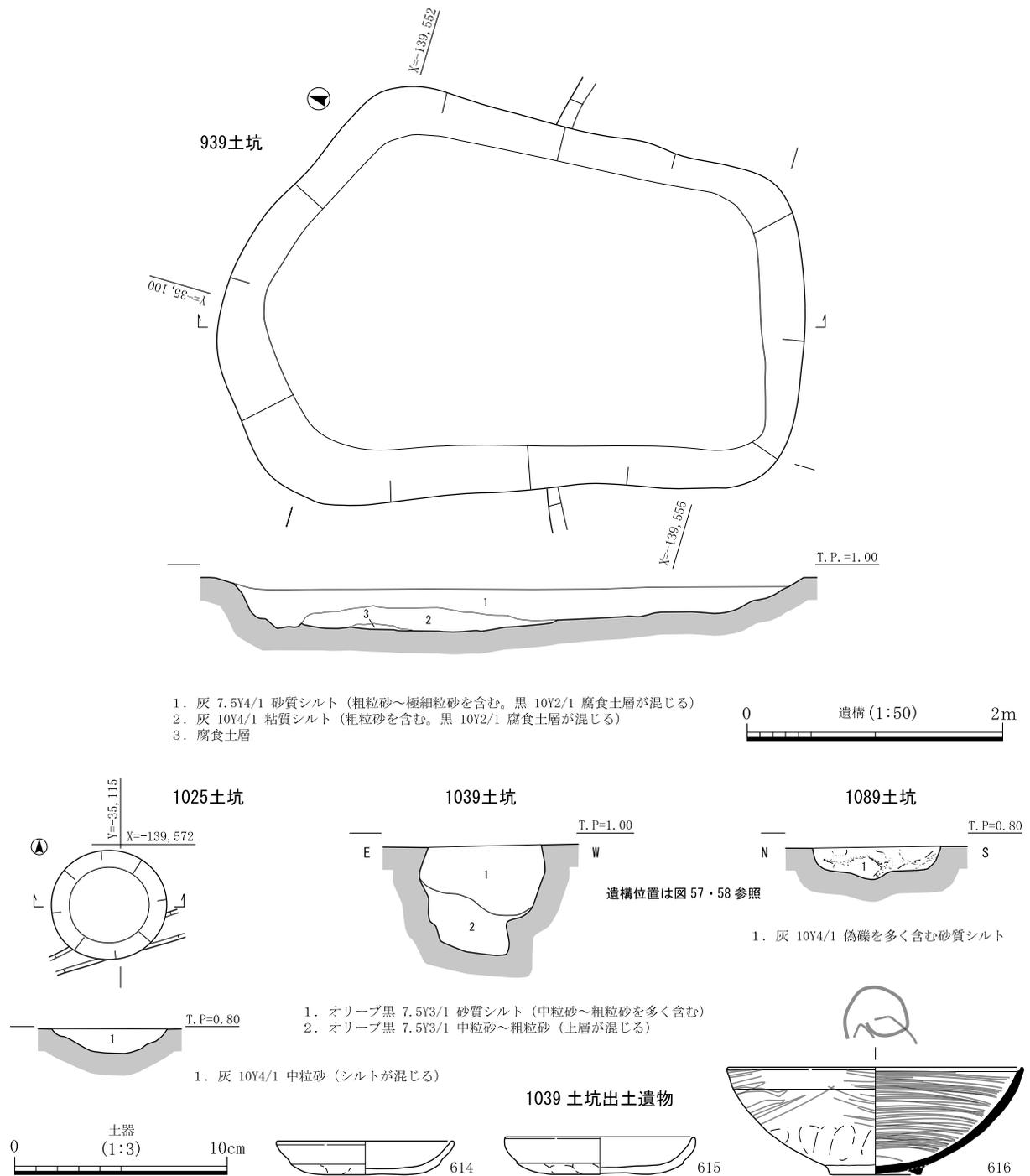


図 82 939・1025・1039・1089 土坑平面・断面図及び 1039 土坑出土遺物実測図

土坑からは 12 世紀代の土師器皿、瓦器椀が出土した (614～616)。瓦器椀 (616) は内面にやや密なミガキを施す 12 世紀中葉のものである。782 溝から出土する瓦器椀は、こういった遺構からの混入品と考えられる。

1089 土坑 940 土坑東側の、782 溝の東肩部に位置する。782 溝によって大半が削られているが、平面形は直径約 1.0 m の円形に復原できる。深さは 0.26 m で、埋土は偽礫を多く含む砂質シルトである。

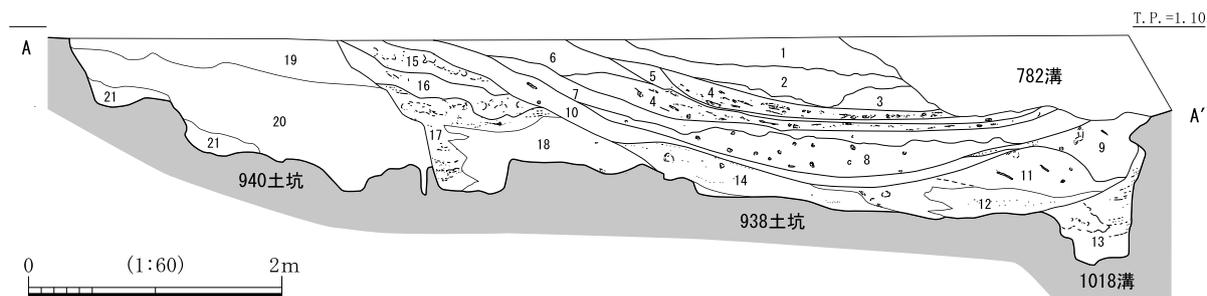
938・940・1009 土坑・1018 溝 調査区の南半部中央に位置する。溜池状の大型の土坑で、南辺は 782 溝に一部切られる。いくつかの土坑が重なり合って 1 つの大きな土坑となっており、そのうちのもっとも新しい時期の掘り込みを 938 土坑とした。

940 土坑は東西に長い土坑で、平面形は不整形である。東西は約 24.5 m で、南北は約 8 m を測る。深さは周囲の浅い箇所約 0.4 m、中心の深い箇所約 0.8 m であるが、底面にはさらに平面隅丸方形や楕円形の小規模な土坑が不規則に散らばっていくつも掘られている。全てを完掘したわけではないが、深さは深いもので 1 m ほどある。粘土採掘坑とも考えられるがその性格は不明である。埋土は大きく上下 2 層に分かれる。下層はシルト偽礫を多く含む粗粒砂で、上層はシルト混じりの中粒～粗粒砂である。

1009 土坑は 940 土坑の中でも 938 土坑よりも西側の極端に深くなっている一画を指す。940 土坑内の遺物を細分するため遺構番号を分けたが、940 土坑と一体の遺構であったのか、重複する遺構であったのかなど、調査段階での検証ができておらず、940 土坑との関係は明らかでない。出土遺物からは 1009 土坑の方が一時期古い遺構であるようにうかがえる。方形や不整形な輪郭の土坑がいくつも重複するように築かれており、もっとも深いものは 938 土坑の底面よりもさらに 0.25 m ほど深い。

938 土坑は 940 土坑の南辺に位置する。940 土坑の埋土上から掘り込まれた大型の土坑で、深さは 940 土坑よりも 0.4 m ほど深い。平面形は北側や東側は直線的であるが、南側や西側は曲線的で不整形である。

その規模は東西約 8 m、南北は約 5.5 m を測る。埋土は偽礫が混じるオリブ黒色の粘質シルトや砂質シルト、偽礫が混じる中粒～粗粒砂、あるいは純粋な木片層などで、松毬なども含まれていた。断面観察によって、一度掘り直しが行なわれていることが判明した。なおこの土坑の底から杭列を 2 条検出



- | | |
|--|---|
| 1. 灰オリブ 5Y4/2 シルト質 中粒砂 | 12. 中粒砂～粗粒砂 |
| 2. オリブ黒 5Y3/1 砂質シルト(木片と中粒砂を多く含む) | 13. 灰 5Y4/1 中粒砂～粗粒砂(シルト偽礫を多く含む) |
| 3. 黒褐 2.5Y3/1 砂質シルト(木片を多く含む。粗粒砂が混じる) | 14. 黒 2.5Y2/1 中粒砂(粘土偽礫が少量混じる) |
| 4. 木片層 | 15. 灰 10Y4/1 シルトブロック(紫黒 5P2/1 粘土偽礫混じりを含む) |
| 5. 灰 5Y4/1 砂質シルト(木片が少量混じる) | 16. 灰 10Y4/1 中粒砂～粗粒砂(シルト偽礫を多く含む) |
| 6. オリブ黒 5Y3/1 砂質シルト | 17. 灰 7.5Y4/1 中粒砂～粗粒砂(シルト偽礫が混じる) |
| 7. オリブ黒 5Y3/1 粘質シルト(木片を少量含む。粗粒砂が混じる) | 18. オリブ黒 5Y3/1 砂質シルト |
| 8. オリブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト(マツボックリが混じる) | (粗粒砂を含む。紫黒 5P2/1 粘土小偽礫が少量混じる) |
| 9. オリブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト(紫黒 5P2/1 粘土偽礫が混じる) | 19. 灰オリブ 7.5Y4/2 中粒砂～粗粒砂(シルトが混じる) |
| 10. オリブ黒 7.5Y3/1 粘質シルト(紫黒 5P2/1 粘土小偽礫が少量混じる) | 20. オリブ黒 5Y3/2 粗粒砂(シルト偽礫を多く含む) |
| 11. オリブ黒 7.5Y3/2 | 21. 灰 5Y4/1 粗粒砂(シルト偽礫が混じる) |
| (上層に木片を多く含む。紫黒 5P2/1 粘土偽礫が混じる) | |

断面位置は図57参照

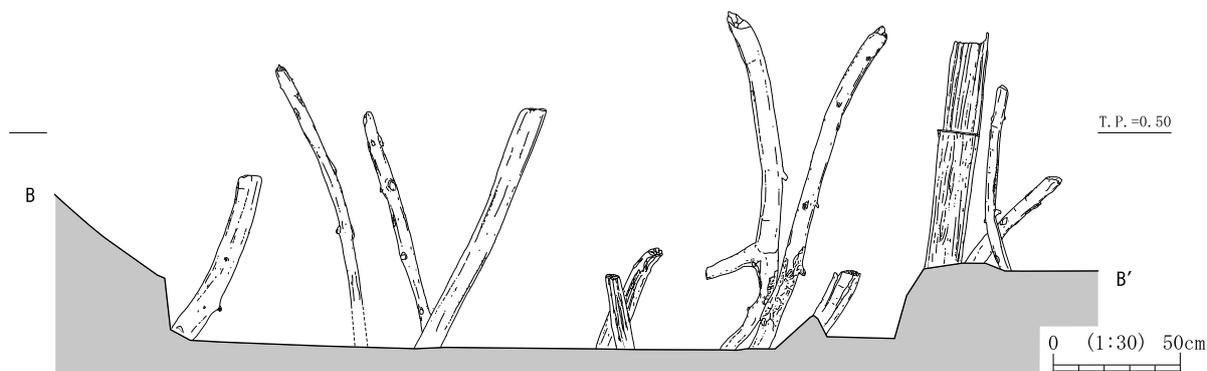


図 83 938・940 土坑・1018 溝断面図及び 938 土坑内杭列立面図

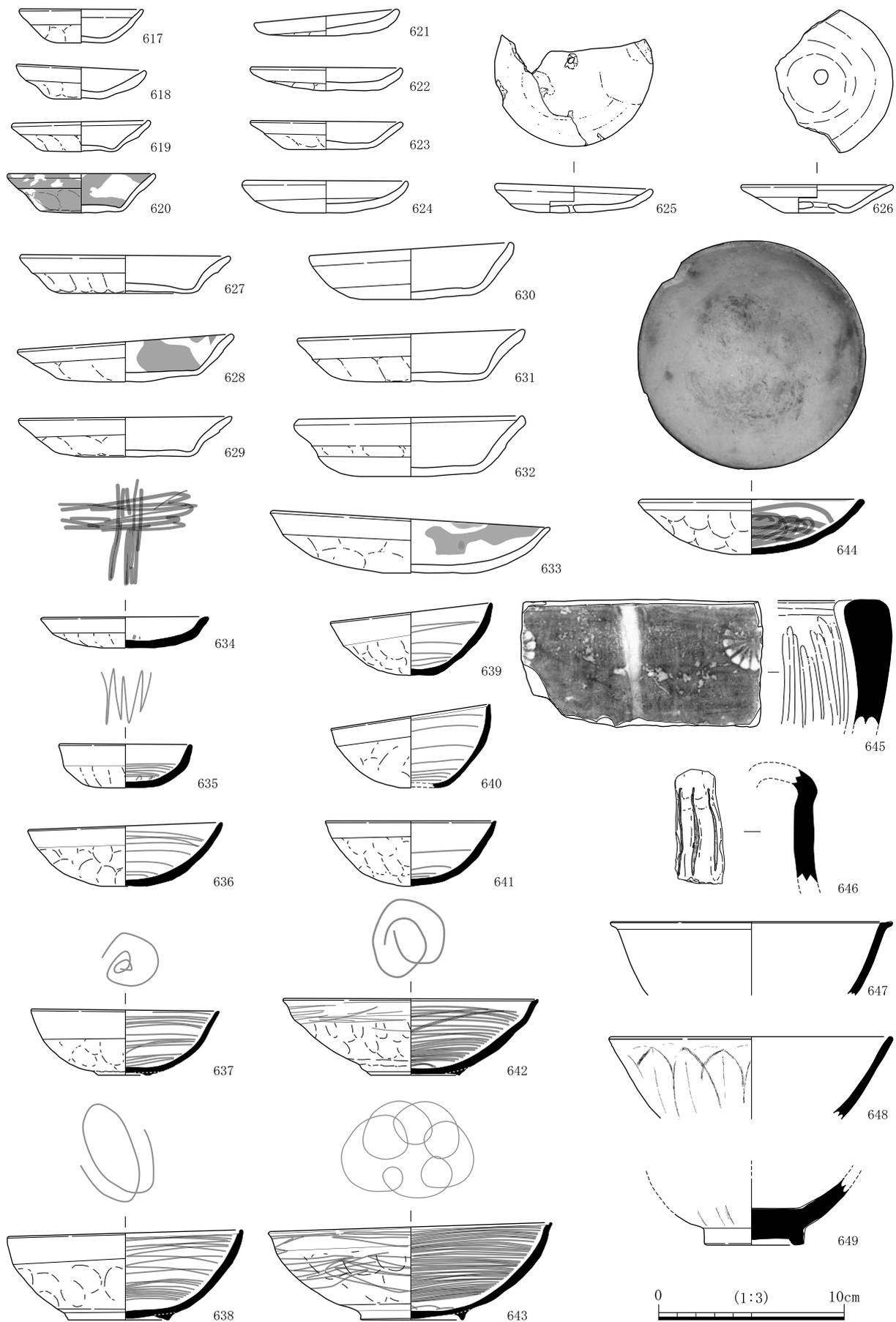


图 84 938 土坑出土遺物実測図

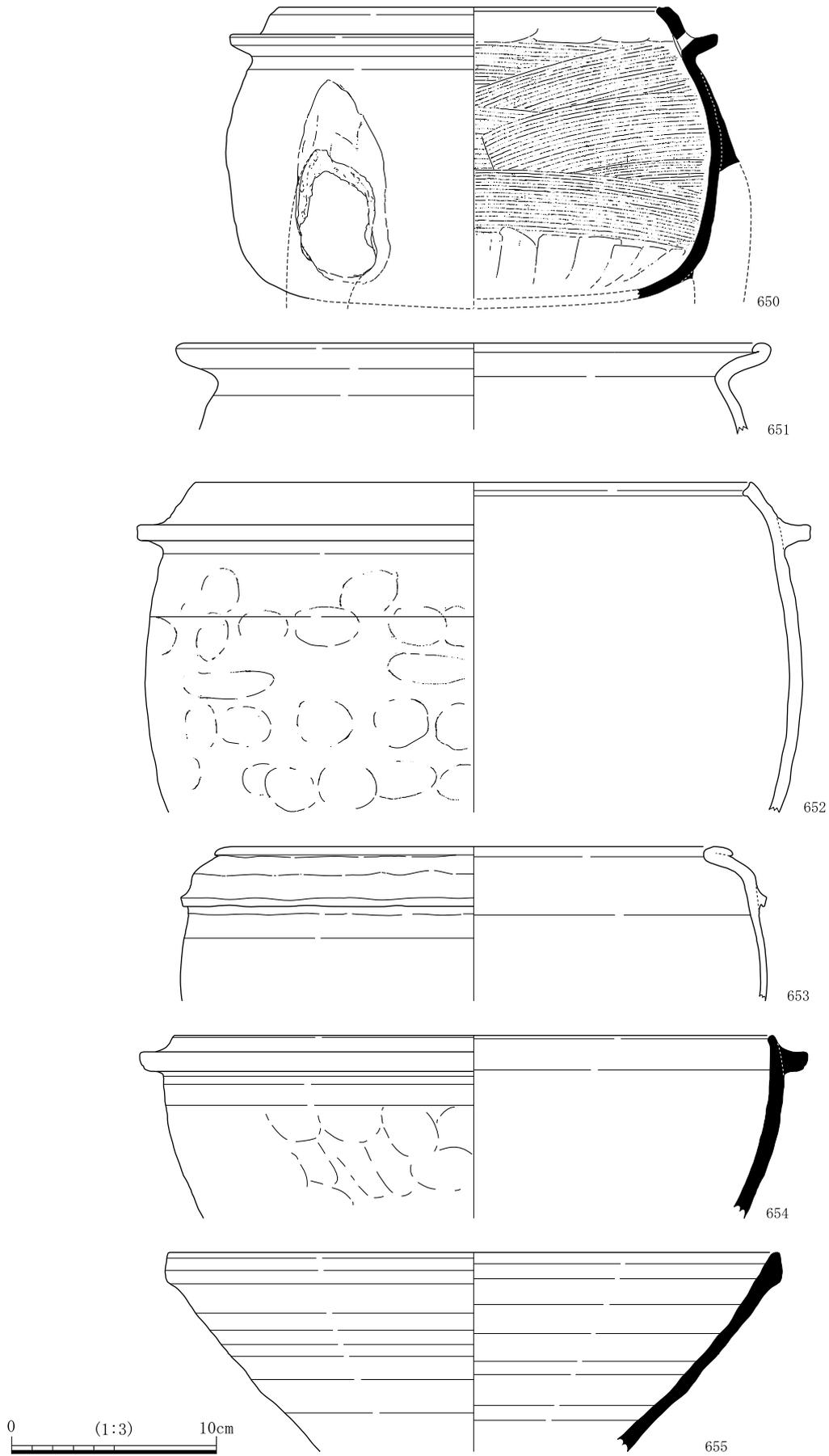


图 85 938 土坑出土遺物実測図

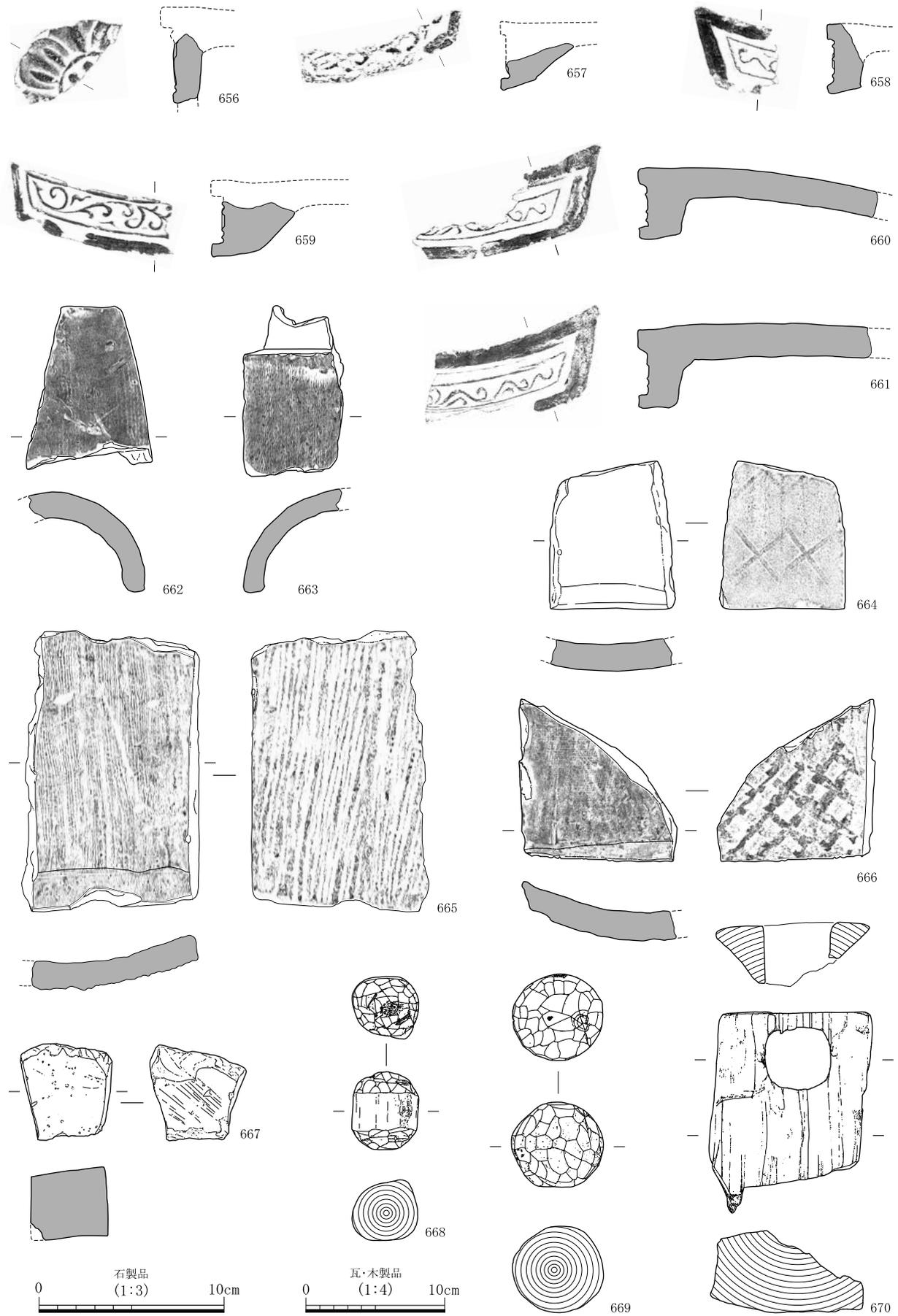


图 86 938 土坑出土瓦·石製品·木製品実測図



図 87 782 溝・938 土坑出土漆器実測図

した。土坑の東端と西端に南北方向に木杭を打ち込むもので、杭は長いもので土坑底面から 1.3 m ほどの長さがあった。その多くは節や皮の付いた直径 5～10 cm ほどの細い幹であったが、加工された薄板なども使われていた。護岸のための施設と考えている。

1018 溝は 938 土坑の南辺部につながる東西方向の溝である。幅は約 0.7 m、深さは約 0.4 m で、埋土はシルト偽礫を多く含むラミナが見られる中粒～粗粒砂である。平面的には上記のとおり 938 土坑につながるが、断面観察の結果、938 土坑に切られていることが判明した。

これらの大型の土坑の性格については明らかでないが、木杭が打ち込まれていることや、その規模などから、溜池のような施設であったと考えている。

これらの土坑からは土師器、瓦器、須恵器、青磁、白磁、瓦、砥石、木製品などが多数出土している (617～670・672～709)。遺物は 11 世紀後半～15 世紀初頭にかけての時期幅をもつ。

938 土坑から出土した遺物は 14 世紀前半のものが中心である。土師器皿 (617～633) の多くは 13 世紀後半～14 世紀前半に位置する。瓦器碗 (635～643) は、12 世紀、13 世紀前半頃のものも若干みられるが、高台が消失した 14 世紀前半のものがまとまって出土している。620・628・633 は灯明皿である。特に 620 は内外面全体の煤の付着が顕著である。625・626 は底部中央に穿孔を施す。いずれも焼成後に外面から孔をあけている。644 は和泉型の瓦器碗である。高台は消失し緩やかに開く体部をもつ。内面には連続した楕円形を墨で描く。645 は輪花形の瓦質火鉢である。内面は縦方向のミガキを施し外面には菊花紋を押捺する。650 は瓦質の足釜である。口縁は短く内傾し、底部にいくほど横に張り出す体部をもつ。体部内面はナデとハケ調整を施す。また罫上方に焼成後、外面から一箇所穿孔を施す。脚部は欠損するが、その断面にも煤が付着することから、欠損後の使用がうかがえる。653 は大和型の土師器羽釜である。強く内湾する口縁をもち、端部は外側に短く折り返す。その他に 635 のミニチュア瓦器碗や 646 の白磁水注の把手がある。瓦は軒丸瓦 (656)、軒平瓦 (657～661)、丸瓦 (662・663)、平瓦 (664～666) がある。656 は雌弁帯を有する複弁蓮華紋である。軒平瓦は全て瓦当部に唐草紋を配す。丸瓦では 1 点のみ行基式の丸瓦 (662) も出土している。669 は毬杖の毬である。全面を削りきれいな球形としている。668 は毬杖の毬もしくはその未製品である。上下の木口は丸く削るが、側面は樹皮を剥いだままの状態に残っている。672・673 は漆器碗である。いずれも内外面を黒色で塗色し、紋様を赤色で塗色する。673 には紅葉を描く。

940 土坑・1009 土坑から出土した遺物は 13 世紀代のももの含むが 12 世紀前半のものが中心である。特に 1009 土坑の遺物は大半が 12 世紀前半のものとなる。674～677・702・703 は 12 世紀前半の大型の土師器皿である。677 は 18.1cm、703 は 17.9cm の口径をもち、口縁は短く外反する。678・679・699 の土師器皿は、短く立ち上がる口縁をもつ。680 は他の土師器皿と比べて深く、杯のような形態を呈する。686・687 は 13 世紀中葉の瓦器碗で内面のミガキの簡略化がすすむ。704・705 の瓦器碗は内面に密なミガキを施す。11 世紀末から 12 世紀初頭に位置するものである。681 は須恵器の壺である。平底で斜め上方に立ち上がる体部をもち、底部外面には糸切り痕が残る。10 世紀代のもものと考えられる。682 は瓦

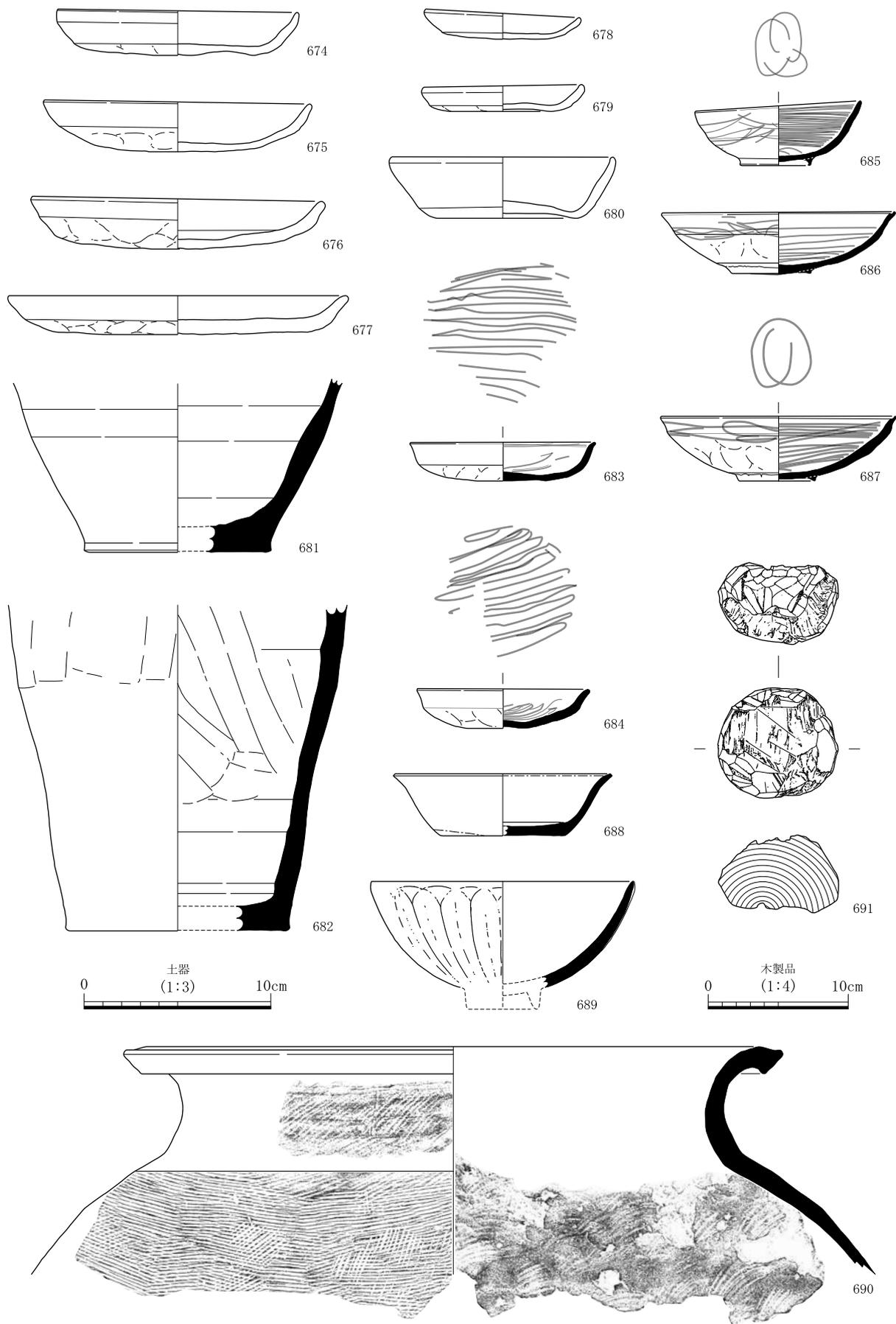


图 88 940 土坑出土遺物実測図

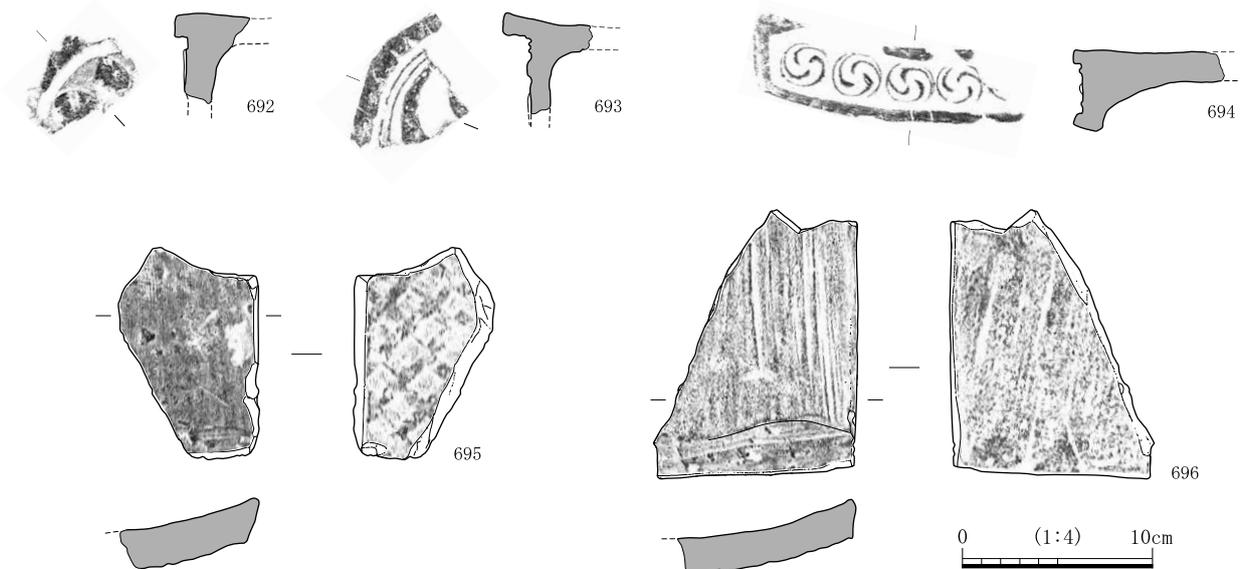


図 89 940 土坑出土瓦実測図

質の深鉢である。平底で直線的に立ち上がる体部をもつ。内外面はナデを施す。690 は瓦質の甕で強く外湾する口縁をもつ。頸部外面には右上がり、体部外面には横位と右上がりのタタキを施す。内面には当て具の痕跡が残る。707 は瓦質の盤である。体部は内湾し直線的に外傾する口縁部に続く。内面は横方向、見込みには楕円形状の粗いミガキを施す。その他に 685 の小型瓦器椀や 688 の口禿の白磁皿がある。木製品は 691 の毬杖の毬と考えられるものがある。全体にケズリを施し球形にする。瓦も数点出土している (692 ~ 696)。692 は 2 層出土の 125 と同様の単弁八葉蓮華紋の軒丸瓦である。694 は今回の調査で出土した唯一の巴紋軒平瓦である。

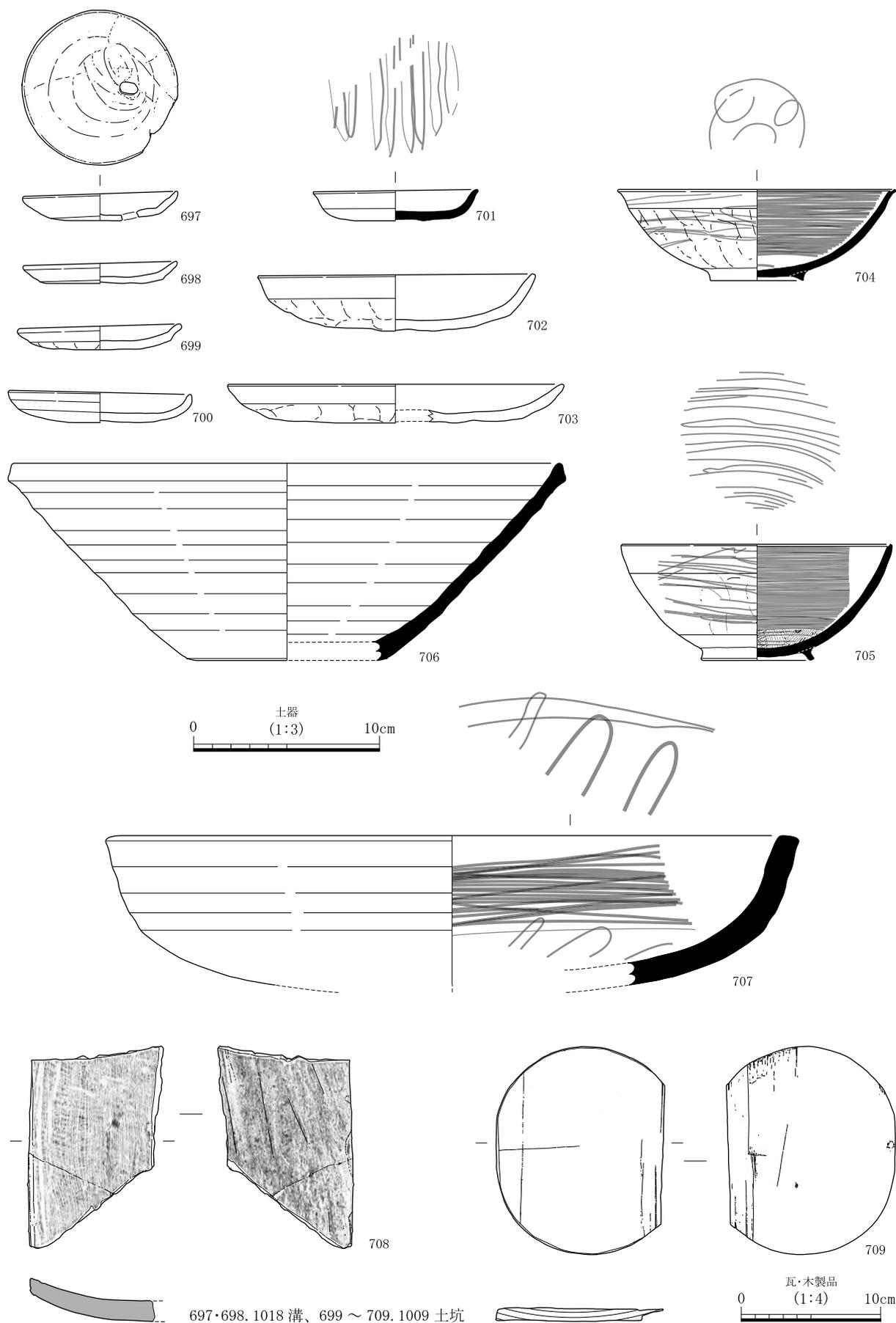
1018 溝からは 13 世紀後半の土師器皿 (697・698) が出土した。697 は焼成前に外面から底部と体部の境に穿孔を施す。穿孔周囲には強い指頭圧痕が残る。

919 溝 938・940 土坑の西側に位置する。遺構を検出した段階では、782 溝に T 字に合流する溝になると考えられたため、遺構名称を溝としたが、掘削してみると、782 溝とは底面が繋がらず、明らかに別々の遺構であることが判明した。中央付近では急激に深くなっており、溝というよりは土坑とすべき遺構であった。前述の 938・940 土坑の西側に接しており、深さも共通していることから、むしろ 938・940 土坑と一連の遺構であったと考えられる。南北方向に長い遺構で、その長さは 13 m 以上ある。幅は北側の狭い箇所では約 1.3 m、南側では 3 m 強を測る。深さは中心のもっとも深い箇所では 1.2 m ほどあるが、途中で極端に浅くなっており、北側では 0.4 m 程度となる。埋土は下層が中粒～極粗粒砂、あるいは粗粒砂を多く含む灰色粘質シルトで、上層がオリーブ黒色のシルト質中粒～粗粒砂である。

出土遺物には土師器、瓦器、青磁、瓦などがある (710 ~ 719)。711 の土師器皿は強く外反する口縁をもつ。712・713 の瓦器椀は、内面のミガキの簡略化が進んだ 13 世紀前半に位置するものである。716 は龍泉窯の青磁皿で、体部は直線的にやや開き、口縁端部は外反する。13 世紀末～14 世紀後半に位置するものである。

776 溝 789 井戸のすぐ南側に位置する。幅 0.45 ~ 0.7 m の東西溝で、西側は近世の土坑によって削られている。深さは 0.15 m で、埋土は偽礫を主体とするオリーブ黒色シルトで、焼土が混じることが特徴的である。

772・925・937 溝 掘立柱建物 4 の周囲で検出した。建物よりも新しい時期の耕作溝と考えているが、



697·698. 1018 溝、699 ~ 709. 1009 土坑

图 90 1009 土坑 · 1018 溝出土遺物実測図

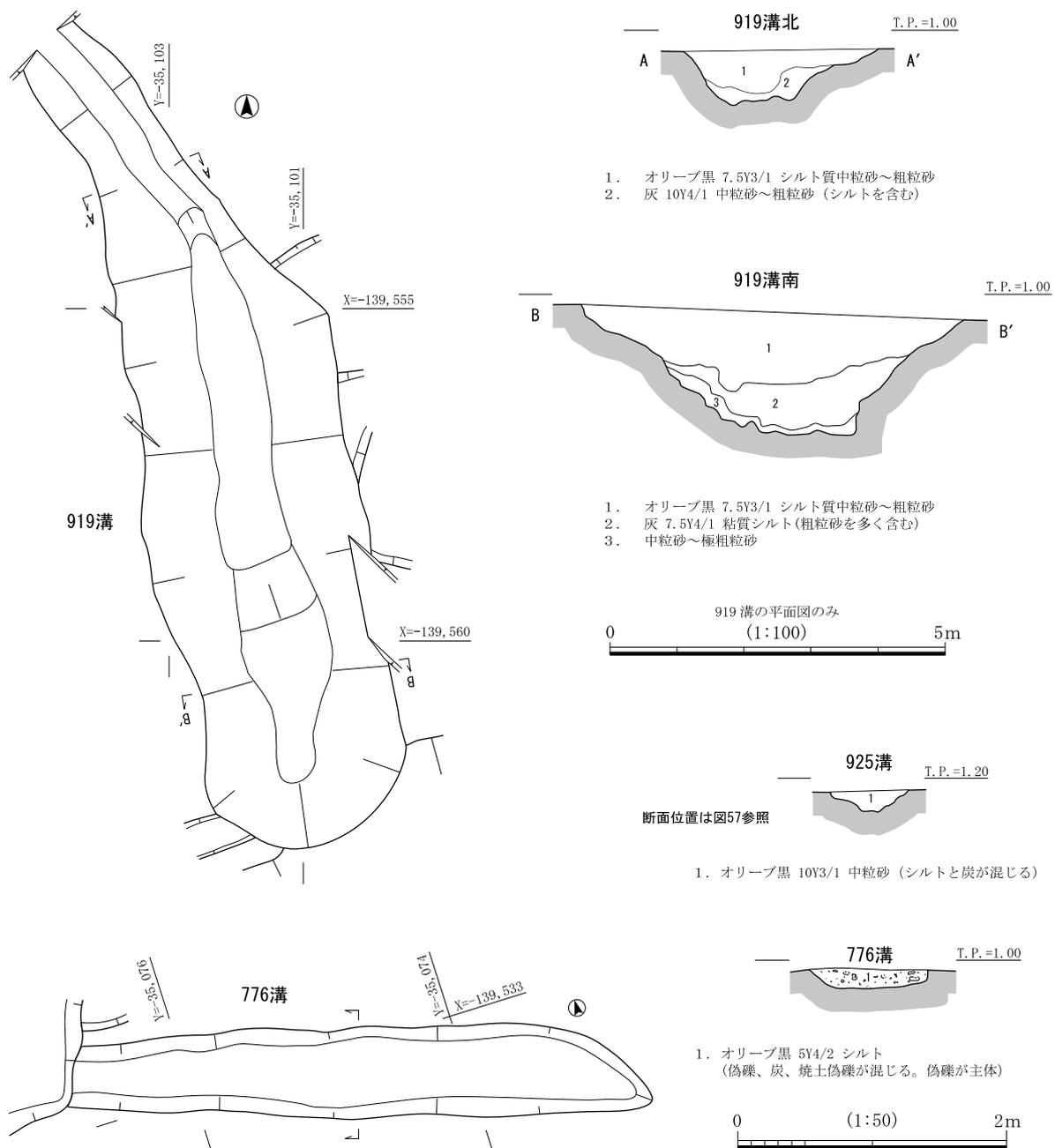


図 91 776・919・925 溝平面・断面図

遺物が出土するしっかりした溝であるので特記しておく。

772 溝は掘立柱建物 4 の東側の南北溝である。幅は約 0.5 ～ 0.8 m で、他の溝に比べて深く、深さ約 0.5 m を測る。掘立柱建物 4 と同じく、座標北から西に僅かに振れる。

925 溝は掘立柱建物 4 の西側の南北溝である。幅は約 0.7 m で、深さは約 0.15 m を測る。772 溝と同じ振れをもつ。

937 溝は掘立柱建物 4 の南側に位置する。772・925 溝に直交する向きの東西溝である。幅は約 0.3 ～ 0.5 m で、深さは約 0.15 m である。

いずれの埋土も炭混じりのシルトを含む中粒砂である。

925 溝や 937 溝からは土師器や瓦器が出土している (720 ～ 728)。いずれも 12 世紀前半に位置するもので、土師器皿 (720・722・726・727) や瓦器皿 (724) は短く外反する口縁をもち、瓦器椀 (725・

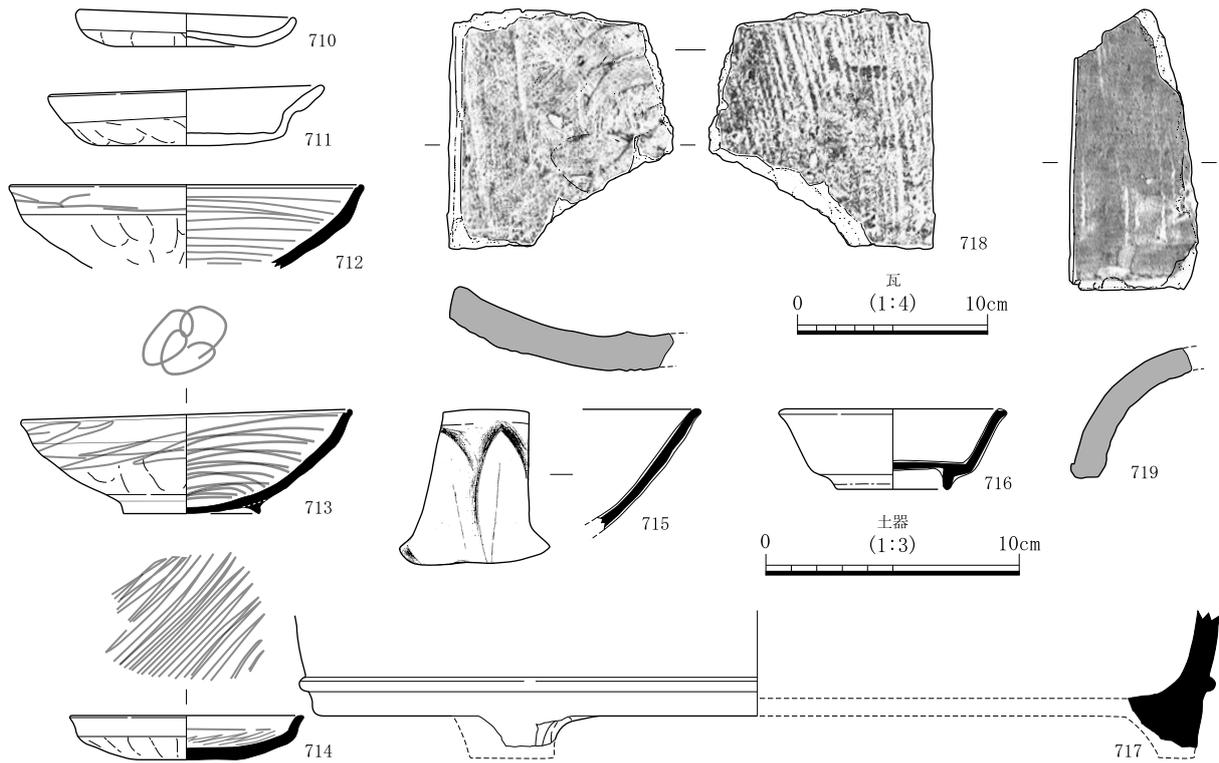


図 92 919 溝出土遺物実測図

728) は内面に密なミガキを施す。

943 溝 932 畦畔の北裾部に位置する。4 区から続く東西溝で、782 溝の南肩がこの溝の北側をかすめている。全長は 6.63 m で、幅は約 0.6 m を測る。深さは 0.1 m 程度で、大量の土器が廃棄されたような状態で出土した。土器は特に東半部に密集しており、その重なり具合から、南の 932 畦畔側から投棄されたことが推測できた。集落内の溝というよりは、耕作地境の畦畔に伴う溝であったと考えている。

溝から出土した遺物は土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、砥石、銭貨など (733 ~ 786) で、その大半を 14 世紀代の土師器皿が占める。747 の土師器皿は底部と体部の境に、焼成後内面から穿孔を施す。765 ~ 772 は内面のミガキが簡略化した 14 世紀前半の瓦器碗である。768 には形骸化した高台が付く。

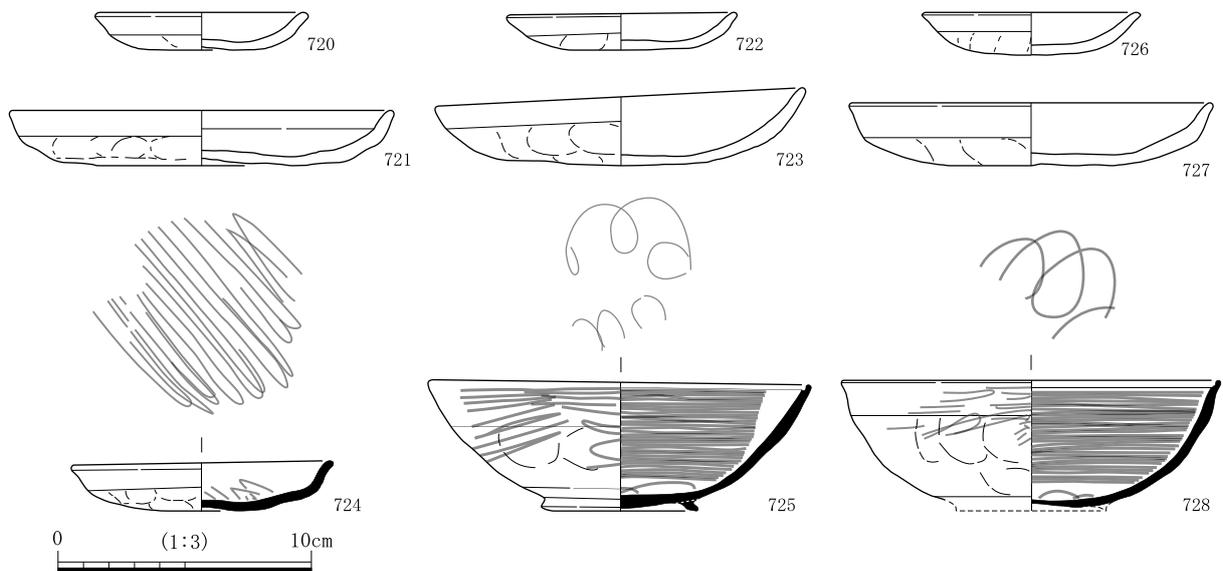


図 93 925・937 溝出土遺物実測図

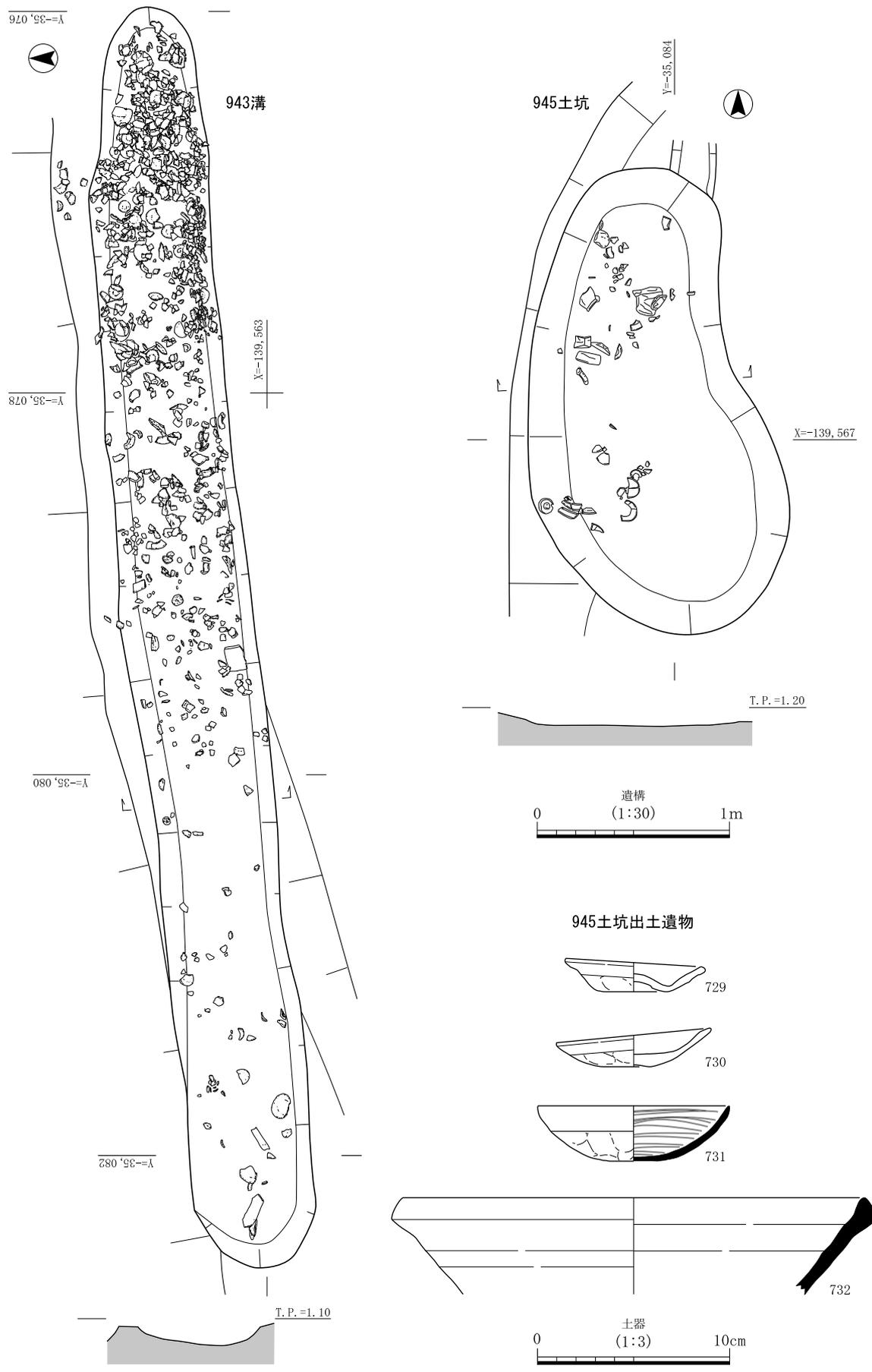


図 94 943 溝・945 土坑平面・断面図及び 945 土坑出土遺物実測図

773は白磁Ⅳ類の碗である。11世紀後半～12世紀前半に位置する。776は備前焼の播鉢で、14世紀後半～15世紀前半に位置するものである。777は瓦質の火鉢で、口縁は内湾し外面には菊花紋を押捺する。779は瓦質の脚である。断面は半円形を呈し平坦面をもつ。錢貨は淳化元寶(784)と政和通寶(785)が出土している。

土師器皿は55×35×15cmのコンテナに4箱分が出土した。一括投棄された状態であったため、その多くが完形に復原できた(写真図版58-上段の背後に並ぶ土師器皿)。詳細な分類とまではいかないが、整理段階で行なった分類の結果を簡単に報告する。

土師器皿は小型と大型の2種に大別できる。小型は口径7cm前半台から8cm前半台のもので、大型は口径が10～11cm台のものである。さらに形態や製作技法等によって、小型は5タイプに、大型は2タイプに細分できる。

小-1(733～736) 出土量は非常に少ない。数点のみ確認できた。丸底の733～735と平底気味の736に分けることができるが、ここでは底部外面からの押し上げがないタイプとして一括りとした。器壁の厚みは底部も体部もそれほど違いはない。特に733～735は、底部から体部が丸く立ち上がるため、その境は不明瞭である。体部外面の指オサエも認められない。

小-2(737～740) このタイプの出土量も非常に少ない。底部外面中央が僅かに押し上げられるタイプであるが、小-3・4と異なり、押し上げは中央の一箇所に1回きりである。また共通して体部に施された横方向のナデが、内面を上方から見ると反時計回りであることを特徴とする。外面のナデ下端部には凹線状の窪みが明瞭に残っているものがあり、土器をひっくり返した状態で俯瞰すると、それが数字の「6」のように見える。底部から体部が丸く立ち上がり、体部外面下半の指オサエもないため、その境は不明瞭である。器壁は口縁端部直下が最大厚であるが、体部上半のナデが口縁端部でやや内湾気味に施されるため、より外側に肥厚しているような印象を受ける。

小-3a(742～747) もっとも出土量の多いタイプである。底部外面には指オサエの痕跡が明瞭に残る。小-2と異なり、直径約3～3.5cmの範囲内を、中心を残して円を描くように5回程度オサエているため、中心に凸状の膨らみが僅かに残る。ただしそのオサエはそれほど強いものでないため、内面の見込み部は僅かな盛り上がりにとどまっている。体部下半にも指オサエを施すため、体部は外反し、底部と体部との境が明瞭となる。口縁端部は外反したまま丸くおさめる。体部に施された横方向のナデは小-2と異なり時計回りで、その痕跡は最後のナデ上げた箇所まで明瞭に残っている。内面を俯瞰すると数字の「6」のように見える。内面のナデは底部の周縁まで及ぶが、それが一気に一周するものでなく、小刻みに6回程度回転させてナデているため、見込みの盛り上がりは輪郭が亀甲状になるものもある。

小-3b(741) 一点のみ確認できた。基本的に小-3aと同じ形態・製作技法を示すが、3aと異なり体部に施された横方向のナデが反時計回りである。

小-4(748～751) 底部が特徴的なタイプである。底部全体が外面から強く押し上げられているため、内面の見込み部が極端な盛り上がり呈する。また内面のナデが底部周縁で凹線状に深く窪んでおり、盛り上がりの輪郭をさらに際立たせている。小-3と同じく盛り上がりの輪郭が亀甲状を呈するものもある。体部外面下半は強い指オサエの影響で外反し、さらに体部上半も外側から強くナデられているため下半よりもさらに大きく外反する。全体としてラッパ状に開く口縁となる。

小-5(752) 一点のみ確認できた。他のタイプに比べ口径がやや大きい。器高も他のタイプは全て1cm台であるが、このタイプは2.1～2.4cmとやや深い。底部のつくりは小-3によく似るが、体部が長く、

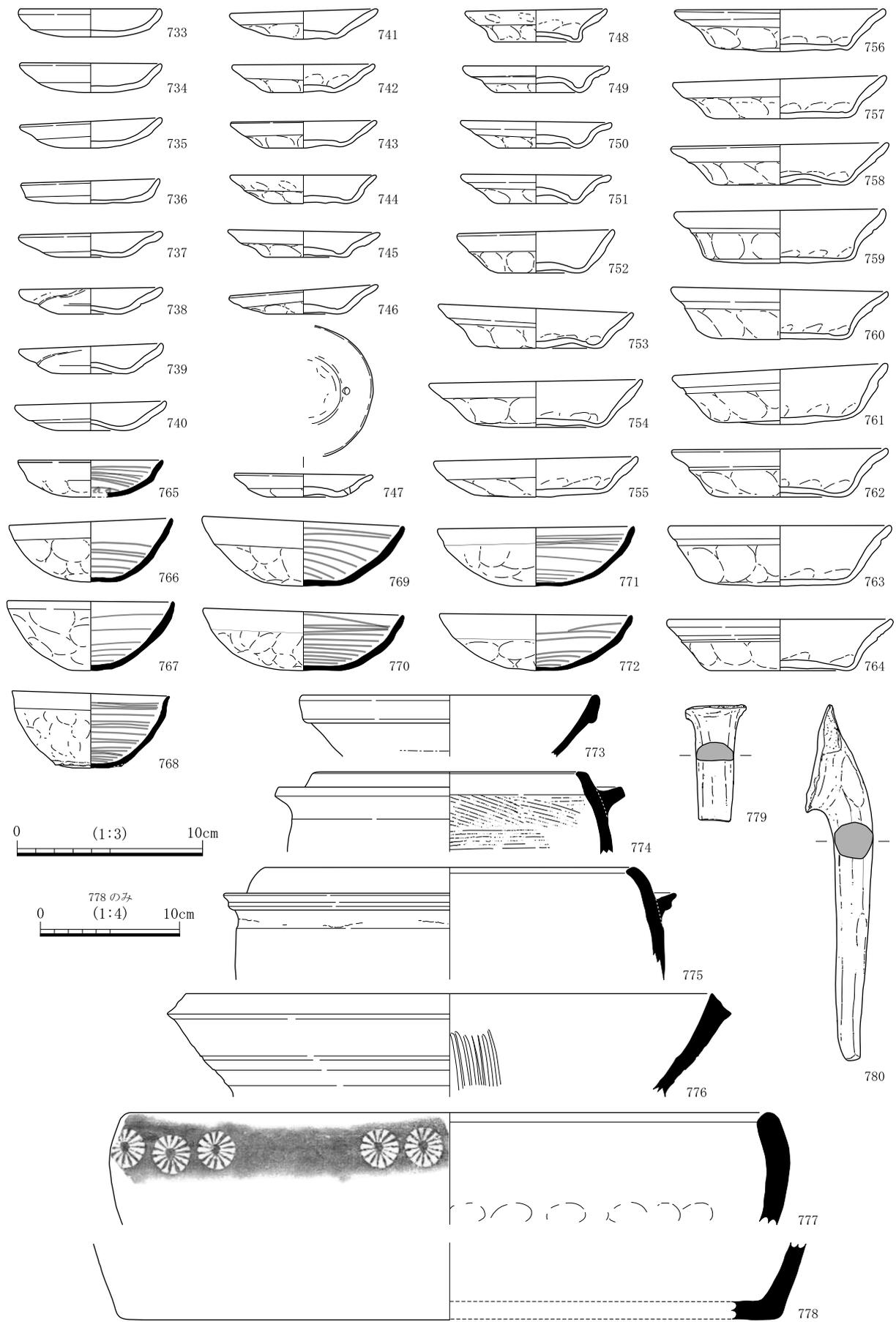


図 95 943 溝出土遺物実測図

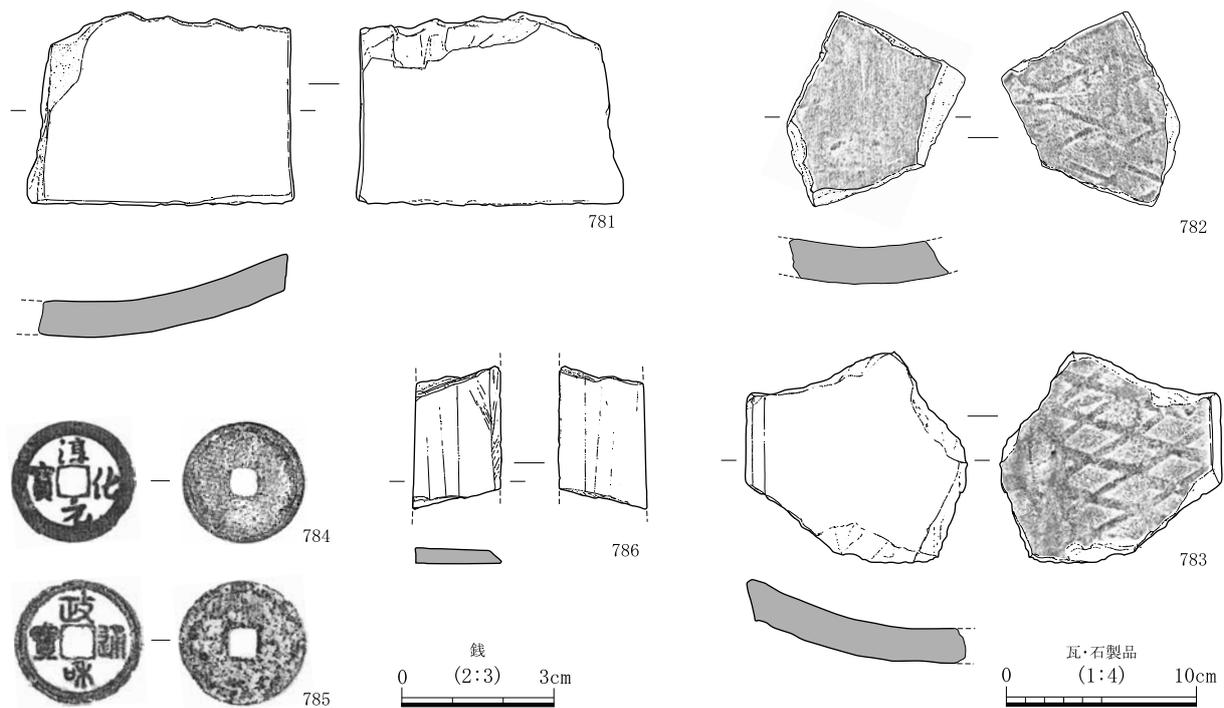


図 96 943 溝出土銭貨・瓦・石製品実測図

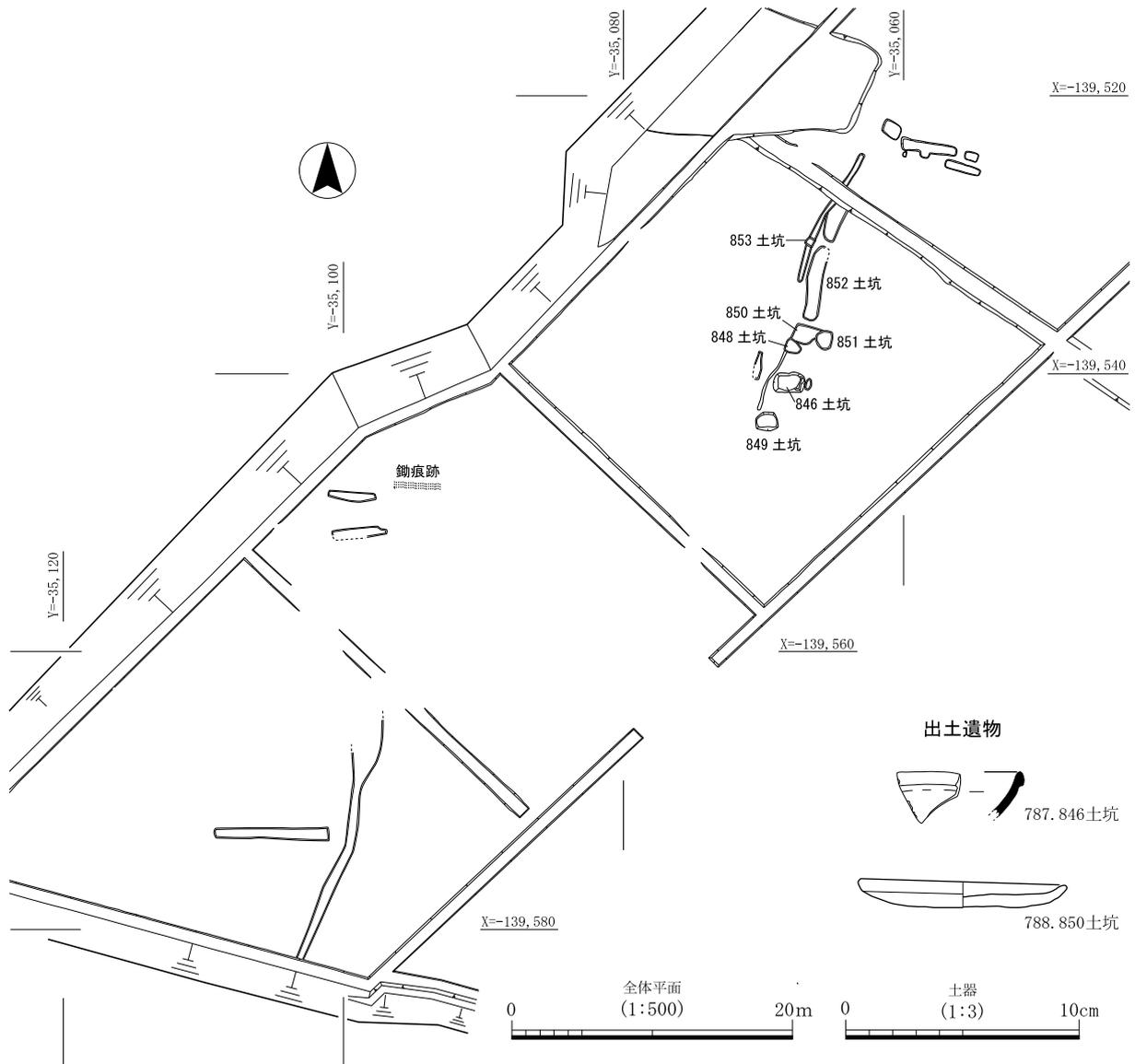
底部からの立ち上がりも強いため、皿と言うよりは杯と言うべき形態を呈する。口縁部のナデがきつく、体部外面中位にはナデ下端部が稜となって明瞭に残る。

大-1 (753～758) 大型の中で大半を占めるタイプである。小-3が大型化した形態を示す。製作技法もよく似ており、底部外面や体部下半には指オサエの痕跡が明瞭に残る。内面の見込みにも僅かな盛り上がりが見られるが、全体が盛り上がるというものではなく、外面から押された箇所のみが若干膨れる程度である。底部から体部への立ち上がり部分には、内面にも外面の指オサエに対応するオサエ痕跡が認められる。したがって器壁は、この底部周縁から体部下半がもっとも薄く、体部上半で最大厚となる。体部下半は指オサエのため強く外反し、上半部もそのまま外側に広がる。

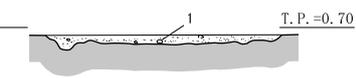
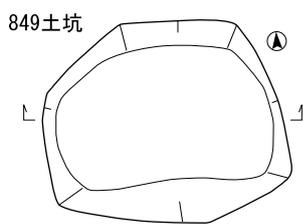
大-2 (759～764) 大-1に比べ深く、皿と言うよりは杯と言うべき形態を呈する。底部から体部下半までのつくりは大-1とほぼ同じで、底部外面や体部下半には指オサエの痕跡が明瞭に残る。また内面の体部下端部にも外面の指オサエに対応するオサエ痕跡がみられる。器壁の厚みも大-1と同じで、底部周縁から体部下半がもっとも薄く、体部上半で最大厚となる。体部上半の横方向のナデは、特に下端部を意識的に強く凹ましており、幅3mm程度の凹線状を呈している。このため下半の指オサエと上半のナデとの境が極めて明瞭となる。これがこのタイプの最大の特徴である。口縁端部は外側に開いたまま丸くおさめるものや、やや内湾気味に上方につまみ上げるものがある。

945 土坑 690 畦畔と 932 畦畔との交点の南東角に位置する。土坑というよりは浅い窪み状の遺構である。平面形は東西 0.8～1.3 m、南北 2.45 m のビーンズ形を呈する。土坑内には土師器や瓦器、石などが散乱していた。943 溝と同じ性格の遺構と考えられる。

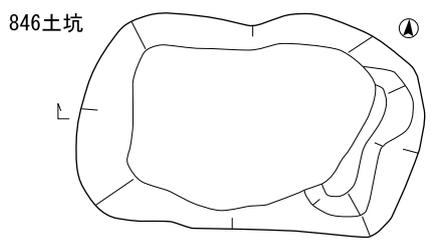
図示した遺物は土師器、瓦器、須恵器である (729～732) が、それ以外に瓦質の羽釜・足釜等も出土している。土師器皿 (729・730) と瓦器碗 (731) はほぼ 14 世紀前半におさまる。須恵器の捏鉢 (732) は、口縁端部が上下にやや拡張する 12 世紀末～13 世紀初頭に位置するものである。



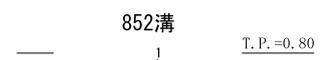
出土遺物



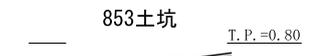
1. 灰オリブ 7.5Y4/2 細粒砂～中粒砂 (シルト偽礫を含む)



1. 灰 7.5Y4/1 粗粒砂 (シルト偽礫を含む)



1. オリブ黒 7.5Y3/2 細粒砂～極細粒砂 (シルトを含む)



1. 灰 7.5Y5/1 細粒砂 (シルト偽礫を含む)



1. 灰 7.5Y5/1 粗粒砂 (シルト偽礫を含む。一部ラミナの残骸が見える)



1. 灰 7.5Y4/1 細粒砂～極細粒砂 (シルト偽礫を含む)
2. 灰 7.5Y4/1 細粒砂 (シルトを含む。シルト偽礫が混じる)

図 97 7 区 4 層 上面 検出 遺構 平面・断面 図 及 び 846・850 土坑 出土 遺物 実測 図

3. 4層上面検出遺構（図97）

土坑を数基のほか足跡や鋤の痕跡を検出した。

土坑は調査区の南端部や掘立柱建物の下層部でも数基検出しているが、調査区中央部で検出した683畦畔や481畦畔の下層部に特に集中している（846・848～853土坑ほか）。平面形は幅1m弱で帯状にのびるものや細い溝状のもの、あるいは楕円形や不整形なものなどさまざまで、底面も凹凸があるものなど様ではない。人為的に掘り込まれたものが大半であるが、単に足跡状の踏み込みが帯状にのびているものも認められた。埋土はシルトの偽礫を含む細粒～極細粒砂や粗粒砂などである。遺構の性格は明らかでないが、現時点では耕作に伴う掘り込みと考えている。なお、この面で検出した同様の遺構の中には、3b層上面検出の溝の位置と重なるものもあった。3b層上面で検出し切れなかった遺構である可能性も考えておきたい。

鋤の耕作痕跡は掘立柱建物5の下層部で検出した。幅約0.5m中に3列の鋤痕跡が残るもので、東西方向に3mほどつづいていた（写真図版27-4）。このほか4区同様、調査区のほぼ全域で無数に広がる足跡を検出した。

846土坑からは白磁碗（787）が、850土坑からは土師器皿（788）が出土している。787は白磁Ⅳ類で11世紀後半～12世紀前半に位置する。788は短く外反する口縁をもつ13世紀後半頃のものである。

第5節 2区の遺構と遺物

1. 3層上面検出遺構（図98・99・101・103・104・106・112）

掘立柱建物2棟、井戸4基のほか、土坑や溝、ピットなどを多数検出した。それぞれの重複関係から、これらの遺構には少なくとも4時期以上の時期差が認められる。

掘立柱建物8 調査区中央北寄りに位置する。座標北から西に4度振れる東西棟である。桁行は3間であるが、梁間は西妻側が2間、東妻側が3間と変則的な構造である。東妻側を出入り口としたのであろうか。桁行の柱間寸法は、南側柱筋は1.6m等間であるが、北側柱筋は揃っておらず、東から1.6m・1.3m・1.9mとなる。梁間の柱間寸法は東妻側が南から1.5m・1.5m・0.8mで、西妻側が1.9m等間である。柱穴は直径20～40cm程度の円形、あるいは楕円形である。

掘立柱建物9 掘立柱建物8の南東側に位置する。桁行3間、梁間2間の東西棟で、建物の軸は掘立柱建物8と同じく座標北から西に4度振れる。柱間寸法は桁行が1.6m等間、梁間が1.3m等間である。柱穴は直径20～40cm程度の円形で、南東隅の278ピットには掘方の底に木端が敷かれていた。

この建物の75・77・278ピットからは青磁、白磁、木製品などが出土している（792・793・925）。792は口禿の白磁皿で、13世紀頃のものである。793は龍泉窯の青磁碗で、13世紀前半に位置する。925は直径約7cmの未加工の幹に四角い柄穴が穿たれている。

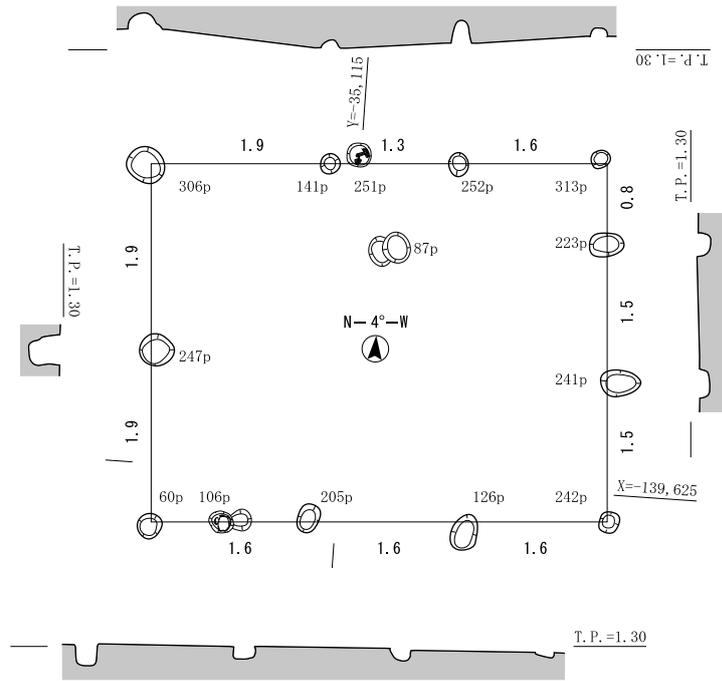
なお調査区の北半部で、建物としてはまとまらないピットを多数検出している（写真図版7）。掘立柱建物の周辺には密に分布するが、調査区の南半部ではやや稀薄となる。ピットは直径0.2～0.3mの平面円形や隅丸方形を呈するものが多く、大きいもので直径0.4m以上のものもある。これらの中には、73・106ピットのように柱掘方の底に瓦や土器を置き、柱の当たりにしたものや、221ピットのように根石を入れたもの、また218・277ピットのように礎板を敷いたものなどが見られる。これらは建物の柱穴であったことをうかがわせるが、建物として復原することができなかった。以下に報告する44溝



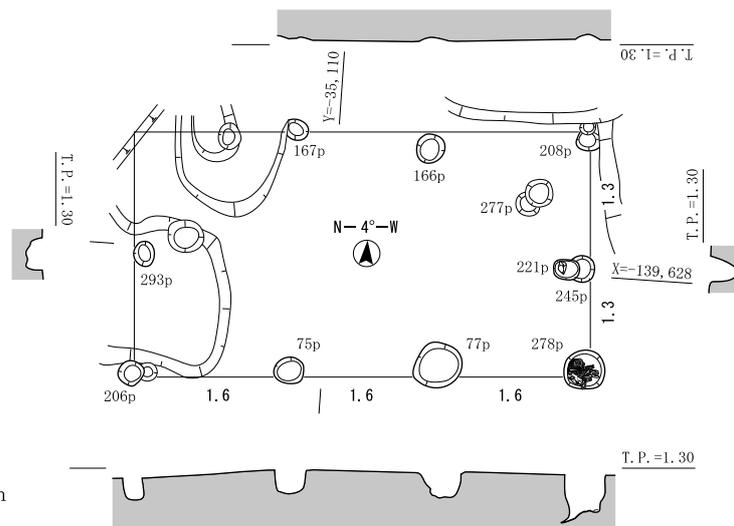
図 98 2区3層上面検出遺構全体平面図

や55溝の埋土上で検出したものも多くあることから、溝の廃絶後に築かれた遺構と考えられる。

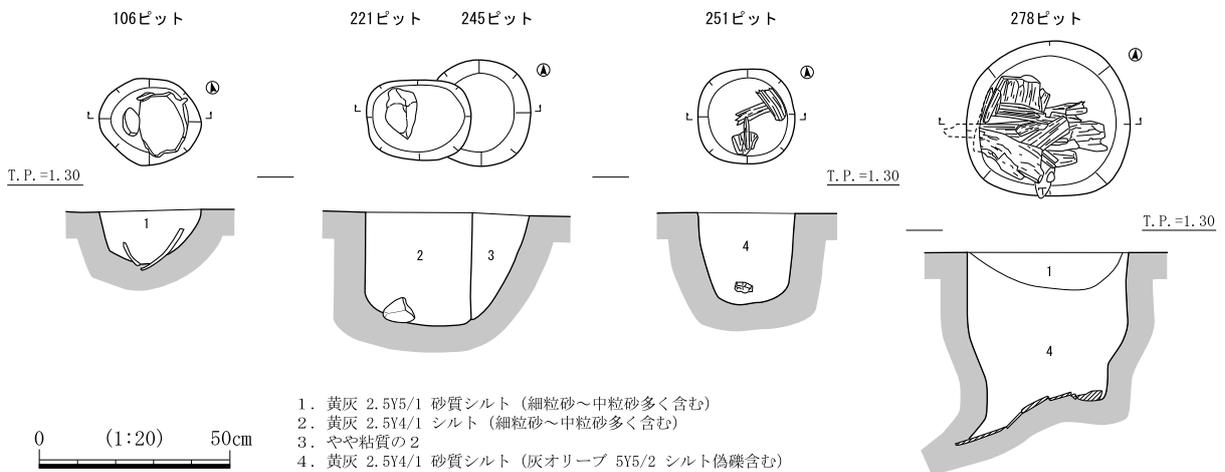
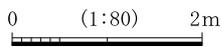
106ピットの底に敷かれていた土器は土師器の羽釜(814)で、それ以外に土師器皿(798)が出土している。73ピットからは底に敷かれた平瓦(918)とともに土師器皿(789)が1点出土している。814は12世紀後半～13世紀前半に位置するもので、体部が緩やかに内湾し、外面には指頭圧痕が残る。口縁部は内傾する。その他のピットからも土師器、瓦器、白磁、瓦、木製品、銭貨などが出土している(790・791・794～797・799～813・815～817・926)。遺物の時期は11世紀末～14世紀である。古い時期に属するものは、283ピットから出土した11世紀末頃の瓦器椀(812)で、内外面に密なミガキを施す。新しい時期に属するものには88ピットから出土した14世紀後半の土師器皿(802)などがある。緩やかに外反する口縁をもち、内面にはハケ調整を施す。底部内外面には明瞭な指頭圧痕が残る。これら以外の土師器皿、瓦器椀の時期は12～13世紀におさまる。また銭貨は169ピットから開元通寶(816)と至道元寶(817)が出土している。



掘立柱建物 8



掘立柱建物 9



1. 黄灰 2.5Y5/1 砂質シルト (細粒砂～中粒砂多く含む)
2. 黄灰 2.5Y4/1 シルト (細粒砂～中粒砂多く含む)
3. やや粘質の 2
4. 黄灰 2.5Y4/1 砂質シルト (灰オリブ 5Y5/2 シルト偽礫含む)

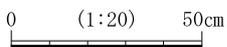
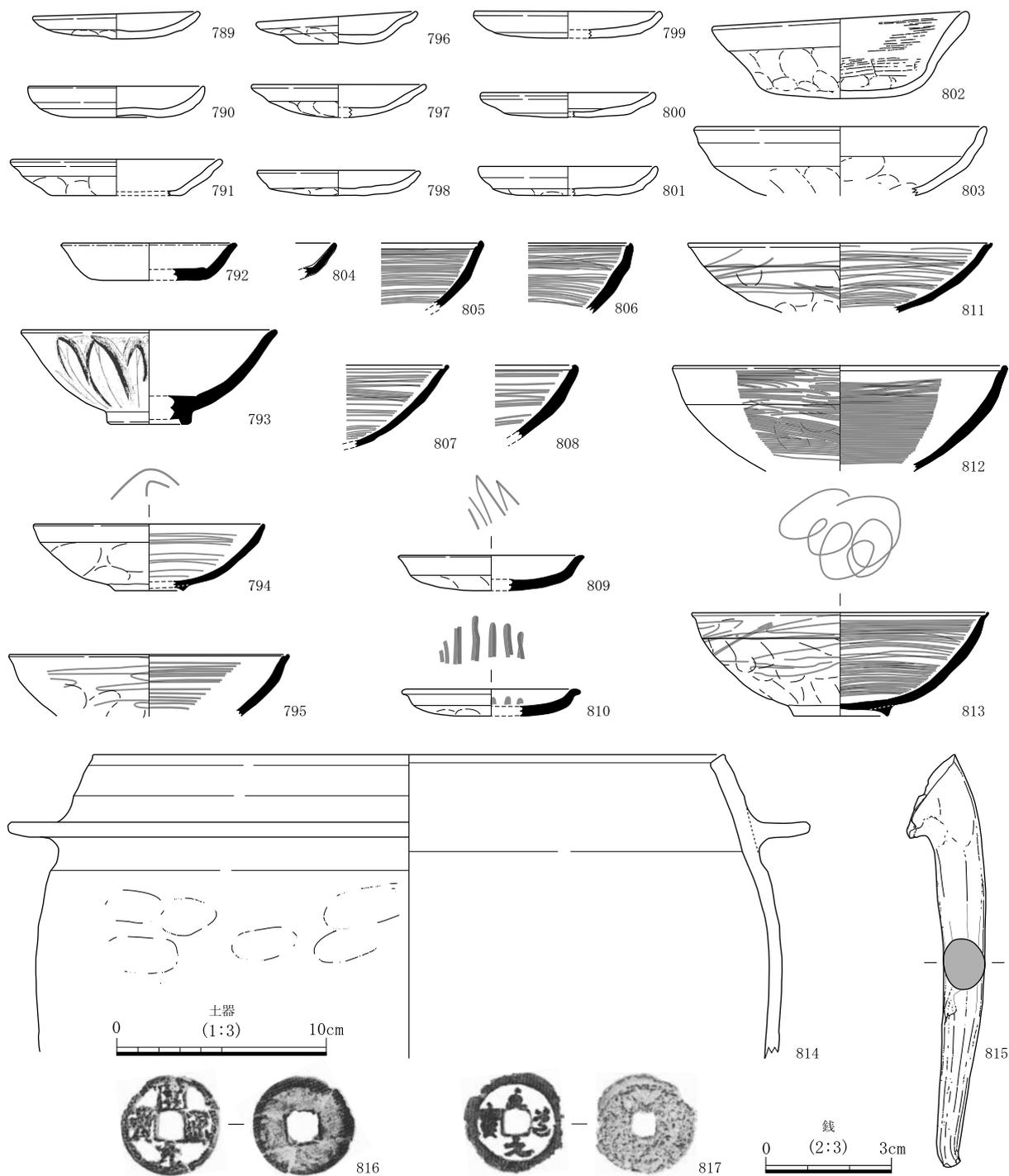


図 99 掘立柱建物 8・9 及び周辺検出ピット平面・断面図



789. 73 ピット、790・795. 79 ピット、791・794・804. 81 ピット、792. 75 ピット、793. 77 ピット、796・797. 92 ピット、798・814. 106 ピット
 799. 120 ピット、800・801. 237 ピット、802・809. 88 ピット、803. 286 ピット、805. 63 ピット、806. 65 ピット、807. 234 ピット
 808. 239 ピット、810. 258 ピット、811. 209 ピット、812. 283 ピット、813. 324 ピット、815. 172 ピット、816・817. 169 ピット

図 100 ピット出土遺物実測図

41 井戸 掘立柱建物 9 のすぐ北側に位置し、44 溝と一部重複する。掘方の平面形は東西 2.3 m、南北 2.0 m の東西にやや長い隅丸長方形で、44 溝が完全に埋まった後から掘り込まれている。井戸枠は木組みで、その底には集水施設として曲物が据えられている。井戸枠は一辺約 0.55 ～ 0.6 m の平面方形で、四隅の柱を横木によって繋いで木枠をつくり、その外側に幅約 10 cm、長さは長いもので約 1.4 m の短冊状の薄板を縦方向に張り付けたものである。その張り方は非常に雑である。井戸枠自体の高さは約 1.5 m であるが、柱はさらに深くまで打ち込まれている。その柱は加工されたものではなく、樹木の幹をそのま

ま利用したものである。井戸枠の上端は、掘方検出面よりも 0.45 m ほど下がっているが、その部分にさらに何らかの枠が設けられていたのか、素掘りのままであったのかは明らかでない。曲物（839）は直径約 35 cm、高さ 26 cm で、外側に高さ 10 cm 程度の曲物（籬）（837・838）を 2 つ被せた二重構造となっている。掘方の埋土は粘土の偽礫や砂を多く含む砂質シルトであるが、枠下部の曲物外側では砂層となっていた。井戸枠内は粘土の偽礫を多く含むシルト混じりの細粒～粗粒砂である。

出土遺物には土師器、瓦器、木製品などがある（818～821・837～839・919）。井戸枠底部からは 818 の土師器皿が出土している。底部は中央がやや浮き上がり、口縁部は屈曲して開く。14 世紀前半に位置する。また掘方の下層より出土した 821 の瓦器椀は、ミガキの簡略化がすすんだ 13 世紀前半頃のものである。その他には 919 の独楽、もしくは紡錘車と考えられる木製品がある。平面形は円形を呈し中央に穿孔を施す。断面形は緩やかな三角形を呈する。

51 井戸 掘立柱建物 9 の南東側に位置する。これも 44 溝の埋土上面から掘り込まれた井戸である。掘方は東西 1.98 m、南北 2.13 m の整った隅丸方形で、その中央に木組みの井戸枠が組まれている。井戸

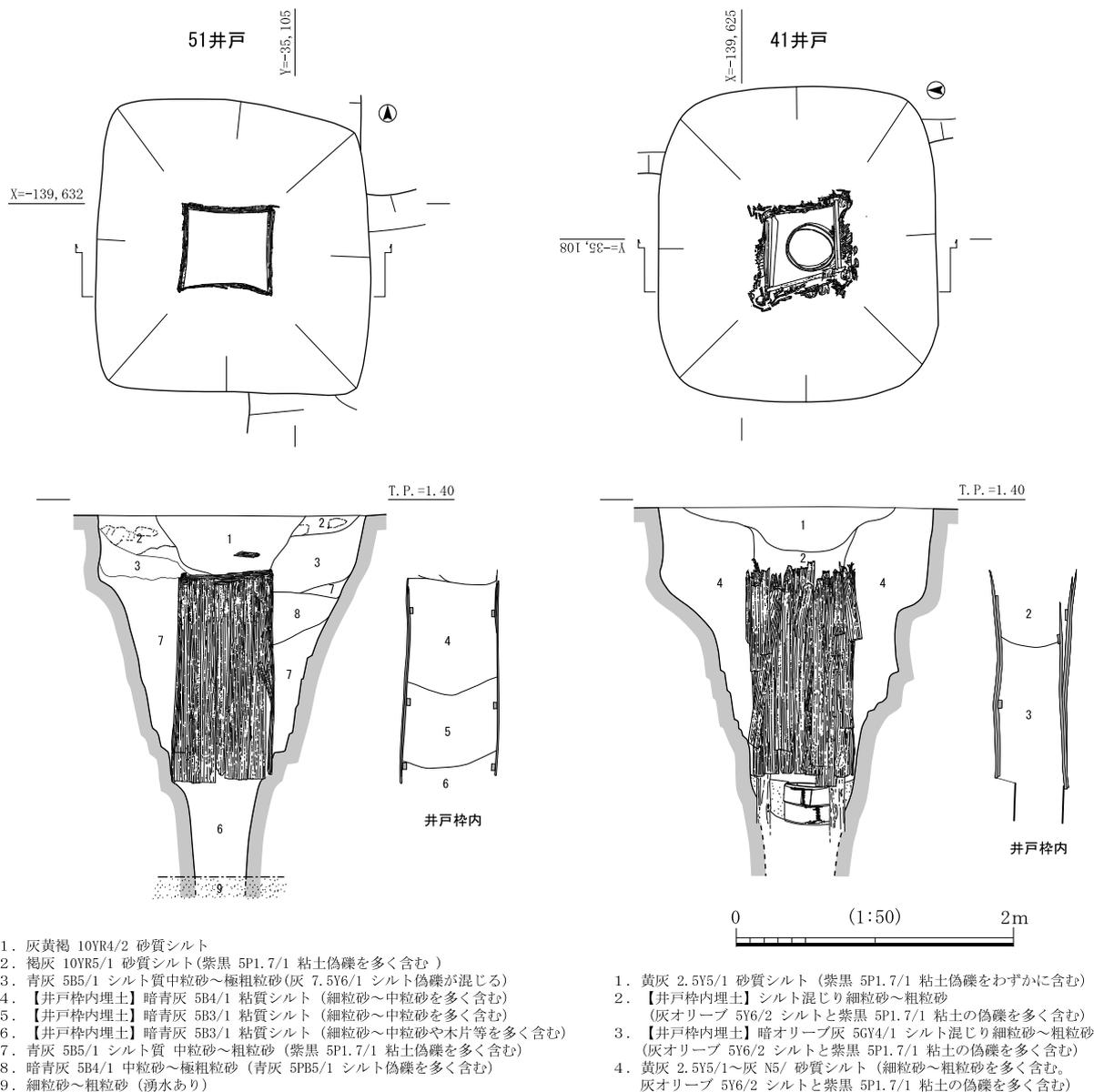
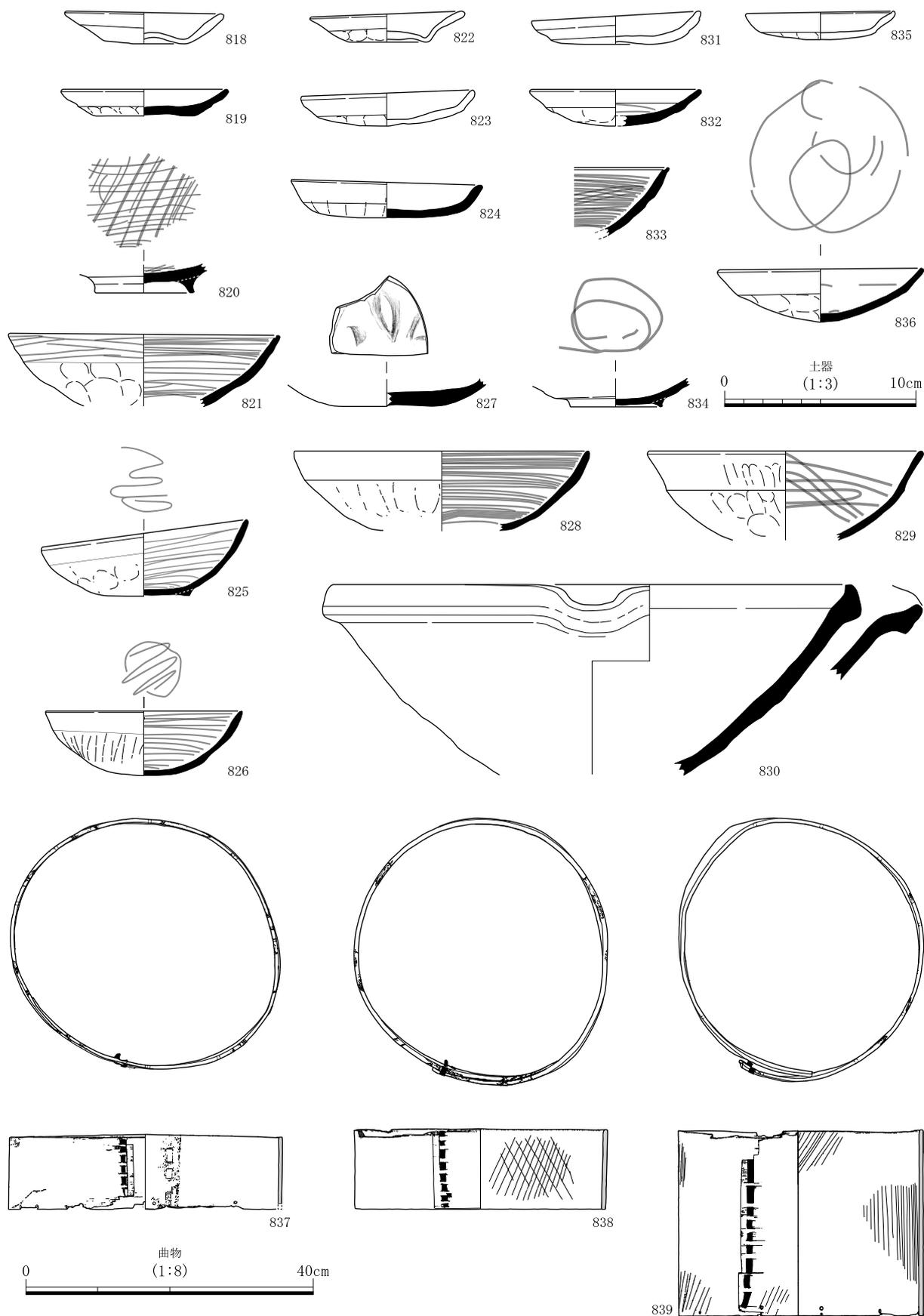


図 101 51・41 井戸平面・断面図



818 ~ 821・837 ~ 839. 41 井戸 (818. 枠内底部、820. 枠内、821. 掘方下層)、822 ~ 830. 51 井戸 (823・825・827 ~ 829. 掘方下層、822・826. 枠内底部、830. 枠内)、831 ~ 834. 100 井戸 (832. 上層)、835・836. 164 井戸 (枠内埋土)

图 102 井戸出土遺物実測図

枠の構造は41井戸とほぼ同じであるが、平面形は一辺約0.65～0.7mの方形と41井戸に比べ一回り大きい。また四隅の柱や横木はきれいに加工されたものを使っており、木枠の周りを囲む短冊状の薄板も一枚一枚丁寧に張られている。その薄板は幅約10cm、長さは約1.4～1.5mで、木枠よりも上に20cmほど飛び出しているため、その上端部内側に、幅6～7cmの板材を方形に組んで補強をしている。底に曲物は埋設されていない。井戸の底までは確認できていないが、掘方検出面から下に2.63mの地点で湧水のみられる砂層を確認した。また井戸枠の上端は、41井戸と同様に掘方検出面よりも0.4mほど下がっている。木組みの枠の上が素掘りのままであったのかなどは明らかでない。掘方の埋土は、粘土の偽礫を多く含む砂質シルトやシルト質中粒～極粗粒砂などで、井戸枠内の埋土は、下層が砂や木片等を多く含む暗青灰粘質シルトで、中層と上層が細粒～中粒砂を多く含む暗青灰色粘質シルトである。なお井戸枠の下部からは、幅5cm程度の角材が数点出土している。

出土遺物は土師器、瓦器、須恵器、白磁、瓦、木製品などである(822～830・913・920・921)。井戸枠内から出土した遺物の時期は13世紀中葉～14世紀中葉である。822の土師器皿は底部がやや浮き上がり、口縁は強く外反する14世紀中葉のものである。830は須恵器の捏鉢で、片口をもち体部は緩やかに立ち上がる。口縁端部は肥厚しやや上下に拡張する。14世紀前半のものである。掘方下層より出土した遺物の時期は、12世紀後半～13世紀におさまる。827は白磁皿で見込みに劃花紋で花卉を描く。13世紀初頭に位置する。829は和泉型の瓦器椀で、内面にやや太いミガキを粗く施す。12世紀後半頃のものである。また920の曲物や921の隅切折敷の底板が出土している。

100井戸 41井戸の東側に位置する。桶と板材とを組み合わせて構築した井戸である。掘方の平面形は長辺0.87m、短辺0.77mの東西にやや長い隅丸長方形で、41・51井戸に比べて小規模である。井戸枠は掘方の東壁際に寄っており、下部に底板をもたない桶を正位で埋設する。桶は幅約7～12cmの^{ふいた}樽板を12枚用いたもので、外側には3箇所に箍が巻かれている。広端部の直径は約42cmを測る。この桶の上端部を幅約6cm、長さ60cmの板材で方形に囲み、さらにその周りに長さ20cm前後、幅10cm足らずの短冊状の薄板を縦方向に張り付けて井戸枠としている。井戸の底は確認できなかったが、掘方上端から0.9mの深さで砂層に達することから、おそらくこの砂層からの湧水を汲み上げていたと考えられる。井戸枠内の埋土は下層が粘質シルトを多く含む中粒～粗粒砂で、上層が中粒～粗粒砂を多く含む灰色粘質シルトである。

枠内からは土師器、瓦器、木製品などが出土した(831～834・922)。これらの遺物は12世紀前半に位置する。833の瓦器椀は内面に密なミガキを施す。832は瓦器皿で緩やかに開く体部をもち、内面には簡略化したミガキを施す。922は曲物の底板である。

164井戸 51井戸の東側に位置する。井戸枠本体は残っていなかったが、桶の周りの^{たが}箍が残っており(写真図版6-4)、これによって井戸枠に桶が用いられていたことが判明した。おそらく井戸枠を撤去する際に、^{ふいた}樽板を一枚一枚分解して外したために、箍のみが残ったと考えられる。桶は高さ0.65m以上で、直径は箍の部分で約0.7mであったことが復原できる。掘方は桶の直径よりも一回り大きな楕円形であるが、この外側にはさらに51井戸や55溝と一部重複するような大きな掘り込みが認められる。当初はこちらが井戸の掘方ではないかと考えたが、桶の大きさに対してあまりにも大きすぎる。おそらく井戸よりも一時期古い土坑が切り合っていると考えられる。井戸枠内の埋土は、下層が黒色の植物遺体や中粒砂～砂礫を多く含む灰色粘質シルトで、上層が中粒～粗粒砂を多く含む灰色粘質シルトである。

井戸からは土師器、瓦器、土製品などが出土した(835・836・916)。遺物の時期は13世紀後半におさまる。

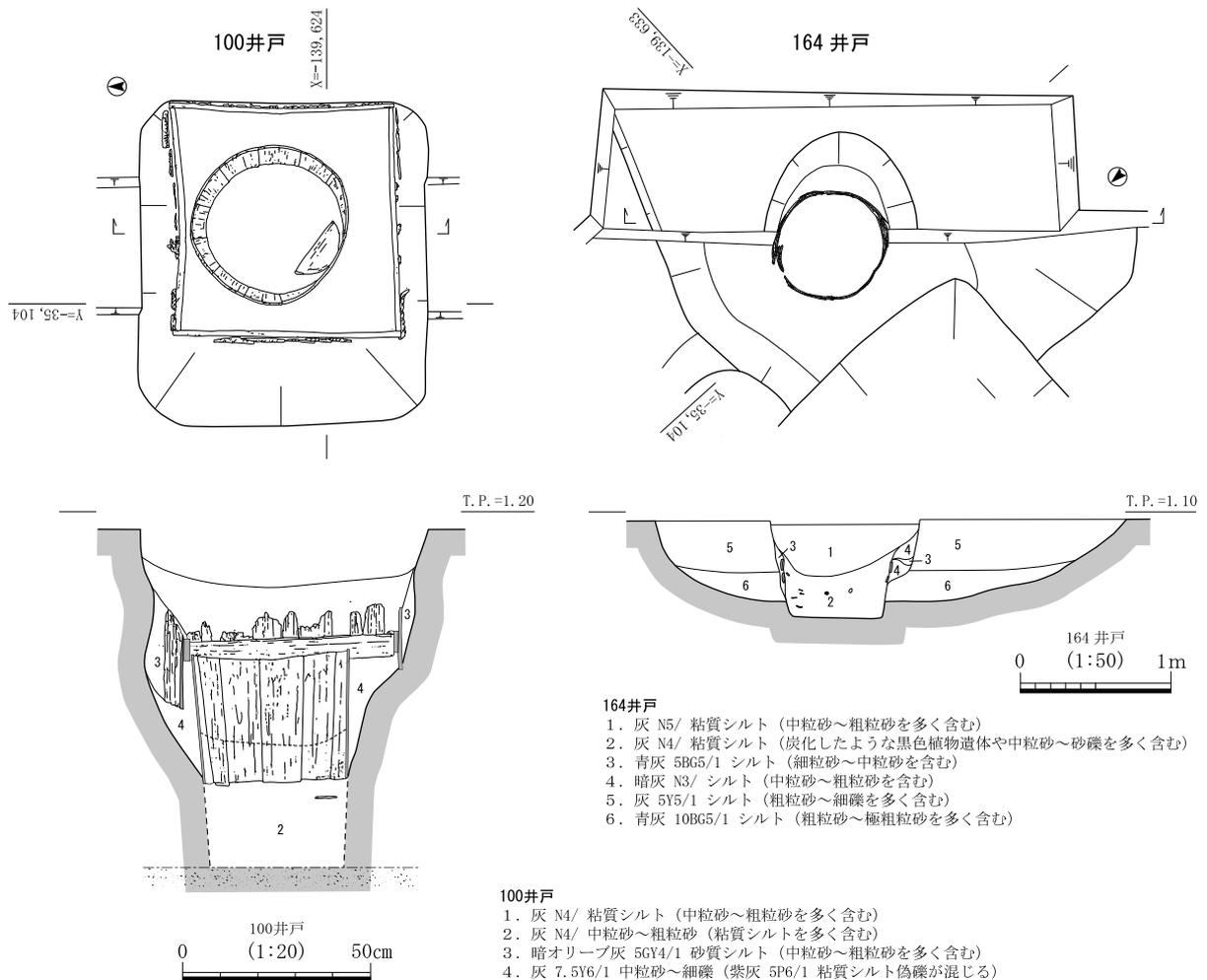


図 103 100・164 井戸平面・断面図

836 は 13 世紀末頃の和泉型の瓦器碗である。内面には簡略化が進んだミガキを施す。916 は管状土錘である。

42 土坑 掘立柱建物 9 の東側に位置する。55 溝の埋土上から掘り込まれた土坑で、一部 70 土坑と重複する。図面上は 70 土坑を切っているように表現しているが、実際には 70 土坑が 42 土坑を切っている。平面形は長径 2.15 m、短径 1.65 m の南北に長い楕円形で、深さは 0.7 m を測る。埋土の大部分は細粒～極細粒砂が混じる暗青灰色砂質シルトで、最上層に粘質シルト偽礫を含む灰黄褐色砂質シルトがのる。
50 土坑 調査区の西端部に位置する。56 溝と切り合う土坑で、56 溝の埋土上で検出できる。以下に報告する 67・69・103 土坑などと同様に、3 層上面で検出した遺構の中ではもっとも新しい時期の遺構である。平面形は長辺約 2.65 m、短辺約 1.6 m の南北に長い隅丸長方形で、深さは 0.2 m を測る。埋土はシルト質細粒～中粒砂である。

土坑からは瓦器、須恵器、青磁、白磁などが出土した (840～843)。遺物は 11 世紀末～13 世紀前半のものであるが、遺構の切り合い関係からみて、後の時代の混入品と考えられる。842 は白磁皿で内面に浅い沈線と櫛描紋を施す。13 世紀初頭に位置する。843 は片口の須恵器捏鉢で、口縁は内湾気味に立ち上がる。11 世紀末～12 世紀前半に位置する。

52 土坑 51 井戸のすぐ南側に位置する。44 溝の埋土上から掘り込まれた土坑で、平面形は直径約 1.5～1.6 m の円形を呈する。深さは 0.4 m で、埋土は細粒～中粒砂を多く含む灰色シルトである。

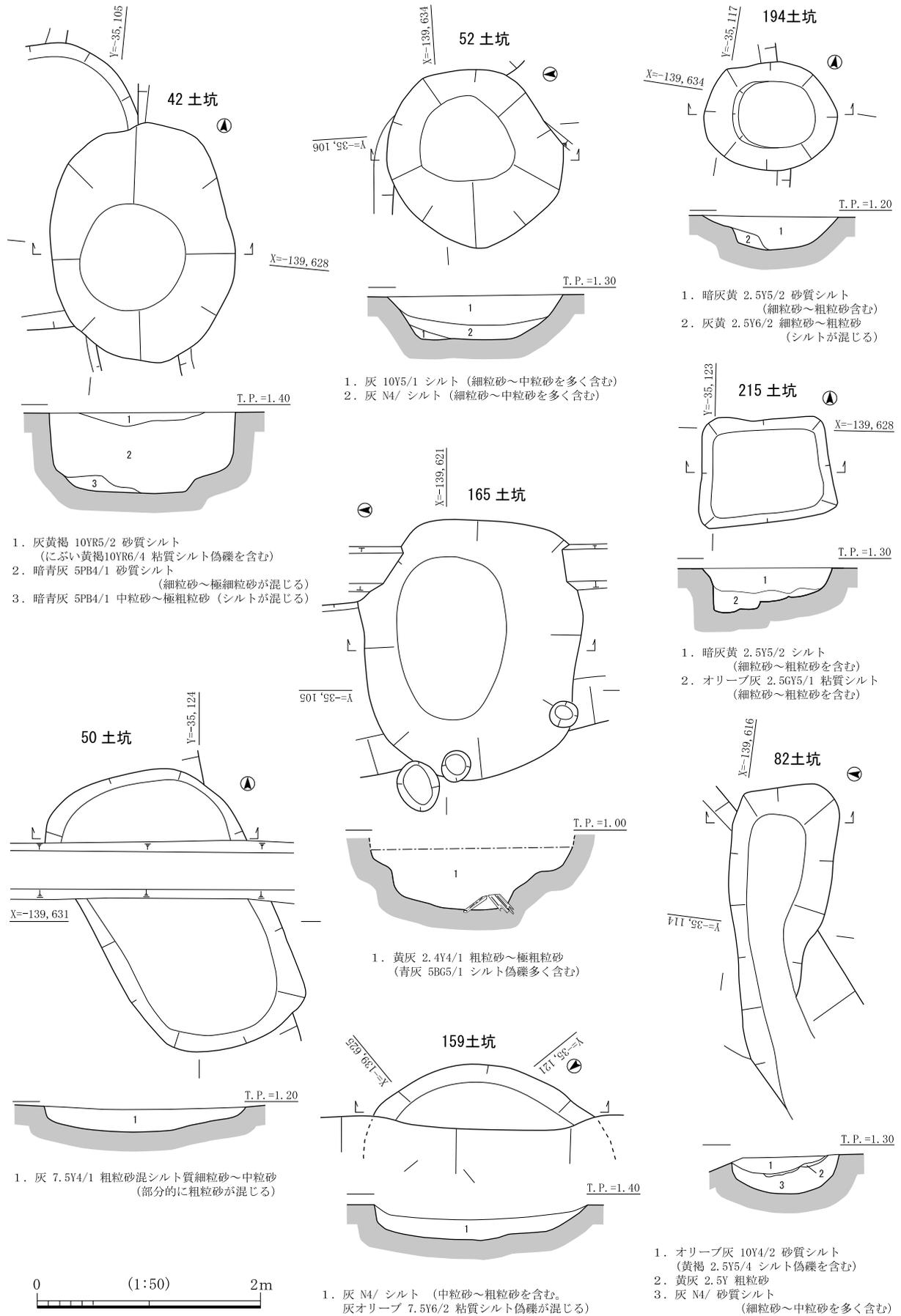


図 104 3層上面検出土坑平面・断面図

土坑からは土師器、瓦器、須恵器、青磁などが出土した(844～847)。遺物の時期は12～13世紀である。844の土師器皿は外反する口縁をもつ。13世紀後半に位置する。846は龍泉窯の青磁碗で、12世紀代のものである。

67・69 土坑 掘立柱建物8の東側に位置する。両者は一部重複し、67土坑が69土坑を切る。平面形は共に直径約2mの円形で、深さは0.1m程度とその大きさに対して非常に浅い。埋土は灰色シルトである。なお67土坑と重複する81ピットなどは、土坑埋土掘削後の底面で検出したものである。

67土坑からは土師器皿、白磁皿が出土した(848・849)。848の白磁皿は緩やかに外反する口縁をもち、見込みに劃花紋を施す。底部外面には糸切痕が残る。12世紀後半頃のものである。849の土師器皿は短く立ち上がる口縁をもつ13世紀後半に位置するものである。

69土坑からは土師器、瓦器碗が出土している(850～852)。850の瓦器碗は高台が消失し、内面には簡略化したミガキを施す。14世紀前半に位置するものである。852は大和型の土師器羽釜で、口縁部は外反し端部は内側に巻きこむ。内面には指頭圧痕が残る。13世紀後半頃のものである。

ただし、遺構の切り合い関係からみて、これらの遺物のいずれも混入品であると考えられる。

70 土坑 42土坑の西側に位置し、42土坑と一部重複する。図面上は42土坑が切っているように表現しているが、実際には70土坑が42土坑上に乗っていた。67・69土坑とよく似た土坑で、平面形は一辺約2.5mの隅丸方形を呈する。埋土は灰色シルトである。

この土坑からも土師器皿や瓦器碗が出土した(856～858)。遺物の時期は11世紀後半～13世紀中頃であるが、これらも50・67・69土坑出土の遺物と同じく混入品と考えられる。857は内面に隙間なく密にミガキを施す11世紀後半の瓦器碗である。858は和泉型の瓦器碗で、外面に2段のナデを施す。12世紀末～13世紀初頭に位置する。

82 土坑 調査区の北端部に位置する。西側が54溝と重複し、54溝に切られる。東西に長い土坑で、南北約0.95m、東西約3.2mを測る。深さは0.34mで、埋土は上層がシルト偽礫を含むオリーブ灰色砂質シルト、下層が細粒～中粒砂を多く含む灰色砂質シルトで、その間に薄く黄灰色粗粒砂が入る。

土坑からは瓦器皿(853)が出土した。短く立ち上がる口縁をもち、端部は強く外反する。内面にはジグザグ状の暗文を施す。

103 土坑 調査区北東隅に位置する。大型で不整形な平面形を呈する。深さは0.1m弱と非常に浅い。埋土は灰色シルトである。

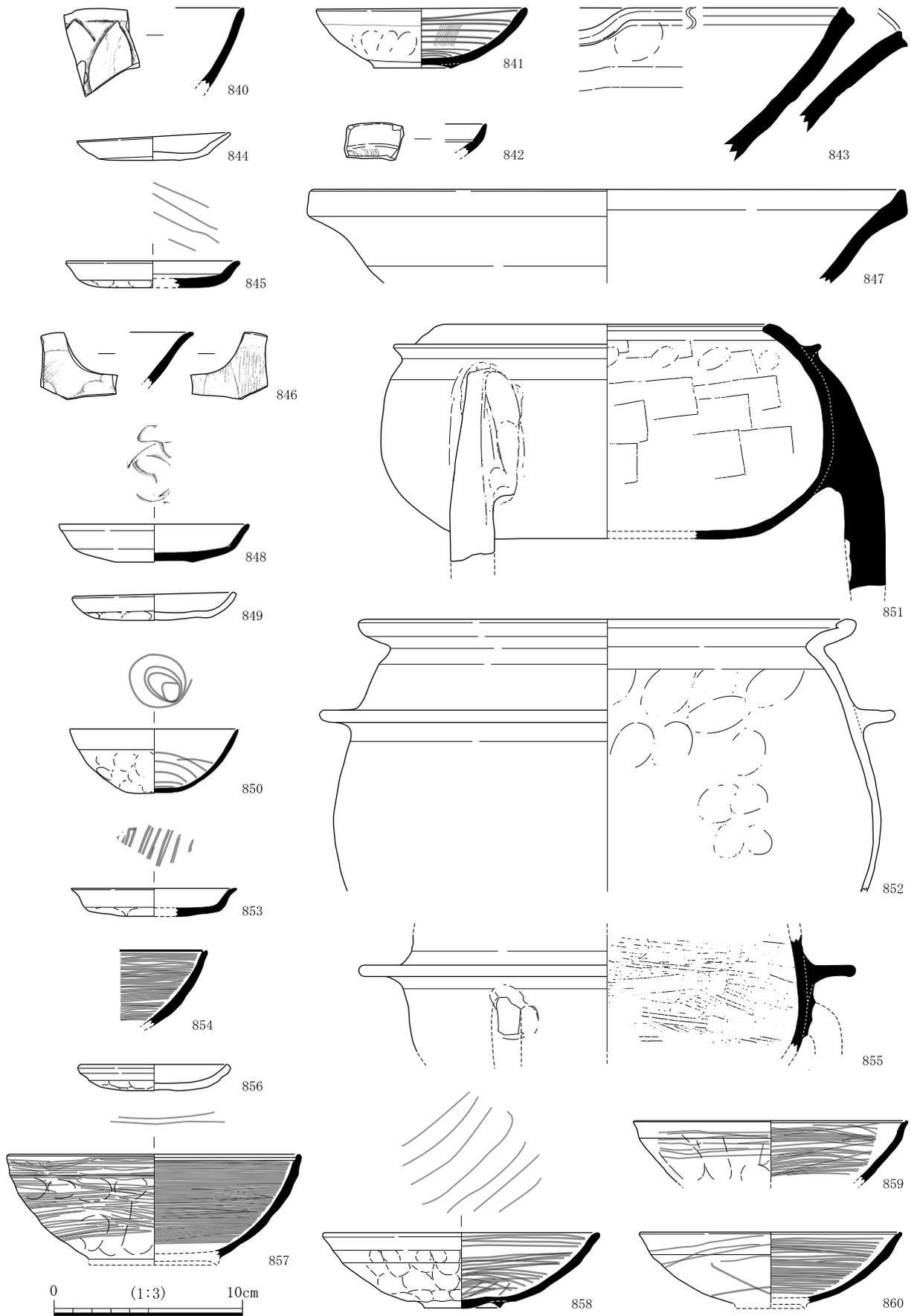
土坑からは瓦器(854・855)が出土しているが、遺構の切り合い関係から、おそらくこれらも混入品であると考えられる。854の瓦器碗は内面に密なミガキを施す11世紀末～12世紀初頭頃のものである。

159 土坑 掘立柱建物8の西側に位置する。54溝と重複し、西側の大部分が54溝によって削られている。東端の一部のみの検出であり、全体の形状は不明である。深さは0.32mで、埋土は中粒～粗粒砂や粘質シルト偽礫を含む灰色シルトである。

165 土坑 100井戸の北側に位置する。55溝の埋土上面から掘り込まれた土坑で、平面形は長径2.35m、短径2.0mの東西にやや長い楕円形を呈する。深さは約0.95mで、埋土は青灰色のシルト偽礫を多く含む粗粒～極粗粒砂である。下層から細い板材が2点出土した。

出土遺物には瓦器碗や瓦がある(859・860・914)。瓦器碗(859・860)は内面にやや密なミガキを施す12世紀後半のものである。

194 土坑 調査区中央のやや南寄りに位置する。平面形は長径1.2m、短径0.98mの東西にやや長い楕



840 ~ 843. 50 土坑、844 ~ 847. 52 土坑、848·849. 67 土坑、850 ~ 852. 69 土坑、853. 82 土坑、854·855. 103 土坑、856 ~ 858. 70 土坑、859·860. 165 土坑

图 105 土坑出土遺物実測図

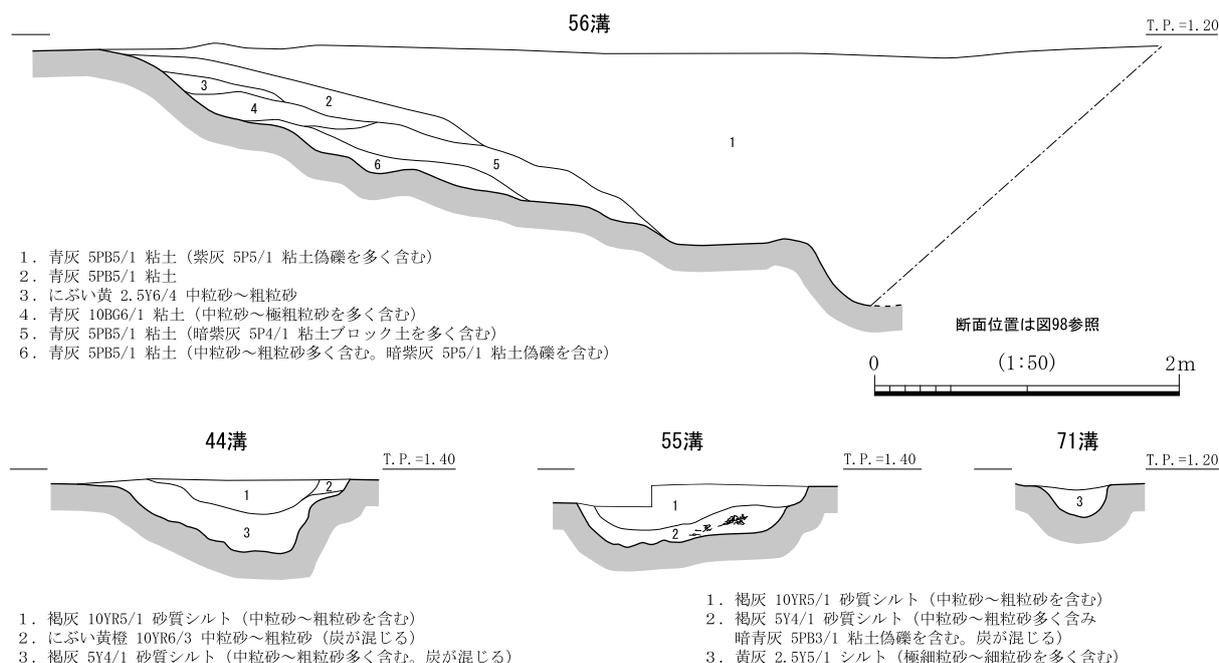


図 106 44・55・56・71 溝断面図

円形で、深さは0.3 mを測る。埋土は細粒～粗粒砂を含む暗灰黄色砂質シルトで、下部の一部にシルト混じりの細粒～粗粒砂が堆積する。

215 土坑 調査区の西端部、159 土坑の南側に位置する。平面形は長辺約 1.15 m、短辺約 0.95 m の東西にやや長い隅丸長方形で、深さは 0.4 m を測る。埋土は上層が細粒～粗粒砂を含む暗灰黄色シルトで、下層が細粒～粗粒砂を含むオリーブ灰色粘質シルトである。

調査区の南半部でも、173 土坑など 50・67・69・103 土坑によく似た大型で不整形の土坑をいくつか検出している。3 層上面検出遺構の中ではもっとも新しい時期の遺構である。深さはどれも 0.1 m 足らずで、埋土は灰色シルトである。

44 溝 掘立柱建物の東側に位置する。南北方向の溝で、座標北から僅かに西に振れる。上述のとおり、ピットや井戸はこの溝が埋まった後の埋土上面から構築されていることから、ピットや井戸よりも古い時期の遺構であることが明らかである。幅は約 1.3～1.8 m、深さは約 0.5～0.6 m で、南側の 51 井戸付近でやや広がって溜まり状となっている。また調査区北壁付近では遺構の輪郭が不明瞭となる。埋土は、下層が中粒～粗粒砂を多く含む炭混じりの褐灰色砂質シルトで、上層が中粒～粗粒砂を含む褐灰色砂質シルトである。

溝からは土師器、瓦器、須恵器、白磁、木製品などが出土している (861～881・923・924)。遺物の時期は 12～13 世紀前半におさまる。865～874 は瓦器碗で 12 世紀に属するものがまとまって出土している。873 は和泉型の瓦器碗で、内面にはやや太いミガキとジグザグ状の暗文を施す。876 は白磁碗である。高台はやや高く、側面に一条の沈線を施す。高台の直上には連続した三角形の切り込みが見られる。見込みには重ね焼きの痕跡が残る。878 は土師器羽釜で、口縁部は内湾する肩部から屈曲して外上方へ立ち上がる。12 世紀後半頃のものと考えられる。879 は瓦質の足釜である。強く内湾する体部をもち、内外面に明瞭な指頭圧痕が残る。また 923 の小さな連歯下駄も出土している。平面は楕円形を呈し、方形の緒穴があける。

49 溝 掘立柱建物 9 の西側に位置する。座標西から北にやや振れる東西溝で、幅は約 0.35 m を測る。

深さは5 cm程度と浅い。この溝の南側で同規模の溝（1094 溝）を1 条検出している。

49 溝からは13 世紀中葉の瓦器椀（882）が出土している。

55 溝 44 溝の東側に並行する。これも44 溝と同じくピットや井戸よりも古い時期の遺構である。幅は約1.5～1.7 mで、深さは約0.4 mを測る。調査区北壁付近では大きく広がっており、遺構の輪郭が不明瞭となっている。北側では44 溝と一部で重複しており、平面観察から44 溝が55 溝を切っていることが確認できた。埋土は、下層が粘土の偽礫や中粒～粗粒砂を多く含む炭混じりの褐灰色砂質シルトで、上層が中粒～粗粒砂を含む褐灰色砂質シルトである。

溝からは土師器、瓦器、白磁、瓦などが多く出土している（887～903・915）。遺物は11 世紀末～14 世紀初頭にかけての時期差がみられるが、中心は12 世紀後半～13 世紀と考えられる。895・897 は和泉型の瓦器椀である。891 は瓦器皿である。他の瓦器皿に比べやや深く、内外面に幅の太いミガキを施す。12 世紀末～13 世紀初頭に位置する。901 は白磁碗である。体部下半から高台にかけて露胎とする。902 は土師器鍋で、くの字に外反する口縁をもつ。内面には横位のハケ調整を施し、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。12 世紀前半頃のものである。915 は巴紋軒丸瓦である。

54・56 溝 調査区の西壁際に位置する。調査区の壁に沿って「く」の字状に屈曲する溝で、北東—南西方向の部分を54 溝、北北西—南南東方向の部分を56 溝とした。本来は一体の溝であったと思われるが、埋土最上層の平面観察で、54 溝が56 溝を切っているように検出できたことから溝番号を分けた。両者共に溝の西肩が調査区外であるため、正確な規模は不明だが、幅は54 溝が4 m以上、56 溝が6 m以上ある。54 溝は深さ約0.55～0.65 mで、底が2 条に分かれる。溝の西側が西肩部に向けて立ち上がっていることから、調査区のすぐ西側に溝の西肩があると推定できる。56 溝は屈曲部付近では深さ0.8 mほどであったが、底面は南に向かって徐々に下がり、調査区南端部でもっとも深くなる。その深い箇所では深さ1.7 mとなる。埋土は東肩部に青灰色粘土や中粒～粗粒砂などもみられるが、大部分は紫灰色の粘土偽礫を多く含む青灰色粘土であり、一気に埋められた様子がうかがえる。

調査区西側の5 区との間には、調査区に沿って幅1 mほどの素掘りの用水路が通っている。54・56 溝の方向はその用水路の流路と全く同じであることから、54・56 溝は現在の用水路の前身遺構であったと考えられる。

54・56 溝の埋土上で検出できる遺構は、大型の50 土坑1 基のみであり、82・159 土坑やピットなどは溝によって削られている。このことから、54・56 溝はピットや土坑よりも新しく、大型の土坑よりは古い遺構と判断できる。

54 溝からは土師器、瓦器、陶器、白磁、瓦などが出土した（883～886・917）。884 の備前焼の鉢は14 世紀代のものである。直線的にのびる口縁をもち、端部は下方にやや拡張する。886 の土師器皿は、緩やかに外反する口縁をもち、体部下半に強い指頭圧痕が残る。14 世紀後半に位置するものである。

56 溝からは土師器、瓦器、須恵器などが出土している（904～912）。瓦器椀（908・910～912）は、内面のミガキの簡略化が進んだ13 世紀に位置するものである。904 は14 世紀末の片口の瓦質搗鉢である。内面にはハケ調整、外面には縦方向の粗いケズリを施す。搗目には使用の痕跡がみられる。14 世紀末頃のものである。905 は須恵器の捏鉢で、口縁端部はやや肥厚し上下に拡張する。内面は下から斜め上方にナデを施す。14 世紀前半頃のものである。909 は浅鉢で、平底で直線的に外方にのびる体部をもつ。体部外面には指頭圧痕が残る。917 は雁振瓦である。

このほか3 層上面では、西半部で71・1098 溝を検出しているが、これらは以下に報告する4 層上面

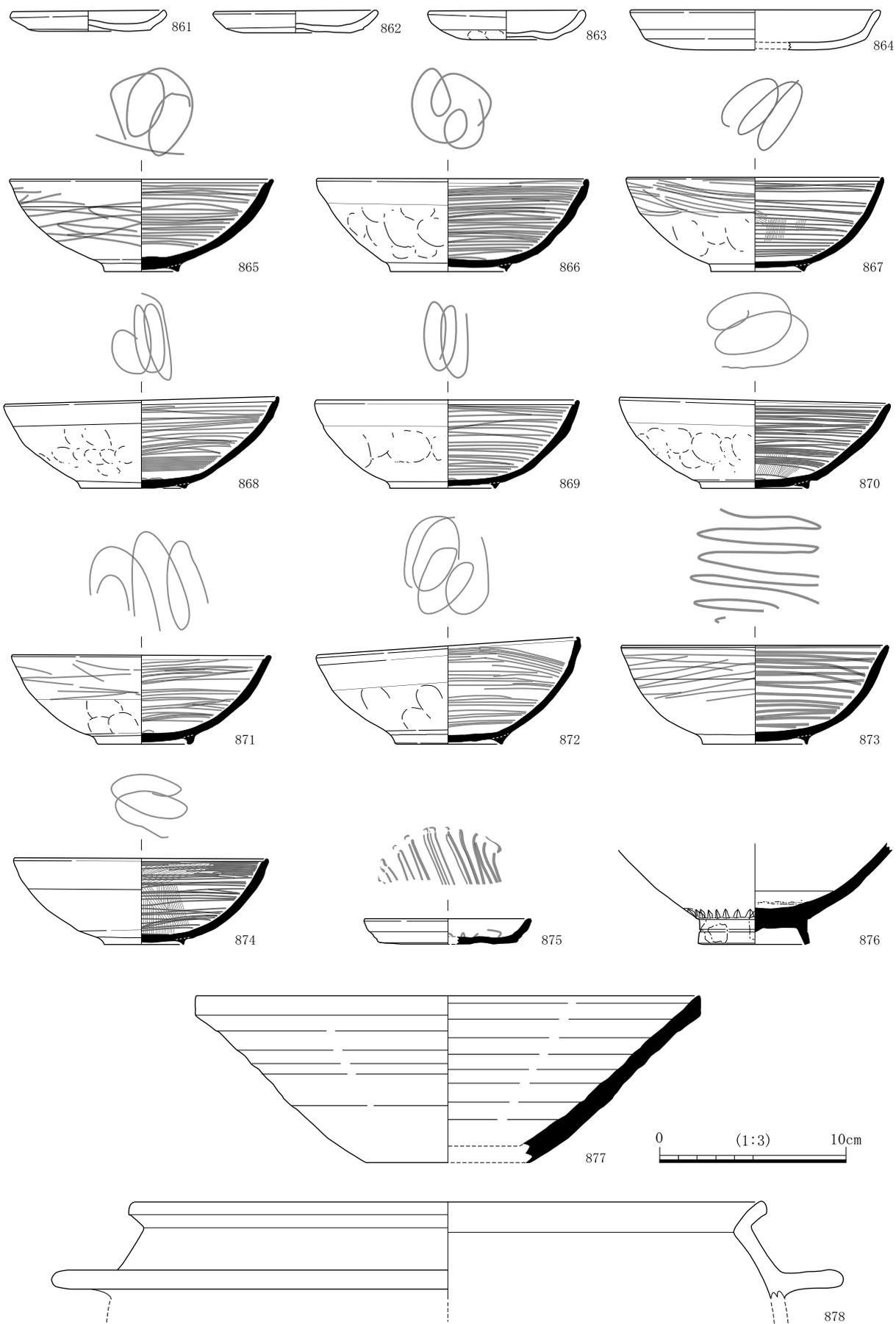
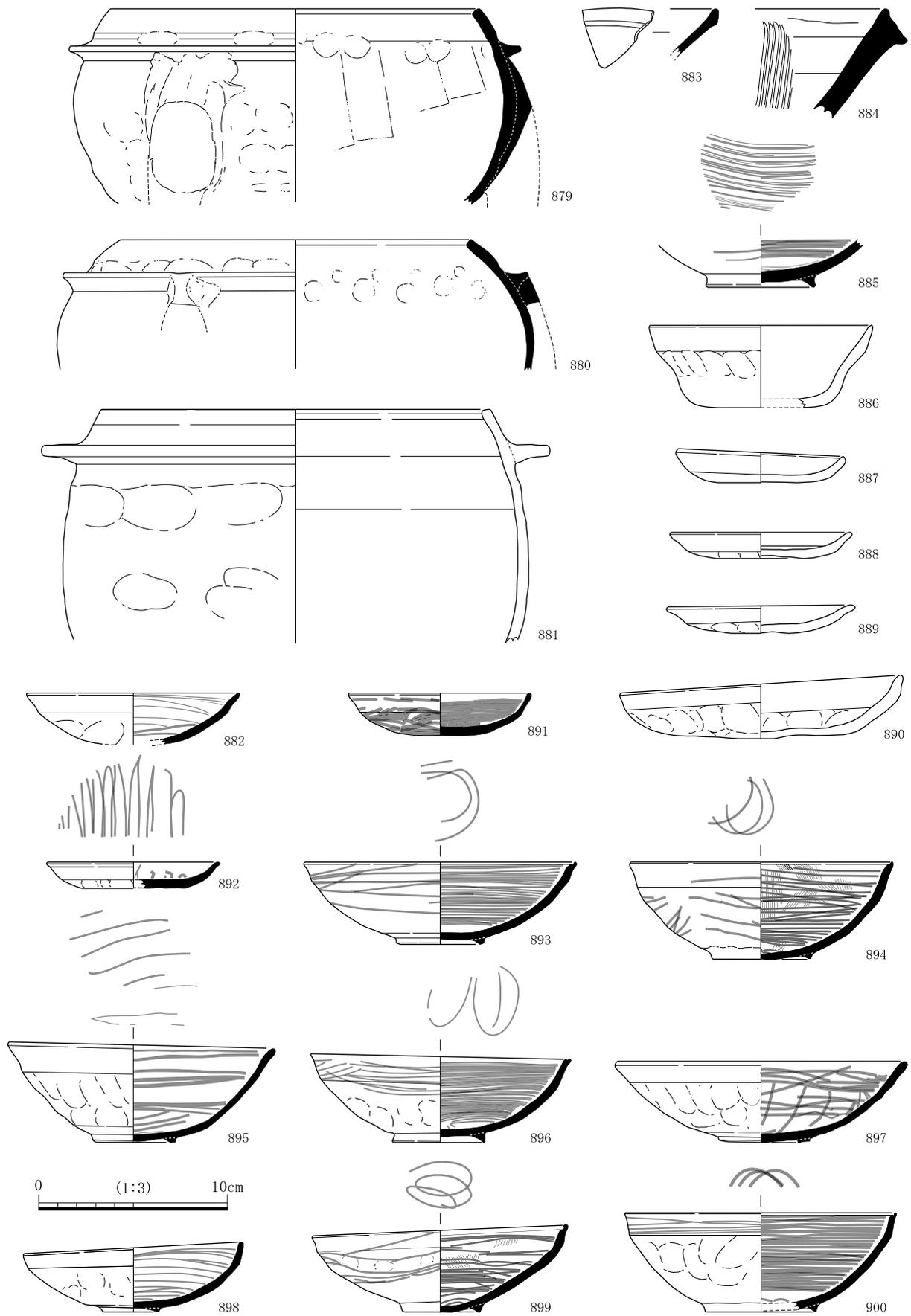
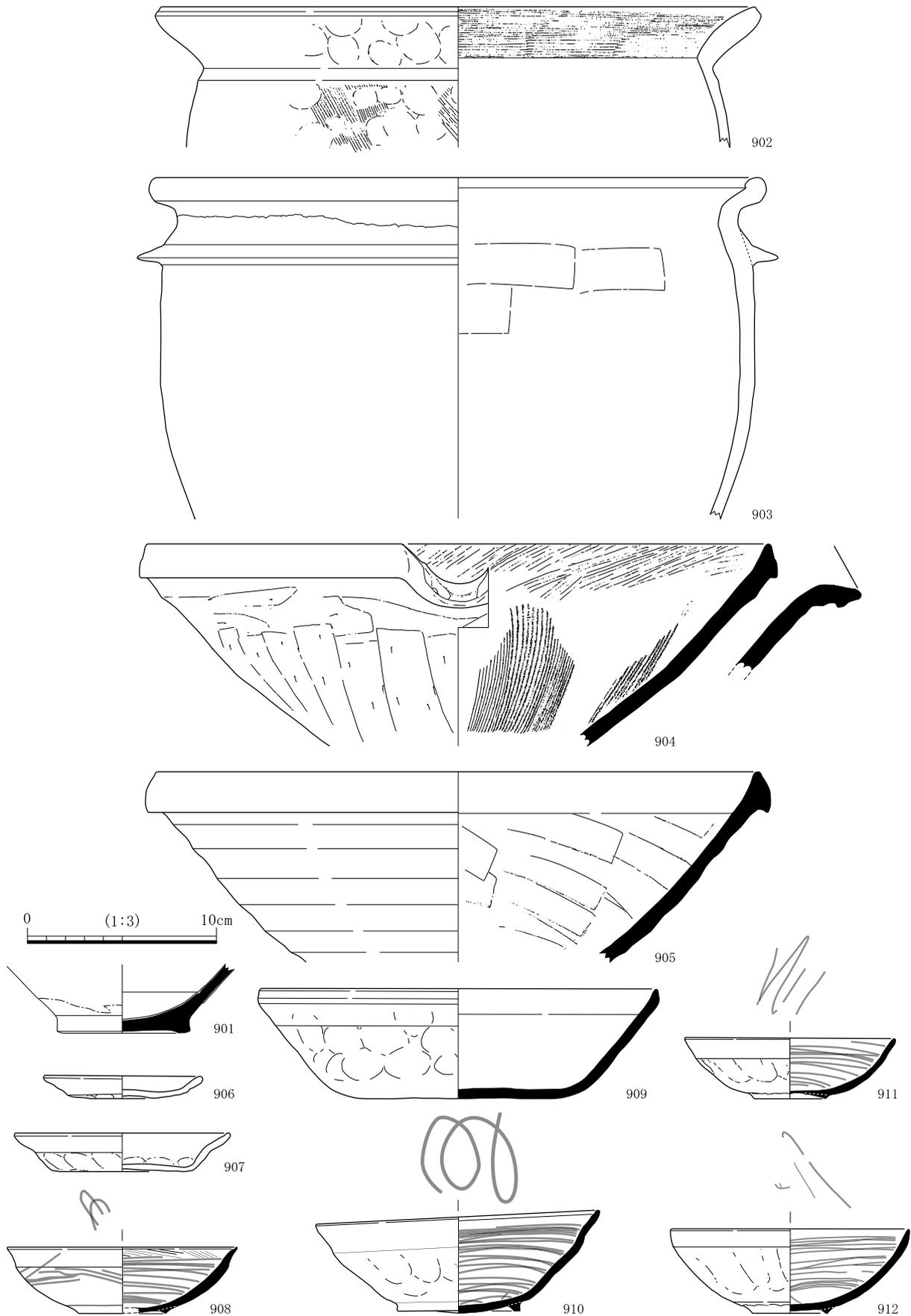


图 107 44 溝出土遺物実測図



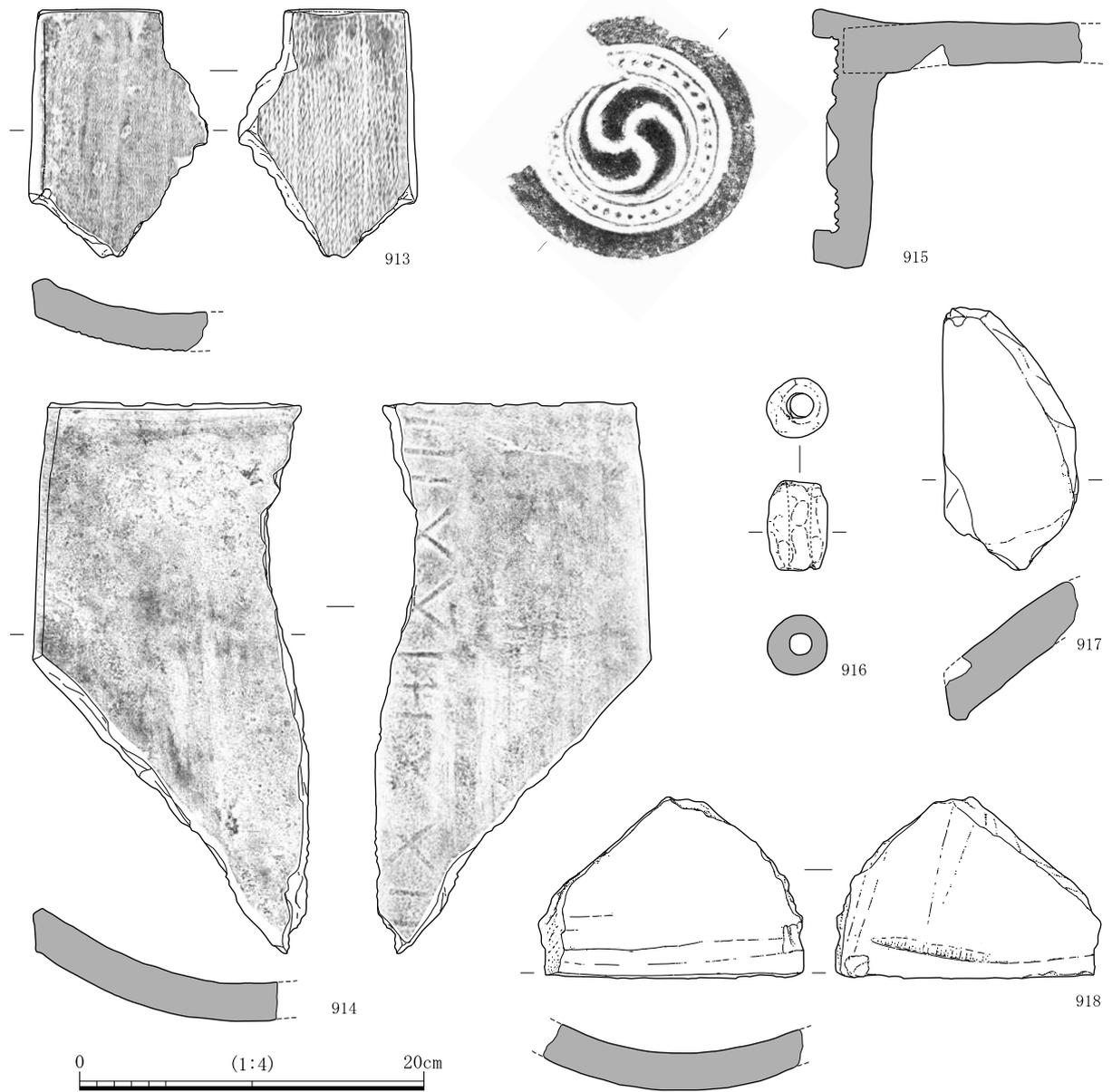
879 ~ 881. 44 溝、882. 49 溝、883. 54 溝上層、884 ~ 886. 54 溝下層、887 ~ 895. 55 溝上層、896. 55 溝下層、897 ~ 900. 55 溝

图 108 溝出土遺物実測図



901. 55 溝、902·903. 55 溝上層、904·905·907·910·911. 56 溝下層、906·908·912. 56 溝、909. 56 溝上層

图 109 溝出土遺物実測図



913. 51 井戸、914. 165 土坑、915. 55 溝上層、916. 164 井戸（枠内埋土）、917. 54 溝上層、918. 73 ピット

図 110 各遺構出土瓦・土製品実測図

検出の細溝の影響で、3層上面に僅かな窪みができ、そこに黄灰色極細粒～細粒砂が堆積したものである。

なお最初に記したとおり、遺構の重複関係から、この面で検出した遺構には少なくとも4時期以上の時期差が認められた。大まかには図 112 に示したとおりであり、まず、12世紀前半頃に調査区東方で検出した44・55溝が築かれ、その溝が埋まった後の13世紀から14世紀にかけて集落が営まれる。その後14世紀末頃に西壁際で検出した54・56溝が掘削され、その溝が埋まって以降に浅い土坑がいくつも築かれる、というものである。

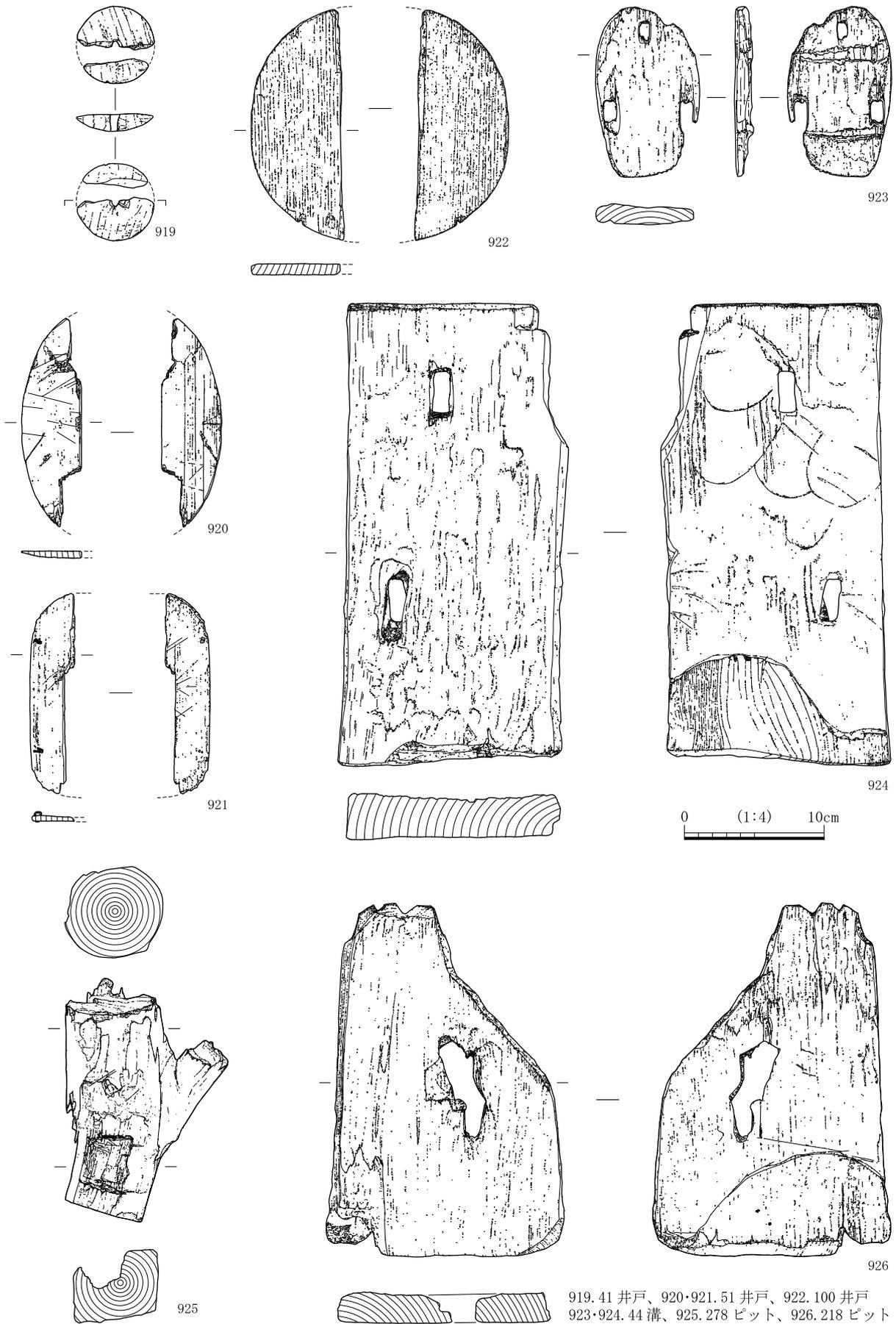


图 111 各遺構出土木製品実測図

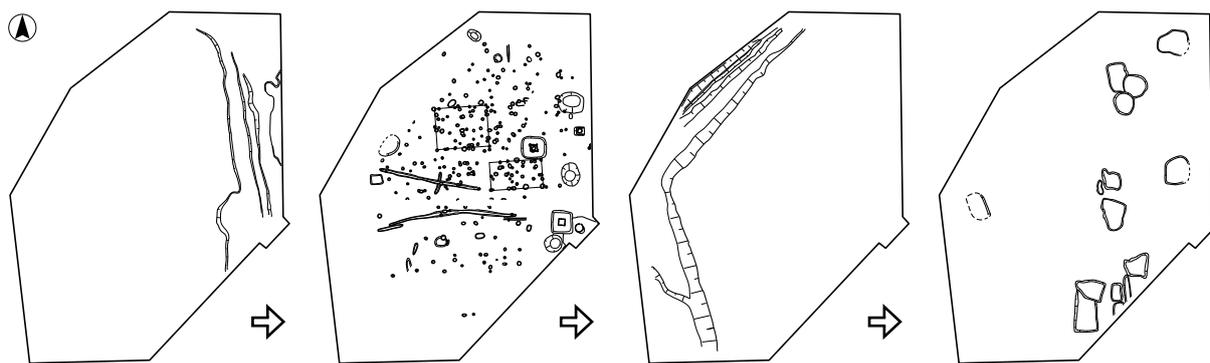


図 112 3層上面検出遺構変遷略図

2. 4層上面検出遺構 (図 113)

調査区の南半部で細溝を数条検出した。南北方向の溝と、東西方向の溝があり、両者は規則正しく並ぶ。南北方向の溝は71・1095・1096溝の3条で、約2mの間隔をあけて並行する。溝の幅は0.25～0.45mで、深さは0.1～0.2mを測る。座標北から西に約10度振れる。東西方向の溝は254・261・1097・1098・1099溝の5条で、もっとも南の1099溝以外は71溝にほぼ直角に取り付く。254溝と1098溝、1098溝と1097溝との間隔は、南北溝と同じく約2mで、1097溝から261溝までの間隔が約4mである。東西溝の幅は0.2～0.4mで、深さは0.1～0.2mを測る。埋土はいずれも極細粒～細粒砂を多く含む黄灰色シルトである。

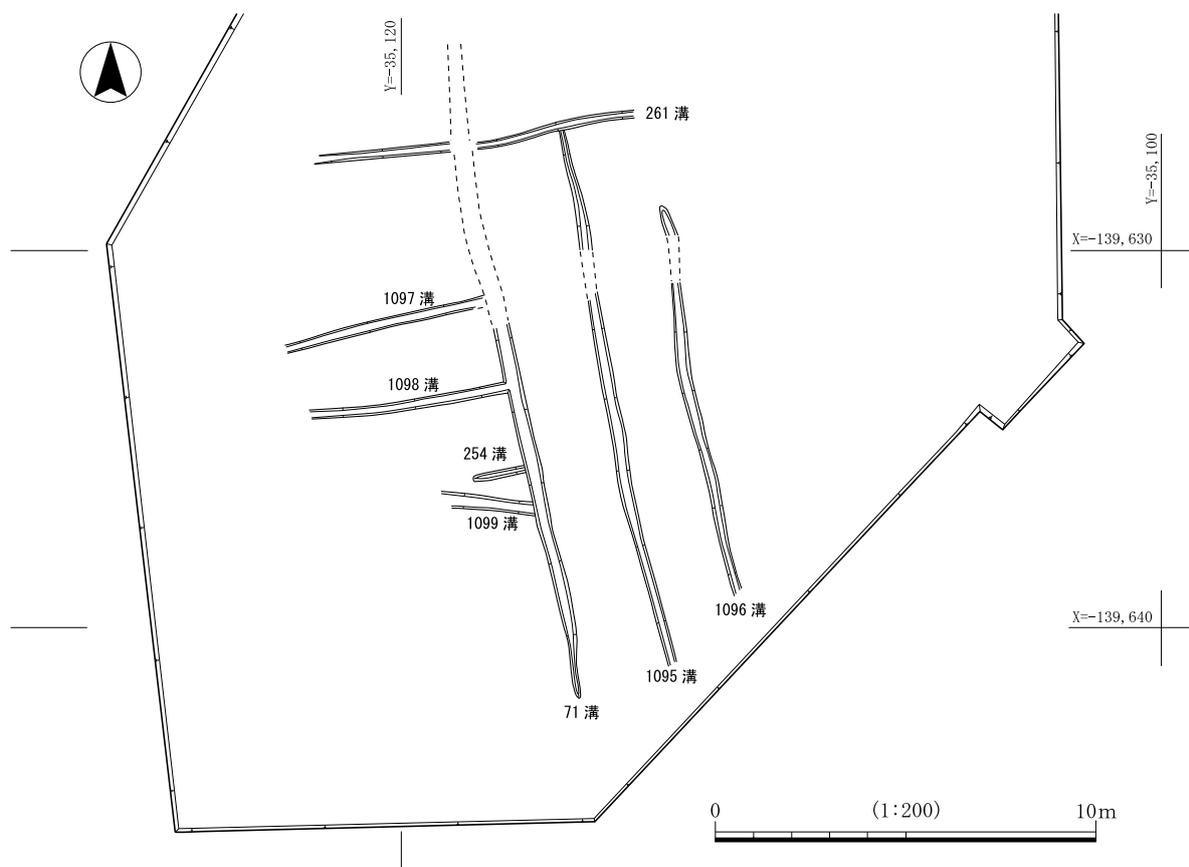


図 113 2区4層上面検出遺構全体平面図

3. 6層上面検出遺構（写真図版8-2・3）

主に調査区の南西部で人の足跡や鋤の痕跡を検出した。足跡は無数に広がるものではなく、歩いた方向や歩幅などが確認できる程度の少人数のものである。

第6節 5区の遺構と遺物

2区につづき3区を報告すべきであるが、2区と3区とは70m程隔てている。したがって4・7区と同様に2区に隣接する5区から先に報告する。

1. 北端部2a・2b層および中央部3a層上面検出遺構（図114・116・118・119）

調査区を横断する662畦畔より北側の北端部2a・2b層上面で、土坑や溝、ピットや落ち込みなど多数の遺構を検出した。その面に対応する畦畔より南側の中央部3a層上面では耕作溝を検出した。

662 畦畔 調査区北壁から17m程南側の、国土座標X = -139,620m付近に位置する。南東—北西方向の畦畔で、やや南に湾曲しながら西側に接する8区へとつづく。幅は約0.85～1.15mで、高さは約0.1～0.15mである。以下に報告する土坑やピット等の遺構は、この畦畔の北側にのみ広がっており、南側には分布しない。南側の遺構は耕作溝のみであることから、この畦畔が集落域と生産域とを分ける重要な役割を果たしていたと考えられる。

畦畔の盛土中から13世紀前半の瓦器碗（953）が1点出土している。

ピット 上記のとおり662畦畔の北側で多数のピットを検出した。後述する700・715土坑などの埋土上面で検出できる。重複するものがあるなど密集するが、西壁寄りではやや稀薄となる。**560・631・647ピット**（写真図版21-1・3・4）などのように底に礎板を敷くものや根石を入れるもの、また柱根が残るものなどさまざまである。これらのうちのいくつかは、掘立柱建物の柱穴であったと考えられるが、建物跡としてまとめることができなかった。

多くのピットから土師器、瓦器、青磁、白磁、砥石などが出土している（927～952・954・955）。546ピットから出土した土師器皿（933）はやや新しく14世紀初頭に位置するが、他のピット出土の土師器皿は13世紀代におさまると考えられる。瓦器碗は12世紀代のものが多い。666ピット出土の954は15世紀末～16世紀前半頃の瓦質播鉢で、口縁端部がやや外反する。540ピット出土の930と、597ピット出土の931は白磁碗である。930は直線的に伸びる口縁をもち、端部は外反する。931は白磁Ⅱ類で11世紀後半～12世紀前半に位置する。545ピット出土の948は、13世紀前半に位置する龍泉窯の青磁碗である。**耕作溝** 662畦畔より南側の3層上面で検出した。幅0.1～0.35m程度の浅い細溝である。溝の向きは、南北方向が主であるが、南半部で検出した489畦畔の延長上には、その畦畔に規制された南西—北東方向の溝がみられ、それより東側も同じ南西—北東方向の溝となる。

662畦畔より南側では、北側で検出したような土坑やピットなどの遺構が全くないことから、畦畔より南側は北端の集落に伴う耕作域であったと考えられる。

637 落ち込み 662畦畔の北側に接する。東西3.5m、南北1.1～1.8mの不整形な土坑で、二つの楕円形の土坑が一つになったような形状を呈する。深さは約0.45mで、埋土は細粒砂や偽礫を含むオリーブ黒色シルトである。

638 落ち込み 637落ち込みの北側に位置する。東西4m、南北約1.0～2.3mの不整形な土坑で、深さは0.3mを測る。埋土は炭や偽礫・粗粒～細粒砂が混じるオリーブ黒色シルトである。

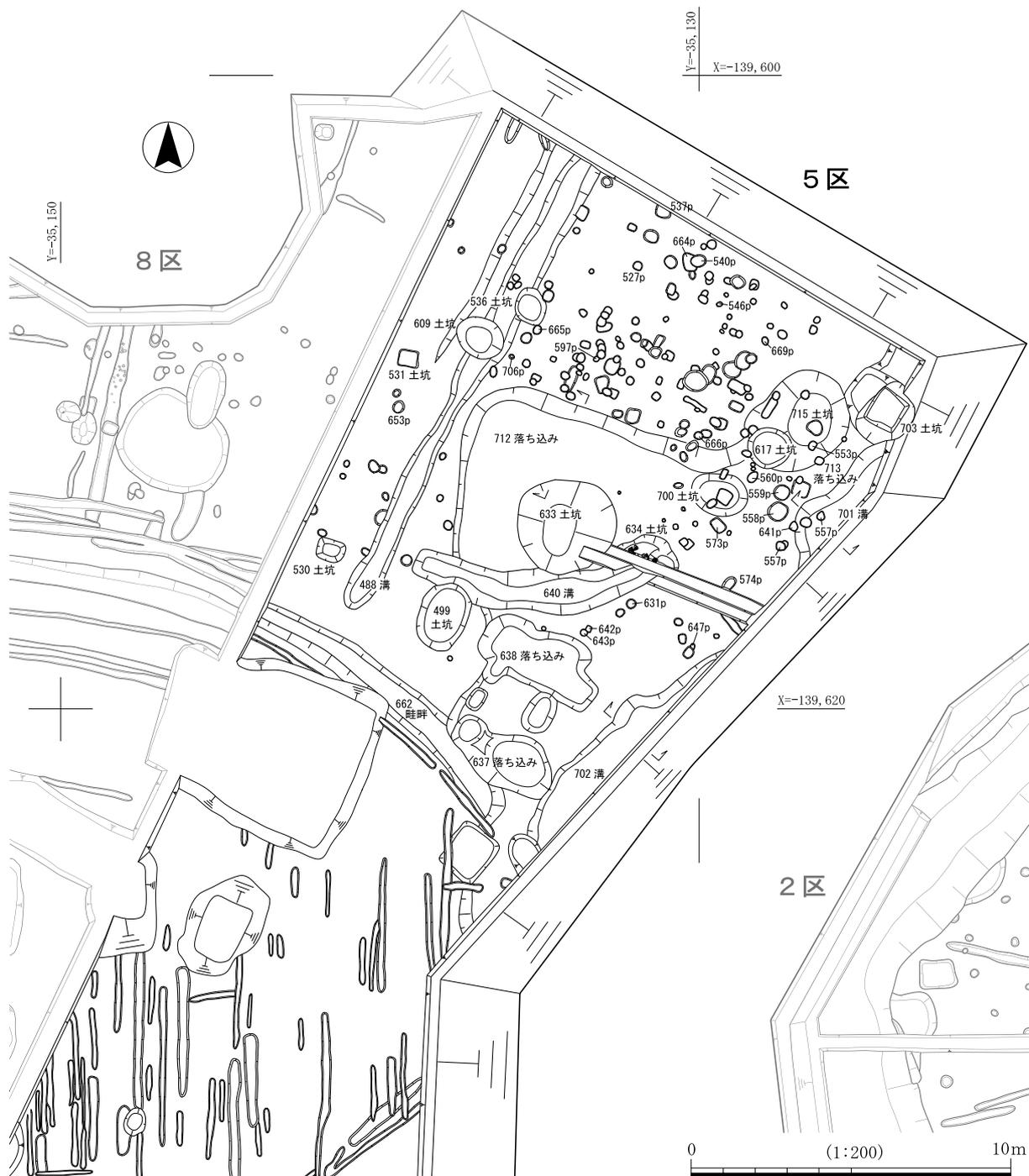
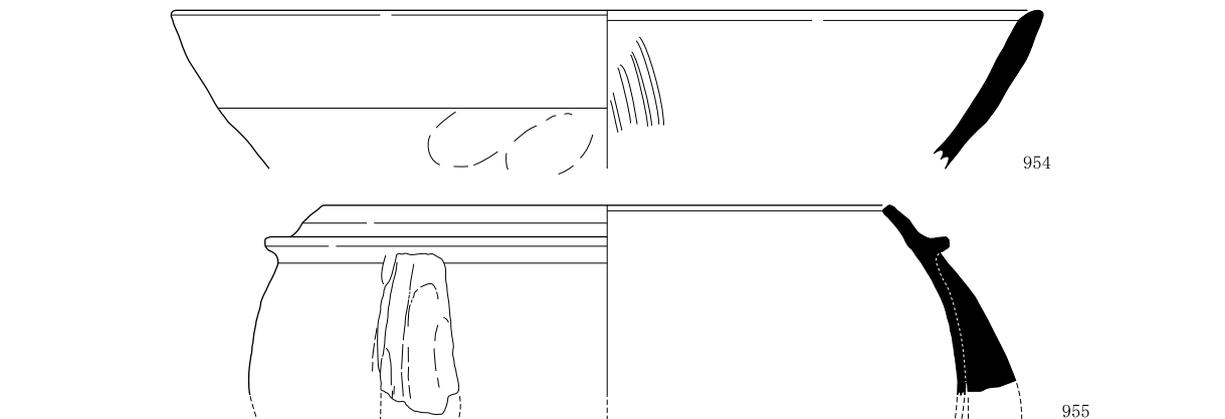
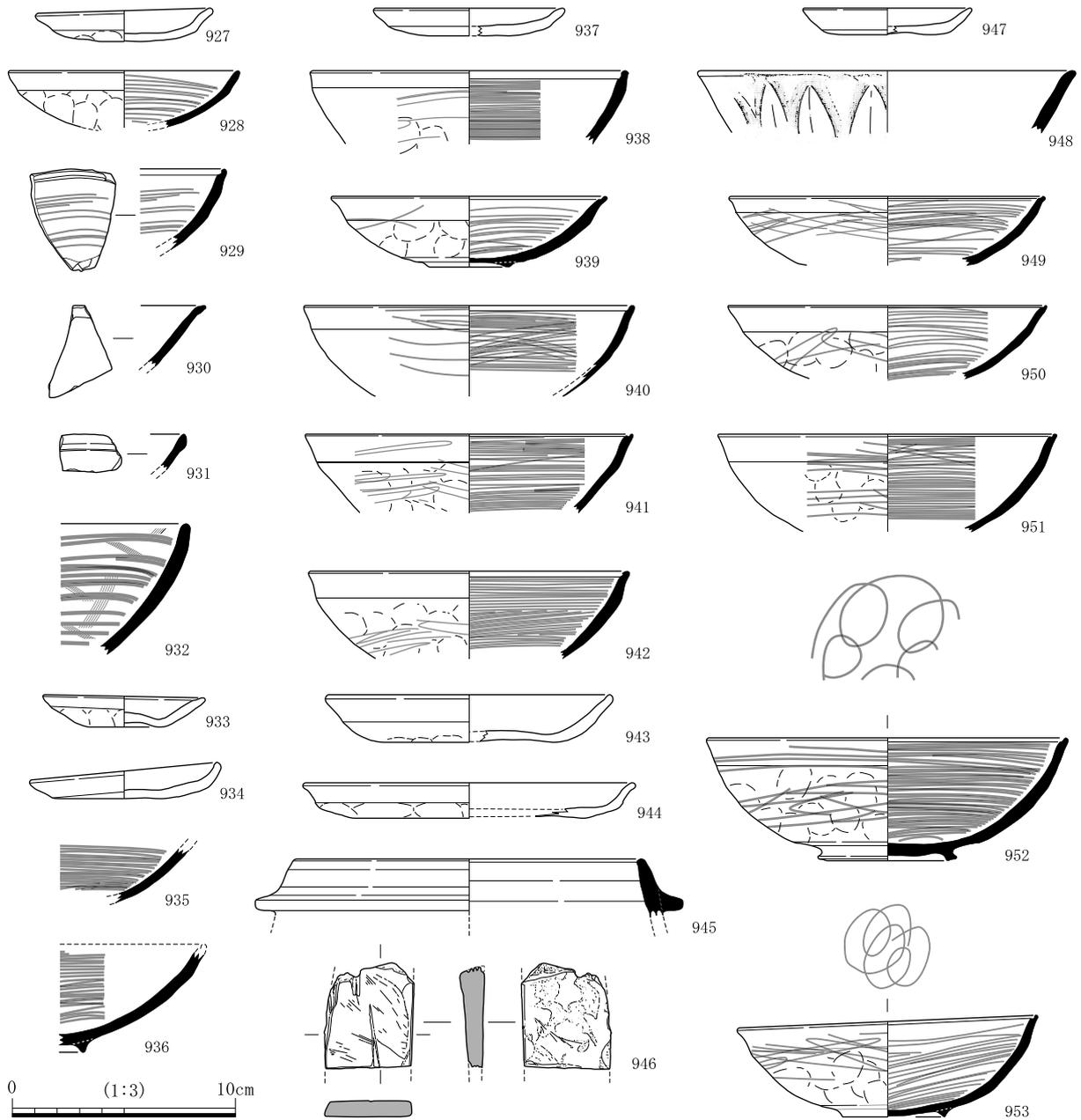


図 114 5区北端部2 a・2 b層及び中央部3 a層上面検出遺構全体平面図

出土遺物には青磁、陶器、銭貨などがある(956～958)。957は青磁碗で、外湾する口縁をもち、内面に浅い沈線を施す。14～15世紀前半に位置する。956は元豊通寶である。

712(713) 落ち込み 北端部の東半に位置する。ほぼ中央から東壁に向けて緩やかに下がる落ち込みで、南は662畦畔の南側にまで広がる。北西部分の輪郭は比較的明瞭であるが、他の部分は不明瞭で形も不整形である。深さは深い箇所では0.3m強を測る。埋土は下層が細粒～極細粒砂や偽礫が多く混じるオリーブ黒色シルトで、上層が粗粒砂を含む灰オリーブ色シルトである。土坑やピットは基本的にこの遺構の埋土を除去した段階で検出しているが、中央の633土坑や一部のピットは埋土の上面から検出できる。なお一連の遺構であるが、遺物取り上げの都合上、北東隅部の715土坑周辺は遺構番号を分け、713落



927・928. 574 ピット、929-930. 540 ピット、931. 597 ピット、932. 527 ピット、933. 546 ピット、934. 653 ピット、935. 642 ピット、936-944. 558 ピット、937-938. 557 ピット、939. 669 ピット、940. 559 ピット、941. 641 ピット、942. 643 ピット、943. 664 ピット、945. 537 ピット、946. 553 ピット、947-948. 545 ピット、949-950. 573 ピット、951-952. 665 ピット、953. 662 畦畔、954. 666 ピット、955. 706 ピット

図 115 ピット・畦畔出土遺物実測図

ち込みとした。

712 落ち込みからは土師器、瓦器、須恵器などが出土した（965～969）。遺物の時期はほぼ13世紀におさまる。965は須恵器の捏鉢で、口縁は断面三角形を呈する。13世紀前半頃のものである。967・968の瓦器椀は内面に簡略化の進んだミガキを施す。13世紀前半に位置する。

713 落ち込みからは土師器、瓦器、白磁などが出土している（959～964）。959は白磁Ⅳ類の碗で、11世紀後半～12世紀前半に位置する。963の瓦器椀はやや密なミガキを施す。12世紀前半頃のものである。964は瓦質の甕で、強く外反する口縁をもつ。14世紀に位置する。

499 土坑 662 畦畔のすぐ北側に位置する。640 溝と一部重複し、640 溝を切る。平面形は長径 2.15 m、短径 1.5 mの南北に長い楕円形を呈する。深さは 0.24 mで、埋土は炭・偽礫混じりの極細粒砂を含む灰色シルトである。

530 土坑 499 土坑西側の調査区西壁際に位置する。平面形は長辺 0.9 m、短辺 0.69 mの隅長丸方形を呈する。深さは 0.85 m程度であるが、底部が細くなっていたため、底まで確認することができなかった。埋土は3層に分層できる。下層は灰色粗粒砂混じりシルト、中層は炭混じりのオリブ黒色細粒砂混じりシルト、上層は炭・偽礫混じりのオリブ黒色中粒～細粒砂混じりシルトである。

土坑からは瓦器椀（1003）が出土した。内面のミガキに簡略化がみられる13世紀前半のものである。

531 土坑 調査区の西壁際に位置する。平面形は長辺約 0.6 m、短辺約 0.5 mの隅丸長方形を呈する。深さは 0.26 mで、埋土は粗粒砂を含む炭・偽礫混じりの灰オリブ色シルトである。

536 土坑 531 土坑の東側に位置する。平面形は東西約 1 m、南北約 1.15 mの歪んだ楕円形で、深さは 0.6 mを測る。埋土は下層に粗粒砂を含むオリブ黒色シルトがあり、その上に炭・偽礫が混じる細粒砂を含むオリブ黒色シルトと、炭・偽礫が混じる灰オリブ極細砂質シルトが堆積する。

609 土坑 536 土坑のすぐ西側に位置する。平面形は長径 1.55 m、短径 1.25 mの楕円形を呈する。深さは 0.5 mで、埋土は下層が偽礫混じりの灰色シルト、上層がオリブ黒色細粒砂質シルトである。

土坑からは瓦器椀（1004）が出土した。13世紀前半頃のもので、内面には簡略化のすすんだミガキを施す。

617 土坑 調査区の北東寄りに位置する。715 土坑の埋土上面で検出できる土坑である。平面形は直径 1.3～1.38 mのほぼ円形を呈する。深さは 0.55 mで、埋土は下層がオリブ黒色シルトや粗粒砂を含む炭混じりオリブ黒色シルトで、上層が粗粒砂を含む炭・偽礫混じりのオリブ黒色シルトである。

土坑からは土師器皿（1000～1002）が出土した。13世紀中頃に位置するもので、口縁は短く立ち上がる。

633 土坑 北端部の中央に位置する。640 溝と一部重複し、640 溝を切る。平面形は直径約 3.1 mのほぼ円形で、深さは 0.9 mを測る。埋土は下層がシルトを含む炭・偽礫混じりの中粒～細粒砂で、上層が炭・偽礫が多く混じるオリブ黒色のシルト混じり粗粒～細粒砂である。

出土遺物には土師器、瓦器、白磁、木製品などがある（970～975・990）。土師器皿（970・971）、瓦器椀（973）は13世紀後半に位置する。972は口径 4.3cmの瓦質のミニチュア羽釜である。内面に煤が付着する。その他 974の白磁四耳壺が出土している。990は用途不明の木製品である。

634 土坑 633 土坑のすぐ東側、640 溝の東先端部に位置する。断面観察用の溝と重なったため、全体の形状は不明であるが、東西幅は 1.62 m以上ある。深さは 0.42 mで、埋土は細粒砂を含む炭・偽礫混じりのオリブ黒色シルトである。断面の観察によって、640 溝を切っていることが確認された。

土坑からは土師器、瓦器、砥石など多くの遺物が出土している（976～989）。土師器皿（976～980）、瓦器椀（981～984）は13世紀中頃に位置するものである。988は瓦質の羽釜で口縁部は内湾し、

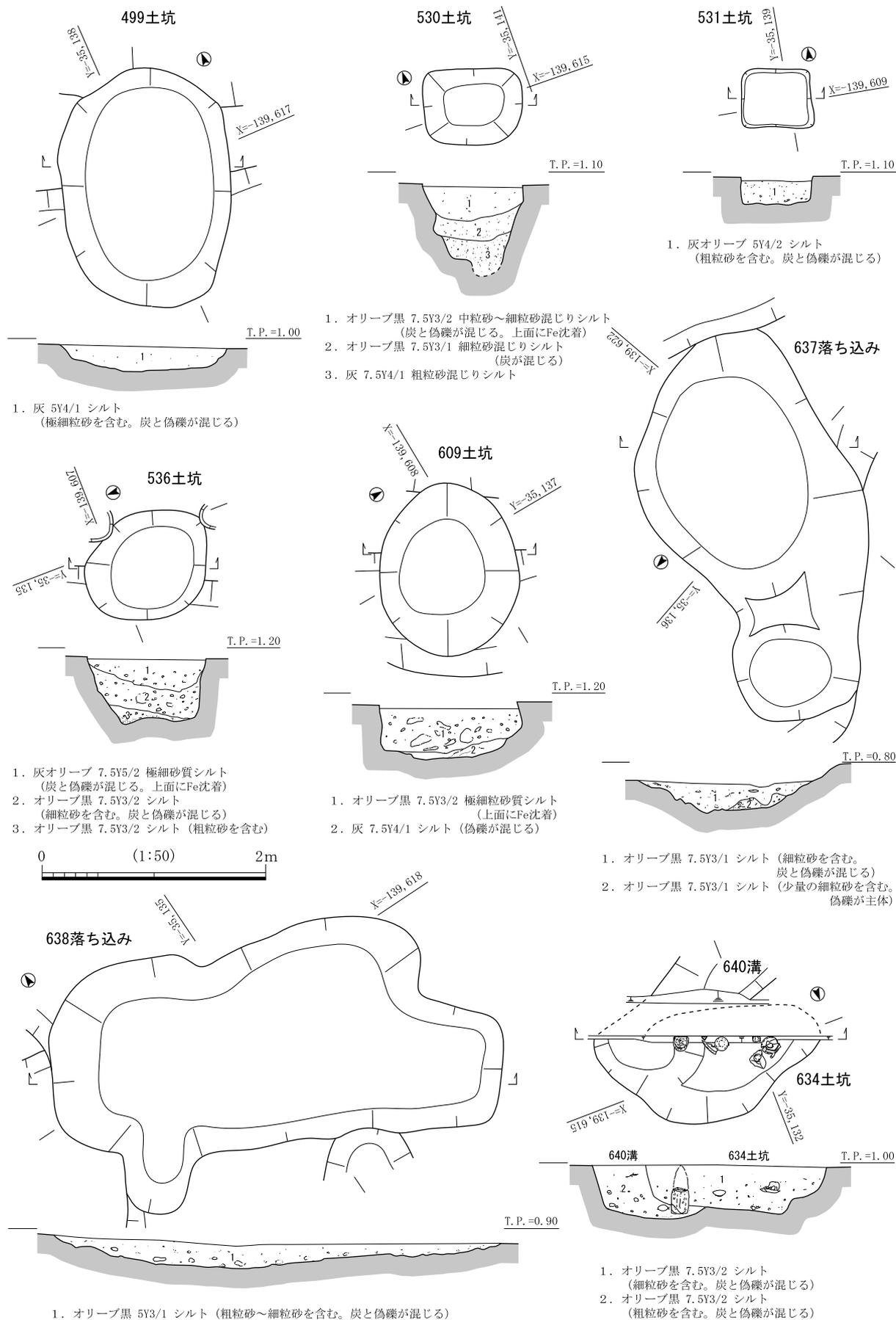


図 116 北端部 2 a・2 b 層上面検出遺構平面・断面図

端部は短く上方に折り曲げる。内面にはハケ調整を施す。

700 土坑 617 土坑の南側に位置する。平面形は長径 1.8 m、短径 1.3 m の東西に長い楕円形を呈する。深さは 0.36 m で、埋土はシルトを含むオリーブ黒色極細粒砂と極細粒砂を含むオリーブ黒色シルトの互層となっている。この遺構の埋土上面でピットを検出している。

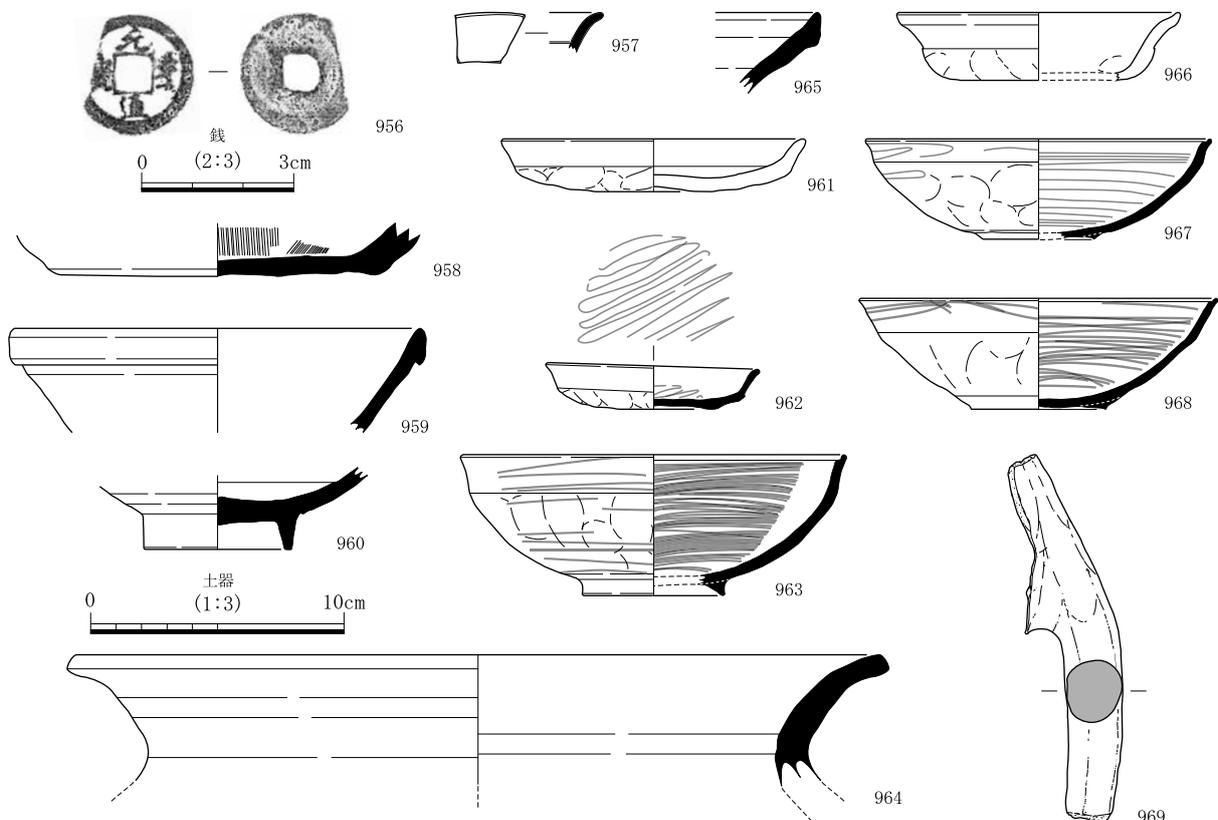
土坑からは土師器皿、瓦器椀が出土した (991 ~ 995)。遺物の時期はほぼ 13 世紀前半におさまる。993 の土師器皿は平底でやや屈曲した口縁をもつ。994 の瓦器椀は内面にやや簡略化したミガキを施す。

703 土坑 調査区北東隅に位置する。平面形は 1.07 × 1.2 m のほぼ方形で、壁面も垂直に近い傾斜で掘り込まれている。ただし上端部は漏斗状に広がっており、平面形も楕円形となっている。なお図面には表現できなかったが、壁面には 7 区の節で報告した 790 土坑のように小さな段々がみられた。1.7 m の深さまで掘削したが、底を確認することができなかった。埋土は下部がオリーブ黒色粗粒砂混じりシルトで、上端部の広がった部分に細砂・偽礫が混じるオリーブ黒色シルトが堆積する。

土坑からは土師器、瓦器、瓦などが出土した (1005 ~ 1008)。12 世紀前半頃の瓦器椀 (1007) も含むが、中心は 13 世紀後半である。

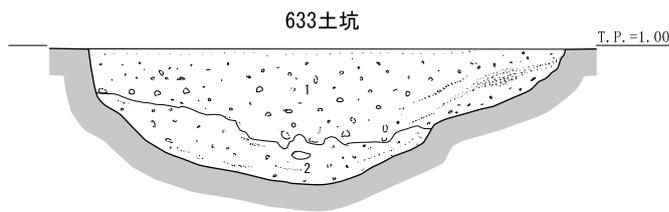
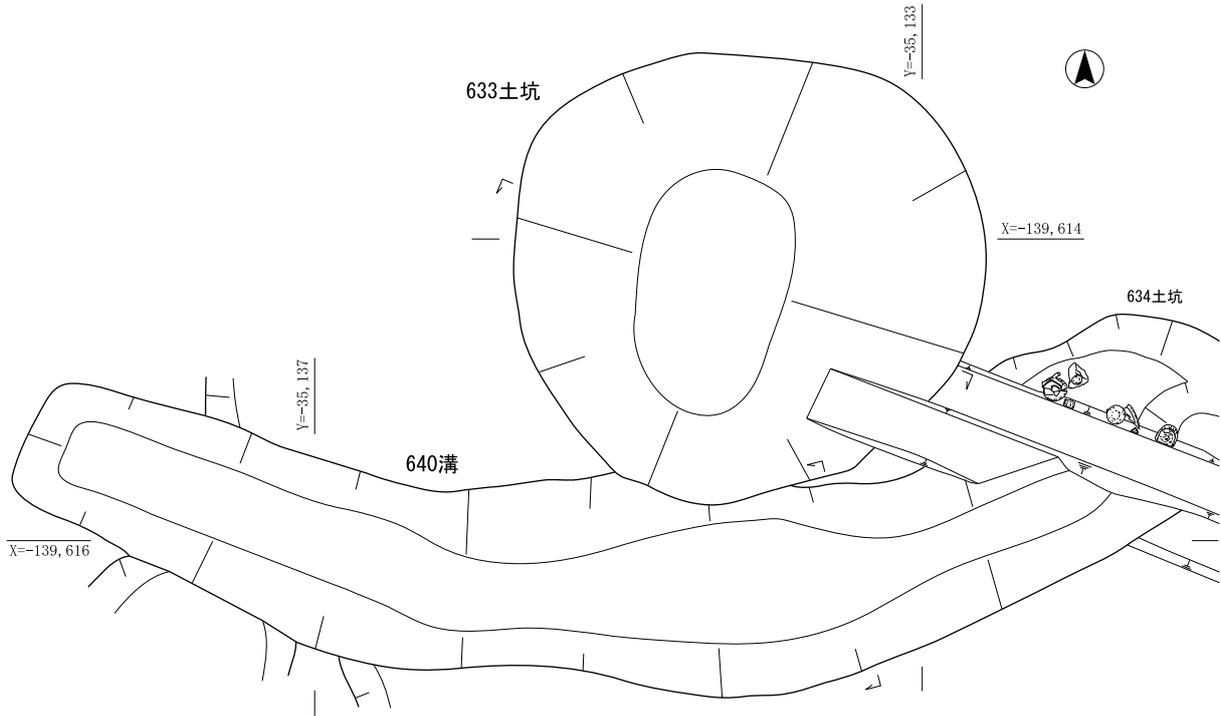
715 土坑 703 土坑のすぐ西側に位置する。平面形は長径 3.7 m、短径 2.7 m の歪んだ楕円形を呈する。深さは 1.3 m で、埋土は、最下層にシルト偽礫混じりの粗粒砂があり、その上に炭と偽礫が混じるオリーブ黒色粗粒砂混じりシルト、細粒砂を含み炭・木質・偽礫が混じるオリーブ黒色シルト、炭・木質・偽礫が混じるオリーブ黒色細粒砂混じりシルトと堆積する。最下層の粗粒砂は機能時の堆積である可能性がある。この遺構の埋土上面からピットが掘り込まれている。

土坑の上層からは 11 世紀末 ~ 12 世紀前半の土師器皿、瓦器椀が出土した (996 ~ 999)。996 の土師

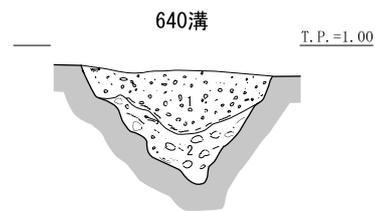


956 ~ 958. 638 落ち込み、959 ~ 964. 713 落ち込み、965 ~ 969. 712 落ち込み

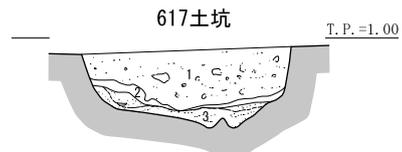
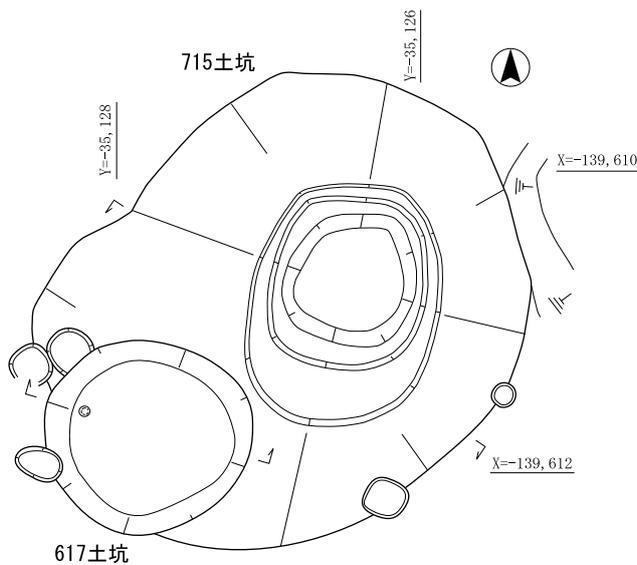
図 117 落ち込み出土遺物実測図



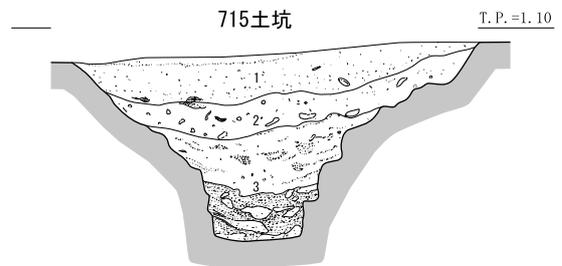
1. オリーブ黒 7.5Y3/2 シルト混じり粗粒砂～細粒砂
(ピピアナイト入り、炭・偽礫が多く混じる。上面にFe・Mg沈着)
2. オリーブ黒 7.5Y3/1 中粒砂～細粒砂 (シルトを含む。炭と偽礫が混じる)



1. オリーブ黒 7.5Y3/1 シルト (ピピアナイト、炭、木質、偽礫が多く混じる。中粒砂～細粒砂含む)
2. 灰 7.5Y4/1 炭、偽礫混じりシルト (少量の中粒砂～細粒砂を含む)



1. オリーブ黒 7.5Y3/2 シルト (粗粒砂を含む。炭と偽礫が混じる)
2. オリーブ黒 7.5Y3/2 シルト
3. オリーブ黒 7.5Y3/2 シルト (粗粒砂を含む。炭が混じる)



1. オリーブ黒 7.5Y3/2 細粒砂混じりシルト (炭、木質、偽礫が混じる)
2. オリーブ黒 7.5Y3/1 シルト (細粒砂を含む。炭、木質、偽礫が混じる)
3. オリーブ黒 7.5Y3/2 粗粒砂混じりシルト (炭と偽礫が混じる)
《下部》シルト偽礫混じり粗粒砂

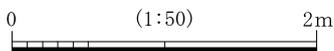


図 118 北端部 2 a・2 b 層上面検出遺構平面・断面図

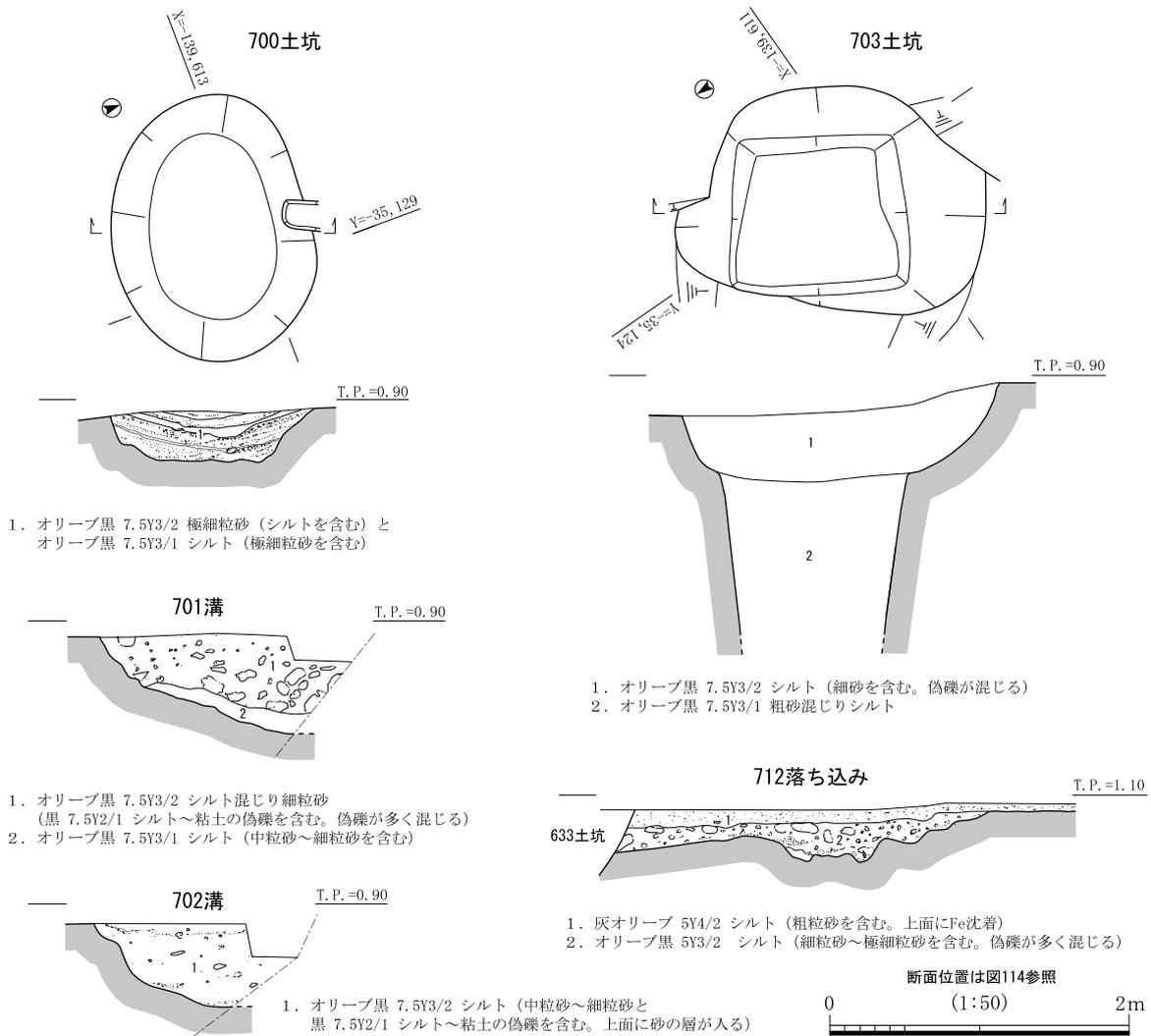


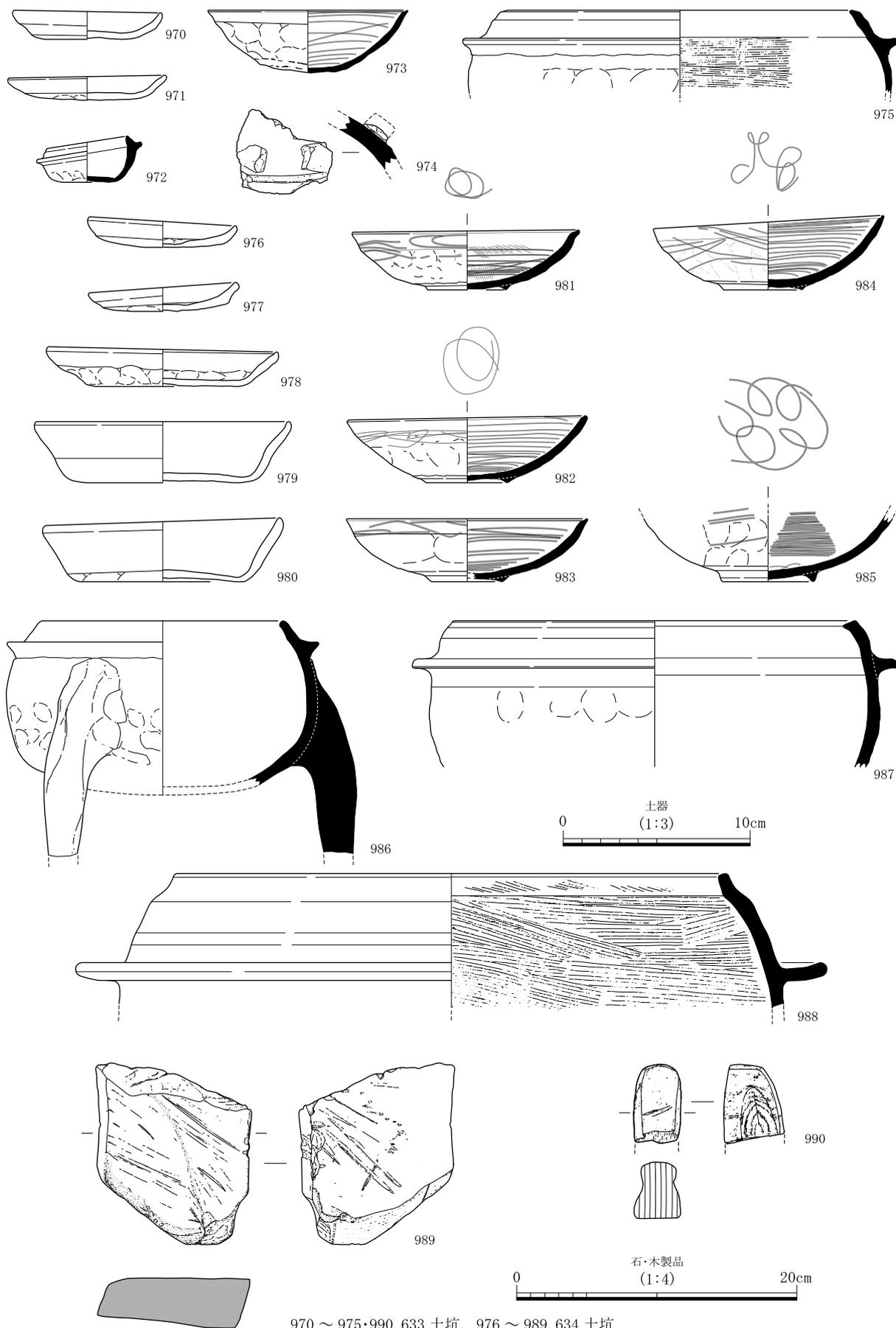
図 119 北端部 2 a・2 b 層上面検出遺構平面・断面図

器皿はやや屈曲する口縁部をもち、端部はやや丸味をもっておわる。

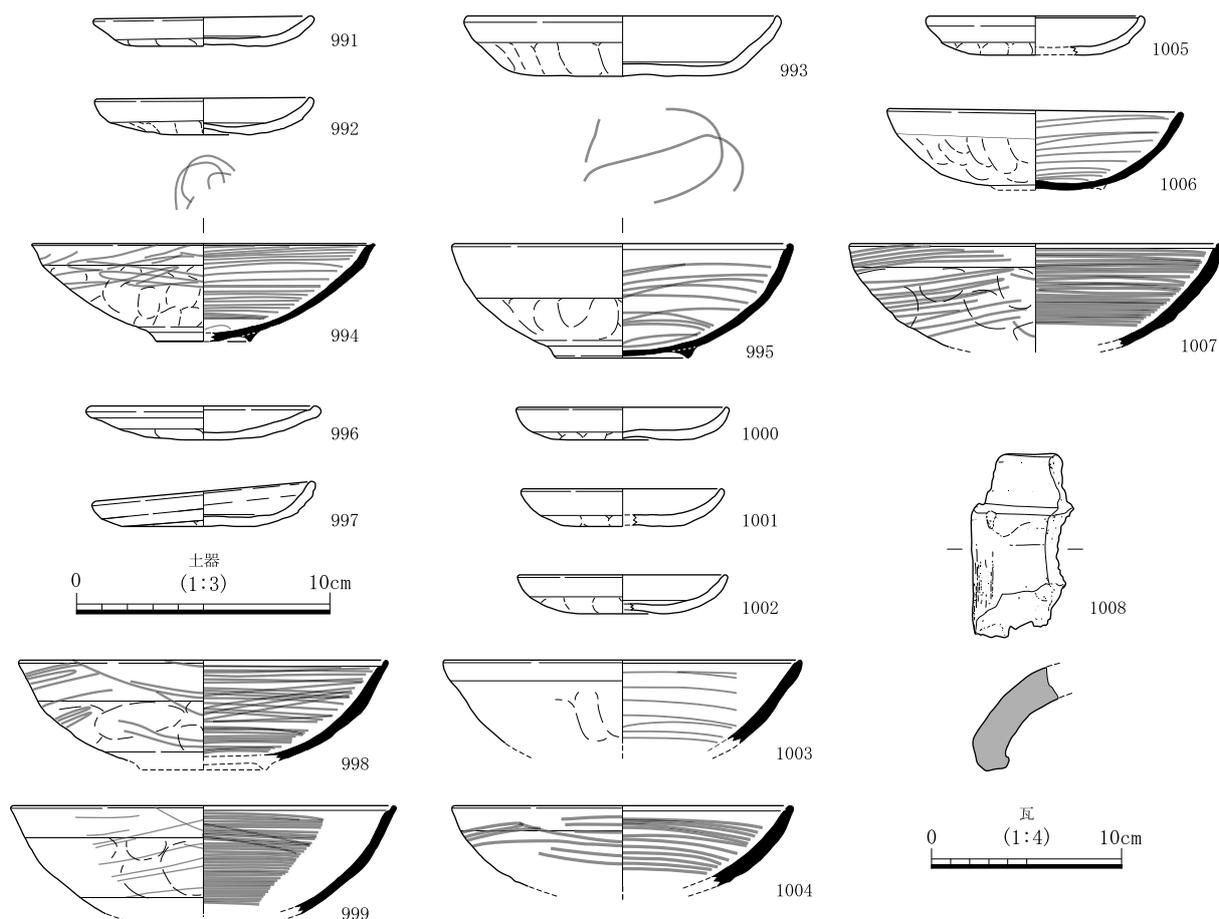
640 溝 638 落ち込みのすぐ北側に位置する。溝というよりは、細長い土坑とすべき遺構である。633・499 土坑と一部重複し、両者に切られる。東西方向に長い遺構で、北側にやや湾曲する。長さは約 8 m で、幅は約 0.9～1.3 m を測る。深さ約 0.8 m で、埋土は大きく上下 2 層に分かれる。下層は炭や偽礫・中粒～細粒砂を含む灰色シルトで、上層は炭や木質・偽礫や中粒～細粒砂を含むオリーブ黒色シルトである。

溝からは土師器、瓦器、須恵器などが出土した (1012～1020・1022)。遺物の時期は 13 世紀中頃を中心とする。1016～1018 の瓦器椀は内面に簡略化のすすんだミガキを施す。13 世紀中葉のものである。1015 は口径 18.5cm の大型の土師器皿である。口縁は短く立ち上がり端部は外反する。1020 は須恵器の捏鉢で、体部下半は内湾し上半は直線的に立ち上がる。口縁断面は三角形を呈する。13 世紀前半頃のものである。

701・702 溝 調査区東壁際に位置する。一連の溝であったと考えられるが、壁際に一旦途切れることから、北側を 701 溝、南側を 702 溝と遺構番号を分けた。両者共に西肩部のみの検出であるため全体の規模は不明である。深さは調査区壁際に約 0.55～0.65 m を測るが、調査区外の溝の中心ではさらに深くなると推定できる。埋土はシルト～粘土の偽礫を含むオリーブ黒色のシルト、あるいはシルト混じり



970 ~ 975・990. 633 土坑、976 ~ 989. 634 土坑
 图 120 633・634 土坑出土遺物実測図



991～995.700 土坑、996～999.715 土坑、1000～1002.617 土坑、1003.530 土坑、1004.609 土坑、1005～1008.703 土坑

図 121 土坑出土遺物実測図

細粒砂で、下層に中粒～細粒砂を含むオリブ黒色シルトが堆積する。

701 溝からは土師器皿、瓦器碗が出土した (1010・1011)。1010 は 13 世紀前半の土師器皿で、短く立ち上がる口縁をもつ。1011 の瓦器碗は内面にやや密なミガキを施す 12 世紀後半～13 世紀初頭に位置するものである。

702 溝からは瓦器碗 (1009) が出土した。内面のミガキに簡略化がみられる 13 世紀前半のものである。

2. 北端部 3 層上面検出遺構 (図 123)

2 区の 4 層上面に対応すると考えられる遺構面である。2 区同様に溝を 4 条検出した。

714 溝 調査区北端部に位置する。座標西から北に約 35 度振れる東西溝である。幅は約 0.4～0.55 m で、深さは 0.1 m 足らずである。埋土は極細粒砂や偽礫が混じる灰オリブ色シルトである。

716 溝 調査区東壁際に位置する。南東—北西方向の溝で、幅は約 0.7～0.8 m、深さは 0.17 m を測る。埋土は細粒～極細粒砂や木質が混じるオリブ黒色シルトである。

717 溝 716 溝の西側に位置する。座標西から北に約 18 度振れる東西溝である。幅は約 1.3～1.5 m で、深さは 0.13 m を測る。埋土は細粒砂や偽礫が混じる灰色シルトである。

溝からは白磁 (1021) が出土した。IV 類の碗で、11 世紀後半～12 世紀前半に位置する。

718 溝 717 溝の南側に位置する。717 溝とは約 3.5 m 隔てて並行する。幅は約 0.45 m で、深さは 0.1 m 足らずである。埋土は細粒砂や偽礫が混じるオリブ黒色シルトである。

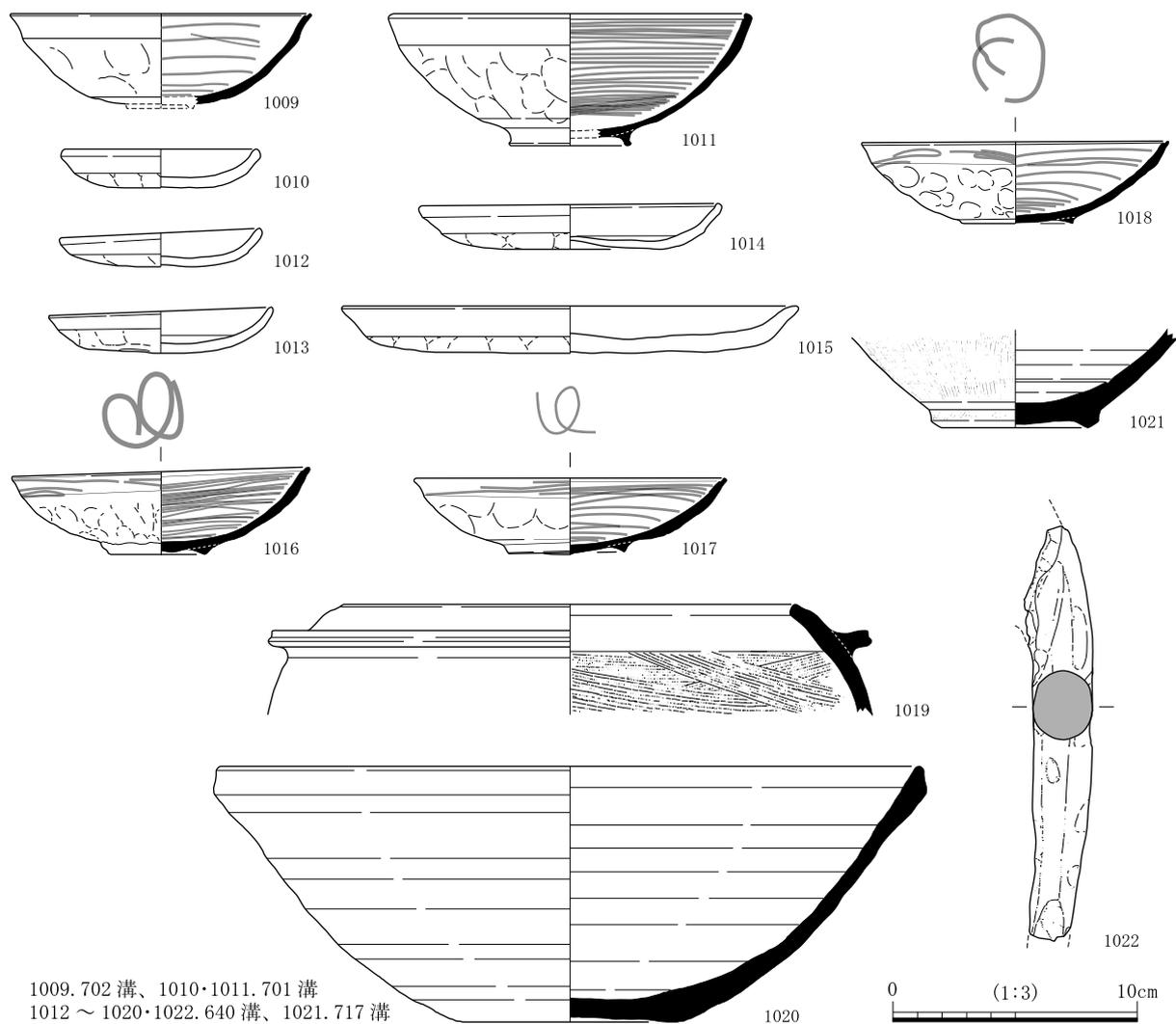


図 122 溝出土遺物実測図

以上の4条の溝は、いずれも畝溝のような耕作に伴う遺構と考えられる。

3. 南半部3 a層上面検出遺構 (図124・125・127)

畦畔や溝、井戸、土坑などを検出した。

468 溝 南半部中央に位置する。南側に緩やかに湾曲する東西溝である。東端部は二股に分かれ、一方は北東方向へと折れ曲がる。幅は約0.7～1.2 mであるが、二股に分かれた南側は0.3 m程度と細くなる。深さは0.15 m前後で、埋土はシルトを含む灰オリーブ色中粒～粗粒砂である。

溝からは瓦器椀(1057・1058)が出土した。1058は内面に隙間なく密なミガキを施し、見込みにはやや太いジグザグ状の暗文を施す。11世紀後半～12世紀初頭におさまる。

658 畦畔 南半部南東隅に位置する。468溝の南側に沿う東西方向の畦畔である。幅は0.7 mからもっとも広い箇所2.0 mあり、高さは0.1 m強を測る。畦畔の西側は644畦畔に接するあたりで一旦途切れるが、本来は463畦畔まで達していたと考えられる。この畦畔および468溝の南側は、北側よりも一段高くなっており、その高低差は約0.1～0.15 mを測る。

463・489 畦畔 南半部中央に位置する。上記468溝と交わる南西—北東方向の畦畔である。468溝の北と南で規模が異なることから、468溝の北側を489畦畔、南側を463畦畔と名称を分けた。489畦畔の

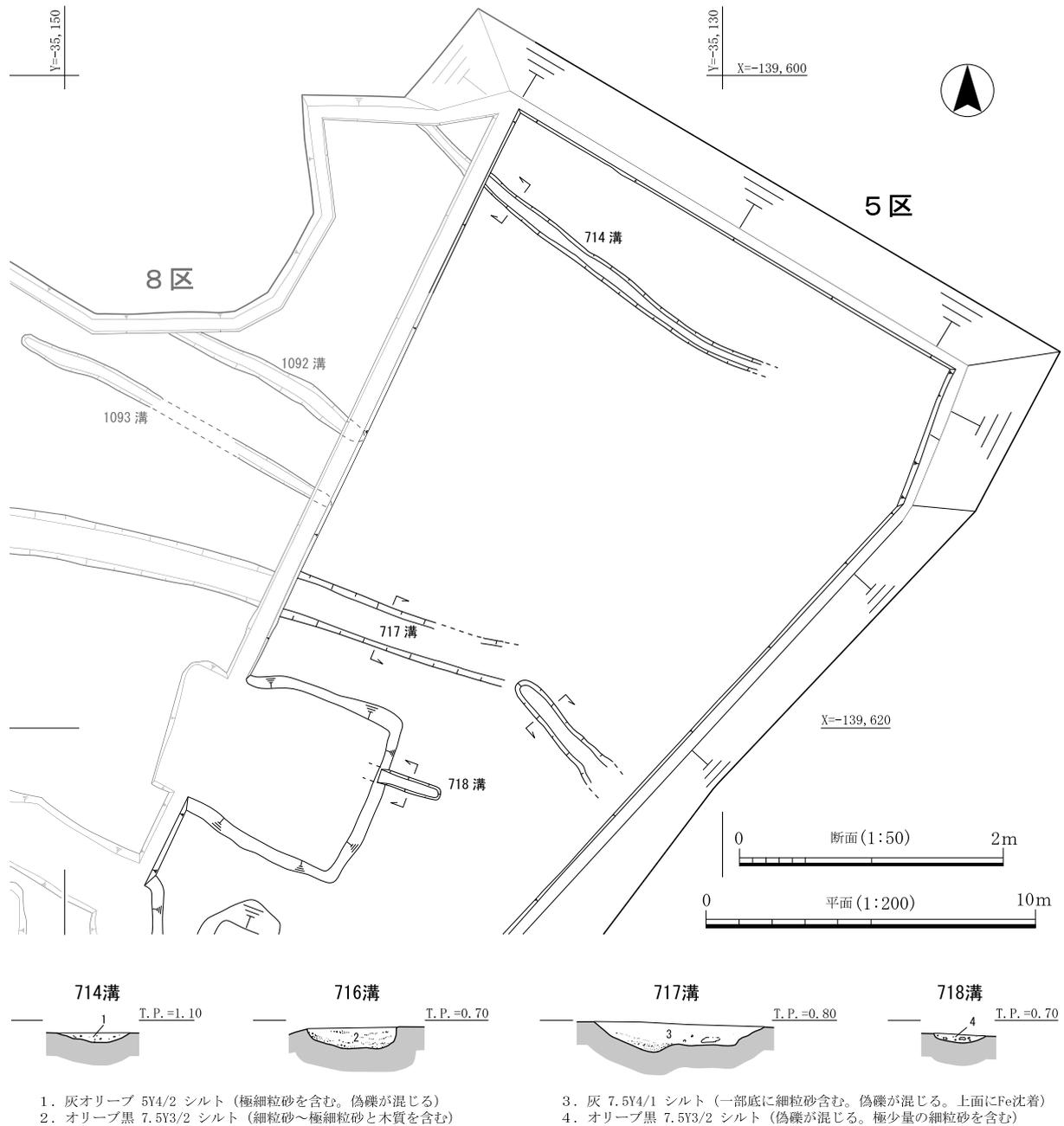


図 123 5区北端部3層上面検出溝平面・断面図

幅は北側で1.0～1.4 mを測るが、南側は途中極端に細くなり0.4～0.8 m程度となる。高さは約0.05～0.15 mである。座標北から東に約37度振れる。東裾には659溝を伴う。溝の幅は約0.4 mで、深さは約0.05 mである。463畦畔は幅1.9～2.2 mを測る。高さは約0.15～0.2 mで、座標北から東に約24度振れる。

644 畦畔 468溝の南側で、463畦畔の東側に位置する。座標北から西に約35度振れる畦畔で、北端が458畦畔と接する。幅は約0.5～0.6 mで、高さは0.05 m強を測る。調査区南壁際では盛り上がりがなく、輪郭が不明瞭となる。

470 溝 南半部南西隅に位置する。東南東—西北西方向の溝で、幅は約0.75 mを測る。深さは0.07 mで、埋土は後述する476土坑と同じシルト偽礫が混じる灰色の中粒～粗粒砂である。周囲からはこの溝に直交する方向の同規模の溝を数条検出している。それらは上記463畦畔に並行することから、当溝も含め耕作溝であったと考えられる。

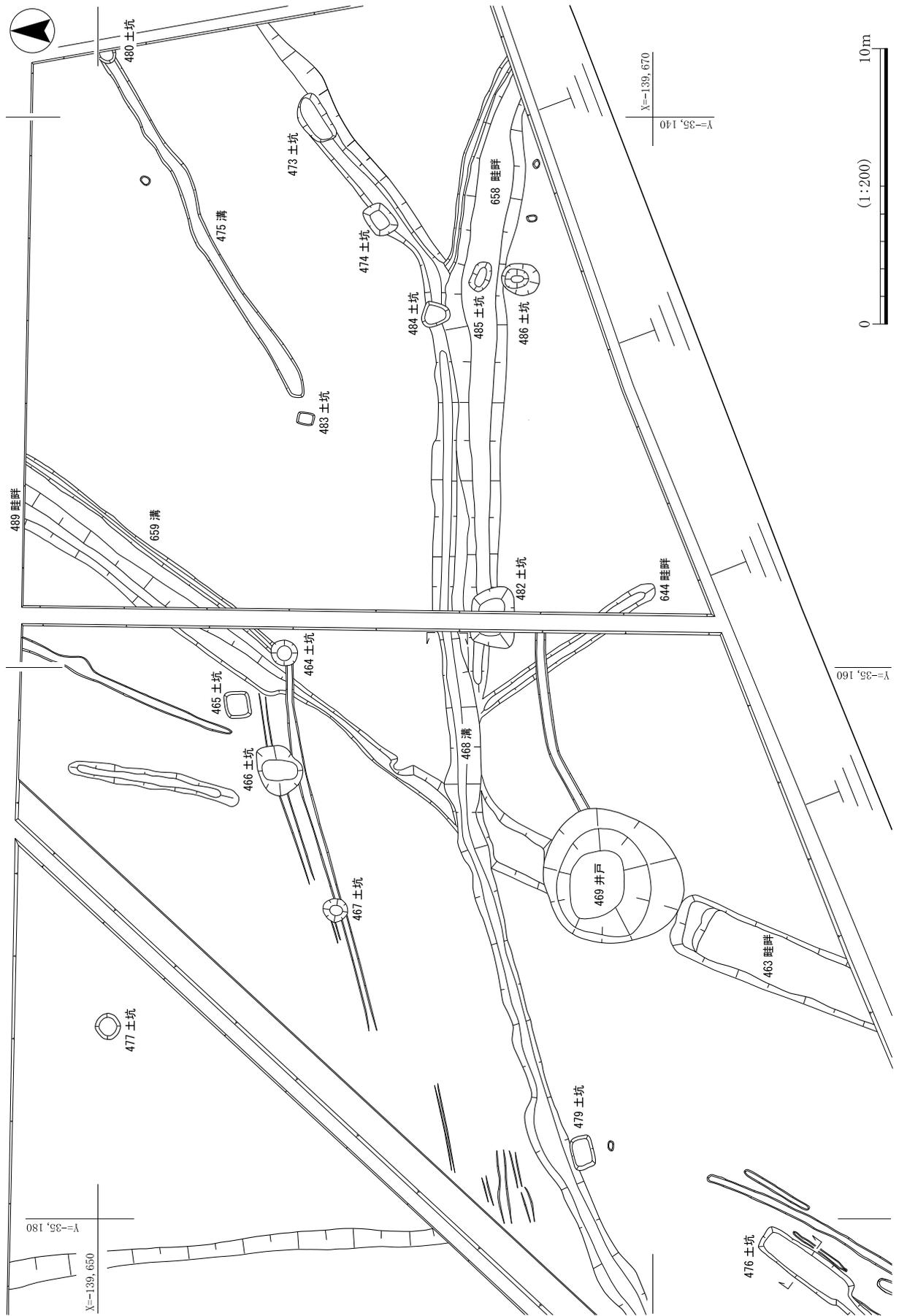


图 124 5区南半部3a層上面検出遺構全体平面図

出土遺物には土師器、瓦器碗などがある(1052～1056)。1052～1054は大型の土師器皿である。口縁は緩やかに立ち上がり、端部は外反する。11世紀末頃に位置する。1055・1056の瓦器碗は内面に密なミガキを施す。11世紀後半～12世紀初頭に位置するものである。

475 溝 南半部北東隅に位置する。西南西—東北東方向の溝で、468 溝の東端部北側にほぼ並行する。幅は約0.45～0.7 mで、深さは約0.05 mを測る。埋土はシルトを含む中粒～粗粒砂である。

469 井戸 南半部の中央やや南寄りに位置する。463 畦畔上から掘りこまれた井戸である。平面形は東西4.9 m、南北5.1 mのやや歪んだ円形を呈する。二段掘りによって構築されており、底面はほぼ水平である。深さは1.4 mを測る。埋土は下層がシルトと偽礫が混じる粗粒～中粒砂で、中層が炭、シルトや粗粒～中粒砂の偽礫が混じるオリーブ黒色のシルト、上層が中粒～細粒砂である。下層は一部にラミナが観察できることから、機能時の自然堆積と考えられる。

井戸からは土師器、瓦器、須恵器、金属製品などが多数出土した(1023～1038)。遺物の時期は11世紀末～12世紀初頭におさまる。1023～1029は小型の土師器皿で、口縁端部が外反するものである。1030～1032の大型の土師器皿は緩やかに立ち上がる口縁をもち、外面には2段のナデを施す。1028は底部と体部の境に焼成後内外面から2箇所穿孔を施す。1033は瓦器皿である。口縁内面に密なミガキを施し、見込みには丁寧なジグザグ状の暗文を施す。1034～1037の瓦器碗は11世紀後半頃のものである。いずれも内面に隙間なく密なミガキを施し、明瞭なジグザグ状または連結輪状の暗文が残る。特筆すべきものに1038の刀子がある。身部長は15.6 cmで、棟区をもち茎部には目釘穴が残る。なお土器以外に、馬の上顎の歯が4本出土している。長さはどれも6～6.5 cm程度であることから、若い馬の歯であったと推定できる。

464 土坑 南半部中央やや北寄りに位置する。平面形は直径約0.95 mの整った円形で、深さは0.08 mを測る。埋土はシルト偽礫を含む中粒～粗粒砂である。

465 土坑 464 土坑の北側に位置する。平面形は東西0.93 m、南北0.87 mの整った隅丸方形を呈する。深さは0.7 mで、底面はほぼ水平である。埋土は大型の偽礫を含む黒～オリーブ黒色の粘質シルトである。

466 土坑 465 土坑の西側に位置する。東西約1.85 m、南北約1.55 mの不整形な土坑で、深さは0.2 mを測る。埋土は上下2層に分かれる。下層は木質層の偽礫を含むオリーブ黒色粘質シルトで、上層はシルト偽礫を含む中粒～粗粒砂である。

土坑からは瓦器碗(1051)が出土している。内面に密なミガキがみられることから、11世紀末～12世紀初頭に位置すると考えられる。

467 土坑 466 土坑の西側に位置する。平面形は直径約0.85 mの円形で、深さは0.25 mを測る。埋土はシルトの偽礫を含む中粒～粗粒砂である。

土坑からは管状土錘(1046)が1点出土している。上下両端がやや細い長楕円形を呈する。

471 土坑 調査区南西隅、470 溝の北側に位置する。平面形は直径1.03×1.1 mのやや歪んだ円形で、深さは0.14 mを測る。埋土は下層がオリーブ黒色粘質シルト、上層が細粒～中粒砂で、中央やや北寄りに完形の土師器鉢が正位で置かれていた。

出土遺物は土師器、瓦器など(1039～1044)で、遺物の時期は11世紀末～12世紀初頭におさまる。1039～1041の大型の土師器皿は、緩やかに立ち上がる体部をもち、端部は丸くおさめる。12世紀初頭に位置する。1042は和泉型の瓦器碗で、内面は右上がりや左上がりのやや太いミガキを施す。11世紀末～12世紀初頭に位置する。1043は11世紀末の瓦器碗である。内面は隙間なく密なミガキを施し、

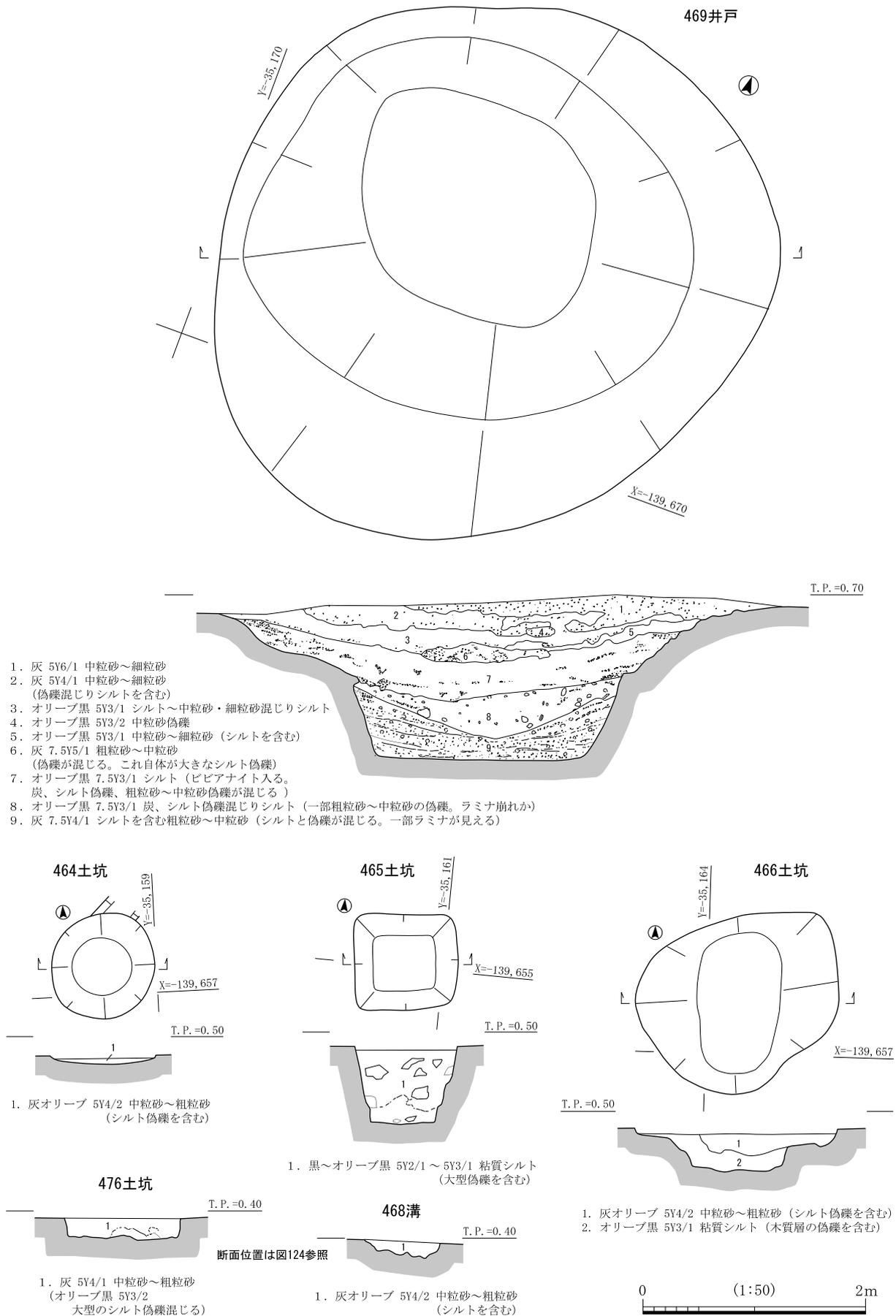
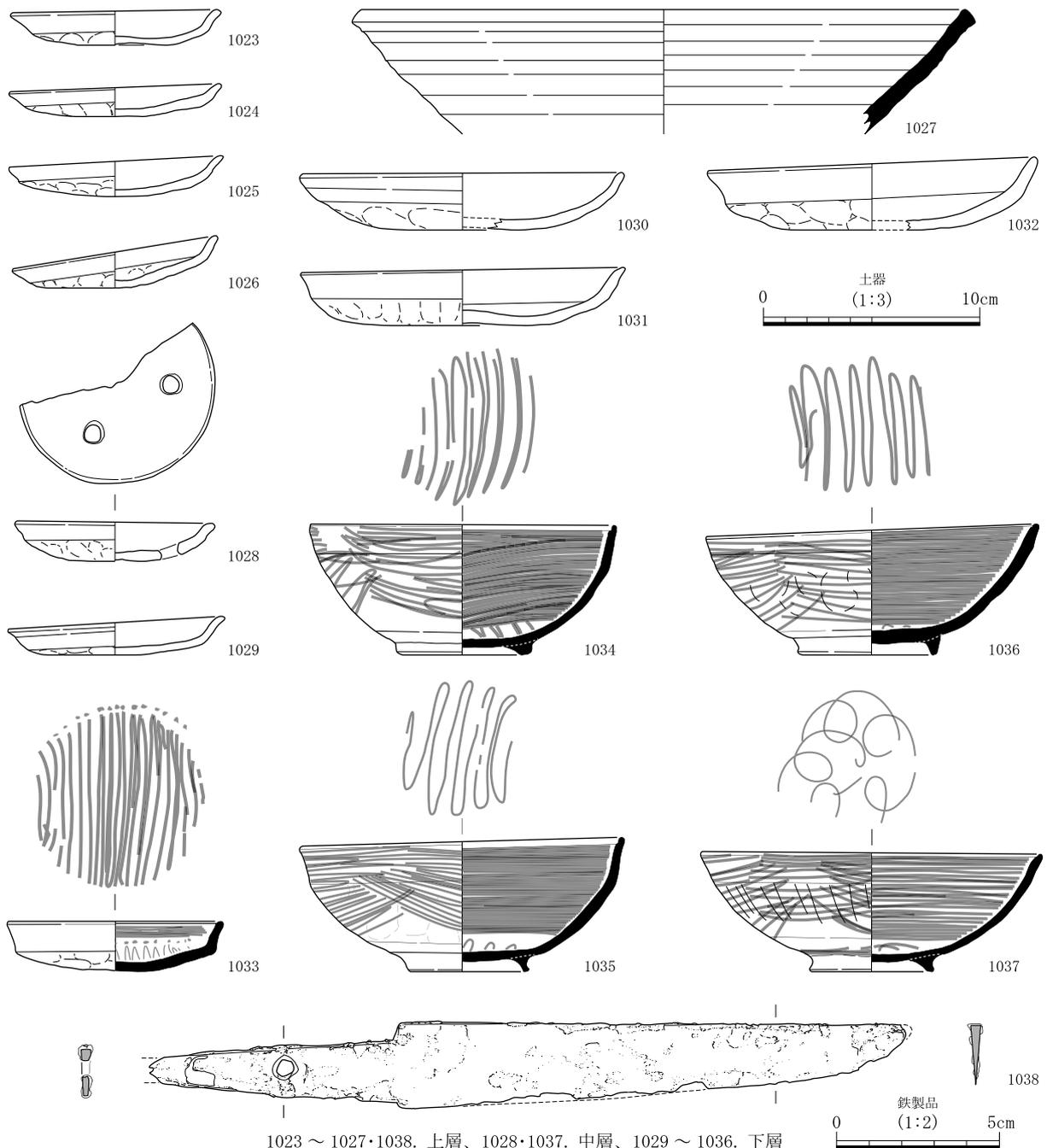


図 125 南半部3 a層上面検出遺構平面・断面図



1023～1027・1038. 上層、1028・1037. 中層、1029～1036. 下層

図 126 469 井戸出土遺物実測図

底部外面に「×」の線刻を施す。1044 は土師器鉢で片口をもつ。内湾し立ち上がる体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。外面には粘土の接合痕と指頭圧痕が残る。全面に煤の付着が顕著にみられる。

479 土坑 469 井戸の西側に位置し、468 溝と一部重複する。平面形は東西約 1.15 m、南北 0.7 m の隅丸長方形で、深さは 0.12 m を測る。埋土は砂質シルト偽礫を多く含む中粒～粗粒砂である。

土坑からは瓦器椀 (1048) が出土した。11 世紀末頃のもので、内面には隙間なくミガキを施す。

473 土坑 南半部東端、468 溝の先端に位置する。468 溝上に掘られた土坑である。平面形は長径 1.85 m、短径 1.0 m の楕円形で、深さは 0.25 m を測る。埋土は中粒～粗粒砂を多く含む灰オリーブ色の粘質シルト偽礫である。

土坑からは須恵器 (1045) が出土した。12 世紀末～13 世紀初頭に位置する捏鉢で、口縁部には上下

の拡張がなく直線的に伸びる体部をもつ。

474 土坑 473 土坑の南西側に位置する。468 溝上に掘られた土坑である。平面形は長辺 1.2 m、短辺 0.93 m の隅丸長方形で、深さは 58cm を測る。埋土はオリーブ黒～黒色粘質シルトや木質層の小型偽礫である。

土坑からは瓦器椀（1047）が出土した。11 世紀末～12 世紀初頭に位置するもので、内面には密なミガキとジグザグ状の暗文を施す。

476 土坑 調査区南西隅、471 土坑の北側に位置する。周囲の溝と同方向で、南側でそのうちの 1 条と重複する。470 溝などと同じく耕作に伴う遺構と考えられる。平面形は長さ 3.8 m、幅 1.1 m の長方形で、深さは 0.2 m を測る。埋土はシルトの大型偽礫が混じる灰色中粒～粗粒砂である。

477 土坑 南半部北西寄りに位置する。平面形は直径 0.87～0.89 m の整った円形で、深さは 0.5 m を測る。埋土は中粒～粗粒砂を多く含むオリーブ黒色砂質シルトである。

482 土坑 南半部の中央やや南寄りに位置する。458 畦畔上に掘られた土坑である。平面形は東西約 1.5～2.2 m、南北 1.5 m の隅丸の台形を呈する。深さは 0.2 m で、埋土は細粒～粗粒砂を多く含む灰オリーブ色砂質シルトである。

480 土坑 南半部東壁際に位置する。475 溝上に掘られた土坑である。東半分が調査区側溝に切られるため全形は不明だが、おおよそ楕円形に復原できる。南北の直径は 0.67 m で、深さは 0.37 m を測る。埋土は偽礫を多く含む中粒～極細粒砂である。

土坑からは瓦器椀（1049）が出土した。内面に密なミガキを施す 11 世紀末～12 世紀初頭に位置するものである。

483 土坑 475 溝の西先端に位置する。平面形は長辺 0.78 m、短辺 0.5 m の南北に長い隅丸長方形を呈する。深さは 0.58 m で、埋土はシルトの偽礫を含む中粒～細粒砂である。

484 土坑 474 土坑の南西側に位置する。468 溝上に掘られた土坑である。平面形は一辺 1.0～1.05 m の隅丸の三角形を呈する。深さは 0.2 m で、埋土は下層が中粒～粗粒砂を多く含む灰オリーブ色粘質シルトの偽礫で、上層がシルト混じりの中粒～粗粒砂である。

485 土坑 484 土坑の南側に位置する。458 畦畔上に掘られた土坑である。平面形は長径 1.1 m、短径 0.68 m の東西に長い楕円形で、深さは 0.3 m を測る。埋土は下層が中粒～粗粒砂が多く混じる灰色粘質シルト、上層が灰オリーブ色のシルト偽礫を含む中粒～粗粒砂である。

486 土坑 485 土坑の南側に位置する。平面形は長径 1.38 m、短径 1.15 m の楕円形で、深さは 0.5 m を測る。壁面の傾斜は下部に比べ上部は緩やかである。埋土は下層にラミナが観察できる細粒～粗粒砂があり、その上がシルト偽礫を含む中粒～粗粒砂となる。

土坑からは 13 世紀前半の瓦器椀（1050）が出土した。内面に簡略化の進んだミガキを施す。

4. 中央部 2 層および南半部 2 a 層上面検出遺構（図 129）

層名は異なるが同じ遺構面である。耕作溝を多数検出した。

耕作溝 ほぼ全面で検出した。幅 0.1～0.35 m 程度の浅い細溝である。南半部西側では基本的に東西・南北方向であるが、前項で報告した 489 畦畔の東側は南西—北東方向となる。これは明らかに 489 畦畔に規制されたものであり、下層で検出した 489 畦畔がこの面の時期まで機能していたことを示している。

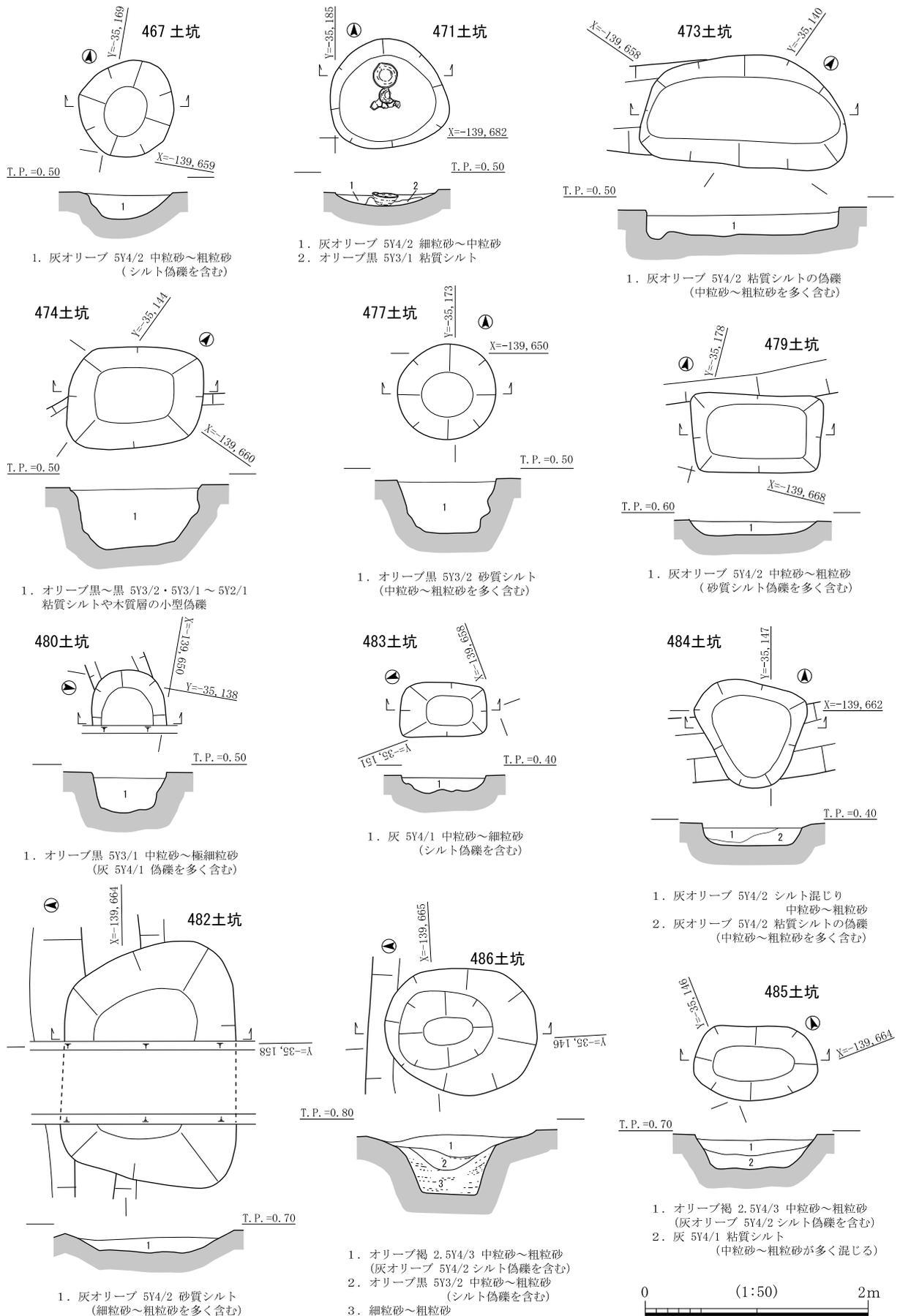
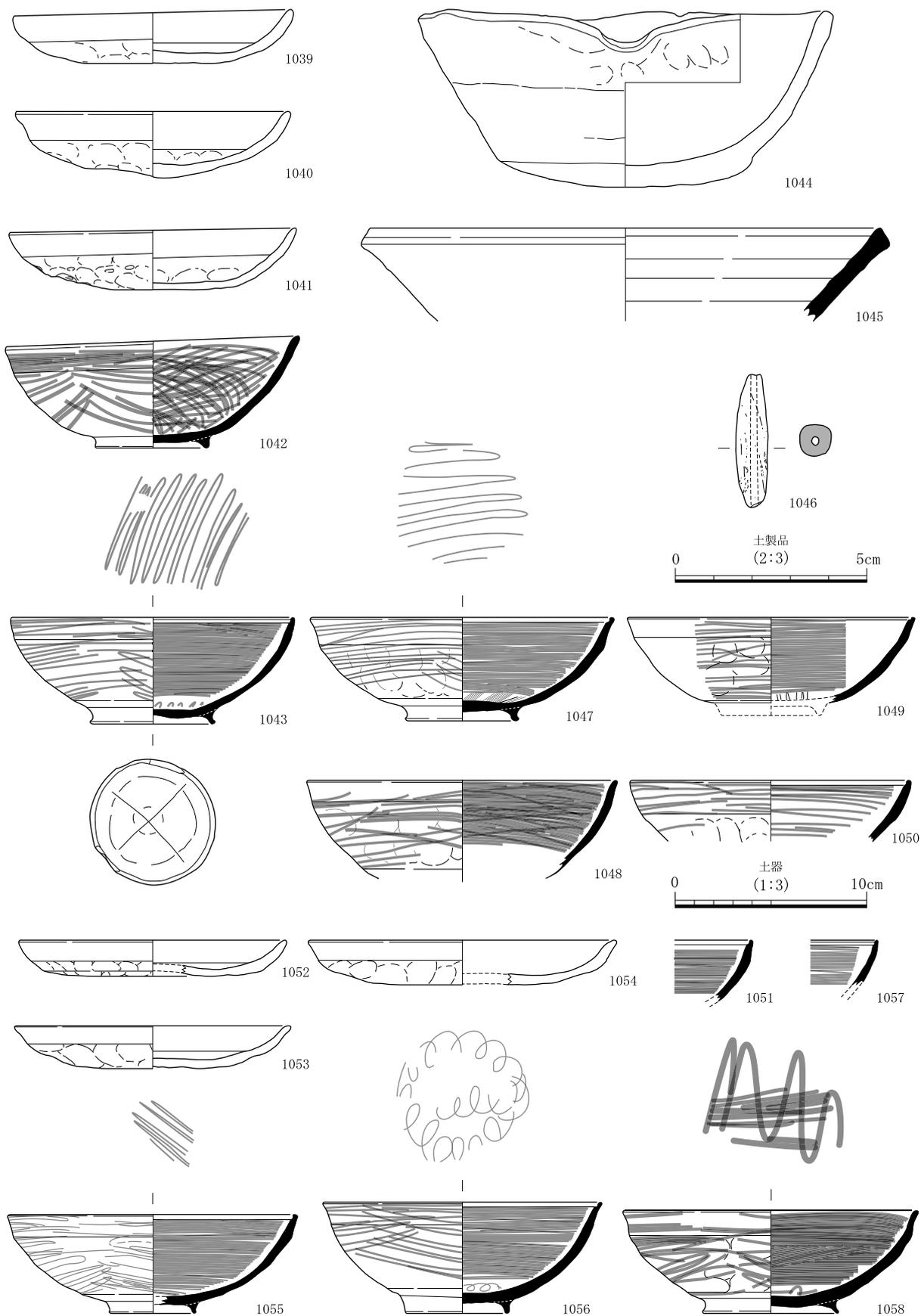


図 127 南半部 3 a 層上面検出土坑平面・断面図



1039 ~ 1044. 471 土坑、1045. 473 土坑、1046. 467 土坑、1047. 474 土坑、1048. 479 土坑
 1049. 480 土坑、1050. 486 土坑、1051. 466 土坑、1052 ~ 1056. 470 溝、1057・1058. 468 溝

图 128 南半部検出土坑・溝出土遺物実測図

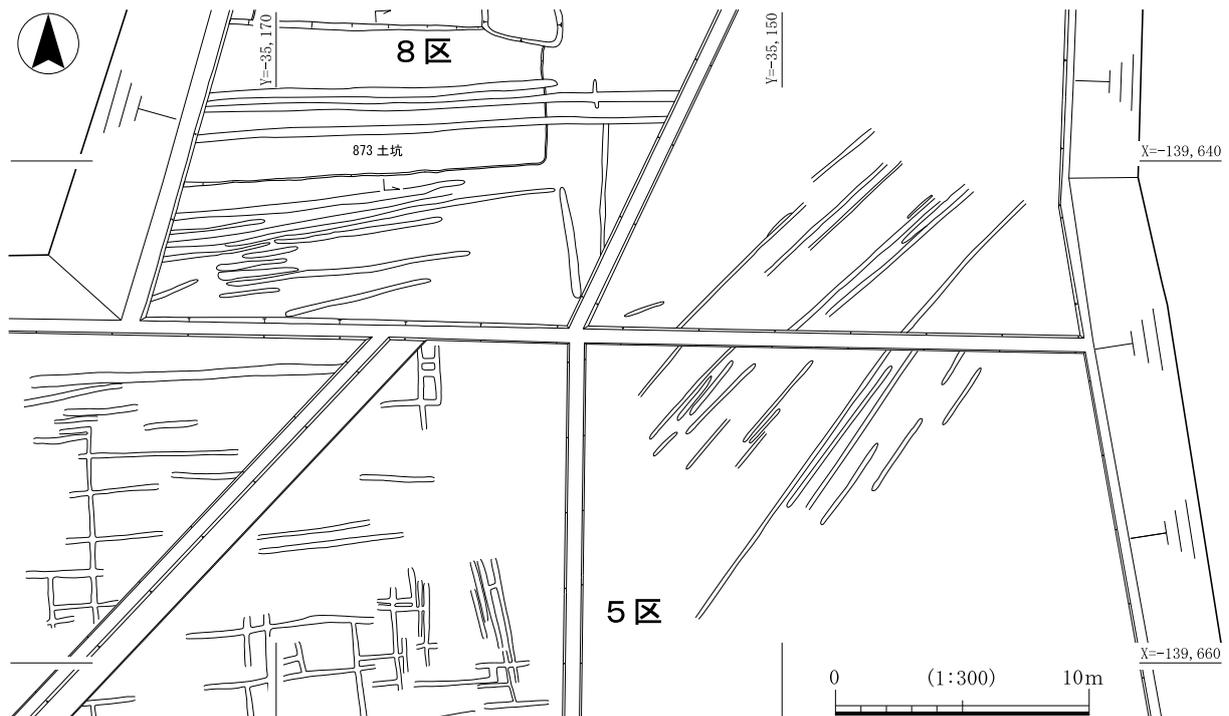


図 129 5区中央部2層・南半部2 a層及び8区南半部1層上面検出遺構全体平面図

第7節 8区の遺構と遺物

5区の西側に隣接する8区から先に報告する。

1. 北半部2層および南半部3層上面検出遺構 (図130～133)

662 畦畔北側の北半部2層上面で、5区と同じく土坑や溝、ピットなどを多数検出した。その面に対応する畦畔南側の南半部3層上面では耕作溝を検出した。

662 畦畔 (876・895 溝) 調査区中央よりもやや北寄りに位置する。前節でも述べたとおり、集落域と生産域とを画していたと考えられる畦畔で、5区での状況と同じく、この畦畔を境に南側では土坑やピット等の遺構が完全なくなる。東側の5区からつづいているが、5区とは若干方向が変わり、当調査区内ではほぼ東西方向の向きとなる。幅は約1mで、盛り上がりというよりは、畦畔よりも南側が一段低い段となっている。その高低差は5区寄りでは約0.2mを測るが、西に向かって徐々になくなり、調査区西壁際では輪郭も不明瞭なものとなる。その段の南裾には876溝が、北側には895溝が掘られている。なお畦畔の中心には木杭が打ち込まれていたが、杭に書かれた文字から近年に打ち込まれたものであることが確認できた。これによってこの畦畔が、中世の段階から近年の盛土造成が行なわれる直前まで機能していたことが明らかとなった。

876溝からは白磁碗(1081)が、895溝からは石鍋(1080)が出土している。1081は白磁V類の底部で、12世紀後半～13世紀前半に位置する。1080の石鍋は人為的に切断されたもので、下方には切り込みの痕跡も残る。温石などへ転用する目的で切断されたものと考えられる。

880 土坑 北半部の中央やや5区寄りに位置する。南端部が898土坑と一部重複する土坑で、898土坑の埋土上面で検出できる。平面形は南北2.2m、東西1.15mの楕円形で、深さは0.42mを測る。埋土は細粒砂を含む灰色砂質シルトである。

土坑からは15世紀末頃の土師器皿(1059)が出土している。緩やかに外反する口縁をもつ。

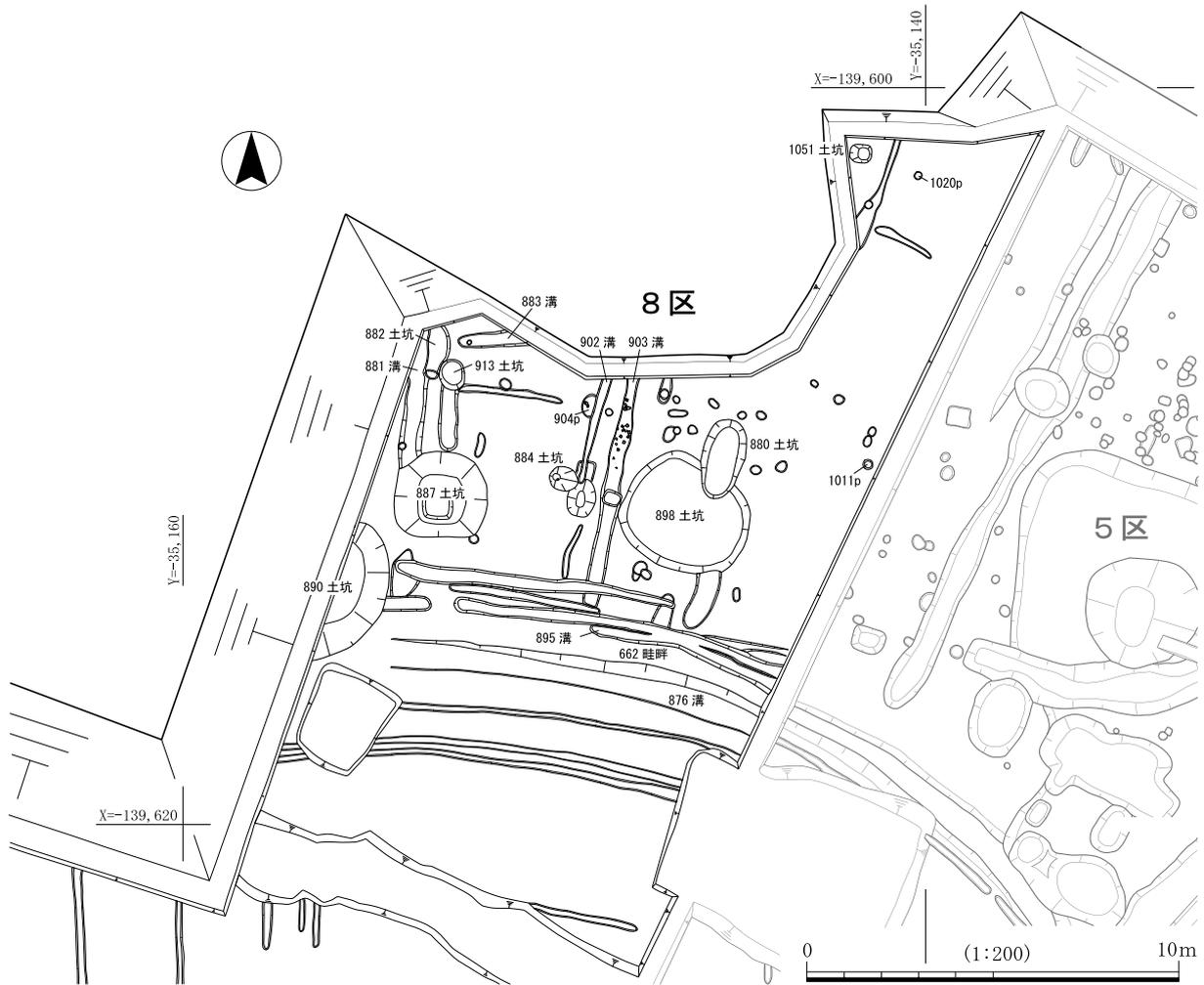


図 130 8区北半部2層上面検出遺構全体平面図

882 土坑 調査区の北西隅に位置する。881溝によって西側が削られているため、全体の形状や規模は不明である。深さは約 0.05 m を測る。

884 土坑 北半部のほぼ中央に位置する。平面形は長径 0.78 m、短径 0.65 m の東西にやや長い楕円形で、深さは 0.44 m を測る。埋土は炭混じりの灰色粘質シルトである。

土坑からは 12 世紀後半頃の青磁碗 (1060) が出土した。内面に櫛描きによって紋様を刻む。

887 土坑 調査区の西壁際に位置する。大型の土坑で、平面形は南北 2.3 m、東西 2.5 m の隅丸方形を呈する。底部は二段掘りになっており、中央やや南寄りに、約 0.8×0.7 m の長方形の穴があげられている。井戸枠の掘方であったとも考えられるが、井戸枠は残っておらず、断面および平面でも、井戸枠を抜き取ったような痕跡は認められなかった。深さは一段目までが約 1.05 m で、二段目はそこからさらに 0.5 m ほど深く掘られている。埋土は 3 層に分層できる。下層はシルト偽礫が混じる粗粒～中粒砂で、二段目の底付近に堆積する。中層は砂質シルトが混じる粘質シルト偽礫で、上層は粘質シルト偽礫が多く混じる黒色砂質シルトである。

出土遺物は土師器、瓦器、青磁、白磁などである (1061～1065・1072)。1062 は白磁皿で、口縁は緩やかに外反する。13～14 世紀頃のものである。1063 は同安窯の青磁碗で、12 世紀後半に位置する。1064・1065 の瓦器碗は内面にやや簡略化したミガキを施す。13 世紀前半に位置するものである。土器以外に錐と考えられる金属製品 (1072) がある。長さ 9.7cm で、断面形は四角形を呈する。上下両端が

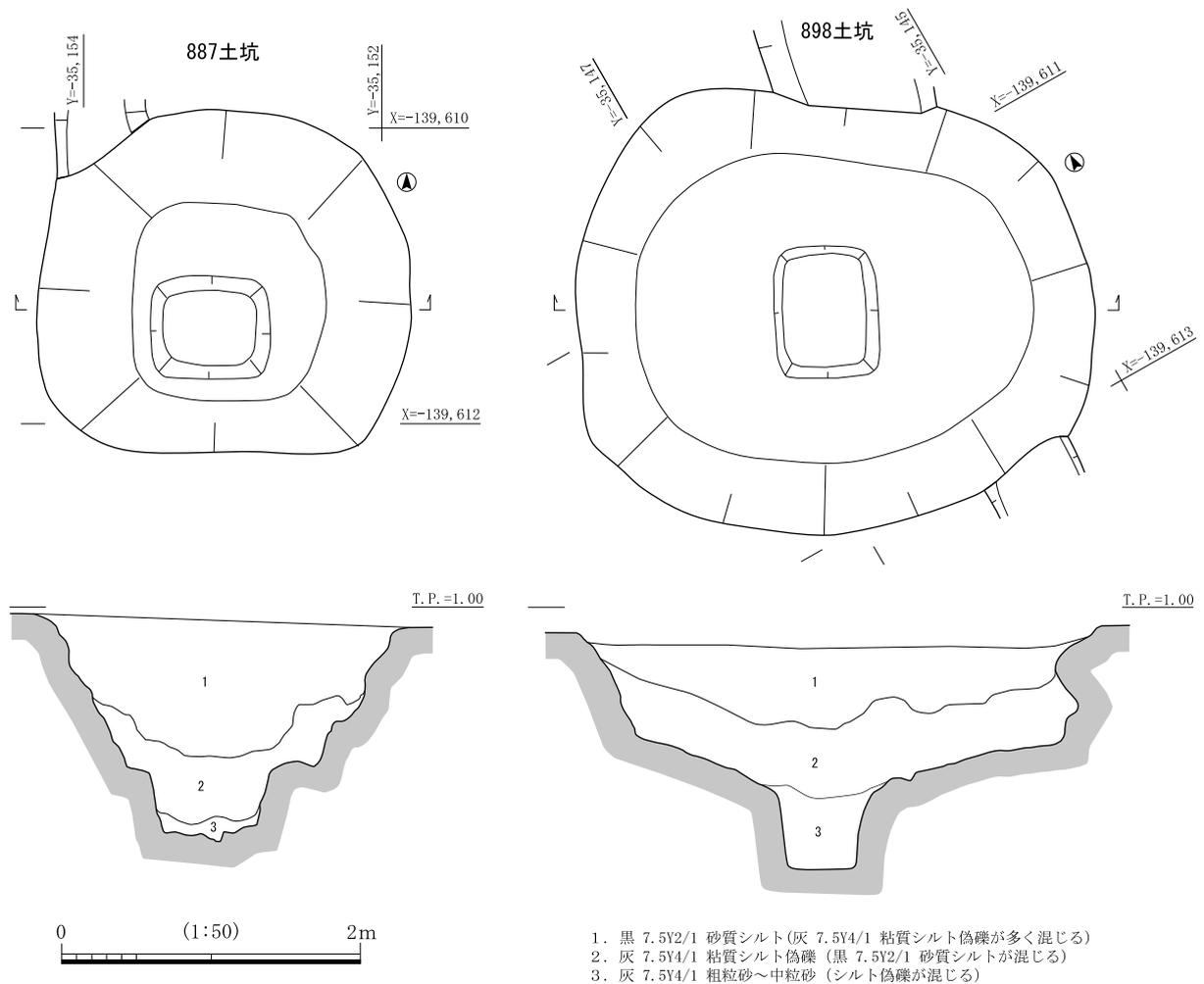


図 131 887・898 土坑平面・断面図

細く尖り、一端に木質が付着する。

890 土坑 887 土坑のすぐ南側の調査区の西端に位置する。遺構の西側が調査区外となるため、全体の形状や規模は明らかでないが、平面形は直径約 4 m 以上の円形もしくは楕円形になると考えられる。深さは約 0.8 m であるが、遺構の中心部であれば、更に深くなると思われる。埋土は底面に約 0.1 m の厚みで粘質シルト混じりの中粒～粗粒砂があり、その上が中粒～粗粒砂が混じるオリブ黒色砂質シルトである。

898 土坑 北半部のほぼ中央に位置する。880 土坑に一部切られる大型の土坑である。平面形は長径 3.5 m、短径 3.0 m の隅丸方形に近い楕円形を呈する。887 土坑と同じく底部が二段掘りとなっており、中央部に約 0.7 × 0.9 m の長方形の穴があいている。井戸枠の掘方であったとも考えられるが、こちらも断面および平面でも、井戸枠を抜き取ったような痕跡は認められなかった。深さは一段目までが 1.05 m で、二段目はそこからさらに 0.57 m 深く掘られている。埋土は 887 土坑と全く同じで、下層はシルト偽礫が混じる粗粒～中粒砂、中層は砂質シルトが混じる粘質シルト偽礫、上層は粘質シルト偽礫が多く混じる黒色砂質シルトである。

土坑からは土師器、瓦器、木製品などが出土した(1066～1071)。1066 の土師器皿は短く立ち上がる口縁をもち、端部を丸くおさめる。13 世紀前半のものである。1070 の瓦器椀は 12 世紀末～13 世紀初頭に位置するもので、内面にやや簡略化した粗いミガキを施す。1071 は有頭の木製品である。658 と

同様に一端を植状に削り出す。特筆すべきものに1068の墨書土器がある。土師器皿の底部内面に「あむ」、外面に「あ□」の文字が読み取れるが、その前後に文字が続くのかは明らかでない。

913土坑 882土坑の南側に接する。平面形は長径0.85m、短径0.7mの歪んだ楕円形を呈する。深さは0.44mで、埋土は下層がオリーブ黒色のシルト偽礫を含む中粒砂で、上層がオリーブ黒色の細粒砂混じり粘質シルトである。

土坑からは瓦質の羽釜（1076）が出土した。強く内傾する口縁をもつ。足釜の可能性がある。

1051土坑 調査区北端部に位置する。平面形は長辺0.6m、短辺0.5mの東西にやや長い隅丸長方形を呈する。深さは0.2mで、埋土はシルトの小偽礫が混じるオリーブ黒色粘質シルトである。

土坑からは白磁碗（1077）が出土した。白磁V類の底部で、12世紀後半～13世紀前半に位置する。

881溝 調査区の北西隅に位置する。南北方向の溝で、南端部が887土坑と重複する。図面では887土坑に切られているように表現しているが、実際には887土坑の埋土上面で検出している。幅は約0.6mで、

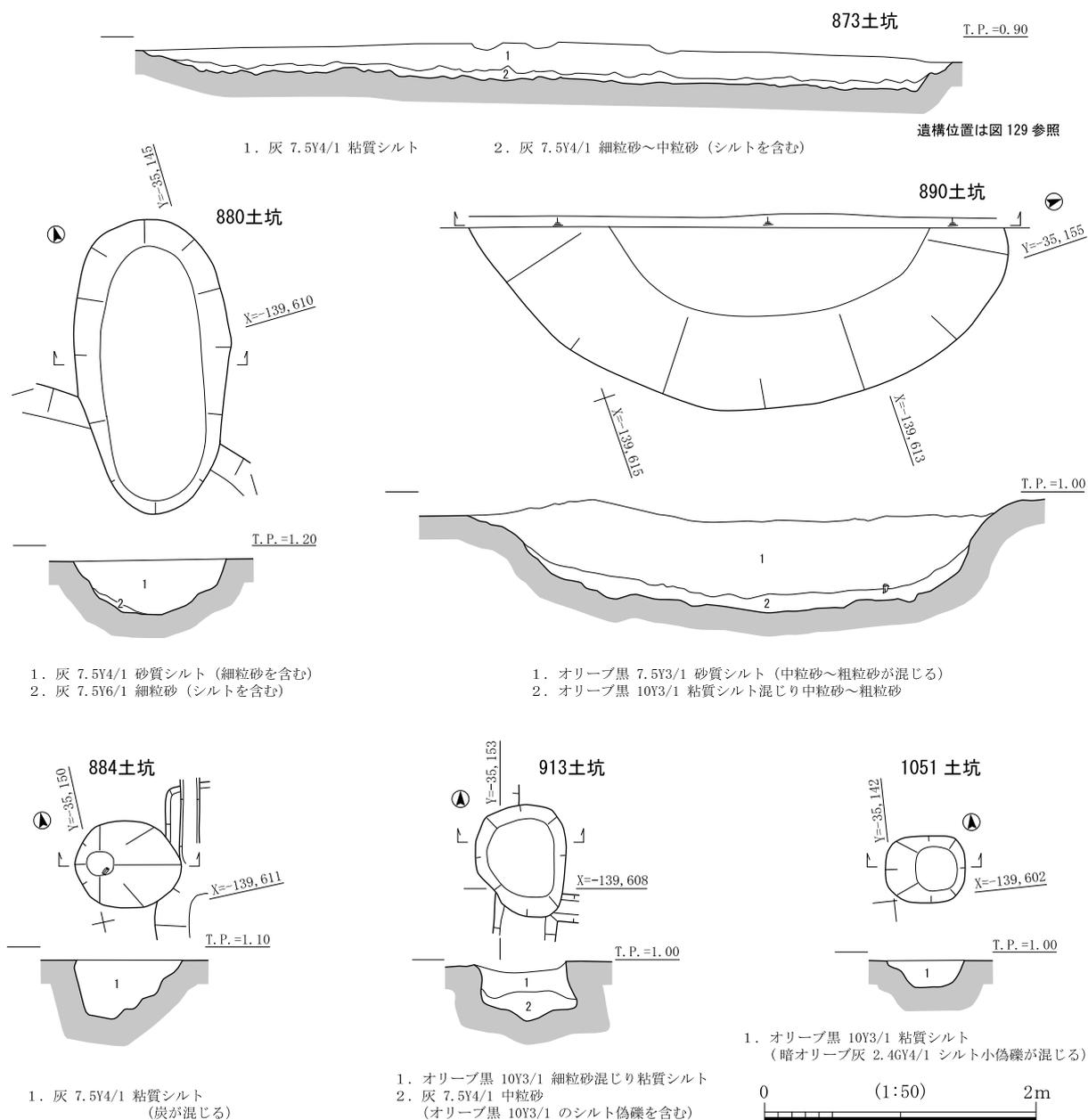


図132 北半部2層及び南半部3層上面検出土坑平面・断面図

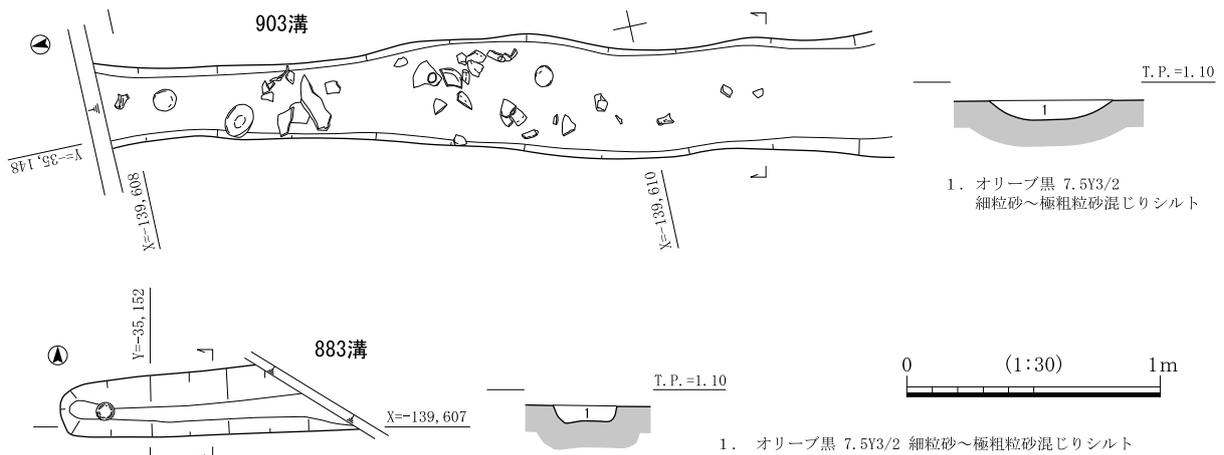


図 133 883・903 溝平面・断面図

深さは 0.1 m を測る。埋土は細粒～極粗粒砂混じりのオリーブ黒色シルトである。

溝からは土師器皿（1078）が出土している。口縁はやや屈曲して立ち上がり、内面にはハケ調整を施す。13 世紀末～14 世紀初頭に位置する。

883 溝 調査区の北西隅に位置する。東西方向の溝で、さらに東へとつづく。幅は約 0.4～0.45 m で、深さは 0.12 m を測る。埋土は細粒～極粗粒砂混じりのオリーブ黒色シルトである。

西端部から完形の土師器皿（1079）が 1 点出土した。13 世紀末頃のもので、緩やかに外反する口縁をもつ。

903 溝 898 土坑のすぐ西側に位置する。座標北から僅かに東に振る南北溝で、さらに調査区の北側へとびる。同一面で検出したピットを切って構築されている。幅は約 0.3～0.45 m、深さ約 0.08 m で、埋土は細粒～極粗粒砂混じりのオリーブ黒色シルトである。

調査区北壁寄りから土師器、瓦器などが多数出土した（1082～1086）。遺物の時期は 13 世紀前半におさまる。1083～1085 の土師器皿は短く外反する口縁をもつ。特筆すべきものに 1082 の墨書土器がある。瓦器碗の見込みに、乱雑な円を繰り返し描くような墨書を暗文の前に施している。

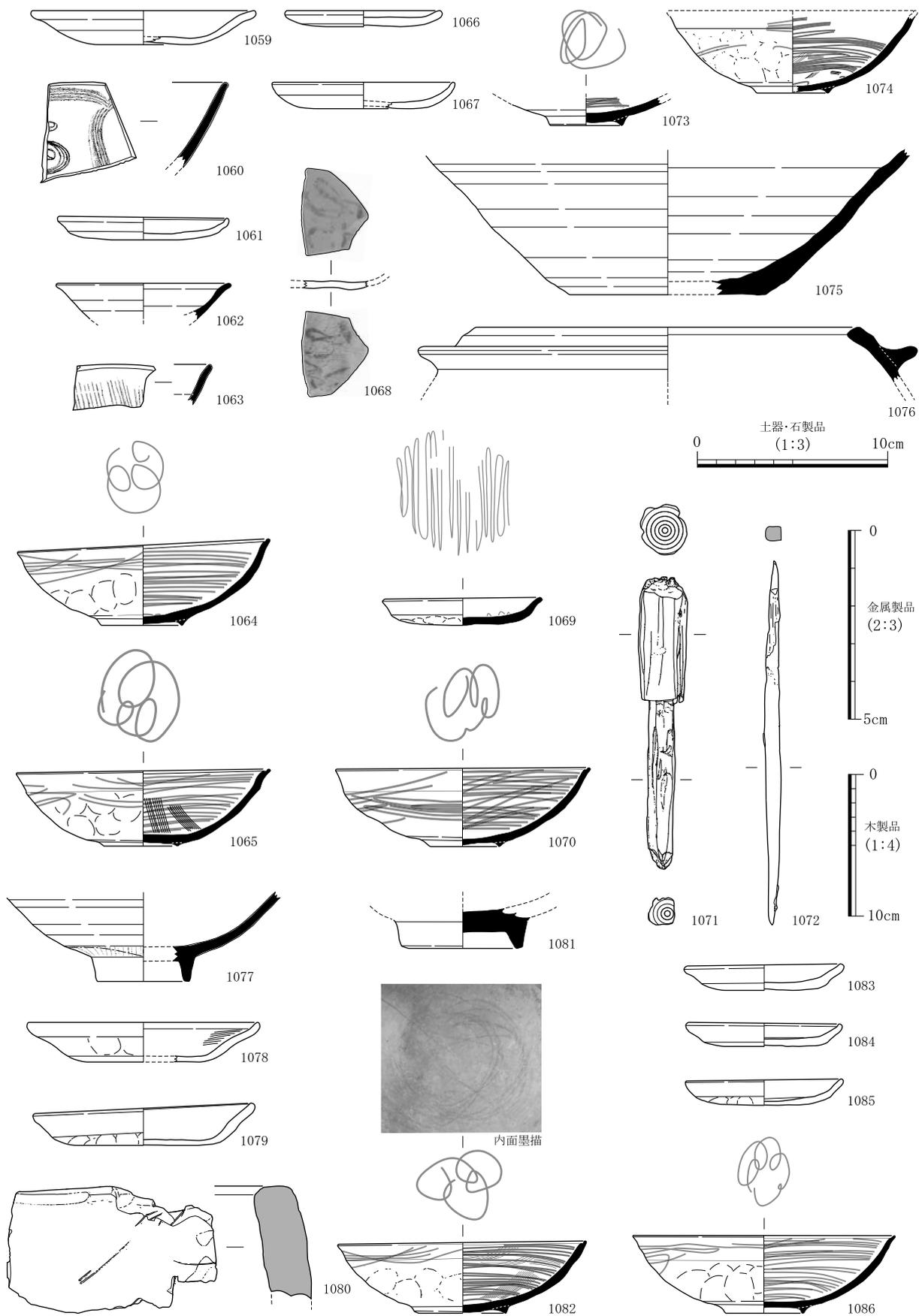
1020 ピット 調査区北端部、1051 土坑の東側に位置する。平面形は直径 0.2 m 強の円形で、深さは約 0.3 m を測る。埋土は灰色砂質シルトである。

下層から竈の破片（1087）が多量に出土した。付け底系の竈で、形状は 485 と同様に、底を焚き口に沿って貼り付ける。体部外面にはハケ目と指頭圧痕が残る。485 と比べ両側面がやや直立気味である。このほか須恵器捏鉢（1075）が出土している。体部下半はやや内湾し、上半は直線的に伸びる。12 世紀後半に位置すると考えられる。

このほかにもいくつかピットを検出しているが、5 区に比べ稀薄である。

出土遺物は、904 ピットから 13 世紀前半頃の瓦器碗（1073）が、1011 ピットから 12 世紀後半頃の瓦器碗（1074）が出土している。1073 は見込みには渦巻き状の暗文を施し、1074 は内面にやや密なミガキを施す。

耕作溝 662 畦畔より南側の 3 層上面で検出した。幅 0.15～0.25 m 程度の浅い細溝である。溝の向きは、662 畦畔のすぐ南側では畦畔に沿った東西方向であるが、その南側では南北方向が主となる。5 区 3 a 層検出の耕作溝ほど密ではない。前節でも述べたとおり、662 畦畔の南側には、北側で検出したような土坑やピットなどの遺構が全くないことから、畦畔より南側は北端の集落に伴う耕作域であったと考え



1059. 880 土坑、1060. 884 土坑、1061～1065・1072. 887 土坑、1066～1071. 898 土坑、1073. 904 ピット、1074. 1011 ピット
1075. 1020 ピット、1076. 913 土坑、1077. 1051 土坑、1078. 881 溝、1079. 883 溝、1080. 895 溝、1081. 876 溝、1082～1086. 903 溝

図 134 ピット・土坑・溝出土遺物実測図

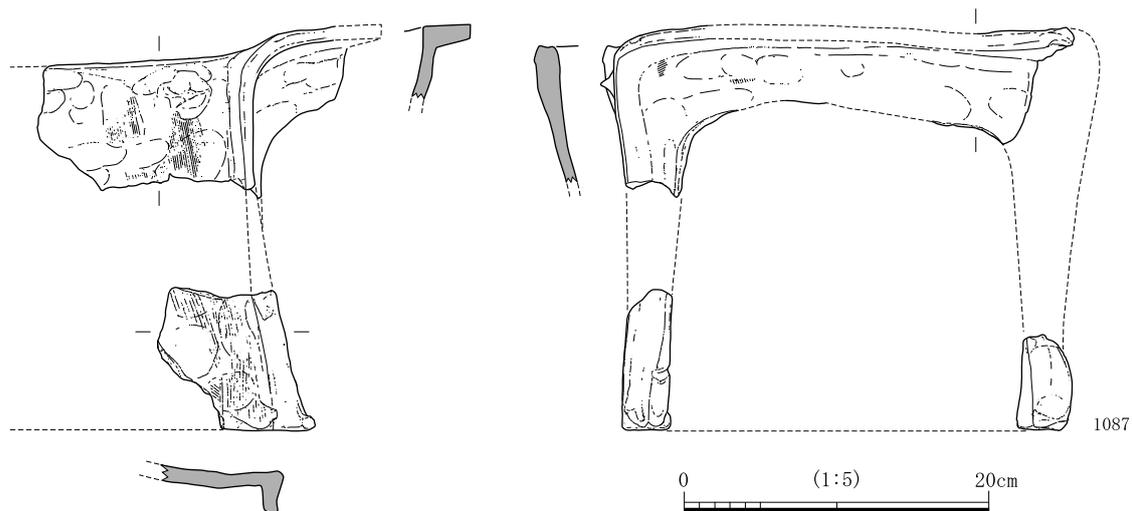


図 135 1020 ピット出土竈実測図

られる。

2. 南半部 1 層上面検出遺構 (図 129)

5 区中央部の 2 層上面に対応する遺構面である。土坑 1 基と耕作溝を検出した。

873 土坑 調査区の南西寄りに位置する。耕作に伴う掘り込みと考えられる遺構である。平面形は南北 5.5 ～ 6.5 m、東西 14.4 m 以上の大型の長方形であるが、深さは約 0.2 ～ 0.3 m とその平面規模に対して浅い。埋土は下層がシルトを含む灰色細粒～中粒砂で、上層が灰色粘質シルトである。同一面で検出した耕作溝はこの埋土上面で検出できる。

耕作溝 幅 0.2 ～ 0.4 m 程度の細溝である。東西・南北の両方向の溝があるが、南端部ではそのほとんどが東西方向である。

3. 北半部 3 層上面検出遺構 (図 136)

5 区北半部の 3 層上面に対応する遺構面である。溝を 4 条検出した。

714 溝 調査区北端部に位置する。5 区からつづく溝で、約 2 m 分を検出した。規模や埋土については前節で報告したとおりである。

1092・1093 溝 714 溝の南側に位置する。座標西から北に 30 度ほど振れるほぼ東西方向の溝で、両者並行する。1092 溝は 714 溝から約 8 m、1093 溝は 1092 溝から約 2 m 隔てる。幅は 1092 溝が約 0.6 ～ 0.7 m、1093 溝が約 0.5 m で、深さは共に約 0.05 m である。埋土は極細粒砂や偽礫が混じる灰オリーブシルトである。

1010 溝 1093 溝の南側に位置する。東西方向の溝で、5 区で検出した 717 溝の延長部にあたる。幅は 1.1 ～ 1.5 m で、深さは約 0.1 m である。埋土は細粒砂や偽礫が混じる灰色シルトである。

上記 4 条の溝は、いずれも耕作に伴う遺構と考えられる。



図 136 8区北半部3層上面検出構全体平面図

第8節 3区の遺構と遺物

1. 2層上面検出遺構 (図 137・138)

井戸1基、土坑5基、ピット2基のほか、調査区の中央部でマウンド状の高まりを検出した。

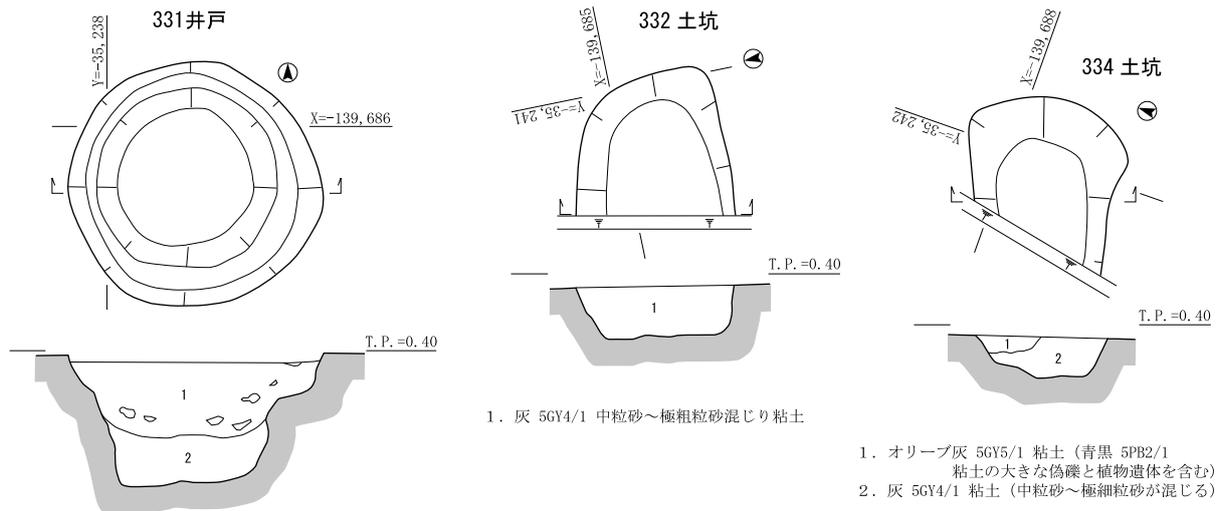
331 井戸 調査区の西壁寄りに位置する。平面形は直径約 1.6 m 強の円形を呈する。深さは 0.88 m で、二段掘りによって構築されている。埋土は上下 2 層に分層できる。上層は植物遺体や青黒色の大型粘土偽礫を含むオリブ灰色粘土で、下層は植物遺体や粘土の小偽礫を含む灰色粘土である。人為的に埋め戻されたことがうかがえる。

332 土坑 調査区の西壁際に位置する。遺構の西側が調査区の側溝によって切られているため、全体の形状は明らかでない。深さは 0.35 m で、埋土は中粒～極粗粒砂混じりの灰色粘土である。

333 土坑 調査区の西壁際、332 土坑の北側に位置する。これも遺構の西側が調査区の側溝によって切られているため、東側の一部のみの検出となる。全体の形状は明らかでないが、直径約 2.4 m の円形になると考えられる。深さは約 0.4 m で、一部に 0.6 m 程度まで深くなる箇所がある。埋土は下層が粘質シルトや粘土の偽礫を多く含む中粒～極粗粒砂、中層が中粒～極細粒砂が混じる灰色粘土、上層が細粒～中粒砂が混じる灰色粘土である。

334 土坑 調査区の西壁際、332 土坑の南側に位置する。上記 2 基の土坑と同じく西側が調査区の側溝によって切られているため、全体の形状は明らかでない。深さは約 0.3 m で、埋土は下層が中粒～極細粒砂が混じる灰色粘土で、上層が植物遺体や青黒色の大型粘土偽礫を含むオリブ灰色粘土である。

335 土坑 331 井戸のすぐ西側に位置する。平面形は長辺 2.07 m、短辺約 1.58 m の南北にやや長い隅丸



1. オリーブ灰 5GY5/1 粘土 (青黒 5PB2/1 粘土の大きな偽礫を含む、植物遺体を含む)
2. 灰 10Y4/1 粘土 (細粒砂～中粒砂、青黒 5PB2/1 と オリーブ灰 5GY6/1 粘土小偽礫、植物遺体等を含む)

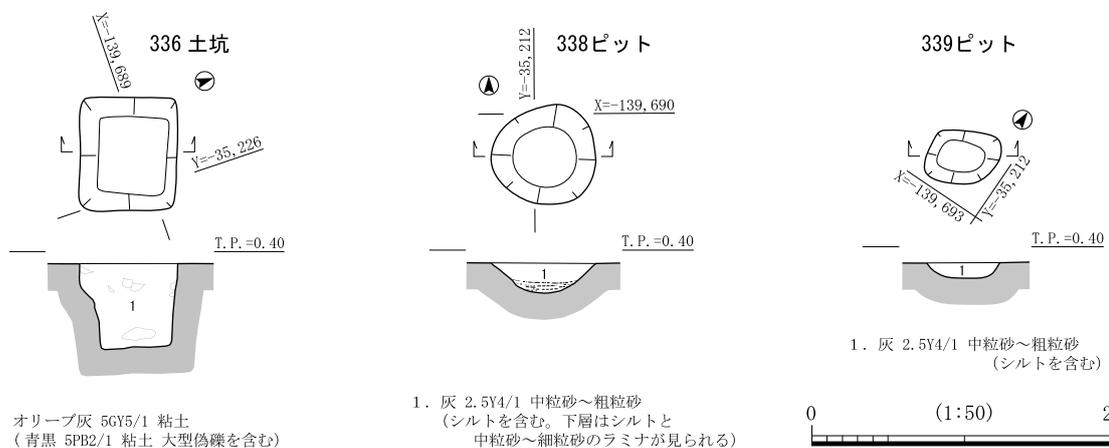
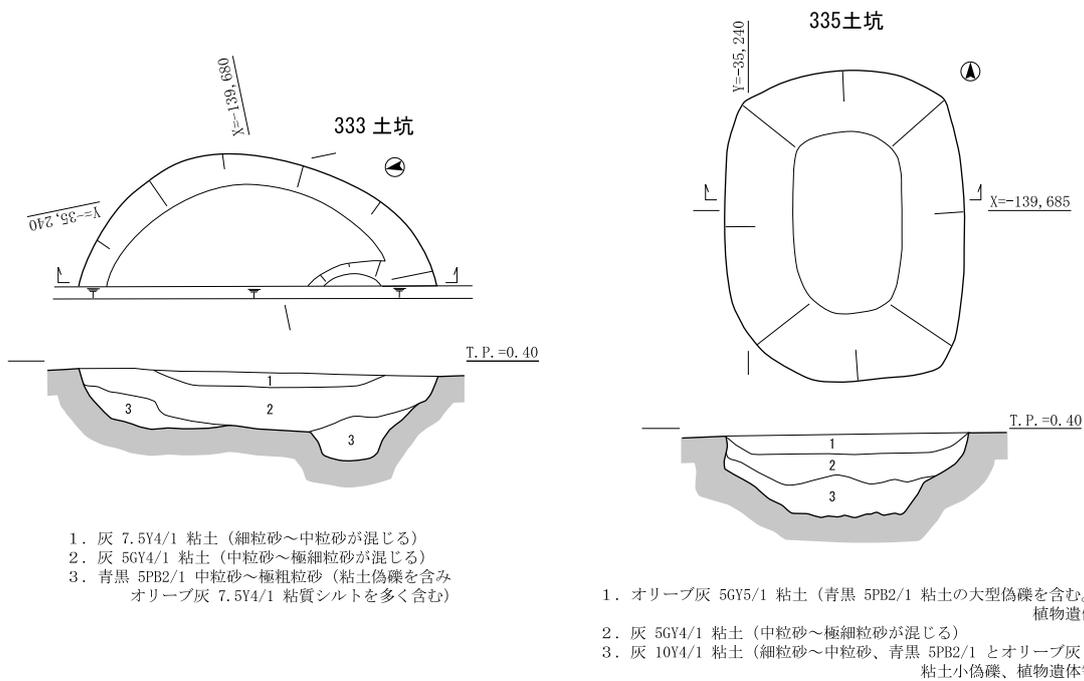
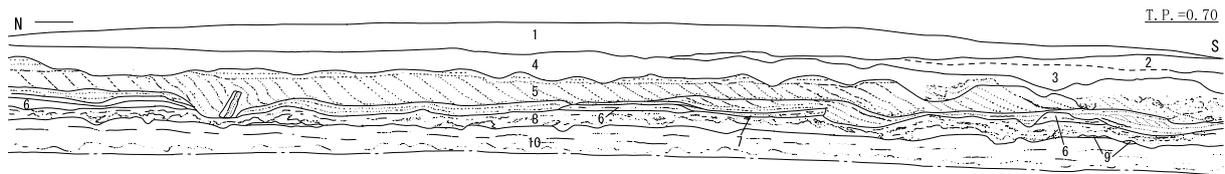


図 137 2層上面検出遺構平面・断面図



- 断面位置は図142参照
- 0 (1:50) 2m
1. オリーブ黒 7.5Y3/1 細粒砂質シルト(細礫を含む) 【高まり部分】
 2. オリーブ黒 5Y3/1 シルト混じり中粒砂～粗粒砂 【2層】
 3. 灰 5Y4/1 シルト混じり粗粒砂～中粒砂 【4層】
 4. 灰 5Y4/1 細粒砂～中粒砂質シルトと極粗粒砂～中粒砂 (5層)の互層
(塊状やラミナに沿ってレンズ状に細粒砂～中粒砂質シルトが狭在する。5層の砂混じる) 【4層】
 5. 黄灰 2.5Y6/1 細礫～粗粒砂 【5層】
 6. 灰 5Y4/1～5/1 極細粒砂混じり粘土質シルト
(岩相としては8層の灰色粘土シルトに比べて淡い色合である) 【6層】
 7. オリーブ黒 7.5Y3/1 シルト～極細粒砂 (植物遺体のラミナあり)
 8. 《上半》オリーブ黒 5Y3/2 《下半》黒褐 10YR2/2 シルト～極細粒砂
(植物遺体混粘土シルトに灰色の粘土シルトが入り混じり変形を受ける。この部分はブーディン褶曲的である。上方からの荷重による変形か) 【8層】
 9. 黒褐 7.5Y3/1 粘土質シルト 【9層】
 10. 黒 2.5Y2/2 粘土質シルト (植物遺体が混じる) 【10層】

図 138 中央高まり断面図

長方形で、深さは0.57 mを測る。埋土は3層に分層できる。上層と下層は331井戸のそれと全く同じで、その間に中層として中粒～極細粒砂が混じる灰色粘土が入る。

336 土坑 331井戸の東側にやや隔てて位置する。平面形は長辺約0.75 m、短辺約0.65 mの隅丸長方形で、深さは0.57 mを測る。埋土は青黒色の大型粘土偽礫を含むオリーブ灰色の粘土である。

338 ピット 調査区中央部南寄りに位置する。平面形は直径約0.65～0.7 mの円形で、深さは0.2 mを測る。埋土はシルトを含む中粒～粗粒砂で、下層にはシルトと中粒～細粒砂のラミナが見られる。

339 ピット 338土坑の南側に位置する。平面形は長辺約0.45 m、短辺約0.35 mの歪んだ隅丸長方形で、深さは0.1 mを測る。埋土はシルトを含む中粒～粗粒砂である。

高まり 調査区のほぼ中央部に位置する。細礫を含むオリーブ黒色細粒砂質シルトがマウンド状に盛り上がったもので、その高さは約0.2 mを測る。平面形は東西約18.5 m、南北約9 mの東西に長いほぼ楕円形を呈する。調査区の北壁際(北高まり)と南壁際(南高まり)にも同様の高まりが残っており、それらについては、その形状などから耕作地の段差であることがうかがえるが、この中央の高まりについては規模も小さく性格は明らかでない。なお、北と南の高まりについては基本層序の節で報告したとおりである。

2. 3層下面検出遺構 (図139)

上記の南高まり部において、3層(南高まり2層)掘削後の面で溝1条と鋤の痕跡を検出した。

337 溝 調査区の南東隅に位置する。座標北から東に約30度振る南北溝で、北側が二股に分かれる。幅は0.8～0.9 mで、深さは約0.18 mを測る。埋土は細粒～中粒砂である。

溝からは瓦器碗(1088)が1点出土している。内面に密なミガキを施す11世紀末あるいは12世紀初頭に位置するものである。

鋤の痕跡は3層が薄くなる高まりの縁辺部で検出した(写真図版10-7)。

3. 4層下面検出遺構 (図140)

土坑状の窪みを多数検出した。

調査の都合上、340・341・342・344土坑という名称を付したが、実際には人為的に掘削された遺構ではなく、やわらかい地面を踏み込んだためにできた土坑状の窪みとすべきものである。主に調査区の

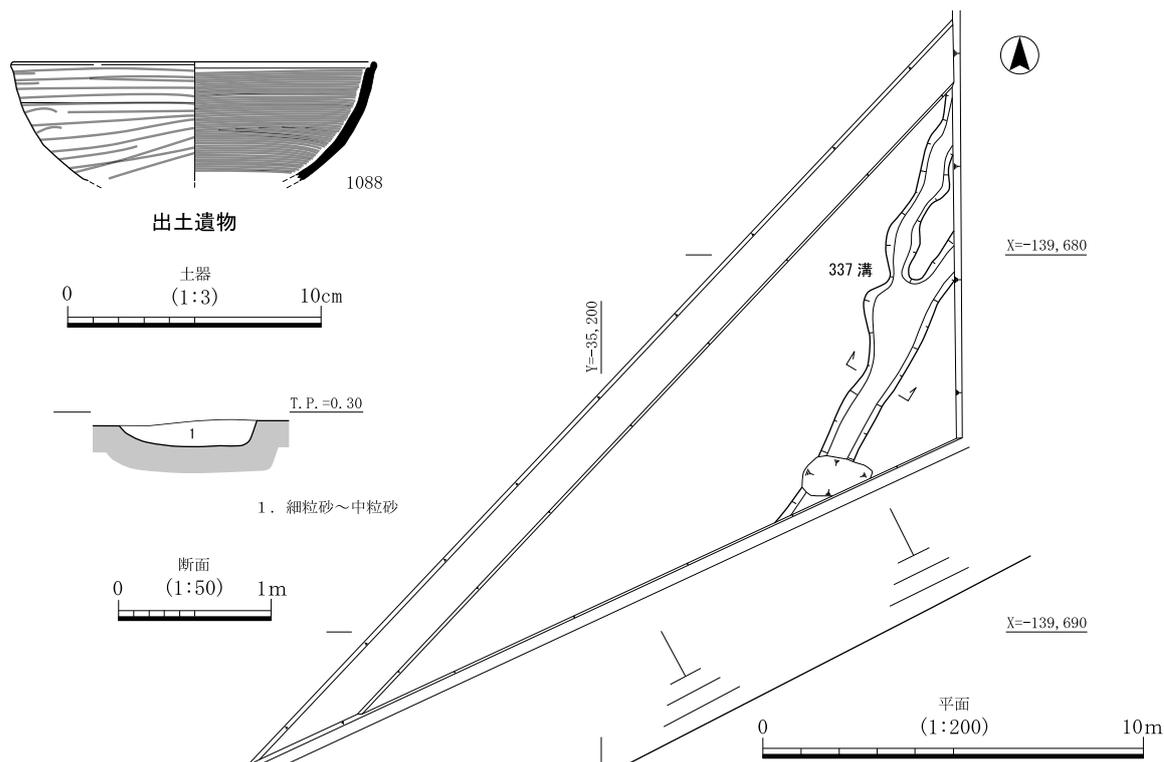
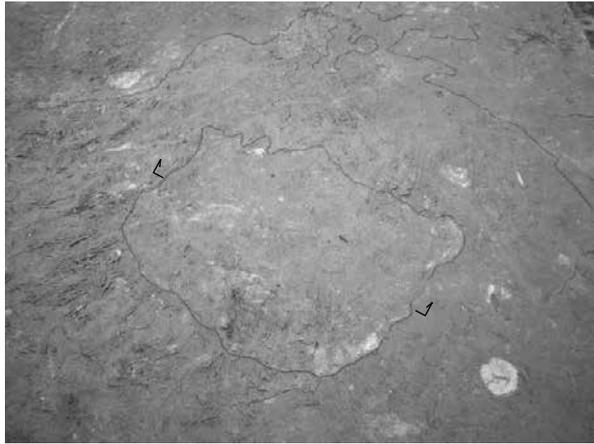


図 139 337 溝平面・断面図及び出土遺物実測図

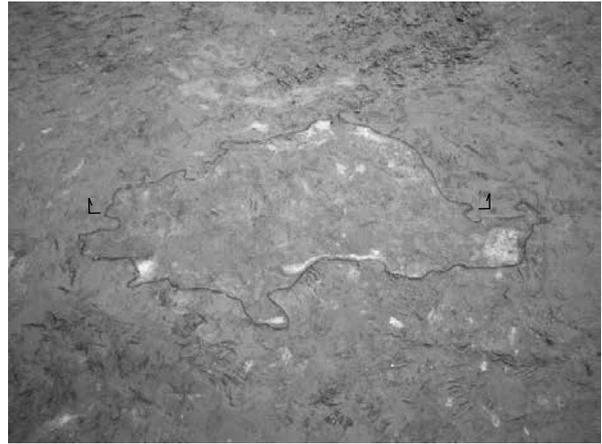
西半部に広がっている。平面形はどれも整っておらず、大きさもまちまちである。底面も凹凸があるものなど一様ではない。埋土は6層や8層の偽礫を含む細粒砂～中粒砂質シルトやシルト混じり細粒砂などである。

4. 7層下面検出遺構（写真図版10-8）

北方に広がる極粗粒～中粒砂層（7層）を掘削後の面で足跡を検出した。無数に広がるものではなく、歩いた方向や歩幅などが確認できる程度の少人数の足跡である。1つの足跡は西南西から東北東方向に向かって進んでおり、その歩幅は約0.45mであった。



340土坑
T.P.=0.20
SW NE



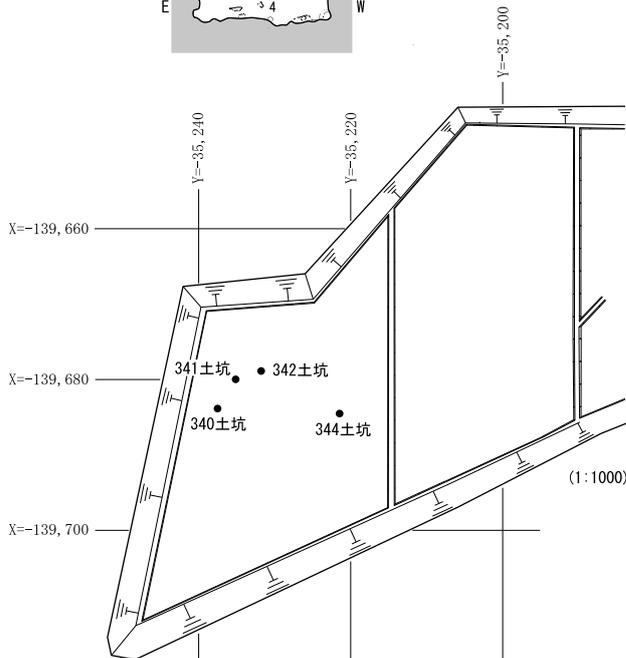
341土坑
T.P.=0.20
NE SW



342土坑
T.P.=0.20
E W



344土坑
T.P.=0.20
SW NE



断面
(1:50)
0 2m

1. オリーブ黒 5Y3/1~3/2 粗粒砂の偽礫混じりシルト
(6層のシルト偽礫混じりオリーブ黄~灰オリーブ
5Y6/3~5/3 粗粒砂~極粗粒砂を含む)
2. 7層の有機質シルト偽礫と
5層下部の細粒砂偽礫混じりシルト
3. 灰 5Y4/1 中粒砂~粗粒砂 (オリーブ黄 5Y6/3
5層の砂・6層のシルトを含む)
4. オリーブ黒~灰 5Y3/1~4/1 細粒砂~中粒砂質シルト
(8層の偽礫を含む)
5. 灰オリーブ 5Y5/2 シルト混細粒砂 (5層下部の
ラミナが目立つ灰色細粒砂と8層の偽礫を含む)
6. 灰 5Y4/1 シルト混細粒砂 (8層の偽礫を含む)

図 140 4層下面検出遺構平面・断面図

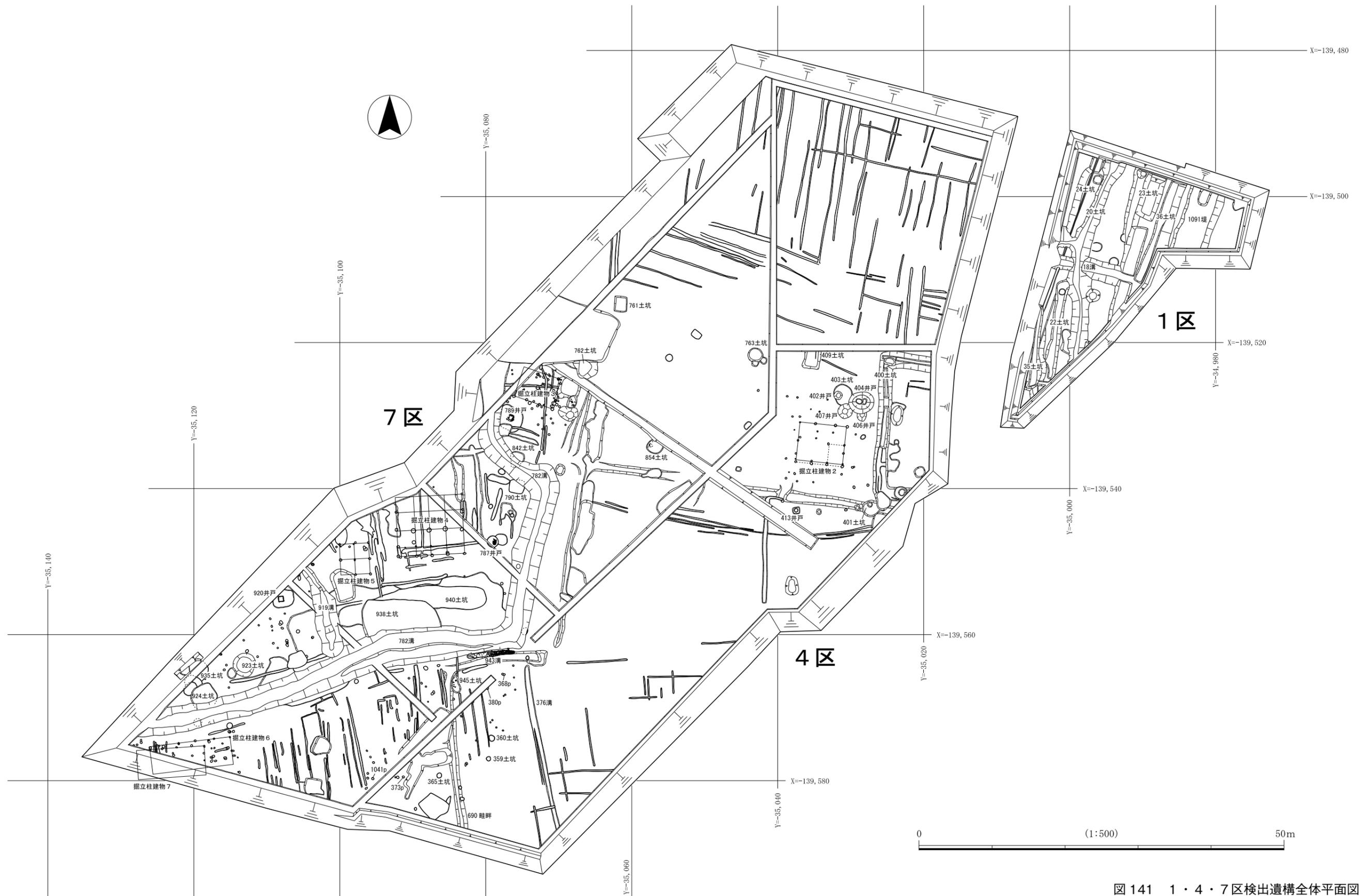


图 141 1·4·7区検出遺構全体平面図

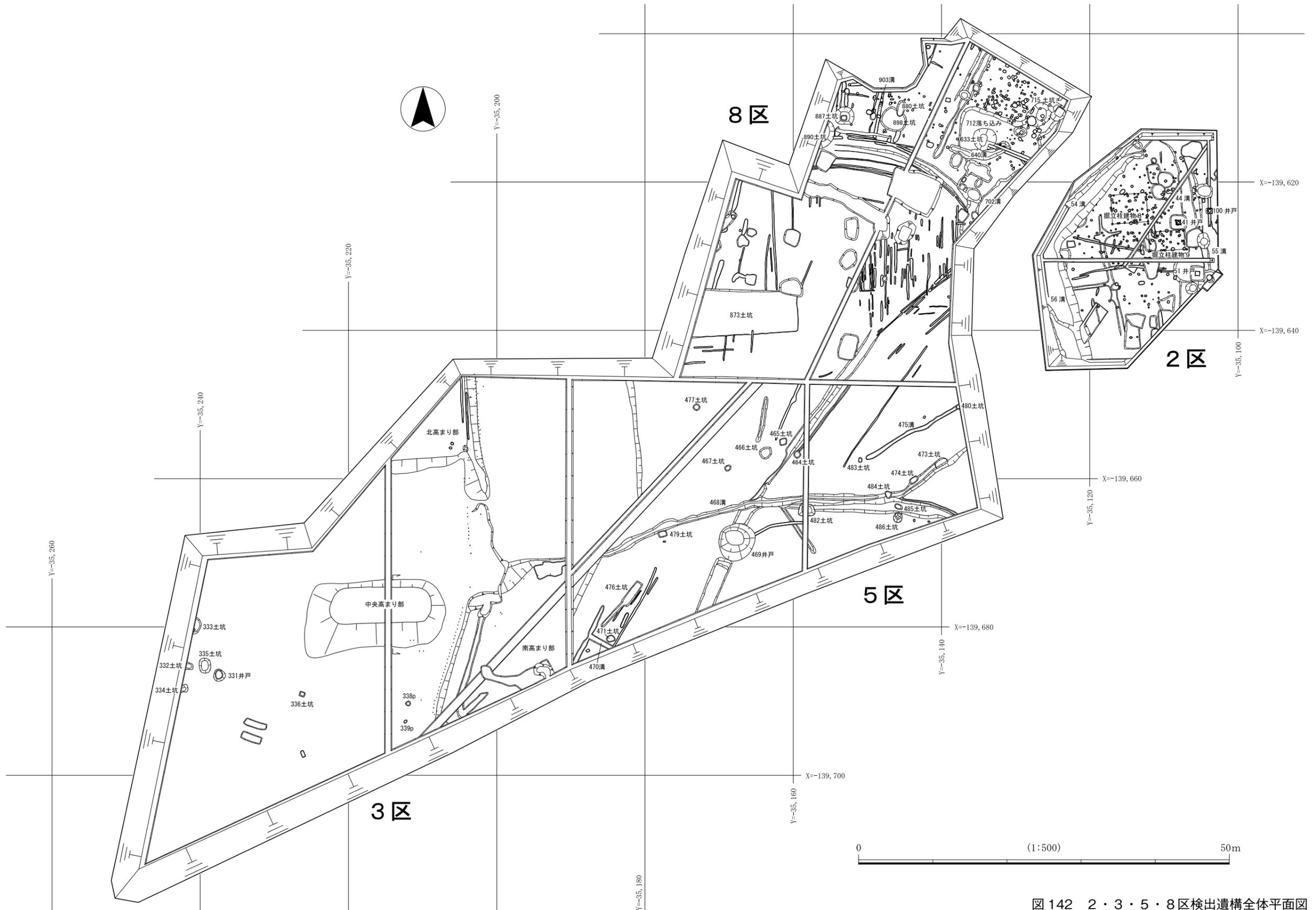


图 142 2・3・5・8区検出遺構全体平面図

表3 土器計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	種類	器種	残存率 (%)	法 量(cm)		特 徴・備 考
						口径	高さ	
1	1区	2 a ii 層	瓦器	播鉢	25	(30.5)	(12.5)	口縁部ナデ 体部右上がり指オサエ 内面下半使用痕跡
2	1区	2 a iii 層	陶器	播鉢	10	底径(13.2)	(10.2)	丹波焼 底部内面播目
3	1区	2 a iii 層	青磁	碗	5	—	(1.9)	龍泉窯 口縁部のみ残存
4	1区	2 a iii 層	白磁	皿	5	(9.6)	2.1	口縁部のみ残存 口禿
5	1区	2 a iii 層	陶器	皿	85	10.5	3.4~3.6	肥前焼
6	1区	2 b (i) 層	瓦器	播鉢	5	(23.8)	(9.5)	口縁部外面強いナデ、口縁部短く外反
7	1区	2 b (i) 層	瓦器	羽釜	5	(12.4)	(5.3)	外面ナデ・指オサエ
8	1区	2 b (i) 層	土師器	皿	45	(8.2)	1.1	口縁部ナデ
9	1区	2 b (i) 層	土師器	皿	60	8.1	1.2~1.3	口縁部ナデ
10	1区	2 b ii 層	土師器	皿	95	7.6	1.1~1.6	口縁部ナデ 口縁部短く外反
11	1区	2 b (i) 層	瓦器	椀	75	(11.0)	2.6~3.1	口縁部ナデ内面ミガキ簡略化
12	1区	3 b 層	瓦器	椀	5	(11.8)	(3.4)	内面ミガキ簡略化
15	1区	3 a 層	白磁	皿	5	—	(2.4)	口縁部のみ残存 口禿
16	1区	3 a 層	土師器	皿	90	7.8	1.4	口縁部ナデ
17	1区	3 a 層	土師器	皿	20	(11.6)	2.7	口縁部ナデ
18	1区	3 a 層	瓦器	椀	25	(12.2)	3.7	内面ミガキ簡略化
19	1区	3 a 層	瓦器	椀	5	(14.0)	(3.3)	内面ミガキ簡略化
20	1区	3 a 層	青磁	碗	5	(16.2)	(4.0)	口縁部外反
23	1区	3 a 層	瓦器	火鉢	5	—	(5.9)	突帯2条 唐草紋
24	1区	3 a 層	瓦器	火鉢	40	(16.0)	(7.7)	小型 内面スス付着 口縁部外面横ミガキ 平面円形 椀状の体部・獸脚を持つ
25	1区	3 a 層	陶器	播鉢	5	(27.2)	(9.3)	備前焼 口縁部上下拡張
26	1区	3 a 層	瓦器	火鉢	5	(28.2)	(12.8)	内面明瞭な指オサエ 口縁部直立 体部やや開く
28	4区	2層	土師器	皿	100	7.6	1.4	口縁部ナデ
29	4区	2層	土師器	皿	85	7.9	1.0~1.2	口縁部ナデ
30	4区	2層	土師器	皿	95	8.3	1.0~1.3	口縁部ナデ
31	4区	2層	瓦器	椀	60	11.9	3.5~4.1	内外面磨減著しい 高台貼付粗雑
32	4区	2層	瓦器	椀	10	(12.7)	2.7	内面ミガキ簡略化・口縁部内面ハケ
33	4区	2層	瓦器	椀	20	15.4	(4.4)	口縁部ナデ・ミガキやや密
34	4区	2層	白磁	碗	5	—	(2.8)	口縁部のみ残存
35	4区	2層	白磁	皿	5	(10.2)	(1.4)	口縁部のみ残存 口禿
36	4区	2層	白磁	碗	5	(15.9)	(2.2)	口縁部のみ残存
37	4区	2層	白磁	碗	5	(16.6)	(3.1)	口縁部のみ残存 口縁部強く外反
38	4区	2層	陶器	天目茶碗	5	(11.8)	(5.0)	瀬戸美濃産 口縁部のみ残存
39	4区	3 a 層	土師器	皿	20	(9.6)	1.5	ての字状口縁部
40	4区	3 a 層	瓦器	椀	5	—	(4.1)	内面ハケ・ミガキ密
41	4区	3 a 層	瓦器	椀	15	底径(5.2)	(2.9)	内面ハケ・ミガキ密
42	4区	3 b 層	土師器	皿	25	(14.4)	(3.0)	口縁部外面2段ナデ 端部やや外反
43	4区	3 b 層	白磁	碗	5	(15.0)	(2.2)	口縁部のみ残存
44	4区	3 b 層	瓦器	椀	10	(12.8)	(4.6)	内外面ハケ・ミガキやや密
45	4区	3 b 層	瓦器	椀	15	(13.8)	4.9	内面ナデ・ミガキ粗 高台貼付粗雑
46	4区	3層	土師器	皿	55	(8.2)	1.3	内面ナデ 外面弱い2段のナデ
47	4区	3層	土師器	皿	45	(8.4)	1.4	口縁部ナデ 底部押し窪める
48	4区	3層	土師器	皿	95	8.1	1.1~1.4	口縁部ナデ
49	4区	3層	土師器	皿	90	8.6	1.3~1.5	口縁部ナデ
50	4区	3層	瓦器	皿	60	(9.3)	1.6	口縁部ナデ ジグザグ状の暗文
51	4区	3層	瓦器	皿	65	(8.2)	1.1~1.4	口縁部ナデ
52	4区	3層	瓦器	椀	25	(14.2)	4.5	内面ミガキ簡略化 暗文
53	4区	3層	瓦器	椀	55	14.9	5.4~5.9	内面ミガキやや密 連結輪状暗文
54	4区	3層	瓦器	椀	25	(12.8)	4.2	内面ミガキ無・不定方向ハケ
55	4区	3層	瓦器	椀	15	(15.5)	5.3	和泉型 内面ハケ 格子状暗文 外面明瞭な指オサエ
56	4区	3層	青白磁	合子・身	5	(6.1)	(1.8)	口縁部内面露胎 体部内湾 口縁部短く立ち上がる
57	4区	3層	青磁	皿	40	(10.7)	(2.5)	同安窯 底部糸切痕
58	4区	3層	白磁	碗	5	(15.1)	(3.2)	口縁部のみ残存

59	4区	3層	白磁	碗	10	底径(6.8)	(2.9)	底部のみ残存
60	4区	3層	瓦器	甕	10	(32.4)	(6.3)	頸部外面右上がり体部外面横位のタタキ
64	4区	4層	土師器	皿	25	(8.2)	1.6	口縁部ナデ
65	4区	4層	土師器	皿	25	(11.4)	3.1	口縁部ナデ
66	4区	4層	瓦器	椀	10	(13.8)	4.3	内面明瞭なハケ・ミガキやや簡略化
67	4区	4層	須恵器	捏鉢	5	(32.0)	(5.1)	口縁部直線的・端部に窪み
68	4区	5層	土師器	皿	15	(12.8)	1.8	口縁部ナデ やや摩滅
69	4区	5層	瓦器	椀	5	—	(2.9)	口縁部のみ残存 内面ミガキ簡略化
70	4区	7層	土師器	杯	5	—	(3.9)	内外面磨滅著しい
71	4区	6層	須恵器	杯身	5	(1.3)	—	底部のみ残存
72	4区	6層	須恵器	杯蓋	5	最大径1.8	(1.3)	宝珠つまみ部のみ残存
73	4区	6層	瓦器	椀	5	(12.6)	(2.3)	内面ミガキ簡略化
74	7区	1層	瓦器	椀	20	(8.6)	(2.8)	やや小型 内面に丁寧なナデ・ミガキやや密
75	7区	1層	青磁	碗	5	(13.5)	(2.9)	口縁部のみ残存
76	7区	1層	青磁	碗	15	底径(5.2)	(3.8)	底部残存 見込に紋様
77	7区	1層	白磁	四耳壺	5	(9.4)	(4.1)	口縁部のみ残存 口縁部強く外反
78	7区	1層	陶器	天目茶碗	5	(11.2)	(5.7)	瀬戸美濃産 口縁部のみ残存
79	7区	1層	陶器	播鉢	5	(23.6)	(7.8)	備前焼 口縁部のみ残存
80	7区	1層	陶器	甕	5	—	(7.6)	常滑焼 口縁部のみ残存
81	7区	3a層	青磁	皿	—	—	(2.1)	口縁部のみ残存 施軸厚い 波状口縁部
82	7区	3a層	青磁	碗	5	—	(2.9)	龍泉窯 口縁部のみ残存
83	7区	3a層	青磁	碗	5	—	(4.0)	龍泉窯 口縁部のみ残存
84	7区	3a層	土師器	皿	45	(7.6)	1.5	口縁部外反 体部下半明瞭な指オサエ
85	7区	3a層	白磁	碗	10	底径3.5	(1.4)	底部のみ残存 割高台 見込み重ね焼痕
86	7区	3a層	陶器	天目茶碗	5	底径(5.2)	(4.1)	瀬戸美濃産
87	7区	1層	瓦器	火鉢	5	—	(7.5)	脚部のみ残存
88	7区	1層	瓦器	茶釜	5	—	(4.5)	口縁部のみ残存
89	7区	1層	瓦器	甕	5	(36.3)	(5.3)	体部外面横位タタキ
90	7区	1層	瓦器	火鉢	5	底径(35.4)	(6.9)	底部のみ残存 有脚
91	7区	3a-2層	土師器	皿	50	(7.8)	2.0	口縁端部にスス付着
92	7区	3a-2層	土師器	皿	50	(7.8)	1.8	口縁部ナデ 底面やや押し窪める
93	7区	3a-2層	土師器	皿	45	(8.2)	1.3	口縁部ナデ
94	7区	3a-2層	土師器	皿	95	8.1	1.2~1.5	内面右回りのナデ
95	7区	3a-2層	瓦器	皿	80	8.7	0.9~1.5	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
96	7区	3a-2層	瓦器	椀	95	9.6	3.5~4.0	口縁部ナデ 内面渦巻状ミガキ簡略化
97	7区	3a-2層	瓦器	椀	95	14.8	5.2~5.8	内面ミガキやや密 連結輪状暗文
98	7区	3a-2層	瓦器	椀	95	13.9	4.5~4.9	内面ミガキやや簡略化 連続長楕円状暗文
99	7区	3a-2層	瓦器	火鉢	5	—	(4.7)	口縁部のみ残存 2条突帯の間に烈点を施す
100	7区	3a-2層	青磁	碗	10	(17.2)	(4.3)	同安窯 口縁部のみ残存
101	7区	3a-2層	青磁	碗	10	5.0	(3.7)	底部のみ残存 見込に紋様 畳付けまで厚く施軸
102	7区	3a-2層	青磁	碗	5	底径(4.0)	(3.1)	底部のみ残存 高台内面まで施軸
103	7区	3a-2層	白磁	碗	5	(15.9)	(3.1)	口縁部のみ残存
104	7区	3a-2層	白磁	水注	5	9.6	3.5~4.0	頸部内面露胎 器壁薄 口縁部内傾 外面裝飾痕
105	7区	3a-2層	青磁	碗	5	—	(4.1)	龍泉窯 口縁部のみ残存
106	7区	3a-2層	瓦器	羽釜	10	(14.2)	(4.2)	外面指オサエ 内面ハケ
107	7区	3a-2層	瓦器	羽釜	5	(23.9)	(11.8)	内面横位ハケ 体部外面指オサエ 頸部内傾
108	7区	3a-2層	須恵器	甕	10	(31.6)	(5.2)	頸部外面右上がりタタキ 口縁部強く外反
109	7区	3a-2層	瓦器	火鉢	5	(37.4)	(4.7)	2条突帯の間に烈点を施す
111	7区	3b層	土師器	皿	95	8.0	1.7	体部外面に粗い指オサエ
112	7区	3b層	土師器	皿	95	8.6	1.5~1.6	内面左回りのナデ
113	7区	3b層	土師器	皿	85	11.3	2.0~2.2	内面右回りのナデ
114	7区	3b層	土師器	皿	90	14.1	2.4	口縁部ナデ 口縁部外反
115	7区	3b層	土師器	皿	70	(14.2)	3.1	内面右回りのナデ 底部内外面指オサエ 口縁部外反
116	7区	3b層	瓦器	椀	25	(7.8)	3.0	ミニチュア 内外面丁寧なナデ・ミガキやや密
117	7区	3b層	瓦器	椀	70	14.0	(5.2)	内面ミガキやや密 暗文
118	7区	3b層	瓦器	椀	30	(14.6)	5.5	内面ミガキやや密 連結輪状暗文

119	7区	3b層	瓦器	椀	20	(12.6)	3.9	内面明瞭なハケ・ミガキ簡略化 暗文
120	7区	3b層	瓦器	椀	35	(14.8)	5.1	内外面ミガキ密
121	7区	3b層	白磁	碗	5	—	(4.0)	口縁部のみ残存 口禿
122	7区	3b層	白磁	碗	5	—	(3.6)	口縁部のみ残存
130	2区	2層	土師器	皿	70	6.5	1.9~2.2	口縁部ナデ
131	2区	2層	土師器	皿	60	(7.6)	1.2	口縁部ナデ
132	2区	2層	土師器	皿	75	14.7	3.6~3.8	内面ナデ 外面指オサエ
133	2区	2層	瓦器	皿	20	(8.8)	1.8	口縁部ナデ 暗文
134	2区	2層	青磁	碗	5	底径6.4	(3.9)	底部のみ残存 高台内面まで施釉
135	2区	2層	青磁	皿	5	—	(2.5)	同安窯 口縁部のみ残存 厚く施釉
136	2区	2層	白磁	碗	5	底径(5.4)	(1.9)	高台部のみ残存
137	2区	2層	瓦器	椀	20	(14.8)	(4.8)	内面ミガキやや密
138	2区	3層	瓦器	椀	10	(1.3)	(4.0)	底部のみ残存 連結輪状暗文
139	2区	3層	白磁	碗	5	—	(3.1)	口縁部のみ残存
140	2区	3-2層	瓦器	椀	5	底径5.5	(1.8)	底部のみ残存 暗文
141	2区	3-2層	瓦器	椀	5	(13.9)	(3.6)	内面ミガキ簡略化 暗文
142	2区	3-2層	土師器	皿	15	(13.6)	3.0	口縁部ナデ
143	2区	4層	瓦器	椀	20	(14.3)	(4.5)	内外面ミガキやや密
144	2区	5層中層	土師器	皿	95	15.7	3.3~3.8	体部外面右上がりの指オサエ
145	2区	5層上層	瓦器	椀	40	(15.7)	3.8~4.3	55溝直下 和泉型 内面ミガキ粗
146	2区	5層上層	瓦器	皿	40	(9.0)	1.8	55溝直下 口縁部ナデ ジグザグ状暗文
147	2区	5層上層	瓦器	皿	20	(9.0)	1.6	55溝直下 口縁部ナデ 十字状暗文
148	2区	5層下層	土師器	皿	25	(8.3)	1.6	44溝最下層 口縁部ナデ
149	2区	5層下層	瓦器	椀	15	(13.9)	(4.5)	44溝最下層 内面ミガキ粗やや密
150	2区	5層下層	瓦器	椀	10	(15.1)	(3.9)	44溝最下層 内面ミガキやや密
151	2区	4層最下層	瓦器	羽釜	5	(23.5)	(12.4)	内面ハケ 体部外面指オサエ 頸部内傾 体部内湾
152	2区	2層	土師器	羽釜	5	(23.2)	(9.7)	口縁部ナデ
153	2区	2層	瓦器	羽釜	5	(30.0)	(8.2)	内面ハケ・ナデ 頸部強く内湾 内面横位ハケ
158	5区	北端部1層	青磁	碗	5	—	(3.6)	口縁部のみ残存 細線蓮弁紋
159	5区	北端部1層	青磁	碗	5	—	(3.9)	体部下半のみ残存
160	5区	北端部1層	青白磁	合子・蓋	35	(6.3)	1.6	口縁部内面露胎
161	5区	北端部1b層	白磁	合子・身	30	(8.2)	2.1	底部外面強く窪む 口縁部内面・体部外面下半露胎
162	5区	北端部1b層	土師器	皿	100	7.2	1.6	口縁部ナデ
163	5区	北端部1b層	土師器	皿	60	7.7	1.4~1.7	口縁部ナデ
164	5区	北端部1b層	土師器	皿	100	7.8	1.0~1.5	口縁部ナデ
165	5区	北端部1b層	土師器	皿	100	7.7	1.5~1.6	口縁部ナデ
166	5区	北端部1b層	土師器	皿	90	8.0	1.5	口縁部ナデ
167	5区	北端部1b層	土師器	皿	100	9.0	1.2~1.3	口縁部ナデ 底部を押し窪める
168	5区	北端部1b層	土師器	皿	60	10.6	2.5~3.0	口縁部丁寧なナデ
169	5区	北端部1b層	土師器	皿	80	14.3	2.9	口縁部ナデ
170	5区	北端部1b層	瓦器	足釜	60	4.8	5.4~5.5	ミニチュア 内面丁寧なナデ 脚部欠損
171	5区	北端部1b層	瓦器	皿	80	9.0	1.7	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
172	5区	北端部1b層	瓦器	椀	30	(11.0)	3.9	内面螺旋状ミガキ簡略化
173	5区	北端部1b層	瓦器	椀	95	13.0	3.7~4.1	内面明瞭なハケ・ミガキ簡略化 連結輪状暗文
174	5区	北端部1b層	瓦器	椀	25	(9.8)	2.9	小型 口縁部丁寧なナデ・ミガキやや密
177	5区	北端部2層	瓦器	椀	5	(15.0)	(4.5)	内面ミガキやや密
178	5区	北端部2層	青磁	碗	5	—	(3.4)	口縁部のみ残存 薄く施釉 口縁部わずかに外反
179	5区	北端部3層	瓦器	椀	10	底径5.6	(1.6)	内面ハケ 連結輪状暗文
180	5区	中央1層	白磁	碗	5	15.0	(3.1)	口縁部のみ残存
181	5区	中央1層	白磁	碗	5	底径(5.9)	(2.7)	底部のみ残存
182	5区	中央1層	白磁	碗	10	底径(5.6)	(2.4)	底部のみ残存
183	5区	中央1層	陶器	皿	25	12.0	3.0	肥前焼 見込に砂目痕
184	5区	中央2層	白磁	碗	5	—	(4.3)	口縁部のみ残存 白磁IV類
185	5区	中央2層	瓦器	椀	20	(15.1)	(4.9)	内面ミガキ密
186	5区	中央2層下部	瓦器	椀	5	—	(1.7)	内面ハケ 連結輪状暗文
187	5区	中央3層	瓦器	皿	45	(9.2)	1.7	口縁部ナデ 十字状暗文

188	5区	中央3層	瓦器	椀	5	(13.8)	(3.9)	内面ミガキ密
189	5区	中央3層	青磁	碗	5	(14.8)	(5.0)	口縁部のみ残存 口縁端部外反 厚く施釉
190	5区	中央4a層	土師器	皿	10	(13.6)	2.2	体部緩やかに立ち上がる
191	5区	中央4a層	瓦器	椀	10	底径5.5	(1.4)	底部のみ残存 格子状暗文
192	5区	南端部1層	青白磁	合子・蓋	25	(6.0)	1.3	口縁部のみ残存 口壳
193	5区	南端部1層	瓦器	皿	100	8.1	1.1~1.6	口縁部外面強いナデ 十字状暗文
195	5区	南端部1b層	白磁	碗	5	(14.8)	(2.4)	口縁部のみ残存 白磁IV類
196	5区	南端部1b層	白磁	碗	5	(15.0)	(3.7)	口縁部のみ残存 白磁IV類
197	5区	南端部2b層	白磁	碗	5	(14.2)	(2.0)	口縁部のみ残存
198	5区	南端部2b層	陶器	山茶碗	5	底径7.4	(2.2)	胎土の砂粒少ない 底部外面糸切跡・墨書「僧」
199	5区	南端部2b層	土師器	皿	30	13.9	2.4	口縁部ナデ
200	5区	南端部2b層	瓦器	椀	10	(13.0)	4.1	内面ミガキ簡略化
201	5区	南端部2b層	白磁	碗	5	(15.0)	(2.1)	口縁部のみ残存 口縁部外反
202	5区	南端部2b層	白磁	碗	5	底径6.0	(2.0)	底部のみ残存 白磁V類
203	5区	南端部2b層	白磁	碗	10	底径(6.0)	(2.8)	底部のみ残存 高台外面まで施釉 白磁IV類
204	5区	南端部4a層	須恵器	蓋	5	(20.0)	2.1	外面ナデ
205	5区	南端部2b層	須恵器	捏鉢	5	(24.1)	(5.8)	内面ナデ 口縁端部面をもつ
206	5区	南端部2b層	須恵器	捏鉢	10	(30.8)	(10.6)	内面ナデ 口縁端部面をもつ
214	8区	北半1層	土師器	皿	100	8.0	1.4	口縁部ナデ
215	8区	北半1層	瓦器	椀	80	13.1	3.6	口縁部ナデ・ミガキやや簡略化 暗文
216	8区	北半2層上面	土師器	皿	85	12.6	2.2	口縁部ナデ
217	8区	北半2層	瓦器	椀	45	(14.1)	3.8	内面ミガキやや簡略化 暗文
218	8区	北半2層上面	土師器	皿	30	(11.8)	2.0	口縁部ナデ 連結輪状暗文
219	8区	北半2層	瓦器	椀	30	(15.3)	4.9	内面ハケ・ミガキ簡略化 暗文
220	8区	北半2層	白磁	皿	5	底径(3.5)	(2.0)	底部下半露胎
221	8区	北半5層	土師器	皿	60	(8.3)	1.4	口縁部ナデ
222	8区	北半5層	土師器	皿	60	7.9	1.4~1.6	口縁部ナデ
223	8区	北半5層	土師器	皿	75	12.4	1.7~1.9	体部下半指オサエ
225	8区	北半5層	瓦器	椀	15	(10.3)	(3.0)	内面ハケ・ミガキ簡略化
226	8区	北半5層	瓦器	椀	10	(10.6)	(3.1)	和泉型 内面ミガキ簡略化 高台消失
227	8区	北半5層	須恵器	捏鉢	20	(28.3)	9.1	内外面強いナデ
230	8区	南半3層	瓦器	皿	45	(8.7)	1.8	口縁部ナデ
231	8区	南半3層	青磁	碗	5	底径(7.0)	(2.5)	底部のみ残存 畳付まで厚く施釉 劃花紋
232	3区	2層	黒色土器	椀	30	(14.6)	5.4	両黒(B類) 内面ミガキ密
233	3区	2層	白磁	碗	5	底径(5.6)	(2.4)	高台のみ残存 白磁IV類
234	3区	南高まり2層	土師器	皿	20	(13.8)	(2.6)	口縁部ナデ 体部緩やかに立ち上がる 口縁端部外反
235	3区	南高まり2層	土師器	皿	10	(14.4)	2.5	内外面磨減 底部指オサエ
236	3区	南高まり2層	瓦器	椀	20	(15.4)	6.8	内面ミガキ隙間無く密
237	3区	南高まり2層	瓦器	椀	20	底径(5.7)	(2.7)	内面ミガキ密 細い格子状暗文
238	3区	南高まり2層	瓦器	椀	30	(14.8)	6.0	内面ミガキ隙間無く密
239	3区	中央高まり2層	白磁	碗	5	—	(4.1)	口縁部のみ残存 白磁IV類
240	3区	北高まり3層	白磁	碗	5	—	(3.0)	口縁部のみ残存 外面浅い沈線を廻らす 口縁部短く外反
241	3区	3層	瓦器	椀	5	底径5.0	(2.2)	底部のみ残存 明瞭な格子状暗文
242	3区	4層	土師器	皿	70	(10.3)	1.5	ての字状口縁部
243	3区	4層	瓦器	椀	20	(13.8)	6.0	和泉型 内外面に太いミガキ ハの字状の高台
244	3区	8層上面	黒色土器	椀	5	底径(7.8)	(2.3)	内黒(A類) 内面ミガキ密
245	3区	8層	須恵器	坏身	15	(9.7)	4.1	底部ヘラケズリ
246	3区	8層	土師器	甕	10	(26.1)	(7.3)	口縁端部上下にやや拡張 体部外面縦方向のハケ
255	1区	20土坑(下層)	須恵器	捏鉢	10	(28.6)	(6.0)	口縁部やや肥厚
256	1区	20土坑	須恵器	捏鉢	10	底径(8.8)	(4.0)	底部外面ハケ
257	1区	20土坑(上層)	瓦器	火鉢	10	(28.2)	(5.8)	口縁部外面に折り返す 煤附着 258と同一個体
258	1区	20土坑(下層)	瓦器	火鉢	10	(28.2)	(5.8)	体部下半ハケ・有脚 257と同一個体
259	1区	20土坑(上層)	青磁	碗	5	—	(3.0)	龍泉窯 口縁部のみ残存
260	1区	20土坑	瓦器	火鉢	5	—	(5.5)	口縁部内湾 菊花紋
261	1区	18溝(下層)	陶器	播鉢	5	底径(9.2)	(3.9)	底部のみ残存
262	1区	18溝(下層)	瓦器	火鉢	10	—	(8.6)	獣脚 両側張り出し部分に円形の掘り込み 風炉のものか

263	1区	18溝	土師器	羽釜	10	(26.6)	(7.1)	頸部短く直立 鏝部下半に強いナデ
265	1区	22土坑	土師器	皿	75	7.6	1.1~1.6	底部中央に焼成前2箇所穿孔
266	1区	22土坑	土師器	皿	50	7.8	1.0~1.7	内面に数条の沈線 内外面煤付着
267	1区	22土坑	瓦器	椀	25	(12.8)	(2.8)	口縁部ナデ・ミガキ簡略化
268	1区	22土坑+35土坑	瓦器	椀	90	10.3	3.0	外面ナデ下端部に指オサエによる稜線 ジグザグ状暗文
269	1区	23土坑(上層)	土師器	皿	95	8.1	1.3~1.6	内外面磨減 全体に歪む
270	1区	23土坑(上層)	土師器	皿	30	(8.4)	(0.8)	体部内面時計回りナデ
271	1区	23土坑(上層)	土師器	皿	100	8.9	1.1~1.3	口縁部ナデ
272	1区	23土坑(上層)	土師器	皿	30	(8.6)	1.0	口縁部ナデ
273	1区	23土坑(上層)	瓦器	椀	100	13.3	4.0~4.6	内面ミガキ簡略化 高台貼付粗雑
274	1区	23土坑	瓦器	椀	50	11.1	3.3~3.9	内面ミガキ簡略化 高台貼付粗雑
275	1区	24土坑	白磁	碗	10	底径(4.8)	(3.7)	底部のみ残存 白磁V類
276	1区	24土坑	瓦器	火鉢	10	(43.0)	(11.3)	体直線的に開く 内面ハケ
277	1区	35土坑(下層)	土師器	皿	100	7.5	1.1~1.2	体部内面時計回りナデ
278	1区	35土坑	土師器	皿	95	8.4	1.1~1.5	体部内面時計回りナデ
279	1区	35土坑(下層)	土師器	皿	90	7.9	0.9~1.2	体部内面時計回りナデ
280	1区	35土坑(下層)	土師器	皿	90	11.5	1.7~1.8	外面左回りナデ
281	1区	35土坑(上層)	白磁	皿	5	(11.4)	(2.3)	口縁部のみ残存 口禿
282	1区	35土坑(上層)	青磁	碗	50	(16.0)	6.6	龍泉窯 軸厚め 高台外面まで施釉
283	1区	35土坑(上層)	青磁	皿	10	底径(4.7)	(1.2)	同安窯 底部のみ残存
284	1区	35土坑	瓦器	椀	75	10.2	3.1~3.8	内面ミガキ簡略化
285	1区	35土坑	瓦器	椀	100	10.4	2.8~3.3	内面ミガキ簡略化 口縁部歪
286	1区	35土坑(下層)	瓦器	椀	45	(11.5)	3.2	内面ミガキ簡略化
287	1区	35土坑	瓦器	椀	95	11.1	3.4~3.6	内面ミガキ簡略化 外面弱い指オサエ
288	1区	35土坑	瓦器	羽釜	20	(24.6)	(11.8)	外面全体に煤付着 内面ハケ
289	1区	35土坑	瓦器	羽釜	10	(25.4)	(7.0)	内面ハケ・煤付着 頸部わずかに内湾 外面指オサエ
290	1区	35土坑(下層)	瓦器	羽釜	10	(24.4)	(12.3)	口縁部ナデ 体部煤付着
291	1区	35土坑	瓦器	播鉢	10	底径(8.2)	(8.2)	外面粗い指オサエ・ハケ
292	1区	35土坑(上層)	須恵器	捏鉢	20	(29.0)	9.7	底部に焼成後穿孔 体部直線的
293	1区	35土坑(上層)	須恵器	甕	15	底径(33.6)	(14.8)	底部外面明瞭な指オサエ・ハケ
294	4区	380ビット	土師器	皿	50	(8.0)	1.4	口縁部ナデ
295	4区	380ビット	土師器	皿	40	(8.0)	1.5	口縁部ナデ
296	4区	429ビット	土師器	皿	95	8.3	1.0~1.2	口縁部ナデ
297	4区	422ビット	土師器	皿	15	(7.9)	1.6	口縁部ナデ
298	4区	422ビット	土師器	皿	15	(8.0)	1.5	口縁部ナデ
299	4区	436ビット	土師器	皿	45	(8.2)	1.0	口縁部ナデ
300	4区	444ビット	土師器	皿	85	7.9	1.2	口縁部ナデ
301	4区	415ビット	土師器	皿	50	12.7	2.3~2.5	外面2段ナデ 底部指オサエ
302	4区	422ビット	瓦器	椀	5	—	(2.7)	内面ミガキやや簡略化
303	4区	420ビット	瓦器	椀	10	(13.6)	(3.4)	体部外面に明瞭な指オサエ 内面ミガキ簡略化
304	4区	427ビット	瓦器	椀	5	(13.0)	(3.9)	内面ミガキ簡略化 やや胎土粗い
305	4区	429ビット	瓦器	羽釜	5	(26.3)	(4.9)	頸部内湾 鏝断面三角形
308	4区	402井戸	土師器	皿	90	8.0	1.1~1.3	体部内面時計回りナデ 口縁部短く外反
309	4区	402井戸	瓦器	椀	5	—	(3.2)	内面ハケ・粗いミガキ 器壁やや厚い
310	4区	404井戸	土師器	皿	90	7.7	1.1	底部中央押し窪める
311	4区	404井戸	土師器	皿	100	7.6	1.0~1.1	外面左回りナデ
312	4区	404井戸	土師器	皿	80	7.6	1.4~1.5	内面ナデ 底部中央押し窪める
313	4区	404井戸	土師器	皿	95	8.4	1.3~1.5	内面ナデ
314	4区	404井戸	須恵器	捏鉢	5	(25.4)	(3.0)	口縁部のみ残存
315	4区	404井戸	瓦器	椀	60	(10.2)	3.2	内面ミガキ簡略化 暗文
316	4区	404井戸	瓦器	椀	30	(10.2)	3.4	内面ミガキ簡略化 焼成軟
317	4区	404井戸	瓦器	椀	45	12.4	3.8~4.8	内面ハケ・ミガキ簡略化 暗文
318	4区	404井戸	瓦器	椀	50	12.9	3.3~4.0	内面ミガキ簡略化 楕円状暗文
319	4区	407井戸	土師器	皿	95	8.0	1.1~1.3	体部内面時計回りナデ 底部指オサエ
320	4区	407井戸	土師器	皿	95	8.1	1.6	体部内面時計回りナデ
321	4区	407井戸	土師器	皿	100	8.5	1.5~1.6	体部内面時計回りナデ

322	4区	407井戸	土師器	皿	20	(16.2)	1.9	口縁部外面強いナデ
323	4区	407井戸	土師器	皿	30	(7.0)	0.8	口縁部内側に折り曲げる コースター型
324	4区	407井戸	土師器	皿	70	8.6	1.3	体部内面時計回りナデ 底部中央に押し窪める
325	4区	407井戸	瓦器	椀	100	13.6	3.8~4.2	内面ハケ・ミガキ簡略化 連結輪状暗文
326	4区	407井戸	瓦器	椀	25	(13.3)	4.3	口縁部ミガキ密 暗文
327	4区	406井戸	土師器	皿	60	7.7	1.0~1.3	体部内面時計回りナデ 口縁部外面弱いナデ
328	4区	406井戸	土師器	皿	100	7.7	0.9~1.4	体部内面時計回りナデ
329	4区	406井戸	白磁	皿	5	(9.4)	(2.5)	口縁部のみ残存 口禿
330	4区	406井戸	瓦器	椀	5	(13.6)	(3.3)	内面ミガキ簡略化
331	4区	406井戸	瓦器	羽釜	5	(28.4)	(6.5)	内面ハケ・粘土接合痕 鏝下方にのび 端面をもつ
346	4区	413井戸	土師器	皿	25	(8.1)	0.8	口縁部ナデ
347	4区	413井戸	土師器	皿	100	12.3	3.0~3.1	体部外面下半までナデ
348	4区	413井戸	瓦器	椀	95	11.9	3.2~3.4	内面煤付着 暗文
349	4区	413井戸	瓦器	椀	30	12.8	3.4	体部外面指オサエ明瞭
350	4区	413井戸	瓦器	椀	95	12.3	3.8	内面全体にハケ
351	4区	413井戸	瓦器	足釜	15	(16.4)	(5.4)	内面ナデ 外面煤付着
352	4区	413井戸	瓦器	羽釜	45	(25.6)	(27.0)	内面指オサエ・ハケ 口縁部短く内傾
356	4区	400土坑	土師器	皿	95	7.6	1.4	体部内面反時計回りナデ
357	4区	400土坑	土師器	皿	30	(7.9)	1.3~1.6	灯明皿 内面全体に煤付着
358	4区	400土坑	土師器	皿	75	8.2	1.1~1.6	底部粗い指オサエ
359	4区	400土坑	土師器	皿	100	8.1	1.5~1.8	口縁部ナデ やや摩滅
360	4区	400土坑	瓦器	椀	25	(11.8)	(3.4)	内面ミガキ簡略化 渦巻状暗文
361	4区	400土坑	瓦器	椀	95	11.8	3.7~3.8	体部明瞭な指オサエ 内面ミガキやや簡略化 楕円状暗文
362	4区	400土坑	瓦器	椀	95	10.9	3.1~3.2	内面渦巻状ミガキ簡略化
363	4区	400土坑	瓦器	椀	95	11.7	3.2~3.3	内面ミガキ簡略化 暗文 全体歪む
364	4区	400土坑	瓦器	椀	25	(12.0)	(3.6)	内面ミガキ簡略化 連結輪状暗文
365	4区	400土坑	瓦器	椀	60	12.5	4.6~4.9	内面底部明瞭なハケ ミガキ簡略化 連結輪状暗文
366	4区	400土坑	青磁	皿	45	(10.6)	2.2	同安窯
367	4区	400土坑	青磁	碗	15	(18.0)	(6.0)	薄く施釉 口縁部僅かに外反
368	4区	400土坑	須恵器	捏鉢	50	底径8.1	(4.4)	底部外面糸切痕
369	4区	400土坑	瓦器	足釜	10	14.7	(11.1)	外面全体煤付着 内面ナデ
370	4区	400土坑	瓦器	足釜	5	長さ(18.7)	—	脚部のみ残存
371	4区	400土坑	瓦器	足釜	5	高さ(15.6)	—	脚部のみ残存
372	4区	400土坑	瓦器	甕	10	25.0	(6.2)	体部横位のタタキ
373	4区	400土坑	瓦器	甕	5	(32.8)	(4.9)	頸部接合痕 口縁部強く外反
374	4区	400土坑	瓦器	鍋	5	(34.6)	(5.7)	口縁部内面ナデ 口縁部短く直立 端部浅く窪む
375	4区	400土坑	瓦器	羽釜	5	(29.6)	(9.0)	体部外面粗雑なナデ 内面ナデ
376	4区	376溝	土師器	皿	40	(8.0)	(1.2)	底部中央押し窪める 口縁部短く開く
377	4区	376溝	瓦器	椀	10	(13.8)	(3.6)	内面ハケ・ミガキ簡略化
378	4区	376溝	瓦器	椀	10	底径4.6	(1.2)	底部のみ残存 連結輪状暗文
379	4区	359土坑	土師器	皿	20	(8.6)	(1.4)	口縁部ナデ
380	4区	359土坑	土師器	皿	20	(9.0)	1.5	口縁部ナデ
381	4区	459土坑	土師器	皿	45	(8.2)	(1.0)	口縁部短く立ち上がる
382	4区	360土坑	土師器	皿	100	8.2	1.6~1.7	口縁部外面左回りナデ 口縁部緩やかに外反
383	4区	360土坑	土師器	皿	95	11.3	1.9~2.4	体部外面指オサエ 口縁部緩やかに外反
384	4区	409土坑	土師器	皿	95	7.8	1.3	体部内面時計回りナデ
385	4区	409土坑	瓦器	椀	15	(12.8)	3.8	内面ミガキやや簡略化 暗文
386	4区	411土坑	土師器	皿	75	8.3	1.2~1.3	口縁部ナデ
387	4区	411土坑	土師器	皿	95	8.6	1.1~1.2	口縁部ナデ
388	4区	411土坑	土師器	皿	100	12.7	1.9~2.8	口縁部ナデ
389	4区	411土坑	土師器	皿	25	(13.0)	2.1	口縁部外面強いナデ
390	4区	411土坑	土師器	皿	80	13.3	2.3	口縁部外面2段ナデ 底部内外面指オサエ
391	4区	401土坑	瓦器	椀	80	13.7	4.0~4.3	内面明瞭なハケ・ミガキやや簡略化 連結輪状暗文
392	4区	401土坑	瓦器	皿	95	7.8	1.3~1.8	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
393	4区	401土坑	土師器	皿	60	8.1	1.2~1.5	底部中央で押し窪める 口縁部短く立ち上がる
394	4区	401土坑	土師器	皿	95	8.5	1.0~1.3	底部中央で押し窪める 口縁部短く立ち上がる

395	4区	401土坑	土師器	皿	100	9.1	1.5~1.8	灯明皿 口縁端部から内面にかけて煤付着
396	4区	401土坑	瓦器	椀	20	13.6	4.5	内面ハケ・ミガキやや簡略化 連結輪状暗文
397	4区	359土坑	土師器	羽釜	35	(23.8)	(24.1)	体部内面ハケ外面上縦・下右上がりハケ 口縁部短く内傾 体部球状 外面下半煤付着
402	7区	782溝(上層)	土師器	皿	60	7.6	1.5~2.1	灯明皿 口縁端部に煤付着
403	7区	782溝(上層)	土師器	皿	100	8.0	1.1	体部内面時計回りナデ
404	7区	782溝(上層)	土師器	皿	30	(11.0)	2.4	口縁部ナデ
405	7区	782溝(上層)	土師器	皿	20	(11.8)	2.5	口縁部ナデ
406	7区	782溝(上層)	瓦器	椀	40	(14.3)	4.9	内面ミガキやや密
407	7区	782溝(上層)	青磁	碗	5	底径(4.7)	(2.7)	畳付から高台内まで施釉 見込みに紋様
408	7区	782溝(上層)	青磁	碗	10	底径3.7	(2.3)	畳付から高台内まで施釉 見込みに紋様
409	7区	782溝(上層)	白磁	碗	5	(14.4)	(3.6)	口縁部のみ残存 白磁IV類
410	7区	782溝(上層)	青磁	碗	5	底径4.3	(3.0)	畳付から高台内まで施釉 見込みに紋様
411	7区	782溝(上層)	陶器	天目茶碗	5	(12.2)	(5.1)	瀬戸美濃産 高台部欠損
412	7区	782溝(上層)	瓦器	火鉢	5	—	(8.1)	内面ナデ 口縁部直立端部に面をもつ 四菱紋
413	7区	782溝(上層)	瓦器	火鉢	5	—	(7.0)	口縁内側に張り出す 端部に穿孔 突帯2条 スタンプ文
414	7区	782溝(上層)	陶器	壺	5	—	(8.6)	備前焼 口縁部残存
415	7区	782溝(上層)	瓦器	播鉢	5	(22.2)	(6.7)	片口 口縁端部強く外反 体部緩やかに内湾
416	7区	782溝(上層)	瓦器	播鉢	5	(25.4)	(6.9)	口縁端部外反 体部外面ハケ
417	7区	782溝(上層)	瓦器	播鉢	15	(29.1)	(10.3)	口縁端部やや外反 体部外面ハケ
418	7区	782溝(上層)	陶器	播鉢	5	(28.0)	(7.7)	備前焼
419	7区	782溝(上層)	瓦器	火鉢	5	(19.6)	(6.2)	口縁部直立 端部丸くおさめる 菊花紋
420	7区	782溝(上層)	瓦器	火鉢	5	(32.2)	(5.5)	口縁部直立 端部に面 突帯2条
421	7区	782溝(上層)	瓦器	火鉢	5	(40.6)	(4.6)	口縁部強く内湾 突帯2条
422	7区	782溝(上層)	瓦器	火鉢	5	(34.0)	(3.6)	口縁部ナデ 口縁部強く内湾 唐草紋
428	7区	782溝(下層)	陶器	壺	15	(11.6)	(10.3)	備前焼 口縁部外反 体部波状紋
429	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	—	(3.9)	口縁部直立 端部に面をもつ 唐草紋
430	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	—	(4.0)	口縁部直立 端部に面をもつ 梅花紋
431	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	—	(7.8)	口縁部直立 端部に面をもつ 菊花紋
432	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	—	(6.6)	口縁部直立 端部丸くおわる 内面縦方向ミガキ 菊花紋
433	7区	782溝(下層)	瓦器	風炉	5	—	(5.3)	口縁部強く内湾 四菱紋
434	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	—	(5.7)	獸脚のみ残存
435	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	—	(8.6)	底部残存 突帯1条
436	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	—	(9.3)	底部残存 突帯1条
437	7区	782溝(下層)	陶器	折縁皿	60	8.7	1.8	瀬戸美濃産 底部糸切痕
438	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	底径(34.4)	(6.3)	底部残存 突帯1条
439	7区	782溝(下層)	瓦器	火鉢	5	底径(40.8)	(5.2)	底部残存 突帯1条 有脚
475	7区	792ピット	土師器	皿	100	7.9	1.8~1.9	外面明瞭な指オサエ明瞭
476	7区	821ピット	土師器	皿	100	8.1	1.8~2.3	口縁部ナデ
477	7区	1041ピット	土師器	皿	60	8.4	1.4~1.6	口縁部ナデ
478	7区	947ピット	瓦器	椀	5	—	(4.7)	口縁部ナデ・ミガキやや密
479	7区	1068ピット	瓦器	椀	5	底径(5.2)	1.7	格子状暗文
480	7区	948ピット	瓦器	皿	10	(7.7)	1.3	口縁部ナデ
481	7区	811ピット	瓦器	椀	5	(15.6)	(3.7)	内面細ミガキ密
484	7区	787井戸	土師器	羽釜	40	(28.2)	(19.5)	抜き取り内 体部外面縦方向明瞭なケズリ 内面ナデ 口外面指オサエ・ナデ 煤付着 口縁端部外に折り曲げる
485	7区	787井戸	瓦器	羽釜	10	(27.9)	(11.9)	抜き取り内 内外面磨減著しい
486	7区	787井戸	瓦器	羽釜	10	(33.1)	(9.7)	1番上抜取分 口縁部内外ナデ
487	7区	787井戸	土師器	羽釜	5	(29.8)	(7.9)	1段目外側 頸部指オサエ 口縁端部外に折り曲げる
488	7区	787井戸	土師器	羽釜	45	28.5	(21.8)	1段目 体部外面ケズリ・ナデ 口縁部ナデ 外面煤付着 体部球状 口縁部内湾
489	7区	787井戸	瓦器	羽釜	60	28.7	(23.0)	2段目 口縁部内外ナデ 体部指オサエ 外面のみ煤付着
490	7区	787井戸	瓦器	羽釜	60	29.0	(18.5)	3段目 頸部外面指オサエ 体部内面横位ハケ 内外面煤付着
491	7区	787井戸	瓦器	羽釜	15	28.3	(11.5)	4段目 内面不定方向ナデ 口縁部外面の明瞭な段差
492	7区	787井戸	瓦器	羽釜	60	30.0	(22.2)	5段目 頸部粘土接合痕 体部内面ハケ・ナデ 外面ケズリ・ナデ
493	7区	787井戸	瓦器	羽釜	60	29.6	(23.0)	6段目 内面ハケ・ナデ 鑿部打ち欠く 外面指オサエ・煤付着
494	7区	787井戸	瓦器	羽釜	50	27.7	(19.0)	7段目 内外面煤付着 内面丁寧なナデ
495	7区	787井戸	瓦器	羽釜	55	26.2	(20.2)	8段目 内面ハケ・ナデ 外面指オサエ 内外面煤付着
496	7区	787井戸	土師器	皿	40	(7.1)	1.6	5段目内 口縁部ナデ 底部指オサエ
497	7区	787井戸	土師器	皿	60	(10.5)	1.9	3段目内 口縁部ナデ 底部指オサエ

498	7区	787井戸	瓦器	椀	90	6.7	2.0~2.4	8段目内 ミニチュア 口縁部外反 内外面丁寧なナデ
499	7区	787井戸	瓦器	椀	55	6.7	2.0~2.2	曲物内 ミニチュア 口縁部外反 内外面丁寧なナデ
500	7区	787井戸	瓦器	椀	95	11.5	2.9~3.8	掘方 渦巻状ミガキ
502	7区	789井戸(堀方上部)	土師器	皿	90	8.2	1.8	口縁部ナデ
503	7区	789井戸(枠内)	土師器	皿	100	7.6	1.5~1.9	口縁部ナデ
504	7区	789井戸(枠内)	土師器	皿	45	(10.0)	2.8	口縁部ナデ 体部指オサエ
505	7区	789井戸(枠内)	瓦器	火鉢	5	—	(7.4)	2条突帯 花菱紋
506	7区	789井戸(枠内)	瓦器	仏花瓶	10	(11.0)	(7.5)	外面・口縁部内面に隙間無く密なミガキ 口縁部外湾
507	7区	789井戸(枠内)	陶器	播鉢	5	(27.4)	7.6	備前焼 口縁部強く拡張
509	7区	920井戸(上層)	青磁	碗	5	—	(2.2)	龍泉窯 口縁部のみ残存
510	7区	920井戸	青磁	碗	5	底径(4.5)	(4.2)	底部のみ残存 黄灰白色の釉薬
511	7区	920井戸	瓦器	鉢	5	底径(47.4)	(8.4)	内面指オサエ 平底 体部直線的
515	7区	765土坑	土師器	皿	25	(7.6)	1.3	口縁部ナデ
516	7区	763土坑	瓦器	椀	10	(11.8)	(2.9)	内面ミガキ簡略化
517	7区	762土坑	土師器	皿	100	7.9	1.7~2.1	口縁部ナデ
518	7区	762土坑	土師器	皿	95	8.5	1.6~1.7	体部粗い指オサエ
519	7区	786土坑	土師器	皿	45	(8.0)	2.1	口縁部ナデ
520	7区	786土坑	土師器	皿	30	(14.0)	2.1	口縁部ナデ 口縁部緩やかに外反
521	7区	786土坑	土師器	皿	45	(14.2)	2.0	外面段明瞭 口縁部緩やかに外反
522	7区	785土坑	瓦器	椀	15	(12.7)	3.2	内面明瞭なハケ・ミガキ粗
523	7区	777土坑	土師器	皿	25	(12.7)	1.8	灯明皿 口縁部内外ナデ 底部内面煤付着
524	7区	777土坑	土師器	皿	15	(14.8)	(3.1)	口縁部下半に明瞭な指オサエ
525	7区	777土坑	青磁	碗	5	(14.4)	(3.3)	龍泉窯 口縁部のみ残存 端部外反
526	7区	777土坑	瓦器	播鉢	15	(31.0)	(11.2)	体部外面ケズリ 内面播目使用痕
527	7区	762土坑	瓦器	羽釜	20	(26.4)	(20.1)	口縁部直立 体部外面上接合・指オサエ痕 下横位ケズリ
528	7区	786土坑	瓦器	羽釜	5	(28.4)	(7.0)	内面ナデ 鋳短く面をもつ 頸部直立
531	7区	790土坑	土師器	皿	100	7.4	1.2~1.5	内面右回りのナデ
532	7区	790土坑	土師器	皿	100	7.8	1.0~1.4	内面右回りのナデ 底部中央押し窪める
533	7区	790土坑	土師器	皿	100	8.3	1.0~1.1	内面右回りのナデ
534	7区	790土坑	土師器	皿	95	11.7	1.7~1.9	口縁部ナデ 口縁部やや屈曲
535	7区	790土坑	土師器	皿	95	11.0	2.0~2.4	口縁部ナデ 口縁部やや屈曲
536	7区	790土坑	瓦器	椀	95	11.6	3.1~3.6	体部外面細かな指オサエ 内面渦巻状ミガキ簡略化
537	7区	790土坑	瓦器	椀	95	11.7	3.6~3.7	内面渦巻状ミガキ簡略化
545	7区	854土坑	土師器	皿	95	8.5	1.6~1.7	底部中央押し窪める 口縁部外面に沈線状の凹み
546	7区	854土坑	土師器	皿	95	8.8	1.2~1.7	口縁部ナデ
547	7区	854土坑	土師器	皿	100	9.0	1.4~1.5	口縁部ナデ 底部やや窪む
548	7区	854土坑	土師器	皿	100	8.6	1.4~1.7	口縁部ナデ 底部中央押し窪める
549	7区	854土坑	土師器	皿	100	9.1	1.5~1.8	外面明瞭なケズリ状の段を施す 底部中央やや押し窪める
550	7区	854土坑	土師器	皿	100	9.2	1.5~1.8	外面明瞭なケズリ状の段を施す
551	7区	854土坑	土師器	皿	80	14.1	2.6~2.8	口縁部外面2段ナデ
552	7区	854土坑	土師器	皿	70	13.3	2.1~2.8	口縁部ナデ
553	7区	854土坑	土師器	皿	95	13.7	2.6~3.1	内面左回りのナデ
554	7区	854土坑	白磁	碗	5	(15.2)	(4.5)	口縁部のみ残存 白磁IV類
555	7区	854土坑	須恵器	捏鉢	5	(30.2)	(8.7)	口縁部ナデ 口縁部直線的にのびる
556	7区	854土坑	土師器	鍋	10	(29.2)	(11.5)	体部丸味をもつ 口縁部外反 内面明瞭ハケ 外面指オサエ・ハケ 煤付着
557	7区	854土坑	土師器	鍋	60	33.5	(12.9)	体部丸味をもつ 口縁部外反 内面明瞭ハケ 外面指オサエ・ハケ 煤付着
558	7区	854土坑	土師器	竈	30	31.0(上端幅)	26.9	幅35.9(奥行) 内面横方向のハケ 外面縦方向のハケ 内面全体煤付着
559	7区	854土坑	瓦器	皿	90	9.1	1.6~1.7	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
560	7区	854土坑	瓦器	皿	45	(9.4)	1.7	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
561	7区	854土坑	瓦器	椀	90	14.1	5.1	内面ミガキやや密 連結輪状暗文
562	7区	854土坑	瓦器	椀	95	15.1	4.6~5.5	内面ミガキやや密 渦巻状暗文
563	7区	854土坑	瓦器	椀	95	14.8	4.9~5.3	内面ハケ・ミガキやや密 連結輪状暗文
564	7区	854土坑	瓦器	椀	95	14.9	4.5~5.9	内面ハケ・ミガキやや密 連結輪状暗文
565	7区	854土坑	土師器	羽釜	40	(22.8)	(17.2)	大和型 体部球状口縁部内側に巻き込む 頸部明瞭な接合痕 底部煤付着

566	7区	854土坑	土師器	羽釜	60	24.9	24.3	内面ナデ 外面ナデ・ケズリ 煤付着 口縁部短く内湾 体部下半に最大径をもつ
569	7区	923土坑	土師器	皿	50	8.5	1.5~1.8	底部内面同一方向のナデ
570	7区	923土坑	土師器	皿	25	(12.6)	1.7	口縁部ナデ
571	7区	923土坑	土師器	皿	25	(12.6)	2.2	口縁部ナデ
572	7区	923土坑	瓦器	椀	60	12.4	3.8~4.8	内面ミガキやや簡略化
573	7区	923土坑	瓦器	椀	95	13.4	3.4~4.1	内面ハケ・ミガキやや簡略化 暗文
574	7区	923土坑	瓦器	足釜	5	長さ(21.7)	—	脚部のみ残存
575	7区	934土坑	土師器	鍋	5	(25.7)	(7.0)	小型 口縁部内面ハケ 外面煤付着 口縁部くの字
576	7区	934土坑	瓦器	風炉	5	(33.6)	(4.8)	突帯2条 透かし孔が残る
578	7区	924土坑	土師器	皿	40	(11.8)	1.9	口縁部ナデ
579	7区	924土坑	土師器	皿	45	11.6	1.3~2.1	口縁部ナデ
580	7区	924土坑	瓦器	椀	30	(12.9)	3.3	内面ハケ・ミガキ簡略化 暗文 焼成軟
581	7区	924土坑	瓦器	椀	100	29.8	3.2~3.6	口縁端部に煤付着 内面ミガキ簡略化 楕円状暗文
582	7区	924土坑	瓦器	椀	95	12.9	3.7~4.4	内面ミガキ簡略化 楕円状暗文
583	7区	924土坑	青磁	碗	5	—	(2.5)	口縁部のみ残存
585	7区	924土坑	瓦器	羽釜	5	(19.3)	(5.3)	内面指オサエ・ハケ
586	7区	924土坑	土師器	羽釜	5	—	(7.6)	端部のみ残存 内面ナデ
587	7区	924土坑	瓦器	羽釜	15	(26.6)	(21.4)	内面ハケ・ナデ 外面ケズリ
588	7区	924土坑	瓦器	羽釜	40	(27.0)	(21.7)	内面ハケ 外面ケズリ・ナデ 煤付着
589	7区	924土坑	瓦器	羽釜	45	28.2	(25.3)	内面ハケ 外面指オサエ・下半に煤付着
590	7区	924土坑	陶器	甕	5	(52.8)	(10.3)	常滑焼 体部内面オサエ
591	7区	917土坑	土師器	皿	95	8.4	1.1~1.3	体部内面時計回りナデ 底部押し窪める 口縁部短く立ち上がる
592	7区	917土坑	土師器	皿	100	8.3	1.4~1.6	体部内面時計回りナデ 口縁部短く立ち上がる
593	7区	917土坑	瓦器	椀	15	(14.8)	(4.2)	口縁部ナデ・ミガキ
594	7区	933土坑	土師器	皿	75	11.4	2.5	口縁部外面に強いナデ
595	7区	933土坑	瓦器	皿	95	9.0	1.7~1.9	体部内面時計回りナデ 細いジグザグ状暗文
596	7区	933土坑	瓦器	椀	40	(11.4)	3.2	内面ミガキ簡略化 高台やや形骸化
597	7区	935土坑	土師器	皿	100	7.8	1.1~1.4	口縁部ナデ
598	7区	935土坑	土師器	皿	100	7.8	1.4~1.8	体部内面時計回りナデ
599	7区	935土坑	土師器	皿	40	(13.7)	(2.2)	口縁部ナデ
600	7区	935土坑	瓦器	皿	95	9.0	1.9~2.0	底部指オサエ 十字状暗文
601	7区	935土坑	瓦器	皿	100	9.3	1.7~1.8	口縁部右回りナデ ジグザグ状暗文
602	7区	935土坑	瓦器	椀	55	14.0	4.2~5.1	内面ミガキ 長楕円状暗文
603	7区	935土坑	瓦器	椀	70	14.3	4.2~4.9	和泉型 内面タミガキ 平行線状暗文
604	7区	935土坑	瓦器	椀	95	14.7	4.6	和泉型 内面タミガキ 平行線状暗文
605	7区	935土坑	青磁	椀	5	—	(3.4)	口縁部残存 内外面に楡描紋
606	7区	935土坑	須恵器	甕	25	—	(7.1)	外面タタキ 波状文
607	7区	935土坑	須恵器	捏鉢	5	(26.8)	(10.6)	内面ナデ 口縁部端部やや上下に拡張
608	7区	917土坑	土師器	羽釜	20	(25.2)	(7.4)	大和型 口縁部端部丸く巻き込む 内面指オサエ 外面全体煤付着
609	7区	939土坑	土師器	皿	95	9.2	1.7	体部内面時計回りナデ
610	7区	939土坑	土師器	皿	95	9.5	1.5	口縁部ナデ
611	7区	939土坑	土師器	皿	80	14.7	2.9	体部緩やかに内湾 内面ハケ 外面下半指オサエ
612	7区	939土坑	瓦器	椀	40	(14.6)	5.5	内面ミガキ密 連結輪状暗文
613	7区	939土坑	瓦器	皿	40	(10.2)	1.9	口縁部短く立ち上がり外反 内面横ミガキ ジグザグ状暗文
614	7区	1039土坑	土師器	皿	30	(8.2)	1.6	口縁部ナデ
615	7区	1039土坑	土師器	皿	45	(8.8)	1.8	口縁部ナデ
616	7区	1039土坑	瓦器	椀	45	(13.8)	5.1	内面ミガキやや密 連結輪状暗文
617	7区	938土坑	土師器	皿	100	6.5	1.8~1.9	体部内面時計回りナデ
618	7区	938土坑	土師器	皿	100	6.8	1.5~1.9	体部内面反時計回りナデ
619	7区	938土坑	土師器	皿	95	7.2	1.6~1.7	体部内面時計回りナデ
620	7区	938土坑	土師器	皿	45	(7.7)	(2.1)	灯明皿 内外全面に煤付着顕著
621	7区	938土坑	土師器	皿	100	7.6	0.7~1.4	体部内面時計回りナデ
622	7区	938土坑	土師器	皿	95	8.0	1.2~1.3	口縁部ナデ
623	7区	938土坑	土師器	皿	100	8.0	1.5~1.6	体部内面時計回りナデ
624	7区	938土坑	土師器	皿	100	8.6	1.8	体部内面時計回りナデ
625	7区	938土坑	土師器	皿	50	(8.2)	1.3~1.6	体部内面時計回りナデ 底部中央に焼成後穿孔

626	7区	938土坑	土師器	皿	40	(8.0)	1.5	口縁部ナデ 底部に焼成後穿孔
627	7区	938土坑	土師器	皿	100	11.2	2.0~2.1	体部内面時計回りナデ
628	7区	938土坑	土師器	皿	95	11.4	1.8~2.6	灯明皿 内面煤付着
629	7区	938土坑	土師器	皿	100	11.3	2.2	口縁部ナデ 口縁部緩やかに外反
630	7区	938土坑	土師器	皿	100	10.7	2.4~3.1	口縁部ナデ
631	7区	938土坑	土師器	皿	95	12.0	2.4~2.9	体部内面反時計回りナデ
632	7区	938土坑	土師器	皿	100	12.0	3.1~3.3	口縁部ナデ
633	7区	938土坑	土師器	皿	100	14.8	2.5~3.4	灯明皿 体部内面時計回りナデ 口縁部端部~内面に煤付着
634	7区	938土坑	瓦器	皿	80	8.8	1.6~1.7	口縁部ナデ 十字状暗文
635	7区	938土坑	瓦器	椀	100	7.0	2.3~2.4	ミニチュア 口縁部ナデ・内面下半にミガキ ジグザグ状暗文
636	7区	938土坑	瓦器	椀	95	10.3	3.2~3.4	内面ナデ 渦巻状ミガキ簡略化 高台消失
637	7区	938土坑	瓦器	椀	50	10.0	3.5~3.6	やや小型 内面ミガキ簡略化 渦巻状暗文 高台消失
638	7区	938土坑	瓦器	椀	95	12.5	4.6~4.9	内面ミガキ簡略化 楕円状暗文
639	7区	938土坑	瓦器	椀	100	8.6	3.0~3.9	内面ナデ・渦巻状ミガキ簡略化 高台消失
640	7区	938土坑	瓦器	椀	85	8.5	3.4~4.5	内面ナデ・渦巻状ミガキ簡略化 高台消失
641	7区	938土坑	瓦器	椀	90	9.1	3.5	内面ナデ・渦巻状ミガキ簡略化 高台消失
642	7区	938土坑	瓦器	椀	100	13.6	4.1~4.2	体部外面明瞭な指オサエ 内面ミガキ簡略化 暗文
643	7区	938土坑	瓦器	椀	95	15.1	4.8~5.3	内面ミガキ密 連結輪状暗文
644	7区	938土坑	瓦器	椀	95	11.8	3.0	和泉型 内面太ミガキ 炭で連続楕円形を描く 高台消失
645	7区	938土坑	瓦器	火鉢	5	—	(5.0)	平面輪花形 口縁部直立 菊花紋 内面縦方向ミガキ
646	7区	938土坑	白磁	水注	5	長さ(6.1)	幅2.6	取手のみ 外面沈線3条
647	7区	938土坑	白磁	碗	5	(14.9)	(4.0)	口縁部のみ残存 口縁部短く外反
648	7区	938土坑	青磁	碗	5	(15.0)	(4.5)	龍泉窯 内外磨滅
649	7区	938土坑	青磁	碗	10	底径4.7	(3.6)	底部残存 畳付まで施釉
650	7区	938土坑	瓦器	足釜	40	(19.0)	(14.3)	口縁部短く内傾 体部内面ナデ・ハケ 鏝上方焼成後穿孔 脚欠損部分に煤付着
651	7区	938土坑	土師器	甕	5	(28.1)	(4.4)	大和型 口縁部内外ナデ
652	7区	938土坑	土師器	羽釜	10	(27.0)	(16.3)	口縁部ナデ 体部指オサエ 鏝短く面を持つ
653	7区	938土坑	土師器	羽釜	5	(23.5)	(7.6)	大和型 口縁部端部に折り曲げる 鏝短い
654	7区	938土坑	瓦器	鍋	5	(29.2)	(9.0)	口縁部ナデ 体部指オサエ 頸部短い
655	7区	938土坑	須恵器	捏鉢	5	(29.6)	(9.8)	口縁部直線的
674	7区	940土坑	土師器	皿	60	12.8	2.3~2.5	口縁部ナデ
675	7区	940土坑	土師器	皿	75	14.2	2.6~2.8	口縁部ナデ
676	7区	940土坑	土師器	皿	95	15.5	2.6~2.9	口縁部ナデ
677	7区	940土坑	土師器	皿	85	18.1	2.0~2.2	口縁部ナデ 短く外反
678	7区	940土坑	土師器	皿	100	8.2	1.2~1.7	体部内面時計回りナデ 口縁部短く立ち上る
679	7区	940土坑	土師器	皿	100	8.4	1.3~1.5	体部内面反時計回りナデ 口縁部短く立ち上る
680	7区	940土坑	土師器	皿	100	11.8	3.2~3.3	体部内面時計回りナデ 口縁部短く立ち上る
681	7区	940土坑	須恵器	壺	10	底径(9.4)	(9.1)	内面ナデ 底部外面糸切痕 平底 体部斜めに立ち上る
682	7区	940土坑	瓦器	深鉢	30	底径(12.0)	(17.6)	口縁部ナデ 平底 体部直線的
683	7区	940土坑	瓦器	皿	60	(9.8)	2.1	口縁部端部ミガキ ジグザグ状暗文
684	7区	940土坑	瓦器	皿	75	9.1	2.1~2.2	外面左回りナデ ジグザグ状暗文
685	7区	940土坑	瓦器	椀	90	8.8	3.0~3.5	小型 内外面に丁寧なナデ・ミガキ密
686	7区	940土坑	瓦器	椀	100	12.4	3.3~3.4	内面ミガキ簡略化
687	7区	940土坑	瓦器	椀	100	12.5	3.5	内面ミガキ簡略化 暗文
688	7区	940土坑	白磁	皿	45	(11.5)	3.4	底部糸切痕 口禿
689	7区	940土坑	青磁	碗	5	(14.0)	(5.7)	龍泉窯 磨滅
690	7区	940土坑	瓦器	甕	15	(32.8)	(12.3)	体部・頸部にタタキ痕 内面当て具痕
697	7区	1018溝	土師器	皿	90	8.2	1.6	体部内面時計回りナデ・底部と体部の境に穿孔あり 内面に強い指オサエ
698	7区	1018溝	土師器	皿	100	8.1	2.0~2.2	内面ナデ 外面ケズリ
699	7区	1009土坑	土師器	皿	85	8.5	1.1~1.4	体部内面時計回りナデ 口縁部短く立ち上る
700	7区	1009土坑	土師器	皿	100	9.7	1.6~1.7	体部内面時計回りナデ
701	7区	1009土坑	瓦器	皿	65	8.8	1.6~1.7	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
702	7区	1009土坑	土師器	皿	95	14.7	2.9~3.1	体部内面時計回りナデ
703	7区	1009土坑	土師器	皿	40	(17.9)	2.1	底部指オサエ 口縁部短く外反
704	7区	1009土坑	瓦器	椀	30	(14.8)	5.0	底部内面ハケ 内面ミガキ密 連結輪状暗文

705	7区	1009土坑	瓦器	椀	30	(14.5)	(6.3)	内面ハケ・ミガキ密 細いジグザグ状暗文
706	7区	1009土坑	須恵器	捏鉢	10	(29.3)	(10.7)	体部外面下半指オサエ・ナデ
707	7区	1009土坑	瓦器	盤	5	(35.2)	(8.1)	内面ハケ・ミガキ粗 楕円形状暗文 体部内傾 口縁部直立
710	7区	919溝	土師器	皿	100	8.4	1.2~1.5	体部内面時計回りナデ 底部押し窪める
711	7区	919溝	土師器	皿	90	10.6	2.1~2.4	体部内面反時計回りナデ 口縁部強く外反
712	7区	919溝	瓦器	椀	10	(13.8)	(3.3)	内面ミガキ簡略化
713	7区	919溝	瓦器	椀	90	12.9	3.7~4.2	内面ミガキ簡略化 連結輪状暗文
714	7区	919溝	瓦器	皿	40	(9.0)	(1.8)	内面粗いジグザグ状暗文
715	7区	919溝	青磁	碗	5	—	(4.8)	口縁部のみ残存
716	7区	919溝	青磁	皿	25	(8.4)	3.2	龍泉窯 高台底部のみ無施釉 口縁端部外反 体部直線的
717	7区	919溝	瓦器	鉢	5	底径(34.2)	(5.4)	底部残存 突帯1条 有脚
720	7区	925溝	土師器	皿	80	(8.0)	1.5	口縁部ナデ 口縁部短く外反
721	7区	925溝	土師器	皿	55	(14.9)	2.2	口縁部ナデ 端部短く外反
722	7区	925溝	土師器	皿	95	8.9	1.5	体部内面時計回りナデ 口縁部短く外反
723	7区	925溝	土師器	皿	95	14.3	2.4~3.1	口縁部ナデ 体部緩やかに立ち上がる
724	7区	925溝	瓦器	皿	95	10.1	1.9~2.0	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
725	7区	925溝	瓦器	椀	30	(14.8)	5.0	内面ミガキ密 連結輪状暗文
726	7区	937溝	土師器	皿	55	(8.3)	1.7	口縁部ナデ 端部短く外反
727	7区	937溝	土師器	皿	30	(14.1)	2.5	口縁部ナデ 端部短く外反
728	7区	937溝	瓦器	椀	30	(14.8)	5.0	内面ミガキ密 連結輪状暗文
729	7区	945土坑	土師器	皿	90	7.0	1.3~1.8	底部を強く押し窪める
730	7区	945土坑	土師器	皿	95	8.0	1.3~2.0	口縁部ナデ
731	7区	945土坑	瓦器	椀	50	(9.9)	2.9	内面ミガキ簡略化
732	7区	945土坑	須恵器	捏鉢	5	(24.0)	5.1	口縁端部上下にやや拡張 焼成軟
733	7区	943溝	土師器	皿	25	(7.5)	1.5	小-1丸底 体部丸く立ち上がる
734	7区	943溝	土師器	皿	50	7.5	1.6	小-1丸底 体部丸く立ち上がる
735	7区	943溝	土師器	皿	90	7.5	1.2~1.7	小-1丸底 体部丸く立ち上がる
736	7区	943溝	土師器	皿	90	7.3	1.1~1.4	小-1やや平底 体部丸く立ち上がる
737	7区	943溝	土師器	皿	100	7.5	1.2~1.4	小-2底部外面中央を押し上げる 体部内面反時計回りナデ
738	7区	943溝	土師器	皿	100	7.6	1.4~1.5	小-2底部外面中央を押し上げる 体部内面反時計回りナデ
739	7区	943溝	土師器	皿	100	7.6	1.3~1.7	小-2底部外面中央を押し上げる 体部内面反時計回りナデ
740	7区	943溝	土師器	皿	100	8.0	1.4~1.6	小-2底部外面中央を押し上げる 体部内面反時計回りナデ
741	7区	943溝	土師器	皿	100	7.8	1.4~1.7	小-3b体部外面反時計回りナデ
742	7区	943溝	土師器	皿	100	7.5	1.5	小-3a内面中央わずかに凸状 体部内面時計回りナデ
743	7区	943溝	土師器	皿	100	7.7	1.5	小-3a内面中央わずかに凸状 体部内面時計回りナデ
744	7区	943溝	土師器	皿	100	7.7	1.6	小-3a内面中央わずかに凸状 体部内面時計回りナデ
745	7区	943溝	土師器	皿	100	7.9	1.4~1.7	小-3a内面中央わずかに凸状 体部内面時計回りナデ
746	7区	943溝	土師器	皿	100	7.8	1.0~1.6	小-3a内面中央わずかに凸状 体部内面時計回りナデ
747	7区	943溝	土師器	皿	100	7.3	1.2~1.3	小-3a内面中央わずかに凸状 体部内面時計回りナデ
748	7区	943溝	土師器	皿	100	7.5	1.7~1.8	小-4底部全体外面強く押し上げる 口縁ラップ状に開く
749	7区	943溝	土師器	皿	100	7.7	1.4~1.5	小-4底部全体外面強く押し上げる 口縁ラップ状に開く
750	7区	943溝	土師器	皿	95	8.0	1.4~1.5	小-4底部全体外面強く押し上げる 口縁ラップ状に開く
751	7区	943溝	土師器	皿	100	7.8	1.5~1.6	小-4底部全体外面強く押し上げる 口縁ラップ状に開く
752	7区	943溝	土師器	皿	75	8.3	2.1~2.4	小-5体部立ち上がり強い 口縁部強いナデによる稜
753	7区	943溝	土師器	皿	100	10.3	1.9~2.4	大-1形態小-3と類似 底部体部下半に明瞭な指オサエ痕
754	7区	943溝	土師器	皿	100	11.3	2.4~2.6	大-1形態小-3と類似 底部体部下半に明瞭な指オサエ痕
755	7区	943溝	土師器	皿	100	10.8	2.0~2.2	大-1形態小-3と類似 底部体部下半に明瞭な指オサエ痕
756	7区	943溝	土師器	皿	100	11.1	1.5	大-1形態小-3と類似 底部体部下半に明瞭な指オサエ痕
757	7区	943溝	土師器	皿	100	11.4	2.0~2.4	大-1形態小-3と類似 底部体部下半に明瞭な指オサエ痕
758	7区	943溝	土師器	皿	100	11.5	2.1~2.3	大-2杯のような形態 体部上半ナデ下部を凹状に強く窪ます
759	7区	943溝	土師器	皿	100	11.1	2.9	大-2杯のような形態 体部上半ナデ下部を凹状に強く窪ます
760	7区	943溝	土師器	皿	100	11.5	2.6~2.9	大-2杯のような形態 体部上半ナデ下部を凹状に強く窪ます
761	7区	943溝	土師器	皿	95	11.3	2.7~3.3	大-2杯のような形態 体部上半ナデ下部を凹状に強く窪ます
762	7区	943溝	土師器	皿	100	11.4	2.6~2.7	大-2杯のような形態 体部上半ナデ下部を凹状に強く窪ます
763	7区	943溝	土師器	皿	95	11.8	3.2~3.3	大-2杯のような形態 体部上半ナデ下部を凹状に強く窪ます
764	7区	943溝	土師器	皿	85	11.9	2.8	大-2杯のような形態 体部上半ナデ下部を凹状に強く窪ます

765	7区	943溝	瓦器	椀	10	(7.7)	2.0	内面ミガキ簡略化 高台消失
766	7区	943溝	瓦器	椀	40	(8.0)	1.5	内面ミガキ簡略化 高台消失
767	7区	943溝	瓦器	椀	95	8.9	3.7~3.8	内面ミガキ簡略化 高台消失
768	7区	943溝	瓦器	椀	100	8.4	3.9~4.2	内面ミガキ簡略化 高台形骸化
769	7区	943溝	瓦器	椀	95	10.8	3.3~3.8	内面ミガキ簡略化 高台消失
770	7区	943溝	瓦器	椀	95	10.7	3.1~3.4	内面ミガキ簡略化 高台消失
771	7区	943溝	瓦器	椀	95	10.5	3.1~3.3	内面ミガキ簡略化 高台消失
772	7区	943溝	瓦器	椀	100	10.3	3.0~3.1	内面ミガキ簡略化 高台消失
773	7区	943溝	白磁	碗	5	(15.8)	(3.3)	口縁部のみ残存 白磁IV類
774	7区	943溝	瓦器	羽釜	5	(13.8)	(4.4)	口縁内傾 体部内面ハケ
775	7区	943溝	瓦器	羽釜	5	(19.7)	(6.1)	銜端が凹状に窪む 口縁部内傾
776	7区	943溝	陶器	播鉢	5	(28.3)	(5.6)	備前焼 口縁部のみ残存
777	7区	943溝	瓦器	火鉢	10	(34.3)	(6.1)	口縁部内湾 菊花紋
778	7区	943溝	瓦器	鉢	5	底径(46.4)	(5.6)	底部のみ残存
779	7区	943溝	瓦器	脚	5	長さ(6.3)	—	平坦面をもつ 断面半円形
780	7区	943溝	瓦器	羽釜	5	長さ(19.3)	—	脚部のみ残存 全体ナデ
787	7区	846土坑	白磁	碗	5	—	(1.9)	口縁部のみ残存 白磁IV類
788	7区	850土坑	土師器	皿	60	8.7	1.0~1.3	口縁部ナデ 口縁部短く外反
789	2区	73ピット	土師器	皿	95	7.8	1.1~1.3	口縁部ナデ
790	2区	79ピット	土師器	皿	30	(8.3)	1.5	口縁部丁寧なナデ
791	2区	81ピット	土師器	皿	15	(9.9)	1.8	口縁部ナデ粗
792	2区	75ピット	白磁	皿	15	(8.2)	1.8	口壳 口縁部から底部の一部にかけて残存
793	2区	77ピット	青磁	碗	10	(12.1)	4.6	龍泉窯 高台内面袖付着
794	2区	81ピット	瓦器	椀	15	(10.9)	3.2	内面ミガキ簡略化 暗文
795	2区	79ピット	瓦器	椀	5	(13.3)	(3.0)	内面ミガキ簡略化
796	2区	92ピット	土師器	皿	90	7.5	1.1~1.6	口縁部ナデ
797	2区	92ピット	土師器	皿	20	(8.3)	1.6	体部下半指オサエ粗
798	2区	106ピット	土師器	皿	85	7.7	1.2	口縁部ナデ
799	2区	120ピット	土師器	皿	20	(8.9)	1.3	口縁部ナデ やや摩滅
800	2区	237ピット	土師器	皿	45	(8.1)	1.2	口縁部ナデ 歪む
801	2区	237ピット	土師器	皿	40	8.5	1.4	口縁部2段ナデ
802	2区	88ピット	土師器	皿	95	11.9	3.5~4.2	口縁部緩やかに外反 体部外面明瞭な指オサエ 内面ハケ
803	2区	286ピット	土師器	皿	10	(13.6)	(3.3)	口縁部明瞭な2段ナデ
804	2区	81ピット	白磁	皿	5	—	(1.7)	口縁部のみ残存
805	2区	63ピット	瓦器	椀	5	—	(3.2)	内面ミガキ密
806	2区	65ピット	瓦器	椀	5	—	(3.4)	内面ミガキ密
807	2区	234ピット	瓦器	椀	5	—	(3.9)	内面ミガキやや密
808	2区	239ピット	瓦器	椀	5	—	(3.5)	内面ミガキやや密
809	2区	88ピット	瓦器	皿	5	(8.6)	1.7	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
810	2区	258ピット	瓦器	皿	10	(8.4)	1.3	口縁部強く外反 ジグザグ状暗文
811	2区	209ピット	瓦器	椀	15	(14.4)	(3.4)	内面ミガキやや簡略化 焼成軟
812	2区	283ピット	瓦器	椀	10	(15.8)	(5.1)	内外面ミガキ隙間無く密
813	2区	324ピット	瓦器	椀	50	(14.1)	5.0	内面ミガキ密 連結輪状暗文
814	2区	106ピット	土師器	羽釜	10	(29.9)	(14.6)	外面指オサエ 銜やや簡略化 体部緩やかに内湾
815	2区	172ピット	瓦器	足釜	20	長さ(19.8)	—	脚部のみ残存
818	2区	41井戸	土師器	皿	95	7.9	1.6~1.7	枠内底部 体部内面時計回りナデ 底部中央を押し窪める 口縁屈曲
819	2区	41井戸	瓦器	皿	40	(8.5)	1.5	口縁部ナデ やや摩滅
820	2区	41井戸	瓦器	椀	10	底径5.0	(1.5)	井戸枠内 内面明瞭な格子状暗文
821	2区	41井戸	瓦器	椀	10	(14.0)	(3.8)	掘方下層 口縁部ナデ・ミガキ
822	2区	51井戸	土師器	皿	100	7.8	1.3~1.7	枠内底部 体部内面時計回りナデ 底部はやや浮き上がる
823	2区	51井戸	土師器	皿	80	8.9	1.6~1.9	掘方下層 体部内面反時計回りナデ
824	2区	51井戸	瓦器	皿	95	9.9	1.7~2.0	体部内面反時計回りナデ
825	2区	51井戸	瓦器	椀	50	10.8	2.6~4.0	掘方下層 内面ミガキ簡略化 暗文 高台形骸化
826	2区	51井戸	瓦器	碗	100	10.2	3.4	掘方下層 内面ミガキ簡略化 ジグザグ状暗文
827	2区	51井戸	白磁	皿	5	底径(4.6)	(1.5)	掘方下層 見込に劃花文で花卉
828	2区	51井戸	瓦器	椀	20	(15.2)	(4.2)	掘方下層 内面ミガキやや簡略化

829	2区	51井戸	瓦器	椀	15	(14.3)	(4.7)	掘方下層 和泉型 内面粗雑なミガキ 外面指オサエ
830	2区	51井戸	須恵器	捏鉢	10	(26.6)	(10.0)	井戸枠内 片口 口縁端部肥厚 体部緩やかに立ち上がる
831	2区	100井戸	土師器	皿	100	8.7	1.2~1.8	口縁外面2段のナデ 体部緩やかに開く
832	2区	100井戸(上層)	瓦器	皿	30	(8.7)	1.9	内面ミガキ簡略化 焼成軟
833	2区	100井戸	瓦器	椀	5	—	(3.6)	外面の指オサエ粗雑 内面ミガキ密
834	2区	100井戸	瓦器	椀	10	底径4.7	(1.5)	底部のみ残存 暗文
835	2区	164井戸	土師器	皿	75	7.7	1.4~1.5	井戸枠内 体部内面時計回りナデ
836	2区	164井戸	瓦器	椀	90	10.5	2.8~2.9	井戸枠内 和泉型 内面丁寧なナデ 円状暗文
840	2区	50土坑	青磁	碗	5	—	(4.3)	龍泉窯 口縁部のみ存在
841	2区	50土坑	瓦器	椀	60	11.1	3.2	内面ハケ・ミガキ簡略化
842	2区	50土坑	白磁	皿	5	—	(1.6)	内面1条沈線 見込み楕円文
843	2区	50土坑	須恵器	捏鉢	5	—	(8.2)	片口 内面ナデ 口縁部やや内湾
844	2区	52土坑	土師器	皿	95	8.0	1.1~1.5	口縁部ナデ 口縁部外反
845	2区	52土坑	瓦器	皿	25	(8.9)	1.4	口縁部外反 暗文
846	2区	52土坑	青磁	碗	5	—	(2.7)	龍泉窯 口縁部やや外反 暗文
847	2区	52土坑	須恵器	捏鉢	5	(31.2)	(5.0)	口縁端部上下にやや拡張
848	2区	67土坑	白磁	皿	10	(10.0)	2.0	底部に糸切痕 見込みに劃花文
849	2区	67土坑	土師器	皿	50	8.5	1.3~1.5	口縁部短立ち上がる
850	2区	69土坑	瓦器	椀	45	(8.9)	3.5	渦巻状ミガキ 高台消失
851	2区	69土坑	瓦器	足釜	30	(17.3)	(14.2)	内面ナデ 外面体部煤付着・磨滅著しい
852	2区	69土坑	土師器	羽釜	15	(25.4)	(14.5)	大和型 口縁端部丸く巻き込む 内面指オサエ
853	2区	82土坑	瓦器	皿	15	(8.6)	1.5	外面強いナデ ジグザグ状暗文
854	2区	103土坑	瓦器	椀	5	—	(4.0)	内面ミガキ密
855	2区	103土坑	瓦器	足釜	5	(26.3)	(6.3)	内面ハケ明瞭
856	2区	70土坑	土師器	皿	45	(7.8)	(1.4)	口縁部ナデ
857	2区	70土坑	瓦器	椀	25	(15.3)	(5.6)	内面ミガキ隙間無く密
858	2区	70土坑	瓦器	碗	45	(14.6)	4.1	和泉型 外面顕著な指オサエ 2段ナデ 平行線状暗文
859	2区	165土坑	瓦器	椀	5	(14.4)	(3.3)	内面ミガキやや密
860	2区	165土坑	瓦器	椀	20	(13.8)	(3.8)	内面ミガキやや密 胎土粗い
861	2区	44溝	土師器	皿	100	8.1	1.1	体部内面時計回りナデ
862	2区	44溝	土師器	皿	95	8.6	1.1~1.3	口縁部ナデ
863	2区	44溝	土師器	皿	100	8.2	1.6	体部内面反時計回りナデ
864	2区	44溝	土師器	皿	25	(13.0)	2.1	口縁部丁寧なナデ
865	2区	44溝	瓦器	椀	50	(14.0)	5.0	内面ミガキやや密 楕円状暗文
866	2区	44溝	瓦器	椀	70	14.4	5.0	内面密ミガキ密 連結輪状暗文
867	2区	44溝	瓦器	椀	95	13.7	5.1	内面ハケ・ミガキやや密 連続長楕円状暗文
868	2区	44溝	瓦器	椀	70	14.6	4.7~5.0	内面ミガキやや密 長楕円状暗文
869	2区	44溝	瓦器	椀	85	14	4.8	内面ミガキやや密 長楕円状暗文
870	2区	44溝	瓦器	椀	70	14.4	4.6~4.9	内面ハケ・太ミガキやや密 連続長楕円状暗文
871	2区	44溝	瓦器	椀	45	(13.8)	4.8	内外面細いミガキやや密 連続長楕円状暗文
872	2区	44溝	瓦器	椀	70	14	4.8~5.8	内面ミガキ粗やや密 連続長楕円状暗文
873	2区	44溝	瓦器	椀	50	(14.2)	5.4	和泉型 内面太いミガキやや密 ジグザグ状暗文
874	2区	44溝	瓦器	椀	60	(13.6)	4.7	内面ハケ明瞭・ミガキ簡略化 長楕円状暗文
875	2区	44溝	瓦器	皿	40	(8.9)	1.4	口縁部丁寧なナデ
876	2区	44溝	白磁	碗	10	底径(5.5)	(5.4)	やや高い高台側面に沈線1条 三角形の切込み 重ね焼痕
877	2区	44溝	須恵器	捏鉢	10	(26.8)	9.0	口縁部ナデ 体部直線的にのびる
878	2区	44溝	土師器	羽釜	5	(33.6)	(5.3)	口縁屈曲して上方に立ち上がる 銕水平に長くのびる
879	2区	44溝	瓦器	足釜	15	(19.6)	(10.4)	体部強く内湾 内外明瞭な指オサエ 外面煤付着
880	2区	44溝	瓦器	足釜	15	(18.6)	(7.0)	体部内外指オサエ
881	2区	44溝	土師器	羽釜	5	(20.7)	(12.5)	体部外面指オサエ 内外面やや磨滅・煤付着
882	2区	49溝	瓦器	椀	10	(11.0)	(2.7)	内面ミガキ簡略化
883	2区	54溝(上層)	白磁	碗	5	—	(2.4)	口縁部のみ残存
884	2区	54溝(下層)	陶器	播鉢	5	—	(5.9)	備前焼 口縁直線的 端部下方に拡張
885	2区	54溝(下層)	瓦器	椀	10	底径5.6	(2.5)	内面ミガキ密 細かい暗文
886	2区	54溝(下層)	土師器	皿	10	(11.7)	4.4	口縁緩やかに外反 体部下半強い指オサエ
887	2区	55溝(上層)	土師器	皿	90	8.8	1.4~1.8	口縁部ナデ 端部断面三角形
888	2区	55溝(上層)	土師器	皿	95	9.4	1.4	口縁部ナデ 端部外反
889	2区	55溝(上層)	土師器	皿	95	9.8	1.4~1.5	体部内面時計回りナデ 口縁部外面強いナデ
890	2区	55溝(上層)	土師器	皿	90	14.8	2.4~3.4	体部外面強い指オサエ
891	2区	55溝(上層)	瓦器	皿	75	9.5	2.3	内外面太ミガキ密 やや深い

892	2区	55溝(上層)	瓦器	皿	45	(8.9)	1.4	口縁部強いナデ ジグザグ状暗文
893	2区	55溝(上層)	瓦器	椀	40	(14.3)	4.4	内面ミガキやや密 暗文 底部欠損
894	2区	55溝(上層)	瓦器	椀	45	(13.9)	5.2	内面明瞭なハケ 内面ミガキ簡略化 暗文
895	2区	55溝(上層)	瓦器	椀	45	13.9	5.0~5.3	和泉型 内面タミガキ粗く簡略化 平行線状暗文
896	2区	55溝(下層)	瓦器	椀	95	13.3	4.5~4.7	内面ミガキ密 長楕円状暗文
897	2区	55溝	瓦器	椀	95	15.2	4.5	和泉型 内面ややタミガキ粗
898	2区	55溝	瓦器	椀	90	11.5	3.1~3.8	内面渦巻状ミガキ
899	2区	55溝	瓦器	椀	95	13.5	4.1~4.7	内面ハケ・ミガキ粗 連続長楕円状暗文
900	2区	55溝	瓦器	椀	30	(14.3)	5.3	内面ミガキ密 暗文
901	2区	55溝	白磁	碗	20	底径6.7	(3.7)	口縁部のみ残存 体部下半露胎
902	2区	55溝(上層)	土師器	鍋	5	(31.3)	(7.5)	口縁部内面は横位ハケ 口縁部くの字 体部ハケ・指オサエ
903	2区	55溝(上層)	土師器	羽釜	15	(31.6)	(18.2)	口縁部丸みを持つ 内面ナデ 外面ケズリ
904	2区	56溝(下層)	瓦器	播鉢	10	(32.7)	10.8	片口 外面粗いケズリ 焼成軟 スリ目に使用痕跡
905	2区	56溝(下層)	須恵器	捏鉢	10	(31.7)	(10.1)	内面左上がりナデ 口縁部やや肥厚下方に拡張
906	2区	56溝	土師器	皿	50	8.2	1.2~1.3	口縁部ナデ
907	2区	56溝(下層)	土師器	皿	45	(11.3)	2.0	体部指オサエ 口縁部やや屈曲
908	2区	56溝	瓦器	椀	25	(12.2)	3.5	内面ハケ・ミガキ簡略化
909	2区	56溝(上層)	瓦器	浅鉢	30	(20.8)	5.8	口縁部ナデ 体部外面指オサエ 平底
910	2区	56溝(下層)	瓦器	椀	80	14.9	4.7~5.4	内面ミガキ簡略化 連続楕円状暗文
911	2区	56溝(下層)	瓦器	椀	70	11	3.3	内面ミガキ簡略化 暗文 高台部粗雑
912	2区	56溝	瓦器	椀	25	(12.4)	4.5	内面ミガキ簡略化 暗文
927	5区	574ビット	土師器	皿	90	7.7	1.3~1.5	口縁部ナデ
928	5区	574ビット	瓦器	椀	5	(10.2)	(2.6)	内面ミガキ簡略化
929	5区	540ビット	瓦器	椀	5	—	(3.7)	内面ミガキ簡略化
930	5区	540ビット	白磁	碗	5	—	(2.8)	口縁部のみ残存 口縁部短く外反
931	5区	597ビット	白磁	碗	5	—	(1.6)	口縁部のみ残存 白磁Ⅱ類
932	5区	527ビット	瓦器	椀	5	—	(3.9)	内面ハケ・タミガキ簡略化 外面やや磨滅著しい
933	5区	546ビット	土師器	皿	95	7.1	1.3~1.5	底部やや浮き上がる
934	5区	653ビット	土師器	皿	75	8.3	0.8~1.6	口縁部ナデ
935	5区	642ビット	瓦器	椀	5	—	(2.5)	内面ミガキ密
936	5区	558ビット	瓦器	椀	5	—	(4.5)	内面ミガキやや密 焼成軟
937	5区	557ビット	土師器	皿	15	(8.4)	1.2	口縁部ナデ
938	5区	557ビット	瓦器	椀	5	(14.0)	(3.3)	内面ミガキ密
939	5区	669ビット	瓦器	椀	20	(12.2)	3.2	内面ミガキ簡略化 焼成軟
940	5区	559ビット	瓦器	椀	5	(14.6)	(4.1)	内面ミガキやや密
941	5区	641ビット	瓦器	椀	5	(14.6)	(3.5)	内面ミガキやや密
942	5区	643ビット	瓦器	椀	10	(14.2)	(4.0)	内面ミガキ密
943	5区	664ビット	土師器	皿	15	(12.6)	2.2	口縁部ナデ
944	5区	558ビット	土師器	皿	10	(14.6)	1.6	口縁部丸味をもつ
945	5区	537ビット	瓦器	羽釜	5	(15.4)	(2.7)	内面ナデ
947	5区	545ビット	土師器	皿	15	(7.4)	1.2	口縁部ナデ
948	5区	545ビット	青磁	碗	5	(16.6)	(2.8)	龍泉窯 口縁部のみ残存
949	5区	573ビット	瓦器	椀	10	(14.0)	(3.1)	口縁部ややミガキやや簡略化
950	5区	573ビット	瓦器	椀	10	(14.2)	(3.3)	口縁部ややミガキやや簡略化
951	5区	665ビット	瓦器	椀	15	(15.0)	(4.4)	内面ミガキ密
952	5区	665ビット	瓦器	椀	30	(16.0)	5.5	内面ミガキ密 連結輪状暗文
953	5区	662畦畔	瓦器	椀	100	13.3	4.0~4.6	内面ミガキ粗やや簡略化 連結輪状暗文
954	5区	666ビット	瓦器	播鉢	5	(34.0)	(6.3)	口縁部部に内傾
955	5区	706ビット	瓦器	足釜	5	(22.3)	(7.5)	体部内湾 鈿短い
957	5区	638落込	青磁	皿	5	—	(1.6)	内面に沈線
958	5区	638落込	陶器	播鉢	5	底径(12.6)	(2.1)	備前焼 底部のみ残存
959	5区	713落込	白磁	碗	15	(16.0)	(4.2)	口縁部のみ残存 白磁Ⅳ類
960	5区	713落込	白磁	碗	15	底径5.7	(3.3)	やや高くシャープな高台をもつ
961	5区	713落込	土師器	皿	30	(11.8)	2.1	口縁部ナデ 端部外反
962	5区	713落込	瓦器	皿	80	8.2	1.6~1.8	口縁部ナデ ジグザグ状暗文
963	5区	713落込	瓦器	椀	20	(15.0)	5.6	内面ミガキやや密

964	5区	713落込	瓦器	甕	5	(31.6)	底径(5.2)	口縁部外面強いナデ 口縁部強く外反
965	5区	713落込	須恵器	捏鉢	5	—	(3.2)	口縁部ナデ
966	5区	712落込	土師器	皿	10	(11.0)	2.7	口縁部ナデ 体部下半指オサエ
967	5区	712落込	瓦器	椀	40	(13.5)	4.0	内外面やや磨滅
968	5区	712落込	瓦器	椀	25	(13.9)	4.4	内面ハケ・ミガキ
969	5区	712落込	瓦器	足釜	5	高さ(14.6)	—	脚部のみ残存
970	5区	633土坑	土師器	皿	100	7.8	1.4~1.6	体部内面時計回りナデ
971	5区	633土坑	土師器	皿	50	8.3	1.2~1.4	口縁部ナデ
972	5区	633土坑	瓦器	羽釜	95	4.3	1.8~2.5	ミニチュア 口縁部体部ナデ 底部指オサエ 内面煤付着
973	5区	633土坑	瓦器	椀	45	10.6	3.4	渦巻状ミガキ簡略化 高台形骸化
974	5区	633土坑	白磁	四耳壺	5	—	(2.8)	体部のみ残存 把手の痕跡
975	5区	633土坑	瓦器	羽釜	5	(18.4)	(4.5)	内面ハケ 外面指オサエ・煤付着
976	5区	634土坑	土師器	皿	95	7.8	1.1~1.6	口縁部ナデ
977	5区	634土坑	土師器	皿	100	7.8	1.0~1.6	口縁部ナデ 端部断面三角形
978	5区	634土坑	土師器	皿	95	12.2	1.9~2.1	口縁部ナデ 体部外面指オサエ粗
979	5区	634土坑	土師器	皿	60	(13.5)	3.3	口縁部丁寧なナデ 底部指オサエ 口縁部屈曲
980	5区	634土坑	土師器	皿	100	12.5	3.1~3.5	口縁部丁寧なナデ・煤付着 底部指オサエ
981	5区	634土坑	瓦器	椀	65	12.1	3.1~3.3	内面ハケ・ミガキ簡略化 楕円状暗文
982	5区	634土坑	瓦器	椀	100	12.6	3.4~3.6	内面ミガキやや簡略化 暗文
983	5区	634土坑	瓦器	椀	40	(12.8)	3.4	内面ミガキ簡略化 暗文
984	5区	634土坑	瓦器	椀	100	12.2	3.3~4.0	内面ミガキやや簡略化 連結輪状暗文
985	5区	634土坑	瓦器	椀	15	底径4.8	(3.6)	内面ミガキ密 明瞭な連結輪状暗文
986	5区	634土坑	瓦器	足釜	25	(12.8)	(12.6)	外面下半指オサエ 外面煤付着
987	5区	634土坑	瓦器	羽釜	5	(21.4)	(7.9)	口縁部内傾 体部外面指オサエ
988	5区	634土坑	瓦器	羽釜	10	(29.4)	(7.2)	内面明瞭なハケ・煤付着 口縁部端部上方に折り曲げる
991	5区	700土坑	土師器	皿	95	8.5	1.1~1.2	体部内面時計回りナデ
992	5区	700土坑	土師器	皿	80	8.4	1.5	体部内面時計回りナデ 底部中央押し窪める
993	5区	700土坑	土師器	皿	45	(12.2)	2.4	口縁部ナデ
994	5区	700土坑	瓦器	椀	35	(13.4)	3.9	口縁部内面ミガキやや簡略化
995	5区	700土坑	瓦器	椀	30	(13.2)	4.5	内面ミガキ粗簡略化 口縁部弱いナデ
996	5区	715土坑	土師器	皿	(8.7)	(8.7)	1.4	内面ナデ 口縁部丸みをもつ
997	5区	715土坑	土師器	皿	95	8.5	1.0~1.8	口縁部2段ナデ
998	5区	715土坑	瓦器	椀	10	(14.4)	(4.0)	内面ミガキ粗やや密
999	5区	715土坑	瓦器	椀	5	(15.0)	(4.3)	内面ミガキ密
1000	5区	617土坑	土師器	皿	40	(8.2)	1.3	口縁部ナデ 底部中央押し窪める
1001	5区	617土坑	土師器	皿	30	(7.8)	(1.5)	内面ナデ 外面指オサエ粗雑
1002	5区	617土坑	土師器	皿	35	(8.1)	(1.6)	口縁部ナデ 底部中央押し窪める
1003	5区	530土坑	瓦器	椀	5	(14.0)	(3.3)	内面ミガキ粗 磨滅
1004	5区	609土坑	瓦器	椀	5	(13.2)	(3.2)	内面ミガキ簡略化 器壁やや厚い
1005	5区	703土坑	土師器	皿	25	(8.3)	1.6	口縁部ナデ
1006	5区	703土坑	瓦器	椀	55	(11.5)	3.2	口縁部ミガキ簡略化
1007	5区	703土坑	瓦器	椀	20	(14.5)	(4.1)	内面ミガキ密
1009	5区	702溝	瓦器	椀	10	(12.2)	(3.7)	内面ミガキ簡略化
1010	5区	701溝	土師器	皿	30	(7.8)	1.6	口縁部ナデ
1011	5区	701溝	瓦器	椀	1860	(14.4)	5.5	体部外面明瞭な指オサエ ミガキやや密
1012	5区	640溝	土師器	皿	60	(8.1)	1.2~1.6	口縁部ナデ
1013	5区	640溝	土師器	皿	75	9.1	1.5~1.9	口縁部ナデ
1014	5区	640溝	土師器	皿	100	12.2	1.3~1.9	体部内面反時計回りナデ 底部中央を押し窪める
1015	5区	640溝	土師器	皿	65	(18.5)	(2.0)	口縁部短く外反 底部指オサエ 口縁部外面ナデ
1016	5区	640溝	瓦器	椀	80	12.1	3.2~3.6	内面ミガキやや簡略化 連続楕円状暗文 全体歪
1017	5区	640溝	瓦器	椀	100	12.6	3.1~3.2	内面ミガキやや簡略化
1018	5区	640溝	瓦器	椀	90	12.5	3.3~3.4	外面細かな明瞭な指オサエ 暗文
1019	5区	640溝	瓦器	羽釜	5	(18.5)	(4.5)	内面ハケ 体部内湾
1020	5区	640溝	須恵器	捏鉢	100	(28.6)	10.6	口縁部ナデ 体部下半緩やかに内湾
1021	5区	717溝	白磁	碗	45	底径(6.0)	(4.1)	底部残存 ケズリ痕 白磁IV類
1022	5区	640溝	瓦器	足釜	5	長さ(17.0)	—	脚部のみ残存 煤付着
1023	5区	469井戸(上層)	土師器	皿	95	9.4	1.5~1.7	底部指オサエ
1024	5区	469井戸(上層)	土師器	皿	95	9.6	1.2~1.5	内面右回り指オサエ
1025	5区	469井戸(上層)	土師器	皿	75	9.8	1.4~1.9	外面強い指オサエ
1026	5区	469井戸(上層)	土師器	皿	80	(14.3)	2.9	体部外面指オサエ

1027	5区	469井戸(上層)	須恵器	捏鉢	5	(27.8)	(5.8)	口縁部ナデ
1028	5区	469井戸(中層)	土師器	皿	50	8.9	1.8	底部体部境に焼成後2箇所穿孔 体部内面時計回りナデ
1029	5区	469井戸(下層)	土師器	皿	95	9.8	1.2~1.8	体部内面時計回りナデ 端部外反
1030	5区	469井戸(下層)	土師器	皿	50	14.7	2.6~2.7	口縁部外面2段ナデ 緩やかに立ち上がる
1031	5区	469井戸(下層)	土師器	皿	80	14.8	2.6	外面丁寧なナデ 緩やかに立ち上がる
1032	5区	469井戸(下層)	土師器	皿	50	15	2.8~3.4	口縁部内外ナデ 緩やかに立ち上がる
1033	5区	469井戸(下層)	瓦器	皿	100	9.8	2.3	内面ミガキ 丁寧なジグザグ状暗文
1034	5区	469井戸(下層)	瓦器	椀	70	14.6	6.1	内面隙間無くミガキ密 ジグザグ状暗文
1035	5区	469井戸(下層)	瓦器	椀	90	14.7	5.9~6.3	内面隙間無くミガキ密 ジグザグ状暗文
1036	5区	469井戸(下層)	瓦器	椀	100	15.2	5.5~6.1	内面隙間無くミガキ密 ジグザグ状暗文
1037	5区	469井戸(中層)	瓦器	椀	60	(15.6)	5.6	内外面ミガキ密 連結輪状暗文 外面縦方向の指オサエ
1039	5区	471土坑	土師器	皿	55	(14.4)	2.5~2.8	口縁部ナデ 体部緩やかに立ち上がる 端部丸くおさめる
1040	5区	471土坑	土師器	皿	55	14.2	3.5	口縁部ナデ 体部緩やかに立ち上がる 端部丸くおさめる
1041	5区	471土坑	土師器	皿	90	14.9	3.0~3.3	体部外面強い指オサエ
1042	5区	471土坑	瓦器	椀	60	15.2	5.3~5.9	和泉型 内面右・左上がりの太ミガキ密
1043	5区	471土坑	瓦器	椀	40	(14.6)	5.6	内面隙間無くミガキ密 ジグザグ暗文 底部「×」の線刻
1044	5区	471土坑	土師器	鉢	95	21.0	9.3	片口 内面指オサエ・ナデ 内外面全体に煤附着
1045	5区	473土坑	須恵器	捏鉢	5	(26.6)	(4.9)	口縁部ナデ 体部直線的
1047	5区	474土坑	瓦器	椀	40	(15.6)	5.4	内面ミガキ密 ジグザグ状暗文
1048	5区	479土坑	瓦器	椀	20	(16.0)	(5.2)	内面隙間無くミガキ密 外面指オサエ粗
1049	5区	480土坑	瓦器	椀	5	(14.8)	(4.5)	内面ミガキ細く密
1050	5区	486土坑	瓦器	椀	5	(14.4)	(3.2)	内面太ミガキやや簡略化
1051	5区	466土坑	瓦器	椀	5	—	(3.2)	内面ミガキ密
1052	5区	470溝	土師器	皿	10	(13.8)	(1.9)	口縁部ナデ 緩やかに立ち上がる 端部外反
1053	5区	470溝	土師器	皿	25	(14.2)	2.3	口縁部ナデ 緩やかに立ち上がる 端部外反
1054	5区	470溝	土師器	皿	10	(15.8)	2.4	緩やかに立ち上がる 端部外反
1055	5区	470溝	瓦器	椀	30	(14.8)	(5.2)	内外面細ミガキ密 暗文
1056	5区	470溝	瓦器	椀	45	(14.4)	5.8	内面ミガキ密 連結輪状暗文
1057	5区	468溝	瓦器	椀	5	—	(2.4)	内面ミガキ密
1058	5区	468溝	瓦器	椀	45	(15.2)	5.4	内面隙間無くミガキ密 明瞭な暗文
1059	8区	880土坑	土師器	皿	30	(11.6)	1.8	体部内面時計回りナデ 口縁部緩やかに外反
1060	8区	884土坑	青磁	碗	5	—	(4.5)	口縁部のみ残存 内面櫛描紋
1061	8区	887土坑	土師器	皿	70	8.8	1.2~1.3	口縁部ナデ
1062	8区	887土坑	白磁	皿	5	(9.0)	(1.9)	口縁部のみ残存 口縁部緩やかに外反
1063	8区	887土坑	青磁	碗	5	—	(2.1)	同安窯 口縁部残存
1064	8区	887土坑	瓦器	椀	80	13.1	3.9~4.6	内面ミガキやや簡略化 連結輪状暗文
1065	8区	887土坑	瓦器	椀	95	13.2	3.9~4.1	内面ハケ・ミガキやや簡略化 連結輪状暗文
1066	8区	898土坑	土師器	皿	30	(8.0)	0.9	口縁部ナデ 口縁部短く立ち上がる
1067	8区	898土坑	土師器	皿	20	(9.4)	1.4	口縁部ナデ
1068	8区	898土坑	土師器	皿	5	—	—	墨書土器 内面「あむ□」外面「あ□」
1069	8区	898土坑	瓦器	皿	90	8.1	1.4~1.5	口縁部ナデ 細いジグザグ状暗文
1070	8区	898土坑	瓦器	椀	95	13.2	4.1~4.2	内面ミガキ粗やや簡略化 暗文
1073	8区	904ビット	瓦器	椀	10	底径3.7	(1.5)	底部のみ残存 渦巻状暗文
1074	8区	1011ビット	瓦器	椀	5	底径(3.7)	(4.0)	内面ミガキ粗やや密
1075	8区	1020ビット	須恵器	捏鉢	5	底径10.2	(7.7)	口縁部ナデ 体部やや内湾
1076	8区	913土坑	瓦器	羽釜	5	(20.0)	(2.9)	口縁部ナデ 頸部内傾 鈔簡略化 足釜か
1077	8区	1051土坑	白磁	碗	5	底径(4.8)	(4.7)	底部のみ残存 高台高い ケズリ痕跡 白磁V類
1078	8区	881溝	土師器	皿	25	(12.0)	2.1	口縁部ナデ 内面ハケ 口縁部やや屈曲
1079	8区	883溝	土師器	皿	95	11.3	1.7~2.3	体部内面時計回りナデ 口縁部やや屈曲
1081	8区	876溝	白磁	碗	10	底径5.7	(2.1)	高台のみ残存 白磁V類
1082	8区	903溝	瓦器	椀	95	12.9	3.7~3.8	内面ハケ・ミガキやや簡略化 底部内面に乱雑な円墨書
1083	8区	903溝	土師器	皿	90	8.0	1.3~1.4	口縁部ナデ
1084	8区	903溝	土師器	皿	100	7.9	1.2~1.3	口縁部ナデ
1085	8区	903溝	土師器	皿	100	8.1	1.3~1.4	口縁部ナデ
1086	8区	903溝	瓦器	椀	35	(13.7)	4.1	内面ミガキやや簡略化 連結輪状暗文
1087	8区	1020ビット	土師器	竈	5	高さ(25.4)	幅(31.2)	内外面指オサエ 内面横方向ナデ 外面縦方向ナデ 焼き口の上残存奥行(22.7cm)
1088	3区	337溝	瓦器	椀	20	(14.2)	(4.7)	内面ミガキ密

※()は残存寸法

表4 木製品計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			特徴・備考
				厚さ	長さ・高さ	幅	
13	1区	3b層	下駄	(1.1)	(19.0)	9.2	歯(前3.4 後2.4) 連歯下駄 平面楕円形 裏面歯の右側磨滅著 緒穴方形
157	2区	5層	用途不明木製品	1.6	5.6	3.2	一端を三角形に削り出す 板目材
228	8区	北半5層	下駄	1.9	(20.1)	(9.5)	歯(前3.7 後3.1) 連歯下駄 平面楕円形 後歯磨滅 円形緒穴 緒上方2つの圧痕 右足用か
249	3区	6層	曲物底板	0.8	16.8	(10.0)	側面に2孔一対の釘孔が3箇所 一部木釘が残る 表面に深さ4mmの円孔 3箇所 補修孔か 板目材
250	3区	8層	折敷側板	0.6	(11.5)	4.7	桜皮が残る 側板 板目材
264	1区	21土坑	漆器椀	底径(7.4)	(1.2)	—	内外面黒色 見込に赤色で渦巻き状の紋様
306	4区	436ビット	礎板	4.1	22.2	12.0	一端にケズリくびれを作り出す 礎板として転用
307	4区	437ビット	礎板	3.4	24.7	12.0	平面長方形 柄穴を穿つ 礎板として転用
334	4区	404井戸	木筒	0.6	21.1	3.8	宝珠形 表「昔蘇民将来」裏「南無五大力弁」板目材
335	4区	404井戸	木筒	0.3	(23.6)	(6.0)	圭頭 「一日大般若経轉」 頭部に紐状の痕跡 柱目材
336	4区	407井戸	曲物底板	0.8	(31.2)	(14.9)	側面に釘孔が等間隔に残る 柱目材
337	4区	407井戸	曲物側板	0.9	(34.2)	(12.5)	底板を留める穴に桜皮残る 柱目材
338	4区	407井戸	曲物底板	1.4	(43.1)	(18.3)	側面に2孔一対の釘孔 木釘残る 面端2個の円孔 表裏面は不定方向のケビキ 面中央部やや薄い 柱目材
339	4区	407井戸	曲物底板	0.8	13.7	(7.1)	小型 柱目材
340	4区	407井戸	箸	0.5	(23.1)	0.7	両端部細く削る 断面円形
341	4区	404井戸	箸	0.6	21.1	0.7	両端部細く削る 断面円形
342	4区	413井戸	曲物 籠	0.8	(34.3)	(46.0)	井筒 2列桜皮で綴る
343	4区	413井戸	曲物 籠	0.8	(34.3)	(46.0)	井筒 2列桜皮で綴る
344	4区	413井戸	曲物側板	0.8	(34.3)	(46.0)	井筒 1列桜皮で綴る 内面縦と斜め方向のケビキ 最下部に釘孔
345	4区	413井戸	曲物	0.5	24.5	36.2	上下に廻し板 廻し板は2列 側板は1列に綴る 内面縦方向のケビキ 木釘残る
353	4区	413井戸	毬(未製品か)	2.7	2.3	2.3	上下小口をケズル・丸味をもたせる 側面は樹皮を剥ぐ 芯持材
354	4区	413井戸	毬(未製品か)	3.3	3.8	3.5	上下小口をケズル・丸味をもたせる 側面は樹皮を剥ぐ 芯持材
355	4区	413井戸	毬(未製品か)	3.9	4.0	3.9	上下小口をケズル・丸味をもたせる 側面は樹皮を剥ぐ 芯持材
399	4区	400土坑	用途不明木製品	0.3	(12.5)	2.6	板状を呈す 端部に小孔を穿つ 柱目材
400	4区	400土坑	用途不明木製品	1.5	(11.7)	2.2	断面長方形 棒状の端部側面に切り込みを入れる 381と類似 板目材
401	4区	459土坑	用途不明木製品	1.4	(5.4)	2.2	断面長方形 棒状の端部側面に切り込みを入れる 380と類似 板目材
423	7区	782溝(上)	用途不明木製品	—	11.5	2.1	槌状に端を削り出す 断面形はほぼ正円を呈す 1080と類似 芯持材
482	7区	1055ビット	礎板	4.0	15.0	17.0	両側面に切り込みを入れる
483	7区	1068ビット	下駄	(2.5)	(8.1)	(11.0)	後歯(2.3) 連歯下駄 平面楕円形 後歯の磨滅著しい
512	7区	787井戸	曲物	0.4	(18.4)	28.8	井筒 上下に廻し板 廻し板、側板は1列に綴る 内面にケビキ 最下部に木釘が残る
513	7区	787井戸	毬(未製品か)	4.4	4.5	4.5	上下小口・側面の一部ケズル 側面は樹皮を剥いだ状態多い 芯持材
514	7区	789井戸	曲物底板	0.6	11.1	(10.2)	小型 表裏面腐食 柱目材
538	7区	790土坑	箸	0.3	23.2	0.5	両端部を細く削り出す
539	7区	790土坑	箸	0.4	22.4	0.6	両端部を細く削り出す
540	7区	790土坑	箸	0.5	21.4	0.5	両端部を細く削り出す
541	7区	790土坑	箸	0.6	20.7	0.6	両端部を細く削り出す
542	7区	790土坑	箸	0.4	19.9	0.5	両端部を細く削り出す
543	7区	790土坑	箸	0.4	19.2	0.6	両端部を細く削り出す
544	7区	790土坑	箸	0.5	19.2	0.6	両端部を細く削り出す
668	7区	938土坑	毬	4.2	4.7	4.7	全面を削り球形に仕上げる 毬杖の球か 芯持材
669	7区	938土坑	毬(未製品か)	6.2	6.5	6.3	上下小口をケズル・丸味をもたせる 側面は樹皮を剥ぐ 芯持材
670	7区	938土坑	用途不明木製品	5.9	(14.5)	(11.1)	平面長方形 円形の穴
671	7区	782溝(下)	漆器蓋	—	(2.2)	—	内外面赤色 無紋
672	7区	938土坑	漆器椀	底径(6.8)	(4.0)	—	内外面黒色 外面に赤色で紋様を描く
673	7区	938土坑	漆器椀	—	—	—	内外面黒色 外面赤色で紅葉を描く
691	7区	940土坑	毬	7.9	8.5	(5.3)	全面を削り球形に仕上げる やや腐食 毬杖の球か 芯持材
709	7区	1009土坑	曲物底板	1.0	15.0	(12.0)	表裏面やや腐食 板目材
837	2区	41井戸	曲物 籠	0.5	(10.4)	38.0	1列5段以上で綴る 内面に側板の圧痕が残る 最下部に釘穴
838	2区	41井戸	曲物 籠	0.6	11.2	35.4	桜皮で1列8段で綴る 格子状のケビキ
839	2区	41井戸	曲物側板	0.6	(26.0)	34.2	桜皮で1列9段以上で綴る 最下部に釘穴 外面縦・斜め方向のケビキ
919	2区	41井戸	独染	1.2	—	5.5	中央部に円孔平面円形 断面は緩やかな円錐形 紡錘車の可能性 柱目材
920	2区	51井戸	曲物底板	0.5	(15.5)	(4.3)	両面にケビキ 柱目材
921	2区	51井戸	隅切折敷	0.4	(14.4)	(2.7)	底板 平面方形 桜皮2箇所残る 柱目材
922	2区	100井戸	曲物底板	0.8	(16.6)	(6.5)	片面焼痕 柱目材

923	2区	44溝	下駄	(0.9)	(12.3)	(7.1)	歯(前1.0 後1.3) 小型連歯下駄 平面楕円形 方形緒穴 両歯磨減着
924	2区	44溝	用途不明木製品	3.3	33.6	15.8	平面長方形 長方形の孔が2箇所 片面ハツリ痕 柱目材
925	2区	278ピット	礎板	6.5	17.5	11.6	自然面を多く残す 工具で方形状に抉る 芯持材
926	2区	218ピット	礎板	2.2	25.5	17.0	孔を1箇所有す 柱目材
990	5区	633土坑	用途不明木製品	4.0	(5.7)	4.3	両側面が窪む 柱目材
1071	8区	898土坑	用途不明木製品	(3.5)	(20.7)	(3.3)	楕状に頭部を削り出す 658と類似 芯持材

※()は残存寸法

表5 石製品計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			特徴・備考
				厚さ	長さ	幅	
21	1区	3a層	砥石	0.5	(6.5)	3.4	小型 小孔を穿つ 3側面を平滑に整える 携帯用か
110	7区	943溝	砥石	(1.7)	(6.9)	(3.4)	3面に使用痕 表面に筋状の痕
155	2区	2層	石鍋	底径(17.4)	高さ(4.6)	—	内外面に横方向のケズリ痕が残る 外面スス付着
156	2区	5層上層	砥石	(3.2)	(7.4)	(4.1)	溝状の使用痕
175	5区	北1b層	砥石	2.2	(5.1)	(2.1)	断面正方形 4面に使用痕
176	5区	北1b層	砥石	2.4	(5.5)	(4.9)	4面に使用痕
207	5区	1b層	糞子	—	—	—	1辺1.5~1.9cm 目は窪みに墨を入れ表す
224	8区	北半5層	石鍋	—	高さ(1.9)	—	底部のみ残存 小片
398	4区	400土坑	砥石	(2.7)	(13.6)	(7.3)	4面に湾曲する使用痕
530	7区	777土坑	硯	1.7	(8.1)	5.3	小型 陸部のみ残存
584	7区	924土坑	砥石	(1.6)	(4.4)	(4.0)	2面に使用痕 他欠損
667	7区	938土坑(上層)	砥石	(3.9)	(5.3)	(4.9)	4面に使用痕
424	7区	782溝(上層)	硯	1.2	(12.0)	(6.8)	表裏に墨付着
425	7区	782溝(上層)	砥石	(1.5)	(5.7)	(3.9)	3面に使用痕
426	7区	782溝(上層)	砥石	(1.4)	(6.5)	(3.0)	4面共にやや粗い使用痕
427	7区	782溝(上層)	茶臼	(11.0)	(17.6)	(10.9)	上臼 挽木を差し込む孔が残存 臼面欠損
440	7区	782溝(下層)	砥石	(2.6)	(5.2)	(3.6)	4面に使用痕
786	7区	943溝	砥石	0.8	(7.6)	(4.7)	4面に使用痕
946	5区	553ピット	砥石	1.1	(4.8)	(4.0)	3面に使用痕 筋状の痕が残る
989	5区	634土坑	砥石	(3.6)	(13.0)	(11.1)	4面に使用痕 面は大きく湾曲する
1080	8区	895溝	石鍋	—	高さ(6.1)	—	両側面切断 切り込み痕が残る 転用の可能性

※()は残存寸法

表6 土製品計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			特徴・備考
				長さ	最大幅	最小幅	
194	5区	南1層	トチン	3.5	3.0	1.7	瓦質 支脚形 型づくり
916	2区	164井戸(井戸枠)	土鏝	5.3	3.5	2.2	管状土鏝 楕円形 全体ユビオサエ・ナデ
1046	5区	467土坑	土鏝	3.5	0.8	0.3	管状土鏝 長楕円形 両端やや細く窄まる

表7 金属製品計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	種類	寸法(cm)			特徴・備考
				長さ	厚さ	幅	
529	7区	777土坑(下層)	釘	(5.4)	0.2	0.4	断面四角形 胴部下半は折れ曲がる 復元長は3.1cm
441	7区	782溝(下層)	鏡	径7.3	0.2~0.5	—	菊花散双鶴鏡 紐は亀形 界圍無 紐の径0.8cm・厚さ0.35cm・周縁厚0.5cm・幅2.5cm
1072	8区	887土坑	錐	9.7	0.4	0.4	断面四角形 両端部は細く尖る 一端に木質が残る

※()は残存寸法

表8 刀子計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	寸法(cm)					特徴・備考
			厚さ	身部長	身部最大幅	茎部厚	茎部長	
248	3区	南高まり2層	0.3	(16.3)	2.3	2.5	(3.1)	棟区が無く一直線に伸びる
577	7区	924土坑	0.3	(6.8)	2.0(闊部)	0.3	7.2	棟にも使用痕跡が残る
1038	5区	469井戸(上層)	0.6	(15.6)	2.6(闊部)	0.3	7.5	目釘穴が残る

※()は残存寸法

表9 錢貨計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	種類	初鑄年	寸法 (mm)			残存率	書体
					直径	孔径	厚さ		
14	1区	2aiii層	崇寧通寶	1102	34.5	8.8	2.9	4/5	—
61	4区	3層上面	元符通寶	1098	24	6.8	1.0	完存	篆書
62	4区	3a層上面耕作溝	元豐通寶	1078	22.1	6.2	1.0	完存	行書
208	5区	南半1層	大觀通寶	1107	24.9	6.9	1.0	2/3	—
209	5区	中央1層	元符通寶	1098	23.2	6.5	1.0	完存	行書
210	5区	北端1層	元豐通寶	1078	24.3	7.0	1.1	完存	行書
211	5区	南半1層	皇宋通寶	1039	24.5	7.1	1.1	完存	篆書
212	5区	南半1b層	熙寧元寶	1068	24	7.2	1.2	完存	篆書
213	5区	中央2層下部	天聖元寶	1023	24	6.9	0.8	1/2	篆書
229	8区	アゼ南1層	淳化元寶	990	22	7.5	1.2	完存	真書
247	3区	第1層上面精査	元符通寶	1098	24.7	7.5	1.1	完存	篆書
784	7区	943溝	淳化元寶	990	24.2	5.8	1.1	完存	行書
785	7区	943溝	政和通寶	1111	25.5	5.7	1.2	完存	篆書
816	2区	169ピット	開元通寶	621	24	6.5	1.2	完存	—
817	2区	169ピット	至道元寶	995	25	5.9	0.9	完存	行書
956	5区	638落込	元豐通寶	1078	24.1	7.2	1.1	4/5	行書

表10 軒丸瓦計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	寸法 (cm)					瓦当紋様
			瓦当径	瓦当厚	外縁高	外縁幅	全長	
123	7区	1層	(10.4)	2.3	0.8	1.3	(6.8)	巴紋(左)
125	7区	2層	(11.5)	1.6	0.6	0.9	(2.8)	単弁八葉蓮華紋
126	7区	2層	(2.8)	—	1.1	1.3	(1.7)	巴紋(左)
127	7区	3a-2層	(7.2)	2.3	1.5	1.9	(3.8)	巴紋(右)
128	7区	3a-2層	(5.2)	(6.6)	1.0	1.1	(3.3)	巴紋
656	7区	938土坑	(9.3)	(5.0)	—	—	(2.1)	複弁蓮華紋
692	7区	940土坑	(6.9)	4.8	0.7	1.3	(4.0)	単弁八葉蓮華紋
693	7区	940土坑	(6.6)	(5.3)	1.2	1.2	(4.7)	巴紋(右)
442	7区	782溝上	(5.8)	1.7	—	—	(2.2)	巴紋(左)
443	7区	782溝上	(2.9)	1.7	1.1~1.2	2.0	(2.9)	巴紋(左)
444	7区	782溝上	(10.8)	2.0	—	—	(3.4)	巴紋(左)
454	7区	782層下	(7.1)	2.0	1.3	1.8	(7.1)	巴紋(左)
455	7区	782層下	(5.3)	2.1	1.0~1.1	1.1	(3.1)	巴紋(左)
456	7区	782溝下	(12.7)	2.5	0.9	1.0	(4.5)	巴紋
457	7区	782溝下	(5.4)	1.5	0.9~1.1	1.0	2.6	複弁蓮華紋
915	2区	55溝上	14.7	2.8	1.5	1.8	(15.6)	巴紋(右)

※()は残存寸法

表11 軒平瓦計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	寸法 (cm)								瓦当紋様
			瓦当厚	瓦当幅	周縁高	右左側区短	顎下端厚	顎深	平瓦部厚	全長	
22	1区	3a層	(3.5)	(11.2)	0.6	(2.0)	2.5	2.0	—	—	唐草紋
63	4区	3a層	3.9	(8.7)	0.3	左1.2	1.5	2.5	1.5	(10.0)	半裁花菱紋
124	7区	1層	(2.0)	(14.5)	0.3	—	—	—	2.4	(13.1)	蓮珠紋
501	7区	787井戸(6段目内)	(4.7)	(14.0)	0.8	—	(0.8)	3.1	1.9	(8.0)	唐草紋
567	7区	854土坑(下)	3.3	(12.7)	0.3	—	2.1	2.1	1.7	(12.1)	半裁花菱紋
657	7区	938土坑	(2.1)	(11.3)	(0.6)	右0.8	2.5	(2.4)	—	(2.1)	唐草紋
658	7区	938土坑	5.1	(8.0)	0.5	左1.0	2.5	(2.2)	—	(2.6)	唐草紋
659	7区	938土坑	(4.0)	(12.7)	(0.6)	左0.4	3.4	(3.2)	—	(6.0)	唐草紋
660	7区	938土坑	5.2	(13.5)	0.6	右1.4	3.0	2.5	2.0	(17.3)	唐草紋
661	7区	938土坑	5.7	(13.7)	0.6	右1.4	2.7	3.5	2.5	(16.8)	唐草紋
694	7区	940土坑	4.3	(13.9)	0.3	左0.8	1.5	2.2	1.6	(7.9)	巴紋
458	7区	782溝下	(2.6)	4.0	—	—	—	—	(2.4)	(8.1)	唐草紋
459	7区	782溝下	(4.9)	(7.5)	—	(右1.5)	(1.0)	2.3	2.4	(5.5)	唐草紋
460	7区	782溝下	5.0	(7.2)	(0.6)	右1.8	2.8	2.1	—	3.5	唐草紋

※()は残存寸法

表 12 丸瓦・平瓦・道具瓦計測表

挿図番号	調査区	遺構・層	種類	寸法 (cm)			特徴・備考
				長さ	幅	厚さ	
27	1区	3a層	平瓦	30.2	22.9	2.5	広端部側に釘穴 凹面狭端部横位のナデ
129	7区	3a-2層	平瓦	(12.2)	(10.6)	2.2	凸面幾何学的な紋様のタタキ
154	2区	2層	平瓦	(10.1)	(12.2)	2.0	凸面縄タタキ 凹面布目・枠板痕
1008	5区	703土坑	丸瓦	(9.7)	(6.4)	1.8	玉縁長2.8cm 凸面ケズリ・ナデ
251	1区	18溝	雁振瓦	(12.4)	(10.9)	2.8	凸面ナデ 凹面布目
252	1区	18溝下層	雁振瓦	(11.2)	(19.6)	3.3	凸面ナデ 凹面布目 コビキ痕
253	1区	18溝下層	雁振瓦	(11.2)	(10.8)	2.7	凸面ナデ 凹面布目 コビキ痕
254	1区	20土坑	雁振瓦	(11.4)	(8.4)	2.7	凸面ナデ 凹面布目
332	4区	402井戸上層	平瓦	(9.7)	(13.6)	2.9	凸面縄タタキ 凹面布目
333	4区	404井戸	平瓦	(13.8)	(14.0)	2.4	凸面縄タタキ 凹面布目
445	7区	782溝上層	丸瓦	(17.9)	(10.9)	3.1	玉縁長6.4cm 凸面ケズリ 凹面布目
446	7区	782溝上層	丸瓦	(8.0)	(7.1)	3.0	凹面布目 焼成軟 狭端面円形スタンプ紋
447	7区	782溝上層	平瓦	(13.4)	(10.2)	2.5	釘穴が残る
448	7区	782溝上層	平瓦	(8.4)	(11.8)	1.7	凸面格子タタキ
449	7区	782溝上層	平瓦	(9.7)	(11.1)	1.8	凸面格子タタキ
450	7区	782溝上層	平瓦	(11.1)	(11.9)	2.0	凸面縄タタキ 凹面布目
451	7区	782溝上層	平瓦	(13.9)	(10.0)	2.3	凸面縄タタキ 凹面布目
452	7区	782溝上層	雁振瓦	(9.1)	(13.4)	3.0	凹面コビキ・ナデ 狭端面円形スタンプ紋
453	7区	782溝上層	雁振瓦	(19.8)	(17.4)	1.8	玉縁長4.1cm 凹面布目・ナデ
461	7区	782溝下層	丸瓦	(8.2)	(7.3)	1.7	玉縁長7.6cm 凹面布目 釘穴
462	7区	782溝下層	丸瓦	(12.9)	(11.6)	7.0	玉縁長5.8cm 凹面布目 狭端部円形スタンプ紋
463	7区	782溝下層	丸瓦	(14.0)	(10.6)	2.4	凸面縄タタキ・ナデ 凹面布目
464	7区	782溝下層	平瓦	(11.0)	(9.7)	1.5	凸面格子タタキ 凹面格子痕
465	7区	782溝下層	平瓦	(11.2)	(9.9)	2.0	凸面縄タタキ 凹面布目
466	7区	782溝下層	平瓦	(10.7)	(6.8)	1.8	凸面格子タタキ・ナデ 凹面コビキ痕
467	7区	782溝下層	平瓦	(12.4)	(7.1)	1.9	凸面縄タタキ 凹面布目
468	7区	782溝下層	平瓦	(13.2)	(8.4)	2.1	凸面正方形の中に×を施したタタキ 凹面布目
469	7区	782溝下層	平瓦	(13.7)	(11.2)	2.0	凸面「×」の線刻 凹面布目 釘穴
470	7区	782溝下層	平瓦	(15.7)	(10.8)	2.1	凸面格子タタキ
471	7区	782溝下層	平瓦	(14.5)	(16.9)	1.6	凸面縄タタキ 凹面布目
472	7区	782溝下層	平瓦	(12.7)	(9.3)	1.7	凸面ケズリ
473	7区	782溝下層	雁振瓦	(23.2)	(15.7)	2.9	凹面コビキ痕
474	7区	782溝下層	雁振瓦	(25.3)	(20.1)	3.3	玉縁長5.5cm 凹面布目 狭端面円形スタンプ紋
508	7区	789井戸掘方	雁振瓦	(10.7)	(13.0)	2.4	凸面ナデ 凹面コビキ痕
568	7区	854土坑	平瓦	(13.5)	(10.2)	2.4	凸面縄タタキ 凹面布目
662	7区	938土坑	丸瓦	(12.9)	(10.9)	1.9	行基式 凸面縄タタキ・ナデ 凹面布目
663	7区	938土坑	丸瓦	(12.3)	(10.1)	1.4	玉縁長3.1cm 凸面縄タタキ 凹面布目
664	7区	938土坑	平瓦	(10.7)	(8.9)	2.0	凸面格子タタキ
665	7区	938土坑	平瓦	(20.4)	(12.8)	2.1	凸面縄タタキ 凹面布目 焼成軟 胎土粗
666	7区	938土坑	平瓦	(11.7)	(11.6)	2.1	凸面格子タタキ 凹面布目・ナデ
695	7区	940土坑	平瓦	(11.2)	(7.6)	2.1	凸面格子タタキ 凹面布目
696	7区	940土坑	平瓦	(14.2)	(10.7)	1.9	凸面縄タタキ・ナデ 凹面布目
708	7区	1009土坑	平瓦	(14.6)	(9.6)	1.4	凸面縄タタキ・ナデ 凹面布目
718	7区	919溝	平瓦	(12.7)	(11.9)	1.9	凸面縄タタキ 凹面コビキ痕 強いナデ
719	7区	919溝	丸瓦	(14.9)	(9.2)	1.4	凸面縄タタキ・ナデ 凹面布目
781	7区	943溝	平瓦	(10.3)	(14.3)	1.8	凸・凹面ナデ
782	7区	943溝	平瓦	(10.3)	(9.3)	1.9	凸面格子タタキ・ナデ 凹面ナデ
783	7区	943溝	平瓦	(11.2)	(12.2)	1.9	凸面格子タタキ
913	7区	51井戸	平瓦	(14.5)	(10.4)	2.1	凸面縄タタキ 凹面布目 粘土を重ねた痕
914	7区	165土坑	平瓦	(32.3)	(18.0)	2.3	凸面格子タタキ・ナデ 凹面布目
917	7区	54溝上層	雁振瓦	(15.4)	(10.7)	2.7	凸・凹面ナデ
918	7区	73ピット	平瓦	(10.6)	(15.4)	2.2	凸・凹面ナデ

*計測値は平置きした状態での寸法、()は残存寸法

第4章 巢本遺跡06-1の調査成果

第1節 調査区の設定

巢本遺跡03-1・03-2で調査が実施できなかった地域を対象に、巢本遺跡06-1として平成18年11月13日～平成19年7月25日まで調査を実施した。調査対象地域は、以前に03-1・03-2で調査を行った延長約350mの範囲内に散在している。今回は、調査を開始した時点で本体工事が既に開始されており、工事の進捗状況を考慮しながら調査を進展させなければならない状況であった。調査区名は当初、南側から順番に1区・2区・・・、最北を10区とし地区割りをを行い、さらには調査の都合により6-1区、6-2区、7-1区などのように調査区を小さく細分しながら調査することとなった(図143参照)。しかし次頁以降で行った調査成果の記述においては細分した小調査区はまとめることとし、1区・・・5区・6区・・・など、大調査区を単位として記述した。

対象地域は現代の盛り土が厚く堆積しており、厚いところでは1m以上にも及ぶ。調査はこれらの土を重機で掘削するところから開始し、それ以下の土層については人力での掘削を行った。

第2節 基本層序

巢本遺跡06-1調査は、03-1および03-2で調査ができなかった部分が対象であり、全ての調査区が03-1・03-2で調査を実施した箇所に隣接している。堆積土の層序は基本的に変わらないが、今回の調査区に限定して基本層序を柱状図であらわしたのが図143である。

巢本遺跡で主体となる中世遺構群は灰～オリーブ～緑灰色のシルトや粘土層上に構築されている。調査区の中でも1・9・10区などは粘土層の上に掘立柱建物などの中世遺構群が形成されており、中世遺構群の基盤面上を遺物包含層が被覆している層位状況である。これら包含層は中世基盤面に近い部分では多くの中世遺物を含んでいる。しかしながら、当該地域は後世の開発に伴う攪乱が激しく、6・7区などでは遺構面直上まで攪乱がおよんでおり、現代の盛り土を除去するとすぐ遺構面が露出するような状況であった。

中世基盤面よりも下は、基本的に遺構、遺物などの検出はなく、粘土層と砂層の堆積がみられたのみであった。それでは各調査区毎に簡略に堆積土の状況を記述したい。

1. 1区・2区

1層 灰色シルトを主体とする層であり、調査区全域において現代の盛り土直下で検出されている。調査区北側で検出された柱穴や土坑、溝などは、本来1層上面で形成された遺構が多いものと思われる。

2層 灰色のシルト層を主体とする層である。調査区全域に広がりを見せており、13～14世紀頃の遺物を含んでいる。

3層 黒色系統の粘土を主体とする層である。調査区南側で検出された井戸などの遺構の基盤となる層であり、東西方向の畦畔も3層を基盤として形成されている。

2. 5 区

1層 暗緑灰色系統のシルト層を主体とし、層中に砂や墨などを含んでいる。後世の攪乱により、部分的に残存するのみであるが、かつての耕作土層であった可能性がある。上面のレベルは T.P. + 0.5 m を前後する。

2層 黒～オリーブ色系統の粘土層を主体とする。調査区西側で検出されるのみであるが、中世遺構群の被覆層であり、層中には中世遺物を含んでいる。

3層 オリーブ黒色粘土層を主体とする層である。比較的安定した層であり、層厚 0.3～0.4 m に及ぶ。中世遺構群の基盤層で、レベルは T.P. 0 m を前後する。

3. 6 区

1層 中世遺構群の基盤となる層位で、緑灰色で砂混じりのシルトである。6区でも北側になると砂分が多くなる傾向がある。またこの上面の中世遺構面は標高 T.P. + 1.4 m を前後する。

2層 緑灰～暗オリーブ灰色のシルト層である。鉄分の沈着が見られる。遺物を包含している状況は確認できなかった。

4. 7 区

1層 盛り土直下で検出された中世遺構群の基盤層である。上面は T.P. + 1.1 m を前後し、灰色シルトなどで構成される層である。

5. 8 区・9 区

1層・2層 近年の耕作土層である。攪乱により消失している部分も多く、わずかに確認されるのみである。上面は T.P. + 1.8 m を前後する。

3層 耕作土である。これも攪乱がひどく、部分的に残存するのみである。マンガンなども多量に含む部分がある。

4層 中世時期の耕作土層と思われる。砂を含む黄褐色粘質土層であり、巢本遺跡北部では比較的安定して形成された層位である。

5層 灰色粘土層である。砂を含んでおり、中世ピット群を被覆している。

6層 中世遺構群の基盤となる層である。灰色粘土～シルト層を主体とする。T.P. + 1.1 m 前後を基盤とする層位である。

6. 10 区

1・2層 盛り土直下にある層で暗オリーブ灰色や褐色シルトを主体とする。マンガン、酸化鉄などの含浸がみられる。旧耕作土層と思われる。この上面は T.P. + 1.7 m を前後するレベルである。

3層 褐色粘質シルトを主体とする。1060 堤や 1057 土坑の被覆層である。この層の下面は T.P. + 1.1 m を前後するレベルである。

4層 砂混じりの灰色シルト層を主体としており、中世時期の遺物を含んでいる。1056 土坑や 1057 土坑により切られており、堤との関連性は確実ではないが、遺物が中世主体であることを考えると、別の遺構の埋土であった可能性もある。

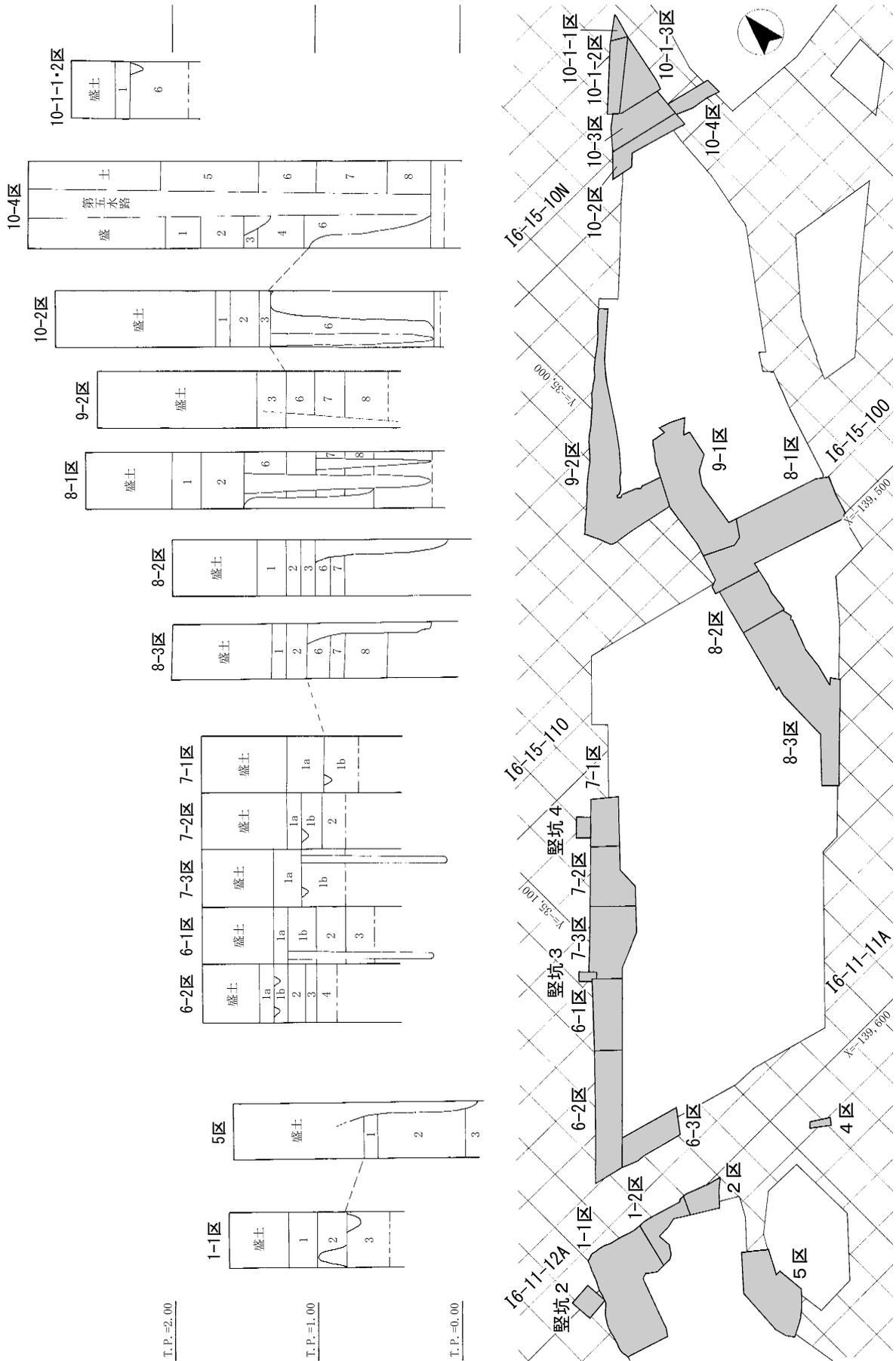


図 143 調査区配置図及び土層柱状図

5層 堤の基礎と思われる土盛り構築のベースとなる砂層である。灰色の砂層であるが、シルトの混じった部分もある。この砂層の上に堤の基礎部分が構築されている。10区内でも西側は比較的厚いが、東側はうすくなっている。

6層 10区が一番底で確認された層である。暗オリーブ褐色粘土で、上面のレベルは T.P. + 0.4 m を前後する。

第3節 遺構と遺物

1. 1区・2区 (図145)

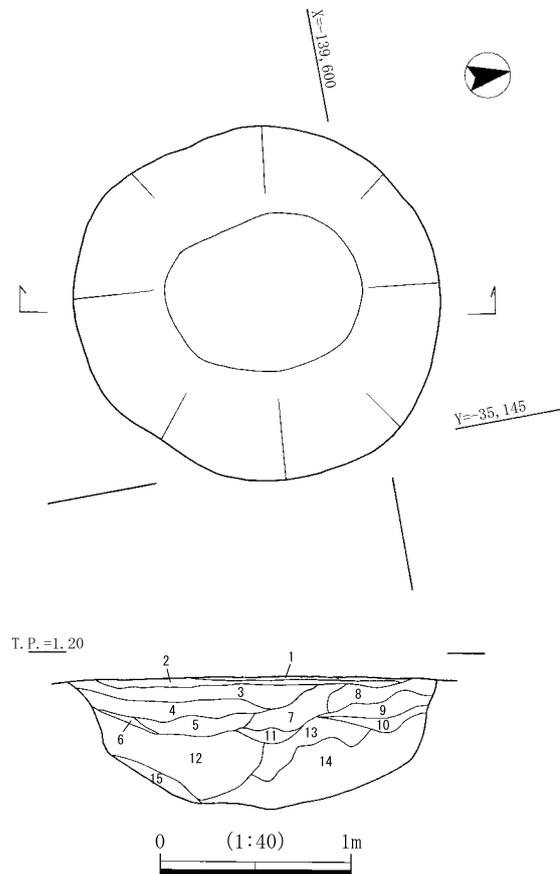
府道守口・門真線の南側の調査区であり、渠本遺跡の中では最南端の調査区にあたる。隣接する03-2の8区北側では多数の掘立柱建物群や溝、畦畔などが発見されており、今回の調査区でも掘立柱建物群や溝、畦畔の続き部分が検出されている。今回調査を実施した調査区の中では一番ピットが集中している調査区である。調査区北側では多くのピット群や土坑群がみられ、複数時期の遺構が混在して検出された可能性がある。調査区南側は北側よりもレベル的に低くなっており、畦畔や井戸などは見られるものの、遺構分布状況は散漫である。畦畔は調査区の南端付近で東西方向に走っており、それよりも南側は生産域に属するものと推測される。これら遺構群は、03-2調査の第3層上面遺構群に対応するものと思われる。

1層上面遺構群

74土坑 (図144) 調査区北東隅近く (12 B 5 a) で発見された土坑であり、南北2 m、深さ0.65 mで、内部には灰～オリーブ色系統のシルトや粘土層がレンズ状に堆積し、全体的に砂を含んでいる。遺物としては、瓦器、土師器皿、白磁碗などが出土している。

遺物 (図147-1~10) 土師器皿である。1は口径12 cmの大きな皿で口縁から口縁端部から下方2分の1くらいのところまでナデが施されている。2~10は口径8.5 cmを測り、口縁から下方3分の2くらいまでナデが施されているものが多い。

70溝 (図146) 1区の北部 (12 A 5 j・6 j) で検出された南北方向の溝である。幅0.3 m、深さ0.1 mで、灰～オリーブ色系統のシルトを埋土とする。瓦器碗、瓦質羽釜などが出土している。



1. 暗緑灰	7.5GY4/1	シルト (炭含む)
2. 灰	5Y4/1	シルト (酸化鉄多い)
3. 暗オリーブ灰	5GY4/1	粘質土 (ブロック状に粘土含む)
4. 灰	10Y4/1	粘質土 (粗砂含む)
5. 灰	10Y4/1	粘質土 (シルト～粗砂)
6. 黒褐	2.5Y3/1	粘質土 (粗砂含む)
7. 暗オリーブ灰	5GY4/1	砂 (粘土ブロック含む)
8. 暗オリーブ灰	2.5GY4/1	粘質土 (粗砂含む)
9. 灰	10Y4/1	粘土 (シルト、炭含む)
10. 暗緑灰	7.5GY4/1	シルト
11. 灰	7.5Y4/1	粘土
12. 灰	7.5Y4/1	粘土 (粗砂含む)
13. オリーブ黒	5Y3/1	粘質土 (砂含む)
14. 暗緑灰	7.5GY4/1	粘土
15. オリーブ黒	5Y3/1	粘質土 (シルト～炭含む)

図144 74土坑平面・断面図

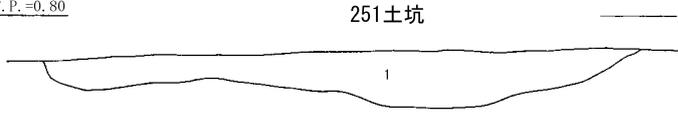


图 145 1·2区遺構平面図

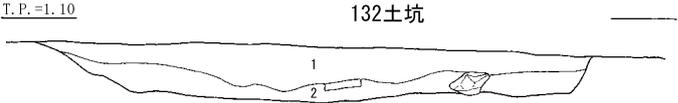
T.P.=1.20



T.P.=0.80



T.P.=1.10



137土坑・161土坑・70溝

- | | | |
|-----------|----------|-------------|
| 1. 暗緑灰 | 7.5GY4/1 | シルト (細レキ含む) |
| 2. オリーブ黒 | 5GY2/1 | シルト (細砂含む) |
| 3. 黄灰 | 2.5Y4/1 | シルト |
| 4. 暗緑灰 | 7.5GY4/1 | シルト |
| 5. 黄灰 | 2.5Y4/1 | シルト (炭含む) |
| 6. 暗オリーブ灰 | 5GY4/1 | シルト |

251土坑

- | | | |
|-----------|--------|----------------|
| 1. 暗オリーブ灰 | 5GY3/1 | シルト (砂、植物遺体含む) |
|-----------|--------|----------------|

132土坑

- | | | |
|-----------|----------|-----|
| 1. 暗オリーブ灰 | 2.5GY4/1 | シルト |
| 2. 緑灰 | 7.5GY5/1 | シルト |

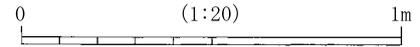


図 146 70 溝・132・137・161・251 土坑断面図

遺物 (図 147 - 11) 土師器皿である。口径 6.7 cm をはかる。上部半分くらいのところまでナデが施されており、底は若干窪められている。

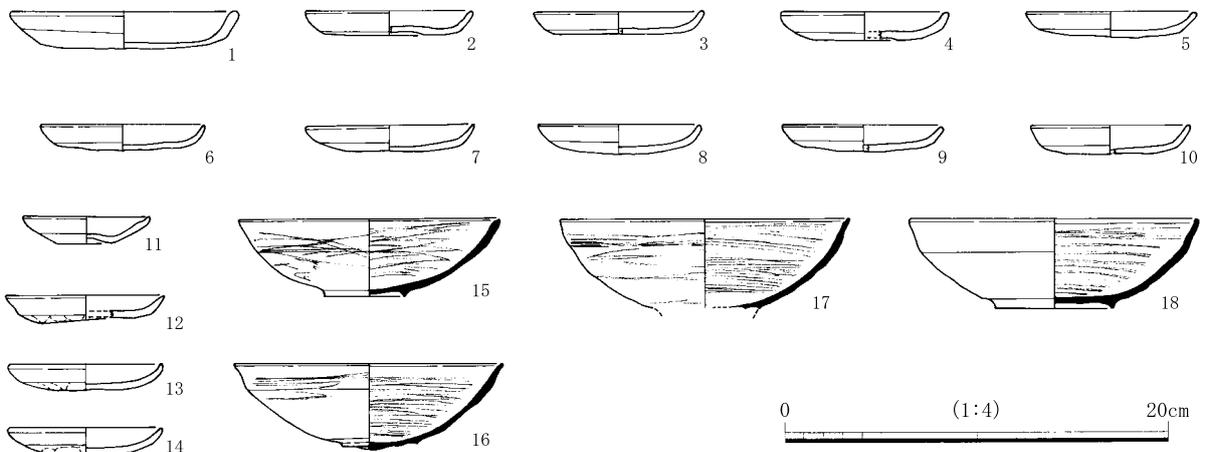
132 土坑 (図 146) 1 区中央部付近 (12 B 6 a) に所在する土坑である。東西 0.6 m、南北 1.6 m の細長い土坑で、深さは 25 cm 程度である。埋土は暗オリーブ～緑灰色シルトで、細砂、砂などを含んでおり、遺物としては瓦器椀、土師器皿などが出土している。

137 土坑 (図 146) 調査区北側中央部 (12 B 6 a) に所在する土坑で 70 溝に切られている。平面は略四角形で東西、南北ともに約 2.5 m、深さは約 0.1 m である。内部には暗灰色～オリーブ色のシルトが堆積しており、炭状の炭化物も含まれていた。遺物は土師器皿の細片が若干出土したのみである。

209 土坑 12 B 6 a・6 b に所在する土坑である。東西幅 1.6 m、南北幅 2.6 m で南北方向に細長く伸びており、深さは約 0.1 m である。内部からは土師器皿が出土している。

251 土坑 (図 146) 1 区南東部 (12 B 7 a) に所在する土坑である。東西方向の畦畔を上から切り込みながら、半分調査区東壁にかかるような形で検出されている。南北 4.3 m、深さ 0.2 m で、内部には暗オリーブ灰色シルトが堆積している。遺物としては瓦器椀、土師器皿などが出土している。

604 土坑 1 区と 2 区の間地点である 12 B 5 a に所在する。幅約 2 m、深さ 0.4 m ほどの土坑である。遺構面から 1.5 m 下のレベルまでは確認できたが、それよりも下はどれだけ続くのか確認できなかった。



1～10：74 土坑 11：70 溝 12～16：604 土坑 17：252 土坑 18：76 土坑

図 147 74・76・252・604 土坑・70 溝出土遺物実測図

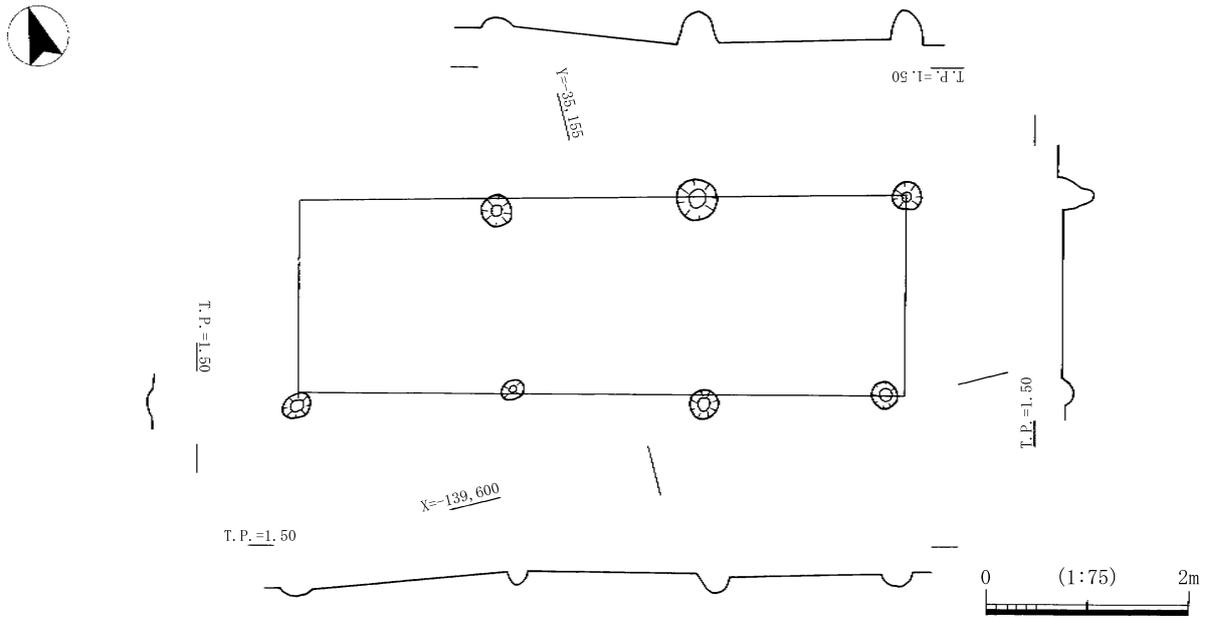
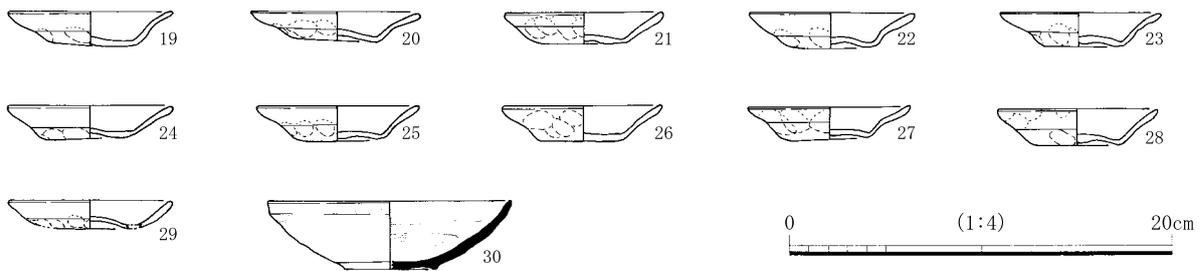


図 148 掘立柱建物 10 平面・断面図



19～29：111ピット 30：140ピット

図 149 111・140ピット出土遺物実測図

断面形は上から1m下の地点までは腕形のように屈曲しているのであるが、それよりも下については壁が垂直に落ちるような形になっている。内部には灰～黒～オリーブ色系統の粘土やシルトが幾層にも重なっていた。

遺物（図 147 - 12～16） 12～14は土師器皿である。3枚とも口径8cm前後であり、口縁はゆるやかに内反気味に立ち上がり、上から下に3分の2くらいのところまでナデが施されている。15～16は瓦器碗であり、内面には細かな暗文があり、外面にも若干ミガキが施されている。

252土坑 1区南部、畦畔のすぐ北側（12 B 6 a）に所在する土坑である。南北3m、東西1.7mの、若干南北方向に長い土坑であり、深さ0.55m、オリーブ黒～暗緑灰色のシルトや粘質土が堆積している。

遺物（図 147 - 17） 瓦器碗である。内面には細かな暗文

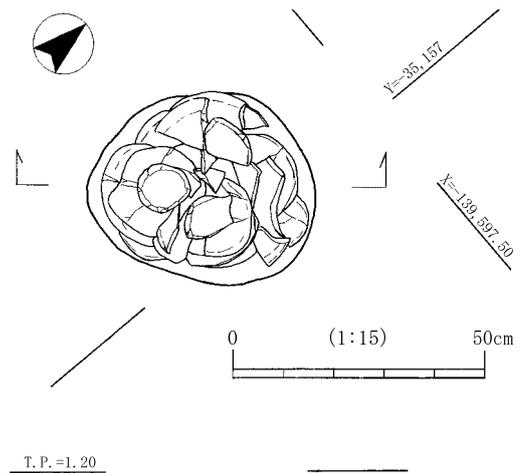


図 150 111ピット平面・断面図

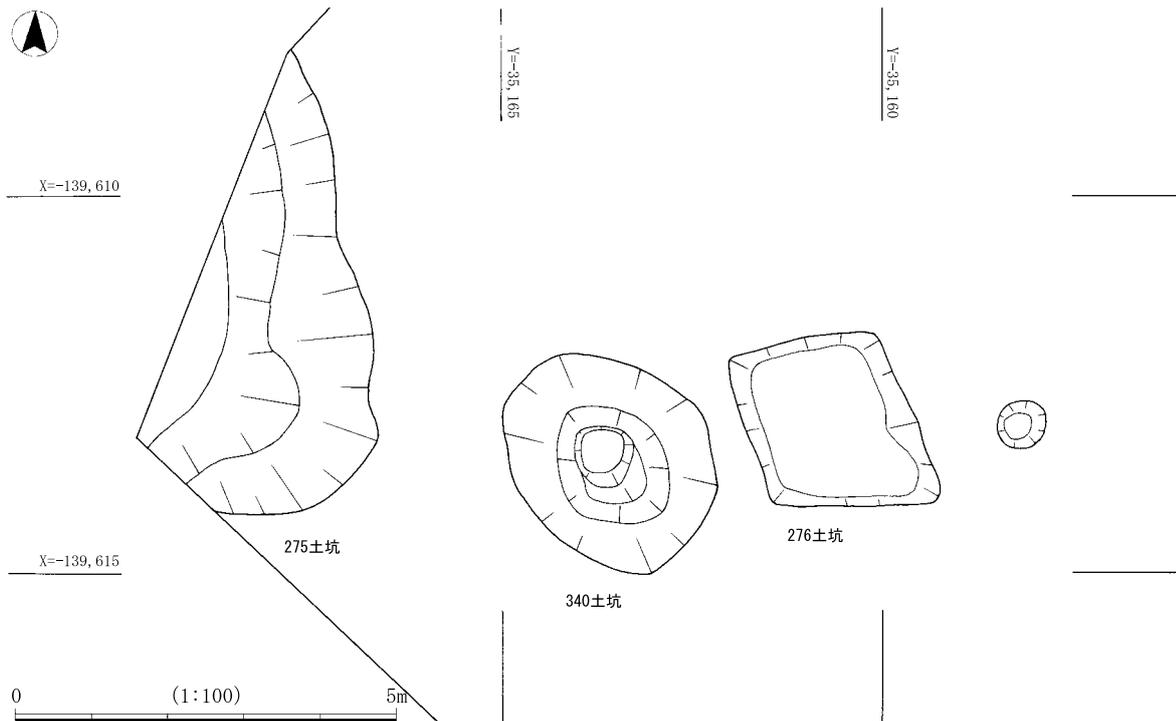
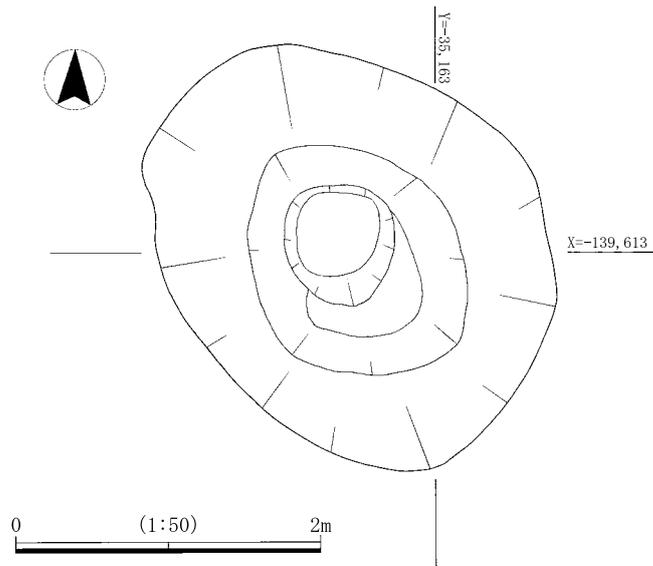
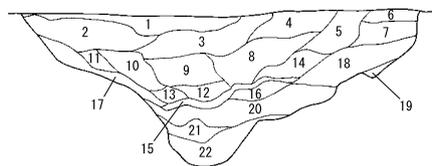


図 151 630 畦畔下部検出遺構平面図



T.P.=0.80



- | | | | | | |
|----------|----------|-------------|-----------|----------|--------------|
| 1. 暗オリブ灰 | 5GY3/1 | シルト | 12. 暗オリブ灰 | 5GY4/1 | 粘土 |
| 2. オリブ黒 | 7.5Y3/1 | シルト | 13. 暗オリブ灰 | 2.5GY3/1 | 粘土 |
| 3. オリブ黒 | 10Y3/2 | シルト | 14. オリブ黒 | 7.5Y3/2 | 粘土 |
| 4. オリブ黒 | 7.5Y3/1 | シルト | 15. オリブ黒 | 5Y2/2 | 粘質土 (植物遺体含む) |
| 5. オリブ黒 | 10Y3/2 | シルト | 16. オリブ黒 | 5Y3/1 | 粘土 (細砂含む) |
| 6. 暗オリブ灰 | 5GY3/1 | シルト | 17. オリブ黒 | 7.5Y3/1 | 粘土 (細砂含む) |
| 7. オリブ黒 | 7.5Y3/1 | 粘土 (細砂含む) | 18. オリブ黒 | 7.5Y3/1 | 粘土 |
| 8. 暗オリブ灰 | 2.5GY4/1 | 粘土 (砂混じり) | 19. 灰 | 5Y4/1 | シルト (植物遺体含む) |
| 9. 暗オリブ灰 | 5GY4/1 | 粘土 | 20. 黒 | 10Y2/1 | 粘土 (細砂含む) |
| 10. オリブ黒 | 7.5Y3/1 | 粘土 (植物遺体含む) | 21. 灰 | 7.5Y4/1 | 粘土 |
| 11. オリブ黒 | 7.5Y3/1 | シルト | 22. 灰 | 10Y4/1 | 粘土 |

図 152 340 土坑平面・断面図

が施されており、外面にも広範囲にミガキが施されている。

76 土坑 調査区北部 12 A 5 j に所在する土坑である。幅は東西 0.6 m、南北 0.4 m で、やや歪んだ形の土坑であり、深さは約 5 cm である。

遺物 (図 147 - 18) 瓦器碗である。口径 14.2 cm で器高は 4.8 cm、内面は疎らに暗文があるが、外面にはミガキはみられなかった。

掘立柱建物 10 (図 148) 1 区の北側に展開する掘立柱建物である。主軸は北から東へ約 14 度ばかり振れている。北西コーナーにあたる部分は調査区外になるので未検出であるが、梁行 1 間、桁行 3 間、梁行幅 3.9 m、桁行長 5.9 m の建物が想定され、桁行の柱の間隔は 1.8 ~ 2 m となる。柱穴は円形のものが多い。

111 ピット (図 150) 調査区北部 12 A 6 j に所在するピットで幅約

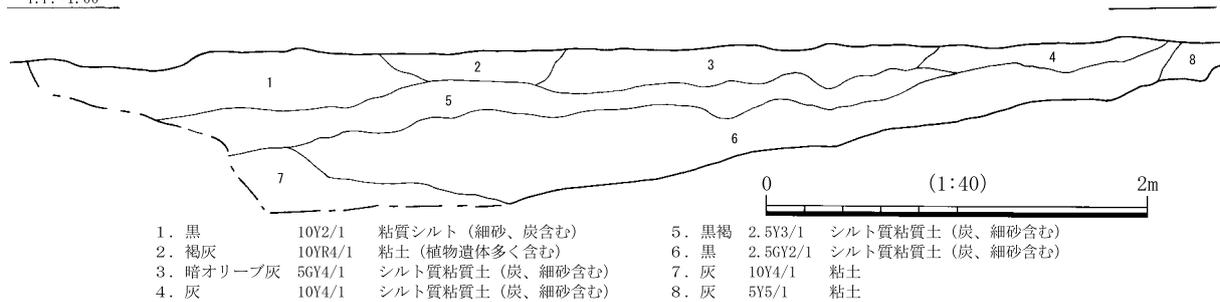


図 153 275 土坑断面図

0.4 m、深さ 5 cmをはかる。中から土師器皿が何枚も重なり合うような形で出土している。

遺物 (図 149 - 19 ~ 29) 土師器皿が 11 点ある。口径は 8.5 cm 前後、底部はやや窪んでおり、口縁部は外反気味に開く。上半部にはナデがあり、下半部には指圧痕が残されている。

140 ピット 12 B 5 a に所在するピットである。幅は東西 0.7 m、南北 0.5 m をはかり、深さは 0.1 m 程度である。

遺物 (図 149 - 30) 瓦器椀である。口径は 12.6 cm、器高は 3.6 cm である。底部には断面三角形になったわずかばかりの高台が付着し、内面には暗文がほどこされ、外面にはわずかばかりミガキが施されている。

3 層上面遺構群

630 畦畔 調査区南部 (12 B 7 b ・ 6 b) に所在する東西方向に走る畦畔であり、調査区南端を横断するような形で展開している。幅約 1.5 m、高さ約 0.3 m であり、灰色系統のシルトや粘土などを積み上げて形成されている畦畔である。畦畔の表面には酸化鉄などの沈着が顕著にみられた。耕作にかかわる畦畔であると推測される。

遺物 (図 154 - 33) 瓦器椀である。口径 13.8 cm、器高 4.2 cm で、内面には細かな暗文が、外面には疎らではあるがミガキの痕跡が残されている。

340 土坑 (図 152) 340 土坑は 1 区の南側 (12 B 7 b) に所在しており、東西 3 m、南北 2.5 m のやや横長の扁平な平面形の土坑である。深さは 1 m で、すり鉢状の断面形をしており、内部には黒～灰色系統のシルトや粘土がレンズ状に堆積しており、堆積土には植物遺体も含まれていた。内部から瓦器椀、瓦質羽釜などが出土している。この遺構も東西方向の畦畔の下より確認されており、畦畔よりも先行するものであることは間違いのない。井戸であった可能性もある。

遺物 (図 154 - 31・32) 31 は土師器皿で口径 4.4 cm、器高 1.2 cm、口縁から底部近くまでナデが施され、底部は若干窪んでいる。32 は瓦器皿である。口径 9 cm、器高 2 cm で、内面底部には螺旋状に暗文が残されている。

275 土坑 (図 153) 275 土坑は 1 区の西南隅 (12 B 7 b) に所在する土坑であり、調査区のコーナーにかかるように検出されている。東西方向の畦畔を除去したところから検出されており、明らかに畦畔に先行する遺構である。検出長は上幅で 6 m、深さは 0.9 m で、すり鉢状の断面形となっている。内部には灰色や黒色系統の粘土やシルト、砂などが重層的に堆積している。遺物としては土師器皿、瓦器椀、須恵器鉢などが出土している。

遺物 (図 154 - 34 ~ 35) 瓦器椀 2 点である。34 は口径は 12.4 cm、器高 3.7 cm、35 は口径 14.2 cm、器高 3.8 cm で、両方ともに底部には退化した形の高台がつき、内面には細かな暗文が施され、外面にもミガキが



31・32：340 土坑 33：630 畦畔 34・35：275 土坑

図 154 340・275 土坑・630 畦畔出土遺物実測図

施されていた。

2. 竪坑 2 (図 145)

1 区のすぐ西側に所在する竪坑である。1 m 以上もの盛土を除去した直下で、南北方向に走る畦畔状の高まりを検出した。畦畔状の高まりの両側の堆積土からは、13～15 世紀にかけての遺物が出土している。

3. 4 区 (図 155)

5 区の北東に位置する約 10 m²の小さな調査区である。盛り土を地表面より 1.5 m 近くを重機で除去すると、標高 T.P. + 1.4 m 前後で灰色粘土およびその下から砂層を検出した。遺構は何も検出されず、遺物も発見されなかった。砂層は北側が高く、南に向かって下がっており、その上に灰色粘土層が堆積していた。溝や河道の内部にあたっている可能性もある。

4. 5 区 (図 155)

03 - 2 調査の 2 区と 5 区の間にある調査区である。東側に隣接する調査区 (03 - 2 の 2 区) の西端で検出された 2 つの大型遺構の西側の続き部分が検出されている (296 溝、297 土坑)。296 溝は南北方向の溝であり、それを 297 土坑が斜めに切っているような形である。

3 層上面遺構群

296 溝 南北方向の溝であり 12 B 4 d・3 d・4 e・5 e に所在する。296 溝の東側の肩部は 03 - 2 の 2 区で検出されており、今回の調査区ではそれよりも西側の部分のみが検出されている。幅は 10 m 近くあり、深さは 1 m 近くになる。堆積土は灰～オリーブ黒色粘土が主体であり、底部には植物遺体も多量に堆積している。13～15 世紀代の遺物を含んでおり、北側で 297 土坑と重複している。瓦質羽釜、土師器皿などが出土している。

297 土坑 調査区北側 (12 B 3 c・4 c) で検出された東北～南西方向の土坑であり、東側に隣接する調査区に続くものである。調査区の西端で垂直にたちあがり完結している。296 溝を切っており、幅は 3 m 以上、深さは約 1 m である。堆積土はオリーブ系統の粘土を主体としながらレンズ状に堆積している。遺物は 296 溝と同様に 13～15 世紀代の遺物を含む。

5. 6・7 区 (図 156・157)

03 - 2 調査の 7 区の西側の調査区である。居住域にあたるのか、多数のピット群および、蛇行する大溝の続き (400 溝)、大型土坑などを検出している。大溝の北側ではピット群が集中しており、6 区の南側では東西南北方向の小溝を検出した。後世の削平によって、盛土を除去するとすぐ中世遺構群が露出するような状況であり、近年の耕作土すらも残っていなかった。

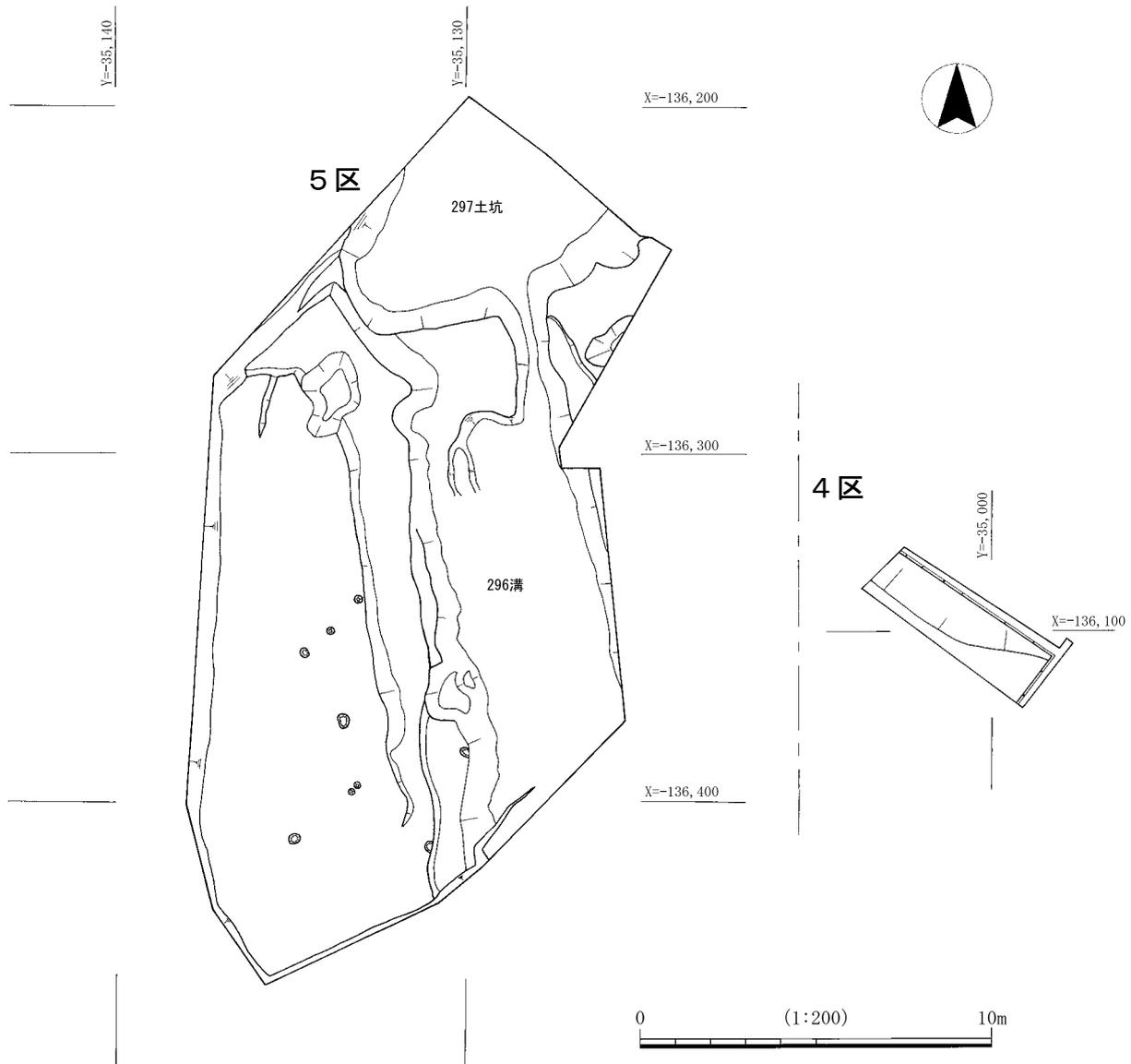


図 155 4・5区遺構平面図

1層上面遺構群

558 畦畔 400溝の西側に沿うように走る畦畔である。幅0.5～2m、高さは0.05～0.3mであり、南側が高くなり、北側は低くなっている。558畦畔よりも西側はこれと平行もしくは直行する小溝が多くなる傾向がある。

400 溝 03 - 2調査の7区で検出された782溝の続き部分である。東から西の方向へ進むこの溝は、流下する途中で屈曲を繰り返し、今回の調査区に進入するところで向きを北方向に変える。幅4～7m、深さ0.9～1m。堆積土は灰～オリーブ色の粘土や砂層が主体となり、何層も重なるようにレンズ状に堆積している。13～14世紀にかけての遺物が多く、瓦器、瓦質羽釜、須恵器鉢などを含んでいる。またこの溝の南に沿うように畦畔状の高まりがあり、それよりも南側には多数のピット群や溝などが検出されている。屋敷地の境界をかねた溝であった可能性がある。

遺物(図158 - 36・37) 土師器皿である。36は口径8.2cmで底部ぎりぎりのところまでナデを施すものである。37は口径15.6cmの大型のものである。

342 溝 6区南側(12 A 5 i)にある溝で、東西方向を向いている。検出長8m、幅1m、深さ0.15mで、



图 156 6区遺構平面図

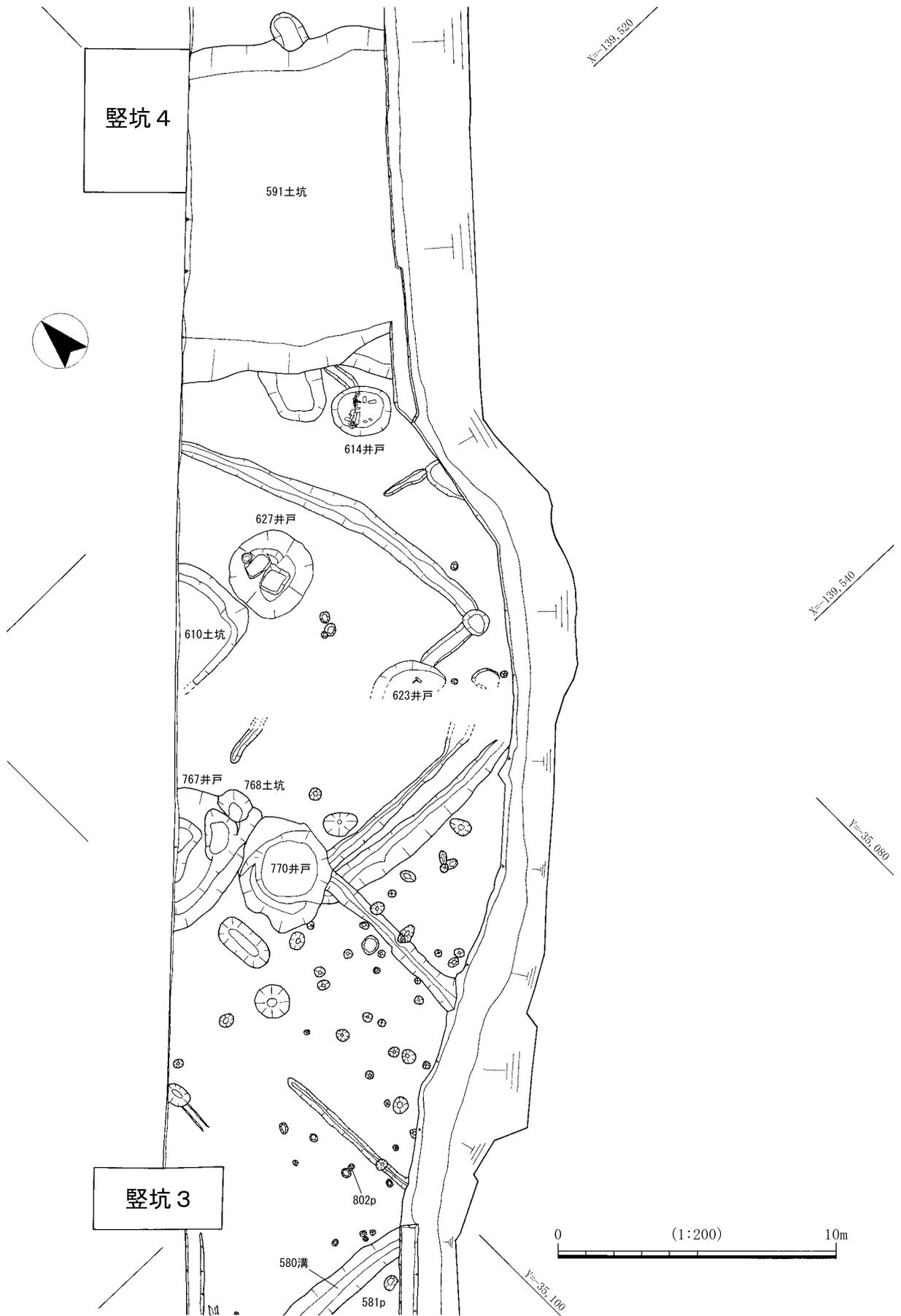
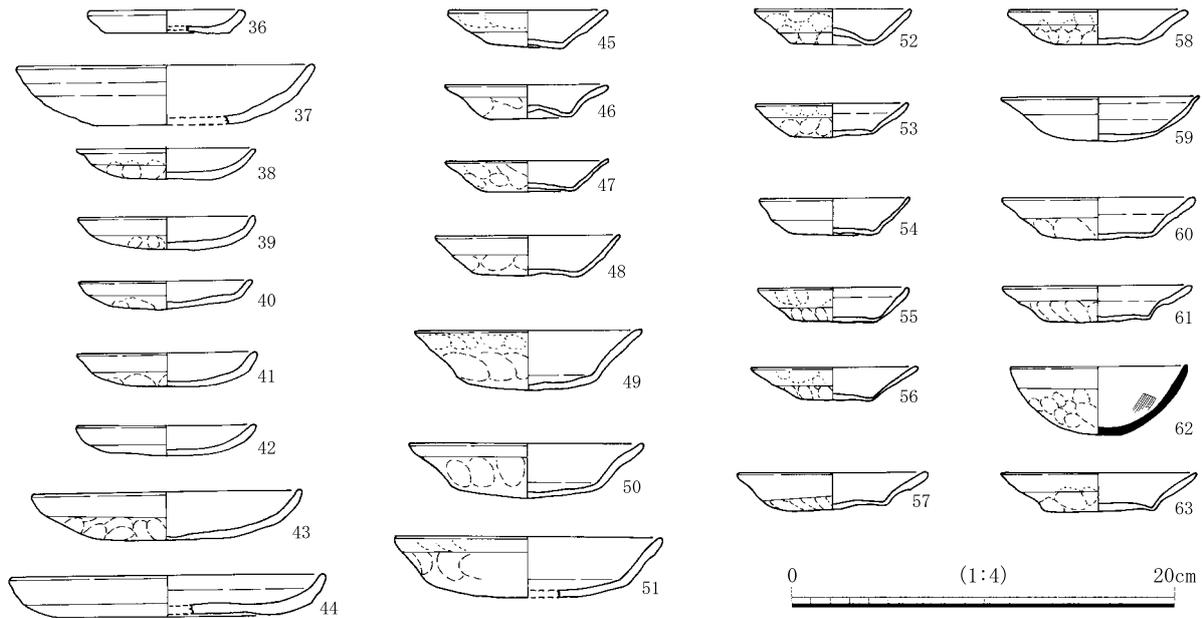


图 157 7区遺構平面図



36・37：400溝 38～44：504溝 45～51：580溝 52～62：586溝 63：571溝

図 158 400・504・580・586・571 溝出土遺物実測図

溝内部には暗灰色系統のシルトが堆積している。

401 溝 6区南側（12 A 4 g・4 h）にあり、西壁にとりつく南北方向の溝である。検出長6 m、幅0.6 m、深さ0.1～0.15 m、暗オリーブ灰色の埋土である。400溝のすぐ北側に沿うように流れており、掘立柱建物群の長軸と同様の方向である。建物に伴う排水溝のような機能をしていた可能性も考えられる。瓦質羽釜、播鉢などが出土している。

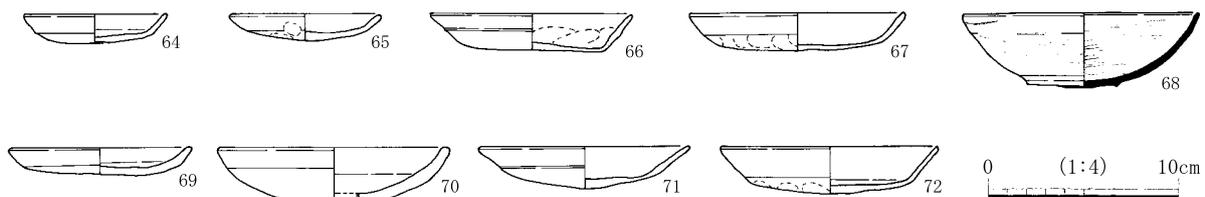
504 溝 6区北側に所在する遺構で、調査区東壁にかかるように検出されている。今調査区では一部検出されているだけで一見土坑のように見えるが、03-2の7区にも続いており溝状にのびる遺構になる。延長13 m、幅1～3 mである。

遺物（図 158 - 38～44）土師器皿である。38～42は口径5.5 cm前後で、43は口径14.2 cm、44は口径16.5 cmを越える大きなものである。

580 溝 6区の北側（12 A 1 f・2 f）に所在する溝で東西方向に走る。検出長7 m、幅0.5 m、深さ0.2 mで、内部には暗オリーブ色シルトや細砂が堆積している。

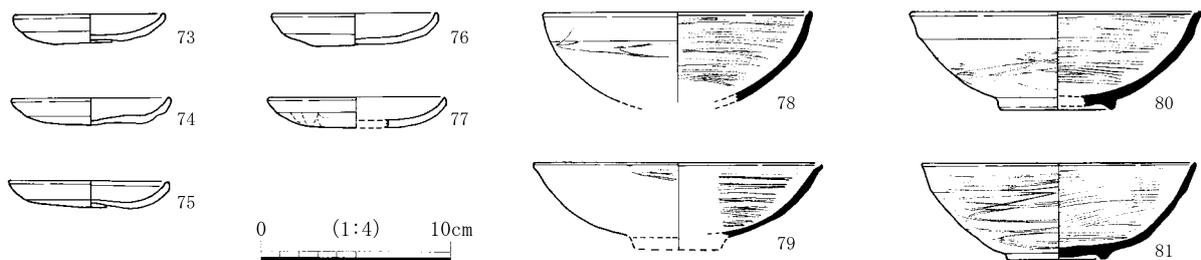
遺物（図 158 - 45～51）土師器皿であり、大きさの異なるものがいろいろ混在している。45～47は口径8.5 cm前後、48は9.6 cm、49～50は口径12 cm、51は口径14 cmを越える。口縁外面の上部はナデが施されているが、下半部には指圧痕が残るものもある。

586 溝 調査区の北端部分で発見された溝である。検出長2 m、幅0.3 m、深さ0.1 mの小さな溝状遺構である。



64～67：349土坑 68：551土坑 69・70：527土坑 71・72：572土坑

図 159 349・551・527・572 土坑出土遺物実測図



73～77：350ピット 78：415ピット 79：521ピット 80：427ピット 81：581ピット

図 161 350・415・521・427・581 ピット出土遺物実測図

畦畔の下から 558 畦畔とほぼ同じ向きで検出されている。

遺物（図 159 - 68） 大和型瓦器碗である。口径 12.5 cm、器高は 4 cm、断面三角形の細い高台を付して、内面にやや疎らな暗文を施す。外面のミガキもかなり疎になっている。

552 土坑（図 160） 551 土坑の北端をきる形の細長い土坑である。幅は 1 m を前後しており、延長で 5 m 近く検出されている。内部には灰オリーブ色を主体とするシルトや粘土が堆積している。

527 土坑 504 溝と重複する土坑である。幅 2.5 m、深さ約 0.1 m であり、今回の調査区内では延長約 3 m 分が検出されているのみである。

遺物（図 159 - 69～70） 土師器皿である。69 は口径 8.6 cm、70 は口径 12.2 cm である。外面上部にはナデを施している。

572 土坑 6 区北側（12 A 2 f）にある土坑である。南北・東西 1.2 m、深さ 0.5 m で、灰色系統の粘土やシルトが堆積している。

遺物（図 159 - 71～72） 土師器皿である。口径 11 cm 前後で器高は 2.5 cm、口縁は外反し、上部にはナデが施されている。

中世ピット群 多数の中世ピット群を検出している。これらは隣接調査区で検出されたピット群と一連のものである。大半は素掘りのものであるが、400 溝の方向を意識して南北方向を意識した柱の配列になっている。6 区西側と東側で、それぞれ掘立柱建物が 2 棟分復元されているが、互いに位置的に重複

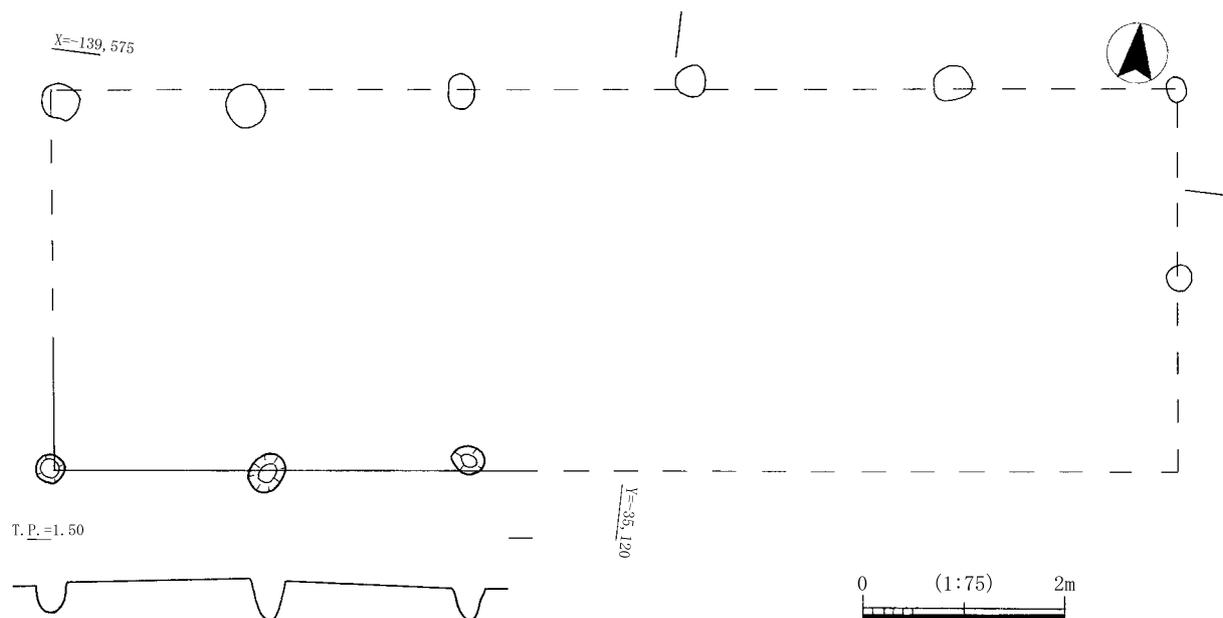


図 162 掘立柱建物 6 平面・断面図

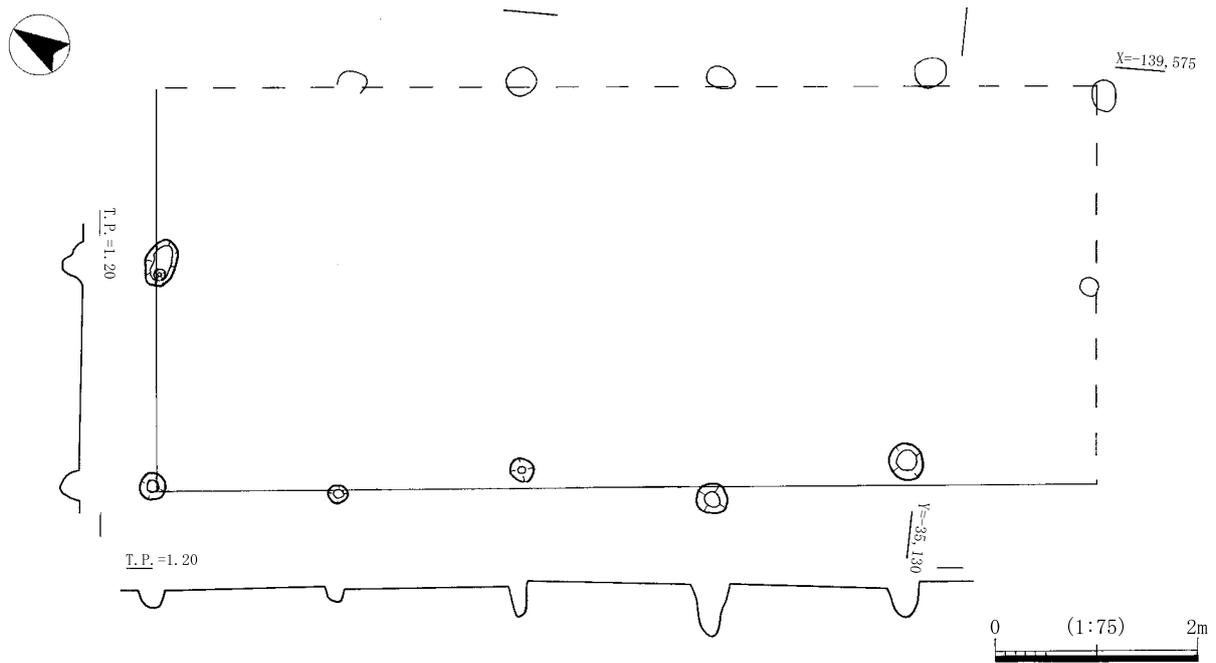


図 163 掘立柱建物 7 平面・断面図

しており、立て替えられた住居址である可能性がある。03 - 2 の 7 区で検出された建物群も同様であり、ほぼ方向をそろえて建物を構築しているようである。

350 ピット 400 溝の北側にあるピットである。径 0.7 m、深さ 0.2 m をはかる。

遺物 (図 161 - 73 ~ 77) 土師器皿である。口径 8.5 cm 前後、器高 1.5 cm 程度で、外面上部にはナデが施されている。どれもよく似ており均一な仕上げとなっている。

389 ピット 400 溝の北側にあるピットである。径 0.4 m、深さ 0.5 m である。埋土の中には柱を支えるのに使ったのではないかとと思われる長さ 10 cm と 20 cm の自然石が置かれていた。瓦器椀、土師器皿などが出土している。

415 ピット 400 溝の北側にあるピットである。径 0.4 m、深さ 0.4 m である。

遺物 (図 161 - 78) 瓦器椀である。口径 14.2 cm、器高 2.4 cm 以上であり、内面には細かな暗文がほどこされているが、外面のミガキは疎である。

521 ピット 400 溝の北側にあるピットで径 0.2 m、深さ 0.15 m である。

遺物 (図 161 - 79) 瓦器椀である。口径 15.4 cm で、内面の暗文も外面のミガキも疎である。

427 ピット 400 溝の北側に展開するピット群のひとつである。径 0.4 m、深さ 0.3 m である。

遺物 (図 161 - 80) 瓦器椀である。口径 15.2 cm で器高 5.2 cm、しっかりした断面三角形の高台がある。内面の暗文は細かいが、外面のミガキは下半部に疎に施されている。

581 ピット 6 区でも北側に所在するピットである。径南北 0.3 m、東西 0.5 m で深さ 0.1 m ばかりの浅いピットである。

遺物 (図 161 - 81) 瓦器椀である。口径 14.4 cm、器高 5 cm、断面台形状の高台で、内面の暗文は密にびっしり施されており、外面のミガキもかなり丁寧である。

掘立柱建物 6 (図 162) 6 区東南地区で発見された掘立柱建物である。03 - 2 調査の 7 区とまたがっており、2 間 × 5 間、3.75 m × 11.1 m と復元される。主軸は北から西へ 7 度振れている。位置的には掘立柱建物 7 と重複関係にある。

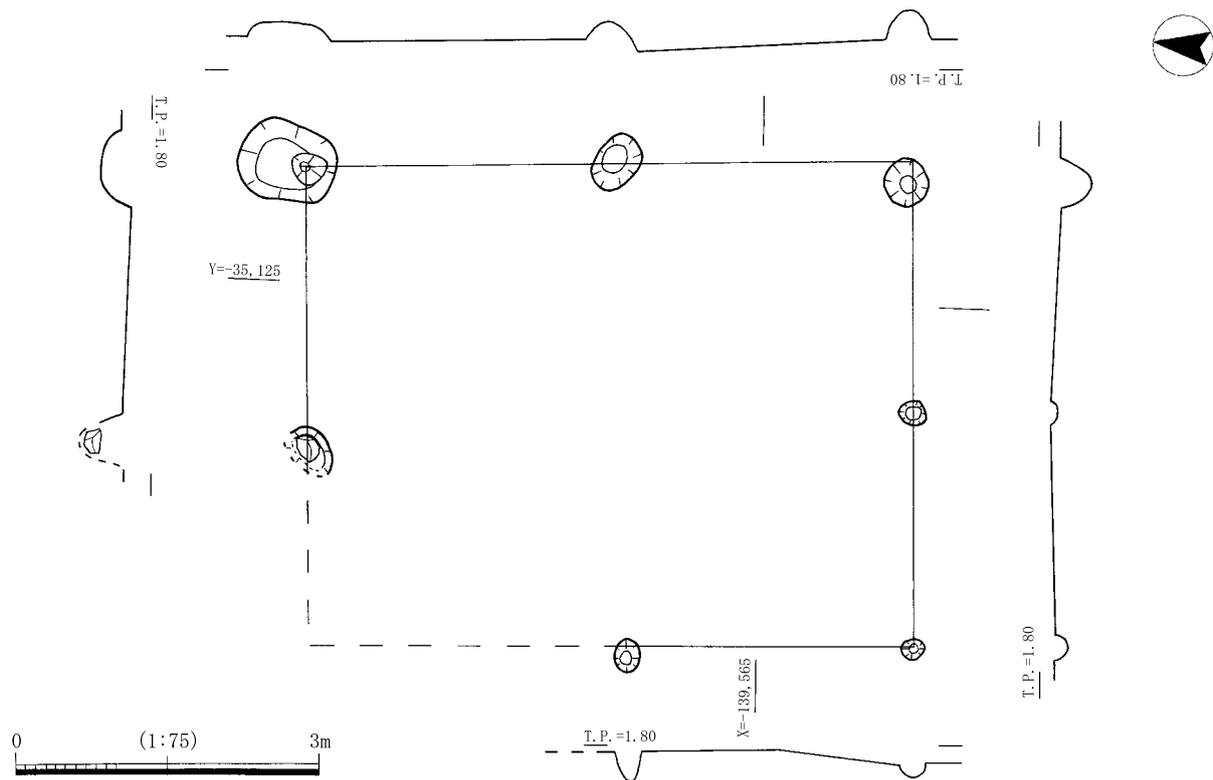


図 164 掘立柱建物 11 平面・断面図

掘立柱建物 7 (図 163) 6区東南地区で発見された掘立柱建物である。03 - 2 調査の 7 区に続く形で検出されており、建物規模は 2 間 × 5 間、4 m × 9.25 m と考えられる。建物の主軸は北から西へ約 5 度振れている。位置的には掘立柱建物 6 と重複関係にある。

掘立柱建物 11 (図 164) 6 区西側で発見された掘立柱建物である。2 間 × 2 間で 4.4 m × 5.8 m をはかる。方向はほぼ南北方向を向いており、掘立柱建物 2 ととも方向を同じくしている。位置的には掘立柱

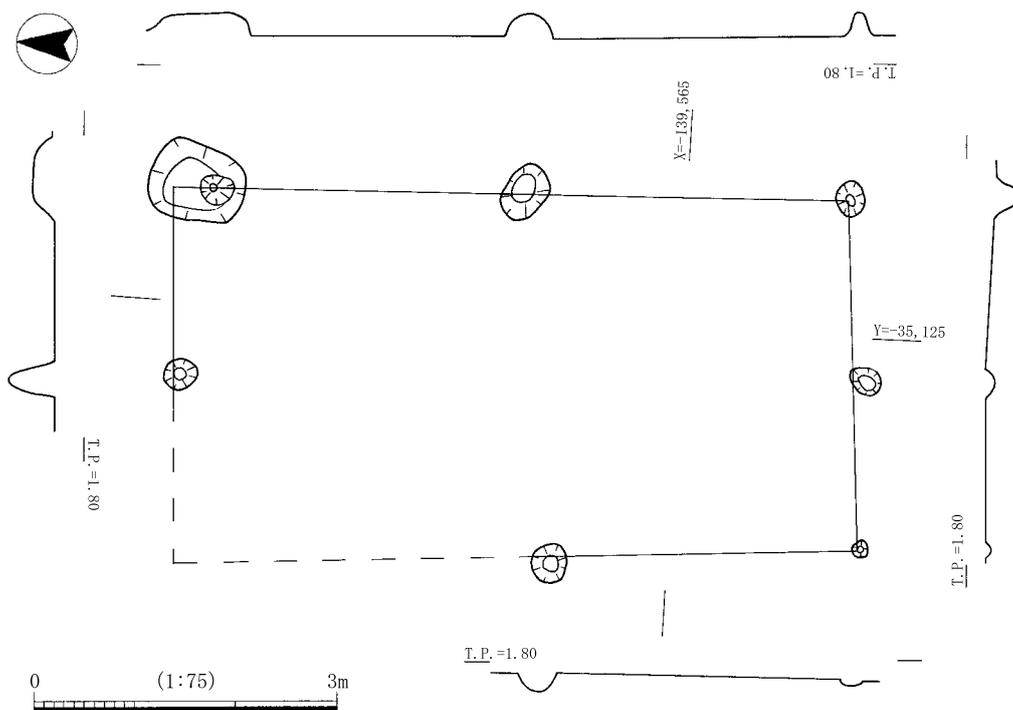


図 165 掘立柱建物 12 平面・断面図

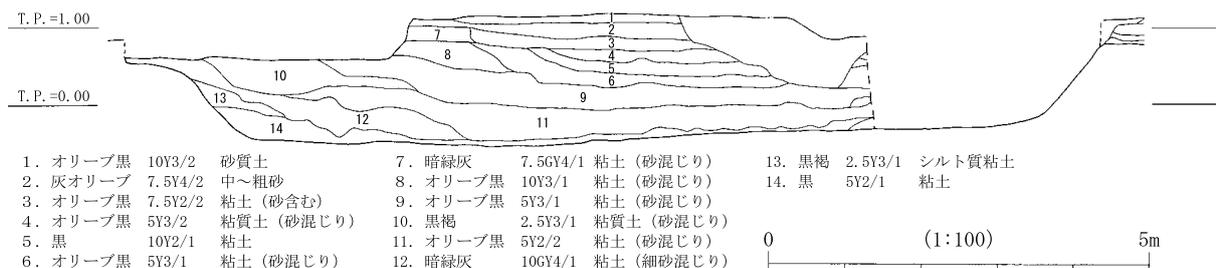


図 166 591 土坑断面図

建物 11 と重複関係にある。

掘立柱建物 12(図 165) 6 区西側で発見された掘立柱建物である。2 間 × 2 間で 3.5 m × 6.7 m をはかる。方向はほぼ南北方向で、建物の西側に沿うような形で 401 溝がある。位置的には掘立柱建物 10 と重複関係にある。

591 土坑 (図 166) 7 区の北側 (11 A 7 j・6 j・6 i・5 i) を占める溝で、南北幅 12 m、深さ 1.7 m の大きな東西溝と考えられる。埋土としてはオリーブ黒～黒褐色系統の粘土層を主体に累層的に堆積しており、層中には多くの植物遺体を含んでいる。一見湿地での堆積のような土であり、何回もさらえられながら維持されたもののように推測される。内部からは瓦器椀、土師器皿など中世遺物に混じって、染付などの近世遺物も出土している。中世からそれ以降にいたるまで、長期間継続して利用されてきた遺構のようである。

610 土坑 11 A 9 a 付近に所在する。平面四角形のように見える遺構で 7 区の西壁にかかり、627 井戸とも接しており、2 辺分のみが確認された。検出長さは東西・南北ともに約 3 m、深さ 0.7 m で、内部にはオリーブ色系統のシルトが堆積している。

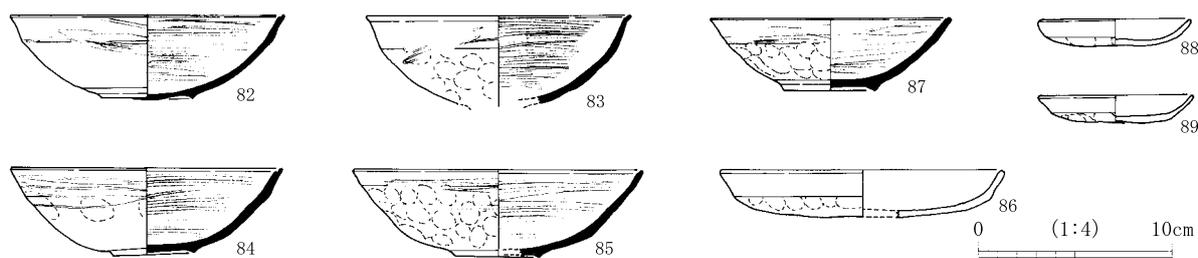
遺物 (図 167 - 82 ~ 86) 82 ~ 85 は瓦器椀である。82 ~ 84 は口径 14 cm を前後し、85 は口径 15 cm を越える。断面三角形の小さな高台があり、内面の暗文は比較的密に施され、外面のミガキは疎である。86 は土師器皿である。口径 15 cm、器高 2.6 cm で、外面下部には指圧痕が残っている。

768 土坑 767 土坑と切りあう形の土坑である。南北 1.8 m、東西 1 m、深さ 0.6 m である。

遺物 (図 167 - 87 ~ 89) 87 は瓦器椀である。口径 12.5 cm、器高 3.8 cm、断面三角形の高台がつく。内面の暗文、外面のミガキも疎である。88 ~ 89 は土師器皿で、口径 8 cm、器高 1.5 cm である。

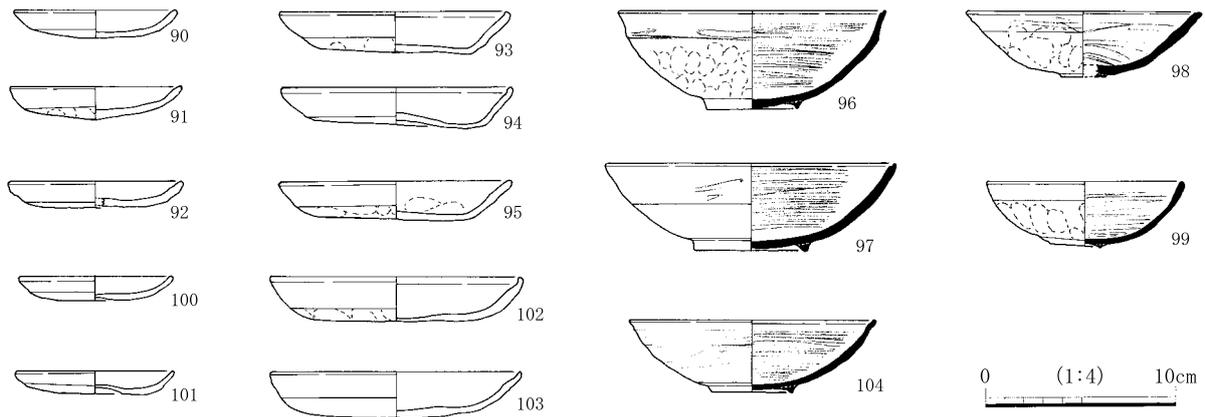
623 井戸 627 井戸の南側で検出された井戸である。検出幅 2.6 m、深さ 0.7 m をはかる。内部からは平瓦や瓦質土器などが出土している。

627 井戸 (図 169) 7 区中央部 (11 A 8 a・8 b) に所在する井戸である。上幅は南北・東西ともに約 3 m であり、深さ 1.3 m、上端から急な傾斜角度で下がり、上から約 0.8 m のところで段がついており、2 段掘のような状況となっている。この井戸の掘り方の北側に寄せるように、底をぬいた瓦質羽釜が井



82 ~ 86 : 610 土坑 87 ~ 89 : 768 土坑

図 167 610・768 土坑出土遺物実測図



90～98：627井戸 99：614井戸 100～104：767井戸
 図168 627・614・767井戸出土遺物実測図

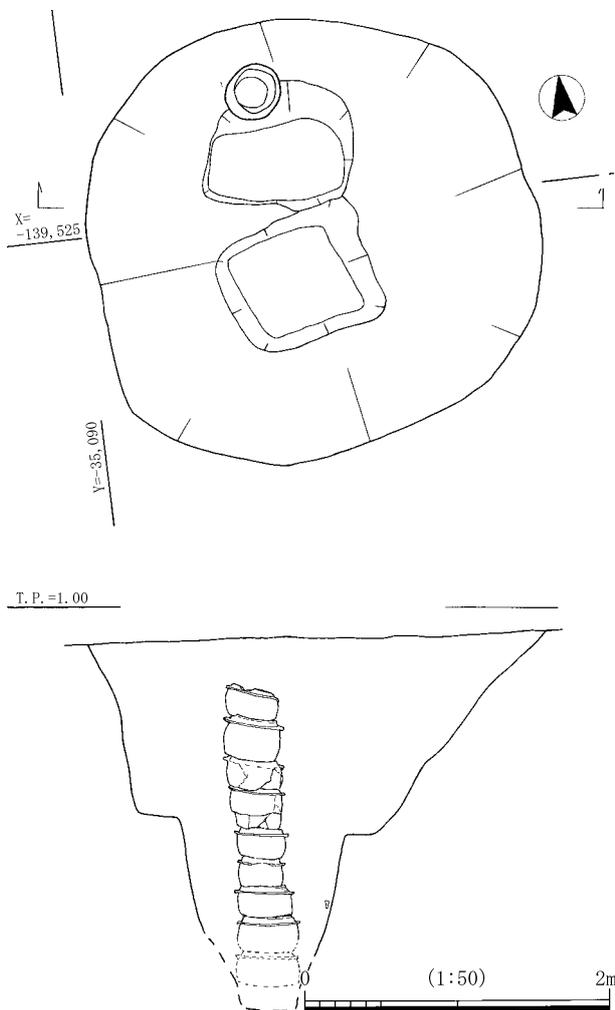


図169 627井戸平面・断面図

戸枠がわりに積み重ねられており、上から下まで全部で10段分確認されている。この羽釜は全て底部から胴部にかけて煤が付着しており、調整もはっきりとは確認しがたいくらい摩滅が激しいものであった。掘り方と羽釜との間に充填された土は、上部はオリーブ～灰色のシルトが、下部は灰色のシルトがレンズ状にたまっていた。

遺物（図168-90～98、図170-105～113）
 図170-105～113は瓦質羽釜で井戸枠として利用されていたものである。105は最上段で検出されたものであり、105～113まで上から検出された順に並べている。つまり106は上から2段目に検出されたもので、107は上から3段目に検出されたものである。全て磨耗が激しく、元々の調整などは確認できないものが大半である。また90～95は土師器皿である。その内、90は口径8.5cm、91・92は口径9cmで、93～95は口径12cmを前後するものである。96～98は瓦器椀で、高台は断面三角形状である。

614井戸 591溝の南側（11A7a）に所在する井戸である。南北1.7m、東西2m、深さ0.8mで、灰～オリーブ色系統のシルトを含んでいる。細長い木板を縦に差し込み、井戸枠状の囲いを設けていた。

遺物（図168-99）瓦器椀である。口径12.2cm、器高3.4cmで、内面に施された暗文は疎であり、外面にはミガキはみられず、指圧痕が顕著に残っている。

767井戸 7区西壁に半分かかるように検出されている井戸である。深さは2mであるが、平面は隅部分が一部ひっかかっているだけなので、全容は不明である。内部はオリーブ～灰色のシルト層が重なり

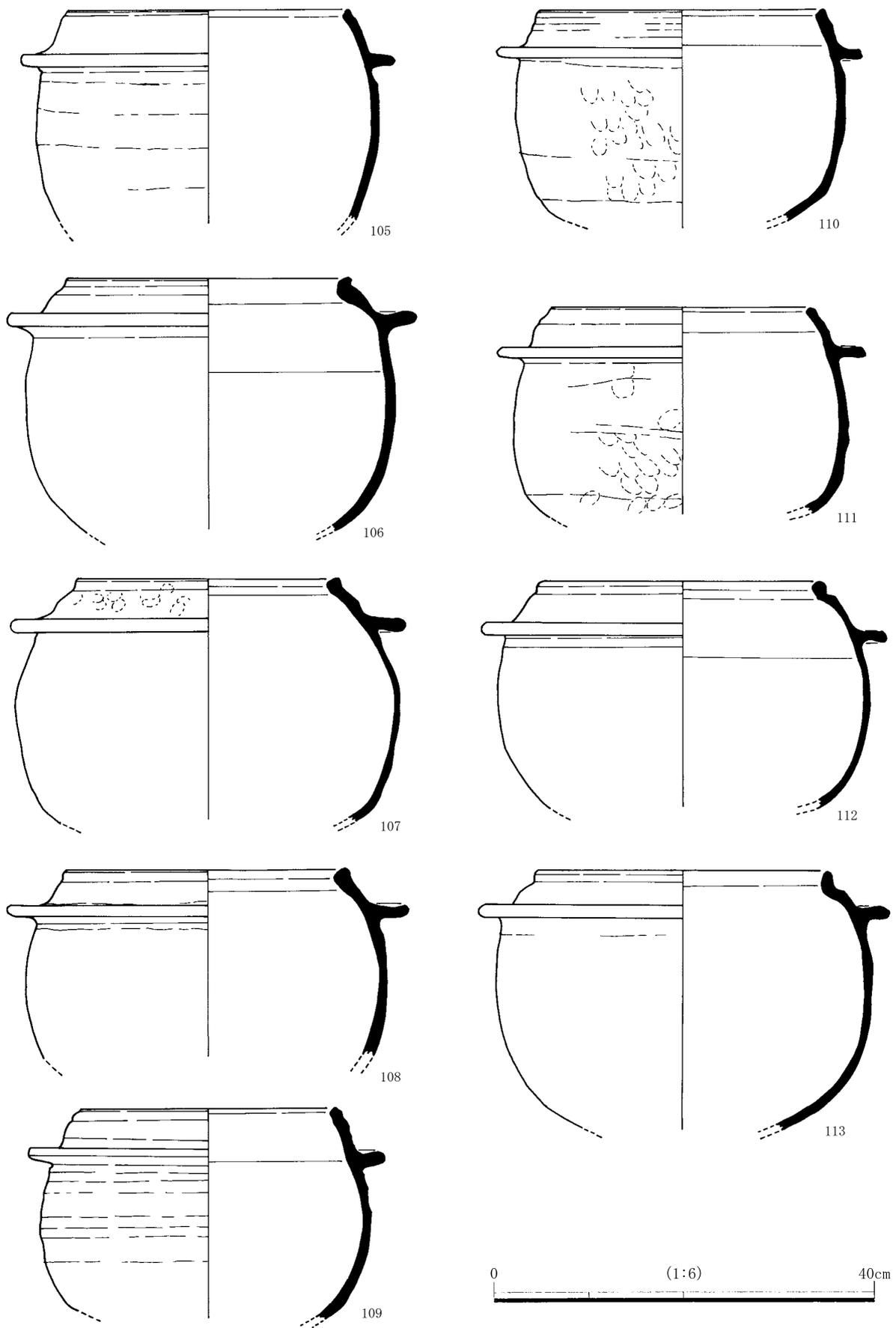


图 170 627 井戸出土羽釜实测图

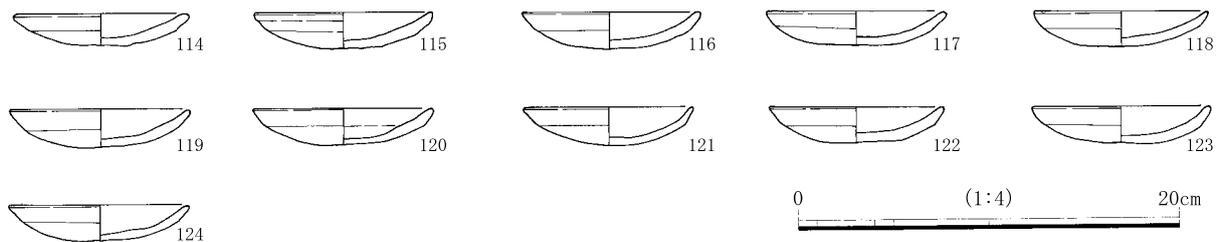


図 171 802 ピット出土遺物実測図

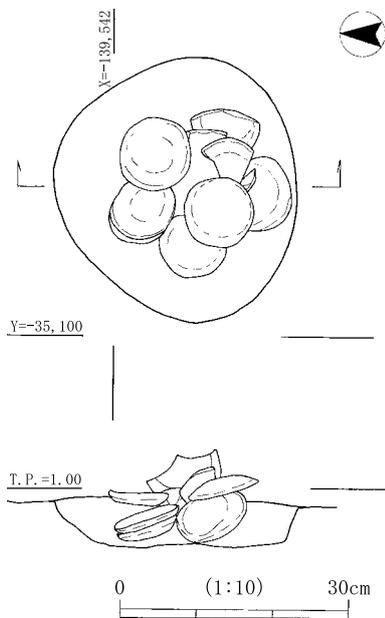


図 172 802 ピット平面・断面図



合いながら堆積している。

遺物（図 168 - 100 ~ 104） 100 ~ 103 は土師器皿である。100 ~ 101 は口径 8 cm を前後しており、102 ~ 103 は口径 13 cm を越える。104 は瓦器椀であり、口径 13 cm、器高 3.8 cm で、内面には比較的密に暗文を施している。

770 井戸 767 井戸の南側に所在する井戸である。径 3.5 m、深さ 1.5 m で、暗オリーブ灰色シルトが堆積している。

802 ピット（図 172） 7 区の南よりにあるピットである。東西 32 cm、南北 35 cm、深さ 5 cm の小さなピットである。だがこの中から、土師器皿が何枚も重なって出土している。

遺物（図 171 - 114 ~ 124） 全て土師器皿である。口径は 9 ~ 9.4 cm、器高は 2 cm、外面は上から中くらいまでナデを施す。どれも均質性が強い。

6. 竪坑 3

6 区と 7 区の間付近に設置された竪坑である。1 m 以上もある現代の盛土を除去した直下でシルト層を基盤にした層が確認された。遺物らしきものが包含されている様子は確認できず、シルト層を検出した上面で小さなピットが 1 基検出されたのみである。

7. 竪坑 4

7 区の北側付近に設置された竪坑である。1 m 以上ある現代の盛土を除去した直下で、粘土を基盤とする層が検出された。遺物を包含している様子は確認できず、粘土層を検出した上面で落ち込みが検出されたのみである。

8. 8 区・9 区（図 175・176）

巢本 03 - 1 と 03 - 2 の境界をまたぐ形の南北に長い調査区である。調査区を貫くように南北方向の大型土坑があり、大型土坑の東側では堤、土坑などが、西側では掘立柱建物群を 3 棟検出している。

第 1 層上面遺構群

1 流路（図 173） 調査区内を南北方向にのびる流路であり、8 区よりも南の調査区の外側からはじまり、巢本遺跡の北端まで調査区を縦断するかのようになっている。幅は約 6 m で深さは深いところで 1 m 近くに達する。1 流路の南半部では、底面の一部で壁が垂直に落ちる箱状の掘り込みがみられる。この掘り込み内部の堆積土は灰～緑灰色の粘土や粘質土が主体であり、全体的に黒化しており判別しにくい状

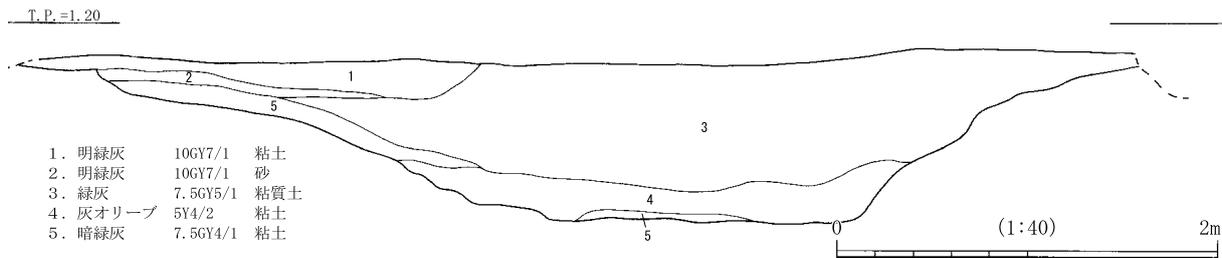


図 173 1 流路断面図

態ではあるが、土層の観察により大きく上下2層に分けられる。下層は灰オリーブ粘土層が主体であり、上層は緑灰色粘質土が主体であり、上下層ともに黒褐色系のシルトブロックを含んでいる。下層にはあまり遺物を含んでいないが、上層には比較的多くの遺物を含んでいる。また土層と土層の間に砂層の堆積は確認できず、常時水が流れていた痕跡も確認できなかったが、常に湿った状態であったものと思われる。また埋土からみて人為的に埋め戻されたものであることは明確である。近世にまで下がる土器を含むが、また隣接地区では、場所により中世土器を多く出土するところもあり、13～14世紀代の瓦器や瓦質土器も含んでいる。

6層上面遺構群

ピット、溝、掘立柱建物などを検出している。調査区東側で堤と土坑を検出している。

703土坑(図174) 西側の調査区からのびる東西方向の溝状遺構である。11 A 4 f～3 fに所在し、

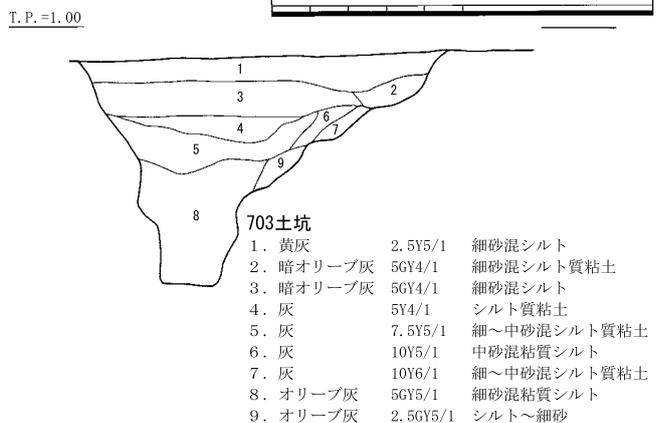
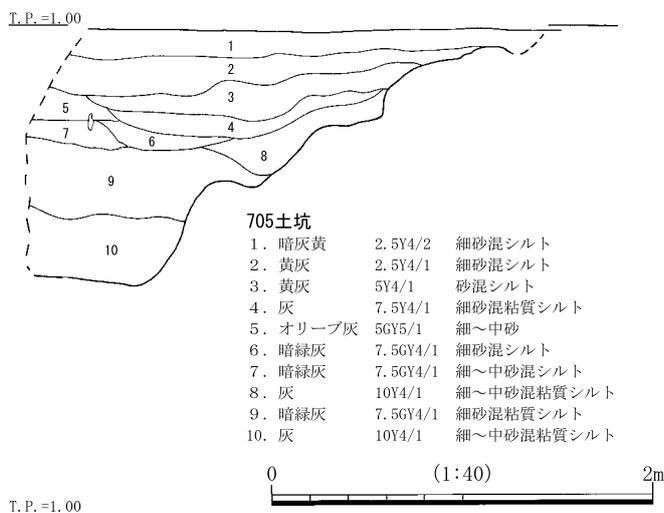


図 174 703・705 溝断面図

方形に展開する溝状遺構の北辺部分に相当する。ラッパ状に開口しており、上幅2m、下幅0.3m、深さ1.2mで、本来、8区を横断して調査区東端に達していたものと思われる。土坑内の堆積土は灰～オリーブ色系統のシルト層である。南北土坑である705土坑と重複しており、土層からみて705土坑の埋没後に形成されたことは明らかである。

遺物(図177 - 125 ~ 127) 全て瓦器碗である。高台はかなり退化しており、内面のミガキもかなり疎らになっている。

705土坑(図174) 南北方向の溝状遺構(11 A 5 g～5 i)であり、703土坑に切られている。隣接する調査区との境界上にあり、東側の肩は検出したが西側の肩は検出できなかった。703土坑と同様、ラッパ状に開口する土坑で、検出幅は2.5m以上、深さ1.6mである。堆積土は灰～オリーブ黒系統のシルトや粘土層が主体で、底の方では植物遺体が含まれる。遺物としては瓦器碗、土師器皿、瓦質羽釜などが出土している。

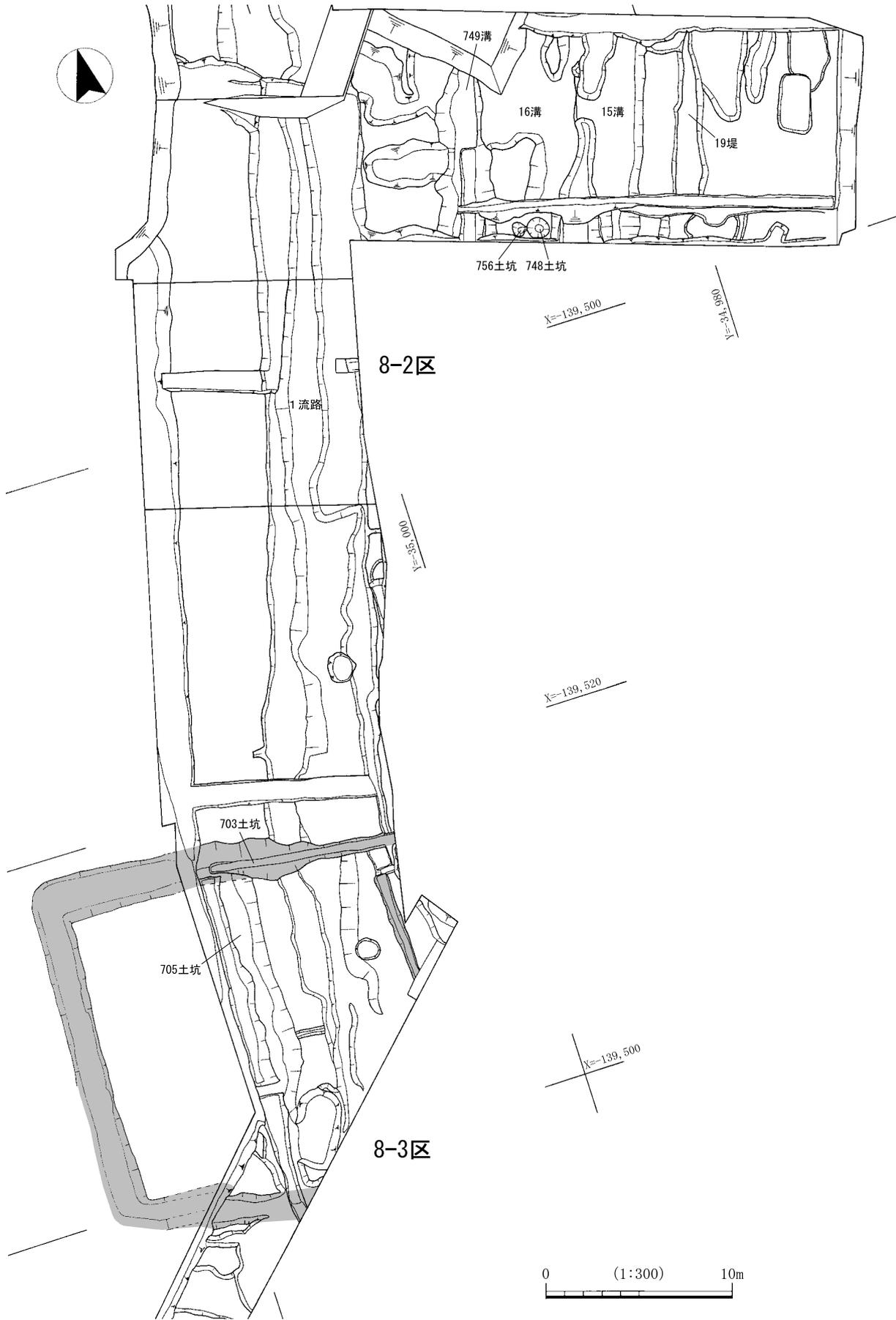


图 175 8区遺構平面図

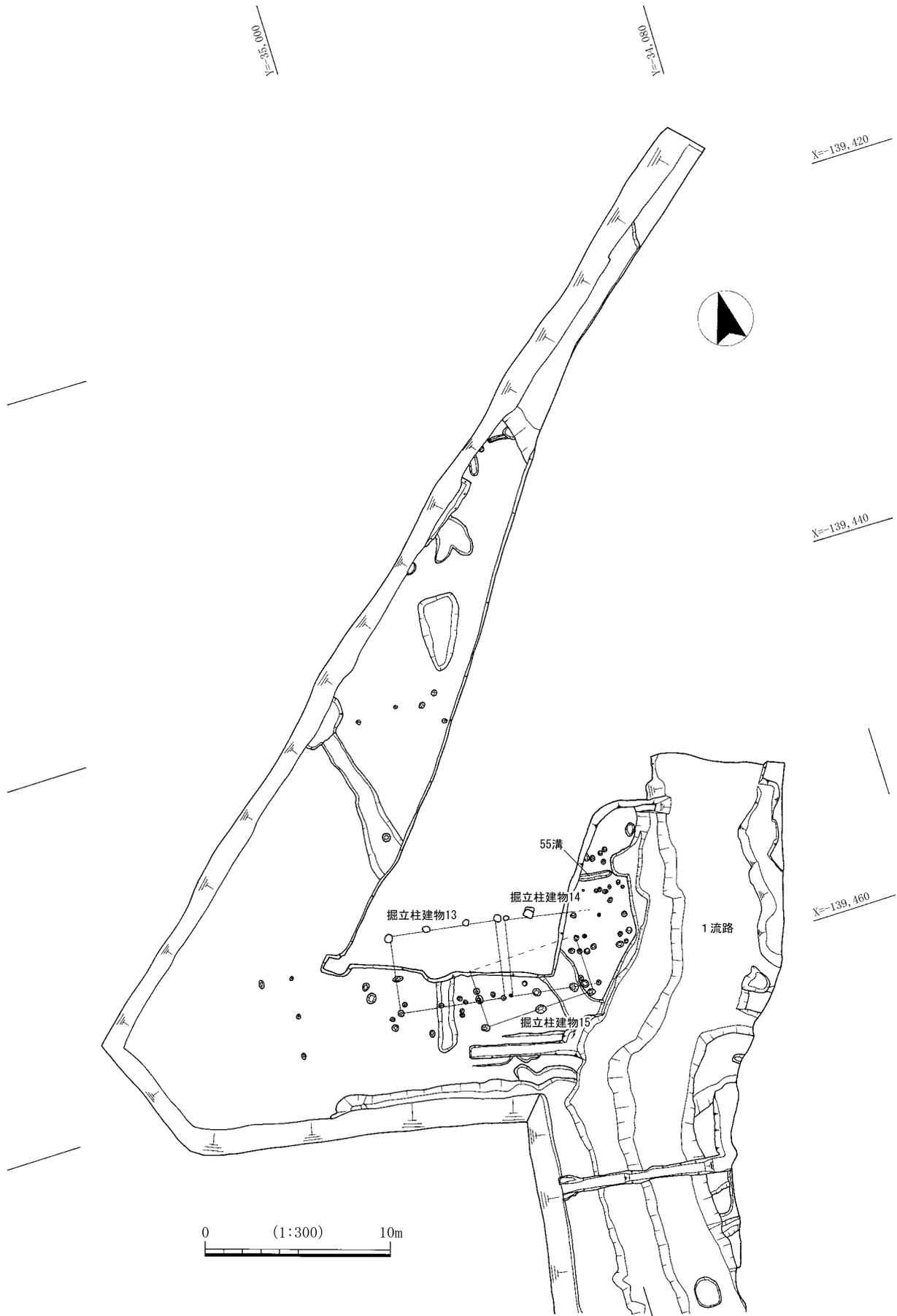
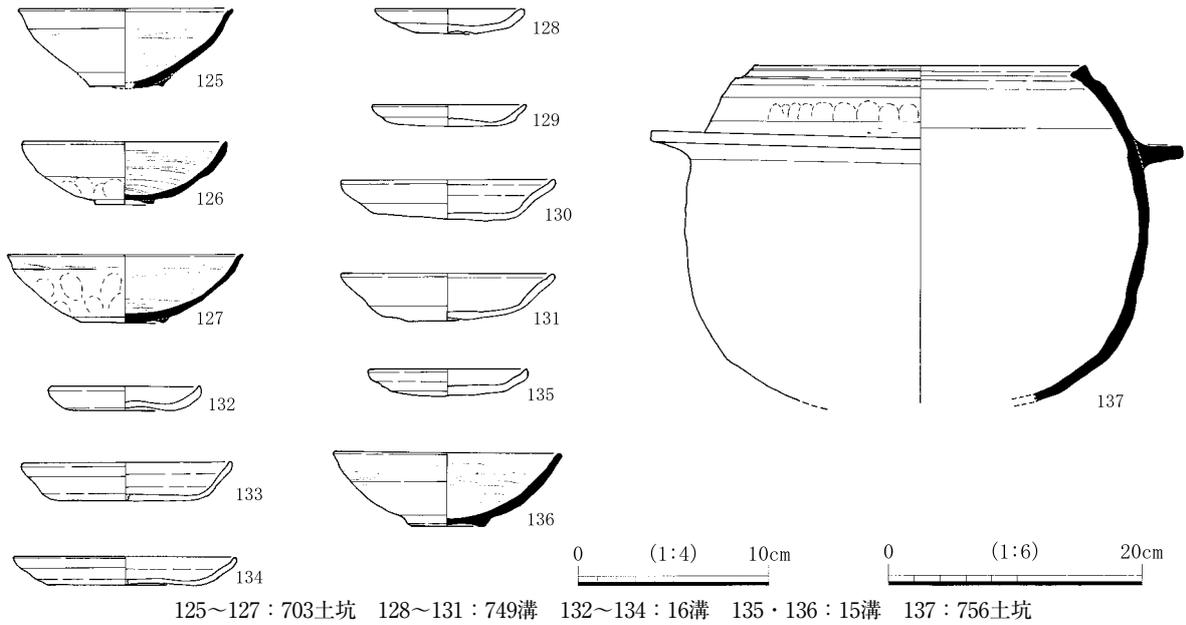


图 176 9区遺構平面図



125~127 : 703土坑 128~131 : 749溝 132~134 : 16溝 135・136 : 15溝 137 : 756土坑

図177 8・9区出土遺物実測図

19 堤 8区の東方1009j・8jに所在する。前年度の調査区につづき南北方向にのびる堤であり、6層を基盤にして形成されている。幅は約2mで6層上面からの高さは約0.4m、西側には南北方向の溝である15溝がある。

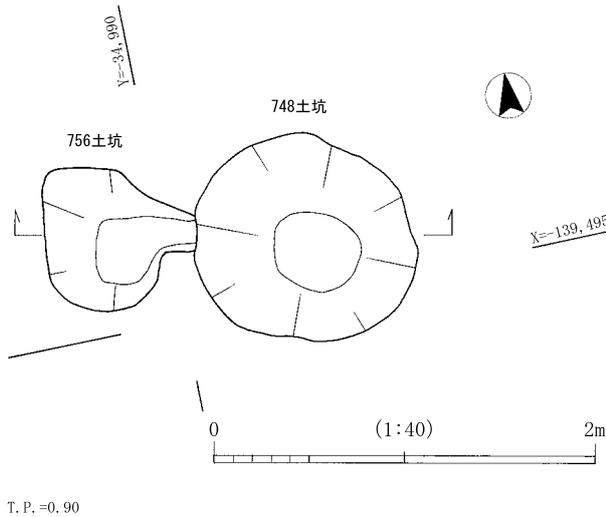
749 溝 16溝の西側で検出された溝であり、攪乱の影響により、一部分のみが検出できた。幅3m、深さ1.3mで、内部には灰～灰オリーブ色の粘土が堆積している。

遺物(図177-128~131) 土師器皿である。129~130は口径4cmを前後し、130~131は口径11cm前後である。口径は異なるものの、口縁外面で上端から半分以上のところまでナデを施すということで共通している。

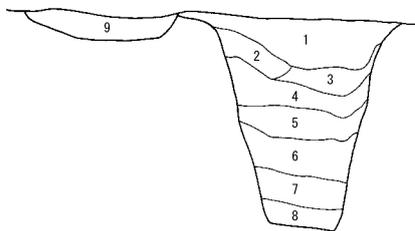
16 溝 15溝の西側を流れる溝であり、断面よりみると15溝に切られている。内部にはオリーブ灰色系統の粘土が堆積している。

遺物(図177-132~134) 全て土師器皿であり、全て外面上部にナデを施すものである。

15 溝 19堤の西(1009j~9i)に所在する溝であり、幅6m、深さ1.6mである。上部はラッパ状に開くが、底部中央には0.3~0.4m程度の深さで垂直に落ちる部分がある。この底部の落ち込みは途中間をおきながら、断続的に設けられ



T.P.=0.90



- | | | |
|-----------|----------|---------------|
| 1. 暗緑灰 | 7.5GY4/1 | 細～中砂混じりシルト質粘土 |
| 2. 暗オリーブ灰 | 5GY4/1 | 細砂混じりシルト質粘土 |
| 3. オリーブ灰 | 10Y4/2 | 細砂混じりシルト質粘土 |
| 4. オリーブ黒 | 10Y3/1 | 細砂混じりシルト質粘土 |
| 5. 暗オリーブ灰 | 2.5GY4/1 | 細砂混じりシルト質粘土 |
| 6. 暗オリーブ灰 | 5GY4/1 | 細砂混じりシルト質粘土 |
| 7. 灰 | 7.5Y4/1 | 砂混じり粘土 |
| 8. 灰 | 5Y5/1 | 細～中砂 |
| 9. 暗オリーブ灰 | 2.5GY4/1 | 粘質土 |

図178 748・756土坑平面・断面図

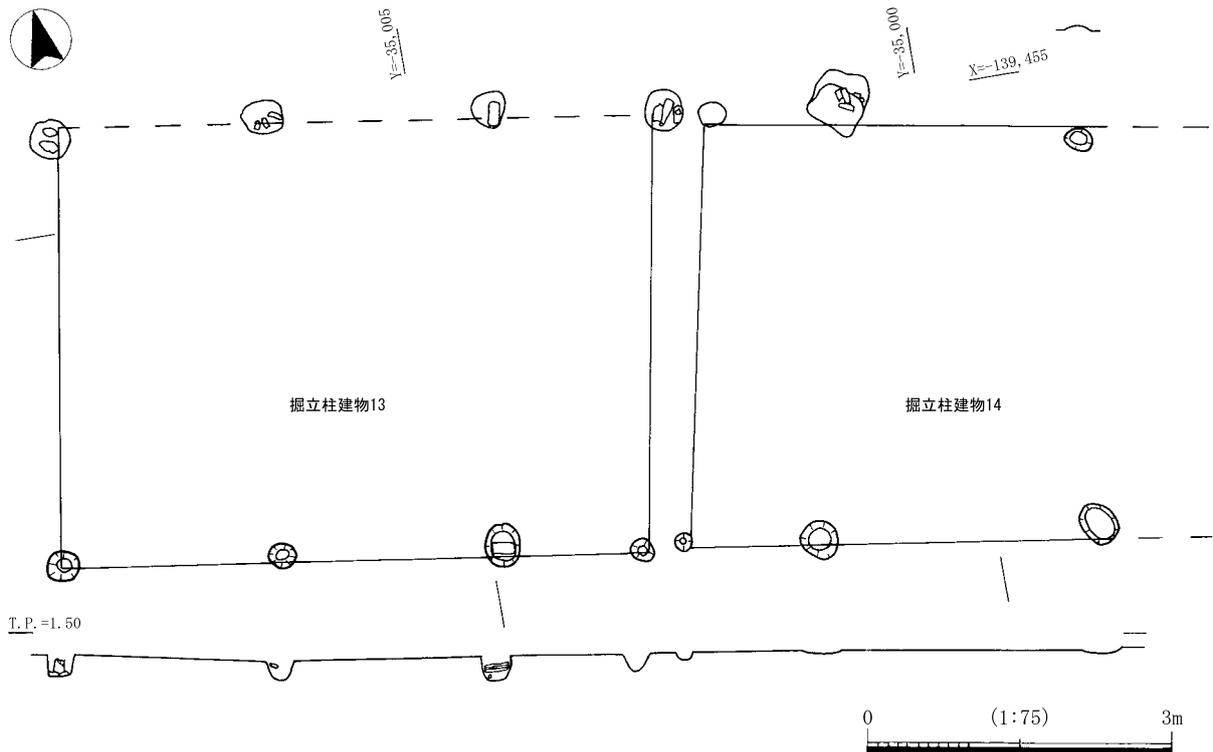


図 179 掘立柱建物 13・14 平面・断面図

たものである。底面中央部に別の小さな南北方向の土坑が設けられたような形であり、ちょうど2段の障子堀のような形になっており、03 - 2 調査で実施した南側の調査区にも続いている。埋土は灰～黒色系統の粘土がレンズ状の堆積している。

遺物 (図 177 - 135・136) 135 は土師器皿である。136 は瓦器碗であり、断面三角形の高台がつくものである。

748 土坑 (図 178) 15 溝の西側 (10 O 9 j) に所在する土坑である。上径 1.1 m、下径 0.3 m で下に行くほど径が狭くなる円形の土坑であり、オリーブ～灰色シルトが 0.3 m くらいの厚さで累層的に堆積している。またこの土坑の西側には 756 土坑がある。

756 土坑 (図 178) 748 井戸の西側に所在する土坑である。東西 0.6 m、南北 0.75 m、深さ 0.5 m をはかるが、この 756 土坑の上から底を抜いた瓦質羽釜が発見された。ただしこの土坑自体がもっと上からの掘り込みで、本来は土坑の中に入れていたものである可能性がある。

遺物 (図 177 - 137) 瓦質羽釜である。756 土坑の上に底を抜いた形で置かれていたものである。外面は摩滅が激しく、本来の調整などは確認できない。口径は 26.4 cm をはかる。

掘立柱建物 13 (図 179) 建物 13 は 9 区中央部で検出した掘立柱建物跡である。主軸は北から東へ 10 度ばかり振れている。3 棟確認した内の西側の建物で、03 - 1 の 7 区の調査で発見された建物 6 と一連のものである。復元すると梁行 1 間、桁行 3 間の建物であり、梁行 4.4 m、桁行 5.9 m、桁行の柱間の間隔は 1.8 ~ 2.3 m、柱掘方は円形で、礎板を備えているものもある。掘立柱建物 14 と桁行の方向も長さも軌を一にするものであり、掘立柱建物 14 と密接に関連する建物と考えられる。

掘立柱建物 14 (図 179) 建物 14 は 9 区中央部で検出した掘立柱建物跡である。掘立柱建物 13 と同様に、主軸は北から東へ約 10 度振れている。3 棟の内の東側の建物であり、03 - 1 の 7 区の建物 7 と一連のものである。復元すると梁行 1 間、桁行 2 間もしくはそれ以上になる。梁行 4.4 m、桁行 3.8 m 以

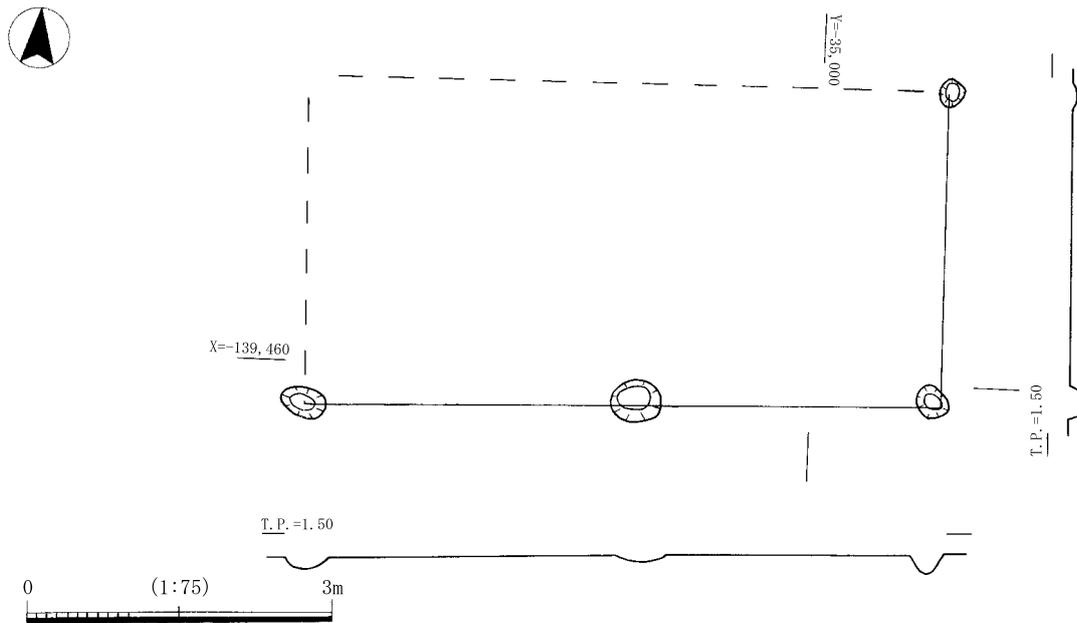


図 180 掘立柱建物 15 平面・断面図

上、桁行の柱間は西側 1.41 m、東側 2.5 m で、柱掘方は円形で礎板を備えているものもある。掘立柱建物 13 と桁行の方向も長さも軌を一にし、掘立柱建物 13 と密接に関連する建物と考えられる。

掘立柱建物 15 (図 180) 掘立柱建物 13・14 と位置的に重複する形の掘立柱建物である。主軸は北から西へ 8 度ばかり振れている。梁行 1 間、桁行 2 間で、梁行は 4.4 m、桁行は 6.3 m で、桁行の柱の間隔は 3～3.3 m である。柱穴は円形のものが多い。建物同士の前後関係は不明であるが、掘立柱建物 13・14 に前後する建物であることは確実である。

55 溝 9 区中央部にある東西方向の溝である。03 - 1 の 7 区の続きであり、長さ 11.7 m、幅 0.4～0.5 m、深さ 0.1 m である。この溝の南側に向きを同じくして掘立柱建物 13・14 があり、その間には柵状になると思われるピット列がある。位置関係からみて溝、柵、掘立柱建物は一連の構造物と考えられる。

9. 10 区 (図 181)

巢本遺跡 06 - 1 調査区で最も北側の調査区である。03 - 1 の 6 区で検出された堤の基部と流路の続きの検出が期待された地点である。またこの調査区の東辺に沿って門真 5 号水路が流下しており、東側の調査区との土層の関連を把握するために、水路を横断する形でのトレンチも設定した。

1012 溝 10 区の北側 10 N 4 g に所在する溝状遺構である。幅 4～5 m、深さ 0.2 m で、内部には灰～オリーブ色系統の粘土やシルトが堆積していた。

遺物 (図 182 - 141～142) 141 は瓦器碗で口径 15.2 cm、器高 2.5 cm 以上、内面の暗文も外面のミガキも密に施されている。142 は土師器皿で、口径 9.6 cm、ての字状の口縁である。

1013 土坑 10 N 4 g に所在する土坑で 1012 溝と切りあっている。幅 1.4 m、深さ 0.5 m で、内部には黄褐～オリーブ色のシルトが堆積していた。

遺物 (図 182 - 138～140) 139 は瓦器碗で口径 15.5 cm、内面には密に暗文を施し、外面にもミガキを施している。141 は土師器皿である。

1056 土坑 東端は 1057 土坑に切られており、西端は調査区の外側であるので、幅などは不明である。厚さ 0.5 m くらいの灰色粘質土で構成されており、層中には比較的古い時期の瓦器を含んでいる。

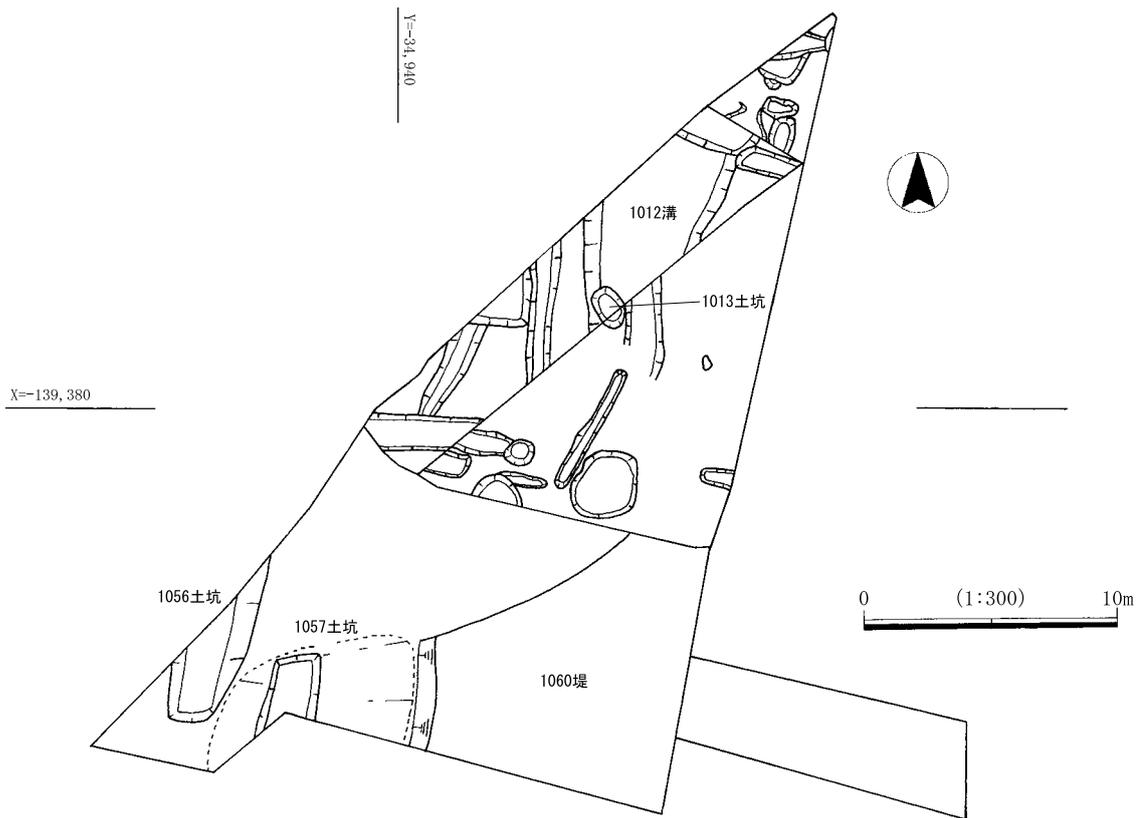


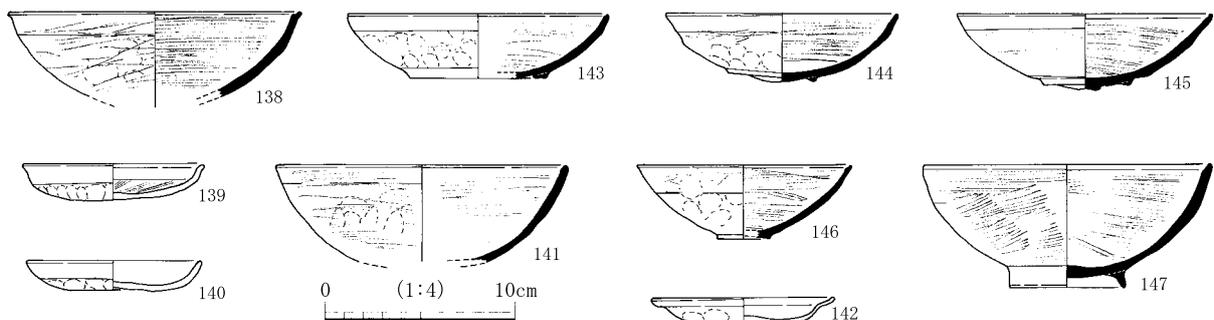
図 181 10区遺構平面図

遺物 (図 182 - 143 ~ 145) 全て瓦器碗である。外面にも疎らではあるが、ミガキが施されている。

1057 土坑 1060 堤の西側を切っている。逆台形に近い形の断面形で、ラッパのように開く形で開口している。上幅 5 m、下幅 0.6 m、深さ 1.5 m、堆積土は大きく上下 2 層にわかれており、暗オリーブ灰 ~ 暗緑灰色系統の粘質土で、植物遺体を含んでいる。

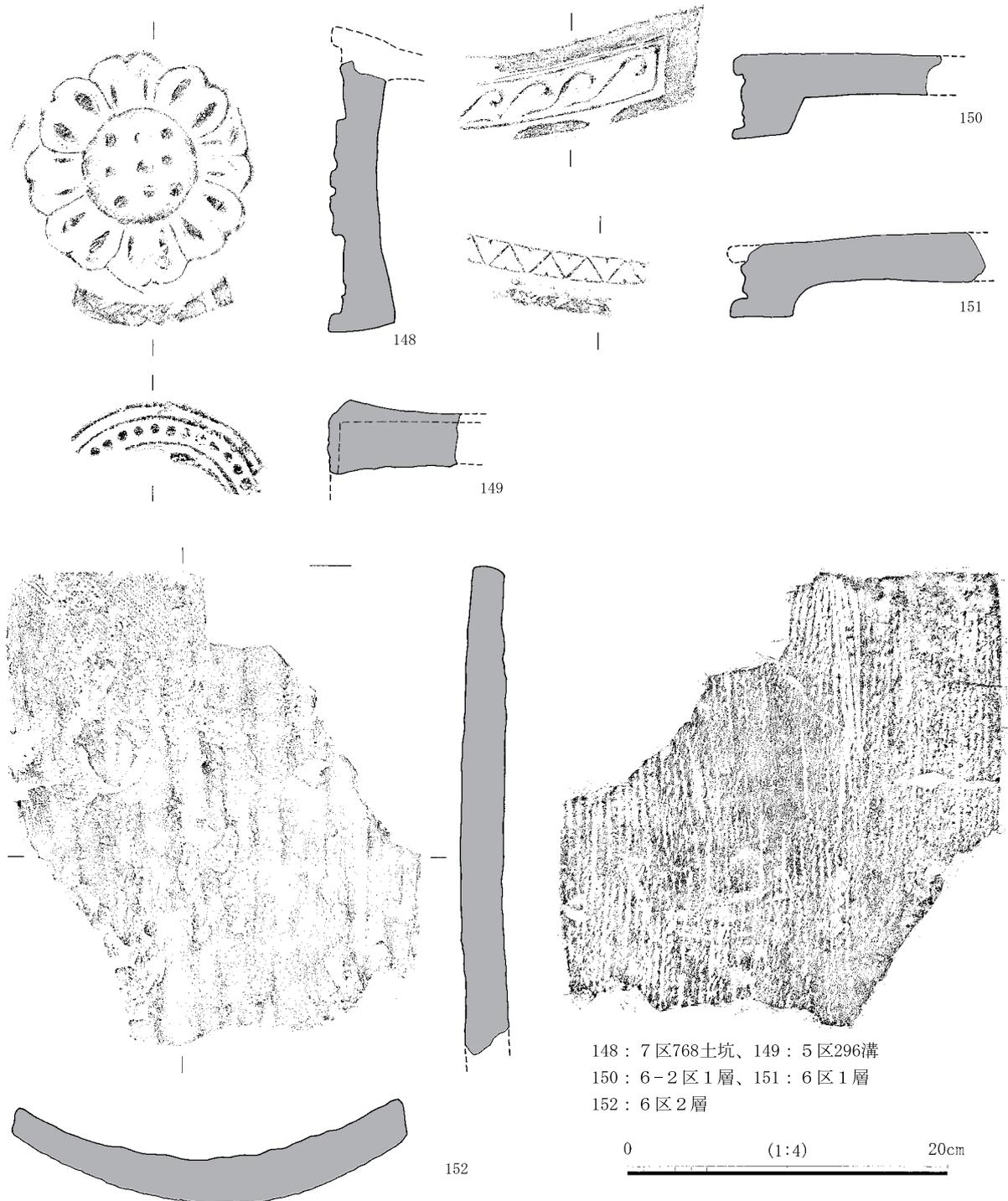
遺物 (図 182 - 146) 瓦器碗である。口径 11 cm、器高 4 cm で、外面上部にはミガキが施されているが、下部には指圧痕が残されている。

1060 堤 10 N 4 i · 4 j に所在する。堤は 03 - 1 の 6 区で検出された堤の続きである。上部は削平され残存せず堤の基底部のみが検出された。検出上幅は約 13 m 以上、築成土は厚いところで約 1 m になる。築成土部分に十字に断ち割りを入れたところ、土を盛った時のブロックの痕跡も発見された。築成土は暗オリーブ褐色粘土およびその上の灰色砂層をベースに土を積み上げており、中心部は断面形が円弧を描くように少しずつ丁寧に堅固に積み上げられており、土と土の間からは、竹の皮を敷いた痕跡もみら



138 ~ 140 : 1013 土坑 141 · 142 : 1012 溝 143 ~ 145 : 1056 土坑 146 : 1057 土坑 147 : 1060 堤

図 182 10区出土遺物実測図



148 : 7区768土坑、149 : 5区296溝
 150 : 6-2区1層、151 : 6区1層
 152 : 6区2層

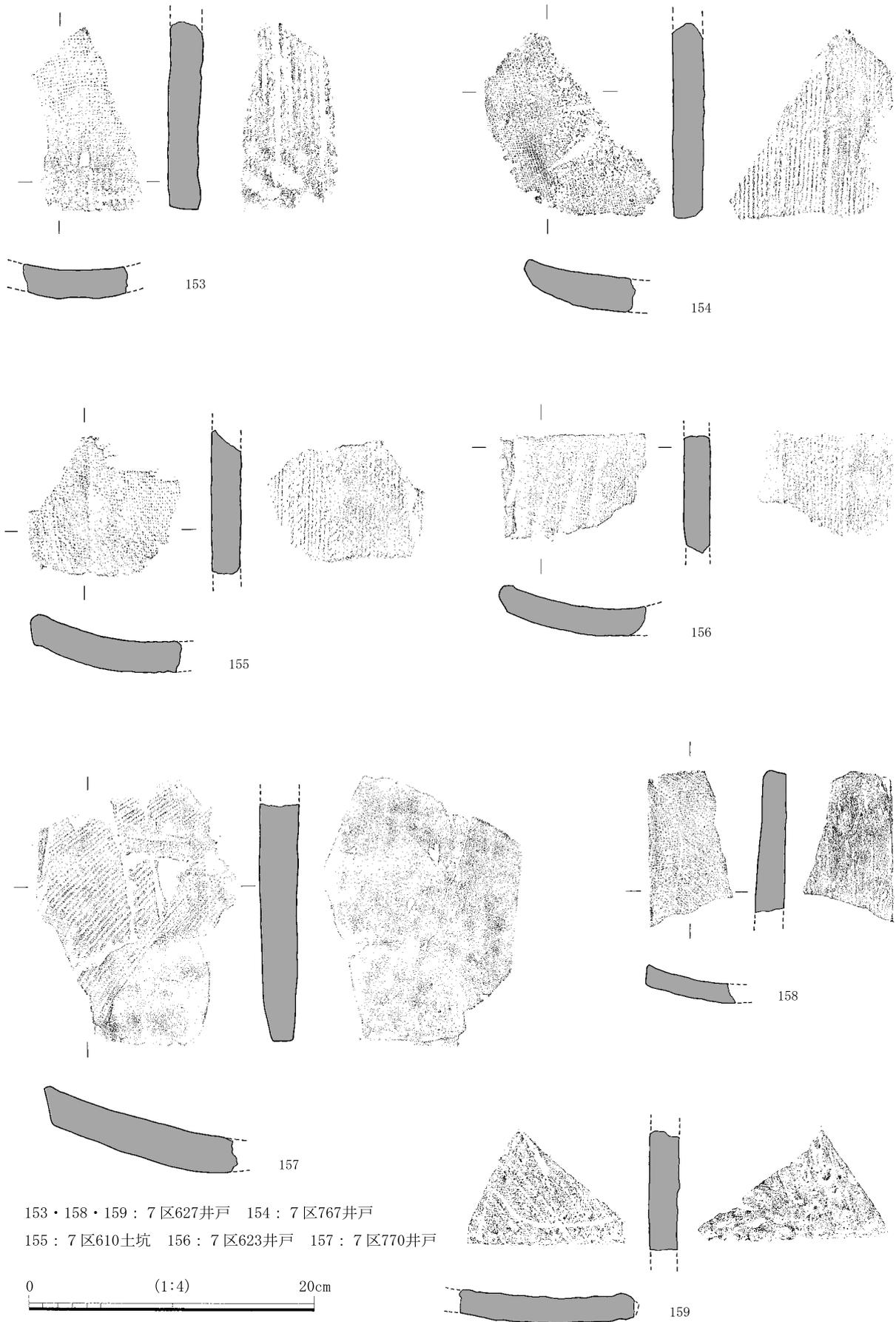
図 183 出土瓦実測図 (1)

れた。10区の北側で基盤となる砂層の盛り上がりがあり、堤の基礎の築成もそれに規定され、10区中央付近で完結していた。

遺物(図182 - 147) 瓦器碗である。口径15.2cm、器高6.6cmで、しっかりした背の高い高台がついており、内面の暗文、外面のミガキともに密にしっかりと施されている。

10. 瓦 (図183 - 148 ~ 図184 - 159)

瓦はいろいろな調査区、遺構から出土する。同一文様のものを大量に生産し、何度も再利用された可



153 · 158 · 159 : 7区627井戸 154 : 7区767井戸
 155 : 7区610土坑 156 : 7区623井戸 157 : 7区770井戸

0 (1:4) 20cm

图 184 出土瓦实测图 (2)

能性がある遺物であり、瓦の製作時期は出土遺構の埋没時期を示すものとはなり得ない。ここでまとめて取り上げたい。

148は複弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、7区768土坑より出土している。復元瓦当径14.6cm、厚さ2.1～3.2cmである。外縁は無文で、内区文様は川原寺式に類似している。平安時代以降の復古様式と推測される。149は巴文軒丸瓦である。胎土には白色砂粒が多く含まれている。瓦当の一部分しか残っていないが、珠文も密にめぐっており、古い様相を示している。150は唐草文軒平瓦である。瓦当の右側半分が残っており、段顎である。胎土には白色砂粒が含まれている。151は軒平瓦であるが、突線で区画することによって三角形文様を上下交互に配し、中に縦長の突起状のものを置いている。胎土に白色砂粒を多量に含んでいる。

152～159は平瓦である。152～156は凸面の縄目も凹面の布目もそのまま残っているものであるが、157～158は凸面の縄目がきれいにすり消されているものである。焼成はすべてしっかりしており、胎土に白色の砂粒を含んでいる。また159は両面ともにヘラ調整されている。

第4節 小結

今回の調査成果をふりかえると、次のようである。

遺物包含層や遺構などから出土した遺物は、12世紀から16世紀にかけてのものが主流を占める。一部、それより時期的に遡る平安時代の遺物などもあるが、当遺跡で一番集中して出土するのは13世紀から14世紀にかけての遺物である。このことは巢本遺跡が13世紀以降に積極的に開発が進められたことをあらわしている。

また巢本遺跡において本格的に人々が活動しはじめるのも13世紀以降であると思われる。調査区内の微高地上でピット群、掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝などを確認しており、特に1区や6区および9区西部などで多量のピット群を検出している。この分布の傾向は先行して行われた巢本遺跡03-1・03-2の調査でも同様であり、微妙に標高の高い地域を選んで居住域を設定していることには間違いがない。対して1区南部、8～9区東部、10区などでは、建物の痕跡が明らかではなく、畦畔、大型土坑などの遺構がまとまって検出されている。概して巢本遺跡東部地域は、非居住域・生産域であった可能性が大きい。

遺跡東部の低地帯では1流路、1060堤、705や703の大型方形土坑などが発見されている。1060堤は巢本03-1調査で発見されている663堤の続きで、今回10区での発見が一番北端にあたる部分である。今回、堤の本体部分は削平されて発見できなかったが、堤の基礎となる整地の痕跡は確認できた。間に竹皮などはさみながら粘土を積み上げており、暗オリーブ褐色粘土およびその上の灰色砂層をベースにしていた。この灰色砂層は10区で北から南へ傾斜しており、堤の基礎と思われる築成土も砂層の傾斜している地点で完結していた。

また1060堤と一部重複しながらその西側を南北にはしる1流路であるが、これも1060堤と同様に10区で終わっていた。この流路は調査区の中央部8区よりも南の部分からはじまり、調査区を縦断するようにのびるものであった。この流路からの出土遺物は、場所により中世が卓越するところと、近世を多く含むところがあった。中世に起源をもちながら、微妙に位置をずらしながらも、新しい時期まで継続して利用された湧水を処理するためのものではないだろうか。

8-3区で検出している703土坑は03-2調査の4区で検出されている400土坑の続き部分であり、方形にまわる土坑の北辺にあたる。また703土坑は705土坑と直にまじわる類似のラッパ状にひらく土坑であるが、それと同様の遺構は巢本遺跡北東部で集中して見つかっている。03-2調査の1区や03-1調査の4区など、隣接調査区から発見されている。途切れ途切れにつづく細長い土坑群がそれであり、内部には灰色系統のシルトや粘質土が堆積している。水が流れていた痕跡は確認できず、用途は不明である。だが、これらの遺構が集落全体にまんべんなく散在しているのではなく、集落内でも特定地域に集中して存在しているのは特徴的である。単に粘土や土を採掘した痕跡なのか、あるいは堀のように防御を意識したものであるのか、判断は難しい。しかし今後集落の構造とあわせて考えられなければならない課題であろう。

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的とその位置

巢本遺跡の調査では、中世の集落跡や耕作地の跡を確認し、多くの遺物を発見したが、それ以前の時代の遺構はまったく確認できなかった。中世遺構面以下の地層の様子を確認するために掘削したトレンチ、あるいは井戸などの深い遺構の壁面観察によって、おそらく縄文・弥生時代まで遡ると考えられる地層を確認することができたが、時代を示す遺物が含まれていなかったため、地層の正確な時代が特定できていなかった。そこで、巢本遺跡の成り立ちを解明するため、また縄文時代の堆積層が確認されている寝屋川市讃良郡条里遺跡などとの地層のつながりを明らかにするため、下層の地層中に含まれる植物遺体の放射性炭素年代測定を実施し、地層の年代を明らかにすることとした。

また、下層の調査によって、葦などの植物遺体が折り重なるように堆積する地層が確認され、おそらく中世までは巢本遺跡周辺地域が湿地帯であったことが推測されたが、それ以外は、水の流れがあったのか、よどんでいたのか、海水の影響があったのかどうか、など詳細がまったく不明な状態であった。そこで巢本遺跡周辺が中世以前の各時代にどのような環境であったのかを復原するため、年代測定と合わせて地層中に含まれる珪藻の分析も行なうこととした。

放射性炭素年代測定については、4区中央部の下層確認調査トレンチ西壁から7-1層、8層、9-2層の3点と、4区9-2層と同一の地層と考えられた3区14層下層の1点の合計4点を試料とし、株式会社 パレオ・ラボに分析委託した。珪藻分析については、調査地南端に位置する3区の地層から9点を試料とし、株式会社 古環境研究所に分析委託した（写真5）。それぞれの結果についてはつづく第2・3節で報告する。なお、提出された報告書のうち表番号等については本書編集段階で修正した。

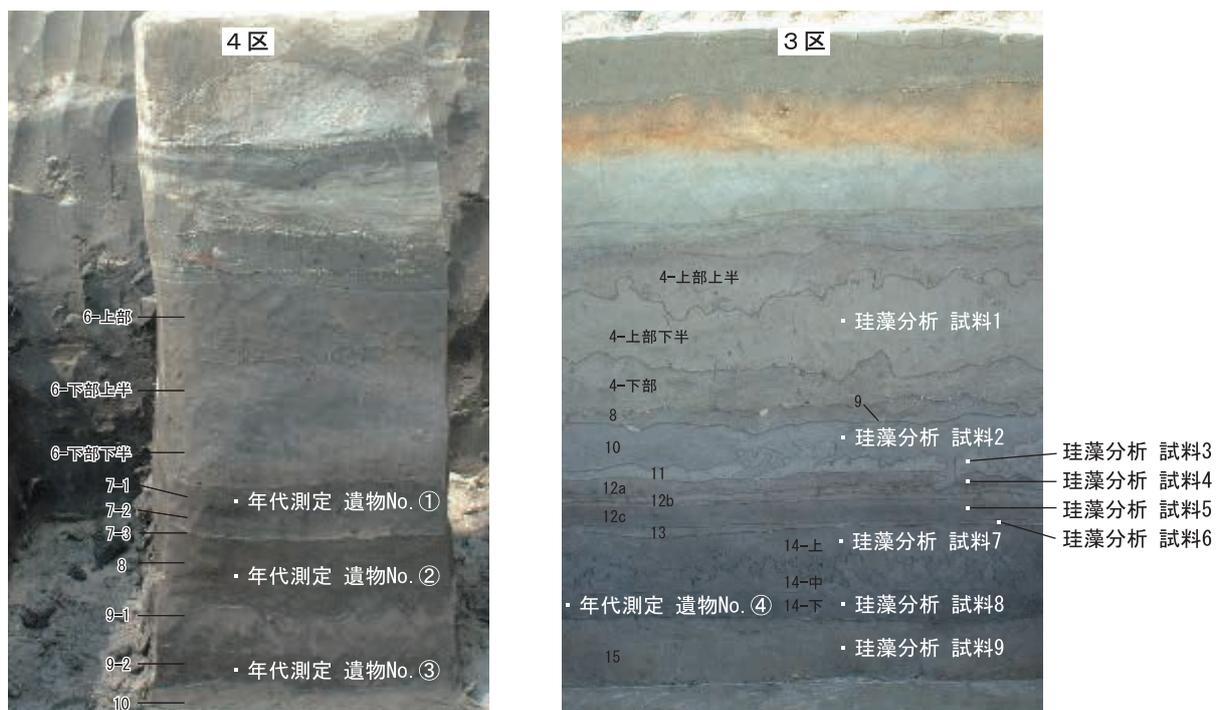


写真5 試料を採取した地層

第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

大阪府寝屋川市・巢本遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表13のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表13 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6380	位置：4区 遺物No：①	試料の種類：生試料・植物遺体(草本遺体) 状態：wet、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6381	位置：4区 遺物No：②	試料の種類：生試料・植物遺体(草本遺体) 状態：wet、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6382	位置：4区 遺物No：③	試料の種類：土壌 状態：wet、カビ：無	湿式篩分け(106 μ m以下を使用) 酸洗浄(塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6383	位置：3区 遺物No：④	試料の種類：炭化物・植物遺体(草本遺体) 状態：wet、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

3. 結果

表14に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を、図185に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5730 \pm 40年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal3.10 (較正曲線データ: INTCAL04) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表 14 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)
			1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
PLD-6380	-26.99 \pm 0.11	2095 \pm 20	<u>170BC (59.0%) 80BC</u> 70BC (9.2%) 50BC	<u>180BC (95.4%) 40BC</u>	2094 \pm 21
PLD-6381	-27.54 \pm 0.11	2330 \pm 25	<u>405BC (68.2%) 385BC</u>	<u>415BC (95.4%) 360BC</u>	2330 \pm 24
PLD-6382	-23.47 \pm 0.15	3550 \pm 25	<u>1940BC (63.2%) 1870BC</u> 1840BC (5.0%) 1820BC	<u>1960BC (70.9%) 1860BC</u> 1850BC (24.5%) 1770BC	3549 \pm 24
PLD-6383	-23.88 \pm 0.11	3495 \pm 25	<u>1880BC (68.2%) 1770BC</u>	<u>1890BC (95.4%) 1740BC</u>	3495 \pm 23

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, Radiocarbon, 46, 1029-1058.

(株式会社 パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ)

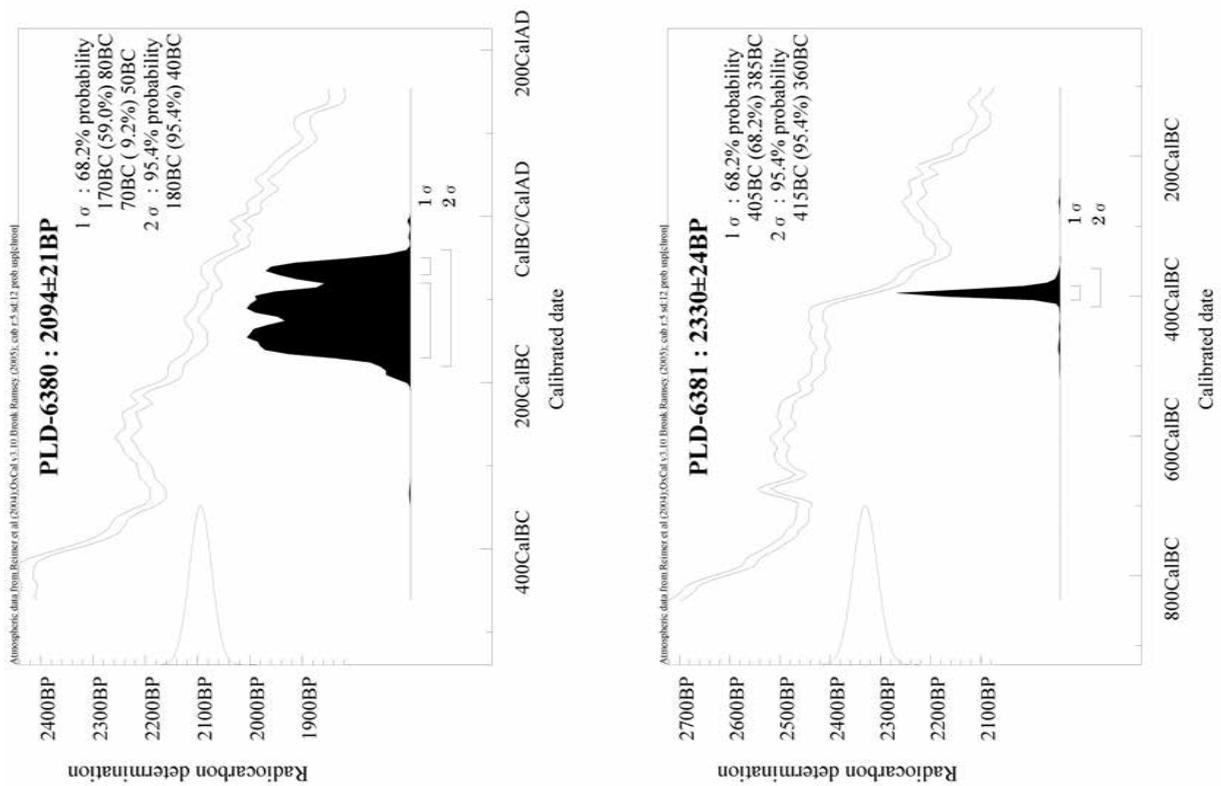
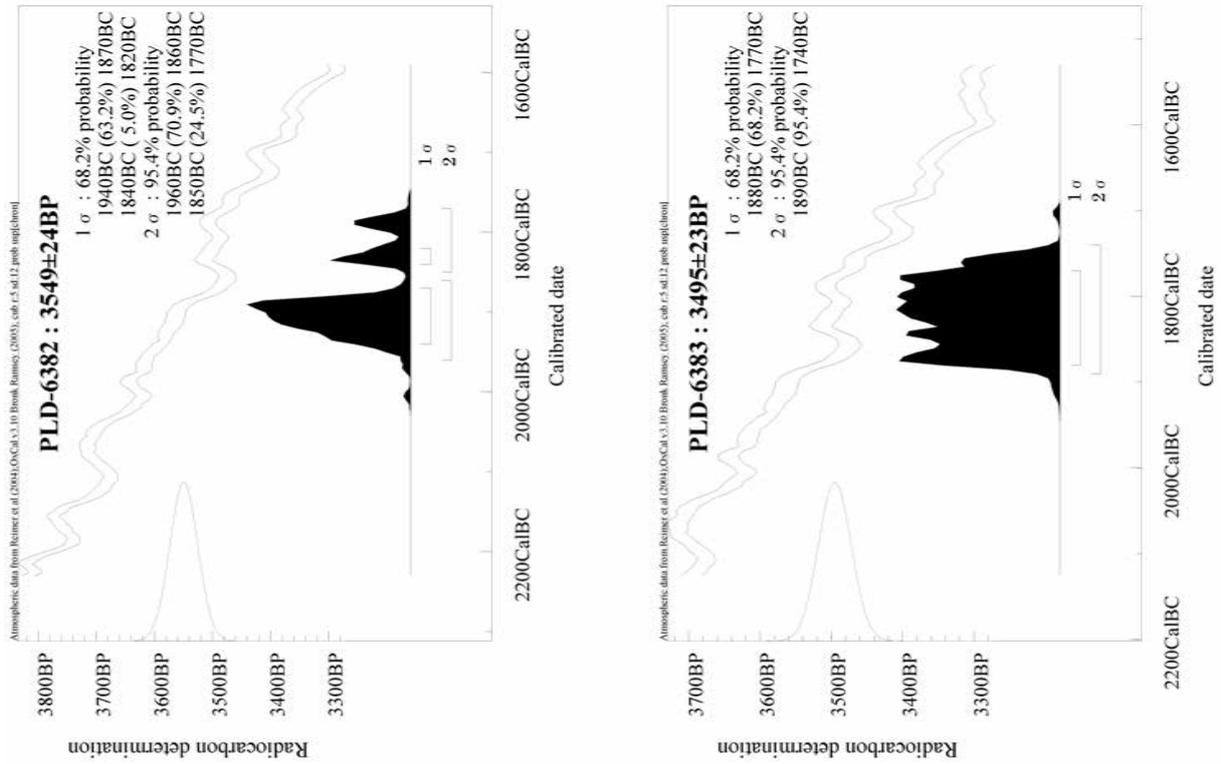


図 185 暦年較正結果

第3節 巢本遺跡 03 - 2 における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

2. 試料

分析試料は、巢本遺跡 03 - 2 より採取された試料 1 (4層上部下半：灰褐色砂質シルト粘土)、試料 2 (10層：暗(灰)褐色粘土)、試料 3 (11層：暗(灰)褐色粘土)、試料 4 (12層：暗(灰)褐色腐植質シルト粘土(植物質含む))、試料 5 (12層：暗(灰)褐色腐植質シルト粘土(植物質含む))、試料 6 (13層：暗(灰)褐色腐植質シルト粘土)、試料 7 (14層：暗黒褐色腐植質シルト粘土)、試料 8 (14層：暗黒褐色腐植質シルト粘土)、試料 9 (15層：暗灰褐色シルト) の計 9 点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行う。

- 1) 試料から 1 cm³を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗 (5 ~ 6 回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ~ 1500 倍で行う。計数は珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行う。

4. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、中-真塩性種(汽-海水生種) 23 分類群、貧-中塩性種(淡-汽水生種) 2 分類群、貧塩性種(淡水生種) 127 分類群である。表 15 に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図 186 に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe(1974) や渡辺 (2005) 等の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

[中-真塩性種]

Navicula menisculus v. *upsalinesis*, *Navicula peregrina*

[貧-中塩性種]

Rhopalodia gibberula

〔貧塩性種〕

Achnanthes inflata, *Amphora copulata*, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira canadensis*, *Aulacoseira distans*, *Aulacoseira* spp., *Aulacoseira valida*, *Cocconeis placentula*, *Eunotia minor*, *Eunotia praeupta*, *Eunotia* sp.1, *Eunotia* spp., *Fragilaria construens*, *Gyrosigma* spp., *Navicula confervacea*, *Navicula mutica*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

(2) 珪藻群集の特徴

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より4帯の珪藻分帯を設定する。

1) I帯(試料9)

中塩性種(汽水生種)よりも貧塩性種(淡水生種)の占める割合が高いが、中塩性種(汽水生種)で汽水泥質干潟環境指標種群の *Navicula meniscus* v. *upsalinesis* が優占し、中塩性種(汽水生種)の *Navicula peregrina* が伴われ、真塩性種(海水生種)および外洋種も少数伴われる。貧塩性種(淡水生種)では、流水不定性種の *Amphora copulata*, *Gyrosigma* spp. などが出現する。真・好止水性種では、*Aulacoseira* spp., *Fragilaria construens*, 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor* などが出現する。真・好流水性種では、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Cocconeis placentula*, 真・好流水性種の *Achnanthes inflata* が出現する。

2) II帯(試料8)

珪藻密度が低くなり、I帯で優占した中塩性種(汽水生種)で汽水泥質干潟環境指標種群の *Navicula meniscus* v. *upsalinesis*, が消失する。貧塩性種(淡水生種)では、真・好止水性種、陸生珪藻の占める割合が高くなり、陸生珪藻の *Navicula mutica*, 真・好止水性種の *Aulacoseira canadensis* が優占し、真・好流水性種は消失する。

3) III帯(試料2から試料7)

・III-a亜帯(試料7)

珪藻密度が高くなり、貧塩性種(淡水生種)の真・好止水性種の割合が高くなる。真・好止水性種の *Fragilaria construens*, *Aulacoseira ambigua* が優占し、*Aulacoseira* spp., 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor* が伴われる。中塩性種(汽水生種)の *Navicula peregrina* が増加する。

・III-b亜帯(試料5、試料6)

珪藻密度が低くなり、貧塩性種(淡水生種)では、真・好止水性種の占める割合が低くなり、流水不定性種の占める割合が高くなる。真・好止水性種では、*Fragilaria construens* が減少する。流水不定性種では、*Amphora copulata*, *Eunotia* sp.1, *Eunotia* spp., 沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia praeupta* が増加する。好塩性種の *Rhopalodia gibberula* が増加する。

・III-c亜帯(試料4)

貧塩性種(淡水生種)の真・好止水性種の占める割合が極めて高くなる。真・好止水性種では、*Aulacoseira canadensis*, *Aulacoseira ambigua* を主に、*Aulacoseira* spp., *Aulacoseira valida*, *Aulacoseira distans* が伴われる。中塩性種(汽水生種)の *Navicula peregrina* が消失する。

・III-d亜帯(試料2、試料3)

貧塩性種(淡水生種)の流水不定性種の占める割合が高くなる。流水不定性種では、*Eunotia* sp.1, *Eunotia* spp. が増加する。

4) IV帯 (試料1)

貧塩性種 (淡水生種) の真・好流水性種、陸生珪藻の占める割合が高くなる。真・好流水性種では、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Cocconeis placentula*、陸生珪藻では、*Navicula confervacea*、*Navicula mutica* が増加する。流水不定性種では、*Eunotia* sp.1 が減少し、*Amphora copulata*、*Gyrosigma* spp.が増加する。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

珪藻分帯にそって下位より環境の変遷を推定する。

1) I帯 (15層) 期

貧塩性種 (淡水生種) では好止水性種、好流水性種が出現し、沼沢湿地付着生環境指標種群も出現する。中塩性種 (汽水生種) では汽水泥質干潟環境指標種群の *Navicula menisculus* v. *upsalinesis* が多い。以上から、汽水泥質干潟から水草の生育する比較的浅い沼沢の環境が推定される。

2) II帯 (14層下) 期

珪藻密度が低くなり、陸生珪藻の *Navicula mutica*、好止水性種の *Aulacoseira canadensis* が優占する。こうしたことから、湿った環境から沼沢の環境が推定される。

3) III帯 (10層から14層) 期

好止水性種が特徴的に出現することから、湖沼ないし沼沢およびそれに付随する湿地の環境が推定される。優占種の変遷から、III - a 亜帯 (試料7) 期では安定した水域が示唆され、中塩性種 (汽水生種) の出現から多少の汽水の影響が示唆される。III - b 帯 (試料5、試料6) 期ではやや不安定な水域が推定され、同様に汽水の影響が示唆される。III - c 亜帯 (試料4) 期では再び安定した水域が、III - d 亜帯 (試料2、試料3) 期にはやや不安定な水域が推定される

4) IV帯 (4層上部下半) 期

好流水性種の沼沢湿地付着生環境指標種群、陸生珪藻の占める割合が高い。水草の生育する比較的浅い流水域から湿地の環境が示唆される。

6. まとめ

栗本遺跡 03 - 2 の中世の遺構面より下位の堆積物について珪藻分析を行った結果、最下位の15層 (I帯) では汽水泥質干潟の環境であり、海水の影響が示唆された。上位に向かい14層下 (II帯) では湿った環境から沼沢の環境、10層から14層 (III帯) では湖沼から沼沢ないし湿地の環境、最上位の中世の4層上部下半 (IV帯) では水草の生育する比較的浅い流水域から湿地の環境が示唆された。

註

Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophyllous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35 - 47.

K. Krammer · H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae · 1 - 4.

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73 - 88.

伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6 ,p.23 - 45.

小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29 - 44.

小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p. 1 - 20.

渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数 DAIPo, pH 耐性能. 内田老鶴圃, pp.666.

(株式会社 古環境研究所)

表 15 巢本遺跡 03 - 2 における珪藻分析結果

分類群	4層上部下半		10層		11層		12層		13層		14層		15層	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
貧塩性種 (淡水生種)														
<i>Achnanthes hungarica</i>	3	1												
<i>Achnanthes inflata</i>		4	15	1	1	4							6	
<i>Achnanthes joursacense</i>	1													
<i>Achnanthes lanceolata</i>	8	1		1	1			3						
<i>Actinella brasiliensis</i>		1												
<i>Amphora copulata</i>	14	3	1	10	2	24	14		1				23	
<i>Amphora montana</i>		1												
<i>Amphora</i> spp.	3													
<i>Aulacoseira alpigena</i>	2													
<i>Aulacoseira ambigua</i>	2	32	11	73	12	21	31							
<i>Aulacoseira canadensis</i>	1		5	70								14	3	
<i>Aulacoseira crenulata</i>	2													
<i>Aulacoseira distans</i>		3	26	12										3
<i>Aulacoseira granulata</i>	2		1					4					7	
<i>Aulacoseira nipponica</i>			15	2										
<i>Aulacoseira</i> spp.	7	58	35	36	2	13	10		1				16	
<i>Aulacoseira valida</i>	1			31				2						
<i>Caloneis bacillum</i>	3													
<i>Caloneis hyalina</i>					1	3	1		2				1	
<i>Caloneis lauta</i>														1
<i>Caloneis silicula</i>	4									1				
<i>Caloneis</i> spp.								1						7
<i>Cocconeis neodiminuta</i>	1													
<i>Cocconeis placentula</i>	22			1		1	1			1			19	
<i>Cymbella cuspidata</i>			1	1		11	6							
<i>Cymbella lanceolata</i>		4	6	5	3									
<i>Cymbella minuta</i>	1													
<i>Cymbella naviculiformis</i>	4	1								1				
<i>Cymbella perpussilla</i>	4													
<i>Cymbella silesiaca</i>	8	1	1				3		9					
<i>Cymbella sinuata</i>	4													
<i>Cymbella</i> spp.	3			1										
<i>Cymbella tumida</i>	3	1												6
<i>Cymbella turgidula</i>	15				1									1
<i>Diploneis elliptica</i>	2							1		1				1
<i>Diploneis finnica</i>										1				2
<i>Diploneis</i> spp.														4
<i>Epithemia adnata</i>	11		1	2										
<i>Epithemia turgida</i>		2		1										1
<i>Eunotia arcus</i>							2							
<i>Eunotia bilunaris</i>	4	2	3	1		1	3							1
<i>Eunotia diodon</i>		4		1	4	4	2							
<i>Eunotia gracilis</i>			2	2										
<i>Eunotia minor</i>	4	15	13	3	10	8	19	3						5
<i>Eunotia pectinalis</i>		5	2		5	2	1	2						
<i>Eunotia praeurupta</i>	1	8	12	1	5	6	1	3						
<i>Eunotia pseudoserra</i>		1		1	3		1							
<i>Eunotia soleirolii</i>														10
<i>Eunotia</i> sp.1		95	93	9	20	13	3							2
<i>Eunotia</i> spp.	3	12	12	5	8	2	8	1						1
<i>Fragilaria brevistriata</i>	6					4								1
<i>Fragilaria capucina</i>	18	1				2	1							
<i>Fragilaria construens</i>	4				1	1	9	43	1				5	
<i>Fragilaria construens</i> v. <i>binodis</i>	1					3	9						2	
<i>Fragilaria exigua</i>														6
<i>Fragilaria leptostauron</i>														4
<i>Fragilaria neoproducta</i>	1													
<i>Fragilaria nitzschioides</i>	1													
<i>Fragilaria</i> spp.	1									1				
<i>Fragilaria virescens</i>				1		1				9		1		
<i>Gomphonema acuminatum</i>		4	2	2						2				
<i>Gomphonema angustatum</i>	7	3								1				1
<i>Gomphonema augur</i>	2									2				
<i>Gomphonema augur</i> v. <i>turris</i>					1					4				1
<i>Gomphonema clavatum</i>	1	2												
<i>Gomphonema clevei</i>	3		1			4								6
<i>Gomphonema gracile</i>	3	4			2			3	1					1
<i>Gomphonema helveticum</i>		1	1											
<i>Gomphonema minutum</i>	1							3						
<i>Gomphonema parvulum</i>	2	5			1	2	1							
<i>Gomphonema</i> spp.	6	3	2		1	1	4		2					1
<i>Gomphonema truncatum</i>				1										
<i>Gyrosigma</i> spp.	9													18
<i>Hantzschia amphioxys</i>	3	6	3	2	4			4	3					
<i>Hantzschia rhaetica</i>														
<i>Navicula americana</i>			1			11	6							1
<i>Navicula bacillum</i>	3									1				
<i>Navicula capitata</i>	3													
<i>Navicula clementis</i>	2													
<i>Navicula confervacea</i>	23	8								3				

分類群	4層上部下半		10層	11層	12層	13層	14層	15層	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
<i>Navicula contenta</i>	1	9	1	2	3	2	2	2	
<i>Navicula cuspidata</i>	1					3	1		2
<i>Navicula decussis</i>	1								
<i>Navicula elegantoides</i>									3
<i>Navicula elginensis</i>	2					1	5		
<i>Navicula elginensis</i> v. <i>cuneata</i>							2	9	
<i>Navicula hasta</i>	1								1
<i>Navicula laevissima</i>	1						1		
<i>Navicula lanceolata</i>	3								
<i>Navicula mutica</i>	4	7	1		1	3	1	13	5
<i>Navicula placenta</i> v. <i>obtusa</i>		1	1						3
<i>Navicula placentula</i>							1		
<i>Navicula pupula</i>	1						4		
<i>Navicula pusilla</i>									2
<i>Navicula radiosa</i>	4						1		
<i>Navicula</i> spp.	1								2
<i>Navicula viridula</i> v. <i>rostellata</i>	6								
<i>Neidium affine</i>	1	1							
<i>Neidium ampliatum</i>	2					1	1		
<i>Neidium iridis</i>	1								
<i>Neidium</i> spp.							3		1
<i>Nitzschia brevissima</i>	3	2	2		1		1	2	
<i>Nitzschia debilis</i>	2								
<i>Nitzschia nana</i>					2	2	2	5	
<i>Nitzschia palea</i>	1								
<i>Nitzschia</i> sp.1	1								
<i>Nitzschia</i> spp.		3							
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	1	2			1		1		1
<i>Pinnularia borealis</i>	2					1	1		
<i>Pinnularia gibba</i>		2			2	5	9		
<i>Pinnularia hemiptera</i>						1	1		
<i>Pinnularia major</i>							2		
<i>Pinnularia microstauron</i>	3			1		1	3		
<i>Pinnularia schroederii</i>	1								1
<i>Pinnularia</i> spp.	1	1					1	1	3
<i>Pinnularia sudetica</i>						1			
<i>Pinnularia viridis</i>	1		2			2	4		1
<i>Rhoicosphenia abbreviata</i>	7								
<i>Rhopalodia gibba</i>			2	3	1	1	14		
<i>Stauroneis acuta</i>		1			1				
<i>Stauroneis anceps</i>							1		
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>	1	1		3	1	3	17		
<i>Stauroneis smithii</i>	3						1		
<i>Stephanodiscus</i> spp.	4	1	1	1	1	2			3
<i>Surirella angusta</i>	1								
<i>Synedra ulna</i>	6	1	3	1	3		2		2
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>	3	12	25	13	4				

貧-中塩性種 (淡-汽水種)									
<i>Achnanthes brevipes</i>	3		1			1			4
<i>Rhopalodia gibberula</i>		1	1	6	1	18		3	4

中-真塩性種 (汽-海水種)									
<i>Actinoptychus undulatus</i>									1
<i>Amphora</i> sp.									1
<i>Caloneis amphibaena</i>						1			
<i>Cyclotella striata-stylorum</i>									5
<i>Diploneis smithii</i>									3
<i>Fragilaria fasciculata</i>	1								
<i>Navicula alpha</i>									2
<i>Navicula capitata</i> v. <i>hungarica</i>	1								1
<i>Navicula crucicula</i>						1			3
<i>Navicula granulata</i>									1
<i>Navicula lacertosa</i>									1
<i>Navicula marina</i>									8
<i>Navicula menisculus</i>	3								1
<i>Navicula menisculus</i> v. <i>upsalinesis</i>									41
<i>Navicula meniscus</i>	1								
<i>Navicula peregrina</i>						10	14		8
<i>Nitzschia granulata</i>									1
<i>Nitzschia levidensis</i> v. <i>victoriae</i>	1								
<i>Nitzschia littoralis</i>						2			1
<i>Opephora olseni</i>									12
<i>Thalassionema nitzschioides</i>									1
<i>Thalassiosira bramaputrae</i>									6
<i>Thalassiosira</i> sp.									6
合 計	82	47	43	34	27	68	103	43	150
未同定	16	29	17	7	4	7	8	2	8
破片	135	266	180	232	76	279	194	282	258
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	1.2	1.9	1.2	1.9	2.2	7.7	7.6	2.4	2.0
	×10 ⁶	×10 ⁵	×10 ⁵	×10 ⁵	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁵	×10 ⁴	×10 ⁵
完形殻保存率 (%)	71.6	57.9	64.1	57.6	59.8	45.1	62.5	20.3	55.1

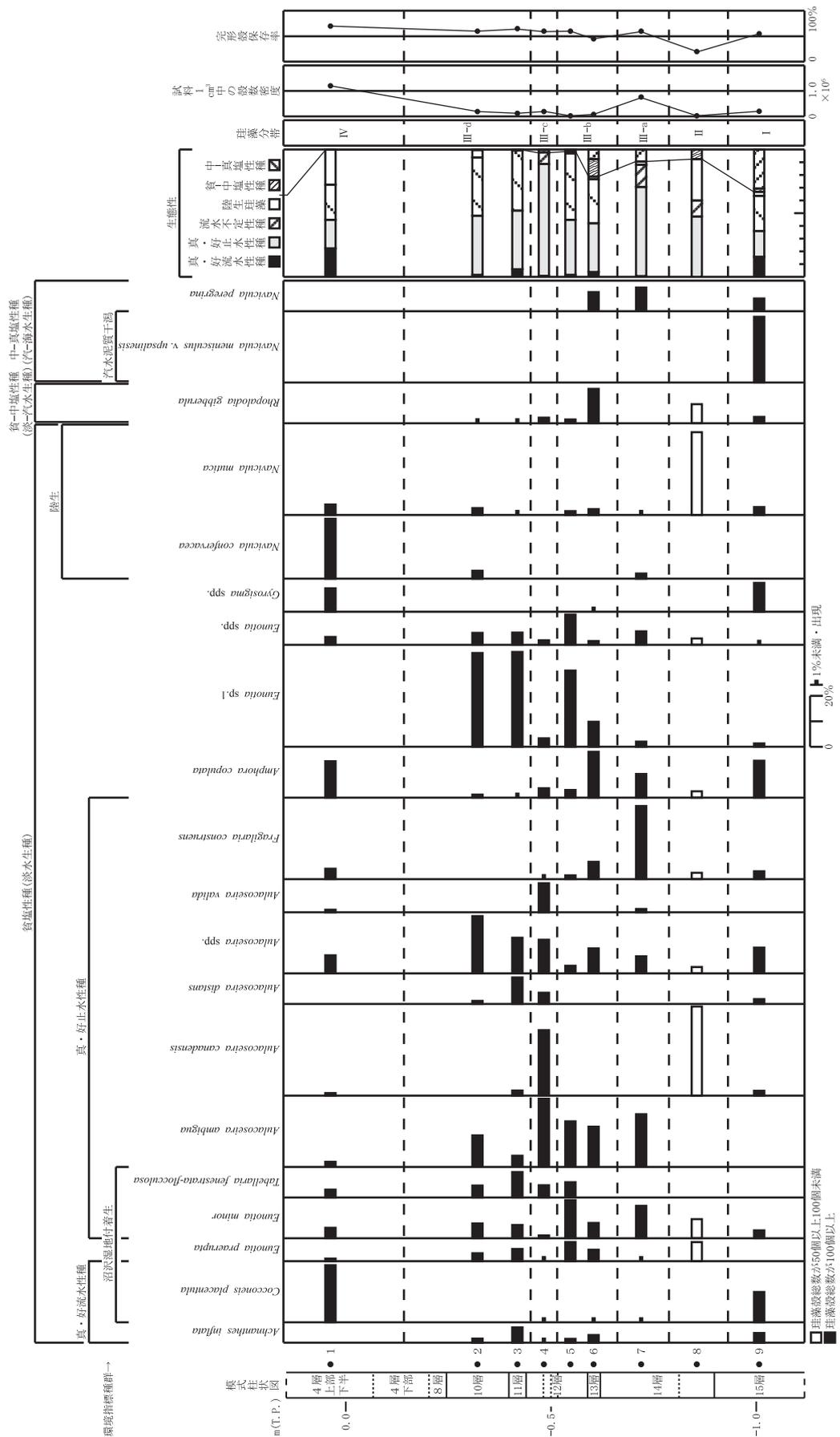
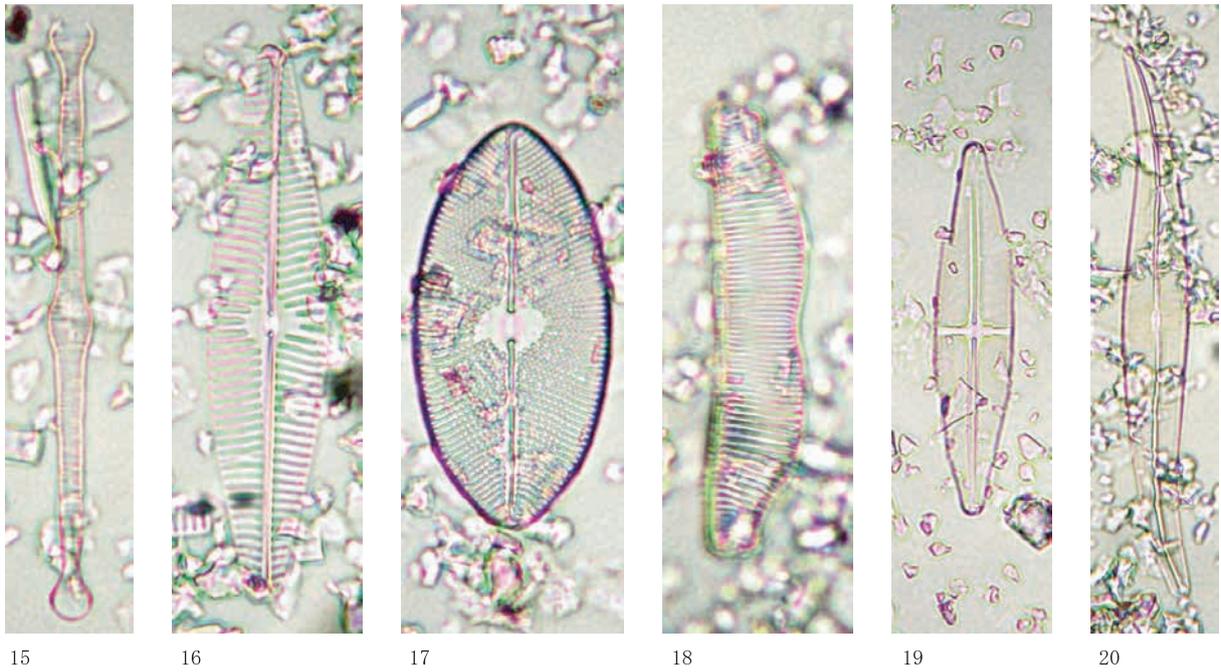
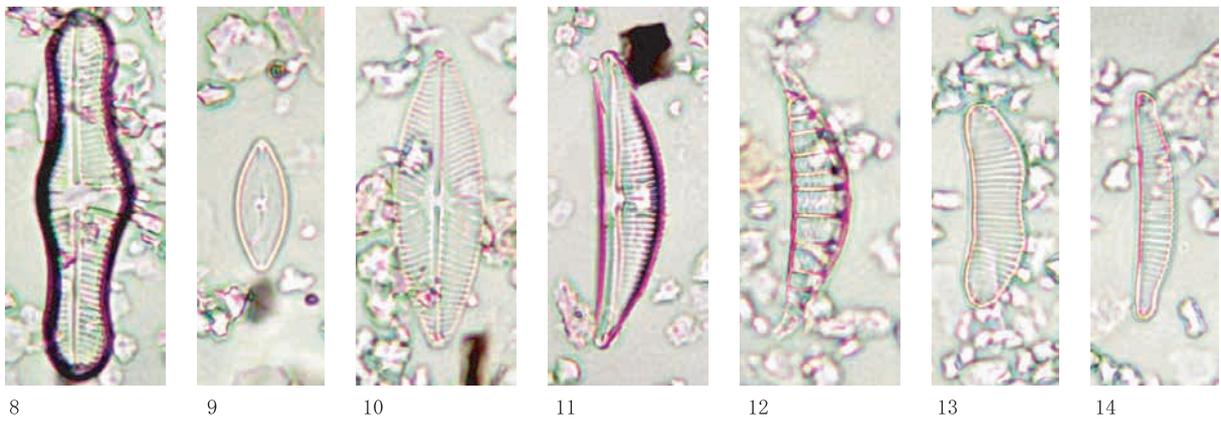
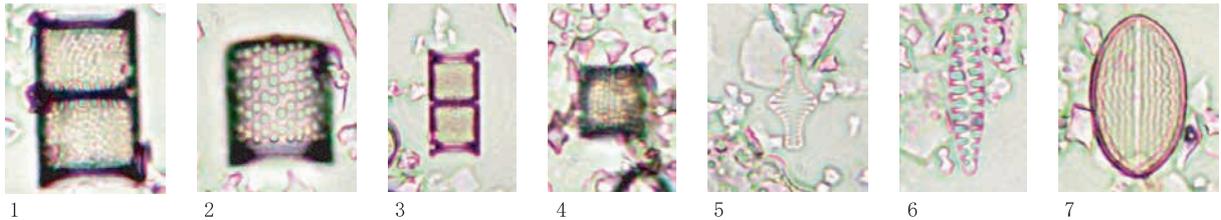


図 186 巢本遺跡 03-2 における主要珪藻ダイアグラム



1-18 — 10 μm
19, 20 — 10 μm

1. *Aulacoseira valida* 2. *Aulacoseira canadensis* 3. *Aulacoseira ambigua* 4. *Aulacoseira distans*
 5. *Fragilaria construens* 6. *Opephora olsenii* 7. *Cocconeis placentula* 8. *Achmanthes inflata* 9. *Navicula confervacea*
 10. *Navicula menisculus* v. *upsalinesis* 11. *Amphora copulata* 12. *Rhopalodia gibberula* 13. *Eunotia* sp.1 14. *Eunotia minor*
 15. *Tabellaria fenestrata-flocculosa* 16. *Navicula peregrina* 17. *Navicula marina* 18. *Eunotia praerupta*
 19. *Stauroneis phoenicenteron* 20. *Gyrosigma* spp.

写真6 巢本遺跡 03-2 の珪藻

第6章 まとめ

門真市域の遺跡は、宮野遺跡や古川遺跡・普賢寺遺跡など多くが現在の京阪線沿いに分布している。これに対し市域東部や中央部は、低湿地という環境であったため、またこれまで大規模な発掘調査が行なわれていなかったこともあり、長い間遺跡の空白地帯となっていた。しかし今回、3次にわたって行なわれた発掘調査および整理作業の結果、この門真市北東部の一画に、大規模な土木工事によって築かれた中世の大きなムラが存在していたことが明らかとなった。

以下、調査によって明らかとなった事柄について、時代ごと、またいくつかの項目ごとに簡単に述べまとめとする。なお複雑な下部構造をもつ堤などが明らかとなった03-1調査の成果については前書¹⁾にゆずり、本書では03-2・06-1調査の成果を中心に記すこととする。

◆縄文時代～弥生時代

いくつかの調査区で実施した下層確認調査や、井戸などの深い遺構の壁面観察によって、標高-1～0m付近に黒色の地層の重なりがあることを確認した。時代を示す遺物が含まれておらず、出土遺物からの年代の特定はできなかったが、加速器質量分析（AMS）による放射性炭素年代測定によって、これらは縄文時代後期から弥生時代中期の地層であることが明らかとなった。また発掘調査の段階で同一の地層であろうと考えていた4区の9-2層と3区の14-下層についても、微妙な年代差は認められるが、両者ともに縄文時代後期という測定結果が得られ、同一層であることが確認された。3区については、この14-下層以外は年代測定を実施していないが、年代が明らかとなった4区の地層とのつながりが確認されたことにより、3区14-上層が縄文時代晩期、同じく3区の12層が弥生時代の地層であることが判明し、3区の地層の年代もほぼおさえることができた。

その3区の地層については珪藻分析を実施しており、これによって各時代の環境もおおよそ復原することができた。縄文時代後期の地層と判明した14-下層は珪藻密度が低く、陸生珪藻の *Navicula mutica*、好止水性種の *Aulacoseira canadensis* が優占することから、当時は湿った環境から沼沢の環境であったと推測された。その1層下の15層については中塩性種（汽水生種）の汽水泥質干潟環境指標種群が多く認められることから、海水の影響が残る汽水泥質干潟の環境であったと推定され、縄文時代晩期から弥生時代を通じては、地層中から好止水性種が特徴的に出現しており、また中塩性種（汽水生種）も認められることから、多少の汽水の影響も残る湖沼ないし沼沢、およびそれに付随する湿地の環境であったと推定された。

この時代、古川遺跡のように近隣の完全に陸地化した地域では、徐々に人々が移り住み、集落が形成され始めるが、少なくとも巢本遺跡あたりは、上記のようにまだまだ海水の影響が残るぬかるんだ湿地環境であり、人々が定住するには不向きな土地であったようである。

◆古墳時代～平安時代中期

3区や4区などでこの時代の土器片が僅かながら出土している。しかしどれも小片であり、近隣からの混入品と考えられる。また人々の生活を示す遺構も見つかっていない。

遺構が検出できる直前の3区の4層上部下半（おそらく平安時代の地層と考えられる）については、珪藻分析を行っており、その結果、地層中には好流水性種の沼沢湿地付着生環境指標種群、陸生珪藻の占める割合が高いというデータが得られ、この時代も水草の生育する比較的浅い流水域から湿地で

あったと復原されている。まだまだこの時代も人々が生活できるような環境ではなかったようであるが、上記のようにこの時代の土器片が確実に混入していること、また珪藻分析の過程で、4層上部下半から鞭虫卵が発見されたという報告を受けていることから、確実に巢本遺跡のすぐ近くまで人々の生活の場が広がってきていることがわかる。

◆平安時代後期以降（図 187）

この頃からようやく巢本遺跡内の土地利用が始まる。

建物跡が発見されているわけではないが、03 - 2 調査区内では 11 世紀代に属する古手の土器が国道 163 号線沿いの 3 区や 5 区南半部で多く出土しており、井戸や土坑・溝等の遺構もいくつか検出されている。また寝屋川に近い北側の 03 - 1 調査区では、農地造成のための土の入れ替え跡と考えられる遺構（407 落込）が見つかった。11 世紀末から 12 世紀中頃の遺構で、この開発を契機に水田耕作が開始されたと想定されている。このように寝屋川沿いの北側と深野池に近い南側の両方から巢本遺跡の開発が始まったと考えられる。

開発に伴い、まず寝屋川の治水対策として、遺跡内に幹線水路が通される。この水路は発掘調査が行なわれる直前までの長い間用水路として使われており、出土する遺物も新しい時代のものまで含んでいるが、その開削の時期はおそらく開発当初であったと考えている。その水路は 03 - 1 調査区（401 土坑）から 03 - 2 調査の 1 区と 4 区との間を通り（06 - 1 調査 8・9 区検出の 1 流路）、2 区西側（54・56 溝の前身遺構）へとつづいている。また 06 - 1 調査 1・2 区を通る水路（605 溝）も西からのびており、03 - 2 調査 2 区検出の 44・55 溝のような溝も、それらに流れ込むように築かれている。なおこの幹線水路が古い段階から存在した可能性については、前書でも「401 土坑の前身として同一位置に土坑（溝あるいは水路・堀）があったと想定すると、理解しやすい」と指摘されている。

12 世紀前半頃までにはその開削工事も終わり、寝屋川からの水害にもある程度対応可能な水路が完備する。この水路によって周辺の水捌けもよくなり、耕作可能な土地が広がった。また灌漑用水路としての役割も担い、水田・畠を潤した。こうして巢本遺跡に耕作地が広がっていく。4 層上面等下層で検出した鋤痕等の耕作痕や多くの足跡、また 2・5・8 区下層で検出した規則正しく並ぶ溝、4 区壁際で検出した耕作溝等がこの頃の耕作に伴う遺構である。このように 12 世紀前半頃には調査地全体が耕作地となっている。その時の居住域はまだ今回の調査区内にはなく、やや離れた調査区外にあったと考えている。しかしこの状況は長くはつづかず、寝屋川の氾濫によって耕作地は埋没する。それは 4 区検出の耕作溝が砂層に覆われていることから判明する。

水害後、7 区には直ちに溜池状の大型の土坑（1009 土坑）を設けるなど対応し、人々は復興に努める。この土坑のような 12 世紀代の遺構もいくつか見つかったはいるが、13 世紀以降の遺構が大半であることから、完全に復興するのはおそらく 13 世紀に入ってからのことであったと考えられる。この頃になると調査区内に居住域が移ってくる。4 区の一部から 7 区南半にかけてと、5・8 区北端部から 2 区にかけて掘立柱建物や井戸・土坑などが数多く築かれ、そこが人々の居住域となる。それに対して、4・7 区の北方や、5 区南半及び 3 区など、やや低くなった箇所は生産域として使われる。その居住域と生産域との境には、12 世紀代の畦畔を再利用した畦畔状の高まりや段差などが見られる。

このように微高地上に居住域、低地部に生産域があり、調査地の北から南にかけて、居住域と生産域が交互に存在するような景観となる。ただし 1 区から 03 - 1 調査区にかけては、13 世紀後半になってもまだ居住域としては利用されず、その代わりに深い大型の土坑が密集して築かれる。土坑の形状には

平面長方形、断面方形の箱型のものや、断面V字で調査区の端から端まで長くのびるもの、また二段掘りのものなど数種が認められる。その性格については、平面長方形を呈し、底が粘土やシルト層にまで達するものについては、粘土採掘坑のような土取り穴であったと考えられるが、20・23土坑のように長くつづくものについては、濠のような役割を果たしていたとも考えられる。なお前書では、全ての土坑を一括りにして「複数の土坑を掘ることにより湧水を集め、周辺の土地を乾燥させる目的の施設」であった可能性も示されている。土坑が掘削された時期が、すぐ西側の4区や7区では既に人々が集落を築いて生活している時期であること、また土坑が非常に狭い範囲に集中していること、などがその性格解明の糸口になると考えられるが、形状によって性格が異なるのか、それとも皆同じ性格の遺構であったのかなど特定が難しい。調査担当者としては、1区の東側地域と西側地域とを画するための施設であったと考えているが、現時点では結論を得るに至っていない。同様の調査例の増加により解明されることを期待したい。

その後14世紀に入ると、居住域内に新たに大溝（18・782溝（03-2調査検出）・400溝（06-1調査検出））が開削される。また開発当初に掘られた水路についても、拡幅工事が行なわれ、最大規模のものとなる。2区で検出した54・56溝は、この拡幅によるものと考えられる。拡幅した水路については、前記のとおり規模を縮小しながらも現代まで利用されるが、782溝のような居住域内の大溝については、後世に引き継がれることはなく、中世末の集落廃絶と同時に埋没する。大溝開削の理由については、区画整理等の意味合いが考えられるが、詳細については明らかでない。後述する寺院との何らかの関係があったのかもしれない。これらの工事によって集落規模は縮小へと向かったと考えられるが、基本的には引き続き同じ場所が居住域として使われ、15・16世紀へとつづく。生産域との境の高まりについてはその後も生き続け、現代の畦畔へ引き継がれる。なお上記の1区から03-1調査区については、ようやくこの段階で居住域となる。

400土坑 上記の1区土坑群は、幹線水路（06-1調査8・9区検出の1流路）と1091堤（03-1調査では45堤）との間に集中しており、その状況は北側の03-1調査区でも同じであるが、03-2調査では1区西側の4区でもはみ出すように同種の遺構を一部検出している。それが06-1調査によって方形にめぐることが確認された400土坑である。その構造は底部を二段掘りするところなど、まさに1区検出の23土坑と酷似しており、1区の土坑と同時期に掘削されたものであることがうかがえる。ただしその性格については、幹線水路よりも西側に1基だけはみ出している点、直角に屈曲して方形にめぐると点など特異な点があり、1区のものとは異なる性格の遺構と推測できる。

このような方形にめぐると土坑、あるいは溝は、中世の集落跡や館・屋敷地跡、また墓地などで散見されるものであり、当センターが調査した長原遺跡でもよく似た遺構が確認されている。²⁾SD 210と呼ばれる溝がそれであり、二段掘りされ、その下段部には数メートル間隔に畦畔状の掘り残しがある点など、400土坑と非常によく似た構造を示している。出土遺物の時期もほぼ同じであり、400土坑の性格を理解するうえで参考になる。ただし長原遺跡検出の溝は南北長109mと、400土坑とはその規模があまりにも違いすぎる。このため単純に同じ性格の遺構とすることはできない。長原遺跡では用水路としても利用された屋敷地を囲む溝と理解されているが、400土坑は屋敷地を囲むほどの規模はない。巢本遺跡の土坑はせいぜい墓域を画する程度のものであるが、土坑内からは石仏や五輪塔など墓を連想させる遺物は全く出土しておらず、その可能性も低い。このようにこの400土坑も1区の土坑と同じく性格を特定することが難しい。

400 土坑のすぐ西側には、大般若経の札や蘇民将来札が廃棄された大型の井戸や掘立柱建物が接していることから、現時点ではそれらに付随する何か特別な施設を囲う濠であったと考えておきたい。土坑の内側から顕著な遺構が検出されていない点については、土坑よりも内側が本来は若干高く盛り上がっていたために、その上に築かれていた遺構は後世の開発によって削平されたと理解しておきたい。

なお、長原遺跡の報告でも指摘されているとおり、土坑内に滞水した水は当然水田や畠の用水としても利用されていたと考えられる。

寺院の存在 7区で検出した782溝からは特に多くの瓦が出土している。軒瓦はもちろんのこと、大棟の上の雁振瓦も多数出土しており、周辺に瓦葺きの大きな建物が建っていたことがうかがえる。その時期は他の出土遺物から14世紀から16世紀頃と考えられる。

この時期の一般庶民の建物が瓦葺きであったとは考え難く、その建物は寺院であった可能性が高い。ただし今回の調査地内では、瓦葺きに耐えられるような礎石建ちの建物は発見されておらず、その存在を確認することはできていない。おそらく今回の調査地の近隣に、これまで知られていなかった中世寺院が存在していたと考えられる。4区で出土した大般若経の札も、この寺院で書されたものではないだろうか。その位置については、782溝がつづく調査地西側の可能性が高いと考えている。

そこで注目したいのが、遺跡の西約400mの地点に位置する宝蔵寺および産土神社である。第2章でも紹介したとおり、宝蔵寺には平安時代後期の阿弥陀如来立像や鎌倉時代の層塔など、巢本遺跡の時期と重なる時期の文化財が残されている。寺院址に神社等が建てられることもよくあることであり、巢本遺跡の西側で中世寺院が存在した場所を推定した場合、現時点ではこの宝蔵寺および産土神社近辺がもっとも有力と考えている。

僧の文字 また5区の遺物包含層からは、底部外面に「僧」と墨書された中世寺院の存在を示す山茶碗が見つかっている。東海地方で生産された12世紀代のものであり、この時期には既に寺院として存在していた可能性がうかがえる。

輸入磁器 当遺跡からは中国から輸入された青磁や白磁などが数多く出土している。碗や皿だけでなく壺や水注などたいへん貴重なものも含まれていた。一般的な村落ではなかなか見ることのできない貴重な輸入品であり、これによっても有力者の存在、あるいは上記のとおり寺院の存在等が推測される。

以上のように、今回の調査ではこれまで全く知られていなかった中世寺院の存在を示す遺物が数多く発見されている。

口禿げの白磁 口縁釉剥ぎのいわゆる口禿げの白磁皿が数多く出土している。この口縁釉剥ぎは、リング状の匣を用いて伏せ焼きによって生産されたことを示しており、生産地の特定には有効な手掛かりとなる。中国のどのあたりで焼かれたものなのかは特定できていないが、平成17年12月に訪れた中国福建省浦城の大口窯址でも同種の白磁や青白磁が見られたことを特記しておく。大口窯は本格的な調査がまだ行なわれていないため、出土遺物の比較検討ができないが、可能性の一つとして挙げておきたい。

娯楽 毬きゅうと呼ばれる木製のボールや賽子などが出土している。毬ぎょうちゆうと呼ばれる遊戯に用いられたもので、毬の可能性があるものも含めると7点が出土している。賽子は双六などに使われたのであろうか。毬杖や双六などが、当時の人々の間で盛んに行なわれていたことを示すものであり、庶民の娯楽の一端をうかがうことができる貴重な資料である。

流通 巢本遺跡から出土する瓦器碗については、前書では「楠葉産が主体を占める」と報告されているが、03-2調査出土の瓦器碗を見る限り、和泉型のものも僅かに含まれるが、大和型のものほとんどで

ある。北河内という地域に位置しながら、同じ北河内の楠葉産のものはほとんど含まれていない。以前から言われていることではあるが、この門真市域は今回の調査によっても、大和型瓦器椀の流通圏であったことが確かめられた。なお、瓦器椀に限らず、瓦質土器や土師器羽釜等も大和から持ち込まれたものが多く含まれている。

瓦 出土した平瓦の凸面には、縄タタキや格子タタキなどが残るものが多い。また凹面には桶巻き作りのような方法で製作されたことを示す枰板の痕跡が残るものもある。古い時代の瓦が使われていたとも考えられるが、この時期の瓦の作り方としては非常に稀な例であり注目される。

出土土器各種 古代末から中世にかけての土師器皿・羽釜・甕、瓦器椀・羽釜・足釜・甕、瓦質播鉢・火鉢、須恵質播鉢・甕、陶器甕・播鉢、青磁・白磁の碗・皿などが多数出土した。03 - 2 調査出土のものを中心に、各時代の様相について簡単に図 188 に示した。

瓦器椀は黒色土器と並存する 11 世紀末から、生産が終焉をむかえる 14 世紀中葉までの各時期のものが出土している。その地域性は上述のとおりである。土師器皿については前書でも触れられているが、京都出土のものに比べ若干後出する傾向があるように思われる。おそらく京都の土器を模倣して、地元で製作されたためと考えられる。羽釜や鍋などの煮炊具は、11 世紀末から 12 世紀前半の時期には土師器製品が主流である。土師器羽釜は口縁端部を内に折り曲げた大和型が多い。瓦質羽釜・甕は 13 世紀中葉頃からみられる。羽釜は小型と大型のものがあり、大型のものは強く内湾する頸部をもつ河内型である。甕は内面に当て具の痕が残るなど、須恵器甕を模した痕跡が強く残る。瓦質火鉢類と播鉢は 14 世紀から確認することができ、16 世紀末頃まで存続する。火鉢類は輪花形で菊花紋を押捺したものや、風炉・無紋の大型の深鉢など多種におよぶ。播鉢は 15 世紀以降に口縁が外反するものが多く認められる。須恵器には捏鉢と甕がある。捏鉢は 11 世紀末から 14 世紀前半までほぼ全時期を通じてみられるが、甕は非常に少ない。器種による産地の分化の一端をうかがうことが出来る。輸入磁器は遺構や遺物包含層などから、11 世紀後半の白磁から 15・16 世紀代の青磁までがほぼ連続して出土している。数量は今回図化したもので白磁 59 点、青磁 44 点、青白磁 3 点を数える。前書掲載品を含めれば 200 点以上にのぼる。出土地点は 7 区に集中しており、今回出土した総数の約 30% を占める。その他は 5 区包含層からの出土がやや多いものの各地区に散在している。このことから上述した寺院の位置が推定される。

以上、各時代の土地利用の変遷について簡単にまとめ、11 世紀末以降の遺構変遷については図 187 にも示した。本来ならば出土遺物の時期ごとに遺構を分け、その変遷を論じなければならないが、担当者の技量のなさ、また時間的な制約により、そこまでの作業が十分に行なえず非常に大まかなものとなってしまった。また遺物についても、周辺地域との時間的なズレや、搬入割合等の詳細な検討が必要であったが、本書では簡単な資料の報告のみにとどまってしまった。今後、この遺跡の広がりや性格、遺跡のもつ意義・重要性などについて踏み込んだ見解が示されること、また周辺地域の遺物編年と比較・検討した北河内地域の中世土器編年の確立を期待したい。本書および前書が大阪北河内地域の歴史解明に少しでも役立つならば幸いである。

註

- 1) 財団法人 大阪府文化財センター 2008.2 『巢本遺跡 I』(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第 167 集
- 2) 大阪府教育委員会・財団法人 大阪府文化財センター 昭和 53.5 『長原』

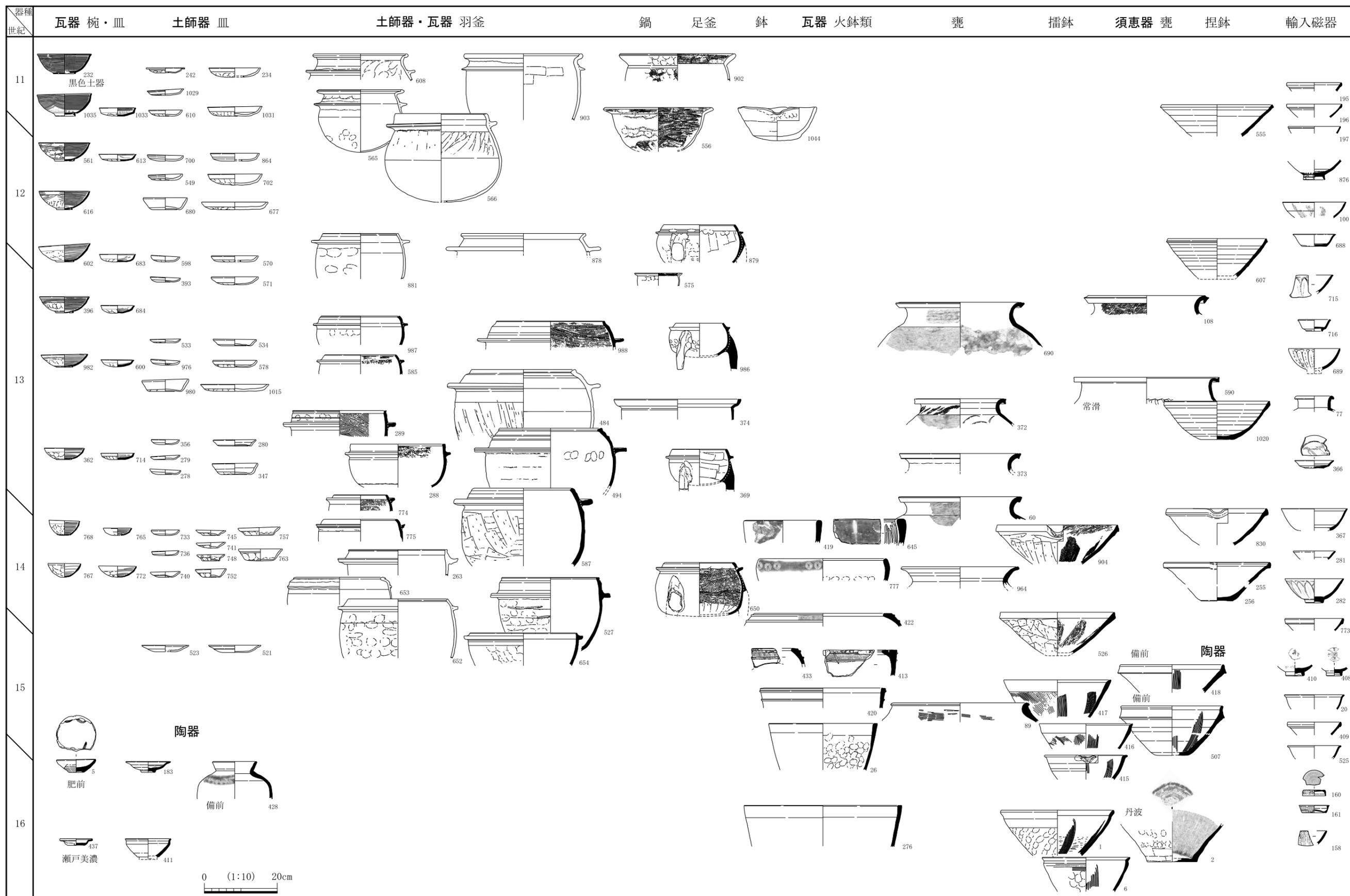


図 188 巢本遺跡出土土器変遷図

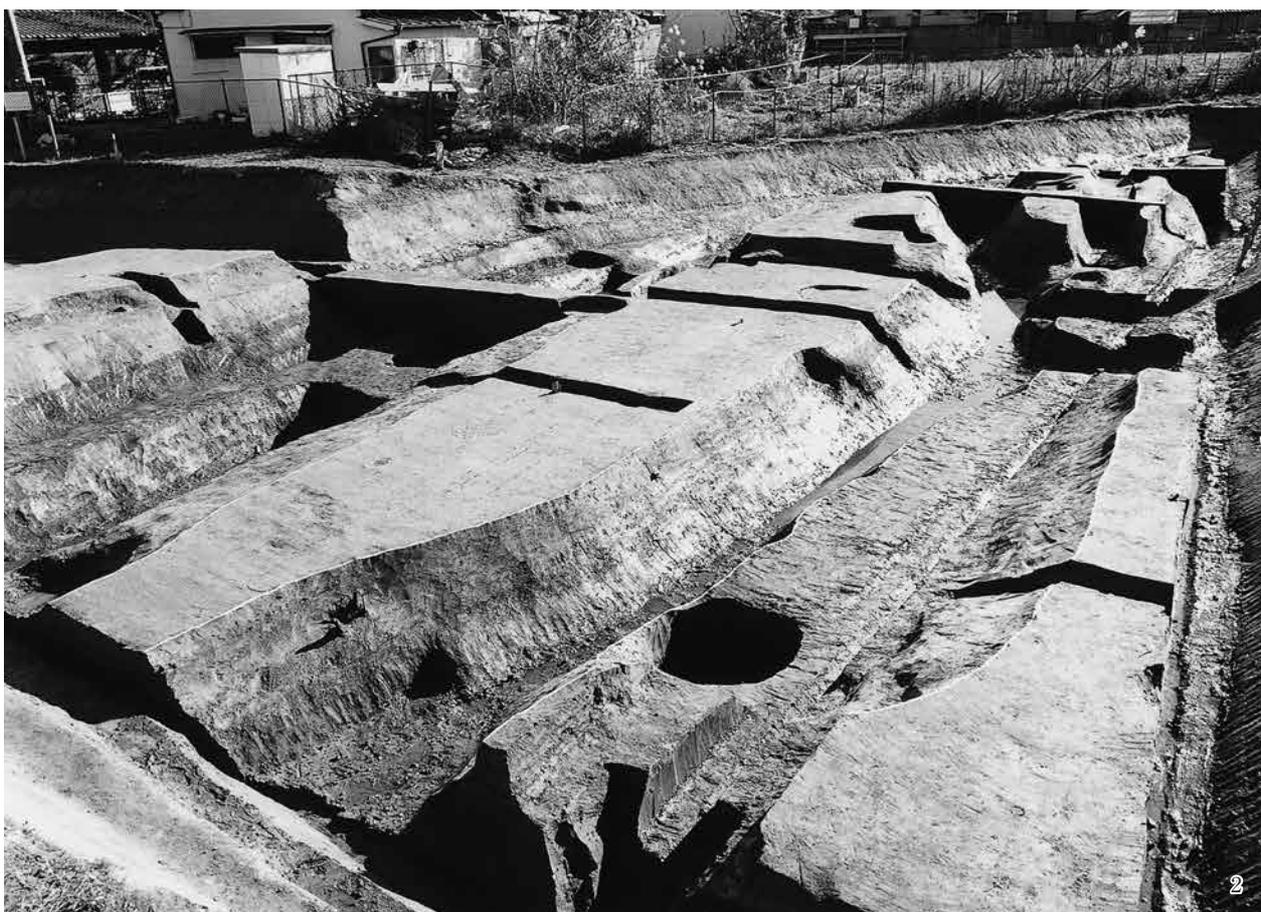
写真図版



調査地上空から寝屋川・交野方面を望む（撮影：株式会社アコード）



1. 1区調査区全景（南西から）



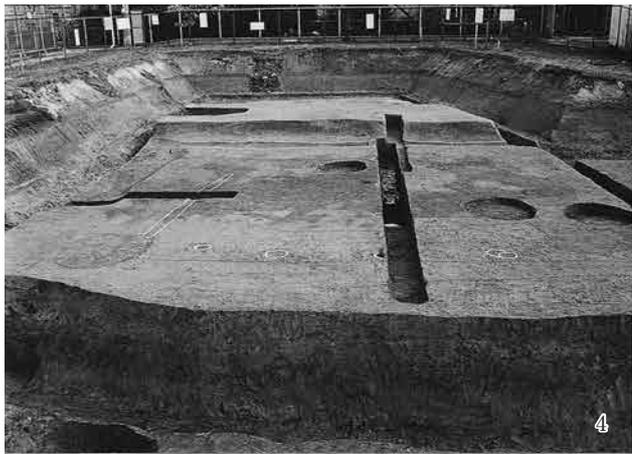
2. 20・24土坑（北から）



1. 23・36土坑（北東から）



2. 1091堤・27溝
3. 18溝



4. 2 b i 層上面検出遺構
5. 4 a i 層上面検出足跡



1. 2区調査区全景（北西から）



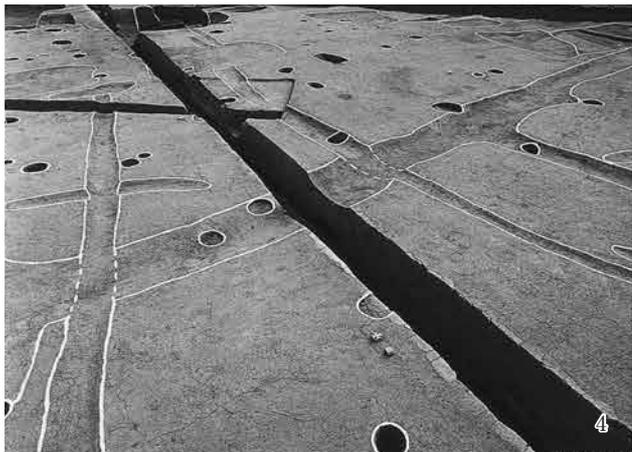
2. 3層上面検出遺構（北から）



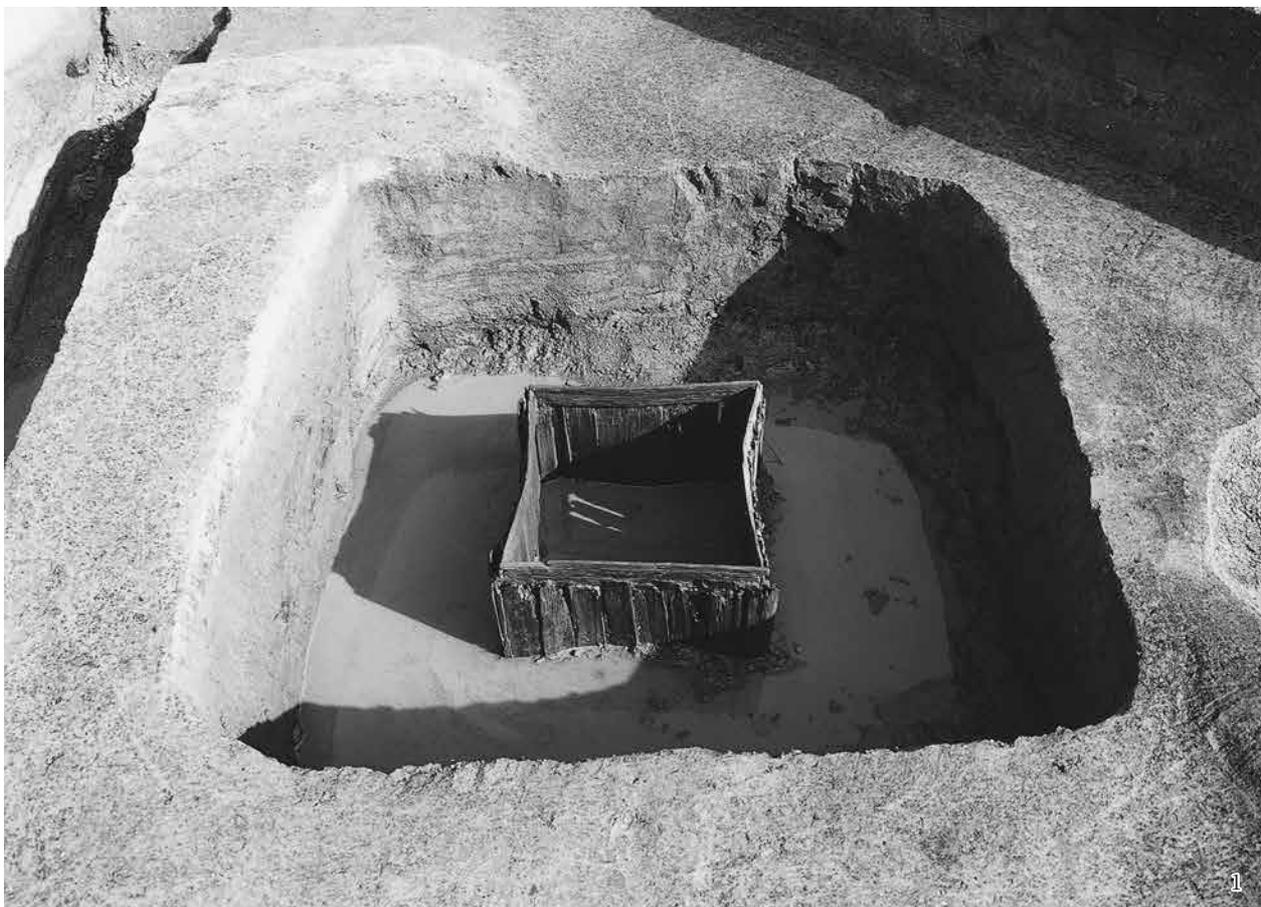
1. 44・55溝 (南から)



2. 56溝
3. 54溝



4. 3層上面検出遺構 (南半部)
5. 52土坑



1. 41井戸 (西から)



2. 41井戸の井戸枠構造



3. 165土坑



4. 100井戸



1. 51井戸（西から）



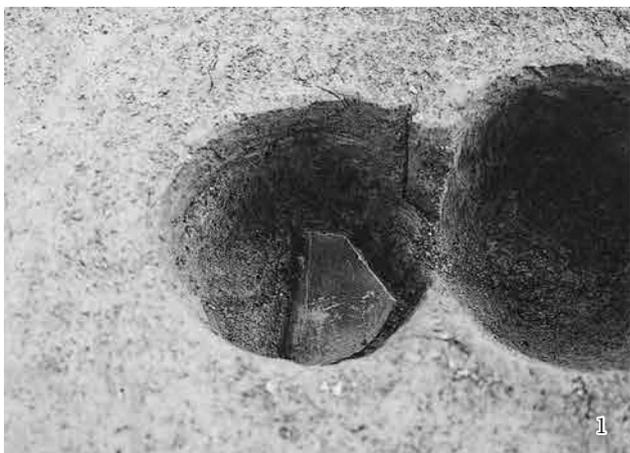
2. 51井戸の井戸杵構造



3. 164井戸



4. 164井戸残存の籠



1



3



2



4

1. 73ピット
2. 87ピット

3. 106ピット
4. 218ピット



5



7



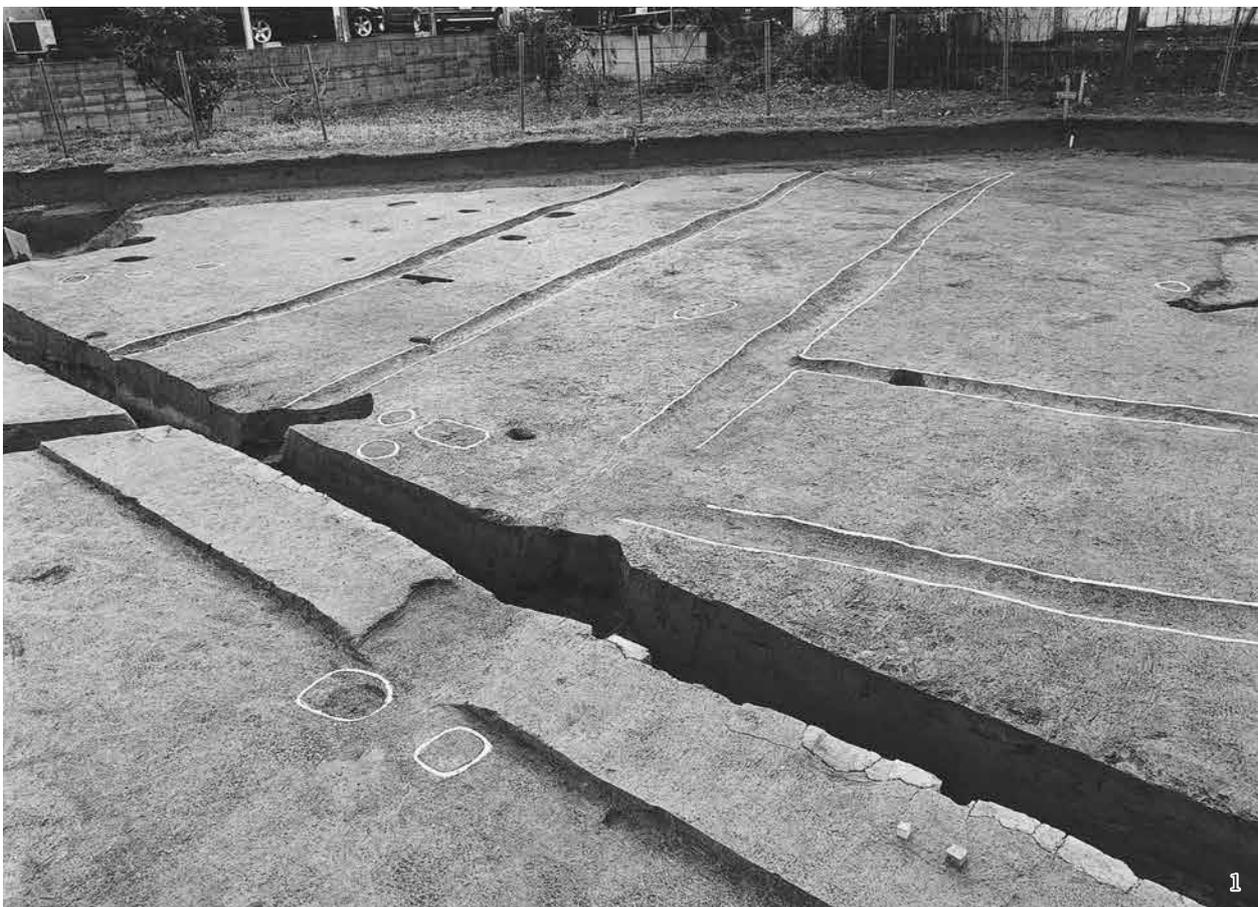
6



8

5. 221ピット
6. 251ピット

7. 227ピット
8. 278ピット



1. 4層上面検出溝（北西から）



2. 6層上面検出足跡



3. 6層上面検出鋤跡



4. 2区地層断面



1. 3区調査区全景（東から）

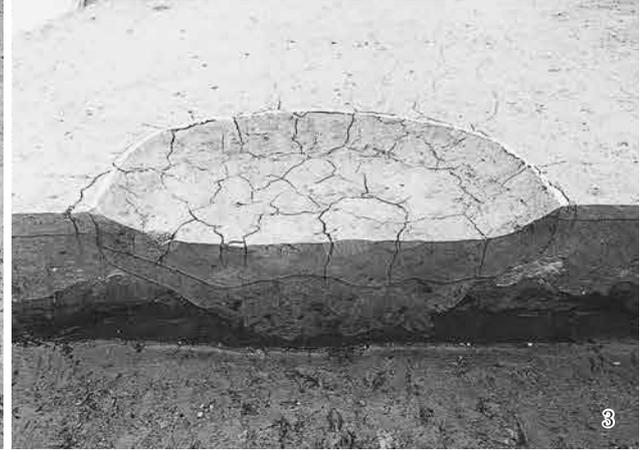


2. 西端部検出土坑群
3. 337溝



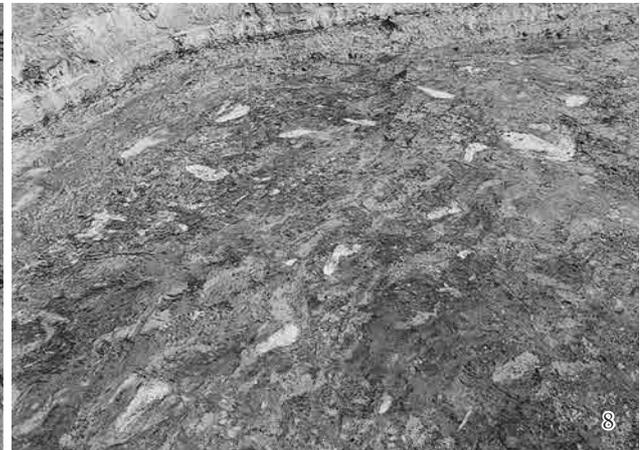
4. 南高まり部地層断面
5. 340土坑

03-2 調査



1. 331井戸
2. 334土坑

3. 335土坑
4. 336土坑



5. 338ピット
6. 5層下面出土曲物

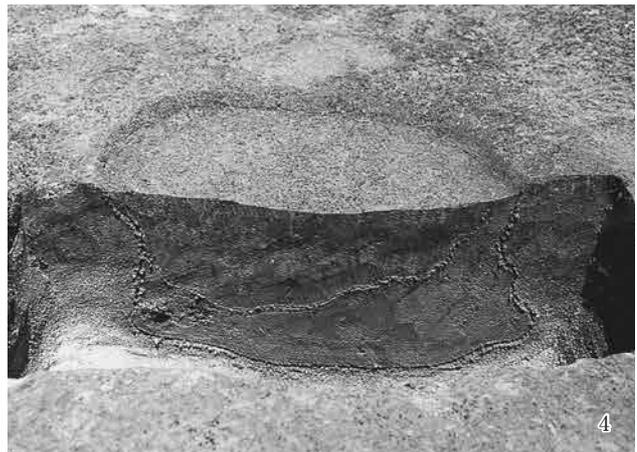
7. 南高まり2層下面検出鋤跡
8. 7層下面検出足跡



1. 4区調査区全景（南西から）



2. 南端部検出遺構
3. 376溝



4. 359土坑
5. 360土坑



1. 4区中央部検出遺構（西から）



2. 400土坑全景（南から）



1. 400土坑



2



3

2. 404井戸
3. 407井戸土器出土状況



4

4. 403土坑・402・404・406・407井戸（南から）



1. 413井戸 (南から)



2



4



3



5

2. 413井戸下部
3. 409土坑

4. 411土坑
5. 459土坑



1. 368ピット
2. 373ピット

3. 427ピット
4. 430ピット

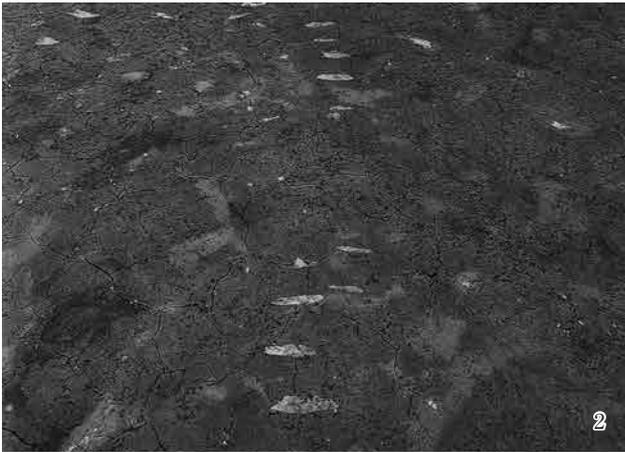


5. 436ピット
6. 437ピット

7. 443ピット
8. 445ピット



1. 4 a 層上面検出耕作溝（西から）



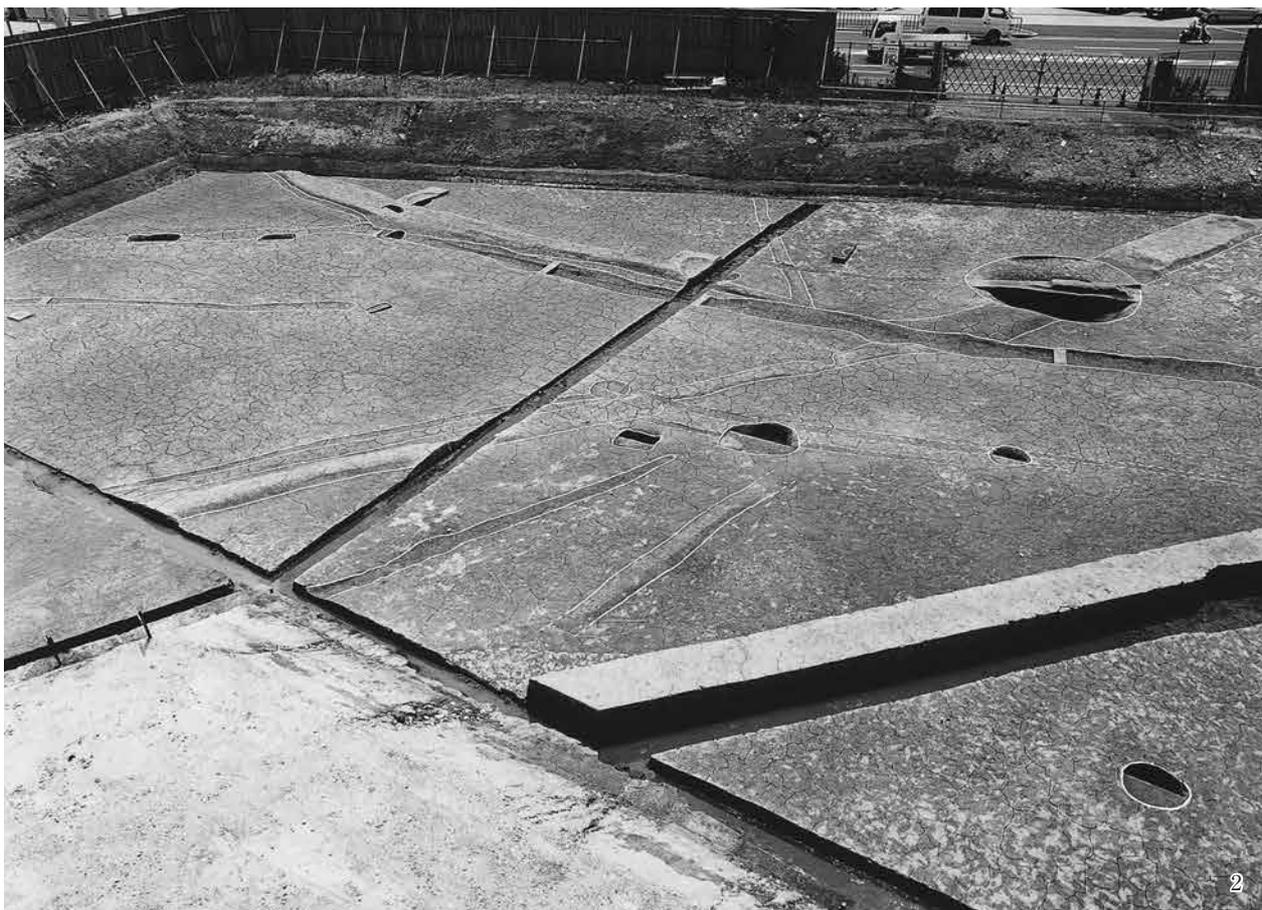
2. 4 a 層上面検出鋤跡
3. 北端部検出耕作溝



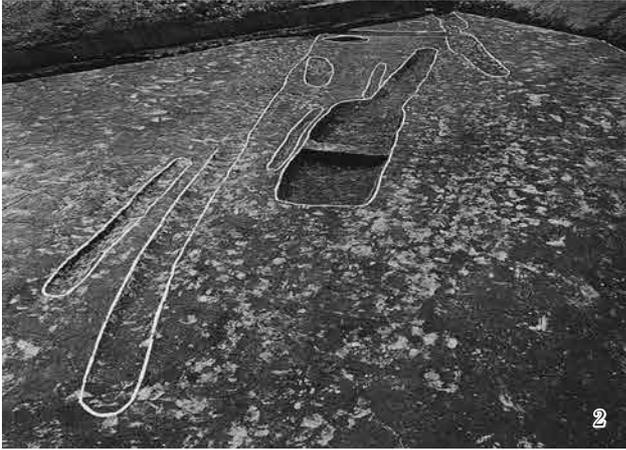
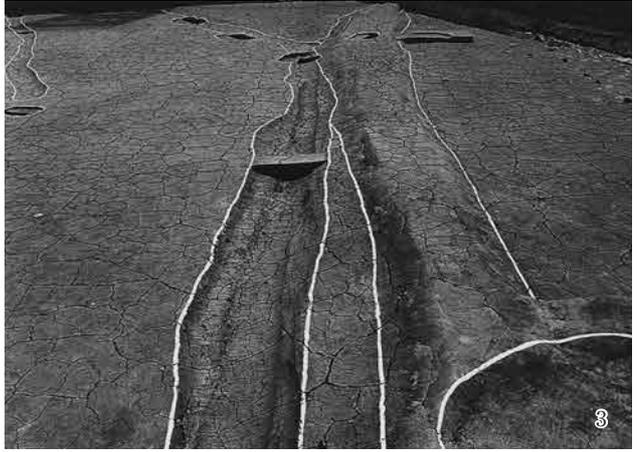
4. 中央部下層調査トレンチ
5. 南端部下層調査トレンチ



1. 5区南半部全景（東から）



2. 5区南半部全景（北西から）



1. 南半部 2 a 層上面検出耕作溝
2. 470溝・471・476土坑

3. 468溝・658畦畔
4. 468溝



5. 659溝・489畦畔
6. 469井戸

7. 471土坑
8. 486土坑



1



3



2



4

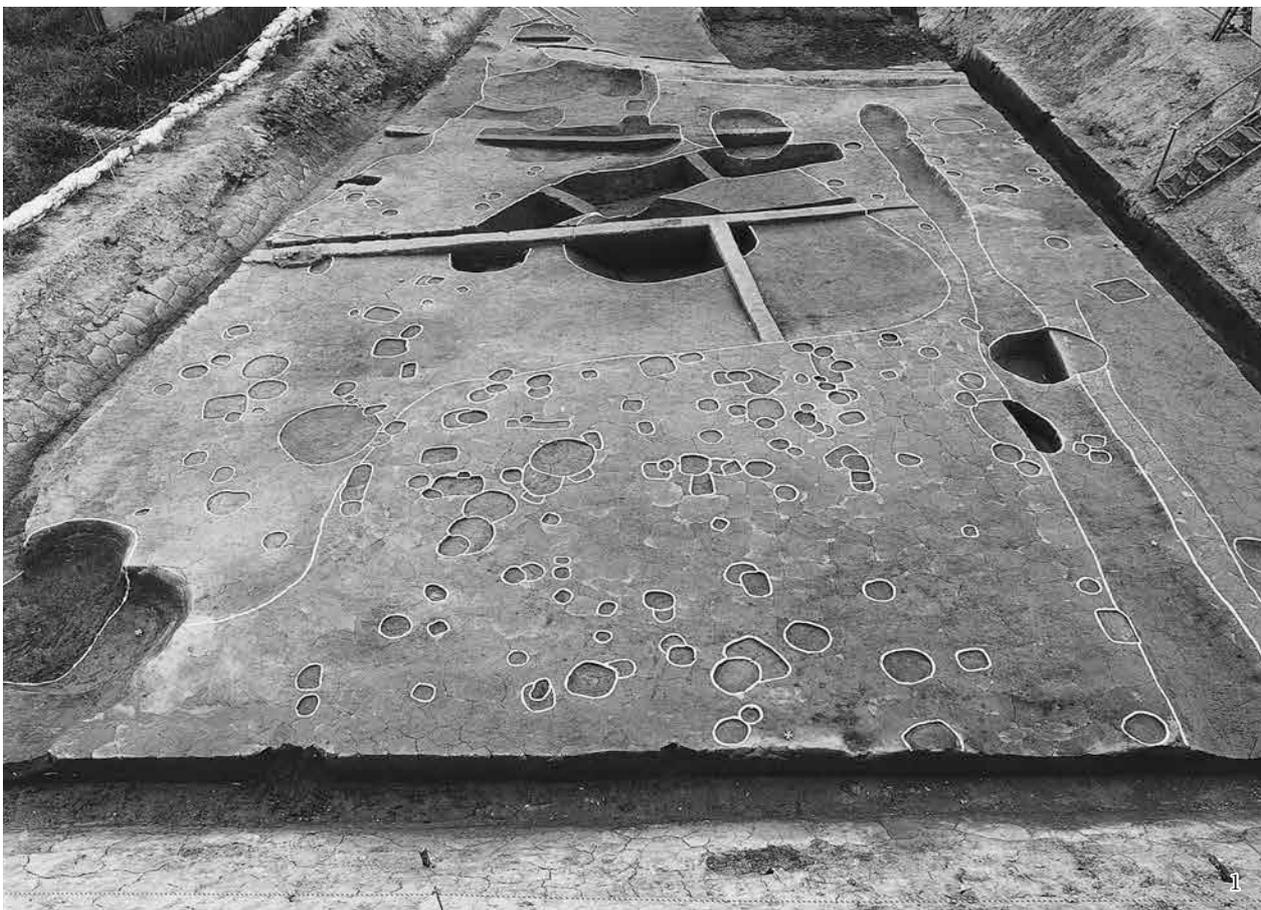
1. 465土坑
2. 474土坑

3. 477土坑
4. 480土坑



5

5. 5区北半部全景 (南西から)



1. 5区北端部検出遺構 (北東から)



2. 662畦畔
3. 634土坑

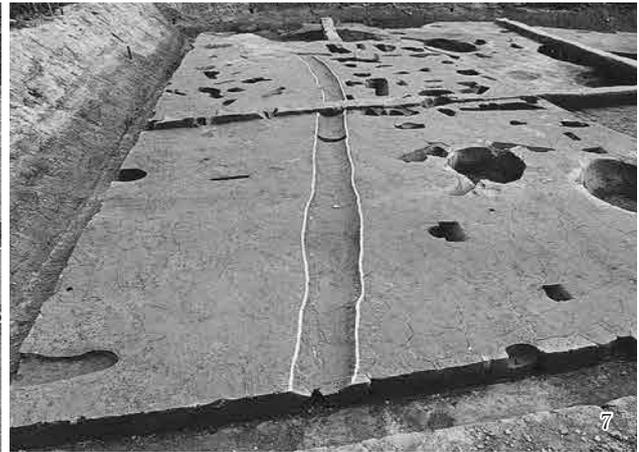


4. 703土坑
5. 715土坑



1. 560ピット
2. 574ピット

3. 631ピット
4. 647ピット



5. 499・633土坑・638落ち込み・640溝
6. 701溝

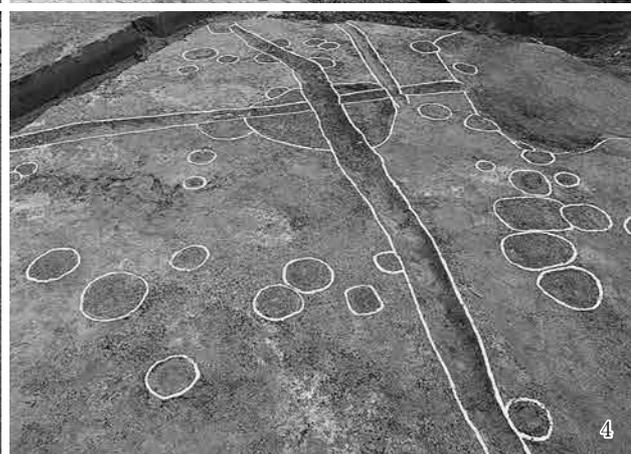
7. 714溝
8. 716・717・718溝



1. 7区北半部全景（北東から）

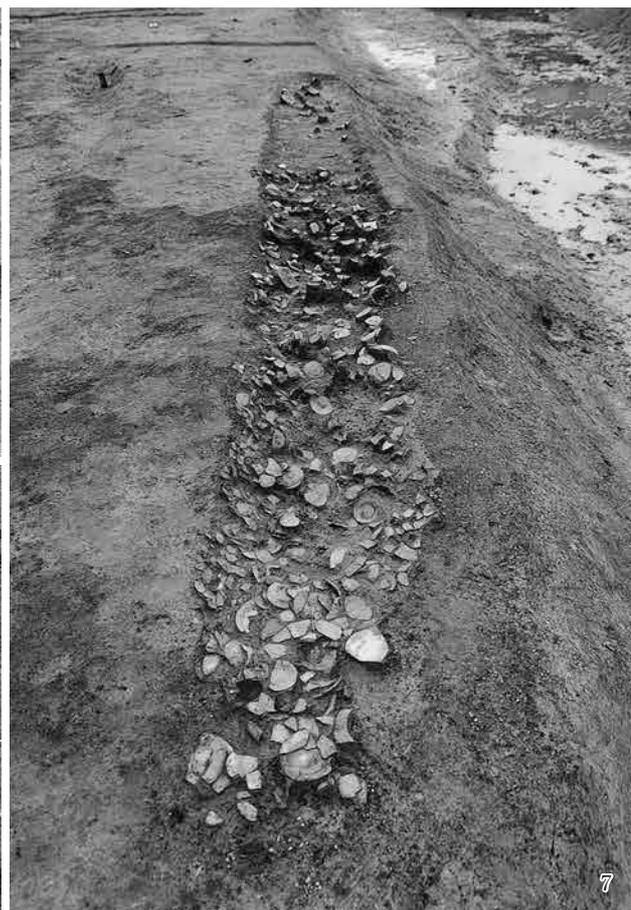


2. 7区中央部検出遺構（西から）



1. 北端部2層上面検出耕作溝
2. 782溝 (調査区中央部)

3. 782溝・掘立柱建物6・7
4. 掘立柱建物3周辺検出遺構



5. 777・785・786土坑
6. 945土坑

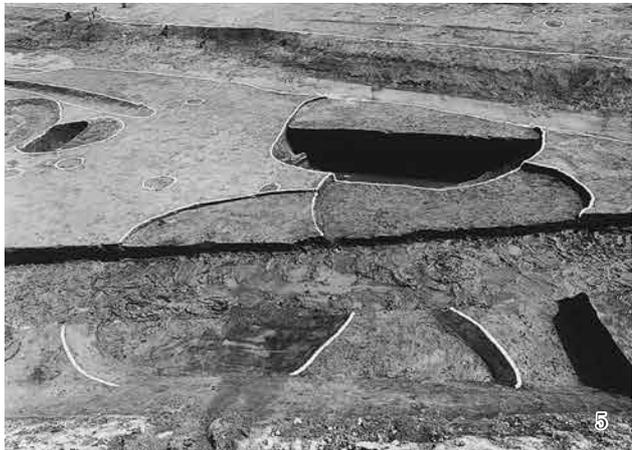
7. 943溝



1. 787井戸 (南西から)



2. 920井戸
3. 918・923土坑



4. 924土坑
5. 917・924・933・935・944土坑



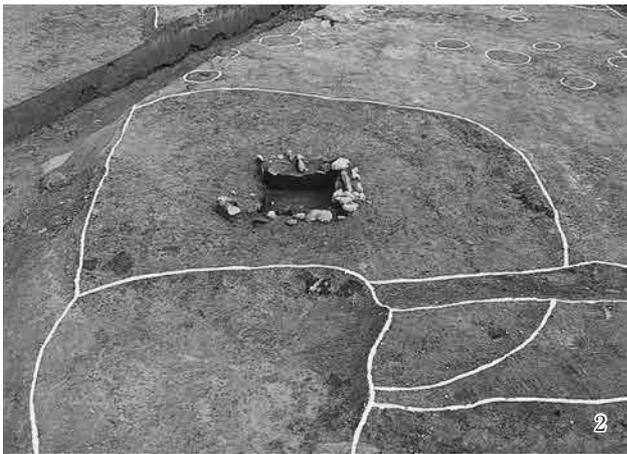
1. 7区中央部検出遺構（北西から）



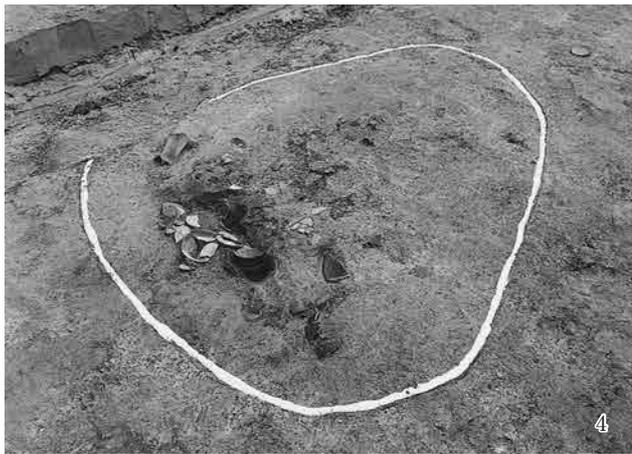
2. 7区南半部検出遺構（北から）



1. 789井戸（南から）



2. 789井戸検出状況
3. 919溝



4. 854土坑検出状況
5. 854土坑完掘状況



1. 938・940・1009土坑（西から）



2. 掘立柱建物 4・5
3. 938土坑内杭列



4. 4層上面検出鋤跡
5. 4層上面検出土坑群



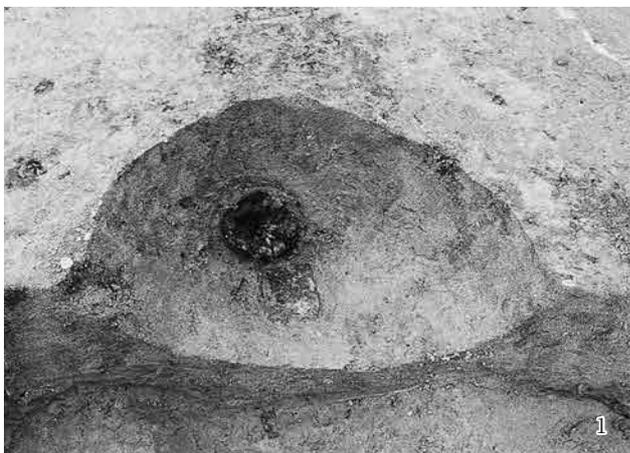
1. 786土坑
2. 788土坑

3. 790土坑
4. 842土坑



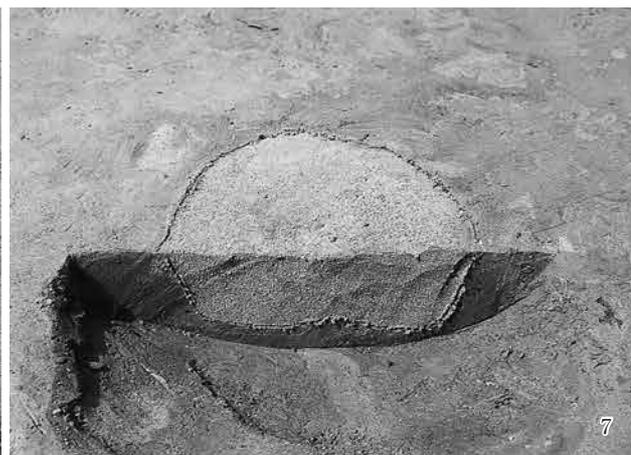
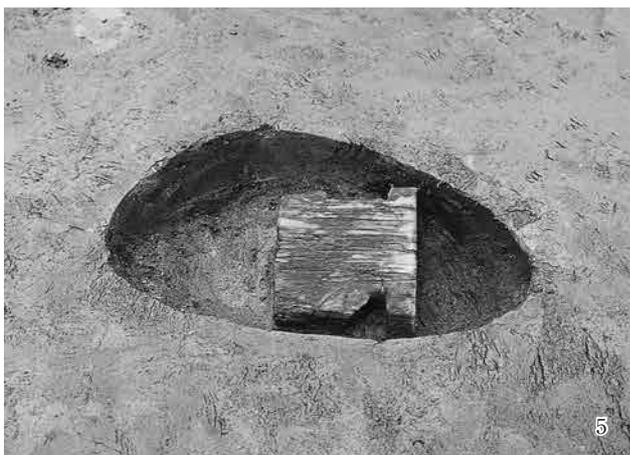
5. 794ピット
6. 799ピット

7. 828ピット
8. 845ピット



1. 809ピット
2. 810ピット

3. 1026ピット
4. 1027ピット

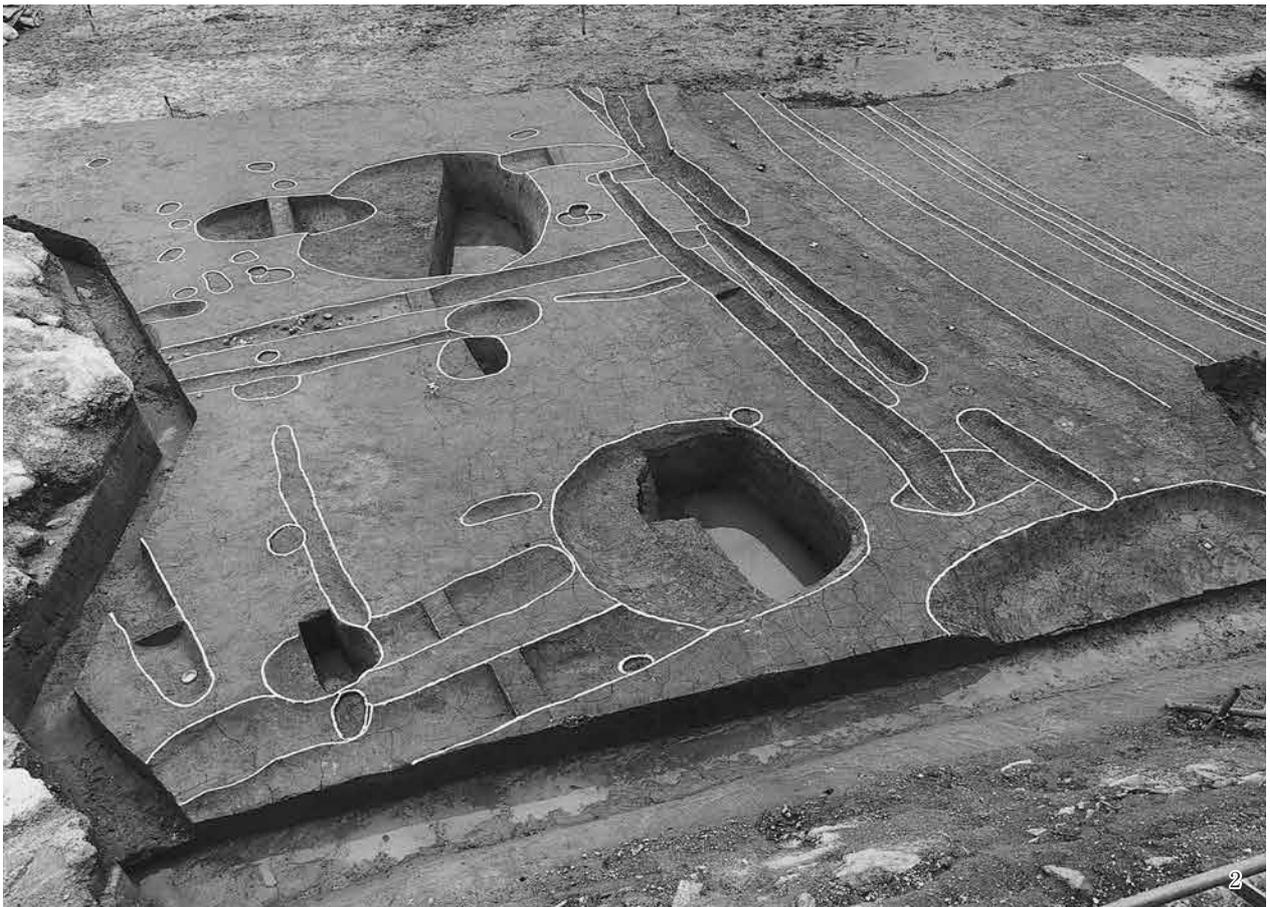


5. 1055ピット
6. 1060ピット

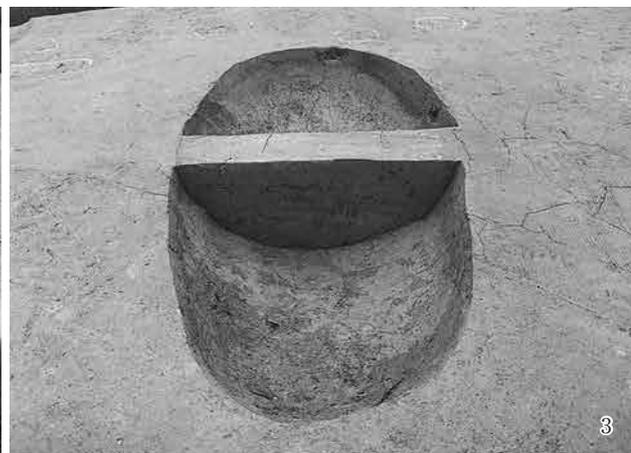
7. 1066ピット
8. 1068ピット



1. 8区調査区全景（北東から）



2. 8区北半部検出遺構（北西から）



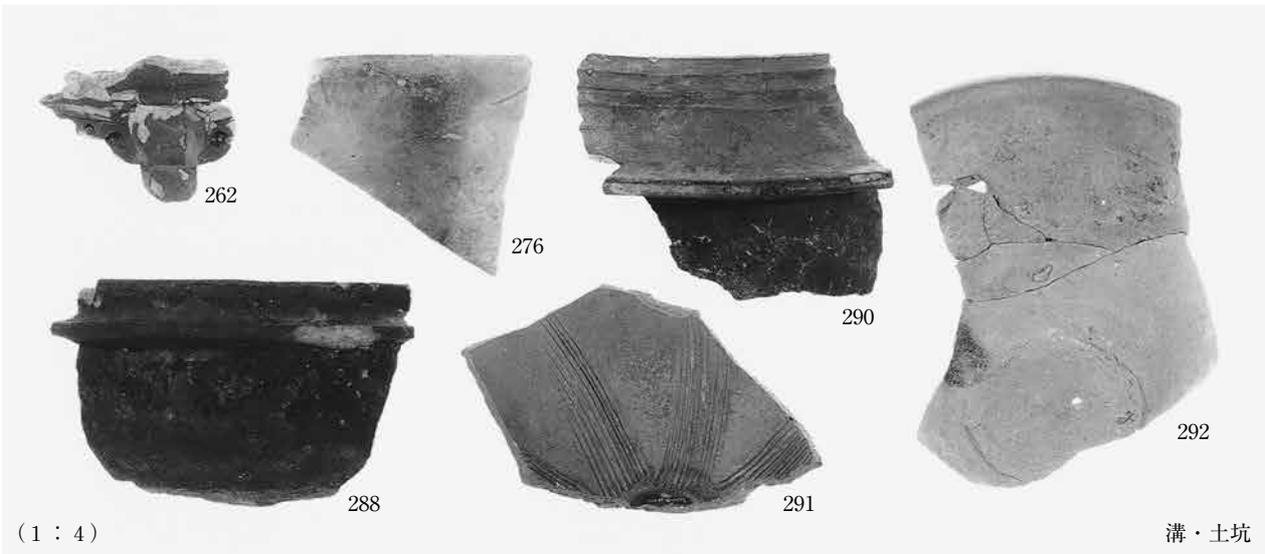
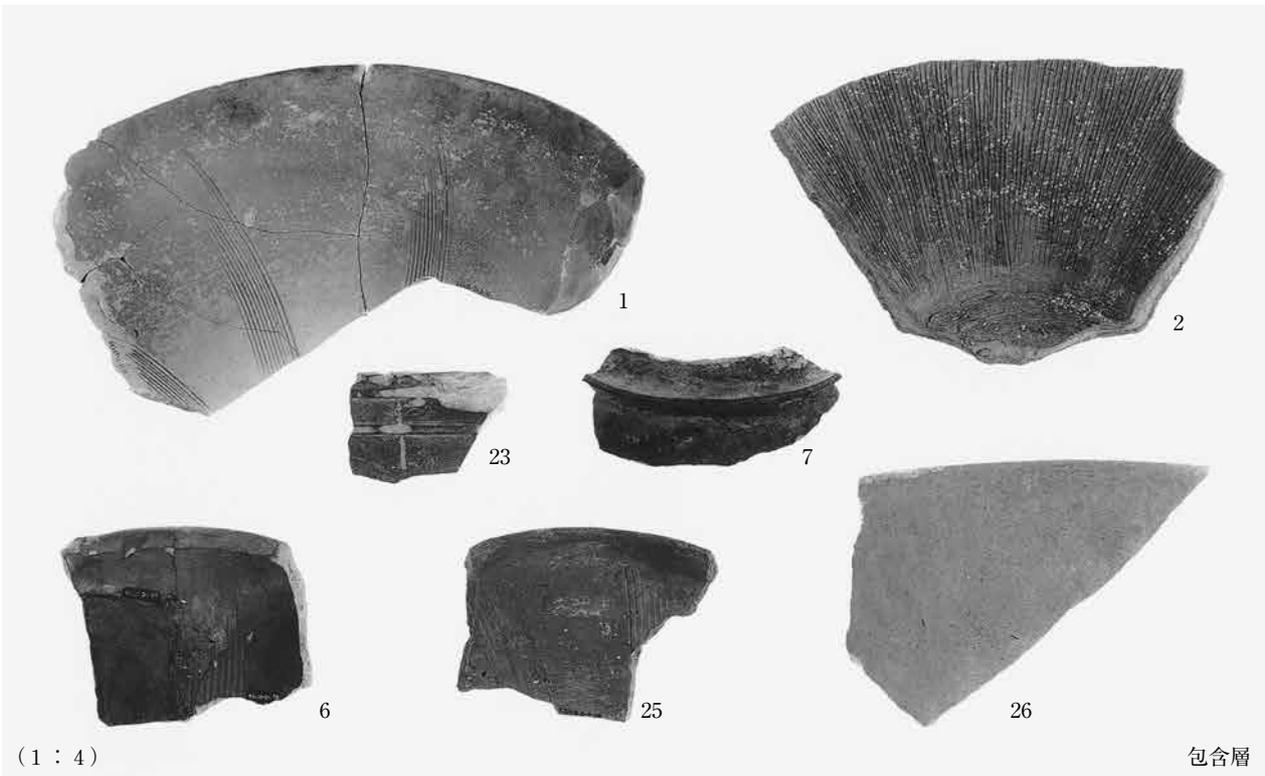
1. 883溝
2. 902・903溝

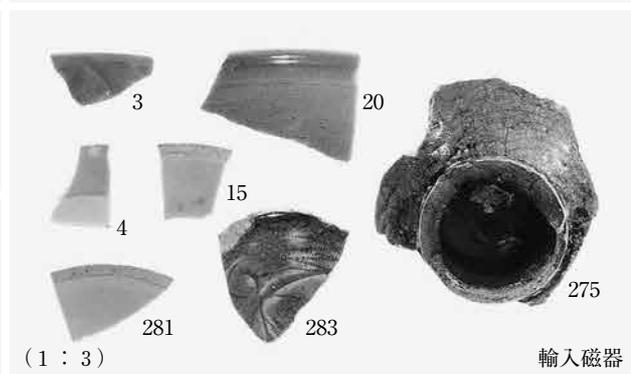
3. 880土坑
4. 890土坑

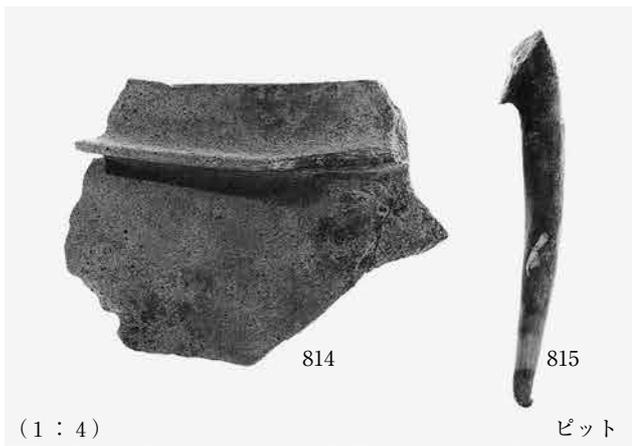
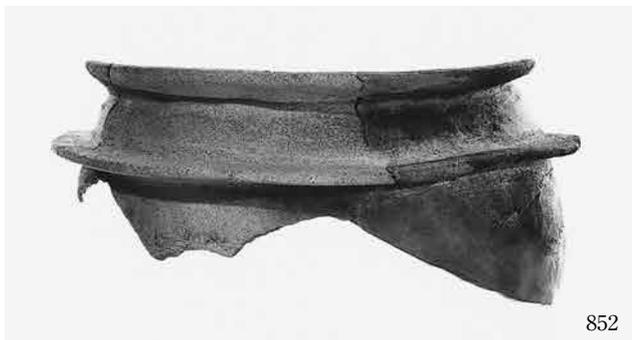


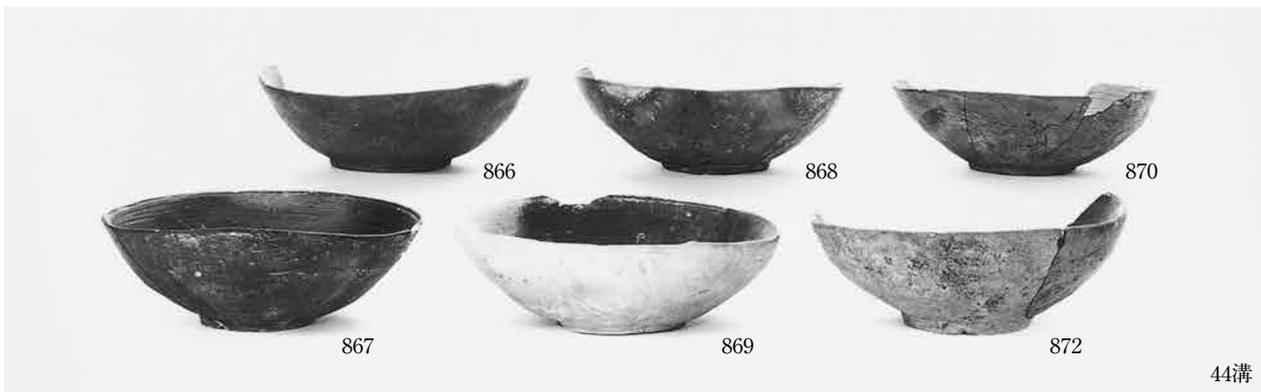
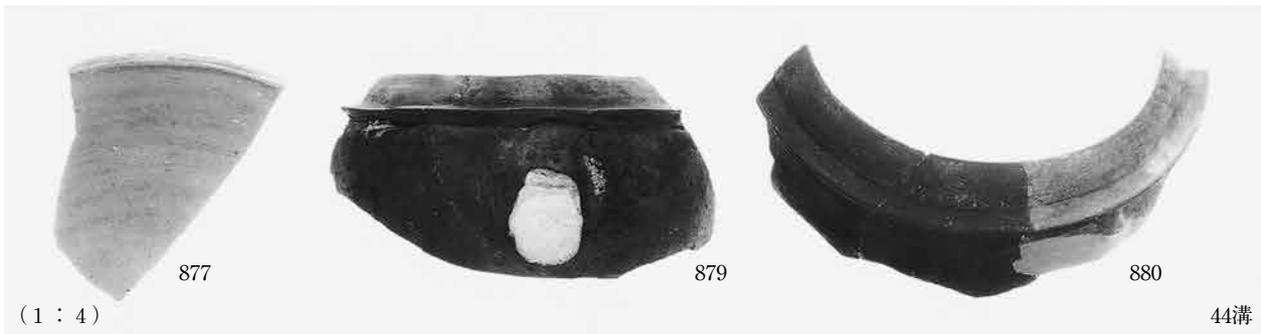
5. 887土坑
6. 898土坑

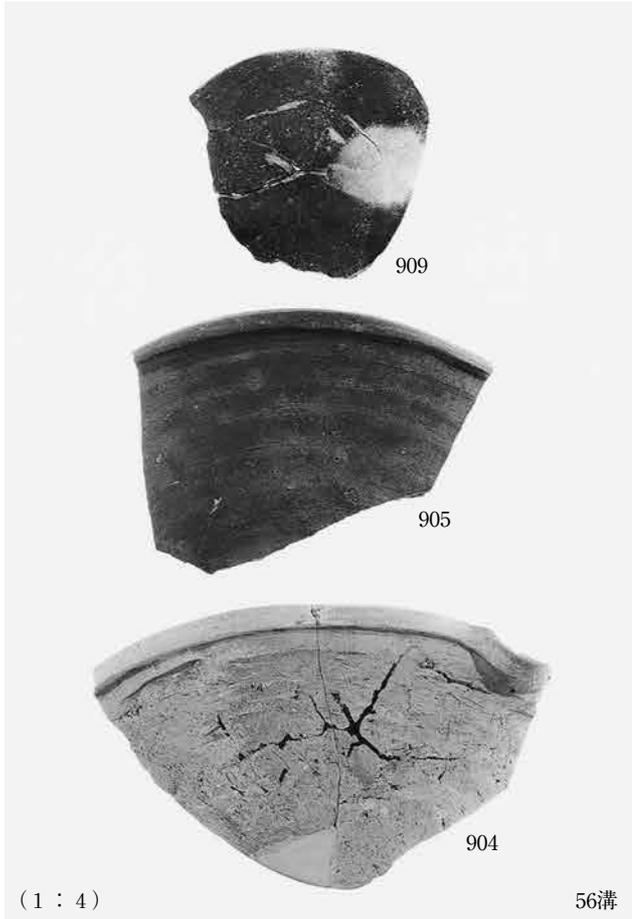
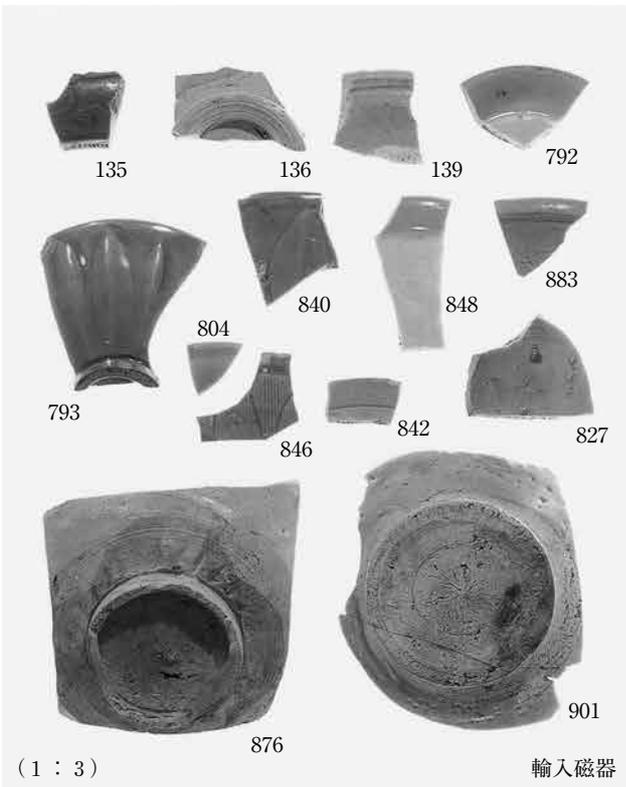
7. 北半部3層上面検出溝
8. 5層下面出土土下駄

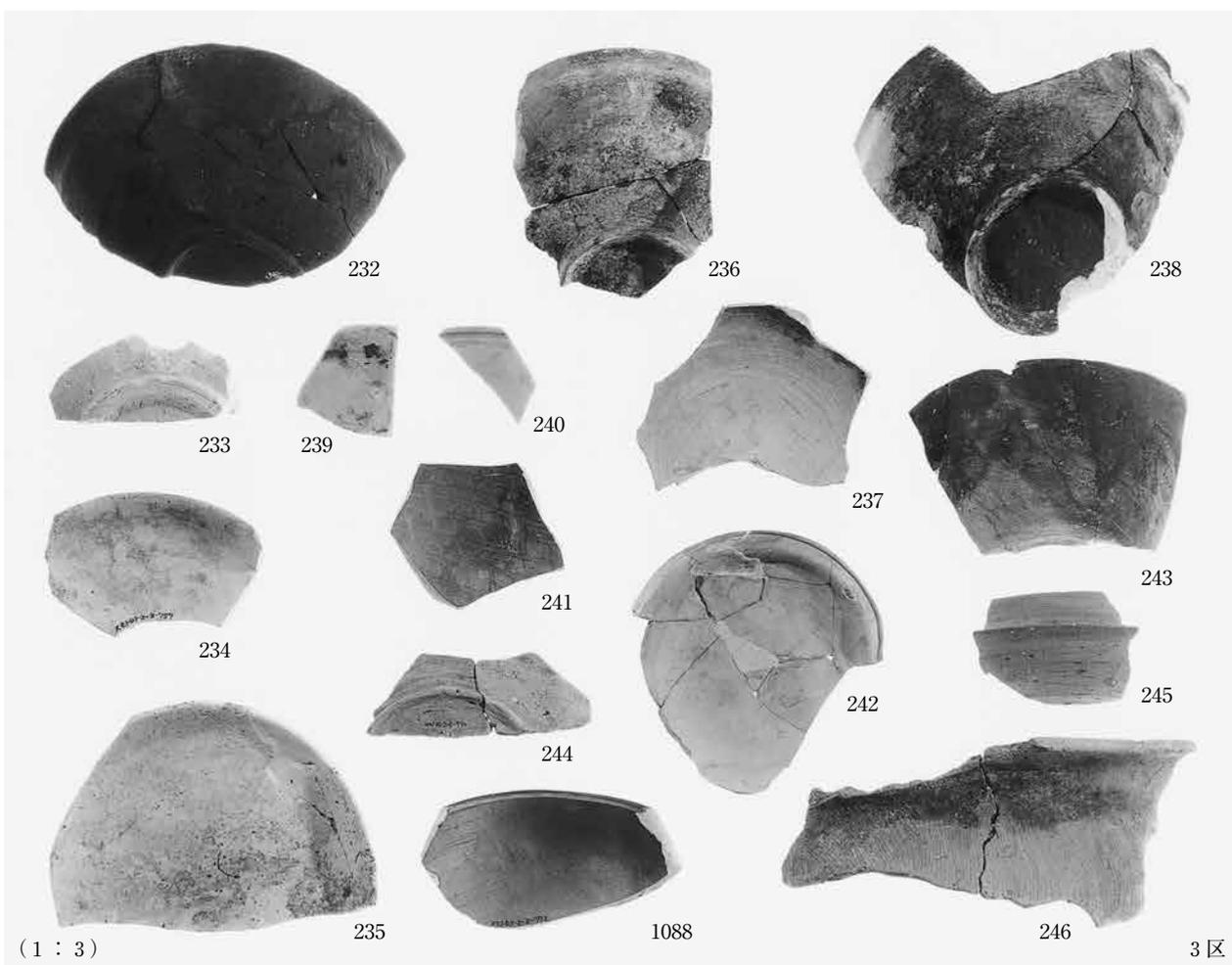
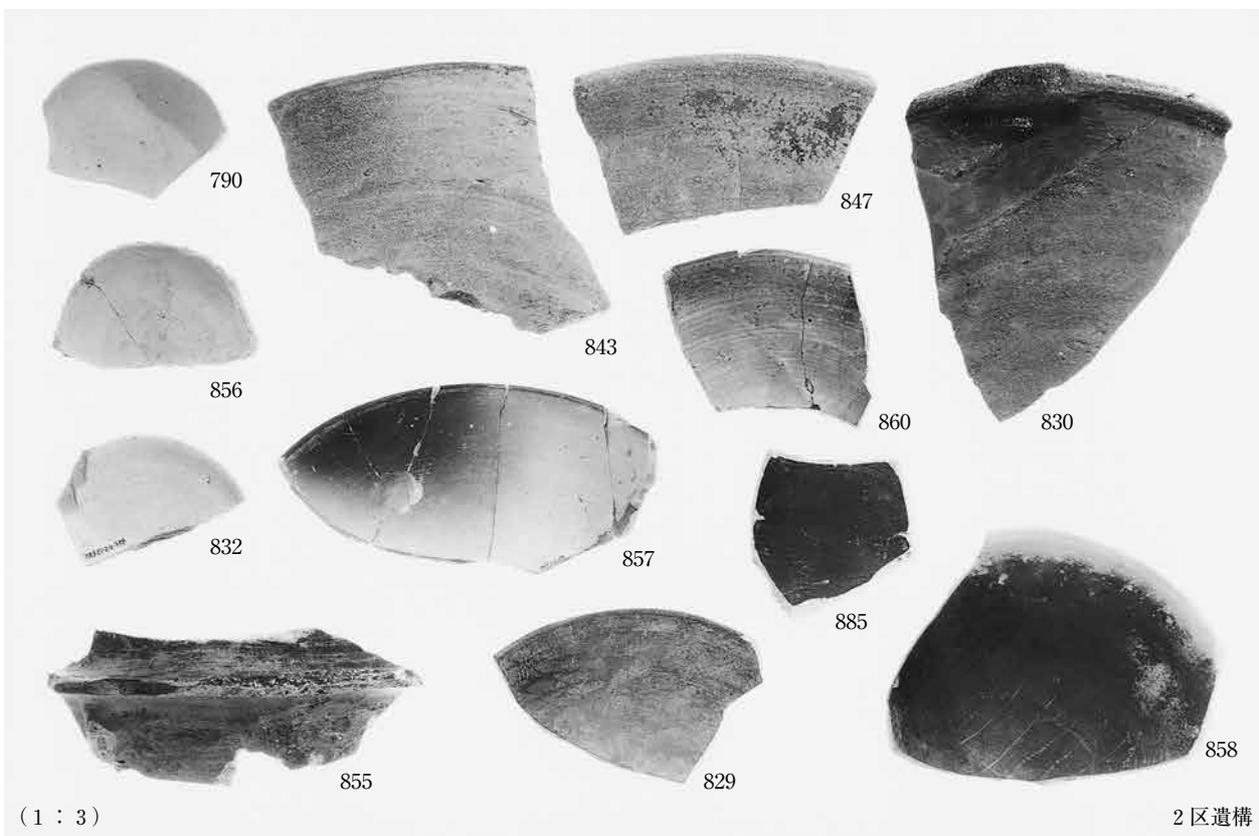


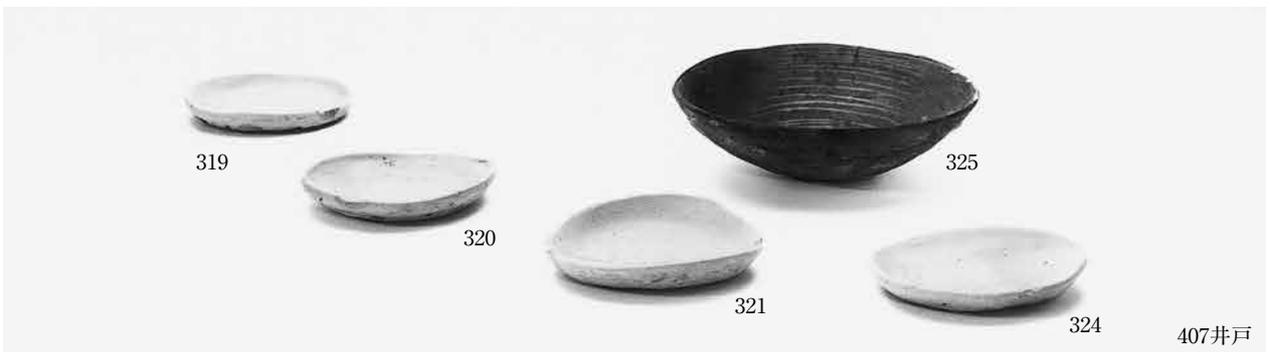
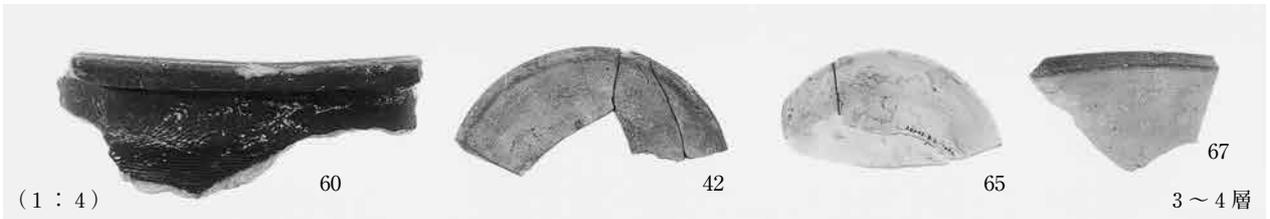


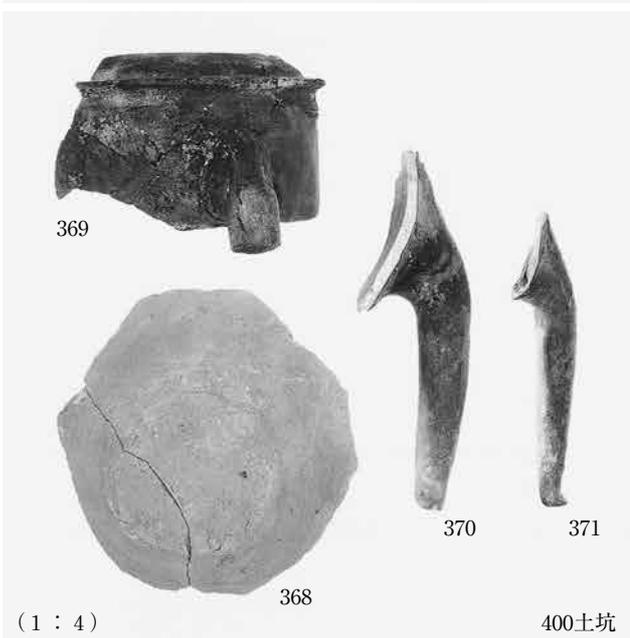
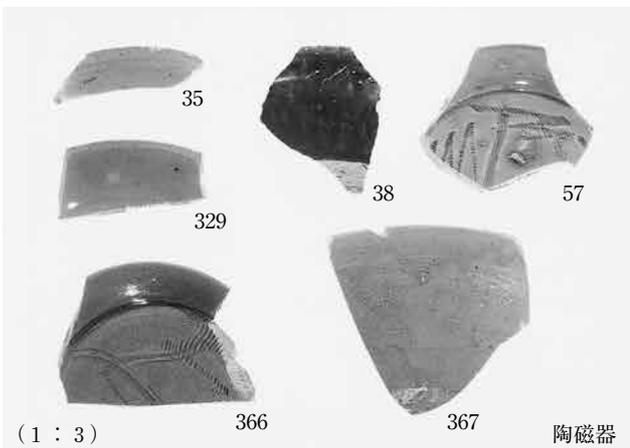




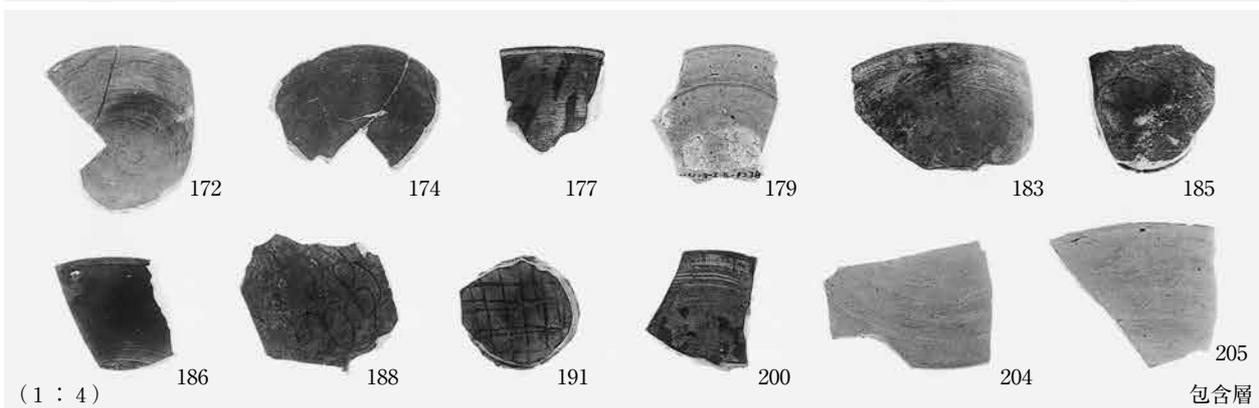
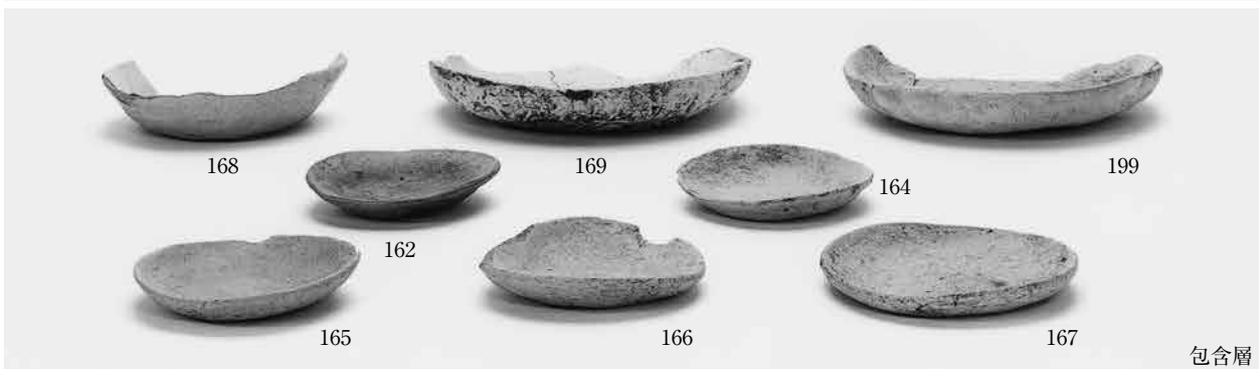














170



198



1020



193



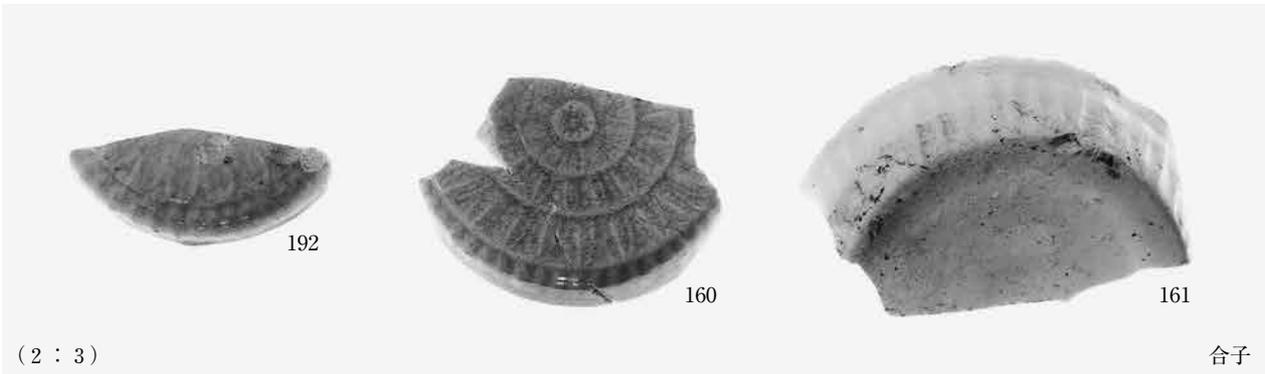
1044



986



959



192

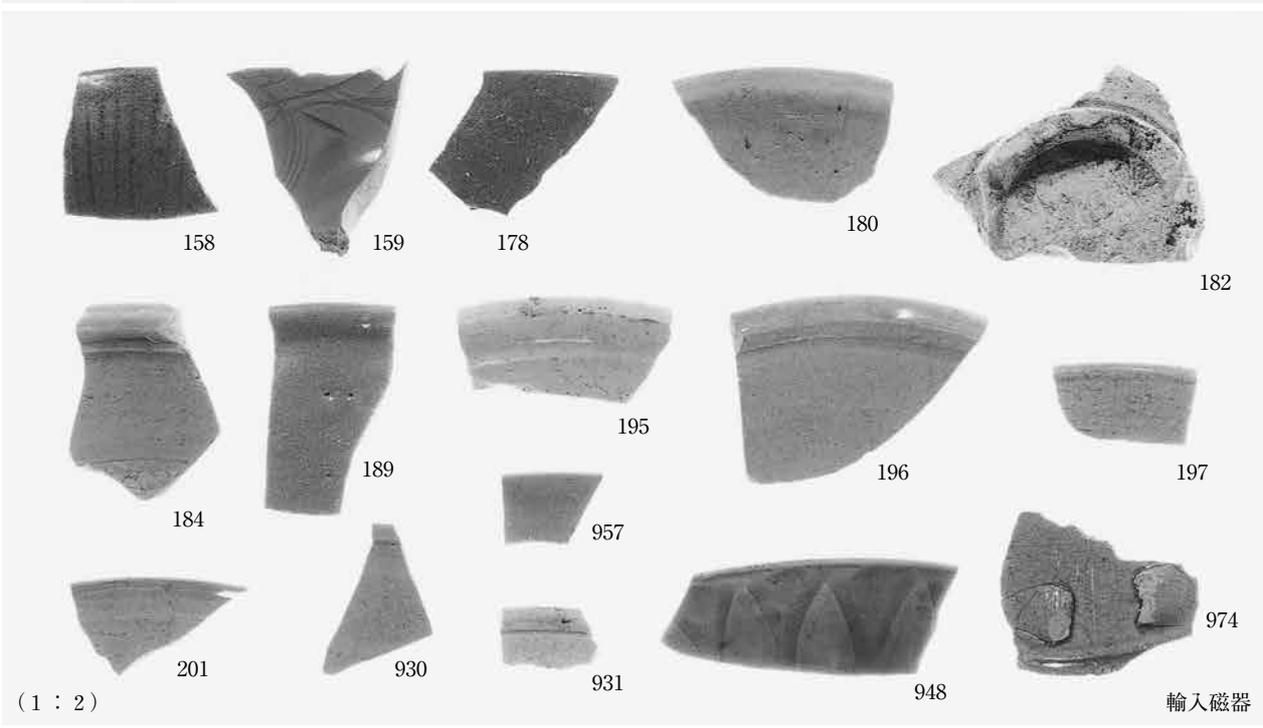
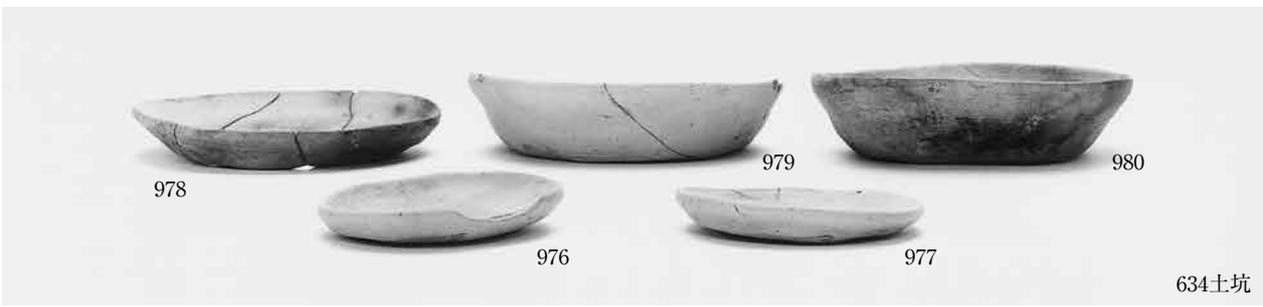
160

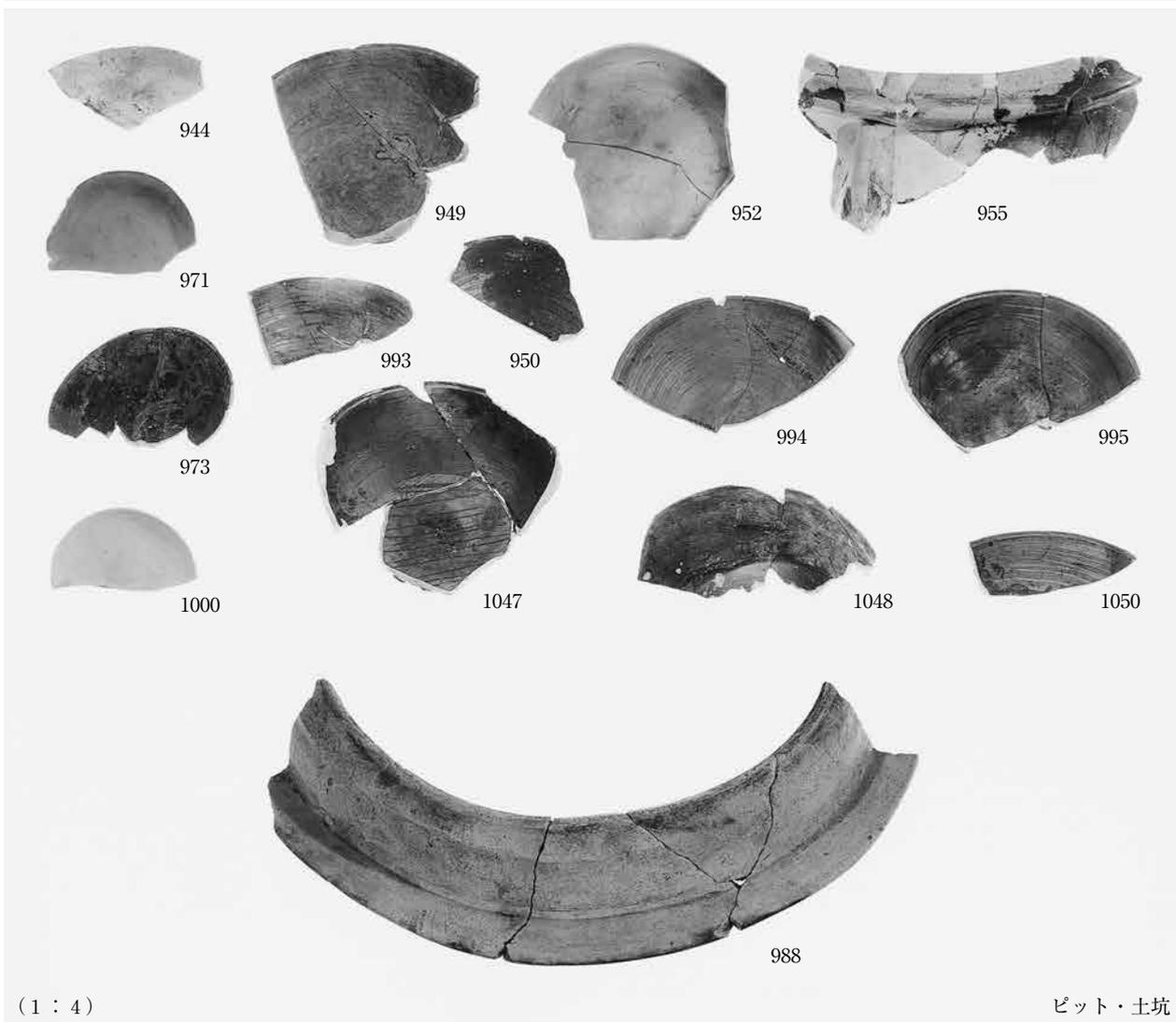
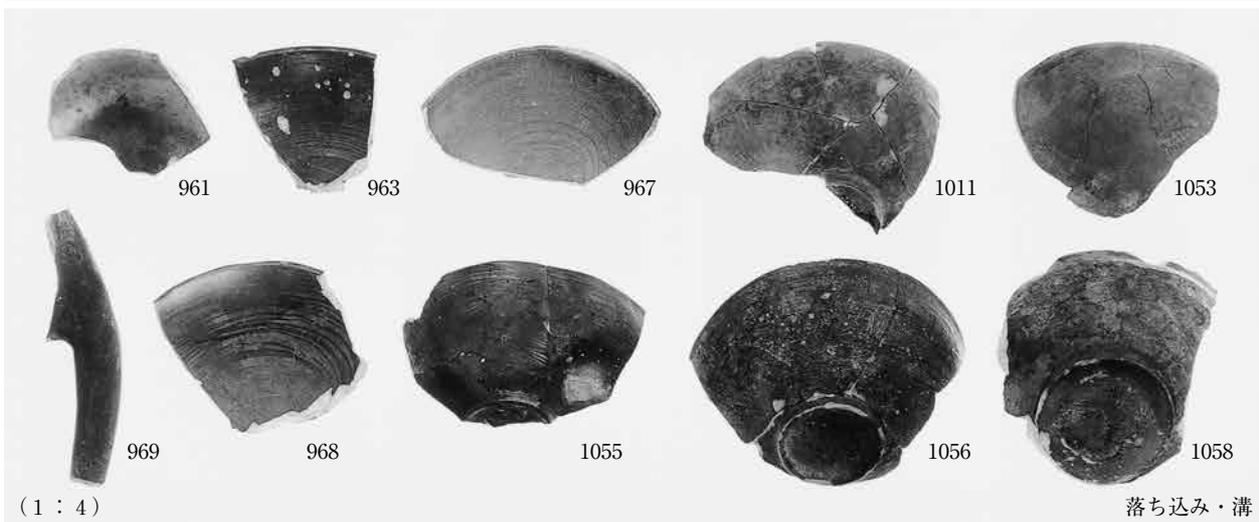
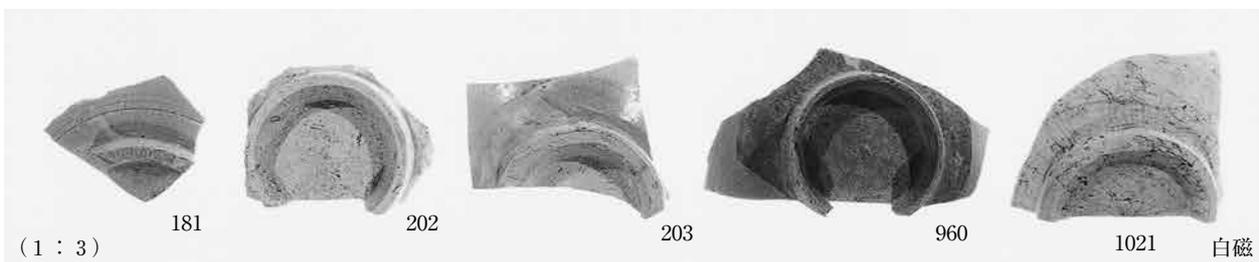
161

(2 : 3)

合子







03-2 調査



95



111



91



114



97

96

98

94

3 a - 2層



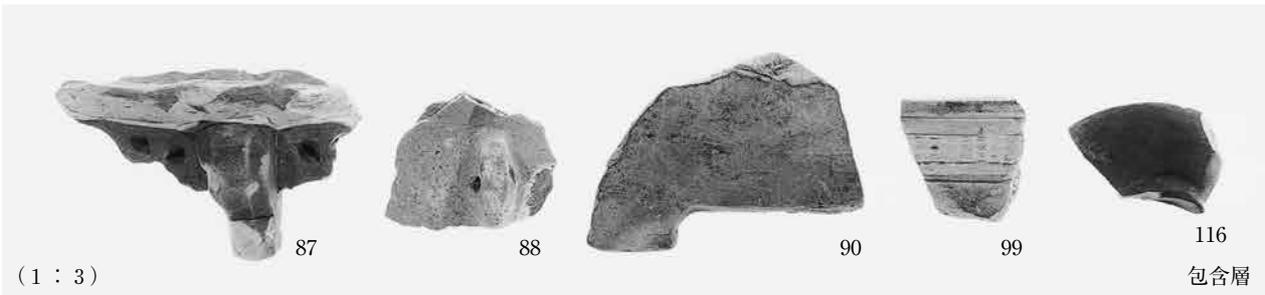
112

117

113

115

3 b層



(1 : 3)

87

88

90

99

116

包含層

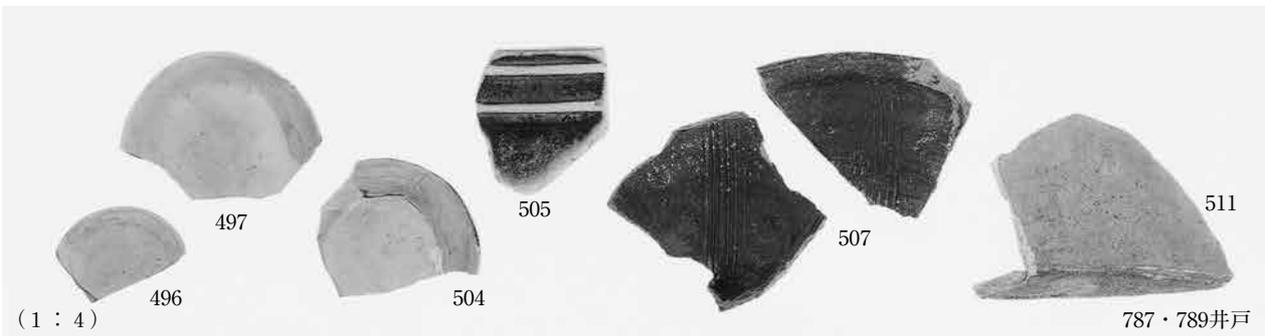


475

476

477

ピット



(1 : 4)

496

497

504

505

507

511

787・789井戸



491



494



493



495

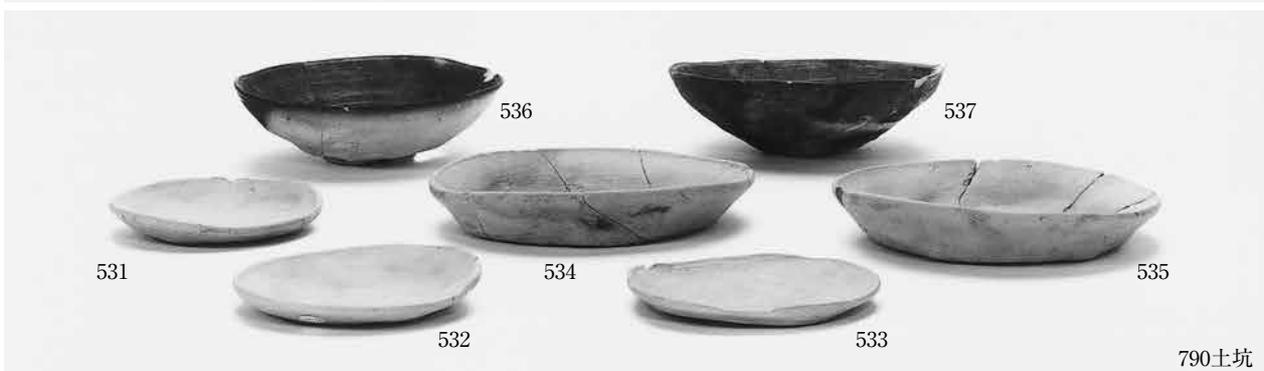


500

502

503

787・789井戸



536

537

531

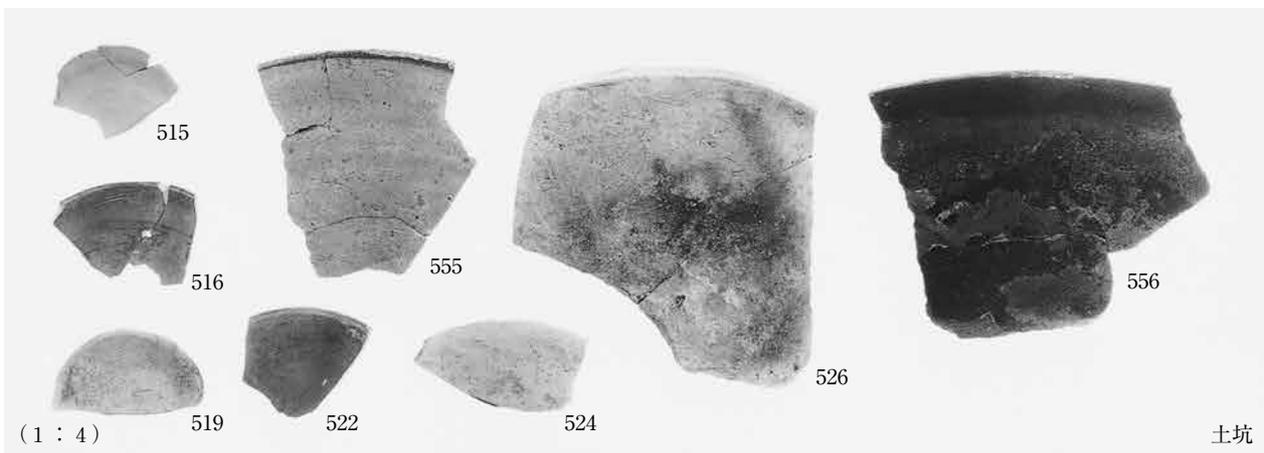
534

535

532

533

790土坑



515

555

556

516

526

(1 : 4)

519

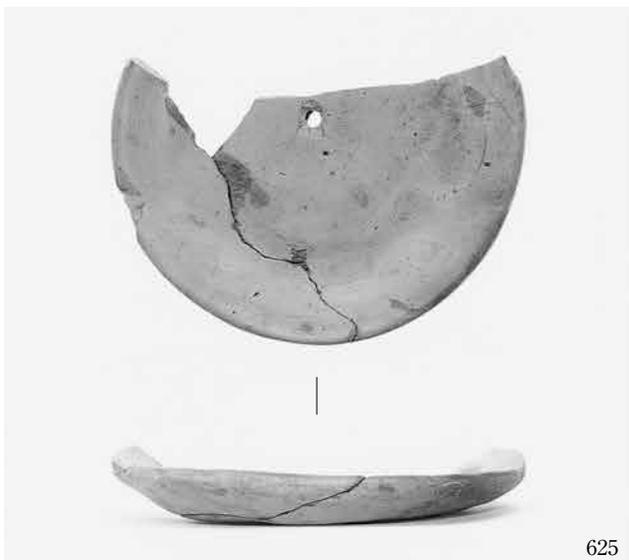
522

524

土坑

03-2 調査











587



589



588



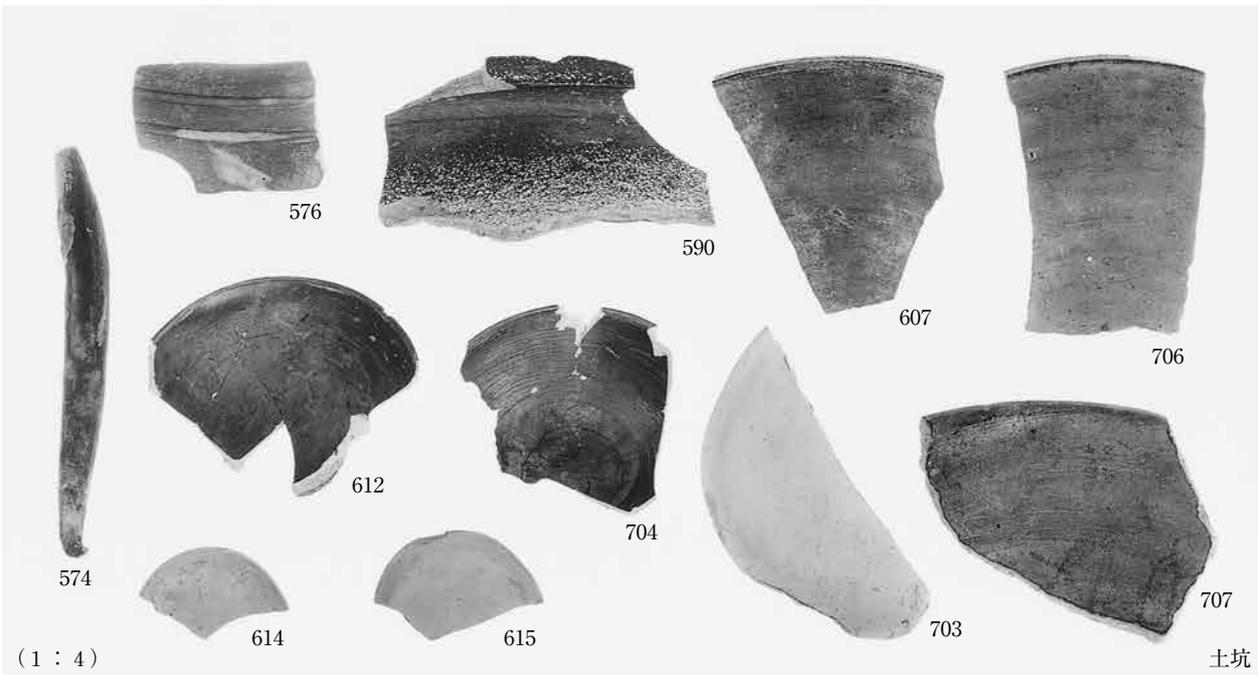
606



600



601

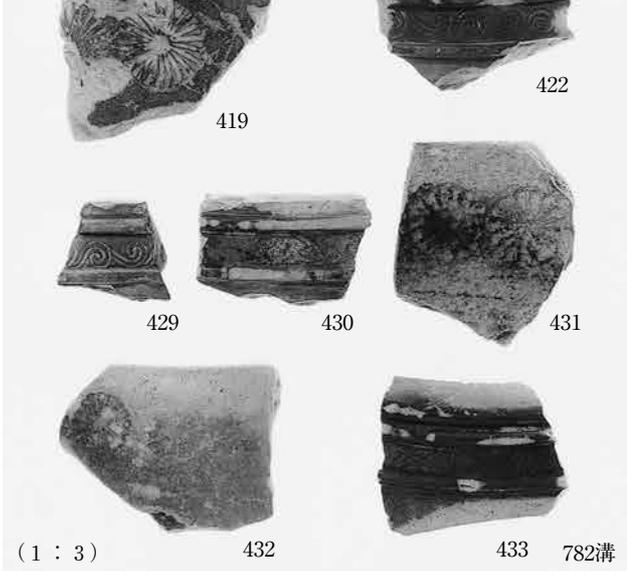
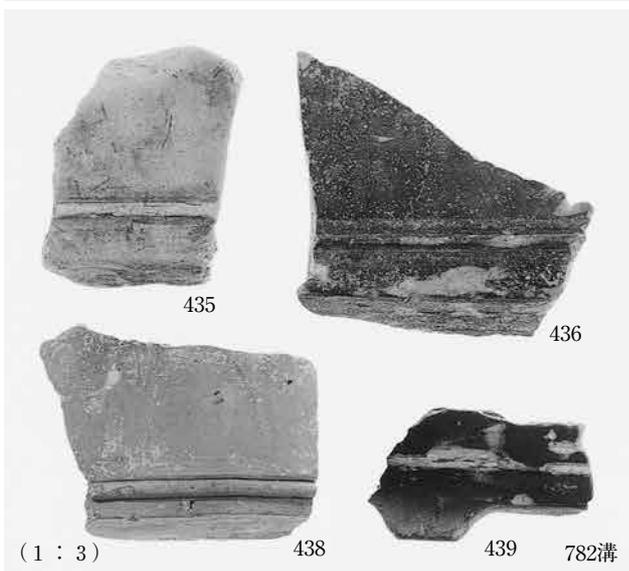
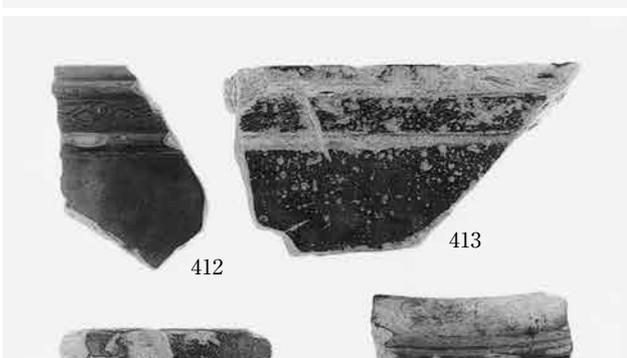
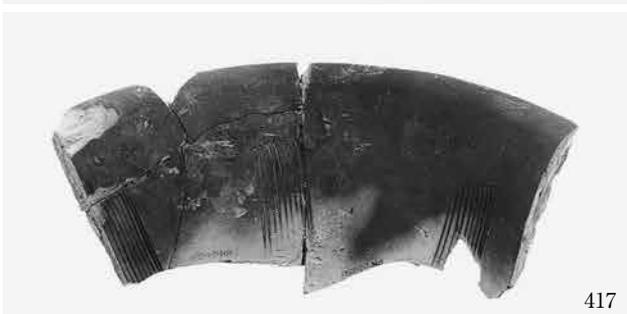
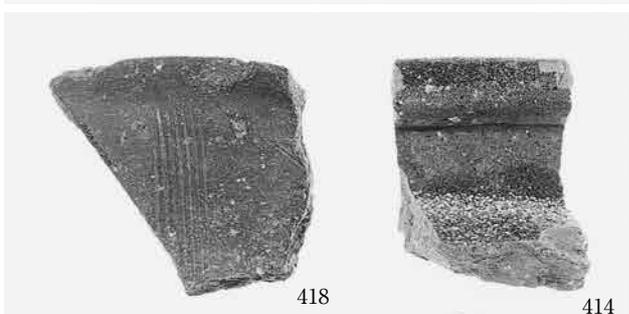


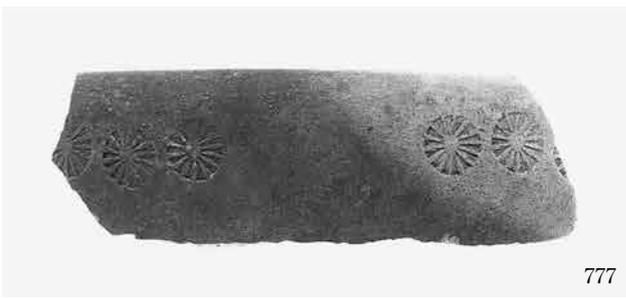
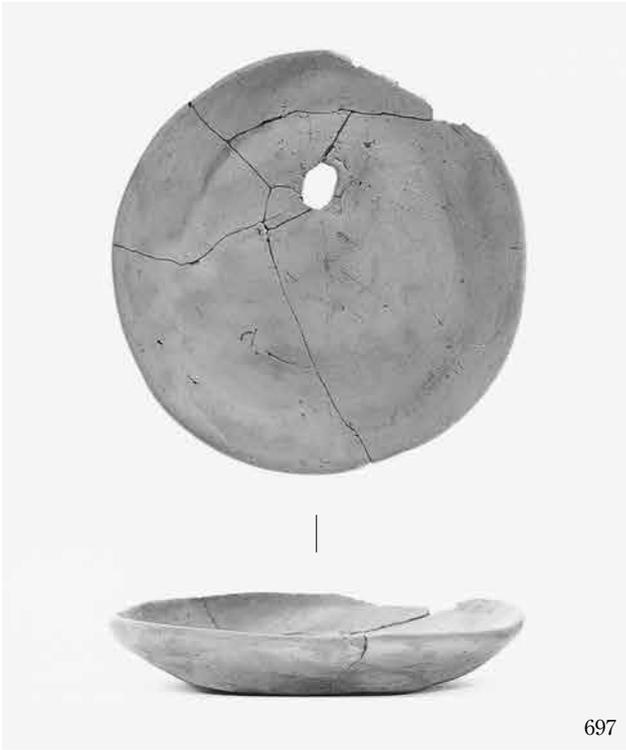
(1 : 4)

土坑





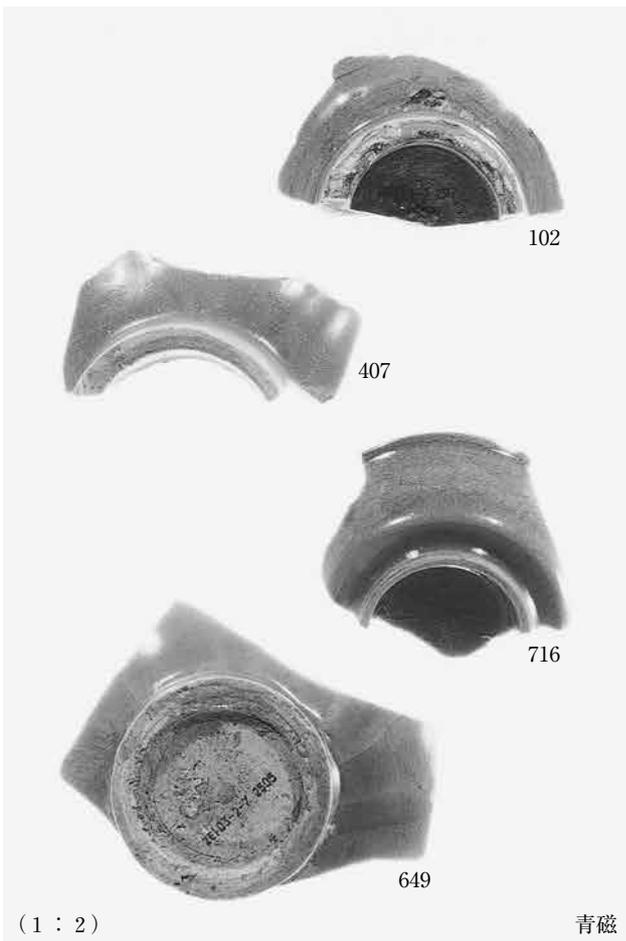






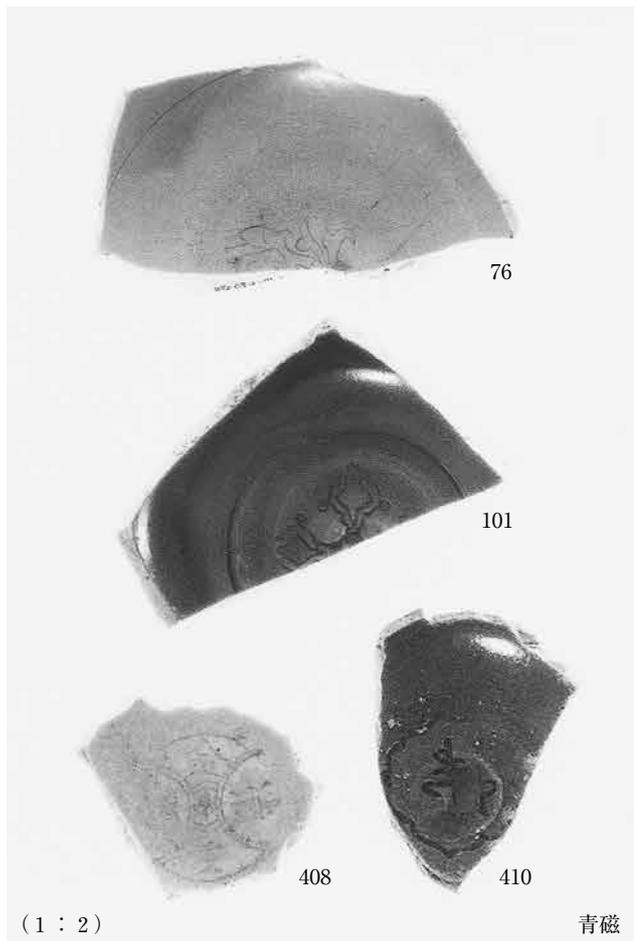


943溝出土土師器皿



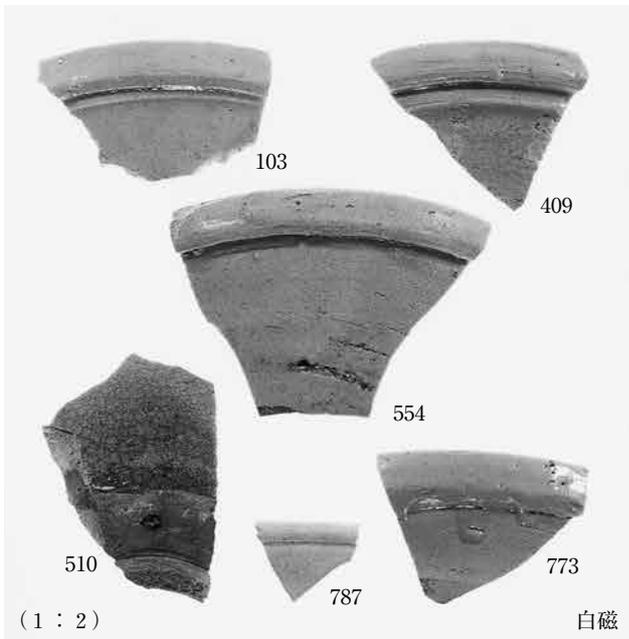
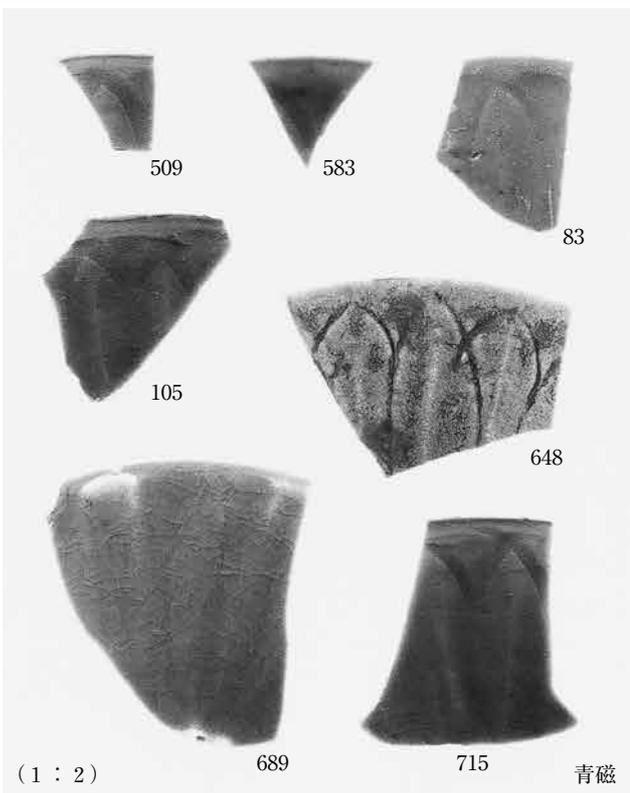
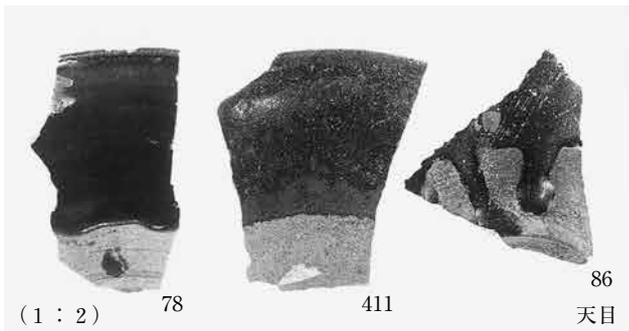
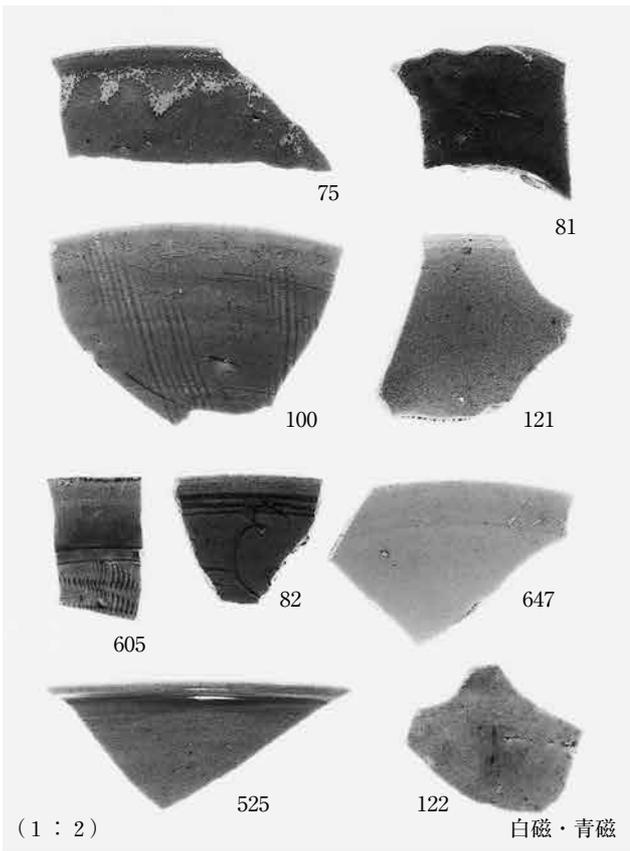
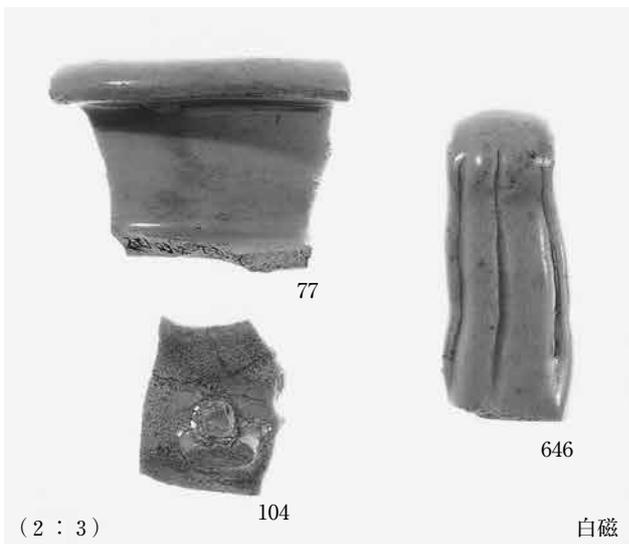
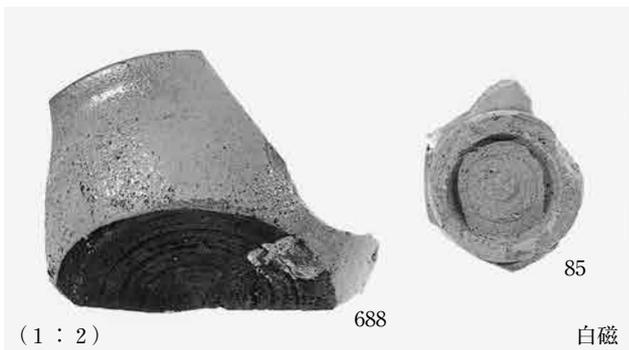
(1:2)

青磁



(1:2)

青磁

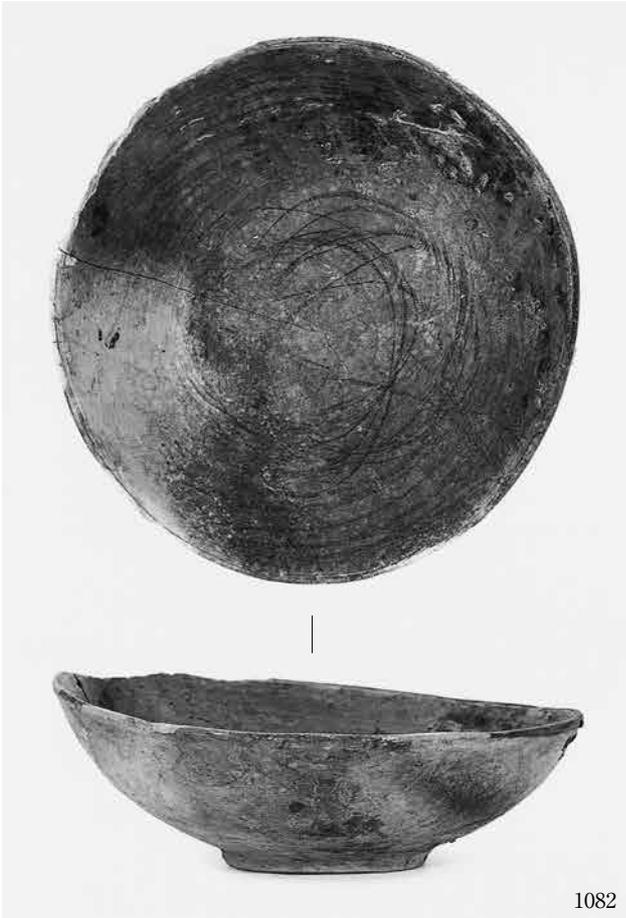




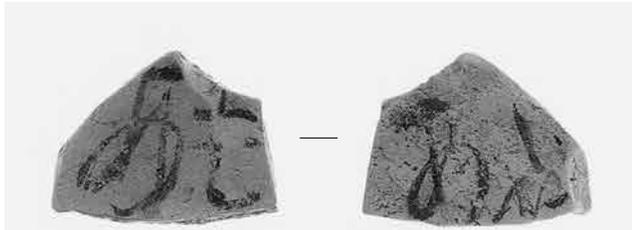
214



216



1082



1068



1069



1070



1079



(1 : 3)

1087



1087



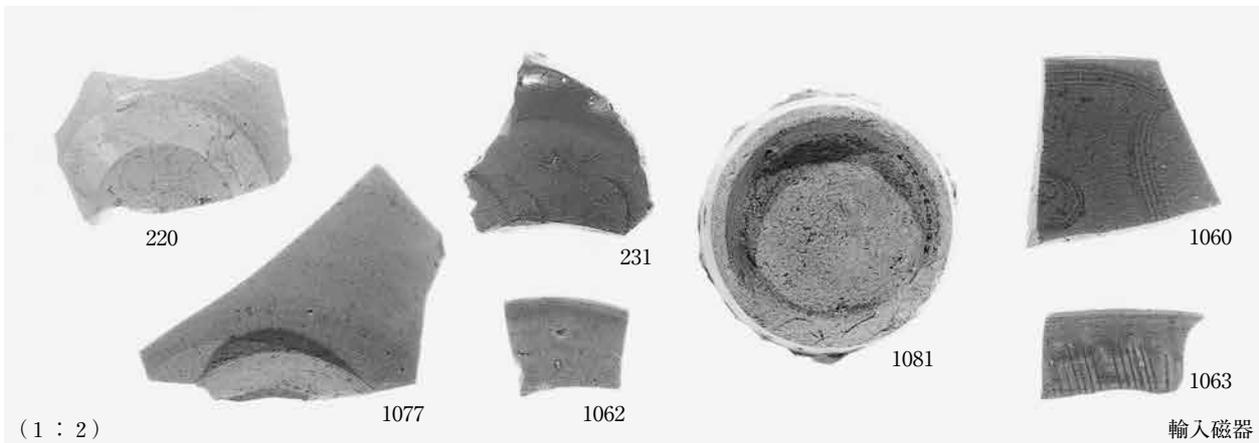
包含層



887土坑

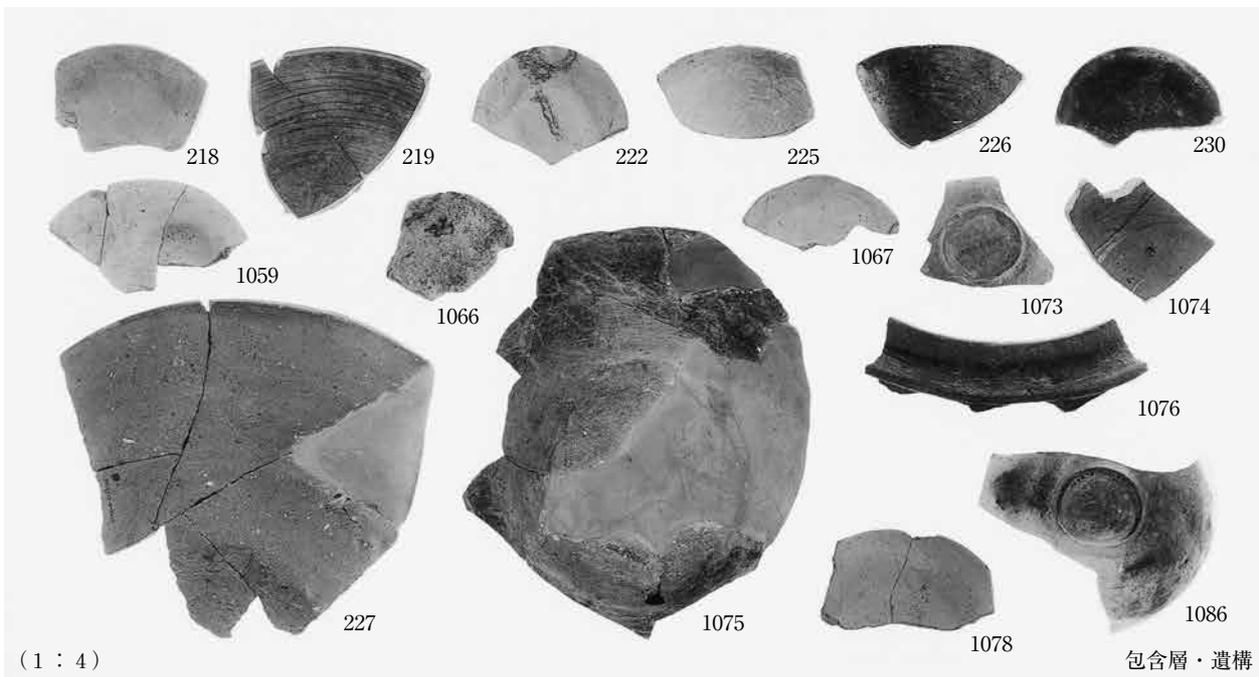


903溝



(1 : 2)

輸入磁器



(1 : 4)

包含層・遺構



915



125



456



123



128



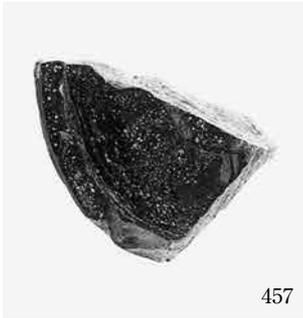
127



454



444



457



656



692



659



658



567



22



63



661



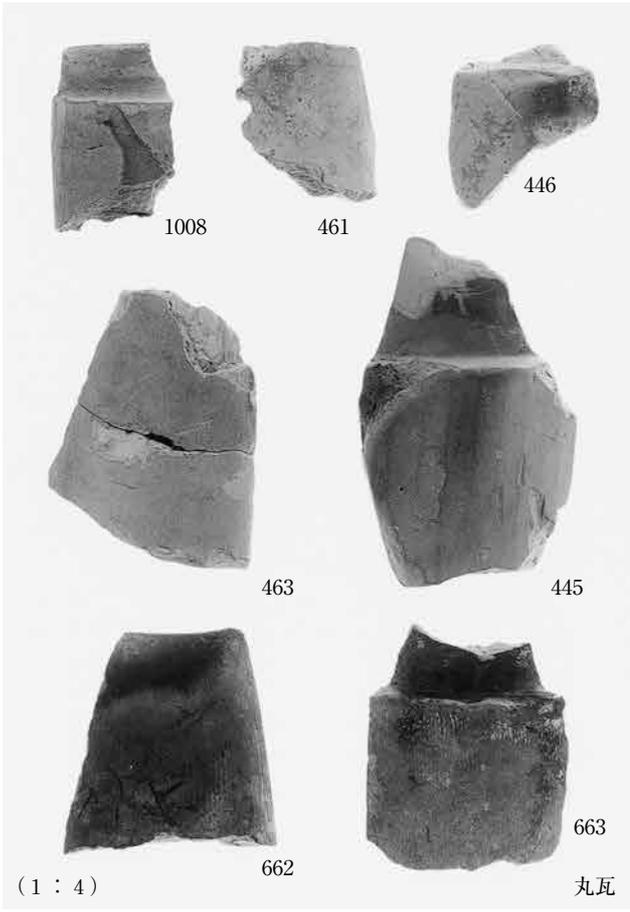
694

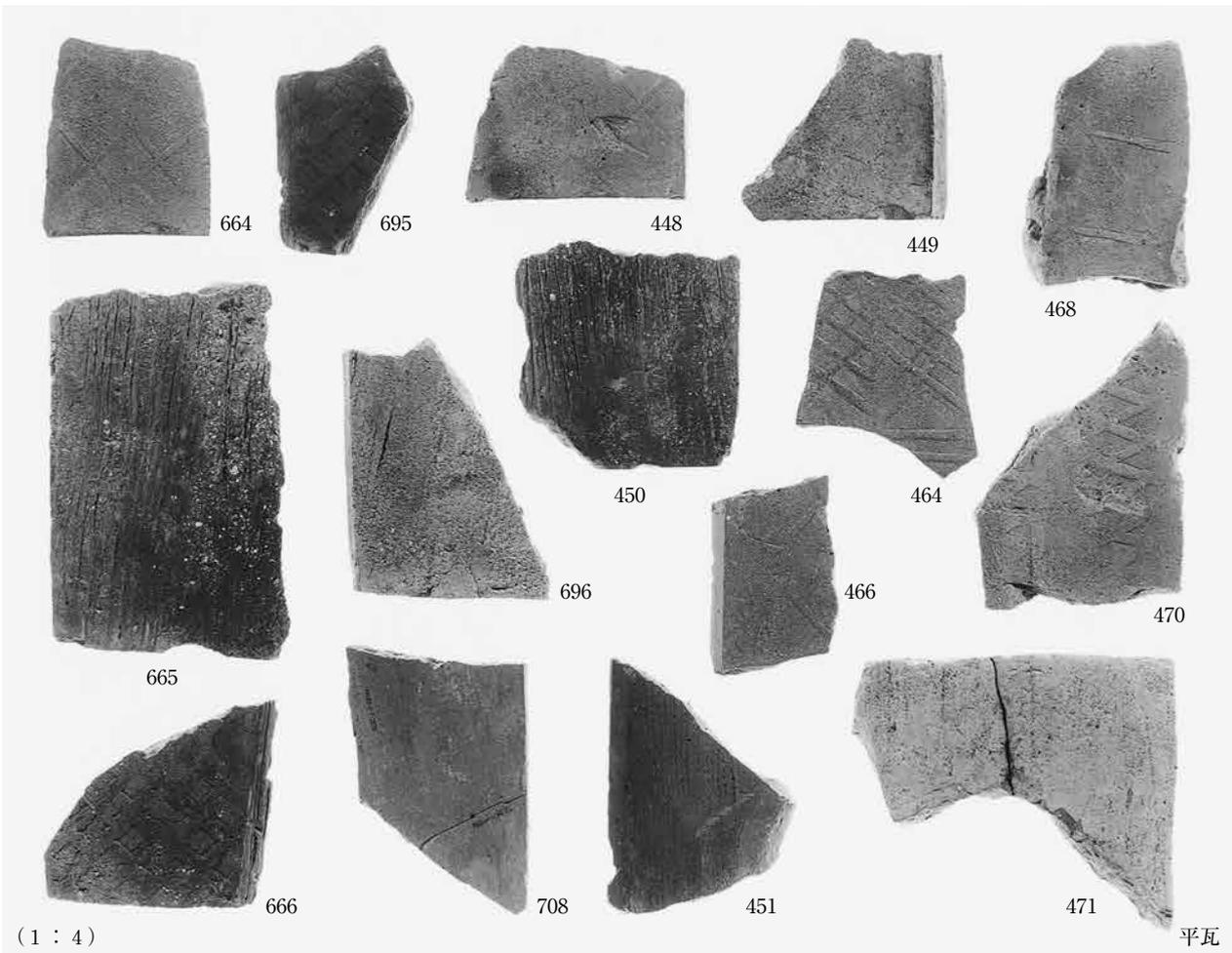
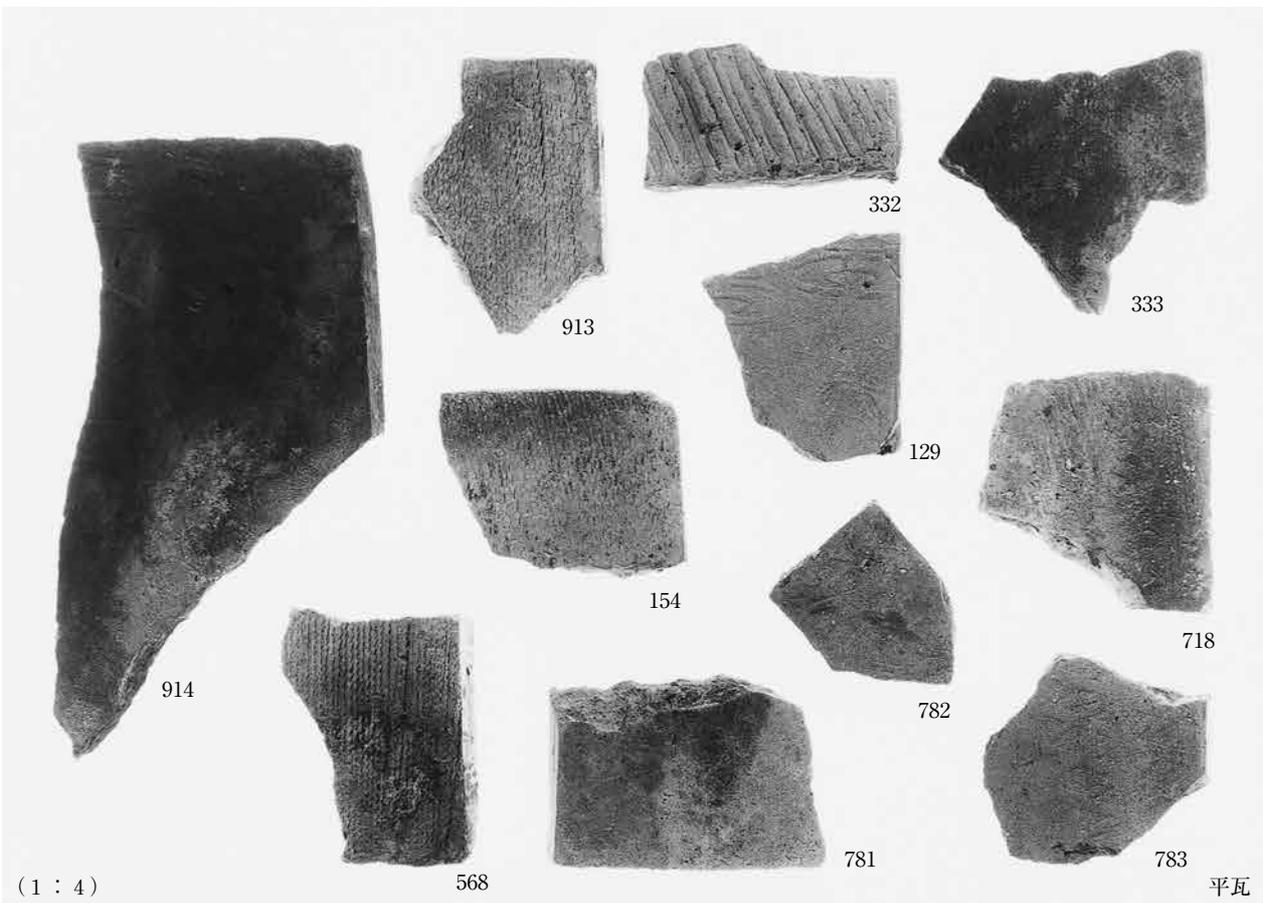


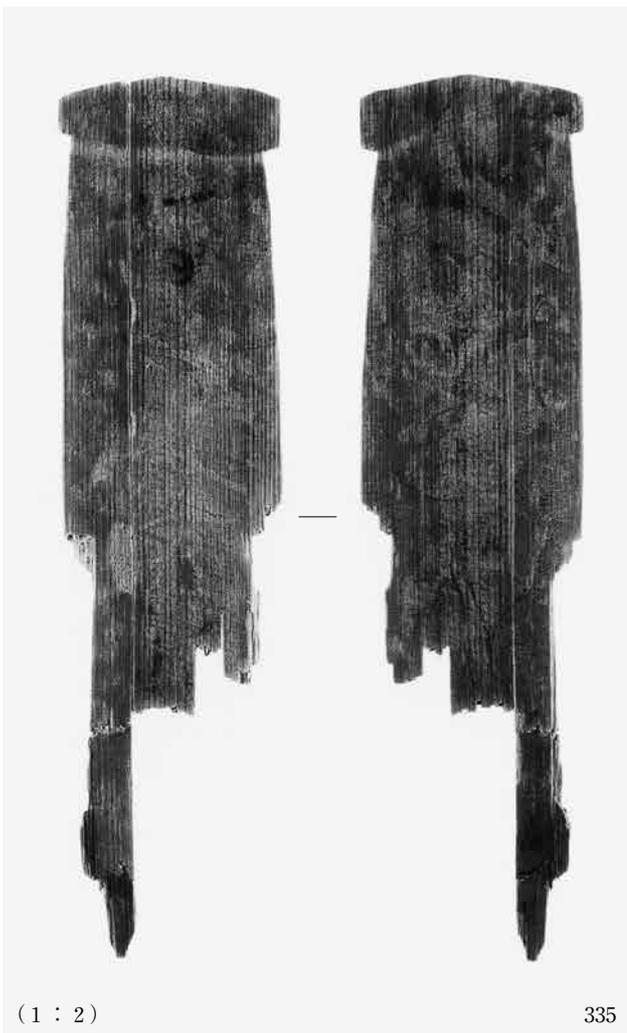
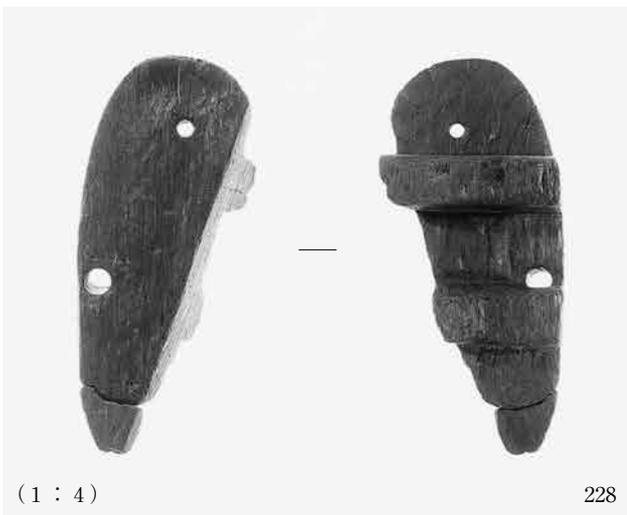
501

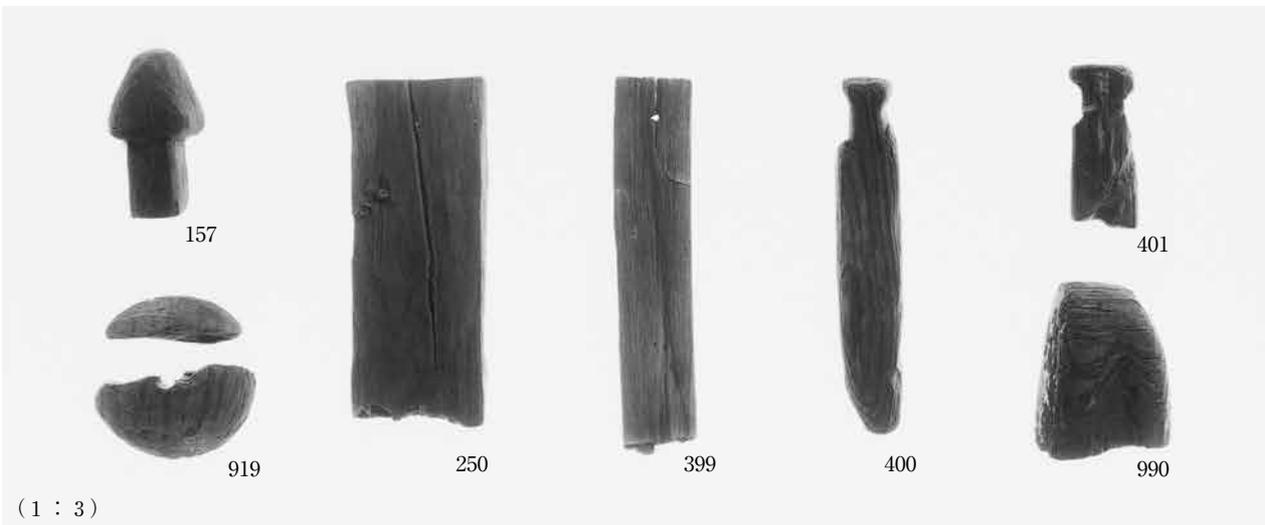
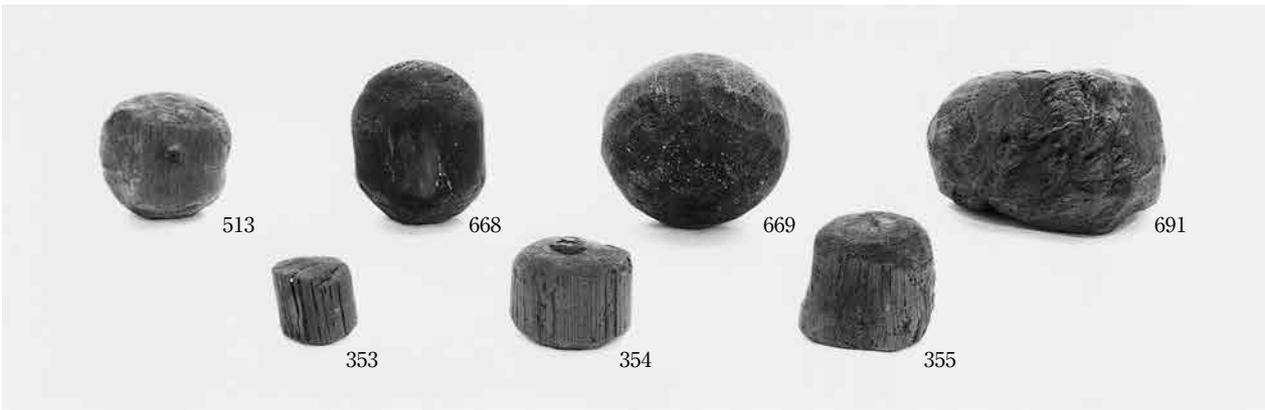


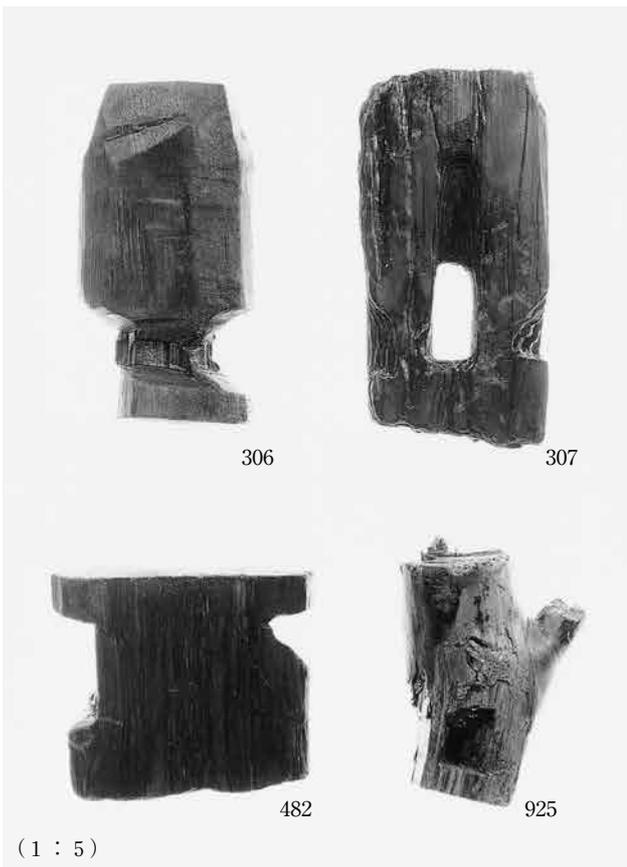
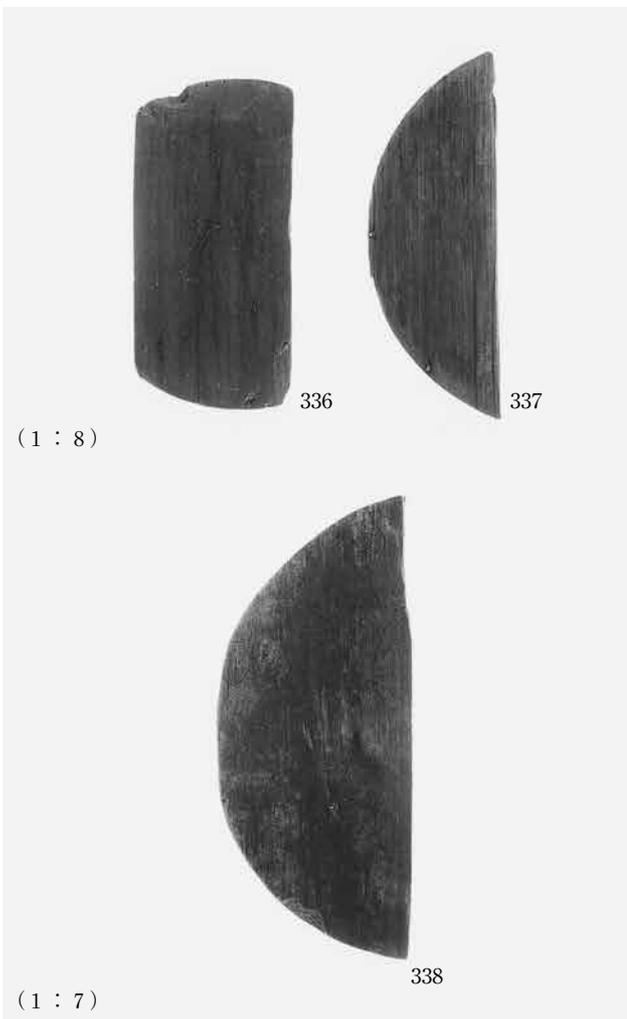
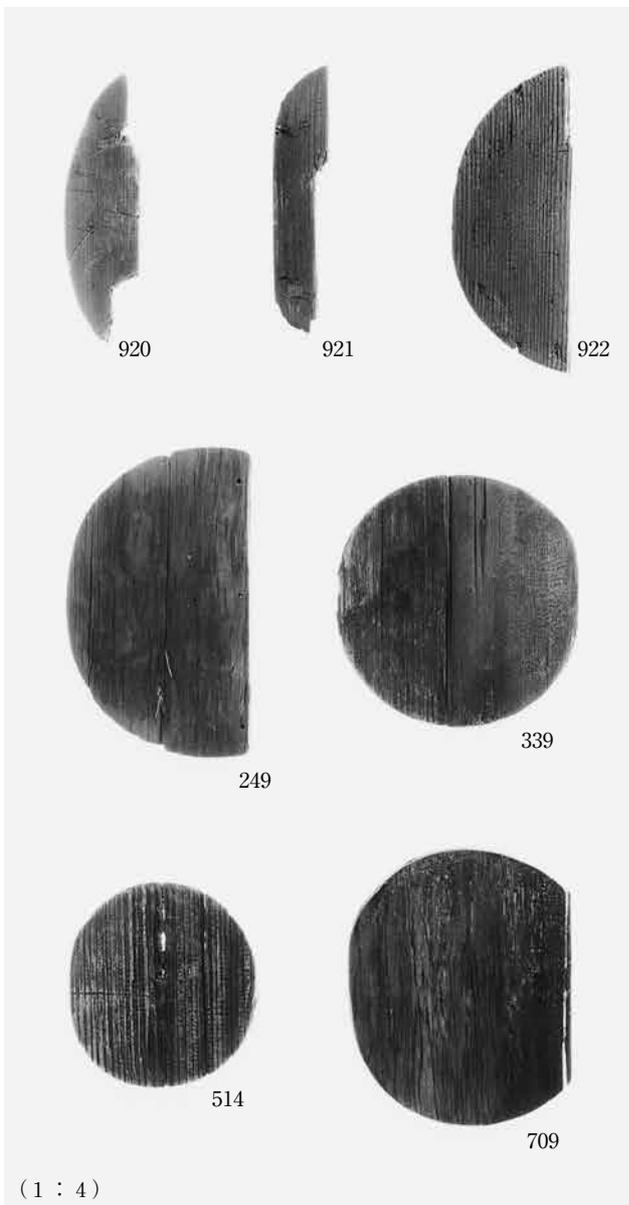
660





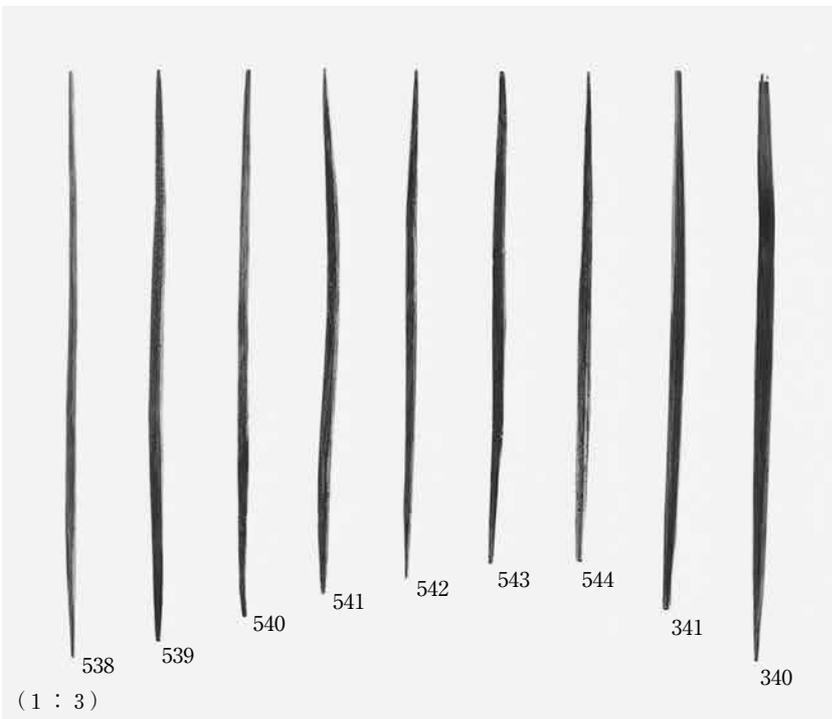




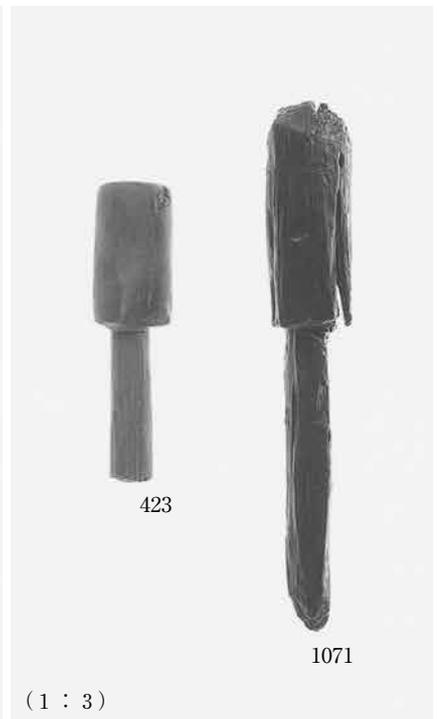




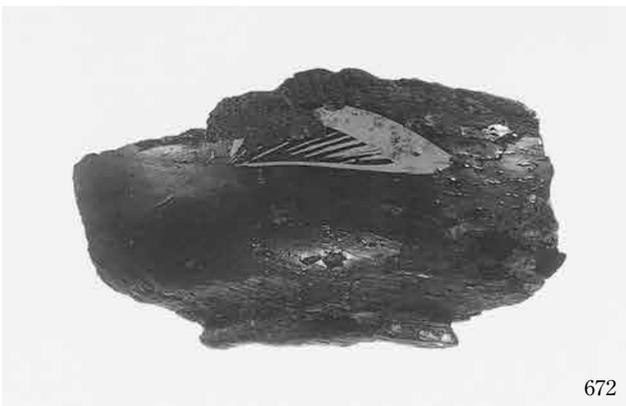
790土坑出土箸



(1 : 3)



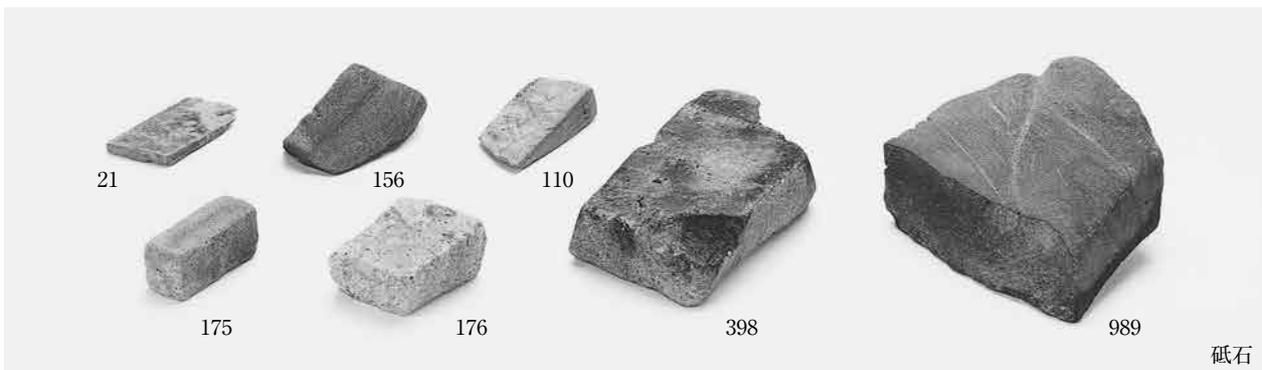
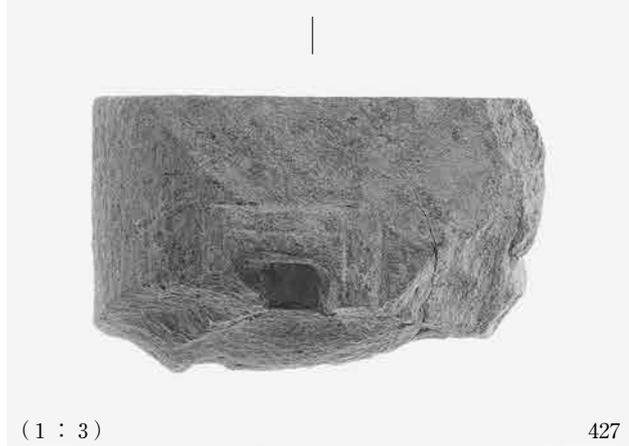
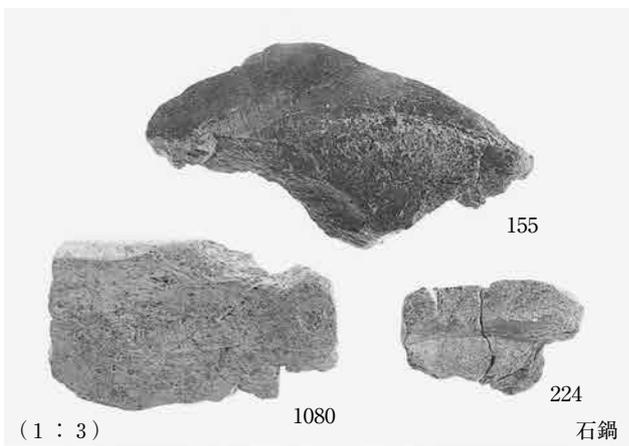
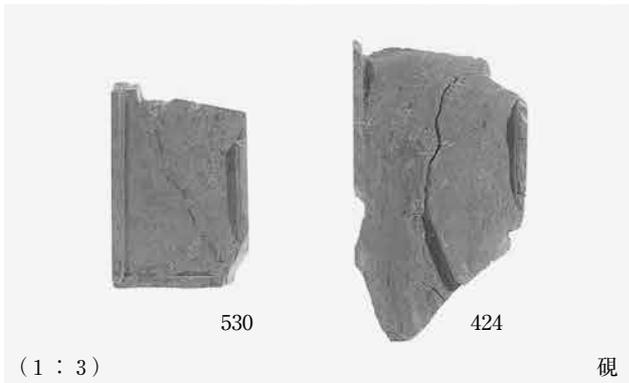
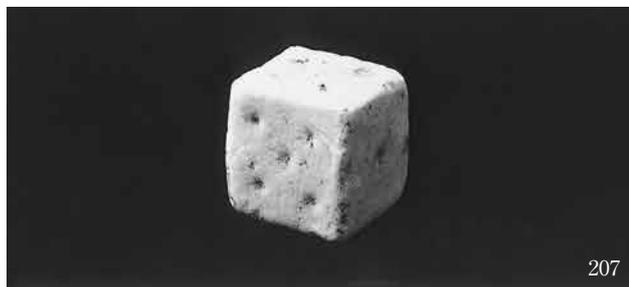
(1 : 3)

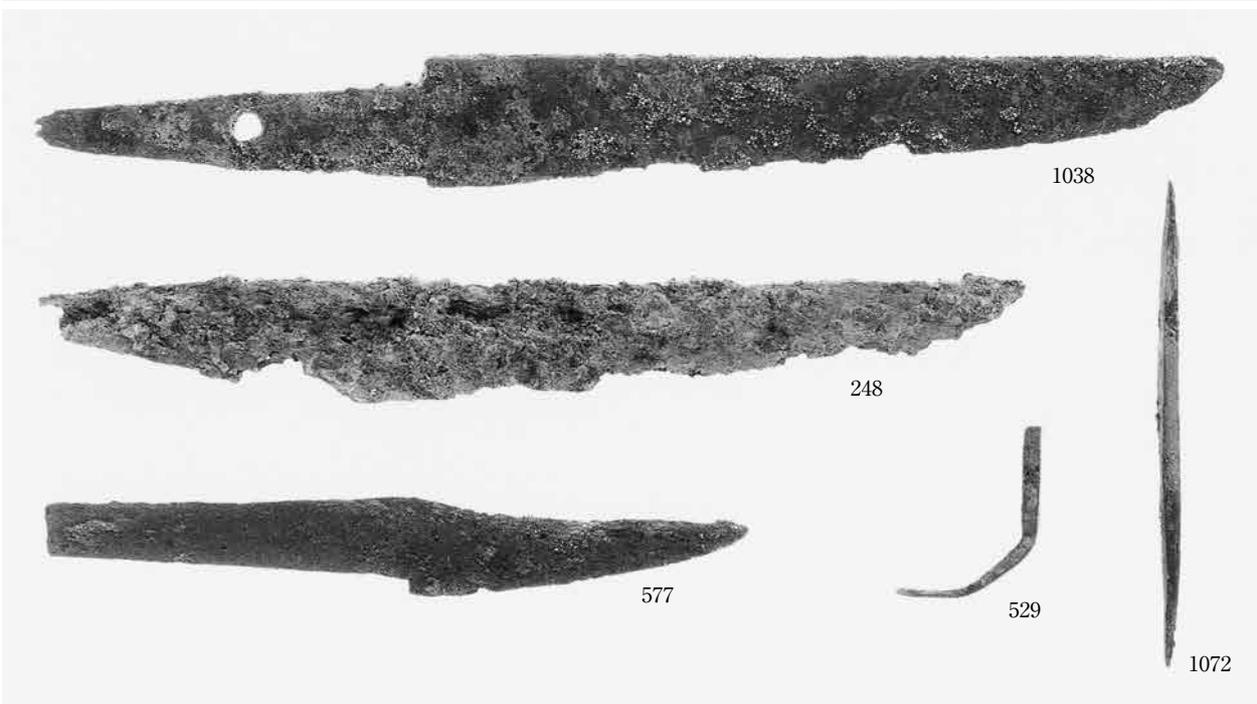
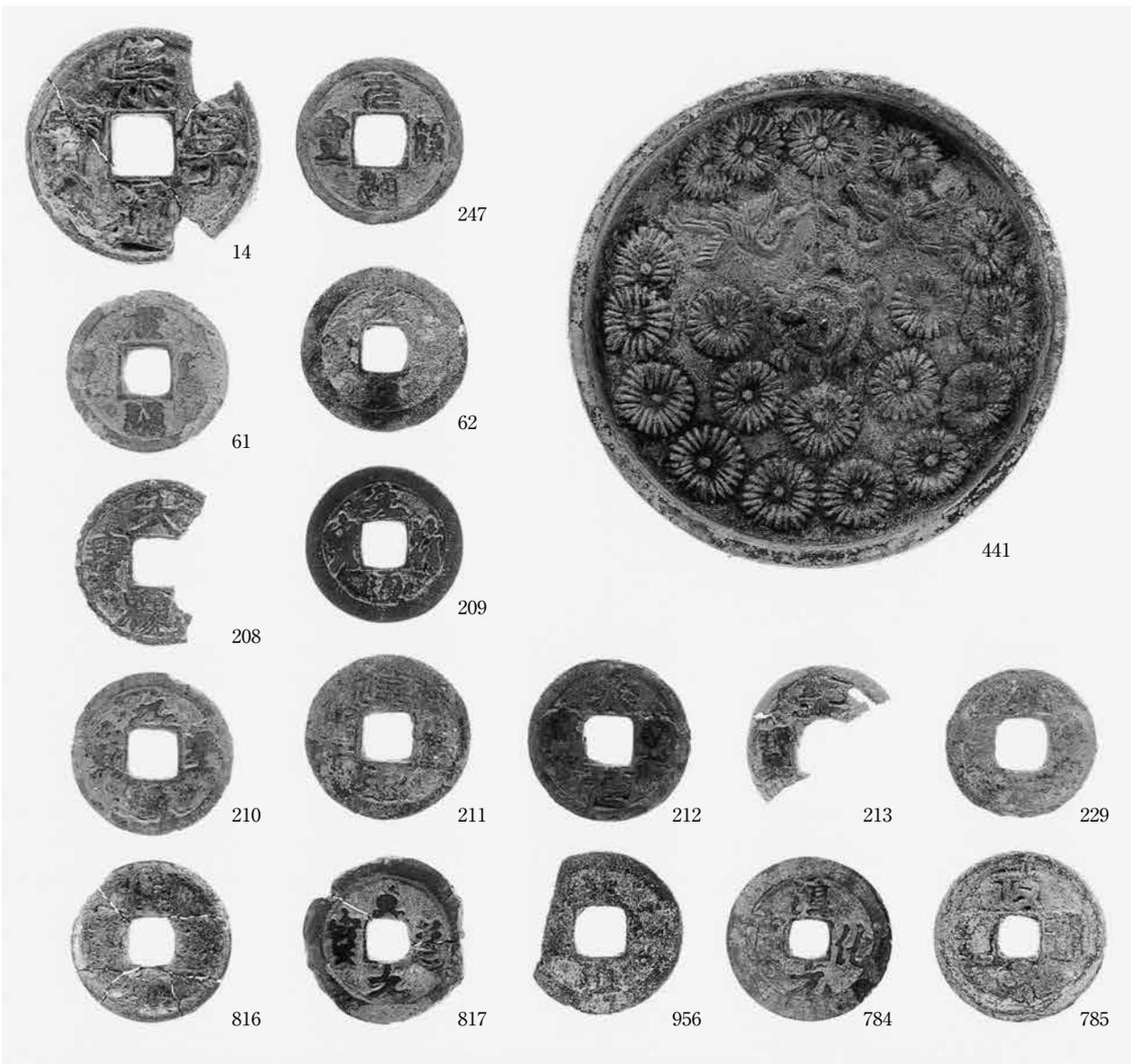


672



673



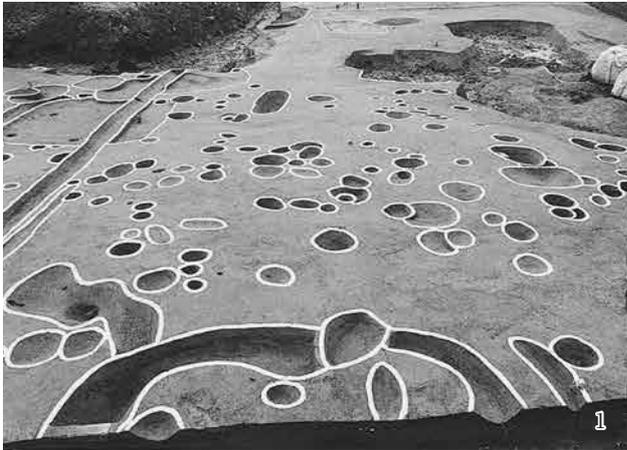




1. 1区航空写真



2. 1区北部全景（東から）

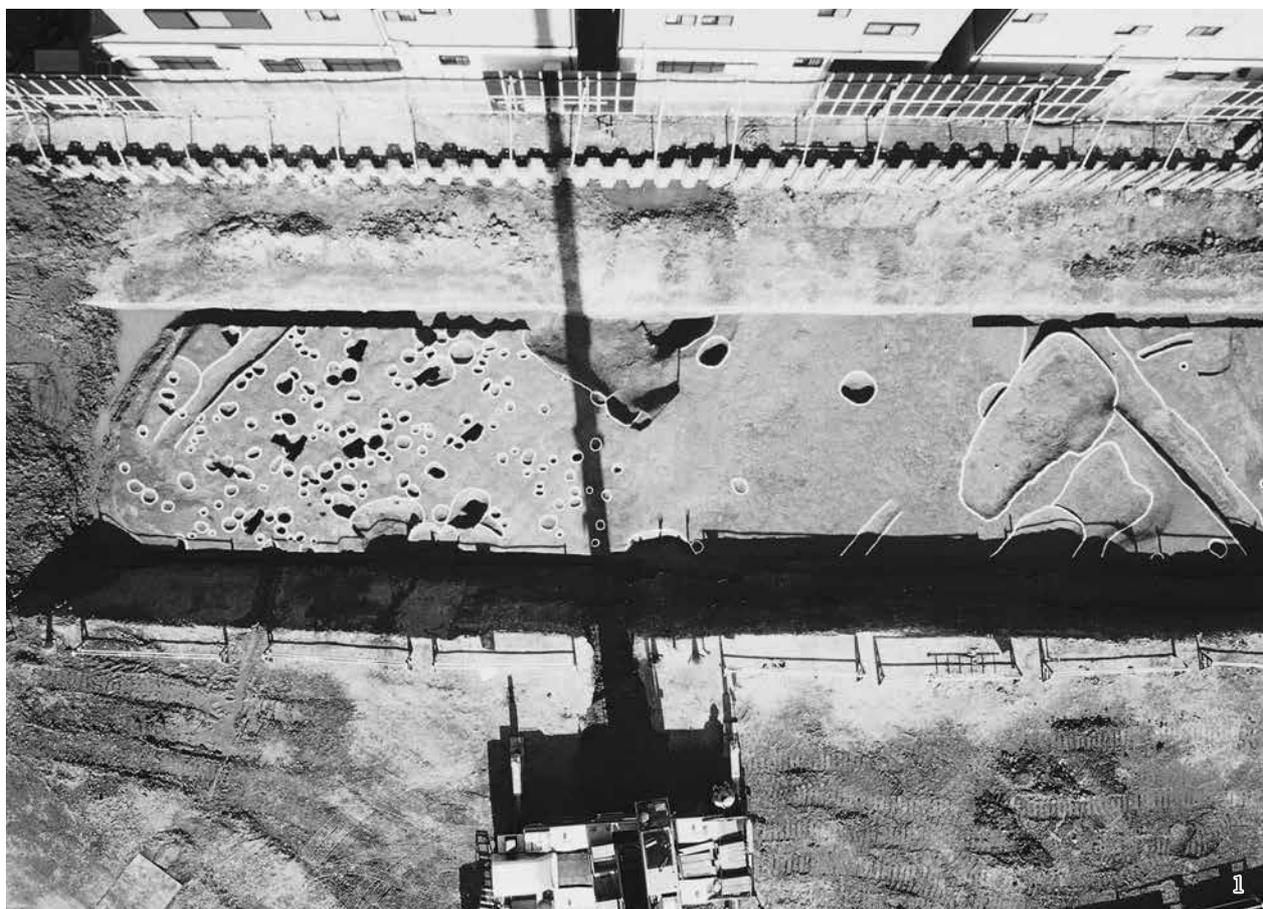


1. 1区北部 (北から)
2. 1区南部 (南から)

3. 1区630畦畔
4. 1区111ピット遺物出土状況



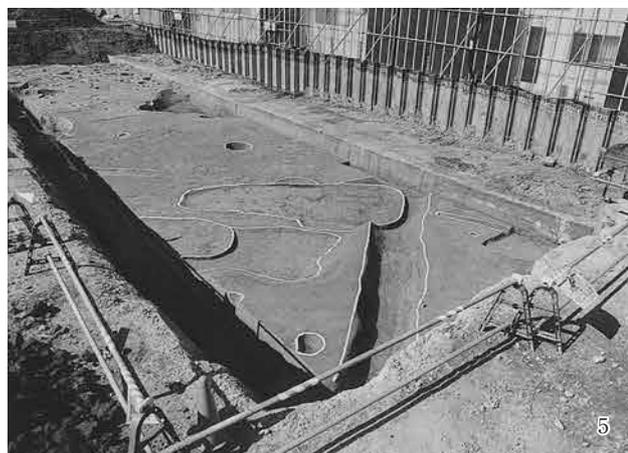
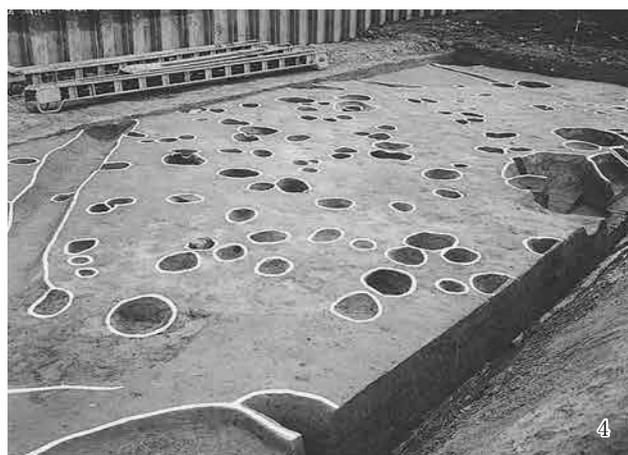
5. 1区東部 (西から)



1. 6区航空写真



2. 6区南部 (南から)
3. 6区ピット群 (北から)



4. 6区ピット群 (南から)
5. 6区北部 (北から)



1. 6区東部航空写真



2. 6区南部航空写真



1. 7区南部航空写真



2. 7区北部航空写真



1. 8区北部航空写真



2. 8区南部航空写真



1. 8区東部航空写真



2. 9区東部航空写真

06-1 調査



1



3



2



4

1. 8区 703・705土坑
2. 8区 703土坑断面

3. 8区748・756土坑完掘状況
4. 8区748・756土坑



5



7



6

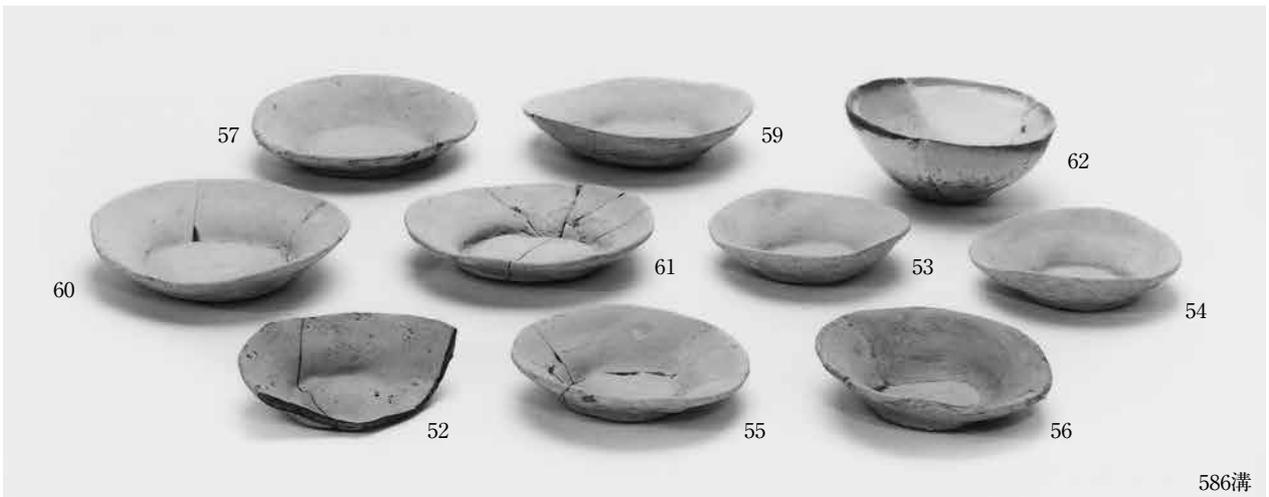
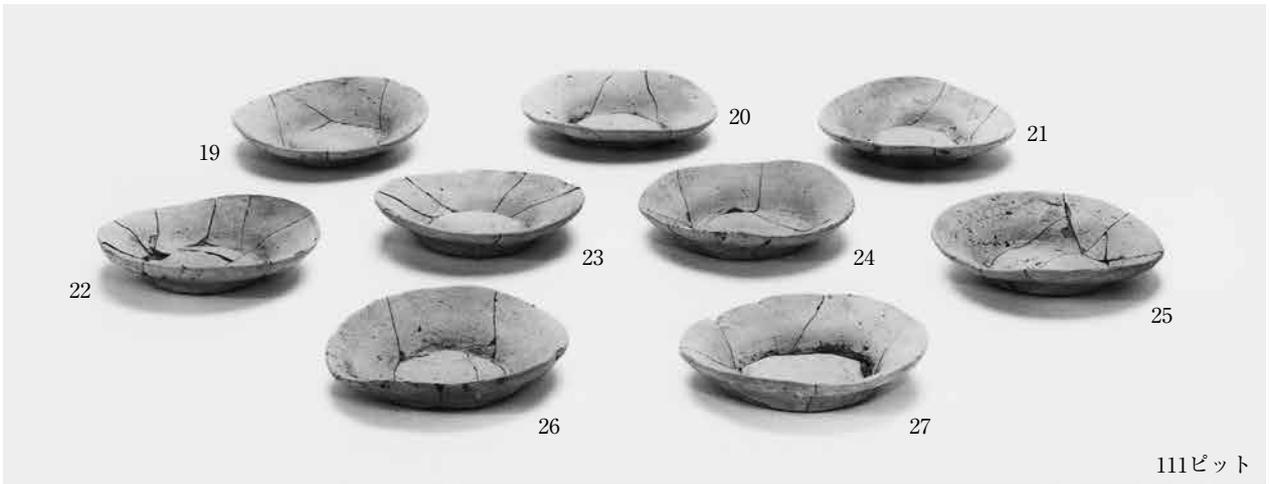
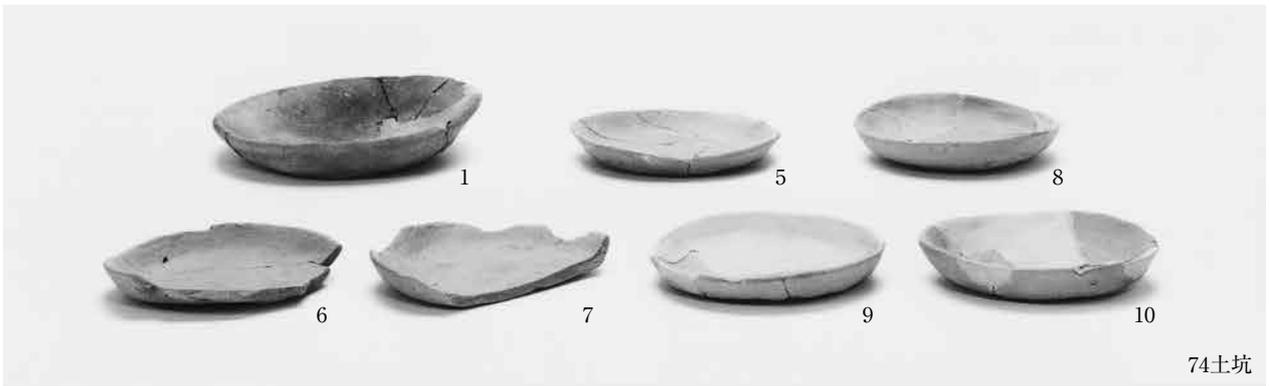


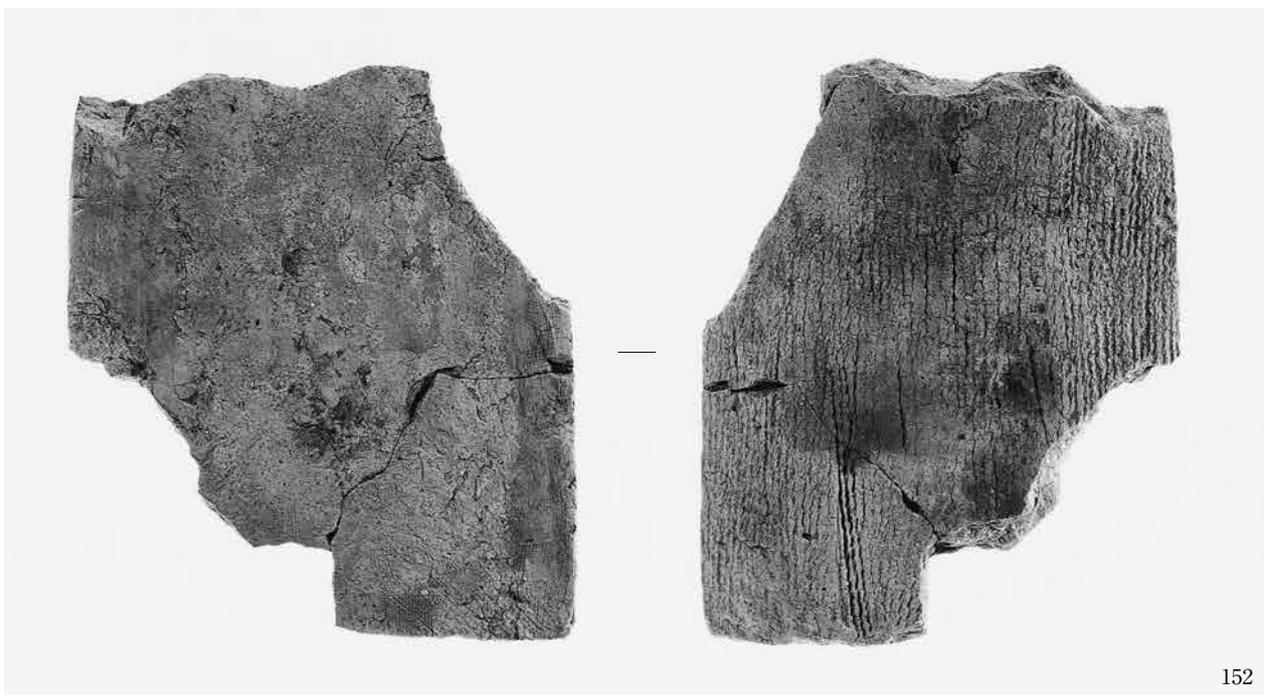
8

5. 10区南部 (南から)
6. 10区1060堤

7. 10区南部西壁
8. 10区北部







報 告 書 抄 録

ふりがな	すもといせき に							
書名	巢本遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第183集							
編著者名	伊藤武、横田明、市田英介							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 Tel.072-299-8791							
発行年月日	2008年12月26日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
すもといせき 巢本遺跡	かどまし 門真市 きたすもとちよう 北巢本町 みやまえちよう 宮前町	27223		34° 44' 28"	135° 37' 0"	(03-2調査) 2004. 4. 1 ～ 2006. 5. 31 (06-1調査) 2006. 11. 13 ～ 2007. 7. 25	(03-2調査) 11,850㎡ (06-1調査) 約3,800㎡	一般国道1号 バイパス (大阪北道路) 第二京阪道路 建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
巢本遺跡	集落	古代末 ～ 中世	掘立柱建物、井戸、 土坑、溝、堤、畦畔、 耕作溝	土師器、瓦器、瓦質土器、 須恵器、陶器、青磁・白磁・ 青白磁、瓦、木製品、石製 品、土製品、金属製品		中世寺院の存在を示す 遺物も多く出土		
要約	門真市北東部のこれまで遺跡の存在が知られていなかった地域で、古代末から中世にかけての大規模なムラの跡を確認した。そのムラは居住域と生産域が明確に区画されており、寝屋川からの水害を守るための大規模な溝や土坑、堤なども築かれていた。なお古代以前の状況については、長い間人々の生活には不向きな湿地が広がっていたことが、珪藻分析によって明らかとなった。また遺跡からは、貴重な輸入磁器や多くの瓦、また「僧」と墨書された土器など、これまで全く知られていなかった中世寺院の存在を示す遺物が数多く発見された。							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第183集

巢 本 遺 跡 II

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2008年12月26日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・発行 / 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号